キング

KING



二月號



パミール
"Pamele"
EYE WATER
麗しき凝視よ…
美しき明眸の輝よ…
彼の瞳は今何を語る？
美眼液パミールの一滴から…
どんよりした眼も濁つた眼も見る〳〵さえて黒水晶の様に……
魅力と潤ひにとんでうつとりと見惚れる様な美しい眼ざしに…
美眼液パミールを常に用ふれば眼を丈夫にし眼性はよくなり、眼の疲勞を恢復して何時も晴々した凄情美に……
パミールは瞳を清らかにし
明眸は人々をチヤームする
携帶用モダン型 一圓八十錢
パミールは全國藥店化粧品店にて販賣
‥說明書進呈‥
大日本雄辯會講談社代理部

り興趣溢る！全




天下一品
キッコーマン醤油
THE "KIKKOMAN" SHOYU
NODASHOYU Co. Ltd.
姉妹品
萬上
マンジョウ味淋
野田醤油株式會社
資本金三千萬圓
製造高五十萬石

誌盡




ライオン歯磨
隠居『どんな晩でも、ライオン歯磨を使つてからでないと、どうしても寝つかれないよ。此の年齢になつても歯が丈夫で、いつも氣持よく眠れるといふのも全くライオンのお蔭だよ。』
本舗
株式會社 小林商店
東京・大阪・名古屋
TOOTH PA
T.KOBAYASHI&C
TOKYO
MADE IN JAPAN



ナイチンゲエル

（世界史上の華繪巻 その十四）——裏面參照

堂本印象筆

殆どやみ間のない晝の活動でへと／＼になつた體を厭ひもなく、夜は夜とて、針の床に落ちる音さへ聞えるかと疑はれるやうな深夜の病棟を、端から端へとナイチンゲエルは見て巡る事がよくあつた。彼處の隅から呻き聲の聞えて來るのは、疵所の痛みで眠られないのか。そこのベッドでむにや／＼何か呟くのは、夢で故郷の妻子とでも話してゐるのか。

『あゝ、みんないゝ人達だのに……それだのに………』

底深く澄んだナイチンゲエルの眼の中に何やら光る物があつた。彼女はそこへ足を留めるとじつと默禱するかのやうに瞼を閉ぢた。恐らくは全智全能の神の御前に、病床に苦しむ人々の生命安かれ、精神靜かなれとこそ祈つたのであらう………

この世からなる地獄の縮圖かとも見える戰場にあつて、そこばかりは敵味方の區別もなく、傷き病める者をいたはる赤十字――あの博く深い人間の愛を象徴する章を眼にする時、讀者諸君よ、どうぞわがナイチンゲエル孃の事を思ひ出して下さい。この國際的慈善結社こそ、彼女の讃歎すべき獻身的行爲が最大の刺戟となつて實現されるに至つた處のものなのだから。

銀行員會社員商店員



若し貴下が人の驚く程の成功を欲せらるゝならば銀行員會社員商店員たるの實力を養成し實地に經驗を積みそして實業家におなりなさい實業界は學界とちがつて實務的の學問さへあれば學歷はなくとも腕一本の努力でどんな大成功でも出來ますのに何故に貴下は社會的應用の利かぬ中學講義錄などお讀みですか今假りに月給百圓の人が二十歳から六十歳まで一錢も遣はず貯へた所で四萬八千圓（利子は別）にしかなりません、一生に何百萬圓何千萬圓と言ふ大成功はどうしても實業でなくば出來ません、先づ內容見本を御申込下さい。上京の事や就職の事や成功の經路や屹度あなたが未だ氣のつかぬ新知識を數々與へますそして思はずアー是だと手を打つて獨り微笑むに違ひ有ません獨學のあなたが大成功するは實業に限ります兎に角一氣に入會者殺到し我國講義錄界のレコードを破つた此講義錄の內容見本をゼヒ御覧下さい。

卒業者は就職斡旋

短期養成講義錄

普通科 六ケ月卒業

高等科 四ケ月卒業

內容見本 無代進呈

本會の講義錄は實務に必要なる社會處世上最も肝要にしてスグ其日から役立つ實際的活きた學問を教養します。普通科は小學卒業者の入會に適し全部振カナ附です高等科は中學卒業者及び中等の學力は有するも實務的學問に乏しく出世難或は就職難に歎ずる人の爲に專門的の實務を教養致升。會費の一時拂は普通科六圓高等科五圓で至廉ですが都合で分納も出來升。普通科高等科共卒業の上は甲種商業同等の檢定試驗が受けられ升。普通商業講義は他にも有ますが實務を專門とした講義錄は我日本に只一つ本會の講義錄が有るのみです一冊の頁數でも四百二三十頁から四百七八十頁と言ふ他に類例のない大冊で內容は最も充實完備した物です。殊に講師は三菱三井大倉組三越松坂屋等の要職にある各一流の實際家が筆を揃へて應用本位就職本位に講述せられたるもので到底他に見る事の出來ない權威ある特殊の講義錄であります。

東京市神田區
猿樂町一ノ五
電話神三一七三
振東七〇三〇一

帝國事務教育會

（キングで見た旨御書添へ下されたく候）

無學は男の恥

◇◇自宅實習僅か一ヶ年で卒業が出來る

最高速度式

農業實習講義
商業實習講義

▲新知識を吸收して時代に遲れるな▲講義最も平易で親切▲講師は專門の博士學士▲學費一番低廉です

此際の入學者に限

中學講義錄 無代添附

詳細の内容見本つき 規則 進呈

農商別記入ハガキ申込次第

東京小石川表町六十七 國民實科大學院

◇無學は女の恥

お嫁に行つて赤い顏をせぬやう

裁縫料理禮儀作法を始め洗濯生花に至る迄何れも一流の大家が親切叮嚀に述べた本校講義錄を見れば、どんな無學の方でも女一通りの知識が得られます。ハガキで申込次第見本一册無代進呈。



東京小石川表町六十七 大日本通信女學校

未來の菊池寛久米正雄出でよ

▼一躍文壇に名を成さんと欲する諸君は來れ!!▼其他文學研究者新聞雜誌記者著作家編輯員等文筆業は今後益々多望なり

日本文學講義錄

▼入學案内書は葉書で申込次第即時送呈

▼東京市小石川表町六七 日本文學通信學校

今や鐵道界は諸君の來るを待りて

生存競爭激甚な社會に於て青少年自活の途は唯一鐵道界あるのみ!鐵道界は立身成功迅速で又不景氣なく就職離更にもなし

鉄道員養成講義

▼入學案内書はハガキで御申込次第進呈

▼東京市小石川表町六七 帝國鐵道教育會

青年よいつまでも親の脛を嚙らず獨立獨歩せよ

人民保護の榮職で社會の尊敬を受け警部警視と昇進し加俸恩給の特典あり且努力次第でドシ〳〵出世の出來る警官になれ

巡査養成講義錄

▼巡査と記入ハガキ御申込次第見本進呈

▼東京市小石川表町六七 國民實科大學院

惡筆と惡文は一生を棒に振る

能筆能文は一生の德だ、タッタ一本の手紙で易々と就職し僅かに一回の文通で出世の道が開けた例は澤山あるではないか

手紙習字講義

本會獨特の方法でペン字・毛筆・手紙文上達保證

▼手紙と記入ハガキで申込次第見本進呈

▼東京市小石川表町六七 國民實科大學院

孫子の代までも毎日使へる便利重寶な信用ある字引

三册揃ひ只の一圓に大割引

◇紙數合計 一千四百頁

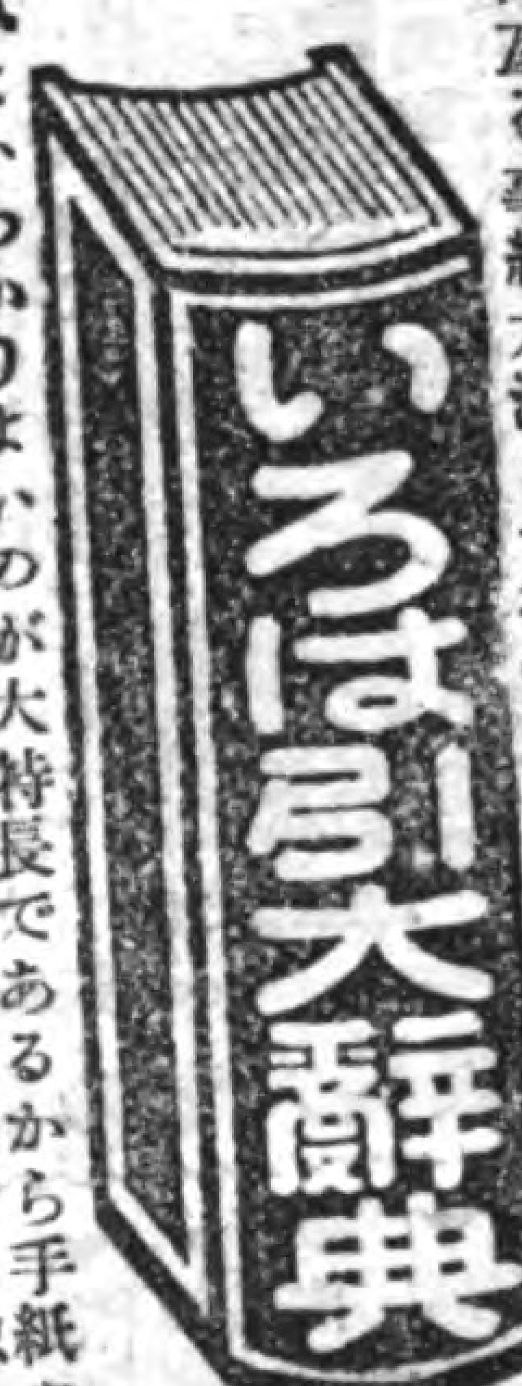
左の模範的大辭典三册定價五圓の處實物宣傳の爲三册一時に御注文者にはタマの一圓に大割引す



商用文◆公用文◆儀式◆交際◆日用文◆ハガキ文◆案内文◆注文文◆催促文◆慰問文◆弔慶文を始め凡そ手紙百般に亙る事細大漏さず掲載すればどんな惡文家も必ず上達保證の大辭典

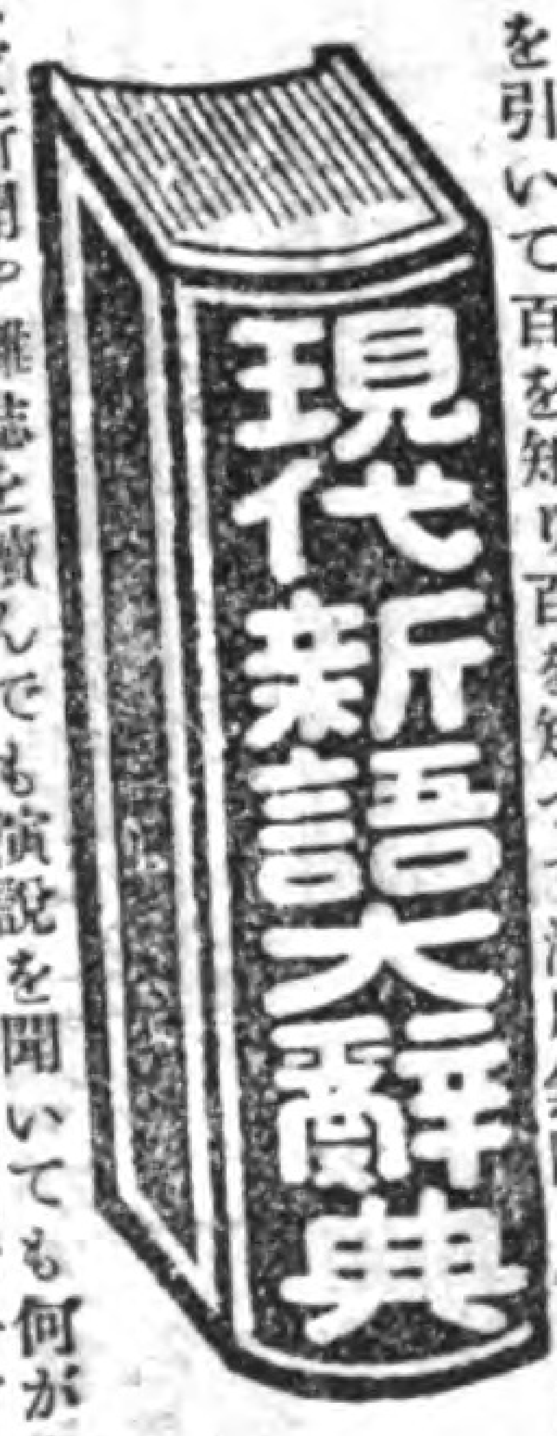
◆他でまねの出來ない新式考案編輯で◆口語文◆候文◆見

新手紙研究會編
縱四寸八分橫三寸八分
總數紙三百八十六頁
定價金二圓也



◆之までのいろは字引よりも、ひきよいみよいわかりよいのが大特長であるから手紙や文章を書くときチヨツとみればどんな難しい字でも忘れた字でも忽ち字と意味が同時に分り一を引いて百を知り百を知つて活用無限、實に便利重寶の大辭典なり

常用漢字研究會編
縱四寸八分橫三寸八分
總紙數三百十二頁
定價金一圓五十錢



◆近頃流行の新熟語外來語流行語を知らねば新聞や雜誌を讀んでも演説を聞いても何がナンだかさつぱり分らぬ本書は日常のあらゆる新語をいろは引でひけるやうにし一々解釋をしてあるから誰にも聞かずどんな新らしい言葉でもスグ分る良書なり

新語研究會編
縱四寸八分橫三寸八分
總紙數四百二十頁
定價金一圓五十錢

發賣記念の爲 記憶字典(二百九十頁 美本一册宛)進呈

●此の三辭典は至急投資處分品に就き内容見本等は差上げられませんから●當店を信用の上御申込下さい御氣に召さぬ場合は何時にても返金す

後ではスグ忘れる今ハガキで申込め

前金送料十二錢代金引換册錢增◆振替東京六六八〇〇番

市小石川區表町六七 進文館本店

小學校卒業生は必ず本會へ入會せよ!!

◁通信教育界のオーソリチー▷

内容完備せる世界第一のコレスポンデンス・スクール

本會の全景



▽無代進呈
検定試験總覽つき
獨學成功案内

會長 前文部大臣 正三位 尾崎行雄
女學部 學監 愛國婦人會々長 從三位 下田歌子

▽創立廿七週年第五十五回新學期開講△

藍綬褒章を拜受せる 本會の三大講義錄

◎獨學で中學卒業の學力が得られる
國民 中學講義錄
○一年半卒業 ◎月三回發行 ◎會費一ケ月壹圓廿錢

◎獨學で高女卒業の學力が得られる
高等 女學講義錄
○一ケ年卒業 ◎月二回發行 ◎會費一ケ月八拾錢

◎獨學で立派に補習敎育が受けられる
國民 補習講義錄
○一ケ年卒業 ◎月二回發行 ◎會費一ケ月五拾錢

▽此際の入會者へ大特典提供△

今が入會するのに一番好い時だ

◎大至急入會を斷行せよ
◎通學者(好夥)の自習參考書

本會の十大特長
- ▼基礎が固い ▼會費が廉い
- ▼信用が厚い ▼卒業が早い
- ▼學制が正しい ▼指導が良い
- ▼内容が新しい ▼敎授が巧い
- ▼講師が偉い ▼成功が確い

◎獨學成功案内
◎各科入會案内
つき

講義錄見本 規則

―申込次第進呈す―

いつ入會しても講義錄は第一號から毎月順序よく發送する。

藍綬褒章拜受
創立廿八週年

東京 駿河臺
大日本國民中學會

電話神田一一二一番・一一二二番・一一一三番 振替東京四二〇〇番

十人十色

漫彫三部作　田中比左良







坊『姉ちゃん〳〵、あま──ぐり!!!　あま──ぐり!!!』
娘『アラおしるこ好いわねえ、アラおすしもいゝわ──』
母親『ちよつと貴郎、暫く目で今日は支那料理にしませうよ、ウヰンドーの見本おいしさうですわ』
父親『いや、今日は簡単に一寸一ぱいの口に願ひたいねえ、ハ、、、、』
浅草食傷新道で親子四人立往生。

雪の征服





長い冬の間、全ての交通機關を奪はれて了ふ北國人にとつて、どうして雪を征服しようかといふ事は、一つの大きな悩みでありました。ところが最近この寫眞に示すやうな珍らしい發明が完成されました。（上はある冒險小說にヒントを得て發明された米國の雪橇。飛行機のプロペラーを應用したもの。（下はアラスカの雪自動車。矢張り發動機を取つけたもので前進、後進、轉回全て自由です。

決死の本多忠勝

……裏面の説明を御覧下さい……



磯田長秋筆

キング教訓畫譜（その二）

決死の本多忠勝

小牧の役に秀吉の八萬騎は、金瓢の馬印凛々しく樂田から長久手の方へひた押しに押寄せようとする。長久手には家康が出馬してゐる。家康の家臣本多平八郎忠勝斯くと見て、手勢五百を率き連れ、小牧を驅け出で、川を隔てゝ秀吉の軍と長久手に向つた。秀吉の大軍と一戰し、討死する間には、家康が長久手にて心靜に合戰し得るであらうと、忠勝は一命を賭したのである。

龍泉寺へ十町ばかりのところで、忠勝は川端に下り、馬の口を洗はせてゐる。秀吉遥に此さまを見て、

『あの馬に口洗はせてゐる、鹿角の立物したる冑を着けてゐる武者は大將と覺える。さても美事な勇者であるわい。誰か見知りたるものはないか。』

と、尋ねる。稻葉伊豫守、言下に、

『先年姉川にて見覺えて居ります。あれは德川の内人本多平八と申す大將にてござります。』

聞く秀吉は、はら／＼と涙を流し、

『僅か五百ばかりの小勢で、八萬の秀吉に向つて戰はんと致すのは、卵を磐石に打ちつけるやうなものぢや。しかも我等の軍と並び行かうとするのは、此にて彼討死致し、我等の旗下を遲延させて、長久手の一戰を主の家康に心の儘にさせようとの魂膽、さてもさても頼母しい侍であるよな。矢の一筋も射かけるな。平八を討取るな／＼。』

と、下知したので、忠勝も恙なく長久手へ到着した。

文學博士　笹川臨風



ただで
あげます

コシケ 子宮病

お疑ひの方には一週間分と婦人病の起因及び體驗集無代進呈致します。本家宛申込まれよ（送料切手要五錢）

用ひてすぐきく
のまずになほる

大日本政府登録商標
第貳〇五參七七號



恵乃玉（めぐみのたま）

金……と時日……を緊縮して!!

◇自宅で安全に秘密にしかも薬價一日僅か五錢

こしけにて人知れず惱む處女、月經不順困難、しらち、ながち、子宮内膜炎、卵巣炎、ラツパ管炎、ひえ症、はれ、痒痒、子寶を持ちたき夫人、子宮がん其他凡て一切の婦人病にて百薬効なく專門醫より見放された重患の方殊に子宮のさがりゆがみには不思議にきゝます

〔各地婦人科病院激賞〕

毎月キングに發々して全快と幸福の喜びに滿つる禮狀は澤山頂戴して居ります

キングで見たと御申込へくなれば女の個人名で密送す

僞薬に御注意

恵乃玉（めぐみのたま）

〔價定〕

五週間分 一圓八十錢
十週間分 三圓五十錢
代引内地廿錢海外五十錢增
爲替振替送料不要

近頃ニセ物多し無効返金責任附政府登録商標恵乃玉に御注意下さいませ。

〔無効返金〕

キング及全國七十餘新聞に紹介されて名聲嘖々!!



高貴責任薬
五分間で
キキメのわかる
恵の玉本舗

八幡市春の町 貴命堂本家
電話特長九〇一番 振替大阪五九二六八番

恵乃玉は講談社代理部（振替東京六六二九番）でも便宜取次販賣す

胃腸病の强敵現る!!

之ならキット!

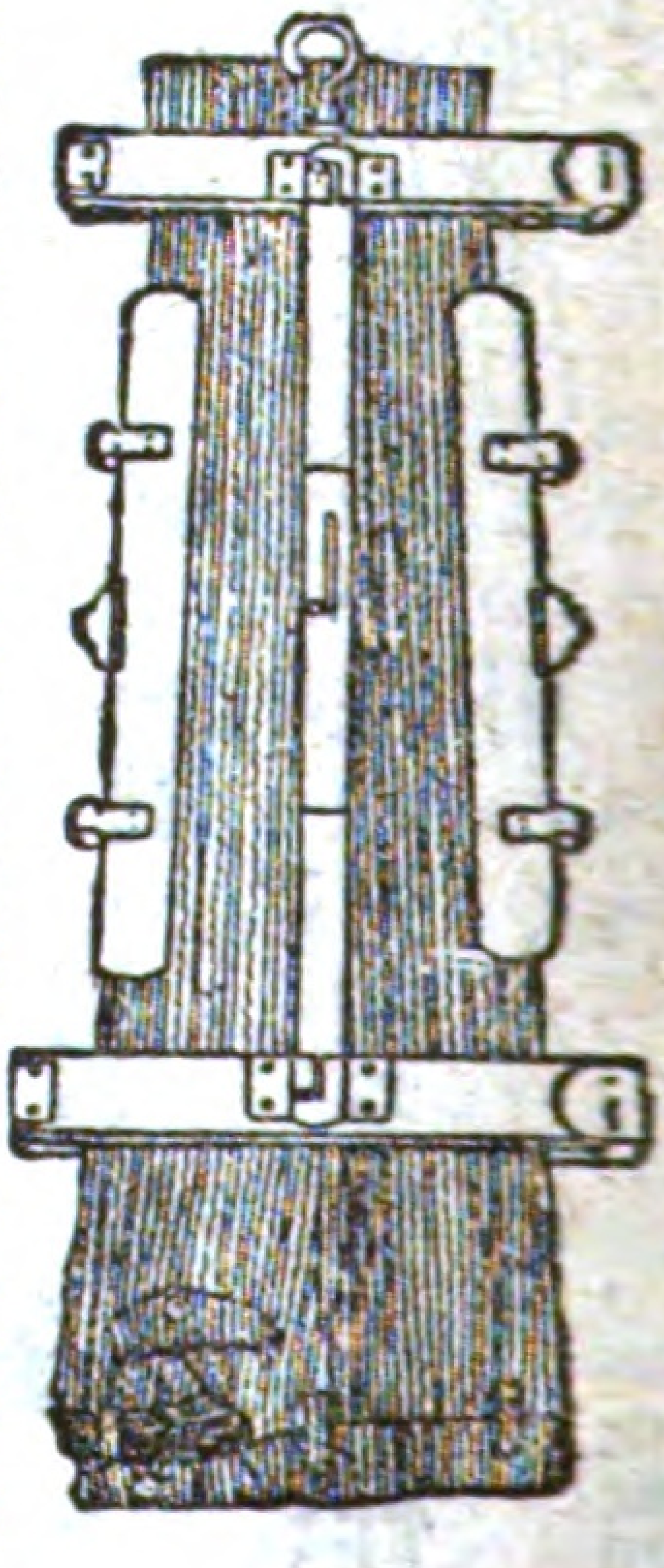
◇特別難症痼疾の方々に奨む!

本薬は海拔四千五百餘尺の大深山より湧出する天然の温鑛泉中に含有されて居る特殊な有効成分を化學的に精製出した神秘薬であります。本薬に就いては已に田原醫學博士を始め多數專門大家もその著効を認めて居る程で之以上の説明を要しません。永年の苦惱にある方は是非御試し下さい。御すゝめいたします。貴泉錠六十五錠入一圓五十錢百五十錠入三圓送料十二錢 東京本郷大日本雄辯會代理部取扱ます。

文化的
發條式

ズボン整調器

何時も正しく伸張されたズボンを着用する事によつて、自とその品位も高まります。



▼在來のズボン伸張器は不自然な伸張法なる爲め品質を損傷する事も少くないが此の發條式に依りますと極めて自然に伸張され少しの無理がなく、洋服の厚地薄地（冬物夏物）に從ひ自由に調節が出來使用法も頗る簡單であります。ズボン整調器（説明書付）一組二圓八十錢送料内地二十五錢領土五十錢

東京本郷駒込 大日本雄辯會講談社代理部 振替東京六六二九

都へ！都へ！



『あゝ懐しい多寶塔が見える！』西域からでも來たのであらう、今し駱駝の一隊は、ポツクリ、ポツクリ、冬晴れの道を緩かに行く。昨日は十里、今日は十五里、都ももう間近だ。駝夫は賑かな市日の幻想を描いて、獨り微笑をもらしてゐる。滿洲の曠野――そこには自動車の片影もなく、風物はおのづから太古のまゝだ。

海外便り

(1)日本人で始めて米國の巡査に任命された山下君。紐育の警察に勤め大變好評です。(2)伯林の世界廣告展覧會に異彩を放つてゐる大きな手。廣告術も何處迄進歩するかわかりません。(3)モダンな服裝で若い美人と伴れだつてゐるのは誰あらうお馴染の皮肉屋バーナード・ショウです。自分の小説が倫敦で上演されるので今出かけるところ。(4)は米國議會から此の程發明王エヂソンに贈られた最高名譽のメダル。









素晴らしい 富

見よ！又々面白い大傑作揃ひ!!

大人から子供まで男も女も家中樂しめる快雜誌！

袈裟斬り太夫

右門捕物帖――佐々木味津三先生大傑作！

寡默と微笑の伊達男右門の又々疾風迅雷の大活躍！一讀手に汗握る大場面！

老木の花寛永實盛　霜田史光

壯烈決死の大試合！

旗本隨一の荒侍初鹿野傳右衞門と朝比奈彌太郎が、大身の槍に鎧をつけて、さながら實戰の如き吹上御苑の大試合！



天日遍く照す

新橋驛頭、國賓を前にして高橋驛長の大失態、世人の囂然たる中に畏くも明治大帝の有難き御勅諚！萬人感泣感激の大實話。

▲掘り當てた金剛石

病氣と放浪とに疲れ果てた一靑年が絕望の極、死場所を探さんとして掘り當てたダイヤモンド！谷孫六氏獨特の大記事。

⊙觀相判斷 人氣者の運命

⊙聞いてビックリ 街頭行脚

⊙お國よいとこ

萬里を慕ひゆく

前田曙山先生作

通信教授 音樂講義錄

できる講義錄のお蔭でお琴やヴァイオリンがどんなによく出來る樣になりました



僞物注意

ハガキにて申込次第
各科規則書進呈

實に輕く……よく鳴る

ハーモニカ出現!!

本會專賣の
ハーモニカ
スヰトホーム
見本呈進

家庭印
第一號 二圓五十錢

特價提供 貳圓
送料十八錢

通信教授 音樂講義錄

大好評百五十版 **ヴァイオリン科**
大好評八十三版 **マンドリン科**
大好評五十五版 **ハーモニカ科**
大好評百四十八版 **尺八科**
大好評九十一版 **琴曲科**
大好評三十八版 **三味線科**

專賣特許

賜天覧台覧

秋月作尺八、朝日ヴァイオリン、琴譜本、複音大正琴

特長

一、此のハーモニカにて吹けば一日にて唱歌や簡單な流行唄等は何人にでも吹ける樣に新發明の習方法がしてあります。

新案特許出願濟（形式の如何に關せず模造僞造を嚴禁す）

二、極めて丈夫です、されば永久責任付です、若しハーモニカがこはれた場合には無料修繕致します。（但し送料二十一錢送金の事）

三、此ハーモニカは本會の專賣品なれば一般の店にはありません、又名稱スヰートホームは日本に只一つ特許されたる登錄商標で何人も之れを用ふる事が出來ません。

○音樂が通信教授などで出來るものかと云ふ人あらばそは此の本會專賣の巧妙なる方法を知らぬからであります。即ち本會講義錄による時は上記各科希望の樂器を居ながらにして直接教師に就て學ぶより、ヨリ以上の效果と便利が多數あります。されば三ケ月を出ずして人の前で奏せる位にキツトなれます。論より證據ハガキにて上記各科の内希望の科目を明記して御申込次第くはしき規則書を進呈します。

發行所 東京神田區須田町二番地 振替東京二七八〇〇番 **大日本家庭音樂會** 東京支部

白雪を蹴つて

……スキー御練習中の秩父宮殿下……



珍らしく雪にさす日のかゞやかに今朝しも御子は出で立たすなり
此日ごろ谷もたらひに降り埋み御子の御あとを雪も待ちつる

尾上柴舟

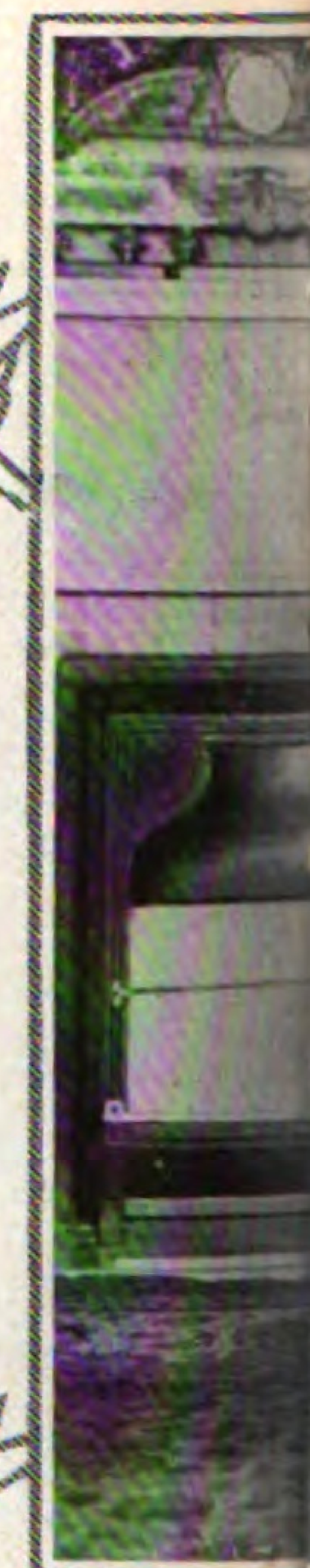
よいお爺さま





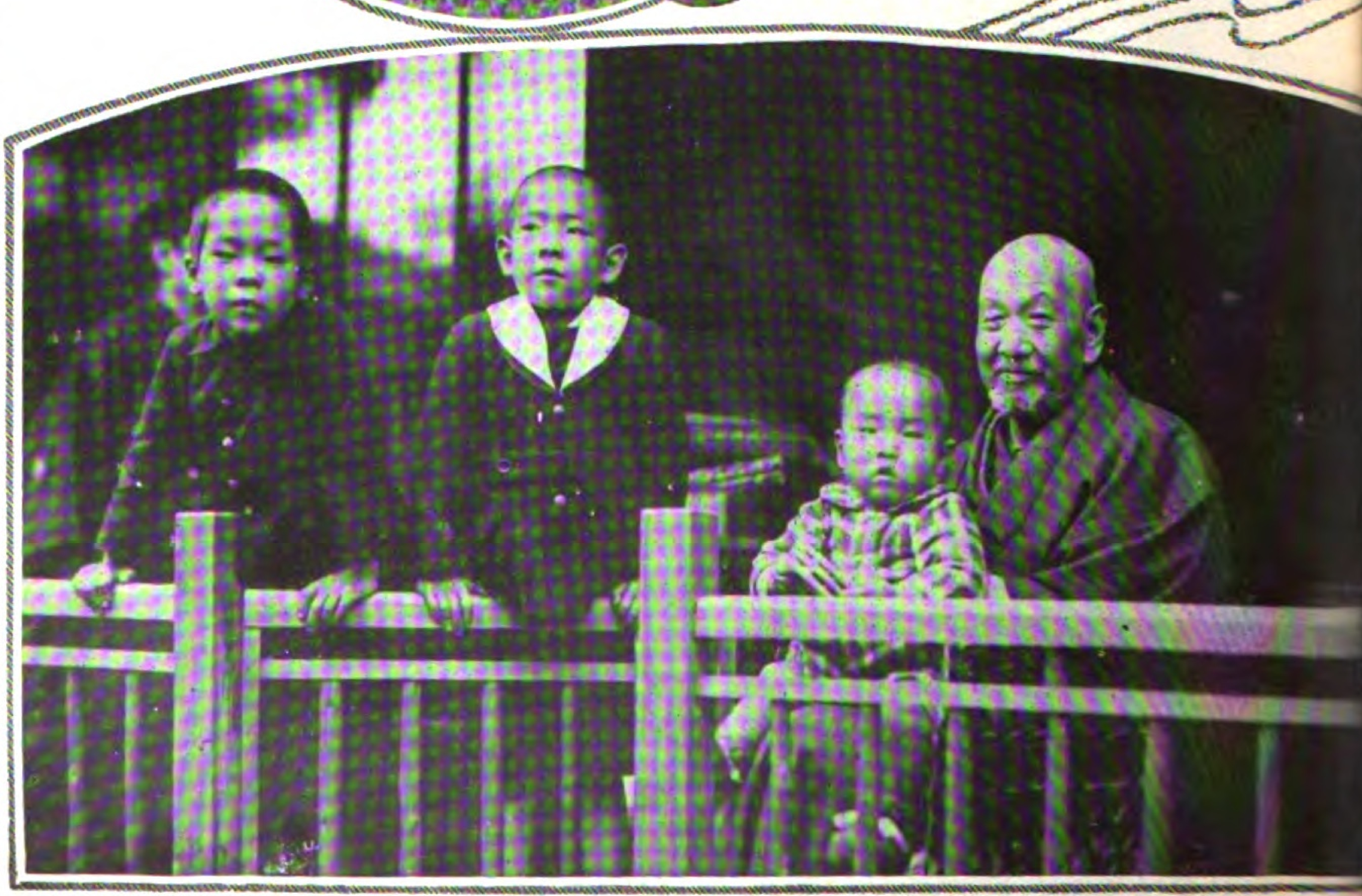
出でては天下の樞機に參じ、却いては國家の大計を論ずる方々も、可愛いお孫さんと御一緒なら本當に無邪氣なよいお爺様です。(1)實業界の元老澁澤子爵。澤山のお孫さんに取卷かれて大ニコニコ。お孫さんがみんな集まると八九十人もあるといふ賑かさ。さあこれから又何か面白いお噺が始まることでせう。(2)曾に總理大臣、樞密院議長等の要職を歴任せられた清浦伯爵。お孫さん方と散歩にお出かけ

可愛い御孫様





3



の處。伯爵の手にされてゐるのは宮中鳩杖です。右から歸美子さん（十五）、伯爵、榮子さん（十七）、貞子さん（九）。(3)政友會總裁として東奔西走されてゐる犬養翁。餘暇には御令孫の道子さん（十）と御一緒に庭いぢりがお樂しみ。(4)評論家として有名な文學博士三宅雪嶺翁。お孫さんのお仲間になつて日向ぼつこのところです。右から雪嶺翁、立雄君（三）、泰雄君（九）、達彦君（一一）です。

よいお爺さま





出でては天下の樞機に參じ、却いては國家の大計を論ずる方々も、可愛いお孫さんと御一緒なら本當に無邪氣なよいお爺樣です。(1)實業界の元老澁澤子爵。澤山のお孫さんに取卷かれて大ニコニコ。お孫さんがみんな集まると八九十人もあるといふ賑かさ。さあこれから又何か面白いお噺か始まることでせう。(2)曩に總理大臣、樞密院議長等の要職を歴任せられた清浦伯爵。お孫さん方と散歩にお出かけ

可愛い御孫様







の處。伯爵の手にされてゐるのは宮中鳩杖です。右から婦美子さん（十五）、伯爵、榮子さん（十七）、貞子さん（九）。(3)政友會總裁として東奔西走されてゐる犬養翁。餘暇には御令孫の道子さん（十）と御一緒に庭いぢりがお樂しみ。(4)評論家として有名な文學博士三宅雪嶺翁。お孫さんのお仲間になつて日向ぼつこのところです。右から雪嶺翁、立雄君（三）、泰雄君（九）、洽彦君（一一）です。

日本を代表して









本年一月倫敦で第三回目の海軍軍縮會議が開かれました。俗に倫敦會議と呼んで居ります。參加國は日、英、米、佛、伊の五ケ國で、今回の議題は主として補助艦（巡洋艦、驅逐艦、潛水艦）等の制限に關するものであります。日本は英、米の補助艦に比し七割說を主張してゐます。寫眞(1)は日本の全權若槻禮次郎氏、(2)同財部海軍大臣、(3)同松平駐英大使。(4)軍縮會議の會場セント・ジエームス宮殿

諸君!! ハーモニカならこれだ!

断然! 世界一と折紙つきの

ミヤタバンド



ハーモニカ界の第一人者 宮田東峰先生責任鑑製

日本で一番多く賣れるハーモニカ
名高吹奏者が皆愛用されるハーモニカ
歐米でも今大評判のハーモニカ!

吹きよくて音色が非常に美しい、音階が正しく、狂ひが出ない、而も驚く程價が安い。宮田先生の鑑製品!諸君!! ハーモニカは此の中からお選ひ下さい。

ミヤタバンド
▽複音二十穴…一圓六十錢
▽重音二十穴…一圓七十錢

ミヤタ鑑製
▽複音二十穴…一圓八十錢

宮田式音階高音ウ入
ミヤタバンド
▽複音二十一穴…一圓七十錢
▽重音二十一穴…一圓九十錢
▽複音廿二穴…二圓

〜荷造送料内地十二錢領土五十錢〜





上圖はミヤタバンド
下圖は同ウ入

東京淺草瓦町二八
宇野商店
電話淺草六一二二番
振替東京四一五六番

大日本雄辯會講談社
代理店にもあります

◆勉強する親切なハーモニカ販賣店には必ずあります・品切の節は上記へ前金御注文下さい◆

永井柳太郎氏大演説集第二集

全國民大渇

聽け！熱誠熱涙の大雄辯、大卓説！

人物修養、社會改善、日本を良く強く、
世界人類の幸福を圖るの道、茲にあり

見よ！永井柳太郎氏が、滿堂の聽衆を醉はせ、熱狂させ、驚天動地の大喝采を博したる普選以後の名演説。


永井柳太郎氏壇上の雄姿

愛國の熱誠、救世の意氣は全卷に溢れ、社會、思想、生活等の諸重大問題を解決し、現代生活に一大光明を投ず。

何人も一讀すべき大名著！

望の名演說集出づ

見よ此の内容

一、傍若無人論……(吾人は一切の不合理に對して大膽に闘はざるべからず!……一言一句燃ゆるが如き自由の叫び!)

二、新興勢力の擡頭を視して……(時代に逆行する政黨の打破を叫び、全國青年の蹶起を慫慂せる大演說。)

三、婦人の人間性解放……(黄金の爲に自由を束縛される幾千萬の不幸なる女性の爲に、熱涙を揮つて訴へた悲壯の大雄辯。)

四、第二維新の指導精神……(不安動搖歸する所を知らざる現代生活に、確固たる信念と安心愉悅の根據とを打ち込む大論策。)

五、打倒掠奪政治……(大經綸、大見識、炎の如き大熱辯で聽衆大熱狂!第五十六議會批判の名演說。)

六、ウイルソンよりムッソリーニ迄……(近來急激なる思想の變化を研討し、我等が奮闘すべき大道を明示せる大卓論。)

七、民政黨は何を爲さんと欲するか……(民政黨を代表して國民に公約せる大演說、氏の政治的立場及びその抱負をハッキリ知る事が出來る)

八、國家を救ふが爲に……(この至誠、この正義、聲涙共に下る。思はず襟を正す崇高なる大人格。)

九、民政黨の對支見地より……(議政壇上、得意の外交問題を掲げて縱横の長廣舌田中大將の心膽を寒からしめた大演說。)

十、支那新舊勢力の衝突……(南方派、北方派、東山省派等の幾多の人物を詳論し、國民黨、共産黨の衝突を指摘して明細を極む)

十一、濟南事件に直面して……(これ亦永井氏得意の大業物、堂々論陣を進めて逃るゝに道なからしめた模範的質問演說。)

十二、大乘外交か小乘外交乎……(田中内閣をして遂に瓦解のやむなきに至らしめた血涙の大雄辯。)

十三、歐洲より米國へ米國より何處へ……(傍若無人の米國を向ふに廻して、文明の優劣を爭ふ日本、その對策や如何?)

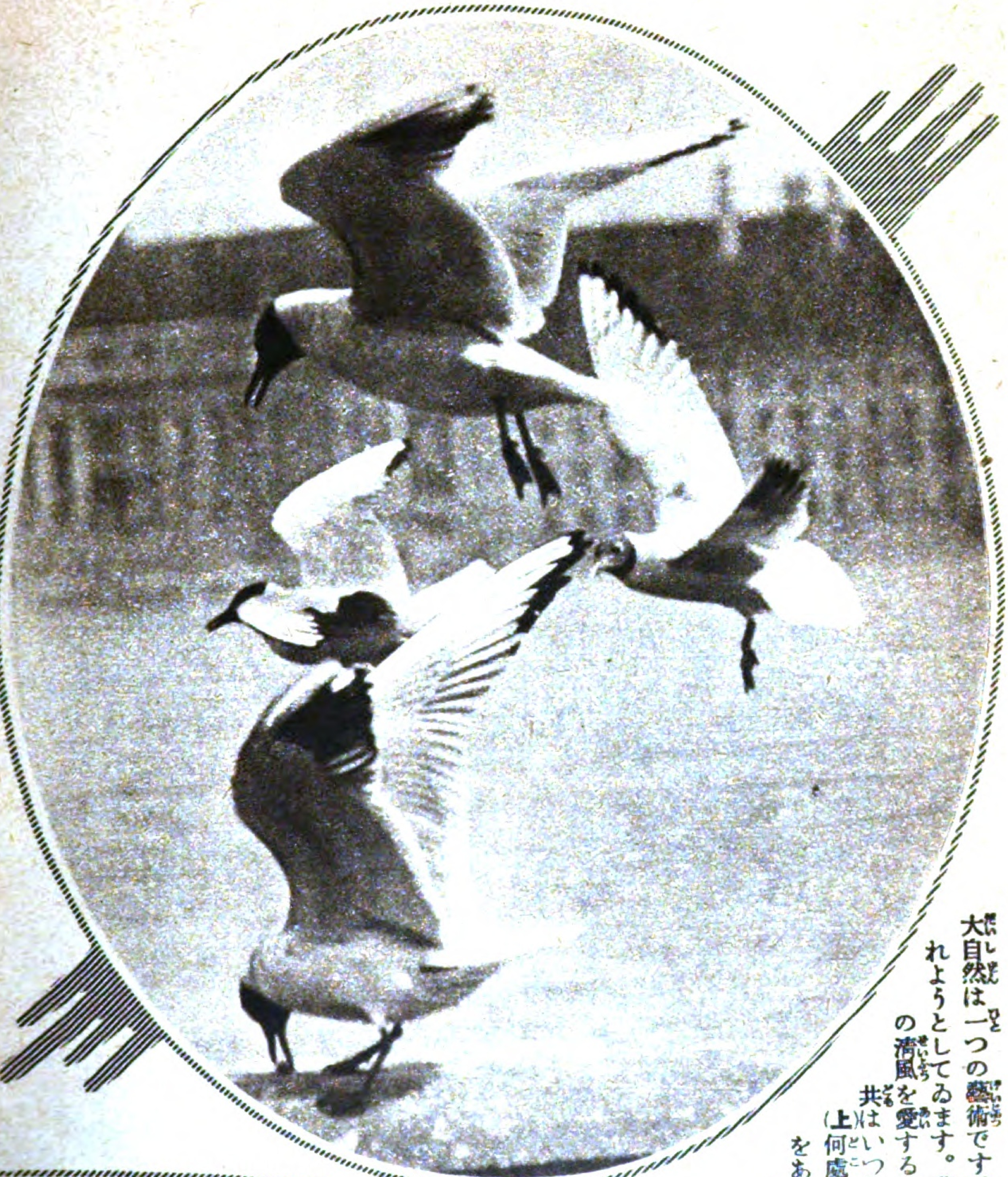
十四、余は勞働者たるを喜ぶ……(勞働の尊嚴を强調し、勞働者即ち英雄と斷ず。博辯宏辭、個擊の熱情、萬人の心魂に訴ふ。)

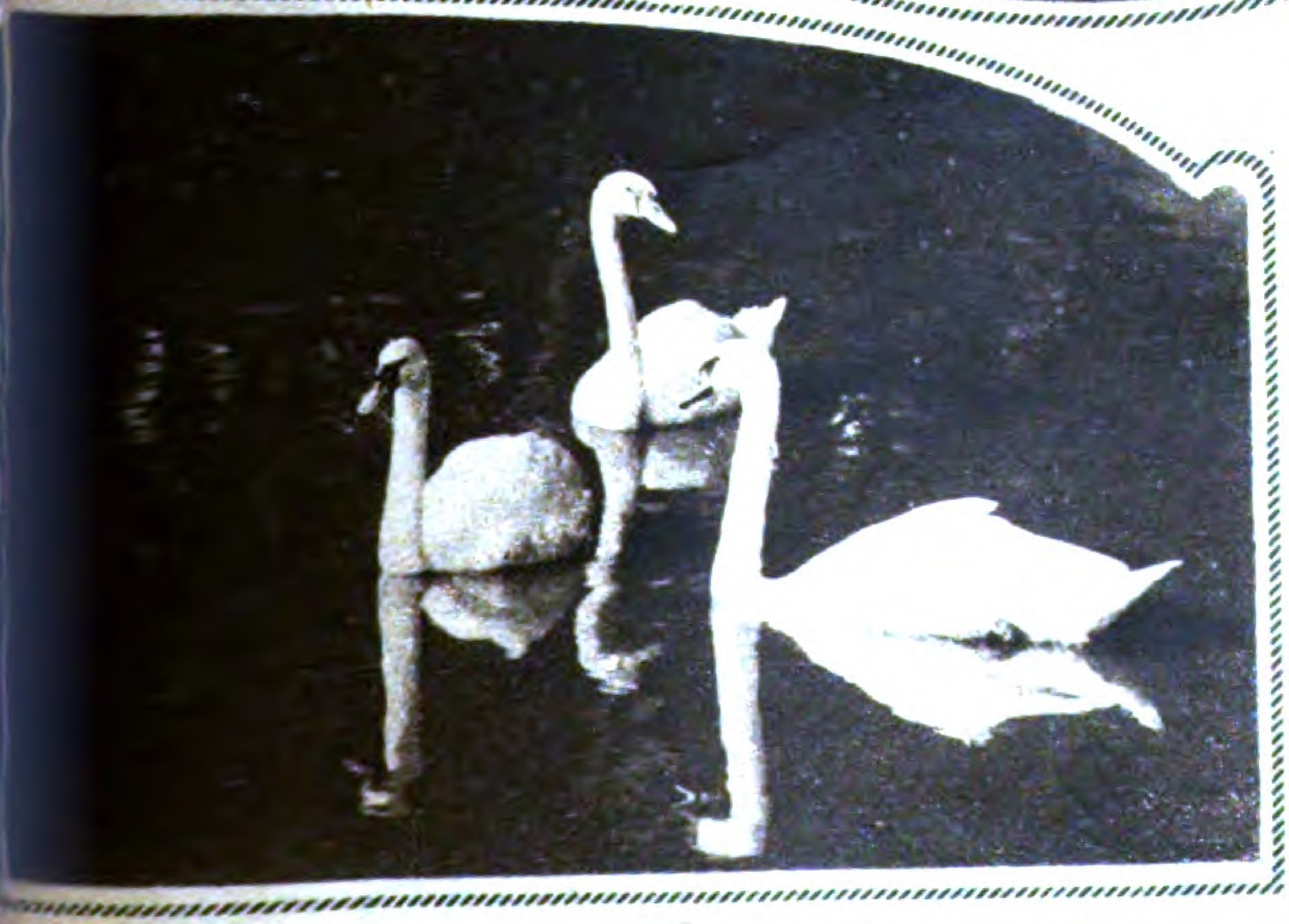
十五、太陽主義……(熱、力、光明、大愛——須らく太陽の如くなれと絶叫し、讚美す。人類愛の極致。)

◎定價壹圓五十錢(送料十錢)

東京本鄉駒込坂下 大日本雄辯會講談社(振替東京三九三〇)


キング
グラフ

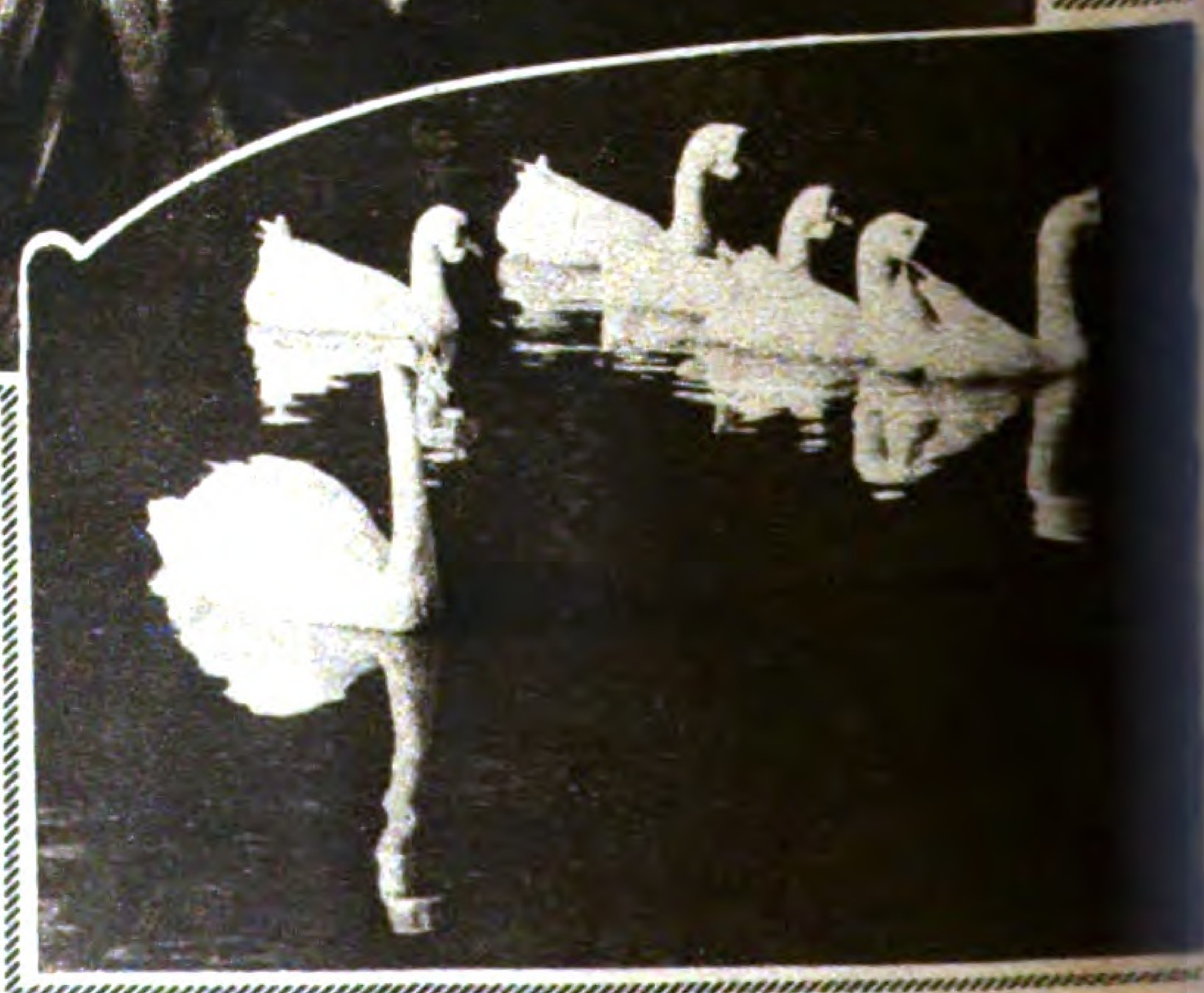




大自然は一つの藝術です。人々は兎もすると自然を疎んじ、自然を忘れようとしてゐます。蘇東坡でなくとも山間の明月を樂しみ、江上の淸風を愛することは、美しい人間性の一面であります。私共はいつも自然に親んで行きたいものです。

(上)何處から訪れて來たか四羽の水鳥。さゝやかな餌をあさつて岸に舞ひ、陽に輝くその羽、そのポーズ、どう見ても美しい彫刻です。(左)御覧下さい。春の水に浮んだ白鳥の一群。波静かにして鳥動かず、その配列の巧みさ、見事さ、さながら一幅の名畫であります。





（上）親も無心、子も無心、朝の狭霧の中に羽並を揃へてゐるペリカンの姿。優しくも亦奇しき一團のまどゐではありませんか。軈て朗かな歌が聞かれることでせう。人の心を和ますやうに。

街頭珍



(1)讀めはしないけれど表紙の色が洋裝にうつるといふので、外出には必ず洋書を抱へて歩くモダーン孃、途中で本ものの西洋人に話かけられ『ワタシ英語ベケあります』でスタコラ一目散。



(2)一寸スマしたところはおつなやうだが、ポケットを見れば萬年筆の行列！これはホヤ／＼の新聞記者と御承知ありたし。

(3)雨の日に道を歩いてゐると後から來るのは全速力の自動車。『本當にイヤだわネ』と雨に濡れることなど何のその、撃劍のお突きよろしく慌て丶傘の防禦壁。テモ罪なのは自動車のハネである



風景



(4)昨日までは女學校の運動選手、今日は人妻となつたが矢張り昔が戀しく競技會に出かける。始めは殊勝に見て居たもの丶試合が高潮するにつけ、ジッとして居られず大丸髷も忘れて思はず知らずフレーフレー。



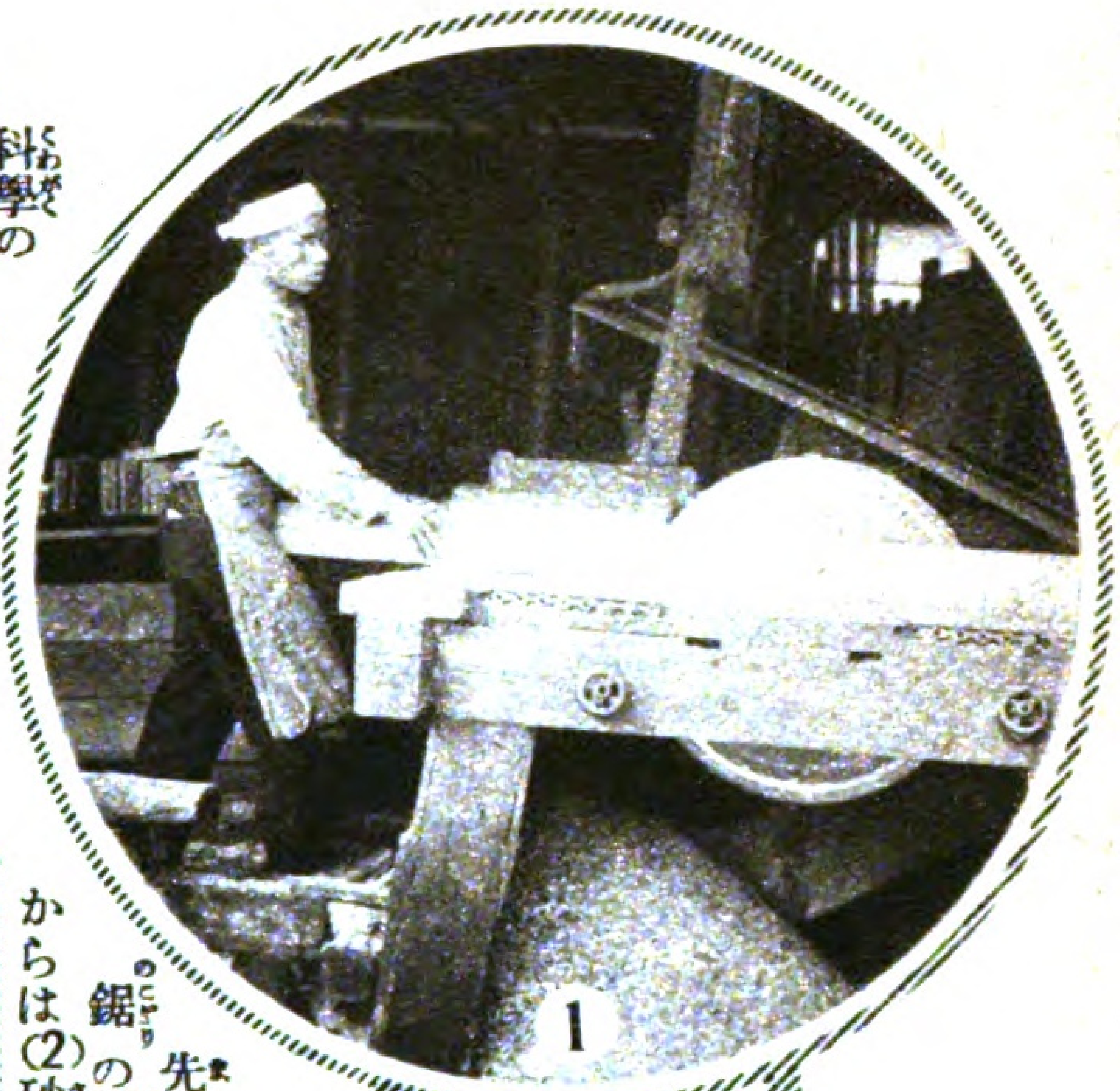
(5)頭には中折帽、顔には縁太のロイド眼鏡にチャプリン髭、手には腕時計をはめて足は白足袋にフエルト草履、帽子をとれば髪は油でテカ〳〵の現代的僧侶。それでも坊さんの證據に、珠數丈けは持つてゐる。



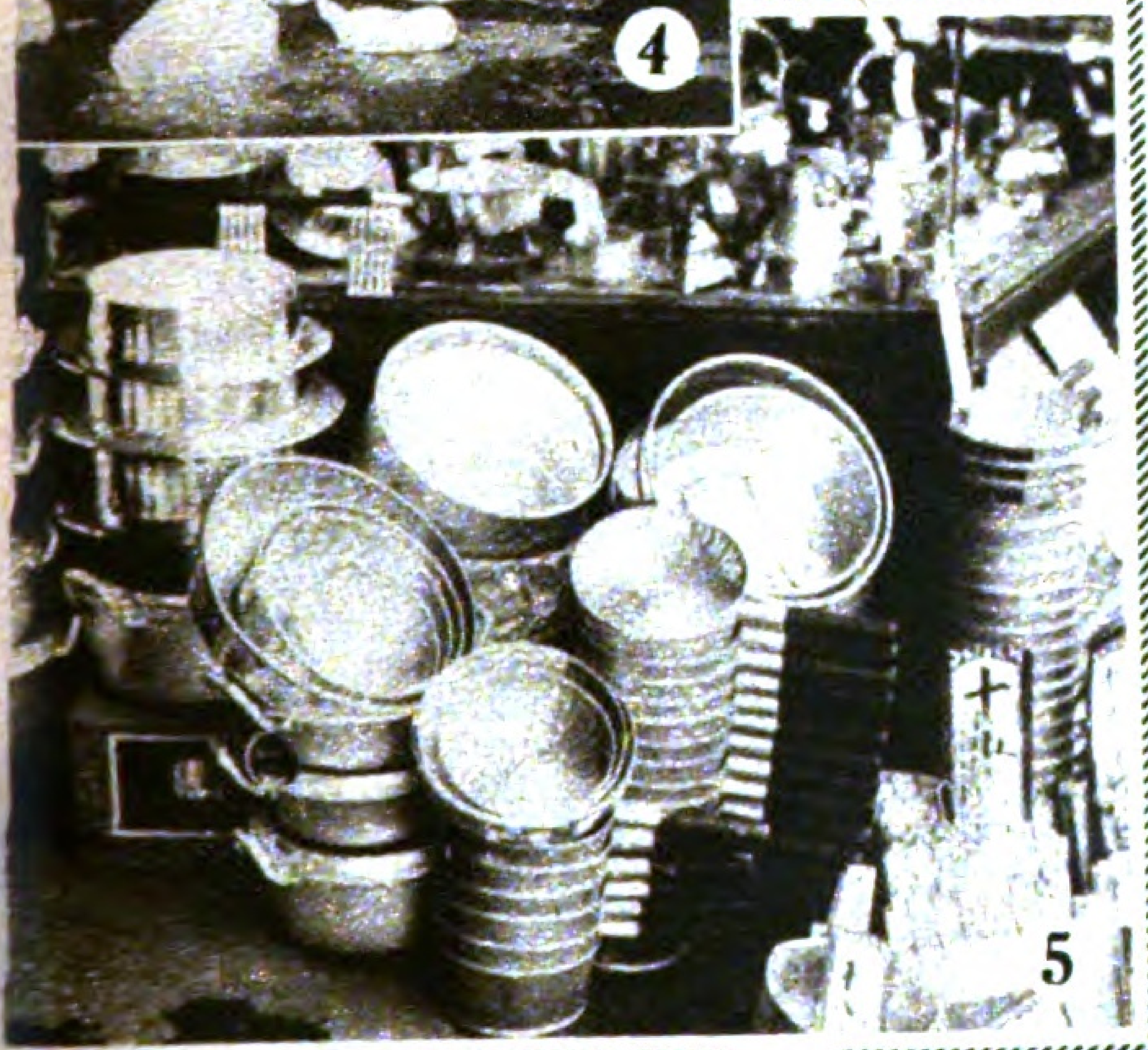
(6)散歩の歸り。アンヨを嫌がる坊やを外套に包んで早速ネンネコ半纏の代用。その上重い風呂敷包や下駄まで下げて、調子外れの子守唄を歌はねばならぬ現代紳士。あゝ良夫賢父たる又辛い哉だ。

意外な

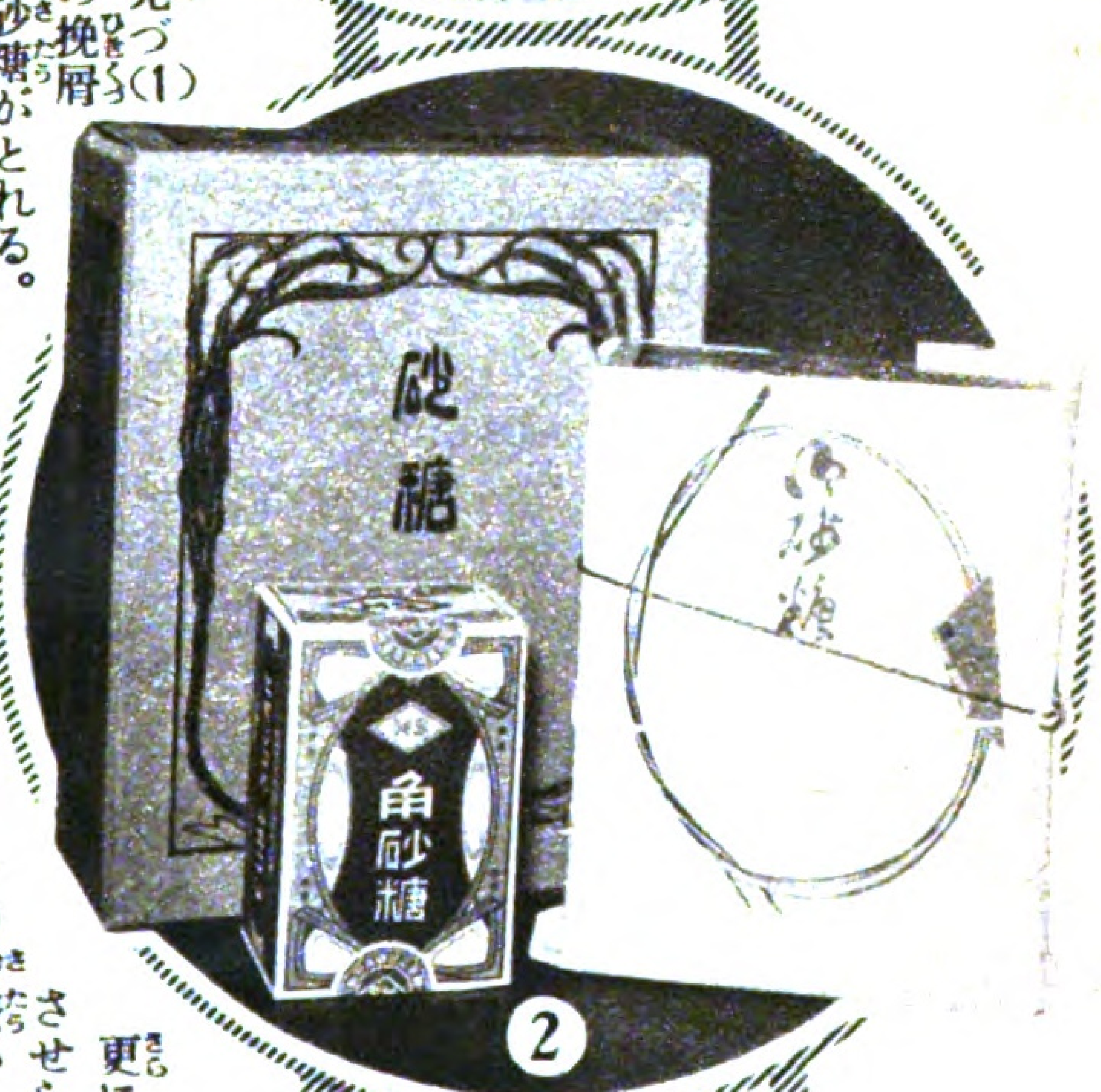
科學の力程世にも不思議のものはない。今迄不思議とされた事にドン〳〵解決を與へるかと思へば、又反對に新らしい不思議を生み出して行く。此處に掲げるのもその一例だ。







先づ(1)鋸の挽屑からは(2)砂糖がとれる。



更に吃驚させられるのはその砂糖から(3)ダイヤモンドが出來る。

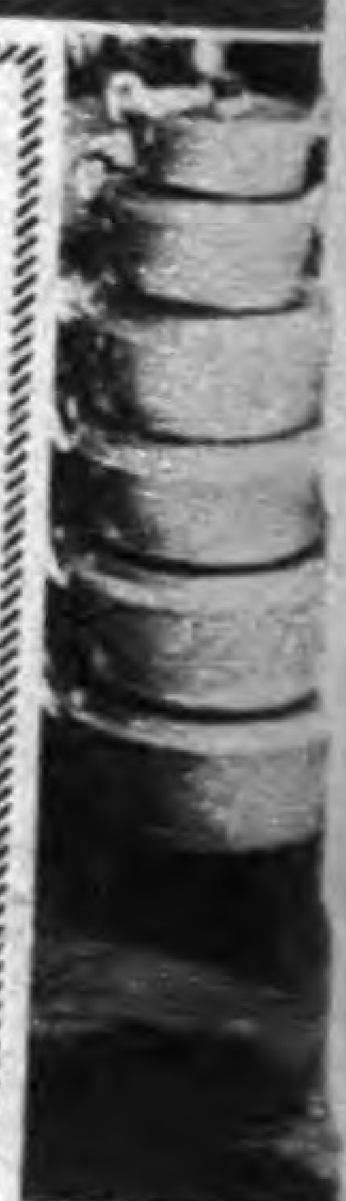




(6)眞黑い石炭からは皮肉にも雪の樣に白いアスピリンやナフタリンが製造される。

加工品





(4)お子様方の手工でお馴染の粘土は、科學の力で(5)アルミニュームに化ける。





(7)何にも使ひみちのなささうな足袋の裁屑もこれをうまく加工すれば(8)セルロイドの玩具となつて洋行するのもたやすいこと。

(11)毎月皆様がお待かねのキングが(12)トヾ松から出來るといふのも嘘の様な本當の話。新聞雑誌の用紙は全部木材が原料だ。



(9)珍らしくもない小麥も利用されやうによつては(10)自動車のタイアに作られる。







吾輩はステッキである

吾輩は大辻司郎君のステッキだ。いつも漫談の先端に立つて活動してゐる。



(1)『オヤ蟇口が落つこつてゐるぞ』まづ一寸觸つて見て中味が重いか輕いか鑑定するのが吾輩の重大な役目だ。その間に大將はあたりに人の氣配を窺ふ。これを稱して蟇口拾ひの型といふ。



(3)いつ迄も吾輩を宙ぶらりんにして怪しからんと見上げれば大將は汽車に乘り遲れてトボ〳〵。このステッキの持方は所謂按摩型。



(4)今日は銀ブラ、天下の漫談家の颯爽たる姿を見てくれとばかり大將は無性に氣取つて歩く。お蔭で吾輩の調子がとれない。出來損ひのチャップリン型といふのはこれだ。



(2)これから漫談會だ。希望と勇氣に明るくなつた大將は、吾輩を靑眼に構へて歩く。これが劍劇の型だ。



(5)晴れた日曜郊外散歩。大將は吾輩を肩に鼻唄うたつて好い氣持。これが郷く旅行列の型。

新療法紹介

神經衰弱や白痴の原因となる
鼻病患者の一大福音
△自宅で誰にも出來る最近醫學上の大發見▽

最近蓄膿症の流行

鼻と腦とは薄い骨の膜一枚で隣り合つてゐるので、鼻に故障あればすぐ腦に影響する。頭が常に重く年中頭痛がするとか、記憶力が減じ物事を考へられぬとか、物事に疲れ易く直ぐ倦怠を覺えるとかいふのはよく調べて見ると、大概鼻の何處かに故障のあるためであります。昔から鼻は萬病の門といはれてゐます位でありますから、鼻の病氣のある人は重くならぬ中に根治の方法を取らぬと、腦に接近してゐる場所であるだけに、遂には腦の血液循環が調はなくなつて、腦神經衰弱の原因となるばかりか、記憶力が鈍つて低腦になつてしまふ事があります。鼻の病氣中でも最も多いのは蓄膿症でありますが、或る學校の如きは全校の約三分の一の生徒が蓄膿症患者であるといふ事實すらありまして、今や蓄膿症は激しい流行病のやうな勢で肺病にすら引けをとらぬほどの慘害を年若い人達の上に加へつつあるのであります。

蓄膿症とその原因

では蓄膿症といふ病氣はどういふ病氣かといへば、鼻腔内の空洞中に、膿汁の溜る病氣で、其原因は大概風邪引で鼻がつまるのを打棄て置いて、何時までたつても治らないやうな場合によく起るものであります。其他にも原因はいろいろありますが、その何れであつても鼻腔内に膿の溜るのは同樣で、その結果は眼の上や下が腫れたり、そこを壓すと痛みを覺えたり、鼻汁が澤山咽喉の方へ落ちて來たり、頭が重く感ぜられたり、殊に長い間溜つてゐた膿が出る時など、とてもひどい臭氣で自分でも嘔吐を催すほどで、兎に角不愉快極る病氣でありますが、茲に一つ理想的の新療法が發明されました。それは湊式吸癒療法と申しまして、ドクトル湊謙治氏が父子三十五年の長年月苦心研究の結果完成されたものであります。

理想的な家庭療法

湊式吸癒療法は從來の療法に全く一新機軸を出せるもので、其方法は頗る簡單容易で、自宅にゐながらでも、又電車汽車中でも、執務勉强中でも極めて無雜作に誰にも出來、その卓効は、嘗て「キング」及「科學畫報」誌上にも發表せられてありまして、最初青いどろ〳〵した膿も次第に色濃く遂には水のやうになつて全く病氣らしい症狀がなくなつてしまひ、頭痛とか鼻が臭くてつまるやうな症狀も不思議に止みますので、一度實驗した人は皆其効果に驚かぬ人はありません。鼻病の王樣といはれる蓄膿症が前記の通りでありますから、其他肥厚性鼻炎、鼻茸、急性慢性鼻カタルなどのありふれたる鼻病に對する効果はいふまでもありません。

湊式吸癒液十瓦（六十日分）金三圓、湊式吸癒器一揃金壹圓五十錢、送料東京市内十二錢、内地廿五錢、滿鮮五十二錢、東京市麴町區下二番町十番地明光社（振替東京六〇七九六）又は「講談社」代理部へ申込めば御送り致します。

實驗報告集 ハガキで「キング」で見た旨記入し東京市麴町區下二番町十番地明光社へ申込み次第即時進呈します

雜誌「雄辯」の使命

將來の日本の政治が次第に言論によつて決せられんとするは事實である。新聞雜誌並に演說により政治運動や社會運動が、從來のごとき因縁情實の運動に代りつゝあることは、苟も眼を開いて今日の社會を見る人の何人も承認せざるを得ないところである。かゝる時代の風潮は、實に雜誌『雄辯』の存在を最も有意義ならしむるものである。恐らくは將來の日本を動かす多くの雄辯家は雜誌『雄辯』の讀者のうちから出てくるであらう。雜誌『雄辯』は明日の新日本建設の爲めの雜誌である。この意味に於て私は『雄辯』同人の日夜の努力が、明日の新日本建設に呼びかけるものとして、祝福の情に堪へない。

衆議院議員　鶴見祐輔

雄

新時代に成功活躍せんとする者は見よ！

▲社會を明るくする座談會

各方面の權威者が集つて、社會淨化、文化促進の實際問題に就て研究された萬人必讀の名記事！

▲金解禁は個人の財布にどう響くか……下田將美

▲誰にも必要な五分間演說(テーブルスピーチ)の仕方……今井三郎

▲井上準之助傳（成功の要訣これにあり、現代財界の巨人井上藏相が今日の地位を築くまでの奮闘傳）……伊達壽一

▲この人を見よ（各界の模範的人物を擧げてその美事善行を示した感激の好讀物生きた龜鑑萬人必讀の名篇！）……小尾範治

▲雄辯人國記（全日本各府縣それぞれお國自慢の代表雄辯家を捉へて縱横に批評した實に面白い昭和雄辯家傳）……白馬非馬生

辯

二月號

十四日發賣

…◇一九二九年ノーベル賞受領の人々
…◇ロンドン海軍會議の問題と人物
…◇知つて置きたい訪問の心得
…◇劍道を小學校の正課とせよ

▲法廷辯論物語……藤　達也
▲泰西の大雄辯……池田林儀
▲壇上往來……星島二郎

▲冬の勇者は語る（ウインター・スポーツの壯快味、冒險談、感激談、ロマンスの色々を各大學の選手諸君が語られた痛快讀物、面白い〳〵！）
▲日本の指導者を語る（日本を動かす人物は誰か？各方面に亙つて選はれた人々の列傳）……斯波貞吉
▲攻擊に廻つた政友會の猛將鬪將（野黨鬪士總まくり）……保利茂
▲各政黨智惠袋の腹の中（今議會に於ける政黨各派の秘策を探訪した面白い讀物）……來馬恭
▲求人者の聲＝求職者の聲（こんな人ならどこでも欲しがる出世求職秘訣）……中央職業紹介所長

この眞劍！此偉業

（偉大なる事業の蔭に潛む極めて眞劍の活動振り。面白くて爲めになる古今東西に亙る大人物の實話を蒐めた呼物）

▲應援演說模範例（實例豐富）
政治季節の好讀物――▲民政黨の杉浦武雄▲政友會の上塚司▲明政會の澤田謙▲社會民衆黨の宮崎龍介▲大衆黨の大澤一六▲中立の青柳篤恒……諸氏が執筆された模範例

▲有髯無髯滑稽討論（滑稽愉快面白いヒゲ論）……漫畫　漫文
▲大雄辯家の印象（雄辯家の大雄辯家批判）……網島佳吉
▲新歸朝者の海外感激物語（久米正雄、正宗白鳥、吉屋信子）……
▲緊縮時代この用意あり（失業者續出の現代に處する諸施設の紹介）……
▲政界表裏觀（誰にも判る政界の秘話）……山浦貫一

▲理想小說　一粒の麥……賀川豐彦
▲社會小說　夢見る森林……佐々木味津三
▲長篇戯曲　天保快擧錄……額田六福
▲諧謔小說　凡人傳……佐々木邦
▲問題小說　曠野の悲劇……畑耕一
▲科學探偵　幽鬼微笑……大瀧鞍馬

定價五十錢（送料二錢）◇發行所（東京本鄕）大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

登録商標

獨逸ベルツ博士

SUZUKI NIPPON-SEIYAKUSHA

黴毒と體毒を切らず注射せず治す「ベルツ丸」

△統計上から見た有毒者

東京市の衛生試驗所では昭和四年十月廿五日に血液檢査無料デーを行つた處來檢査の人員が男千二十二人女百二十二人計千百四十四人に達した其内陽性即ち有毒者は男百九十一人即ち一割八分七厘が恐るべき有毒者であつた所が女に到つてはとてもひどく百二十二人中四十九人即ち四割が有毒者であつた。之を以て直ちに全國有毒者數の一般を推す事は勿論出來ぬとしても又意識しない人の多くも有毒者である事は事實である(右は東京朝日新聞四、一一、四發表)尙梅毒は自分一人の病氣に止らず妻を泣かし子を泣かせ其の害毒は恐るべきものです。

△恐るべき梅毒體毒は内服藥で根治出來る

最近醫學の進歩發達は非常なものであるが實際梅毒や體毒の患者は少しも減じて居ないそれ丈け治療が困難であると云へる。こゝに於てベルツ丸創製者たるベルツ博士は明治九年我が國政府の懇請に依つて來朝せられ爾來三十年間東京帝國大學教授宮内省御用係として令名天下に轟いた名醫で人類愛の一念に驅られ此の恐るべき梅毒を社會から一掃したい念願から種々苦心研究の結果梅毒や體毒を切らず注射せず治癒する内服藥を創製完成せられ自らベルツ丸と命名し弊店に命じ廣く社會に發表されたのであります。

△ベルツ丸は實にこうした權威ある藥ですから

梅毒、體毒、下疳、しつ毒、痔毒、梅毒性痔疾リウマチス、ひえ毒、骨髓、惡性ニキビ吹出物、又は梅毒性にて頭腦惡き方や常に便秘性にて苦しむ方其の他凡て梅毒性から來た諸疾患に思ひ當る方はベルツ丸を服用すれば切らず注射せず血液中の諸毒を大小便に依つて體外に排泄します。試みに四五回服用すれば直に心身の氣力は快復して頭腦は輕くなり胃腸は強健になり食慾は進み知らず識らずの間に血液は淨化され日ならずして全治の悅びに達します。



梅毒や體毒の爲めに今迄數十本注射をしたが尙且全治せぬ方がベルツ丸で全快したと云ふ實例が澤山あります注射の御嫌ひの方は一日も早くベルツ丸を御試めし下さい

左に數ある禮狀の一部を紹介します

△ベルツ丸十五圓で全快 熊本市 寺内博君

「前略」小生は二年前縣立病院にて六〇六號注射を數十本致しましたが效果なく全く苦しんで居りました處キング誌上にて貴藥を知り早速五圓分注文致し着藥其の日から服用致しました處其の效力の偉大なるに驚き追て十圓分一個服用致し全く健康體となりました念の爲前日病院にて血液檢査を致しました處無毒と云ふ有難い通知に接し只々感謝の外はありません……云々。

△潜伏梅毒を根治した私 山形縣 高山良雄君

「前略」ベルツ丸服用以來胃腸は強健になり頭腦の重いのは治り氣分もはつきりし全身の抵抗力は驚く程強くなり全く生れ變つた樣な身體の持主となり毎日感謝に咽んで居ります……云々。

△高木博士が推奬したベルツ丸で頑固なニキビを全治した 岐阜縣 大内保君

「前略」先日御送藥頒はし候は愚息が顏面に「ニキビ吹出物」が出し困り居り候處偶々内科醫の診斷を乞ふ必要ありて伊勢羽津山病院に行き診斷の節種々の話より高木博士がベルツ丸を推奬せられ早速御送藥頒はしたる次第其の後連服致居候が約半量にて全治致し候殘部は後日の爲大切に保存致置候之偏にベルツ丸の顯著なる效力と家内一同喜び居候……云々。禮狀その儘講談社係

藥價は輕症用三圓、重症用五圓、頑固用十圓、常服根切用二十圓、特別大德用三十圓。送料内地十八錢、領土六十五錢代金引替切手卅錢封入の事

東京市日本橋區濱町三ノ四(新大橋下車)

鈴木日本製藥社

電話浪花一〇六番 振替東京一〇五番

回講談社代理部(振替東京六六二九番)にもあり。



早春十景

鬼城

梅活けて禿筆を噛む主人かな
きさらぎや踏み固めたる門の雪
雪解やひよろ〳〵と鳶の聲
暖かやほごしかけたる芋俵
長閑さや鷄の高鳴く家根の上
早梅の枝ぶりもなく咲きにけり
春月のかゝりて低き垣根かな
大釜に春水落す筧かな
凧あがるや淺間ヶ嶽の峰つゞき
山の端を吹流さるゝ雲雀かな





1

(1)雪中裸體になつてゐるのは物好きでも氣狂ひでも何でもない。これは瑞西の風景畫家だ。寫生し乍ら日光浴といふ一擧兩得の名案。(2)同じく瑞西のスキー體操。毎年冬になると斯うして身體を鍛錬して行く。

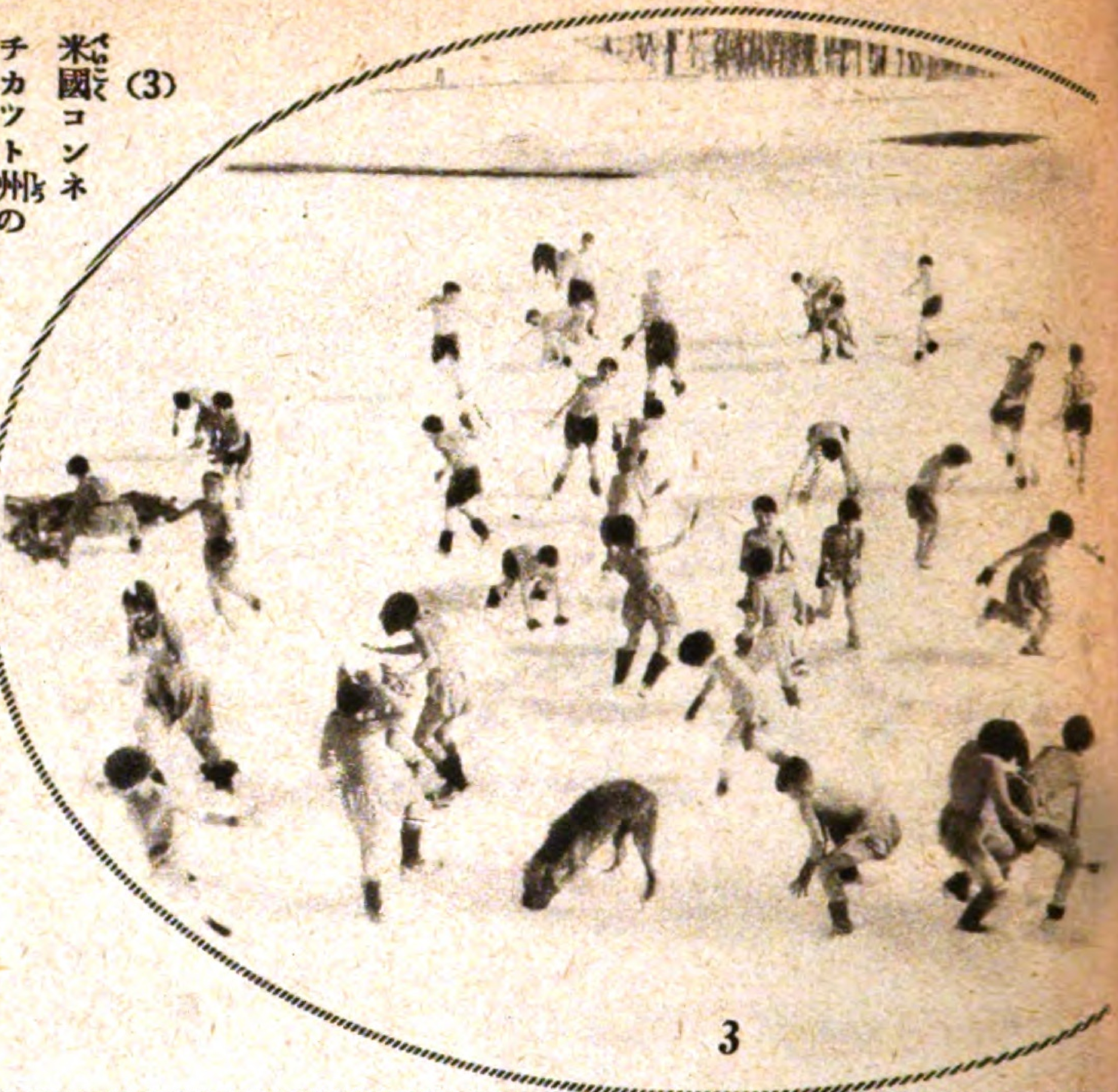


2

どこを見ても雪ばかり、炬燵の中に蟄縮してゐる人があるかと思へば、見事冬を征服して行く勇者もある。

(3)
米國コンネチカツト州の
結核療養所に於ける
日光療法の光景。不幸な結核兒童を收容し、新鮮な空氣と日光の中に身體の改造をして行く。これは勇壯なはだかの雪合戰。

(4)米國レーニア國立公園に於けるヤンキー・ガールのスキー。
海水着一枚で平氣とはどこ迄もヤンキー式だ。



3



4





時代は動く――今日の軍隊には音樂もあれば、スポーツもある。流石は民衆的の世の中だ。(1)はモダーン兵營として名高い、東京麻布の第三聯隊である。以下全部その内部。



(4)娯樂室にはオルガンも備へつけられて、休みには太い指が鍵板にをどる。



(2)炊事場。全てが科學的にキチンと設備されてゐる。この大きなお釜は幾つもあつて、四千人分の御飯が僅か三十分で出來る。(3)食事には新兵も故參も區別がない。みんな仲よく一緒に食べる。



(5)寝室ではお行儀よく枕を並べてまどかな夢を見る。



(6)こゝは酒保である。ポケットの底を探つて「青山の兵隊さん」一冊を買ひ、スッカリ此處の主になつたつもり。(7)は圖書室の一部、本社のキング等もこゝでは引張り凧で讀まれる。(8)は營内の＊

＊理髪所である。漫畫ポスターやら、標語やら掲げてあるのも面白い。





奇抜な類似

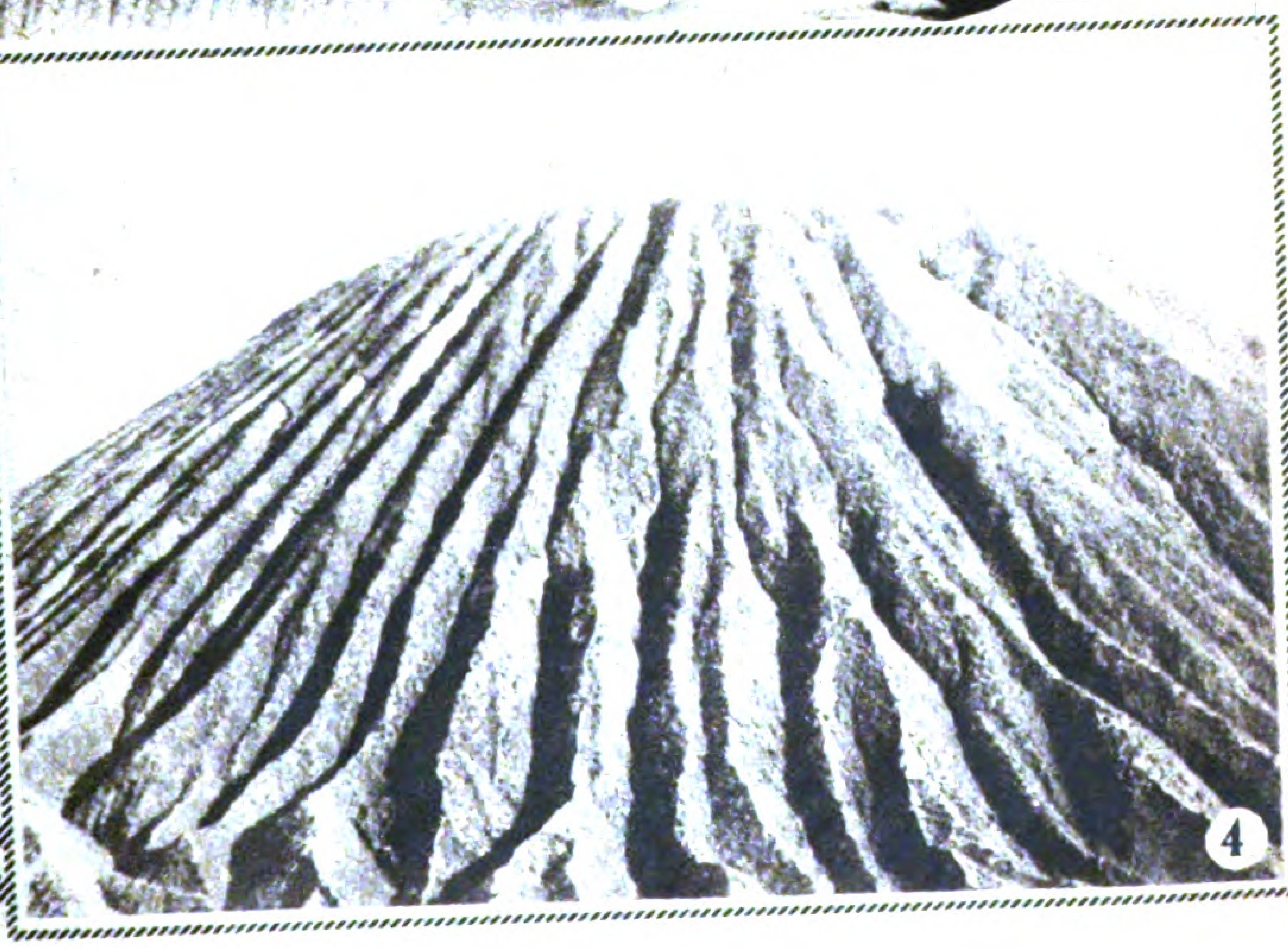
世の中には＊偶然の悪戯が随分ある。時々トンデモないものに似通つたり、奇抜な對照が出來たりします＊





(1)と(2)を御覧下さい。どちらも葉ッぱを貼りつけたやうな感じが似て居るではありませんか。ところが(1)は伯林消防署で使用してゐる人命救助器です。水に溺れさうな人があつた場合、これを身につけて飛込みます。(2)は世界に珍らしい蝗の一種。木に止つてゐる處はまるで枯葉そつくり。





(3)は申す迄もなく洗濯板です。ところが(4)の山にもまるで洗濯板のやうなギザ〳〵があります。これはジャバで有名なブロモ火山で、灼熱の熔岩のためにこんなヒダが出來、『悪魔の洗濯板』と呼ばれてゐます。

(5)は倫敦の警察犬大會に喝采を博した名犬ブルノ君。五人の背中を鮮かに跳越えてゐます。(6)犬に負けてはと奮起？したのは米國のゲーリッグといふ十三歳の少年です。『アッ危い！』といふひまもなく同級生十一人を並べて見事にジャムプ。





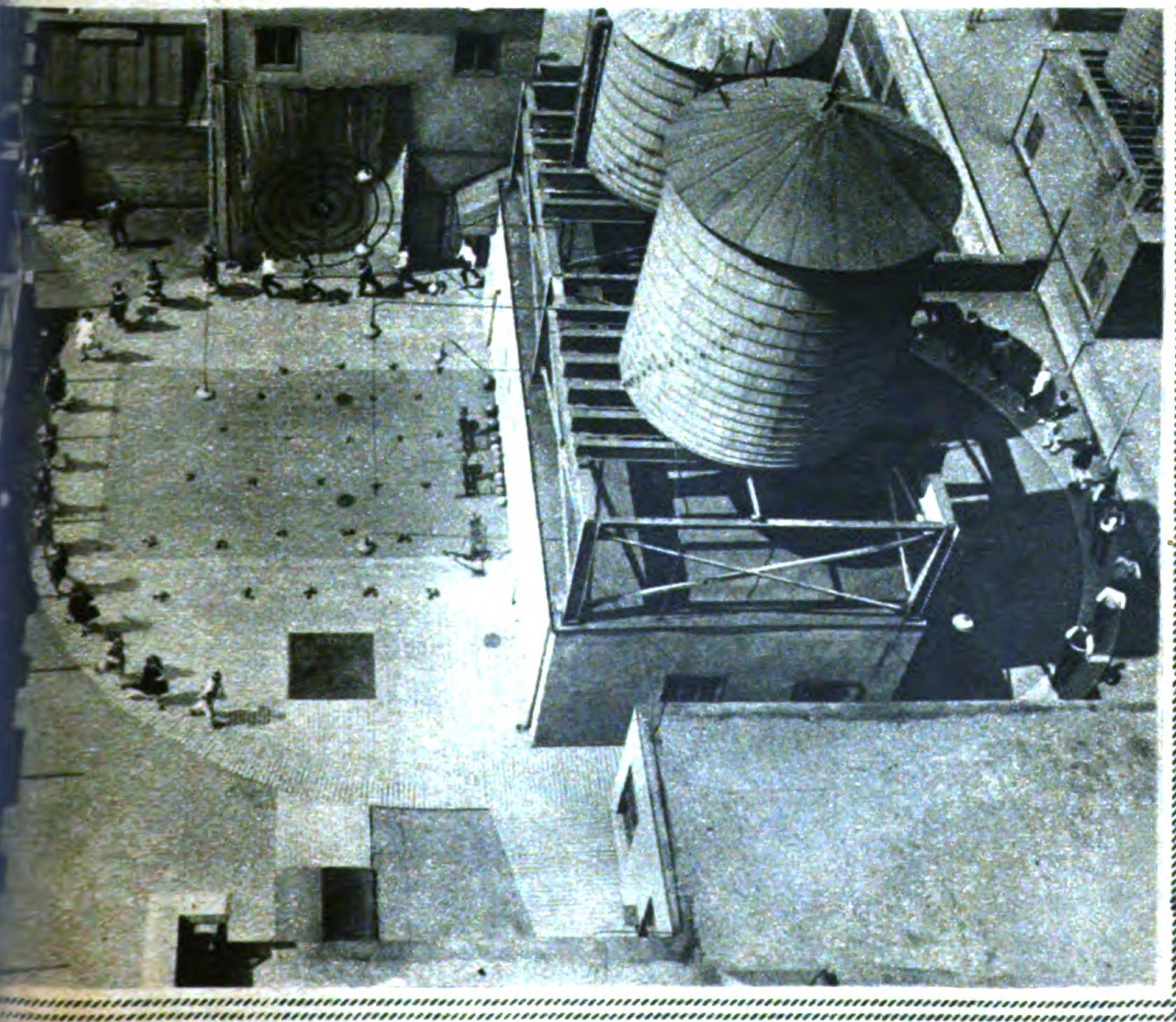
(7)ゴロ〱轉がしておけは邪魔になるばつかりの空樽も、使ひやうでは(7)立派なポチの住宅になります。(8)そればかりか南洋のチャールス島ではこの空樽が岸に突立つて、ポストの役目をしてゐるといふのも面白い話。

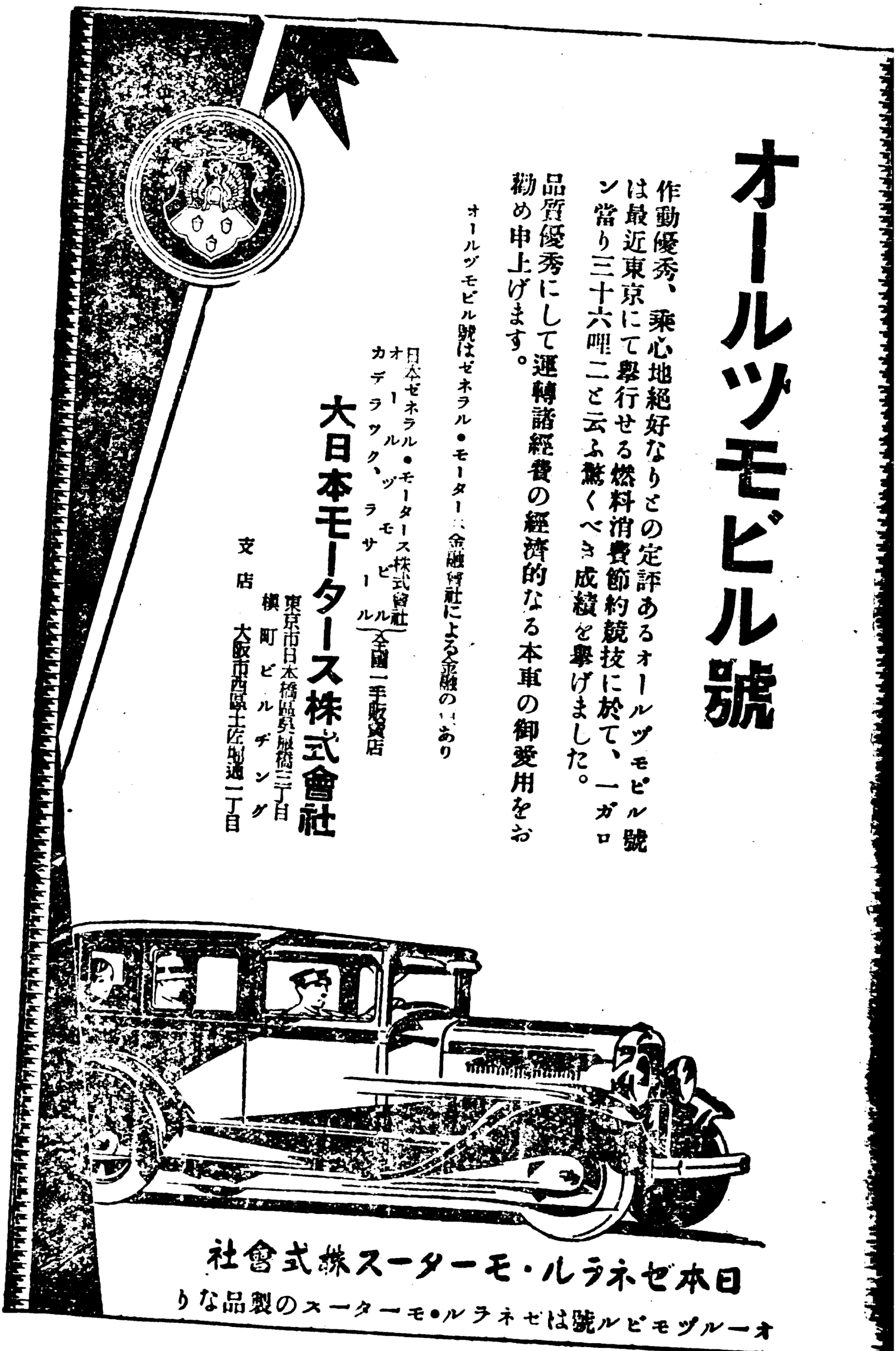


⑦ ⑧

世の中がどん〳〵開けるのは誠に結構。富士山に別莊が出來たり、巴里のオペラが居ながら見られるのもよいが、都市文明には又それ相應に惱みがある。日光を奪はれ、よい空氣を奪はれ、歩行の安全を奪はれ、靜寂を奪はれる等々數へれば際限がない。寫眞(上)は四六時中喧噪に惱まされる都會人を雜音から救はんとする獨逸の宣傳ポスター。(下)は尺寸の空地もない紐育に出來た屋上運動場。お休憩の時間にはみんな此處に集つて子供の樣に飛廻つてゐる。






オールヅモビル號
作動優秀、乗心地絶好なりとの定評あるオールヅモビル號は最近東京にて擧行せる燃料消費節約競技に於て、一ガロン當り三十六哩二と云ふ驚くべき成績を擧げました。
品質優秀にして運轉諸經費の經濟的なる本車の御愛用をお勸め申上げます。
オールヅモビル號はゼネラル・モーターズ金融會社による金融の途あり
日本ゼネラル・モーターズ株式會社
オールヅモビル
カデラツク、ラサール
全國一手販賣店
大日本モータース株式會社
東京市日本橋區呉服橋三丁目
槇町ビルヂング
支店
大阪市西區土佐堀通一丁目
日本ゼネラル・モーターズ株式會社
オールヅモビル號はゼネラル・モーターズの製品なり

肺病や肋膜は養生次第で必ず癒る

ドクトル　尾山瑞雄

肺病や肋膜炎は養生次第で必ず治すとのできる病氣であります。それにも拘らず、世上肺病に惱める人々の多いのは何故でせうか？それは病者自身が適確なる療養上の知識をもたないのと、今一つには療養上最も大切なる藥物の選擇法を誤つてゐる爲であります。實に現代は肺病藥の洪水時代とも言ふべく、その數は驚くべき多數に上つてゐます。けれども頑強なる結核菌に對して、眞に徹底的の作用を及ぼし、肺病を根治に迄導くに足る藥物は、なかなか得難き實狀なのであります。

私は藥物研究の爲、米國に數年間留學いたしまして、只管理想的肺病藥の完成に苦心努力いたしました結果、幸ひにも此れならば誰方にでも責任を以てお奬めのできるといふ、最も理想的且合理的なる新しき藥物の御製に成功することができたのであります。それが卽ち『ツベルシン』であります。この『ツベルシン』が從來の諸種の肺病藥に比して最も勝れたる特徴は、實に左の三つの點にあります。

（一）結核菌の蠟樣皮膜を溶解してます〳〵喰菌作用を促すのに著しき効果がある。

（二）結核菌を孤立せしめて諸他の病原菌との混合傳染を未然に防止する。

（三）菌體の毒素を稀釋して患者の最も恐るべき身體の消耗衰弱を喰ひ止める。

以上の三大特徴は、從來の肺病藥には絕對になかつたもので、獨り『ツベルシン』のみが有するものであります。故に本劑の服用に依つて先づ患者は著しき食慾の增進を覺え更に連服する時は、最も短時日のうちに體力の恢復に伴うて熱は下り、盜汗もかかなくなり、咯血や血痰もピタリと止り、次第に血色も生々となつて、今迄減る一方であつた體重もメキメキと增加して來るのであります。然も『ツベルシン』はその藥效の著しいのにも關らず、從來の肺病藥に有勝の危險なる副作用等は絕對にありませんから誰方も安心して服用を續けて頂くことができるのであります。（『ツベルシン』に就ての更に詳しい記事はキング昭和四年七月號三四八頁八月號二六〇頁を御參照くださいませ。）

最後に私は理想的肺治療藥『ツベルシン』の創製者として、世の肺病者諸氏へ大なる確信を以て本劑の御試用をお奬めいたします。事實こ の『ツベルシン』の服用に依り、初期の輕症患者は言ふまでもなく、二期三期の重症患者で、今迄に全治の悅びを得てゐられる方は、多數に上つてゐるのであります。されば現に肺病でお惱みの方々は勿論、肋膜や肺尖加答兒で御心配の方も治癒困難の腸結核等の方も、どうぞ一日も早く『ツベルシン』の服用に依つて永久に病苦の境から逃れていたゞきたいとお祈申上げる次第でございます。


心機一轉 大發奮驚嘆物語

水難から意外の出世

大河内雨城

『平助、これッ、平助!』

『へえ〳〵、何か御用でがすかネ?』

のらり、奥庭の縁の處へ顏を出したのは二十二になるおでこ。つい二年程前房州の片田舍から飛出して來て今の主人、佐藤幸之進に拾はれた下男である。中國の浪人とかで四十近くになるが、妻もなく子もない風來人。その主人に仕へて、飯を炊く、庭を掃く。買物、使ひ走り。そして給金を貰つてたのだ。

けふも主人から『これな、本所の土岐樣まで…』と言つて、手紙を渡されると、彼は二つ返事で谷中の住居を出た。そして、竹屋の渡しから船に乘る迄は何事もなかつたが、船が對岸について、彼が下りようとした時である。突如襲つて來た波頭に、危なく足をさらはれる處。ハズミに主人の大事な手紙を川中へ落してしまつ



た。サア大變と、彼は蒼くなつたが、幸にそれは船頭の機轉で、救ひ上げて貰つたが、見れば表も中もグショ〱のずぶ濡れ。據ろなくそれを堤の石の上に展げて日に乾かしながら、平助が煙草をふかしてると、

『おや、妙な事がそれに書いてある樣だが、お前さん、平助と言はッしやるかな？』

唐突に後から、それを眺めてゐた旅僧に訊かれて『へーえ、どんな事が。』と反問すと、

『この程、拙者新に手に入れて貴公にお預けしといた新身の一刀、あれで此の使ひの平助を斬捨て、その斬味を試し見てくれ。』

と云ふ意味が、士岐宛に認めてあると云ふのではないか。

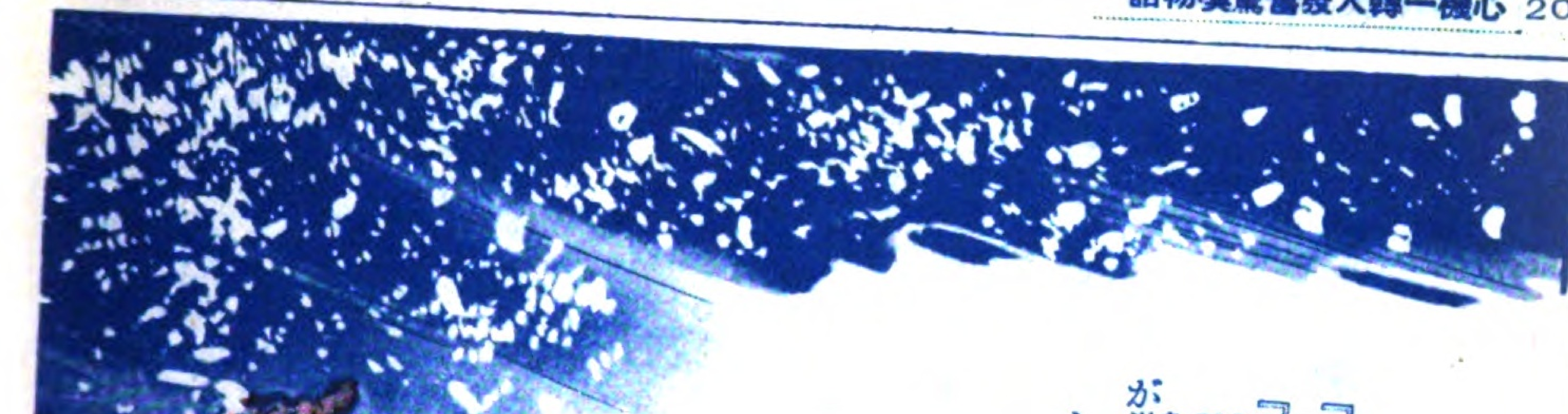
『や、それぢや此の俺の首を。畜生、覺えてゐやがれッ。』逆上たか平助、血相變へて飛出したが、その復讐に出かけた譯でもない。

『あの坊樣に見て頂かなかつたら、無學の俺、今頃はお陀佛だつた。よし俺もやるぞ！』

さうして住み込んだのが、牛込の工藤と云ふ手習師匠の家。それから血塗ろのやうな幾變轉。師を更へる事三。竟に十三年目の彼三十五の春には、驚くべし、いろはのいの字も知らなかつた彼が、それで飯を食ふ――越前福井家のお上祐筆となり、名も堀田景洲と更めて、食祿三百石といふ破天荒の出世をしてゐたのである。

（小山榮達畫）





不良少年から大宗教家

池田宣政

『ちえつ、貴様のやうに、何處へ奉公に出しても尻の据らないやうでは行末一體何になる積りだ。』

『海賊になるよ。』

言下にさう答へて父親を吃驚させたサムエルはその時十歳だつた。竊盜、かつぱらひ、萬引とサムエルは年と共に惡智惠が進んで來て廿歳の頃には海賊同樣の密輸入船の乘組員となつて法網を潜つてゐた。

ところが廿二歳の冬の事である。荒れすさぶ暴風雪のためにサムエルの船は暗礁に乘り上げた。しかも暗夜の出來事で、怒濤は逆卷き、北風は氷の刄のやうに痛かつた。船は刻々に沈む。けれども不正の貨物を乘せた船は救助信號の灯を上げることも出來なかつた。乘組員は逸早くボートに飛移つたが寄せ來る大波に襲はれてボートは忽ち微塵となつた。やうやく海岸に泳ぎついた二三人は疲勞と寒さに氣を失つた。陸上の同志がそれを秘に介抱した。と、急にその内の一人が飛起きて、

『許して、許して、神樣、許して。』

けたゝましく叫んだと見る間に物狂ほしく暗の砂地を駈け出した。それは誰あらうサムエルだつた。

サムエルは失神して居る間に自分の靈魂が地獄の門に悄然と立つてゐる幻を見、毅然としてハネ起きたのであつた。一旦の死から蘇つたサムエルは今迄のサムエルではなかつた。死後の生活を信じた。神の存在を信じた。信ずれば自分の無智と邪惡の心が恐ろしくなつた。

サムエルは先づ靴職工となつて眞面目な生活を始めた。そして閑を盜んでは讀書した。

『讀めば讀む程自分の無智が解つて來る。』



さう云つて勉強した。靴を作りながらも食事をしながらも傍の書物に目を走らせた。『貧乏で胃袋を空にして眠つた夜は度々ある。けれど一日として心に何かを入れずに過したことはない。』とサムエルは云つた。

後年『靈魂不滅論』の大著述をなして學界に英名を馳せたサムエル・ドリウはこの人である。

（富田千秋畫）

鬼子母

赤松月船

鬼子母はこれまで何十人何百人といふ人の兒をさらつて奴隷に賣つた――恐ろしい殘忍極まる女であつた。

ところが或る日、外へ出かけて歸つて見ると留守の間に、目に入れても痛くない程可愛い末の兒の姿が見えなくなつてゐた。

『さあ、大變！』鬼子母は半狂亂になつた。これまで多くの母親達を突き落した悲しみの地獄に今度は自分が突き落されねばならなかつた。髪をふり亂し泣き叫び乍らわが兒を探し廻つたが影も形も皆目わからぬ。鬼子母は絶望のあまり氣を失つて了つた。……

聲がする、『鬼子母、鬼子母。』としきりによばれてゐる。鬼子母はぱつちり目を開けた。

『お丶氣がついたか』其處には釋尊が佇つて居られた。

『わたしの兒は……あ丶わたしの兒は何處に居るでせうか。佛様、どうぞお願ひです。わたしの兒のありかを教へて下さいませ。』

鬼子母は又しても咽び泣いた。そして釋尊に縋りついた。

『鬼子母、お前は悲しいか。』『子供が居なくなつたのです、どうして悲しまずに居られませう！』『わが兒といふものは誰しも可愛いものと見える。』『佛様、仰しやるまでもありませぬ。』『だが、鬼子母、その可愛い子供を――人の子供を、お前はこれまでどうして來た。』



その言葉はメスのやうな鋭さで鬼子母の胸に突き刺さつた。

『世の母親はみんなお前のやうに悲しんだのだぞ。』

釋尊は嚴かに仰せられた。

『何といふわたしは恐ろしい女だつたのでせう。』鬼子母はその場にわれとわが身を投げ出した。釋尊は阿難を呼ばれた。阿難は鬼子母の兒をつれてあらはれた。

『鬼子母、お前の兒は此處にゐる。お前の心を直すために暫く寺へ預つてゐたわい。』

鬼子母はわが兒を抱きしめて雨のやうに接吻した。

それから鬼子母の心はがらりと變つた、今度は世のあらゆる子供といふ子供を護り、力になりたいと誓ひを立てた。鬼は一轉して大慈悲の人となつた。今ある鬼子母神といふのはこの鬼子母をまつつたものである。

（本田穆堂畫）





黑人の一言

鈴木彦次郎

『何を、威張るんだい！　俺らだつて、一當て當てれア、手前なんぞに頭を下げてるもんか。』

使つてゐる黑人のその一言に、思はず、かつとして鐵拳を振り上げた彼の心に、瞬間、或る感じが電光のやうに閃いた。

『さうか、なるほど、さういふもんだらうな』

振り上げた拳を力なく下ろして、じつと考へ込んだ彼の面には、沈痛な反省の色が漂つてゐた。だが、思慮もない黑人は、主人がへこんだのを見て『さまア見ろ。』と云はんばかり、またのろ〳〵と仕事を運んでゐる。

所は南アフリカの一角、丁度十九世紀の中頃の事、此の邊に、金剛石が無盡藏に貯へられてゐるといふので、世界中の山師が、爭つて此地に入り込んでゐる時代だつた。

彼セシル・ローヅも、病氣で學校を半途で止め、此地へ保養に來てゐる內、偶然にも金剛石の鑛脈を發見したので、今は小成金の一人となりすまし、黑人をこき使つて



は、金儲けに夢中になつてゐたのだ。だが、彼は遂に平凡な山師ではなかつた。此の黒人の暴言は、深々彼の心を刺激した―

『成程、鑛脈を掘當てる事は單なる偶然に過ぎない、それは無智な黒人でも幸運でさへあれば出來る仕業だ、だが、眞の大業は實力に基かねばならぬ。偶然は誇るに足らぬ。偶然に頼つてゐては黒人にさへ馬鹿にされる。僕は此際一層實力を養成すべきだ。』

から悟つた彼は、一切の仕事を管理人に頼み、飄然として英國に歸り、再び一介の學生となつて、數年の間科學の研究に耽つた。

かくて、實力を養つた上で南阿に戻つた彼の活動は、實に目覺しく、その結果、南阿の奈翁と呼ばれ、十九世紀の偉人として仰がれるに至つた。

（石井朋昌書）

幻影の雲晴れて

眞下醒客

千歳はこれまで、自分の父親程偉いものはないと思つてゐた。なぜなら、彼の家は肥前國鹿島町きつての豪家で、その邊一帶の長をしてゐた關係から、來る者、來る者の悉くが、彼の父を地頭か何ぞのやうに敬ひ、その命を奉じてゐたからである。

その家に生れた坊ちやんだ。荒い風にも當らずに、我儘一杯、甘やかされ放題に、育てられて來た坊ちやんだ。十歳になつても駄々をこねて本も讀まず、お山の大將を決めこんで威張り散らしてゐた坊ちやんだ。世の中のこと何一つ知らずにゐたのも無理はなかつた。

或る日の事である。突然、役人らしい男が彼の宅へ訪れたかと思ふと、慇懃に出迎へた彼の父を散々にこき下ろした揚句、

『それでは近々の中に申付けおいた奉納金、必ず耳を揃へて持參致すやうに。若し違背いたすやうな事あれば、今度こそは容赦はならんぞ！』

さうして、大手を振りながら歸つて行つたのである。

眞に寢耳に水。千歳は不思議さうに母に訊ねた。



『けふ來た人、宅のお父樣より偉いの？』
『ええ、あの方は殿樣からのお使ひだから。』
『お使ひでさへ、あれ程威張るんぢや、その殿樣と云ふのは、もつと偉いんだネ？』
『だが、其の上にはまだ將軍樣があります。』
『ぢや、將軍樣がこの世で一番尊い方なの？』
『いや、その將軍樣よりもつと〱尊いのがある。それは御佛です。』

そこで、母は解るやうに難行苦行を積まれて、漸く佛果を得た彼の釋尊の譚をして聞かせたものである。

と、千歲は躍り上つて、
『ぢや、坊、その佛になります！』

安坐の夢破れて心機一轉した彼は、炎のやうな熱情をこめて父母を動かし、出家して文字通りの苦難の行。

その大志は決して空しからず、新義眞言宗の開祖となられて、多くの人の隨喜渇仰をうけた彼の興教大師こそ、實にこの千歲の後身だつたのである。（川瀨巴水畫）



もつと値打のある仕事を

佐藤正美

一方は絶壁――一方は晝なほ暗い密林である。

菊太郎は今日もやつて來て例の木樵の仕事をはじめた。急な上に石ころばかりの足場、用心し乍ら鋸をつかつてゐたが、向をかへる拍子にずるりと足が辷つた。

危いツ！　と思つた時は身體はもう絶壁の外にあつた。が突嗟に掴んだ藤蔓のお蔭で危くぶらんと下つただけで助かつた。

見下す下は百尺の谷底である。水が岩を嚙んで激してゐる。そのまゝ墜落したら骨破微塵だつた。

『やれ〳〵。』と菊太郎は脂汗を流してやつと這ひ上つて危い命を全うした。今までつひぞ考へても見なかつたが、しかし、木樵といふ仕事は何といふ危い仕事だ、すつかり命がけだ。と、しみじみ考へずには居られなかつた。

何だかもう二度と鋸を手にする氣になれない。菊太郎は腕組をして考へ込んだ。

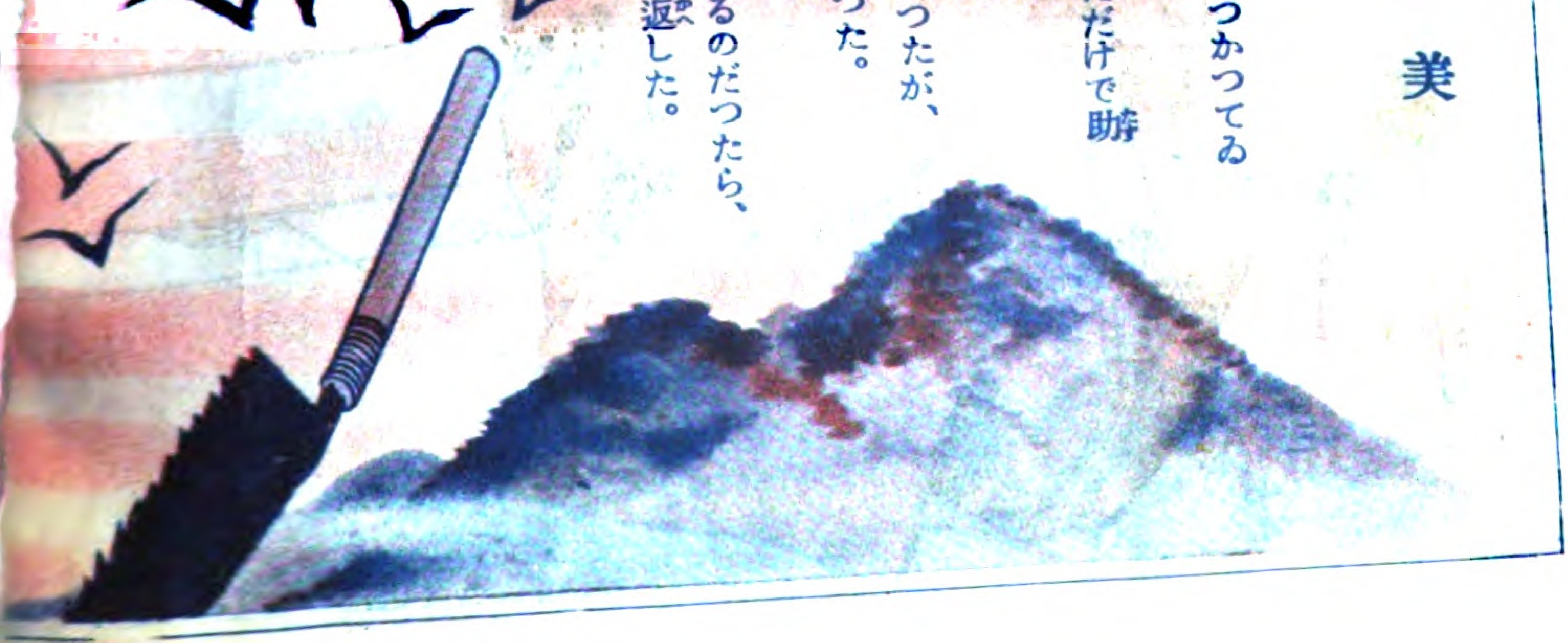
『若し命がけでやるのだつたら、世の中のどんな仕事だつてやれないものはあるまい。又同じ命がけでやるのだつたら、もつとやり甲斐のある仕事がある筈だ。』『さうだ、もつともつと値打のある仕事が。』菊太郎はかうくり返した。

今日の今日までうつかりしてゐた自分の仕事。それが急に眠りから目が醒めたやうにはつきりと意識に上つた。

東京へ出よう――から決心して信州の山奧から菊太郎は都へ出て來た。

福澤諭吉氏をたづねたが、山男の風體を見てとつた書生、どうしても取次をしない。二日三日追ひ拂はれても斷わられても玄關ににじり坐つた。到頭、願ひがかなつて諭吉氏に逢ひ、玄關番として置いて貰ふことになつた。書生をし乍ら晝夜となく勉學に熱中した。

菊太郎、それは何人であらう、西澤菊太郎





氏。後に青山師範學校の校長になつた人である。

（神保朋世畫）

番頭の一喝商業界の大革命

井關十二郎

クリスマスは明日に迫つてゐる。

ジョン・ワナメーカーは、汗と努力で漸く貯へ得た二圓ばかりの金を持つて、ペンシルバニヤのとある寶石店の前に立つた。

金は僅か二圓――だが貧しい彼れにとつては何十圓、何百圓にも相當する大金であつた。あれかこれかと、母親におくるクリスマスの贈物を探し求めて、此の寶石店まで來たのであつた。ワナメーカーは店に入つて一つの指環を買求めた。

彼れは急に明るい氣持ちになつて、外に出ようとすると、フト傍に指環よりも更に相應しい品を發見した。それで急いで引返し、

『番頭さん。甚だ濟みませんけれど、此の指環とあの品を變へて頂けないでせうか。』

彼れは恐る恐る哀願して見た。ところが番頭は、

『何を馬鹿な事をいふんだい。一ぺん賣つた品物が取換へられるかい。』と剣もほろろの挨拶である。ワナメーカーは詮方なくその店を出たが、その時彼れの頭をかすめたものは恁ういふ事であつた。



『これが一體お客に物を賣る本當の仕方だらうか。商賣といふものはこんなに不親切、不便でよいものだらうか。』

番頭の一喝は、若いワナメーカーに非常な刺激と發奮を與へた。彼れは苦心慘憺の末、二十二歳で九尺間口のさゝやかな洋服店を開いた。

そこで毎日お客様本位、親切第一を旨として一生懸命商賣に精を出した。

後年米國の百貨店王として、又人格者として、世に喧傳された大實業家ワナメーカーこそはこの見すぼらしい洋服店の主人であつたのである。

（吉郁二郎畫）





河原乞食から儒者

石川北山

『泣いても五十年、笑うても五十年、酒は飲めるし、女には可愛がられるし、この世の中に役者程いゝ商賣はないな。』

河原乞食と蔑まれたつてそれがなんだ、武士で候の、蜂の頭で候のと威張つたところで、主君のその日の機嫌次第で、腹も切らねばならぬし、命も捨てねばならぬ、我身であつて我身でないいはば僅かばかりの祿といふ餌で飼はれてゐる籠の鳥も同樣ぢやないか

――宇井小一郎は、そんな氣で役者になつた。

もとは侍で才智がある上、美男だから、ぐん〳〵藝が伸びてゆく。それで當人はすつかりいゝ氣持になつてゐた。ところが、或日師匠の瀨川富十郎に呼ばれた。師匠は嚴肅な顏で、

『お前さんの樣子ぢや、日本一の名優にでもなりたいやうな勉強振りだが……』

『はい、なれるものなら、なりたいと思つて居りますけれど』

『まことにお前さんには氣の毒だが役者には、藝の外に家柄が要る、それに中年者ぢや、どうかと思ふが。』

いはれて、小一郎ハッと氣がついた。今迄有頂天になつてゐた彼れにとつて、師匠の一言はガンと頭をどやされたやうに響いた。

『さうだ、この世で、自由に力を延べ得るのは唯學問の外はない』。富十郎の言葉の言外の親切を悟つた小一郎は、直ちに役者の群を脫して、服部南郭の門に入り、專ら李王の業を學び、苦心慘憺、天晴れ儒者となつた。遂に默齋と名を改めて、嘗つて彼を放逐した土井侯より師禮を以て迎へらるゝ身分に出世した。

（大橋月畝畫）

「フケぬけ毛をピッタリ止める」

日本に初めて出來た理想的完全品

クイン一ツて香油とポマードの代用になる

フケが多くて頭が痒い程氣持の惡いものはないのみならず、フケは非常に毛髮を荒しますから毛髮は自然榮養や發育を妨げられて段々赤細くなり艶を失ひ遂には脫落して了ふ、男女を問はず頭髮の拔けたり白毛が出來る程淋しい感じのするものはない。

フケや拔毛は單に毛髮を洗つたり粗雜なフケ止液や在來の怪しげな毛生藥を振りかけた位では何の効果もないばかりか徒らに安價なアルコールに刺戟されて毛質及皮膚面を害する事も實に甚しい。

唯一度でピッタリ止る

本社が特に推薦する『クイン』は純植物性毛髮榮養料を主としてあらゆる科學の原理を應用し超人的な方法に依り精製された事は申すまでもなく、その不思議な作用は皮膚の深部にまで及びフケの發生をピッタリ止めてしまひます。

一度用ひると二十日間はどんなにひどいフケでも全く嘘のやうに止り常用すれば漸次少くなつて數回後にはあれほどヒドかつたフケ拔毛が全く根本から取除かれて氣分も自然と晴々して參ります。

而も奇妙なことは若はげ髮が薄く切れ易く光澤のない方などが常用すれば必ず一切の惱みを拭ひ去つて眞に一點のフケもなくなり若々しい漆黑な生き生きした頭髮を保つ事が出來ます。

ポマード・香油の代用に

又重寶な事に『クイン』はポマード代用になりますから平素ポマードや水油を御用ひになる方もこの『クイン』一つで何にも入りません（勿論香油と併用するも可）頭髮を短かくして居られる方に使用して三四時間後に直ぐ洗ひ落してもその効果は變りなく然も粘つく事がないから用ひた後の爽快さは又格別でその中に含有する高貴な香料は馥郁として身に迫りそれが如何にも氣高い趣味と深い教養を象徴するために上流階級の方々は爭うて愛用して居ります。

德川伯爵御夫人の如き口を揃へて、このクインの實効を賞揚なされ『外遊中なか〳〵良な頭髮化粧品がなくて困りましたが、今回贈られたクインは全く說明書と寸分違はぬ不思議な効果に驚いた、然もサラ〳〵して少しも粘付かず拔毛もピッタリ止つて本當に晴々しました』と尚鶴見祐輔代議士も「私は頭が痒くなると止め度もなく痒くなつてたまらぬ程ヒドイフケ性なのにこのクインのお蔭で忘れた樣に恢復しました』と喜ばれて居ります。

頭髮病を防ぎ毛質をよくする

新發明のフケ拔毛止『クイン』を一度用ひて二三分すればすべてのカユミを忘れ不快味を一掃しフケや拔毛を完全に止めます。又あらゆる頭髮病を防ぎ完全無害に純良な頭髮を生育する作用のある事は全く之までに見る事の出來なかつた科學の力で正に實驗した記者の體驗より眞に優秀品として切に各位に御すゝめ致します。この新發明のフケドメポマード『クイン』は特に御希望の方へ、お頒ちいたします。たゞ御斷りいたしておきますことは、多くの原料のうちで、容易に得難い一品があつて一回の調製數に限りある由でありますから、品切れになりますと、約四十日間はお待ちを願はねばなりませぬ故お申込はお早くお願ひ致します。

お値段は一圓と一圓八十錢頭固用二圓五十錢の三種、送料は三個まで内地十二錢海外は三十錢迄五十錢で、東京市本郷區駒込坂下町四八大日本雄辯會講談社代理部振替東京六六二九番でお頒ちいたします。

大日本雄辯會講談社 代理部雜貨案內

新發明器 ポケット レヂスター
算盤兼用萬年手帳



之は某知名の實業家の發明になるもので、萬年ノートと算盤を兼ね大、活社會に活躍するビジネスマンの必携品である。

◇**大きさ**・縦二寸横三寸二分厚さ二分五厘最少の手帳位

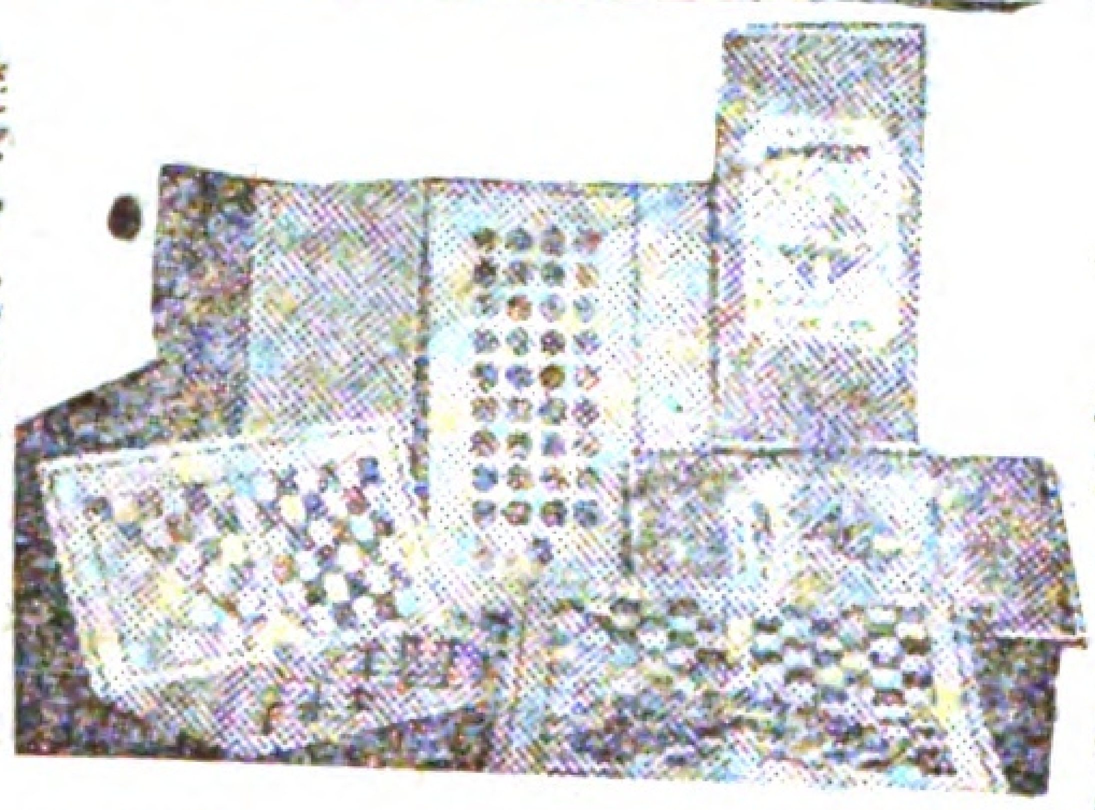
◇**體裁は**・堅牢優美のセルロイド製で寫眞の様にケースから抜き出すと二枚のメモと小型の算盤が出ます

◇**鉛筆も**・付いて居りますからその場で直ぐ計算する心覺えを書き直す事が出來ます

◇**メモ板**・は萬年手帳の役目を兼ねた上等セルロイドですから絶對汚物や破損の心配がない金箔歐文入のトテモモダンです

定價一圓三十錢 送料 内地十二錢 海上五十錢

盤上野球 クロスゲーム



遊び方説明書付
壹組壹圓 送料十二錢

素敵に愉快だ!!

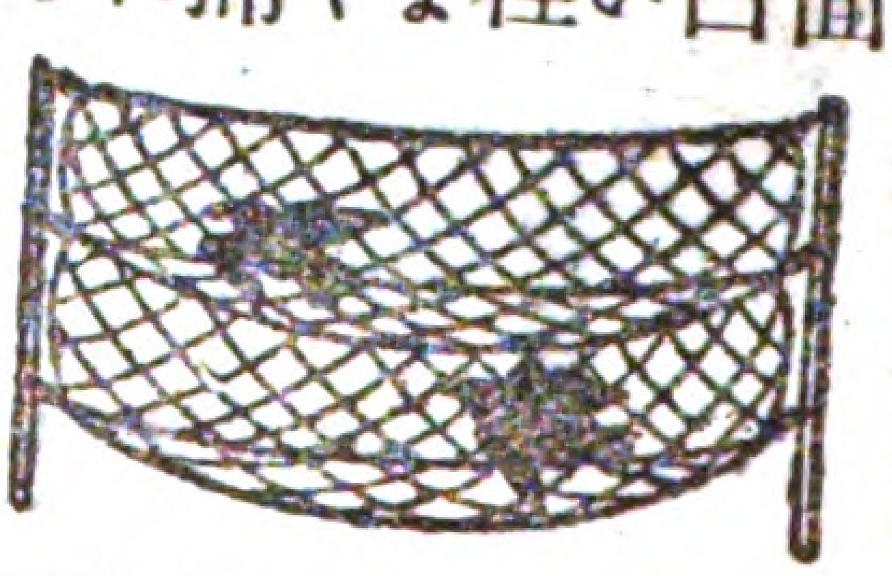
五人でも、三人でも、二人でも!!

家中揃つて樂しく遊べる

ストーブの前で、おこたの上で、野邊の芝生で、汽車の座席で何處でも、お父さんも母さんも兄さんも姉さんも弟も皆揃つて愉快に遊べる高尚な遊戲です。折疊式上等箱入ですから携帶に便利、然も損はれる心配のない優秀品。殊に競技盤上で可愛い純眞そのもののランナーの活躍には自づと心が躍ります。

我國特有の捕鳥用カスミ網

面白い程よく捕れる



只張つて置くだけで雀類白等の小鳥が面白い程よくとれる純絹絲製の捕鳥網です。それに少しの危險もありませんから庭園内でも自由に用ひられます

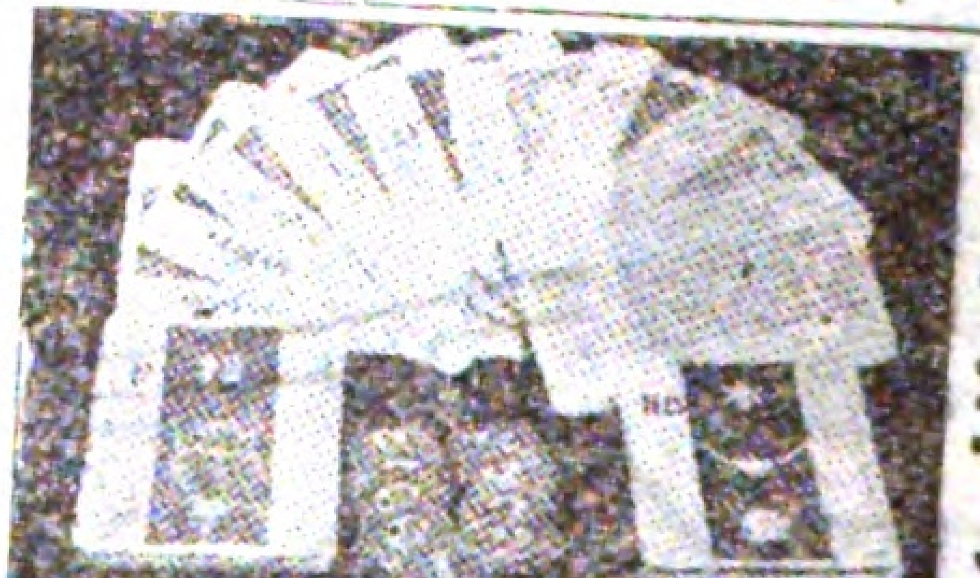
六分目二棚網 長六間 高六尺 八圓八十錢
長三間 六尺 四圓五十錢
送料内地十五錢 領土五十錢

SN式携帶用顯微鏡
倍率正確 萬年筆形ポケット用



萬年筆大のものでポケットに入れ携帶することが出來何時何處でも使用する事が出來ます。然も價がズハ抜けて安く、倍率が正確で使用に少しの面倒がなく構造頗る堅牢永久的使用に堪へる便利品。トテモ他の顯微鏡や擴大鏡の比ではありません。二百倍二圓六十錢、三百倍三圓六十錢・壹千倍七圓六十錢、送料内地十五錢、外五十錢

素敵に面白い卓上遊戲 野球カード
一名(卓上ベース)



このカードが諸君の代りになり卓上で投手になり打者となつて自由自在に活動致します遊び方は普通の野球と全く同じですから、野球をやつて居る以上に實に愉快なものです。

一組遊び方付 **七十五錢**
送料十二錢 海外は四十五錢

三十餘種の競技が出來る オリンピック競技カード



總計五十八枚のカードを組合せますと五種、十種競技は勿論實に卅餘種の競技が出來ます。二人以上何人でも結構又オミツト一枚の使ひわけから微妙な働きを生じますのもこのカードの特長です。

一揃(説明書付)價一圓廿錢 送料十二錢

東京市本郷區駒込坂下町四八
大日本雄辯會講談社代理部
(振替東京六六二二九番)


コロムビア蓄音器
「キング」は雜誌の王(キング)
コロムビアは‥‥
蓄音器のキング
其の製品は‥‥
絶對權威ある優秀無比の逸品
ニユープロセス　コロムビアレコード
針音のない
にはコロムビア蓄音器が最適
最新型 百二十一號
正價 金百貳拾五圓也
本器の外‥‥‥‥‥‥
六拾圓以上三千二百圓迄各種
御買上及型錄は‥‥‥
最寄の蓄音器店で
Columbia
日本コロムビア蓄音器株式會社



奇獸・怪魚・珍草博覽會

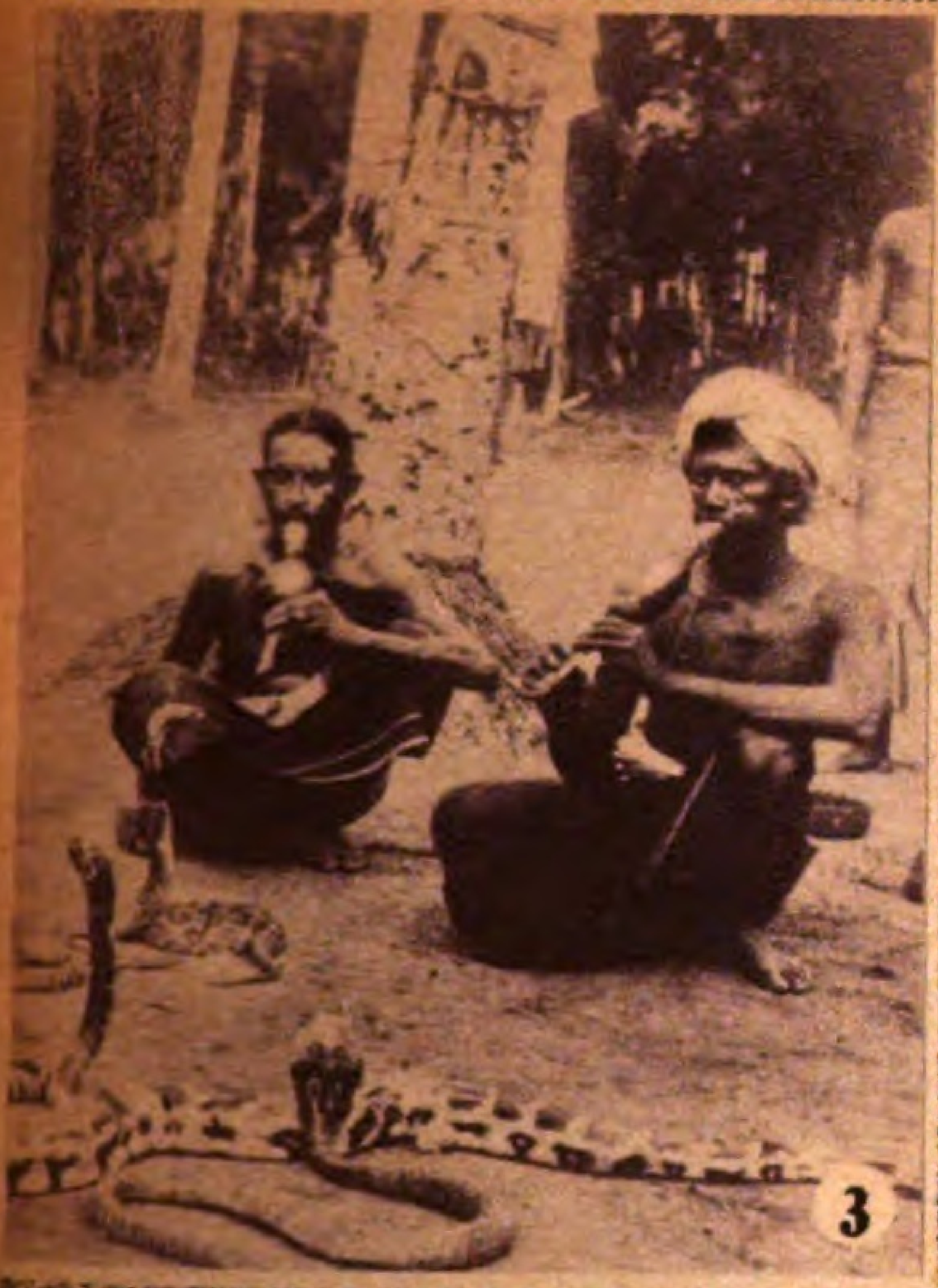
寫眞説明

これは北米に棲む猛鳥みさごであります。水中の魚を捕ふる時の物凄さは、見る人をして驚嘆せしめてゐます。

普通の鳥類は、嘴を水中に突入れて魚を食べますが、みさごは魚の影を水中に認めるや否や、電光石火の如く驀進し、間一髮の早業を以て鋭利な兩足の爪で魚を掴みます。それ故『捕魚鷹』といふ別名があります。

頑丈な脚、尖つた嘴、人を食つたやうなその面魂を御覧下さい。







(1)**狐猿**――これは南洋に棲む珍らしい狐猿です。栗鼠よりも小さく、晝間は眠つて夜ノコ〳〵出かけます。大きな眼玉、ピンと立つた耳、長い尻尾、平たい爪、みんな特長があります。

(2)**食蟻獸**――木の枝によい氣持で休んでゐる南洋のありくいひです。尖つた口で、丹念に蟻ばかり食べて暮してゐるとは妙な動物もあつたもの。

(3)**コブラ**――妙なる笛の音につれてヌーッと鎌







首を擡げてゐるのは印度のコブラといふ蛇。後頭に人の顏のやうな紋樣のあるのも奇拔です。

(4) **大熊**――米國ロッキー山中に於ける大熊と豹との物凄い爭鬪であります。山羊の奪ひあひから、鮮血を流して戰つてゐます。

(5) **鰐鳥**――これは鰐と小鳥とのキッス？ ではありません。鰐の齒にはいつも餌の滓が溜つて居りますので、今鰐鳥がそれを頂戴したり、齒のお掃除をやつたりしてゐる所です。



2



1



5



3



4

(1)珍型蟋蟀――馬ぢやないかしら？と一寸欺される程よく似てゐるのは、獨逸地方に棲む變つたバッタの顔です。

(2)蟻の會議――アフリカの蕃地に、非常に團結力の強い大黒蟻が棲んでゐます。御覧の通り時々圓陣を作つて大會議？を始めます。

(3)人か猿か――一寸判斷のつかない此の顔は何を隱さう一種の蠅の顔です。(4)の猿の顔とよく御比べ下さい。

(5)チユニスの奇觀――北アフリカ、チユニス地方には、寫眞のやうな珍らしい光景が見



6



8



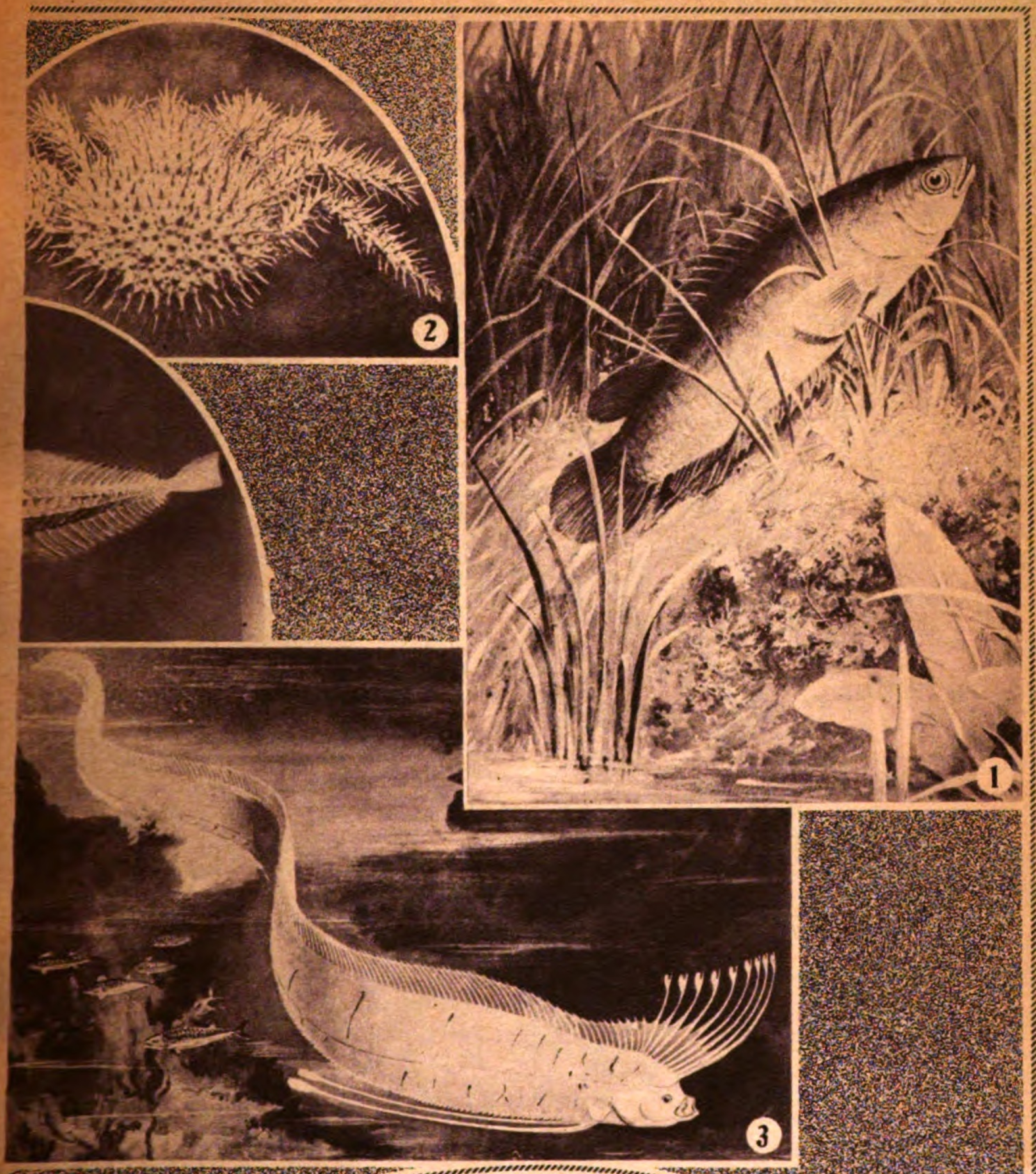
7

られます。幾千幾萬と數知れない紅鶴の群が妙な土饅頭の上に今産卵してゐる處です。

(6)天然酒――メキシコ地方では龍舌蘭の葉にある液からお酒を造ります。今一人の土人が大きな葉から一生懸命その液をしぼつてゐます。

(7)輕便ボート――南米のアマゾン河その他の地方にある大きな蓮の葉は人間が乘つても沈まないとは大したものではありませんか。

(8)世界一の花――南洋スマトラの森林にある花は世界一です。直徑實に一米、重さ五キログラムとは嘘のやうな話です。



(1)**木攀り魚**‖出來ない相談によく『木によつて魚を求むる』といふ譬がありますが、これこそ本當の木攀り魚です。鰓に生えた刺で前進します。

(2)**櫂魚**‖翩々として海草のやうに水中を泳いでゐるのは大西洋の櫂魚です。胸の鰭は申譯ばかりしかありません。

(3)**海中の山あらし**‖この恐ろしい刺を持つた怪動物は、日本の近海に棲む石蟹です。こんな鎧冑を着てゐられてはウツカリ近寄れません。

(4)**深海の怪魚**‖深海には種々の不思議な魚が棲んで





6



4



5

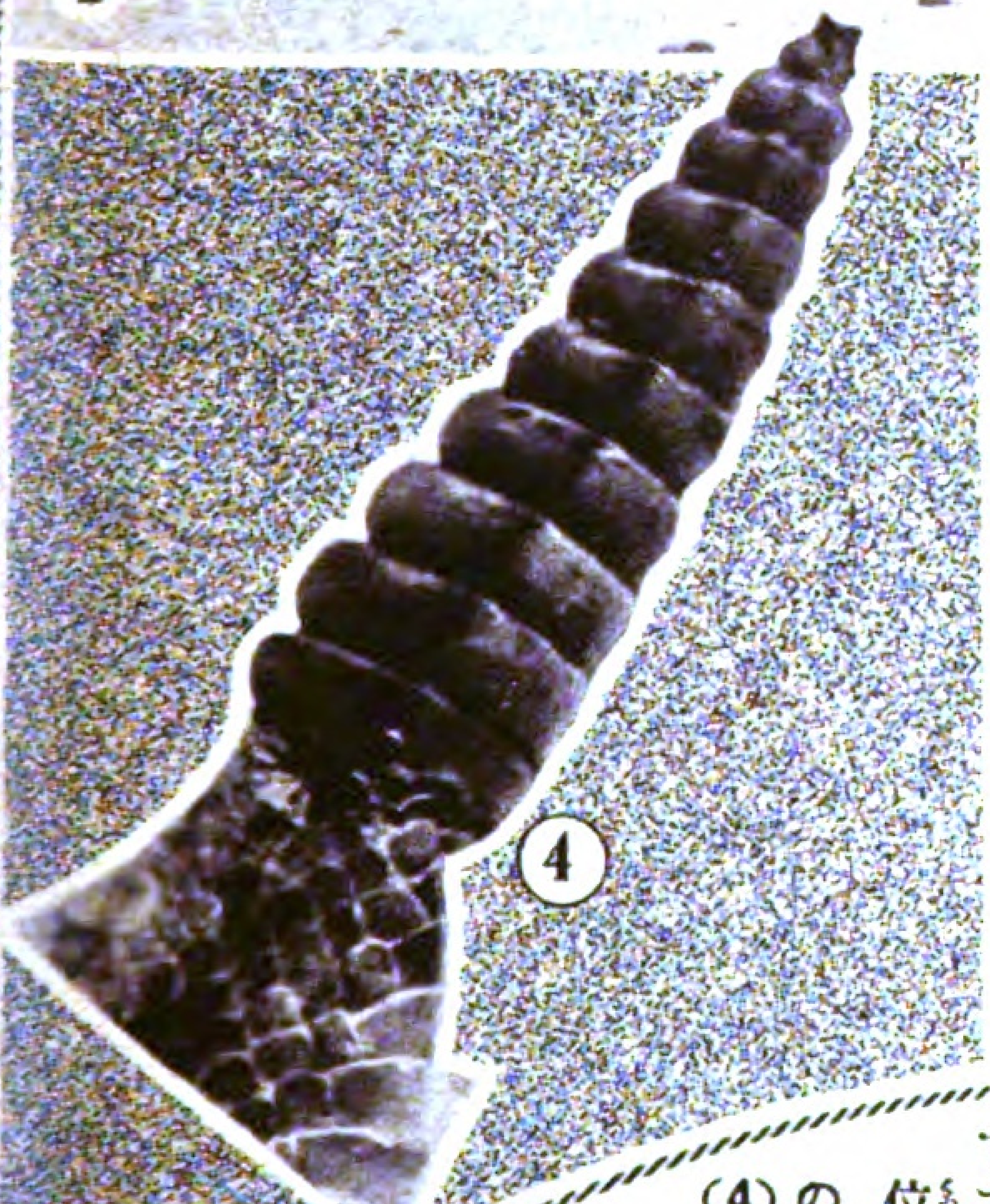
ゐますが、これも、その一種です。一寸見たところ骨ばかりのやうです。

(5) **魚釣あんかう**――世界中で一番怠けもの〻あんかうです。恁うやつて大きな口を開けて海底にじつとして居り、鼻先に餌のやうなものを動かして巧みに小魚を近寄せ、パクリと食べて了ふとは考へたもの。

(6) **槍の達人**――これはかぢきとほしです。鼻先が、槍のやうに鋭くなつてゐて、猛襲一番敵を突き刺して斃すといふ恐ろしい魚であります。







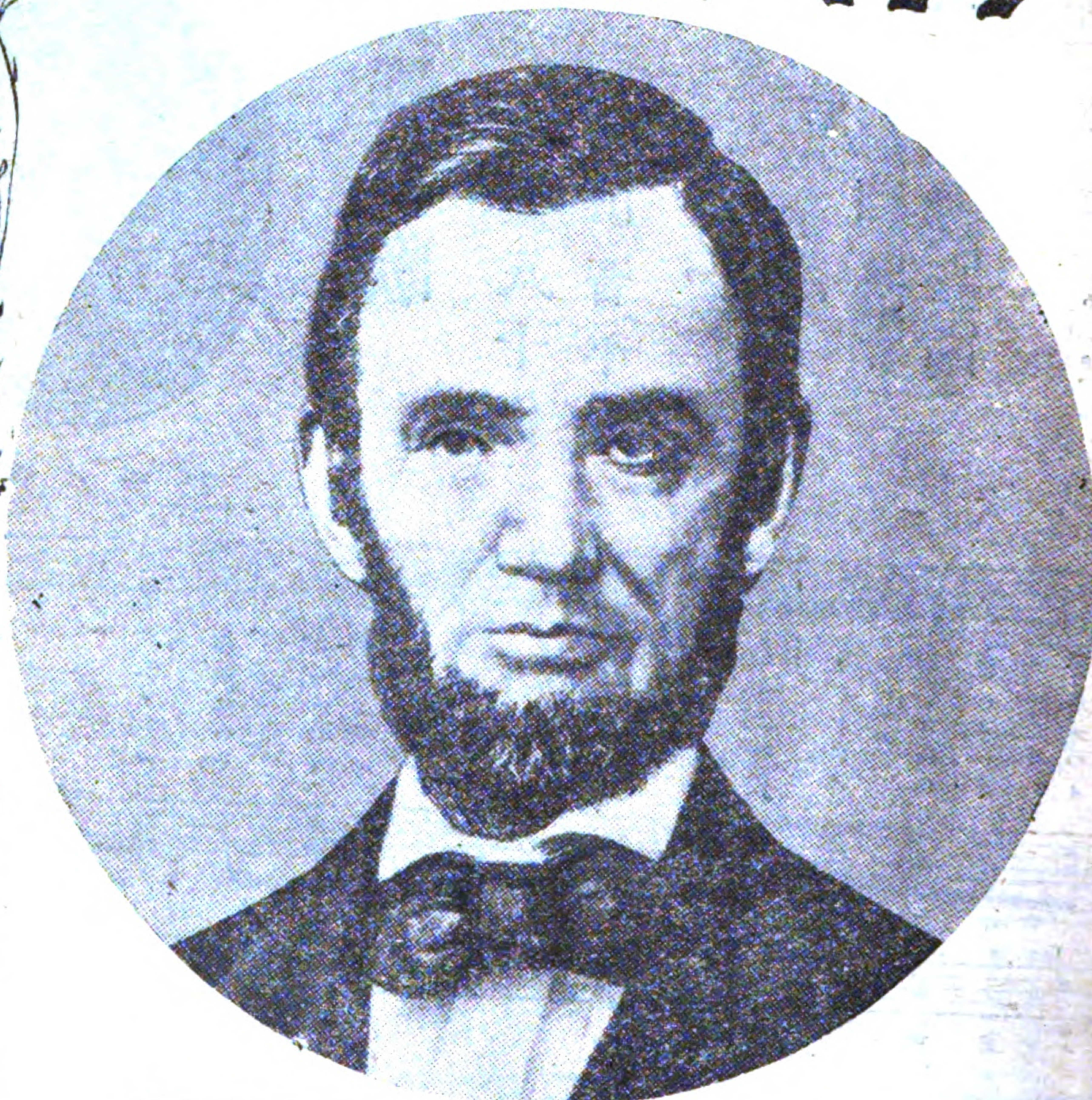


(1) **年中ブランコ**——これは南洋に棲むオッポザムといふ珍動物。年中長い尻尾を木の枝に巻きつけてぶら下がつてゐる呑氣者です。

(2) **鬣蜥蜴**——これも南洋特産の蜥蜴です。背中にはズーッと鋸のやうな鬣がついて居ります。

(3) **マラソン兎**——寫眞はアフリカ豺に追はれてゐる跳兎です。一躍二十尺から三十尺位ジャムプするといふ駿足の持主です。

(4) **尻尾で鈴**——米國のガラガラ蛇は尻尾で鈴のやうな音を立てます。尻尾には寫眞のやうに中空の輪が幾つもついて居ります。



リンカーン

爭つてはいけない。いやしくも大志あるものは、個人的の爭ひに時と力を空費してはならない。況んや、怒の爲めに自制心を失ひ、結局種々なる禍を他人にも自分にも與へる如きは、思慮ある者のなすべきことではない。

假令、重大な事件について爭ひが生じた時と雖も、若し、唯、自分に對當の權利あることを相手に示すに止まるものならば、之れを棄てるがいゝ。

又、明かに自分に理があつても、小事件であつたなら、之れを棄てるがいゝ。

犬には道を讓れ、之れと權利を爭つて咬まれないがいゝ。たとへ犬を殺しても、疵は癒ほらないから。

眞劍の歌

西條八十作
中山晋平曲



西條八十氏

夏なほさむき眞白刄の
拔きあはせたる切尖に
賭くる生命は白露か
散らば奈落の秋の風。

眞劍

生死の別れ、目の前に
弓弦のごとく緊張めし



（前奏各節每に附するもよし附せざるもよし）

宣傳

この眞劍の心こそ
大事を果す鍵なれや。
農工士商さま〲に
生活の途は別れても
つねに警め、汝が生を
白刃にむかふ心にて。

—

汝が緊張の一瞬を
一日に延し、月に代へ
生く日の限り保ちなば
いかなる業か成らさらむ。



中山晋平氏

力強く(♩＝80)





明治大帝習志野の御一夜

伊東研齋
石川寅治畫

一

御維新となつて、明治天皇が御遷都遊ばされたので、江戸は東京と名を改め、日本の中心となりましたが、さて何の彼のと世の中はまだ騒々しい。

處が、いづれは一騒ぎあらうと思はれた廢藩置縣もまるく收つて、吻と一息した明治の六年、もう上野も向島も葉櫻とな

つた頃ほひ、小網町の西郷隆盛の屋敷では、犬がしきりに吠えたてました。

うゝわう、うゝわう。

△『シッ、シッ、吠えるでねえ』

眞暗な玄關口へ、ぬつと出て參りましたのは下男の熊吉。見ると、車が一臺おもてに停つた容子でございます。

何せ、その頃の人力車、只今の荷車に幌をかけたやうな頑丈なぶかつかうな車臺で、くりから紋々の御兄哥さんが、向う鉢卷で、威勢よくあらよツと曳くのだから、がら〳〵ツ、ごとんごとんツ、……大變なわけのもので。

熊『おいでなさいまし』

客『おう、西郷さんはおいでかな』

客は、侍從の米田虎雄。

熊『へえ、先生は奥にございます』

米『夜分で恐れ入るが、米田が御目にかゝりたいと申し上げてくれ』

熊『畏りました』

熊吉が奥に消えると、やがて取つてかへしました。

熊『どうぞ御通り下さいまし』

案内された西郷の居間。南洲はきちんと坐つて、まる〳〵と肉の盛りあがつた膝に手をついて、米田を鄭重に迎へました。

米『夜中、御くつろぎの處を失禮かと存じましたが、急々に御耳に入れたいことがござりましたので』

西『ほう、何ういふことでごわすか』

米『實は、その、あなたに御相談がございます、甚だどうも申しにくいことだが……私が到頭、貧乏籤を引いて、皆さんの御意見を代表して參りました、……無論、あなたも不同意で厶りませうが、……それにしても、隨分御迷惑でござりませうな』

西『どうも、まるで、あなたの話は、霞を隔てゝ山を見るの趣、あたじには分り申さぬ』

米『御尤もで、私にも何うしていゝか分らない』

これぢやア、御話になりませんが、侍從も餘程云ひ惡かつたと見えまする。

で、段々と緒口を切つた侍從。

米『あなたも、御承知の小金ケ原の演習でございますな』

西『む、あれは此の四月二十九日にやることになつて居申す』

米『それ、それ、そのことで厶りますが、それについて、御上におかせられては、當日御上御自から御指揮をなさるゝと、かう仰せられます』

西『成るほど』

米『そこで、私共は、恐れ乍ら御上に申しあげました、昔から將は三軍を指揮し、天子は六軍を統ぶと申すことがございます、一天萬乘の尊い御身をもつて、左樣なことを遊ばすのは、いかにも恐多い次第、どうか御取止めを願ひたうござりますと言上致しました』

西『御上は何と仰せられましたか』

米『されば、それは成らぬと、御承知遊ばされませぬ、御上の仰せらるゝには、わが皇祖は御自から兵をひきゐて、御東征の後、建國の礎をきづかせられた、王政復古の今日、大元帥自から兵を指揮するのは當然であるぞよと、私共の進言を御用ゐになりませぬ、此上は何とも申上げやうがない、ついては、近衛都督のあなたから、改めて言上して頂きたいと、かう考へて居ります』

西『分り申した』

米『それで安心をしました、あなたから申上げて頂けば、御上も御取上遊ばすであらうと存じます』

西『待つて下さい、米田さん』

米『はい』

西『あたじの云ふのは、あなたの御話の筋が分つたと、かう云ふわけぢやて』

米『すると、只今の私共の意見に對しましても、あなたは御同意下されませうな』

西『いゝや』

西郷は、かむりを振つた。

米『これは又意外、では、あなたは天子御自から近衛の軍隊を指揮遊ばすことに御同意でござりますか』





西『無論』

米『愈ゝ驚入つた、それは近衛都督たるあなたの職分であらうが……』

西『さうでない、御上には御上で、いづれ深い思召があらせらるゝ事と拜察いたします、王政復古の今の場合、軍隊は陛下の軍隊、兵士は陛下の赤子、大元帥として御自から近衛の兵隊を御指揮遊ばすといふのは、まことに叡慮のほど恐入つた次第、ついては、當日は此の西郷も御伴をいたす考でごわす』

米『へえ……』

てつきり同意すると思つた西郷が、かう出たので、侍從も意外でございました。

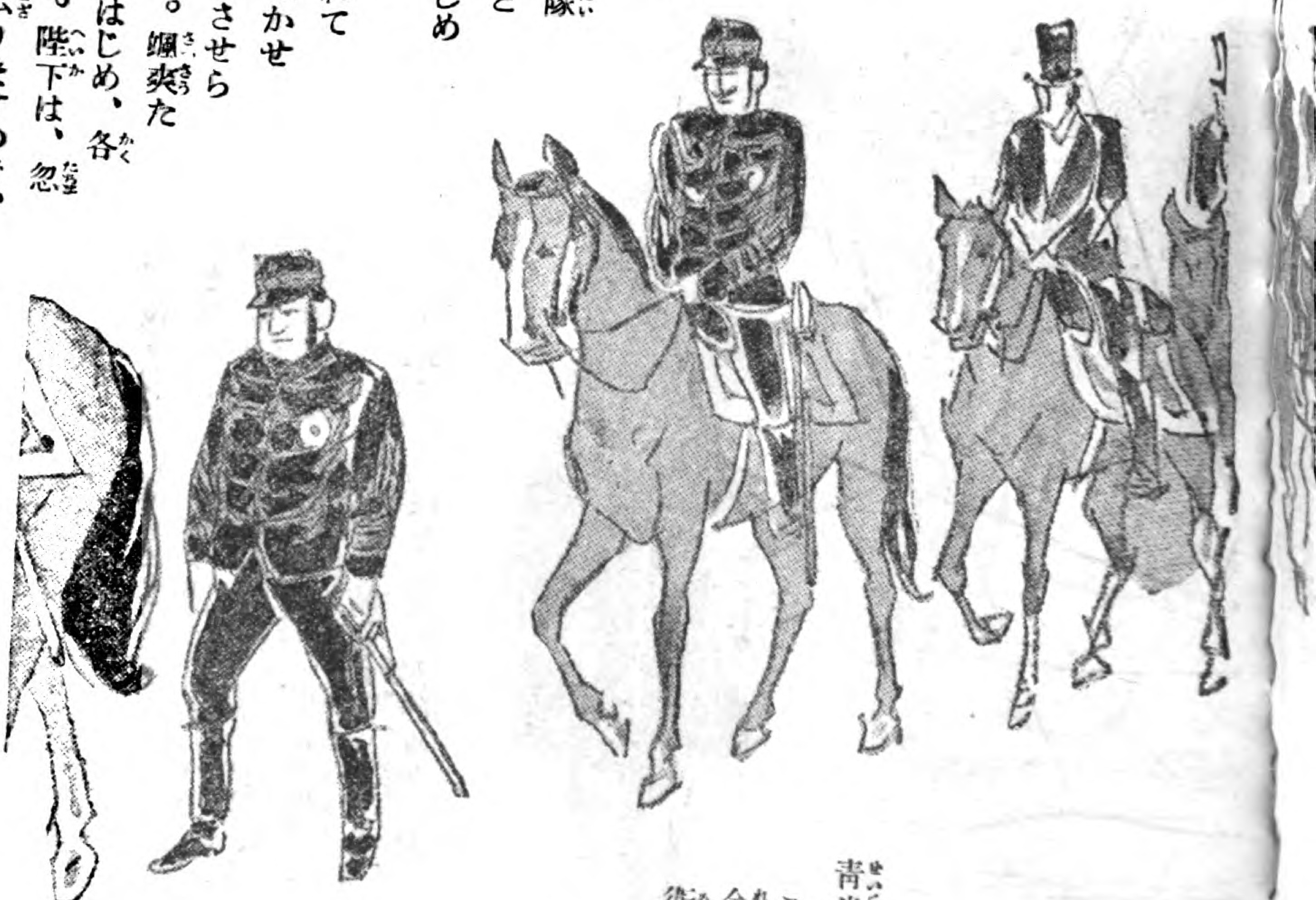
だが、その頃にあつては、西郷は明治新政府の大黒柱、彼の一言には千鈞の重味がございました。

米『どうも早、それなら、致方ござりませぬ』と、米田は引あげましたが、西郷は、殊の外の滿悅、御歳二十二歳にわたらせ

らるゝ御年若の陛下が、御自から軍の先頭に御立遊ばされて、士氣をはげまさるゝといふ、何といふ雄々しいことであらうか、何といふ勇しいことであらうか、かくあつてこそ、皇國の礎を萬代の後にかためることが出來るのだと、人しれず感激の涙にくれました。

愈々四月二十九日の朝。只今の參謀本部前の廣場、あそこに近衞の兵舍がムりましたが、一隊又一隊、赤帽の兵隊さんは續々と二重橋前に整列いたしました。しめて、五大隊の人數でございます。

この日、明治大帝におかせられては、大元帥の御軍服に、御劍を佩かせられ、太く逞しき栗毛の御馬に召させられて、しづしづと御出ましになる。颯爽たる御英姿の神々しさ。侍從番長をはじめ、各侍從も、馬で御伴を申上げました。陛下は、忽ち御劍をぬかせられたが、眞劍でムりますので、



青光きら〳〵と日にかゞやく。やがてのこと、玉音、ほがらかに御進發の御號令。喇叭の音は、劉喨として起り、近衞の軍隊は、大帝の御指揮に從つて、歩武粛々と行進をはじめました。げにや、これ前代未聞のこと。天子、眞劍をぬかせらるゝといふことが、まだ曾てない、それに御自から御馬上にて、軍の先頭にたたせ給ふ尊さ、忝じけなさ。兵士の面々、いつになく元氣立つて居りました。

沿道の市民、いづれも平伏して、このさかんなる行軍を見送つて居ります。



△『寅さんや』

寅『はい、何ですね』

△『近衛都督陸軍大將西郷隆盛といふ御方は、どこにござりますか、御前さんは、人體を御存じの筈だが……』

寅『さうさ、御待なせえ、今俺が見つけてあげるから……おう、おいでなさる、それそれ、向うにござる御方だ、淺草の仁王樣がうごき出したやうな、おでツかい體の大將さまだ』

△『へゝえ、大將といふからは、馬に乘つてゐさうなものですが、あの大將は、てく〳〵と歩いてゐなさる、こりや又、どうした譯でござんすね』

寅『さうさね、そこん處は、俺にも分らねえが、大方、馬が怪我でもしたと見える』

△『さうだらう、どんな馬かしらねえが、あの圖體ぢやア、大抵の馬がのりつぶされる』

ひそ〳〵とさゝやいて居ります。

西郷さんは、あの身ですから、馬につたことがない、で、此日も、元帥服に身を固め、大きな眼をきよろつかせて、大帝の御馬のすぐ跡につゞきました。



凛然たる至尊の御姿、忠良なる西郷の徒歩姿、馬上の君と地上の臣と、まことに不思議な對照でございます。又、形式のととのつた今日の陸軍に於ては、見ることの出來ぬ光景でもございます。

やんがて、到着いたしたのが、下總國千葉郡大和田、古戰場として名高い小金ケ原でございます。廣袤六里の平野、こゝに近衛の精鋭が集合いたしまして、壯烈なる野外演習、此時の指揮をしたのが陸軍少將篠原國幹。後に十年の役に於て、戰死いたした名將でございます。

大隊の兵が野陣に張るテント
白きを見れば夜ぞ更けにける

からいふ狂歌が殘つて居る位で、その頃、テントを張つて、野陣をするといふやうなことは、定めし珍らしかつたに違ありませぬ。

「習志野」といふ名は、この時、明治大帝が御命名になつたものと承はります。

二

さて、一日の演習が終ると

夜になつて、折柄の雨。風も出て參りました。テントの中では、各兵士達、ぐつたりと疲れてゐるので、雨が降らうが、風がふかうが、一向平氣、快よい眠を貪つて居ります。

　パシヤツ、パシヤツ、水溜を踏んで、巡邏の士官。二人の兵士が跡からつゞきました。



士『降るなア』
△『はい、生憎の雨でした』
士『いや、さうでない、演習といふものは、戰の稽古に相違ないが、實戰と心得なくてはならん、さすれば、雨の降るのも時にとつて結構である』
○『全くさうであります、甲野は、演習を遊山ぢやと思うとるからいかん』
甲『おい〳〵、乙山、ひどい事をいふな、貴公は先刻、何というた、眠いのに巡邏は辛いこツたというたろ、眠いくらゐな事が辛抱出來んやうでは戰爭に勝てんぞ、乙山は、つまり演習を遊山ぢやと思うとるからいかん』
乙『こいつ、同じことを云つてるな』
甲『貴公が、體裁のいゝ事を云うとるから素破ぬいたんだ、…口では、何のかの云うても腹の中では、此う濡れ鼠のやうになつちやア辛いだろ、本音を吐け、どうだ』
乙『糞ツ、さうなると、辛くも何ともない、お前こそ、苦しいだろ』
甲『俺も苦しいものかい、生憎というたのは、俺の口癖だ、うツかり出たんだ、俺だつて軍人だ、貴公に負けるもんか』
士『これ〳〵、喧しく云ふな、お前方は、國家の干城だ、一朝事ある時は、天皇陛下の御爲めに一命をさゝぐるのだ、分つて居るか』
甲『はい、心得て居ります』
士『それなら、辛いの苦しいのと、これしきのことに閉口垂れて何うなるか』
乙『その通りであります、自分達は、ほんとうの事を申上げると、演習は始めてゞあります、多分氣散じに鐵砲を打つものだ

と思つて居りましたが、今日の篠原少將の御指揮によつて、決してさういふものぢやないといふことが、よく呑込めました』
甲『何だか此うひとりでに眞劍になりました』
士『さうなくてはいかん、行在所間近であるぞ、……氣をつけい』
兩『はツ』
　士官が先きにたつて、今宵の行在所附近をぐるりと一めぐりして、今しさしかゝる表門の前。闇をすかすと、大きな男が、ぐツしよりと雨にぬれて棒立になつて居ります。
士『おい』
　士官が、ツカ／＼とすゝんで聲をかけました。
△『む！』
　士官が驚いた、上官に對して、番兵たる一兵卒が『む！』といふ返事はない。
士『お前は何か』
△『番兵ぢや』
　これでは、どつちが、上官か分らない。
士『番兵は分つとる、官氏名を名乘れ』
△『近衞都督陸軍大將西郷隆盛』
士『えゝツ』
　思はず、たじ／＼となつたが、でも闇の中に、すりよつて、顏をのぞくと、正しく元帥服をまとうた西郷が、屹然として立つてござる。
士『あなたは、西郷都督ですな』
西『む、分つたか』
士『こりや、一體、どうしたわけでありますか、都督御自身が、番兵に御立になると云ふ事がありますか』
西『立つて、惡いか』
士『惡いといふことはありますまいが、軍には、おのづから階級があります、階級によつてそれ／＼職分が決つて居ります、あなたが番兵に立つといふことはない、殊に、この吹降の中に此うして門前に御立になる必要はないと思ひます』
西『さうでない、……お前方は、この演習を何と心得て居るか、戰の稽古とのみ思うて居るかもしらぬが、苟くも、軍をひきゐて此地にのり出した以上、敵が眼前に控へて居ると考へねばならぬ、兵士が野外にテントを張つて居るのもそれが爲ぢや、あたじが行在所の番兵となつて居るのもそれが爲ぢや、よいか、此ういふ吹降の晩に乘じて、萬々一敵が行在所に夜討をかける樣なことがあつたら何うするか、近衞都督たるあたじは、さういふ事を考へちよると、寢ることが出來ぬ、此の重大な職務を兵卒に任して置くことが出來ぬ、で、あたじが番兵にかはつて、今夜はこゝに立つことにした、都督たるものが、番兵の職について、軍規を紊していかんといふことなら、その罪は、明朝になつて、いさぎよく引受け申す、今晩だけは、あたじは、こゝを立ち退くことは出來ぬぞ』

士『はッ』

士官は、この一言を聞いて、雷光に打たれたやうに、どきん……としました。

誠實、朴直な西鄕さんとしては無理もない、敵前にある心持で、演習をするといふ場合、緊張して思ひつめると、事實さうなくては叶はぬところ。自分が、近衛都督である、陸軍大將である、さういふ最高の地位にあることも打忘れて、宿舍から飛出して來たのでございます。

夜のあくるまで、西鄕は、身動きもせずに行在所の前に立番をしてゐたと申すことが、天聽に達しました際、陛下におかせられても、殊の外に御感に相成つたと承はります。拙者は、まだ拜見したことはないが、鹿兒島に隱棲して居られる西鄕菊次郎さん、此の御方は、西鄕さんが大島に流されてゐた際、島娘との間に生れた御子さんでムいますが、只今、南洲翁の元帥服を御持ちになつて居ります。これを見ますと、この時の雨のしみでありませうか、處處、點々として雨痕が殘つて居るさうで。

されば、明治大帝におかせられても、特に西鄕を御信任遊ばされて居つたが、うたてや、征韓論のいきさつが問題となりまして、此の大忠臣も野に下ること〻相成りました。

意見の會はぬといふのは、どうも致方ないもの。

明治六年十月二十三日、西鄕は、辭表をさし出すと、そのままプイと姿をくらまして了ひました。

△『何處へござつたか』

○『西鄕どんは忍術の功者だといふことは、つひぞ聞かぬが……』

さア大變ぢやと、西鄕の行方をさがしまはる始末。ところが、西鄕は、向島の伊東の寮にかくれて、釣をしてゐたと申します。

△『西鄕先生が辭職して、國へかへるなら、俺達も、かうしては居られぬ、一緒にやめなくてはならぬ』

近衛の將校から下士、兵卒に至るまで、てんやわんやの騷ぎ。

政府でも困つて了ひました。

西鄕にやめられると、近衛の軍隊が動搖をする、さればといつて、西鄕の意見通りに、西鄕を使節として、朝鮮へ差遣することになると、どういふ事件が突發するかわからない。

痛し痒しの態。

殊に、岩倉右大臣、大久保內務卿などは御心配の容子で、いろいろ御相談になつた文書が只今も殘つて居ります。

伊東の寮では、西鄕は、もうけろりとして、仙人のやうな鹽梅。折柄の小春日和、じつとして居るとうと〱と眠さうになる位だが、相かはらず浮子を見つめて居る。

熊『先生、先生』

かけつけたのは熊吉。

西『む』

熊『お客さまでございます』

西『誰ぢや……ほい、かゝつたぞ』

ぐいと釣竿をあげると、餌を奪られて了ひました。

西『こいつはいかん、逃した魚はどうやら大きいな』

又、餌をつけて、絲をたれる。

熊『先生、冗談ぢやない、お客さまでムいますよ』

西『む、誰ぢや』

熊『山岡さんでムいます』

西『さうか、お通し申せ』

熊『大丈夫でムいますか、すぐにお立下さい、……ようムいますか』

西『心得た』

山岡鐵太郎は、この時、明治大帝の侍從をいたして居りました。それも、西郷の推薦だと聞いて居ります。

で、西郷は釣をやめて、のつそりと座敷へ入つてくると、待構へた鐵舟。



山『いや、この度は、何とも申上げやうがムりませぬ』

西『なに、山岡さん、知己は千歳の後に待たねばならぬ、あたいじは又しばらく、鹿兒島へもどつて、芋掘をいたします、あなたとも、當分御別れぢや、只、あたじは、自分の一身の進退によつて、御上に御心配をかけることがいかにも心苦しい、だが、國家事ある時には、必ず日頃の御恩澤に御對へ申す心底、此の儀は、あなたよりも御披露を願ひます』

山『それについて、拙者は今日御邪魔に出たが、實は、西郷さん』

西『む』

山『岩倉右府も、どうぞして、あなたの辭職を思ひ止らせようとして、御上にも言上いたしました、西郷のやうな有力者をあのまゝ國元へ歸らせては、宛かも猛虎を曠野に放つに均しいと、から申上げた處、御上の思召は、承はるだに恐多いことでムりますぞ』

西『何と仰せられた』

山『されば、成る程、西郷は、百獸を威服する虎。

のやうなものであらうが、あれは決して猛虎ではない、暴れくるふ虎ではない、野に放つたからというて、他に害を及ぼすやうなものでない、功臣を優遇する上からいうて、あれの好む處に任せよと、かういふ有難い御言葉でござりました』

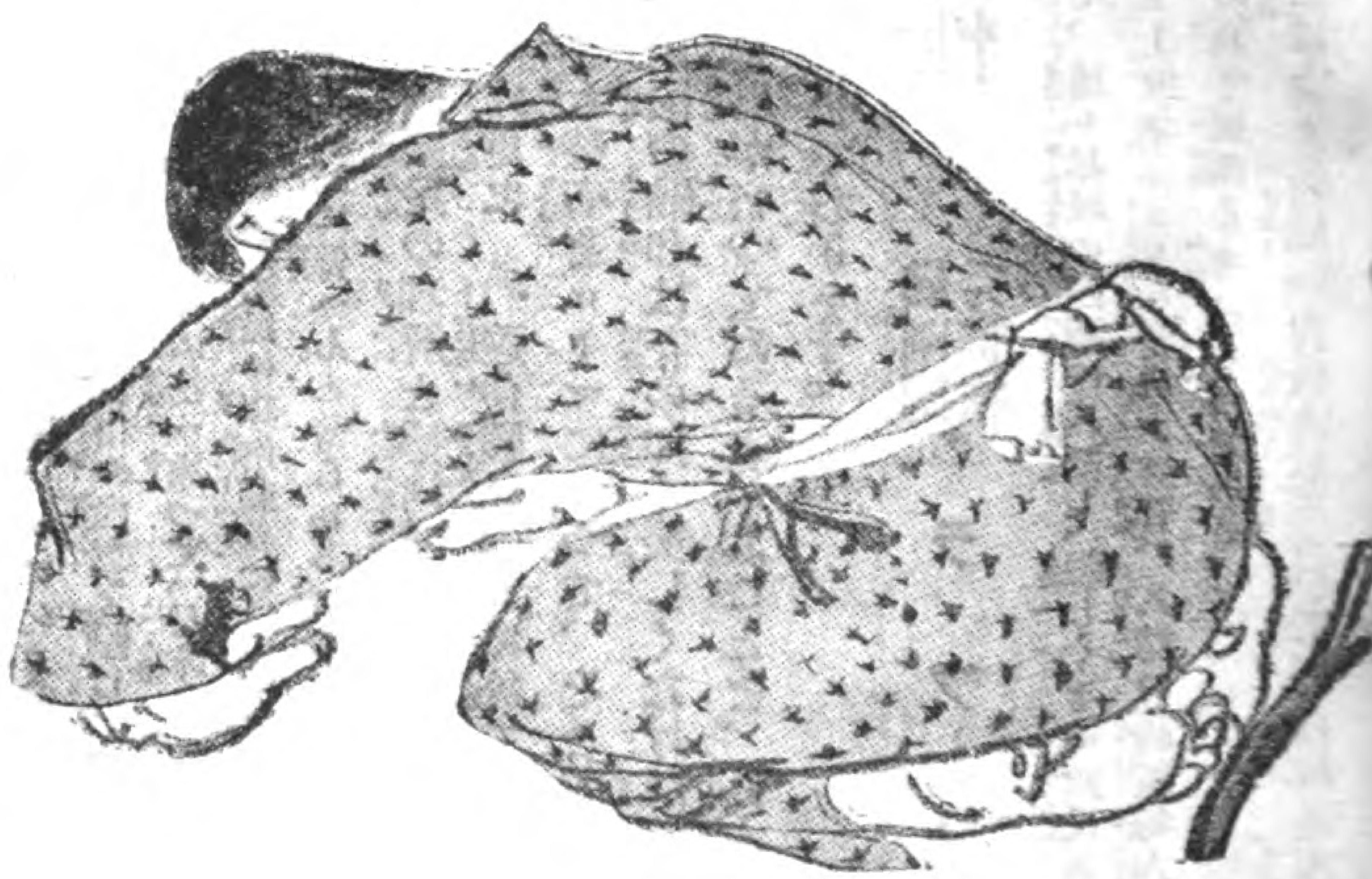
西『はゝッ』

　西郷は、思はず居ずまひを直しました。

山『岩公は、又申上げました、恐れ乍ら薩州出身の者が、みな西郷と歸國をするやうに承はりますが、さうなりますと、陸軍大將近衛都督の役向は、如何取計ひませうかと御訊ねした處、御上に於かせられては、近衛都督は補任の官、東京でなくては勤まるまい、これは解任するがよい、但陸軍大將はそのまゝにいたせ、……それでよろしいと、力強く押しかへして、御言葉を賜はりました』

　山岡が、かういふと、西郷は、ず、ずツと一膝すべつて、ピタと手をつくと、はるかに皇居の方に向つて平伏、今更乍ら、天恩の忝じけなさが、ひし〳〵と身に迫つて參りました。

　あの大きな眼からは、豆粒のやうな涙が、ポローリ、ポローリ、他愛なく泣いて了つて、面をあげることが出來なかつた。山岡までも、とも〴〵に貰ひ泣きの姿であつたと申します。



　此の忠臣の心持を知るものは、此明君、此明君を補佐し奉るは此の忠臣。一旦の誤から、西郷は十年の役を起しましたが、明治大帝は、後になつて西郷の罪を御許しになつて、賊名を御取除になつたのも、これが爲かと存じます。

（終）

偉人は死ぬるにもただの時は死なない

皆樣ご存じのアメリカ初代の大統領ワシントン、この偉人の死んだ日は、なみなみの時でない。全く奇蹟といはうか、ワシントンは西暦一七九九年十二月三十一日の午後十二時即ち十八世紀の最後の年の最後の日の最後の時刻、寸秒で十八世紀と十九世紀とを仕切るといふ時刻に息をひきとつてゐる。しかもその日が土曜日、一週間の最後の日といふに至つては念が入りすぎてゐる。

『キング』を通じて

—◇最近來朝せる諸名士は語る◇—

花の如く美しく

伊國　ヴィオラ大佐

（伊國ムツソリーニ首相が帷幄の一勇士ヴィオラ大佐は、ファシヨ黨創立の大功勞者であり、現代伊國が生んだ伊太利精神の權化である。今回、ムツソリーニ首相の内意を體して、伊國の名寶たる十七世紀代のローマ彫刻並に繪畫、その他數々の美術品を我が日本に携へ來つて、日本の大衆をして直接眞正のローマ美術を鑑賞せしむるの機會をつくり、以て日伊兩國民の理解親善に資せんがために來朝せられたのである。本誌を通じて、大佐がその感想の一端を我國民に傳へんとせられるのも、またその用意を窺ふに足ると信ずる。）



私は日本大衆諸賢の欲求の萬分一に酬い、以て日伊兩國民の理解と感情融和の美果を收めんがために、ローマから特に純粹の伊國美術を齎らしたのであります。この考へは更に私達伊國民の側に於ても、日本を理解し、日本と親善を得んがために、日本の助力によつて、この度純粹の日本美術をローマに送つて、そこで大展覽會を開くといふ結果に到達したのであります。美術はその國民の花である。兩國の融和は花の如く美しくなければならぬ。この兩國融和親善の計畫の中には、實に我が黑シャツ黨のローマ武士精神が宿つてゐるといふことを、日本の方々に汲んでいたゞけるならば、まことに有難い仕合せであります。

優雅な日本の女性

佛國閨秀畫家　ラフユジ女史

（三十歳にも滿たぬ婦人の身で、遠く禁域の西藏に入國し、親しくその國民と近接して人情風俗を視察し、この程日本に來朝せられたパリーのイルストラシヨン週刊繪入誌の特派婦人畫家ラフユジ女史の對日感想は、日本の女性にとつて一つの良き刺戟と考へるのである。）



私は日本へ參りまして、日本の御婦人方がまことによく行屆いた教育を受けて居られる事と、それがために世界のま

らゆる事を即座に理解する驚くべき知識をもつて居られる事を親しく實感したのであります。若し、私が日本語を十分に聽き取ることが出來ましたならば、どのくらゐ新知識を得られるであらうにと、殘念に思つてゐる程で、歌舞伎座を見物した時も、幾度か日本の各階級の御婦人方に接近して、その觀劇の御感想を伺つてみたいと思つたことでありました。

私の如く、異域といはれる荒凉たる所を冒險旅行をして荒んだ心持になつた者から、この日本女性の優雅な擧措動作を見ますと、何となく羨ましい感が起きるのであります。それで日本の女性の方々から、いろ〳〵と敎へられたい事も山々ありますので、その機會をつくるのに苦勞をしてをる次第であります。少しく僭越とも思はれますが、私として日本の女性方にお願ひしたい事は、私のこの度行ひましたやうな、遠國異域、殊に未開の土地に探險旅行を試みて、女性として得たところのものによつて、男性方の知識開發に貢獻するといふ事も、決して惡いことではないと思ふのであります。

國民の幸福を羨む

印度國　カブルタラ王



（世界の屋根といはれるヒマラヤの高峰は萬古の雪をいただき、その滴々の餘流は遠く銀河の流るゝが如きガンヂスの大河となり、その潤すところ大印度の天地には、幾多の靈的詩的の大哲人を生んでゐる。この曠野に育くまれて英雄的性情に富めるカブルタラ王の日本に對する感想は、吾々アジアの一國民として、深き親しみを感ずる次第である。）

日本へは二度目の來朝であるから、私の親日情緒は殊更に深いものがあります。十數年前に來朝した時も、新宿御苑に召されましたが、來朝する毎に光榮ある御優待に接して、深く歡喜してゐる次第であります。長時日を日本に過ごしたいとは思ひますが、政務の都合で、早く印度へ歸らなければなりませぬので、またの機會を得たいと考へてをります。

日本は國運ます〳〵盛んで、その勢威は八紘にひろがり、國民の幸福は羨ましく感ぜられます。今回は奈良京都を見物する機會を得まして、一層深く且つ廣く日本文化の進歩の實證を目にいたしますると共に、日本固有の文化を實見して、大いに得るところがあらうと信じてをります。大正大震災の復興事業も急速に進んで、見事にそれが成就してゐるのを見まして、私は日本國民の元氣の旺盛なるを賞揚せずには居られないのであります。私のこの感想を日本國民に傳へられるといふことは、私の最も欣幸とする所であります。



曉の鐘は鳴る

尾崎行雄

病める日本

日本人は今や上下を擧げて病みつゝある。その病因は何か。一口に言へば無理想である。働く目的がないのだ。國民が、擧國一致して進むべき方向が見付からないのだ。その爲めに、國民の精神が著しく弛緩して、遂に憂ふべき病的狀態となつたのである。

日本が鎖國の夢から醒めて今日を築く迄の過程には、國民の精神を緊張させるに足る大方針があつた。即ち德川の末期には、王政復古といふ大目標があつた。維新後には、不平等條約を改正して、獨立國の面目を完うするといふ擧國一致の熱望があつた。然しそれには先づ、國力を充實させ、文化を高めて、國そのものの內容を水平線上に押しあげる必要がある。そこで可なり大膽に泰西の文物を輸入して、陸海軍を育てあげ、商工業を奬勵し、國會を開き、裁判所を起し、其他いろ〳〵のことに、國を擧げて努力したのである。

この努力の最中に、我國が順調なる生長を遂げるためには、老大支那の不當な壓迫を排ひ退ける必要を感じた。そこで、これが第二の方向となつた。然るに日清戰役後、三國干涉が起り、露國の野心は我が存立を脅すものであることが判明したので、こゝに局面は更に展開して、國民の向ふべき第三の方向が現はれた。即ち臥薪嘗膽十年の後、彼れを膺懲したのである。

明治時代は、この三つで國論を統一して來た、そしてこれに努力することに伴うて、著しく文化を進めることが出來た。しかも蕞爾たる新進の島帝國が、老大支那を屈し、强豪露西亞を斥けたことは、世界を驚歎せしむるに十分であつた。これによつて日本は、戰勝の餘勢を驅つて、一路邁進、明治四十年頃までに、世界一等國の班に列する

ことが出來たのである。

然し、冷靜に考へると、日本が一等國に伍することの出來たのは、文化の力ではなかつた。戰爭に勝つたが爲めである。然り、武力の爲めである。公平に批判するなら、その當時の日本の文化の實力は、西班牙並の三等國ぐらゐが相當の處であつたらう。三等國の實力を以て一等國の班に列する——正に成金である。逆上せあがらざるを得ないではないか。



馬上の尾崎行雄氏

これ等の事情は、普墺普佛の兩戰役に捷つた當時のプロシアとは、よほど趣を異にしてゐる。戰勝によつてプロシアが獨逸聯邦に號令し、世界一方の覇者と仰がるゝに至つたのと經路は似てゐるが、その當時プロシアの文化は、既に世界を指導してゆくだけの實力を具へてゐたのである。然るに我國は、自ら世界の一等國と號するものの、實は武力以外、世界を率ゐてゆく何物も持たなかつた。科學にしろ、商工業にしろ、文藝にしろ、制度にしろ其他日本流のもので、世界を指導するに足る力あるものとては一つも無いのだつた。然も野郎自大、一等國の名に有頂天になつて、一足飛びに內容まで充實したかの如く誤信してゐるのだから仕末に終へない。個人としても成金氣分に浮されて、人がましく振舞ふのは見苦しいものだが、國としては尙更だ。

明治時代は自らの力の足らぬことを意識してゐたから、よし其當時の地位が低い三流どころにあつたとしても、敢て憂ふるところはなかつた。向上の段階を確たる足取りで、踏みしめ踏みしめ登つてゆけたからである。然し今はさうではない。急に數段を飛び上つたが爲めに、眩暈がして、どつちが上やら下やら、ふら〳〵して分らない、向ふべき方向を失つてしまつた狀態にある。それでゐて最上級にまで登り得たが如くに滿足して、人心萎靡、早くも享樂に浮身をやつす者さへ出て來てゐる。よく言つて逆上であ

る。極言すれば妄想狂とでも評さねばなるまい。

國民の消化力

然し、日本の逆上、日本の混亂に關せず、世界の文化は駸々として進んで行く。そして運輸交通の發達は、朝に外國に起つた事を、夕べには我が國に傳へて、細大漏らすところがない。再び鎖國でもせぬ限り、善きにつけ、惡しきにつけ、その影響を避けることは絶對に出來ないであらう。だが今更鎖國の昔に還るなどいふことは、斷じて時勢の許さぬ所であるとすれば、勢ひ國民の消化力を養ふ外はないのである。

幸ひによく咀嚼し、よく消化することが出來れば問題はないが、高き文化を、程度の低い者が無自覺に無反省に、生地そのまゝで取入れようとすれば、どうしたつて無理が出來る。一例を擧げると、近頃或問題に關聯して、某老政客が、「物價を下げるには賃金を上げるがよい、賃金を上げれば能率が上るから、自然に物が廉く出來る、隨つて物價が下るわけだ」

などと獨逸や米國の經濟學書を持出して說き廻つた。經濟學の原則からすれば如何にもさうではあるが、それをそのまゝ直ちに日本に取入れようとすると、變なものが出來上るといふことを知らねばならない。

それは休みの翌日の能率を見ればよく解る。西洋では非常に能率が上るが、日本では却つて惡くなる。これは西洋人は休日を利用して合理的に休養するが、日本人は休日を徒らなる享樂の爲めに費して、却つて心身を疲勞させるからである。フォードは賃金を上げて能率を高め、物價を下げることに成功したが、今の日本人には、それが望めない。文化の程度が違ふからだ。日本は武力の一等國で、文化の一等國ではないからだ。それを理解せずに、泰西の文物思想を、一等國といふ妄想から生地のまゝで取入れ消化しようとするから、いろ／＼な不都合が起るのである。

いくら善い事を教へられても、頭が出來てゐなければ自分のものとすることが出來ぬ。消化力のない子供に、滋養があるからとて牛肉を腹一杯つめこませたらどうか。牛肉が多ければ多いほど害をなすであらう。外來の危險思想など大袈裟に言はれてゐるものでも、よく咀嚼し消化する力があれば、必ずしも恐るゝに足らない。危險は思想そのものと云ふよりも、却つて、よく咀嚼することも、よく消化することも出來ぬ力不足の點に存する。その力を養はうとするには、一等國の虛名、一等國の妄想から醒めて、文化の程度をヨリ多く引上げるべく擧國一致して努力するの

外はない。

逆手か？正理か？

然し、この事を如何に力說したとて、逆上した者の耳には這入るまい。ともすれば、

『そんな危險な狀態となつたのは、外來思想に惑はされて人心が惡化したからだ、昔に還れ、古に戻れ』と力む。が、昔に還れとは、どの時代に戻るのだ。五十年前か、百年前か、それとも千年前か。文化の幼稚だつた時代の心に引戻して、文化の相違から來る不消化を癒さうとするのは、いはゆる木に緣つて魚を求むるもので、見當違ひも甚だしいと言はねばならぬ。病と藥が餘りに合はな過ぎるではないか。

私はそれ程、今の日本人の本質が惡くなつてゐるとは思へない。たゞ一等國といふ妄想を取りのけて、本當の一等國にするやうに努力させればいゝのだ。然し、自らの妄想を意識しない者に、それを知らせるといふことは、殆ど不可能に近い。なぜなら、いくら聲を嗄らして道理を說いても、數字を並べて說明しても、てんで耳を借さうともしないからだ。そこで、この際は、寧ろ逆手を使つて死地に陷いれ、自ら眼を醒すやうに仕向けるのが一番だとの說もある。いかにも國としても個人としても、死地に於いてこそ、生きたいといふ本能が甦へる。その本能が生きる道を教へて吳れる。いはゆる『之を死地に陷れて後に生き、之を亡地に置いて後に存する』の筆法である。

德川時代に於いても、攘夷論がなか〳〵盛であつた。彼等は世界に於ける日本の地位も知らず、支那人が教へて吳れた夷狄といふ言葉を使つて、たゞ外國人を禽獸の如く蔑視した。林子平は『日本橋橋下の水は、ロンドン橋下に通ずる』と說いただけで獄に投ぜられた。佐久間象山や橫井小楠のやうな正直な開國論者は、皆非命に斃れた。正面から國難來を說いて之に善處するの道を教へても、世界を理解するの素養なくして、徒らに攘夷の聲にいきり立つてゐた當時の人心には、とても合點されなかつたのである。

それと悟つたのが、さすがに慧眼の水戶である。水戶では國論統一の爲に逆手を用ゐて、攘夷論に油をそゝいで火の手を擧げさせた。それかあらぬか、生麥で外人を斬る者も出た。下ノ關で外國船を砲擊する事も出た。が、その結果は薩長のやうな强藩でさへ、敵の侮るべからざることを痛感せざるを得なかつた。そこで初めて迷ひの夢から醒めたやうに、我自らの本當の地位を悟ることが出來た。彼等は議論一變、開國論者となつた。

かるが故に、今日でも、所謂これを死地に陥るゝならば、自ら擧國一致して國民の向ふべき道に目醒めしむることが出來るであらうといふのである。一應尤もな事ではあるが、併し私はいくら考へても、この逆手を使ふ氣にはなれない。さればこそ今日までは正理を說き、軍備縮小論の如きも、率先して唱へたのである。

私の爲政者時代に、海軍だけの希望を入れるなら優に八億圓は要つた。殆どその當時の歲入の總てである。これを採用したら、日本は既うに破産してゐなければならない。私達は必死になつて軍備の縮小を說いたが、殆ど氣狂ひ扱ひにされたものだ。然し久しからずして私達の議論が延長して、華府會議となり、今日の軍縮論となつたのである。

曉の鐘を撞くもの

日露戰役後、一等國の夢を見ること二十年、思へば長き夜ではなかつたか。愁ふべき事態も、或は夜の闇に跳る魑魅のゆゑであつたかも知れぬ。が、夜があればこそ曉の喜びもあるのだ。永久に晝のみの國では、朝の歡喜を味ふことは出來ない。

滿天下の「キング」の讀者諸君！

諸君は、日本に於ける諸君の地位を知り給ふか。諸君の力を知り給ふか。諸君こそは我が大日本帝國の中堅である。諸君の力こそは、やがて國の運命を決する原動力である。

眼を醒し給へ、そして耳を傾け給へ！

然らば殷々として響く曉の鐘が、一杵、一杵、諸君の蹶起を促すを耳にするであらう。撞くものは誰ぞ、他なし、建國二千五百年、祖先より受け繼いだ血汐に潜む日本精神だ。愛國心だ！

迷夢を醒して蹶起し給へ！　今こそ其時だ！　諸君が起てば日本が起つのだ。そして一路、國力の充實と文化の向上に努め給へ。それが希望の旭の出づる方向だ。

不肖は唯、先づ東天紅を告げて、鐘の音を聞き洩らさざらんことに努めてゐるのみである。（終）

國産品の愛用運動

今、歐米各國では國産品愛用運動が盛んに行はれてゐる。

1、國産品買物週間——ある週間だけは特に國産品に注意を向けて買ふのである。

2、製造業組合商標——組合を作つて一定の目星しい商標を附し國産品なることを知らしめる。

3、官廳用品に關する國産品愛用——諸官廳が率先して國産品を購入するのである。

4、米國第一——これは米國で行はれてゐる標語標で、「米國第一」と呼びかけて國産品を買ふやう仕向けるのである。



偉くなるには順序・本末

本社社長　野間清治

一、風呂の流しから

つい先日湯殿で背中を流して貰つた。どうも物足りない。感心出來ない。その流し方は、チヨイと左の肩をこすり、又チヨイと右の手を流し、又チヨイと脊筋のあたりをやり、又チヨイと左の手へ行くといつたやり方だ。結局或部分は大分よく流したけれども、或部分には少しも手が及ばない。萬遍なく工合よくと云ふ風に行かない、普遍的系統的と云ふ譯に行かない。そこで是はどうしたら宜いかといふ事になる。それには、先づ第一に此處をやる、其次に此處をやる、次は其處、次は何處と云ふ工合に計畫的にやらなければならぬ。つまり順序だ。床屋へ行つて顔を剃らせる。下手な弟子がやると、或部分を剃り残すやうなことがある。でなくとも剃刀が萬遍なく行渡らない。上手な者にはそれがない。仕事に遺漏といふものがない。其の相違はいふまでもなく順序が立つて居ると否とにある。

この意味を以て、私が、少年部のやつて居る事から、世間の事業に至るまでを氣をつけて見渡すと、平凡のやうであるが『順序』といふことの如何に大切であるかに驚かざるを得ない。此前も此等の話をして『物に本末あり、事に終始あり、先後する所を知れば即ち道に近し』といふ言葉を引いて、『順序』が分れば『道』は殆ど分つた譯であると云ふことを申した。正に是れである。

私は、『順序が立たなくては、成功はない』と申しても過言でないと信ずる。草を刈るには、先づ鎌を研ぐ、鎌を研ぐには先づ砥石や水の用意をする。前に爲すべきこと、同時に

爲すべきこと、一絲も紊れてはならぬ。紊れては事を仕損ずる、時間ばかりかゝつて仕事が捗らない。茶碗を洗ふにしてもさうだ。折角洗つても汚い妙な臭ひのする布巾などで拭いては何にもならぬ。茶碗を洗ふ前に先づ布巾を考へて置かなければならぬ。順序が違ふために、しない方が宜かつたなど云ふことがある。途中までやりかけて來て『アヽ、あれを忘れた』と云ふやうな事から、今までやつた事が皆無駄になることがある。これらは一些事に過ぎぬ。

併し一些事といふ勿れ、その一些事すら順序が整はねば出來上らないではないか。順序、順序、それを平生から工夫修養して置かなくては、他日一大事業を計畫すると云ふ場合に、思はぬ失敗を演じ、一生再起の出來ないやうな目に遭はぬとも限らぬ。演說をするにも順序。順序のない演說は支離滅裂、徒らに彌次の材料を提供するに過ぎない。撃劍をするのにも順序。道具の着け方を正しくする、早く道具を着けて、氣を沈着けて居る、それが未だ戰はずして既に勝てる所以である。

私共が每年新年號間際にいろ／＼の計畫をする。此の複雜多端なる仕事に於て、特に順序の必要を痛感させられる。順序が立たない時は、勞多くして效少く、順序整然たる時は、勞少くして功を收めることが多い。殊に順序が立つて居れば、自然餘裕がある、餘裕があれば心長閑に十分に力を致すことが出來るから些かの遺漏がない。いはゆる武士の『心靜かなる振舞』といふのがそれだ。さうでないと後で考へて、あれをすれば宜かつた、これはするのでなかつたと云ふやうな事がある、碁や將棋の高手といふが如きも、畢竟順序次第を過らないことで、下手といふのは、後にすべきを前にし、前にすべきを後にすることである。『事後には愚者も智者たり、事前には智者も愚者たり』とは此事であらう。高手は下手に對し寡兵を以て大軍に勝つので、その原理は一に順序にあるのである。而して順序の大切なことは、それを誤つては、取返しが付かないからだ。地團太をふんでも及ばないからだ。この場合如何なる名案も所謂『下種の智慧は後から』に終つてしまふ。

二、孝悌は仁を爲すの本

人生れて父母兄弟と共に家にある。此場合に於ては、父に盡し、母に盡し、兄に盡し、弟に盡し、一家に盡すと云ふことがその本務であり、職分である。順序として是れが道德である。だから孝悌の道に全力を傾注し、その道に種々なる工夫を凝し、思慮を廻らし、其の心を竭し其の身を致す。この修養如何が、將來に於ける其の人の運命を支配する所の根

概を爲すものであり、土臺となるものである。『孝悌は仁を爲すの本か』の一語さすがに意味が深い。

若し夫れ父母兄弟に宜しいと云ふ人であるならば、これを擴充する時、天下の百德、其一身に備はると云ふことである。其人は東に行つても宜し、西へ行つても宜し、南北、到る處宜からざるはない。謂はゆる『蠻貊と雖も行はれん』である。だから若し其人が他に奉公をする事になると、父母を主人に代へ、兄弟を同僚に代へてやれば宜い譯であるから、たゞ主家を大事に、主人に忠實に、同僚に悌順ならんことに全力を注ぐに違ひない。既に全力を注ぐと云ふ上は、他を顧みるいとまがない譯である。それでいゝ。否さうあるのが本當だと思ふ。然るにその間にあつて、天下の政治に心を用ふるとか、世道人心を指導するとか、社會事業を云爲するとかいふ事は、誠に健氣な結構な事のやうではあるが、併しよく考へて見ると、寧ろ笑止な事と謂はなければならぬ。何となれば、この場合、自己の本務を遂行し職分を盡す以外に、天下の政治も人心の指導も社會奉仕もない譯であるから。即ち自己の仕へて居る家の爲めに盡し、主人の爲めに盡し、同僚の爲めに盡すと云ふことに一意專念であれば、それが同時に社會奉仕であり、同時に天下國家の爲めであり、君に忠、親に孝なる所以である。



本社社長　野間清治氏

三、家の爲めは國の爲め

更に其の人が、出でて獨立すると云ふ場合は如何。或は一町村の爲めに盡したい、或は一郡一縣の爲めに盡したいと云ふ考も出るであらう。是れ亦誠に結構である、常にその氣概なかるべからずである。併しながら私は、それはまだ順序でないと云ふ意味からして、暫く之を待て、暫く之

を忍べと言ひたいのである。而して先づ以て汝の家を立てなければならぬ、汝自身十分に獨立するだけの土臺を造らなければならぬ。即ち此場合に於ては、妻子眷族、父母兄弟、一家の爲めに全力を注いで、敢て他を顧みるに暇はない譯である。さてそれが十分に出來た時、一家を支へて餘りある時、その餘力を以て先づ親戚朋友知人の爲に盡し、更に自己の屬する小區域、近隣の爲に盡し、尙ほ餘力あらば、更に大區域に及ぼして、一村に行き、一郡に行き、一縣に行くと云ふことにならなければならぬ。謂はゆる『身脩而后家齊、家齊而后國治、國治而后天下平』とは是れである。此考を以て目的に進むことは、一見その到達が遲いやうであるが、實は甚だ早い。『徐ろに急げ』といふのは即ち是れ。

其の一家の爲めに奮勵刻苦する時、實は同時に近隣も其の恩惠に潤されるのである。自分は一家の爲めにやつてゐることが、實は既に近隣が自分に動かされてゐる。無言の裡に思想宣傳をやつてゐるのだ。『孝悌は仁を爲すの本』孝悌を以て身を修め家を齊へるといふことの中には、既に『仁』を前提としてゐる。即ち社會奉仕の精神は、一家を齊へることによつて、既に立派になされつゝあるのである。

譬へば玆に一つの燈火ありとせよ。それを我が家に置く時、我が家が明るい。若し他の家も明るくしてやらうと云ふので、其燈火を他の家へ持つて行つたならばどうであらう。誠に結構な心がけであつて、人は尊ぶかも知れぬが、自分の家は暗くなる。本當に獨立するに至らず、一家を齊へるに及ばずして、先づ社會國家を救はうとするのは、凡そこんなものではなからうか。然るに若し其家の中の燈火を大にし、年年歲々、光力を增大してゆくならば、一家爲めに明るく、近隣亦爲めに明るくなる。更に進んで大にすれば、いよ〳〵遠い所まで明るくする事が出來る。斯う行くのが順序ではあるまいか。遲くて早いやり方ではあるまいか。一番確かな底力のある方法ではあるまいか。さうして又一番實際的にして、合理的な仕方ではあるまいか。

四、體驗の學

先日の新聞に、カーネギーの言葉として『最も有力なる投資は、自分自身の事業に投資すると云ふことである』と書いてあつた。是れもやはり私の前に言つた意味に外ならぬであらう。さう思つて我が一家一社をよく〳〵見ると、實に愉快に感ずるのは、其處に世の中總てがあると云ふことである。小なる一家一社ではあるが、そこに宗敎がある。そこに道德がある。そこに經濟がある。そこに政治がある。そこに法律がある。そこには裁判所、學校、敎會、議院がある。社會の

凡ゆる物がある。正しく社會の縮圖である。一家を出でずして、一社を出でずして、是等の社會機關を、社會事象を同時に體驗することは、即ち最も優れたる學を成す所以であつて、萬卷の書を讀破するに、優るとも劣らぬ仕事であるとさへ思はれて、心おのづから躍動せざるを得ない。この一家を齊へ、この一社を完成することは、決して無意義ではない。徒らに外にばかり走り、妄りに器ばかり大きくして、その實は極めて空疎な薄つぺらな近代人の思想や生活に比して、かうすることが如何に充實した底力のある生活であり考へ方であるだらうか。さう思ふと、私は一段の感激を覺え、一段勇氣の加はるを覺える。

五、すべては根である

繰返していふ、此の『順序』で行くといふことが、何といつても一番早手廻しである。間違ひのない、最善の道である。然るに『順序』を紊る場合には、それに適した『時』と『力』とが無駄になる。無駄にならぬまでも、よほど損をしなければならぬ。その爲めに一生に於て成し得べきだけを成さないで死なければならぬ。

今日も植物病院から人が來て、宅の杉の木の頭の方から段段枯れ下つて來たので彼の邊に蟲でもついたのか、何か特別の病でも其枯れた邊に出來たのかと尋ねて見たら『あれが枯れ下つて來たのは、根が惡いからである。今、藥をつけたり枝を拂つたり、いろんな手を盡されてゐるが、それは皆無駄な事です。根を良くしておやりなさい。根の病があすこへ表れたのです。根さへ良くなれば幹が良くなり、枝が良くなり、葉が良くなる、すべては根であります、それに樹や草は必ず先づ根を張つてそれから梢が伸びる、根が出來て枝を延ばすのです』と言はれた。『根さへよくすれば』『先づ根が張つてから梢を伸ばす』といふことは、誰も知つてゐさうな事で、別段名説でもないかも知れぬが、併しその時、私は非常に深く感動した。實にこの根である。總てのものが根に在る。先づ以て根を良くしなければならぬ、先づ以て根を張らなければならぬと云ふことは、やはり『順序』であると思つて、特に深く感じた譯である。

以上申し述べたのは、人間がこの世に處する上に於て、斯うすることが、眞の進むべき道程ではあるまいかと思つたので、其の間まだ多少研究の至らない點はあるが、私の考へてゐるまゝを披瀝して諸君の偉くなる御參考に供したく又一つには諸君の御批判を仰ぐ所以である。(終)

○本正しからざるものは末必ず倚る。始め盛ならざるものは終必ず衰ふ。　孔子

話の種作家の打明話

不思議の縁

上司小剣



私が大阪の中等學校に二年生だつた頃、船場は八百屋町筋備後町の或るしもた家に下宿してゐた。同じ室にもう一人、杉谷といふのがゐて、これは後に農商務省の役人になつた。ある寒い夜、私は杉谷と机を並べて勉强してゐたが、リーダーの復習にも、幾何の下調べにも飽きて、そろ〳〵欠伸の出かゝつた頃、二人は腕角力を始め、私が二三ばん、つゞけて勝つた。杉谷は口惜しがつて、いきなり突ッ立ち上り、『さア、ほんとの角力で來い』と大手を擴げた。私は十六歲、杉谷は十八歲、年が二つ上なだけ、ほんとの角力となると、先方が强い。組み合つた私は、背後の小窓のところへ、ぎゆう〳〵と押し付けられたが、倒されるまでは、まゐつたと言はない。押しかへさうと、もがいてゐるとたん、小窓の障子が外れて、下の土間へ落ちた。丁度そこがその家の炊事場になつてゐて、買ひ立てのかんてき（七輪のこと）を壞してしまつた。

二人は靑くなつて角力を止め、家のおかみさんにあやまつて、かんてきを辨償すべく、町へ買ひに出た。ところが、いくら瀨戸物屋を探しまはつても、壞したのと同じやうなのがない。どうせ煮焚きの役に立てばいゝのだから、形ぐらゐちがつてゐても、いゝかげんなのを買つて歸らうぢやないか、と私は言ふし、杉谷は、いや寸分ちがはないのを買つて歸らなければいけない、と頑强に主張する。癪にさはつたので、私が、『勝手にしやがれ』とばかり杉谷の頭を一つくらはして逃げると、杉谷は怒つて追つかけて來る。さうして二三尺の距離に追ひ迫つたところ

で、振り向いた私の顔へ、ペットリ痰唾液を吐きかけて、今度は杉谷の方が逃げる。かくして、追ひつ追はれつ、八百屋町筋から松屋町筋の方へ、橋をあつちらへ渡つたり、こツちへ渡つたりして、伊勢音頭の芝居で見る二見ヶ浦の追つかけのやうなことを、一時間以上もやつてゐるうち、たしか南本町一丁目あたりであつたと思ふ。ヘト〳〵に疲れた私は、せい〳〵、苦しい息をしながら、そこの共同便所の中へ隠れようとすると、まんまるく肥つた一人の紳士が、厚く着ふくれて、突ツ立ちつゝ、用便をしてゐる。隠れるのには工合がわるいので、私はすうツと横から脱け出て、板屋橋筋の方へ曲つた。ところが、後から追つかけて來た杉谷は、私がテッキリその共同便所へ隠れたものと思ひ込んで、便所へ突進するなり、用便をしてゐるまんまるい紳士をば、私とまちがへて、よく見きはめもしないで、いきなり背後から兩手でドンと、鐵砲をくらはしたものだ。不意を打たれた紳士は、忽ち前へのめつて、不淨の箇所へ手を突いたが、むく〳〵と起き上るなり、杉谷の襟首を汚れた手で攫んで、烈火の如く怒つた。そんなこととは知らぬ私は、杉谷の姿がなか〳〵見えないので、後戻りして探すと、この始末。二人でわけを話して、さん〴〵あやまつた上、漸く、まんまるく着ふくれた紳士の汚れた手から、杉谷を釋放してもらつた。

後年、私が文壇へ出て、或る年の冬、大阪へ旅行し、關西文壇の人々に、北の新地の菱富で、小歡迎會をひらいてもらつた時、偶然この話をすると、一座は皆笑つたが、そのなかでも特に大きな腹を抱へて笑つたのは、亡き渡邊霞亭先生であつた。往年、杉谷に突き飛ばされて不淨に兩手を突いたまんまるい紳士は、當時朝日新聞へ入り立ての、霞亭先生だつたのだ。『なアンだ、あの時のわんぱく小僧は、君か。……』と笑ひつゞけつゝ言はれた先生の聲が、まだ私の耳の底に殘つてゐる。



上にも上あり

小川未明

學校時代には、別に、親友でなかつたが、溫泉へ行つた、歸りに、彼の近くを通つたので、立寄ると、村長をしてゐた。私は、汽車の時間をはかつて辭すと、彼は、送つてくれた。雪がちら〳〵と降つて、ぬかるみのする田舎道を、彼の巨軀は、反身になつて、大股に歩いた。すると、出遇ふ百姓は、笠や、手拭をとつて、丁寧に挨拶をする。子供は、あわてゝ道を避けて、頭を下げる。けれど、彼は、一瞥もせず、姿勢を變へなかつた。私は、村長といふものは偉いものだと思つた。

停車場の待合室でも、彼だけは、堂々としてゐた。その時、脊の低い、金縁眼鏡をかけた男がはいつて來た。それを見ると、彼は、倉皇として、帽子をとつて、頭を下げた。しかるに、何たることぞ、この小男は、知らぬ顏をして、あちらへ歩いて行つた。これは、どんな偉い人なのか？　汽車の中へ入つてから、私は、哄笑した。



十錢銀貨

中河與一

ずつと前、原稿がどうにも金にならぬ頃、私は夏は裸で暮してゐました。涼しくて經濟的でこれ位いい＊

＊事はない。

或る晩、私は外出したのですが、勿論裸で出るわけにもゆかぬので、安物の浴衣を着てゐました。

私は煙草を買はうと思つて、たつた十錢、大切に手に握つてゐたのですが、どうした拍子か、それを落してしまつたのです。

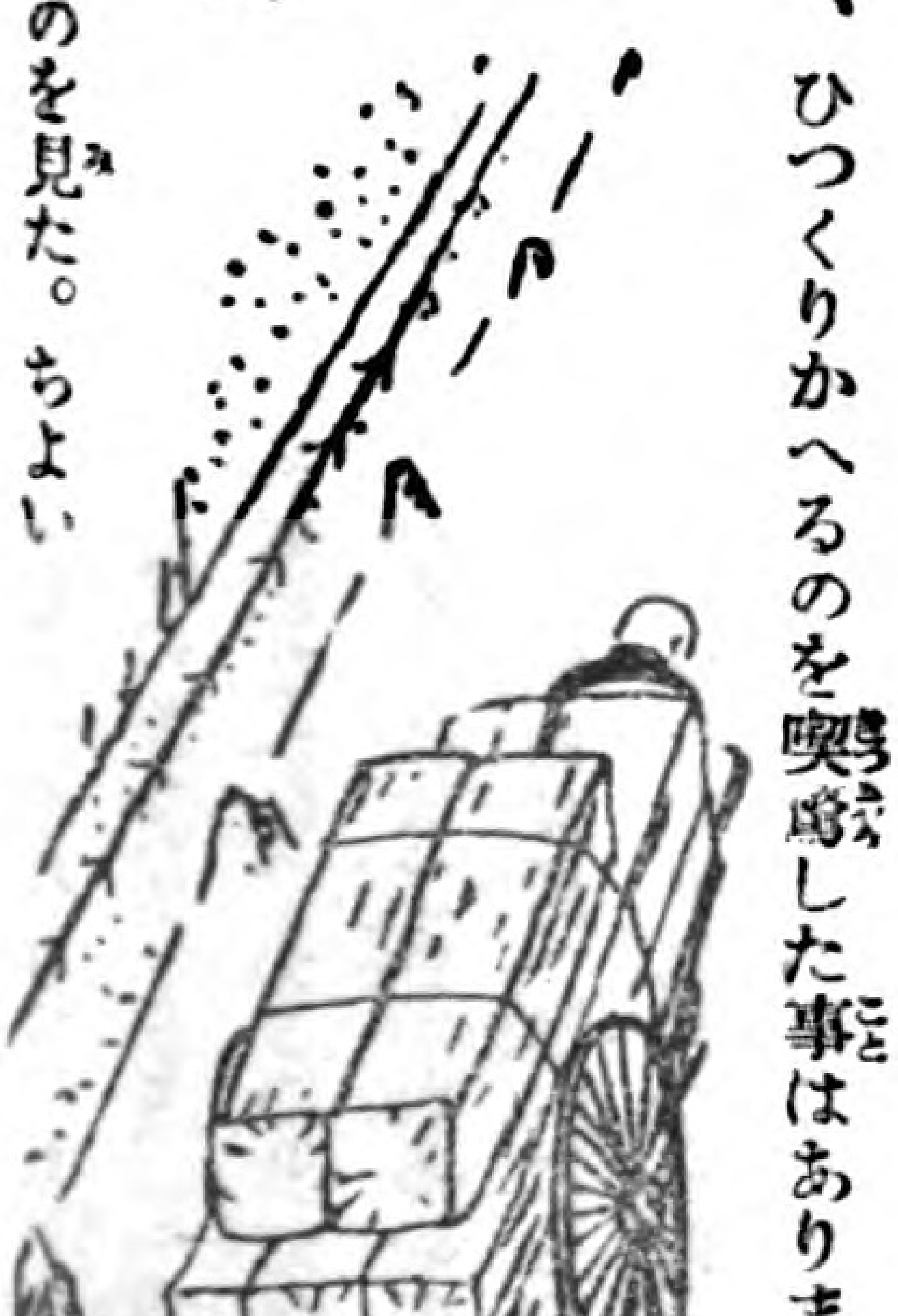
さあ大變。私は自分の失敗を嘆きながら暗い道の上を手探りし初めたのです。すると、二十分ほどしてやつとの事で手にさはつたのです。私はホッとして其れを手に握ると歩き出しました。私は暫くして街の明るい通りに出ました。そして煙草屋の前へ立つたのです。が、その時十錢銀貨がどうしたのか赤い銅貨に見えたのです。私はハッとしました。然し次ぎの瞬間には、それが五圓の金貨である事に氣づいたのです。

十錢落した爲に五圓拾ふなんて！

私はこの時位、人生の失敗と成功とが、時に如斯き不思議な偶然をもつて、ひつくりかへるのを喫驚した事はありません。

然し、私はまた考へる

岡田三郎



或時紀ノ國坂を通りがけに、私は、二人の女學生が荷車のあとを押して行くのを見た。ちよい

とした事にもきまりを惡がる年頃だのに、重荷に苦しんでゐる車挽きに、躊躇なく力をかしてやつた彼女達には好感が持てる。美しき街上所見である。

然し、私はまた考へる。およそ一人の車挽きが運搬し得る荷物の重量には限度がある。この荷をどこそこまで運ぶには、どこの坂を登らなければならないと云ふ事を、あらかじめ考慮にいれてあるべき筈である。だから、最初から、自分一箇の力量に相應するやうに荷物の重量を制限すべきである。さうして、よし、これだけの荷物なら、あそこの坂は多少苦しくとも運搬して行くことが出來ると云ふ信念を持つた以上は、自分で計畫した事はどこまでも自分でやりとほすと云ふ精神で、假に車の後押しをしてやらうと云ふ親切者があつても、その好意を謝し、然も莞爾としてそれを拒絶し、自分のなすべき事をなしとほせるこそ本當だと私は思ふ。

露西亞のパラソル

十一谷義三郎



古い記錄を調べてゐたら、安政元年の十月、露西亞の軍船デイアナ號が、伊豆の下田へ入港した時、その船將プウチヤチン（布恬廷）に應接した筒井肥前守の談話が出て來た——

肥前守は八十幾つの老體であつたが、或る日、招きに應じて、デイアナ號を訪問した。プウチヤチンは、五十餘歳、人品の高い、膽略の備はつた將官であつた。彼は、當時來航の、他の唐人將官等の尊大なるに反して、實にゆき屆いた、實に謙遜な溫情をもつて、肥前守らに接した。彼は、自ら親しく舷梯を降りて、肥前守の老齡を懇ろに劬はりながら、これを送迎した。

その頃の日本人には、文字通り珍味——むしろ、惡食であつた洋食や、洋酒の饗宴が終つて、肥前守一行が、デイアナ號を辭せんとする時、彼は、家苞にと、一本の日傘を贈つて云つた。

——御老體の華やかな愛孃または愛孫への寸志をおうけ下さらば幸甚です……

それは、洋紅色の、絹張りの、パラソルだつた——と云ふ。

この談話の內容は、いろいろ澤山の異國情趣を傳へてゐるが、僕は、特に、このパラソルの件を、なんとなく面白いと思つて、こゝに書いた。現代の露國と日本——そんなことを、ぼんやりと考へながら……



心の日月

菊池寛
田中良畫

傾きゆく心

東京へ行つた磯村からは、永い間何の消息もなかつた。むろん、お友達になつたと云ふわけではなく、たゞ一寸した初對面の挨拶に、ほとんど捨台辭のやうに、(あちらへ行つたら、ハガキ位差しあげてもいいですか)と、向ふが云つたゞけである。

さう云つたことも、もう磯村は忘れてゐるかも知れない。と、麗子は思ひながらも、毎朝郵便受函が、氣になつて仕方がなかつた。

麗子の家は、郵便物は月にいく度と數へるほどしか來なかつたが、麗子は玄關脇の小窓からガラス張になつてゐる蓋をすかして、白い紙片を見出すと、いそいで降りて行つて、蓋を開けて見た。だが、それはよく表に各位樣とかいた商店の下らないチラシであつたり、でなければ、父宛に來る全部印刷した商業ハガキであつたりした。一番悪いときは、ちつとも貰ひたくもない許婚の工藤良吉のハガキであつたりした。

一（おなつかしき麗子どのへ――――君が未來の良人より）などと、書いてあると、麗子は惡魔のかいた呪文を見たやうに、すぐコナゴナに破つてすてた。

　麗子は、毎朝失望した。しかし、翌朝は、またほのかな希望で、郵便受函のガラス張の蓋を見るのであつた。だが、二月三月、麗子の望みは、泡と消えてしまつた。

　だが、初夏の頃だつた。麗子はある朝、ふと見なれない筆跡の繪ハガキを郵便受函に見出した。それは、伊豆戸田帝大水泳部の風光を撮した繪ハガキだつた。

　僕のこと覺えてゐて下さるでせうか。茲へ二週間の豫定で參つて居ります。八月の初には、歸省する筈です。

　　　　　磯村

と、書いてあつた。

　麗子は、その繪ハガキを抱きしめると、周圍を見廻してから、二三度それに頬ずりをした。

『お、うれしいわ。うれしいわ。』

　さう云つて、口の中でつぶやいた。

　おハガキありがたうございました。思ひがけないおたより、ほんとうにうれしく思ひました。岡山にお歸りになつたとき、何かの機會でお目にかゝれたら、どんなにうれしいでせう。

　　　　　麗子

　麗子は、この短い手紙をかくのに、丁度七遍かき直しをした。彼女は作文が上手であつたが、なぜだか思ひ通りのことがちつとも書けなかつた。

　麗子は、自分の返事に、磯村がまた返事をかいてくれはしないかと、心待ちにしてゐたが、返事は到頭來なかつた。

　そのうちに八月になつた。麗子は、磯村が岡山へ歸つて來てはゐないかと思ふと、何となく心がはなやかになつた。しかし、磯村の岡山の家が、どこにあるのかちつとも見當がつかなかつた。もし、教會へでも行つたら逢へやしないかと思つた。日曜日に一度、教會へ行つて見た。しかし、教會の門の前まで行つたが、こんな不純な動機で、教會の門をくゞることが、神に對する冒瀆のやうな氣がしたので、は入らずに歸つてしまつた。圖書館へも、一度行つて見た。カードを探しながら、ひそかに男子閲覽席の方を注意したが磯村らしい姿は見えなかつた。

　その後、二三度、麗子は圖書館へ行つて見た。むろん、本を讀むためであつたが、もしかすればと云ふ氣持も可なり、うごいてゐた。

　しかし、到頭八月が過ぎて、九月になつた。彼女は、磯村に逢ふことは、あきらめてゐた。自分の事など、あの方はお忘れ

になつてゐるのに違ひない、その方が當然なんだもの。ホンの一寸した知合なのだものと思つてゐた。すると、九月十三日だつた。彼女は、思ひがけなく郵便受函に、自分宛の一つの封書を見出した。



暑中休暇中に、一度はお目にかゝれることと思つてゐましたが、到頭おめにかゝれませんでした。殘念です。小生は、明晩出發東上の筈です。お手紙を、ときどき差し上げようと思つても、萬一御めいわくになつてはと思つて差し控へてゐます。では、さようなら、御機嫌よろしく。

磯村

麗子樣

麗子は、その手紙を讀んだとき、心臓が張りさけるやうに、高く鳴りだした。

（あの方も、わたしに會ひたがつてゐて下さつたのだわ。まあ！　まあ！）彼女は、その手紙を兩手でしつかり抱きしめたまゝ部屋の中を、とび／＼をして歩いた。

明晩と云ふのは、手紙の日付から考へると、今夜だつた。いいわ、いゝわ、わたしどんな事があつても、今日驛へ行くわ、どんな都合をしてゞも行くわ。と彼女は自分の心の中で叫んだ。

しかし彼女は、その晩、どう云ふ口實で外出しようかと考へた。東京行の急行が岡山を發車するのは、五時から、七時の間だつた。夜は、一人で外出することを禁ぜられてゐる麗子だつたが、夕方は何とか口實を付ければ出られないことはなかつた。

晩飯は、胸が一杯で、たつた一ぜんしかたべられなかつた。

『お母さん、わたし河野さんのところへ行つて來てもいゝ。』



秋の初めのことなので、戸外はまだ明かつた。

『さう。暗くならない内に歸らないといけませんよ。』

『えゝ。』

麗子は、生れて初めて、噓をついたので、母の顔を、まともに見上げられないやうな氣がした。

彼女は、いつかマクラメレースで、肱突をこさへてあるのを思ひ出した。それから、父が大阪に行つたときのお土産に貰つたインクスタンドが、新しいまゝで、藏つてあるのを思ひ出した。その二つをとり出して、白紙につゝんだ。そして、(おはなむけ)と書いて、假名でれい子とかいた。

岡山から東京へ行く汽車は、夕方三つ出るので、きつとそのうちの一つだと思つてゐた。

岡山驛へ着いて見ると、もう最初の汽車は、プラットフォームに橫づけになつてゐた。遲れて來た乘客が、改札口を急しさうに通りぬけてゐるところだつた。麗子は、もしやこの汽車に乘つていらつしやりはしないかと思ふと、入場劵に鋏を入れて貰ふひまも、もどかしい氣がした。

彼女は、見送りの人の人垣の間を、すりぬけて

列車に近づいた。
　列車の窓を見ながら、小走りに列車に添うて、走つた。すると、一番おしまひの三等車の、丁度中央のところに、六高生が四五人集つて、車窓から首を出してゐる麥藁帽の青年とはなしてゐた。
　それは、まぎれもない磯村だつた。
　麗子が、それと氣がつくより前に、磯村が叫んだ。
『やあ！　皆川さん！』
　磯村の聲は歡喜にふるへてゐた。
『…………』
　麗子は何も物が云へなかつた。たゞ、彼女は耳のつけねまで眞赤にして、磯村の顏を見上げて笑つてゐた。
『僕を見送りに來て下さつたのですか。』
『えゝ。』
『ありがたう、ありがたう。感謝します、感謝します。』
　磯村は、帽子をとつて、うれしさうに頭をいく度も下げた。
『あら……』
（そんなにお禮なんか、おつしやらなくつても）と、麗子は云はうとしたが云へなかつた。
『僕一度歸ります。』
　さう云つて、磯村が乘降臺の方へ廻つて來たとき、發車のベルは、けたゝましく鳴りひゞき出した。
　磯村は、プラットフォームへ降り立つことが出來なかつた。
『どうも、ほんとうにありがたうございました。僕が、あんな手紙を差しあげたばかりにこんな御めいわくをかけて。』
『いゝえ。』
『お手紙をときどき差しあげたいのですけれども、御めいわくかと思ひまして。』
『いゝえ。どうぞ……』
（もつとお手紙を下さい）と云ひたいのが云へなかつた。外にも、もつと云ひたいことがあるのを、麗子はこらへて磯村の顏をぢつと、見上げてゐた。麗子は眼がしらが急に熱くなつて來た。磯村が、麗子を見る眼も、感激にうるんでゐた。
　發車のベルは忽ちとまつた。列車は、徐々にうごき出した。何と云ふ短い時間だつたらう。麗子は、手を差し出したかつた。磯村も、お別れの握手をしたかつた。しかし、心はともかく二人の間は、それほど形の上では、進んでゐなかつた。たゞ麗子は、盛りきれないほど深い感情をこめて云つた。
『さようなら、御機嫌よう。』
『貴女も。』
　麗子は、引きずられるやうに、列車につれて一二間走つた。列車は、徐々に速力を加へ、去つた。



『あつ！』

麗子は、磯村に贈るべく右の手に持つてゐた紙包を渡してゐないのに氣がついた。

彼女は、列車を追ひかけて走らうとした。すると、磯村を送りに來てゐた六高生の一人が、すばやく麗子からそれを受けとると、五六歩走しつて上半身を車外に出してゐる磯村に手渡した。磯村は、その麗子の贈り物を高く右の手に差しあげて、麗子の方にさし示した。

『ありがたう。』

さう云つたらしいが、それはもう物音にまぎれて麗子にきこえなかつた。

言葉なき誓

その後、磯村と麗子の交渉は、ずーつと進んでしまつた。麗子が、卒業する一月前に、磯村に書いた手紙は、次ぎのやうだつた。

二月の空が、だん〲春らしく青味がかつ

て參りました。もう霜は、ちつとも置かなくなりました。東京よりは、春のおとづれが早いのでございますわ。

卒業が、だん〲近づいて來ました。それと同時に、わたくしの結婚問題が、……あの憂鬱な結婚問題が。田舍の人達は、どうしてから結婚と云ふことを、重大視するのでせうかしら。女性にとつて、結婚より外に、何もなすべきことがないかのやうに。わたくし、今のところ結婚なんか、ちつともしたくございませんの。わたくし、家で許してくれましたら、目白か、でなければ津田英學塾かへ參りたいのでございますの。そしたら、日曜日にはきつと、貴君にお目にかゝれますわね。そんな實現の可能性がちつともない空想に耽るのが、今のわたくしのたつた一つの樂しみでございますの。結婚！　結婚！　結婚なんか、兄に唸はれて了へですわ。ほんとうに、いやでいやでたまりませんの。

どうにかして、わたくし結婚したくございませんの。そんな、そんな、心に浸まぬ結婚なんかと思つてゐますの。でも、わたくしたつた十八でせう。そして、力になる兄も姉もございませんの。それに、御存じの通りの母ですもの。あなたばかりが、心の力ですの。でも、貴君は、東京にいらつしやるし、それに私のことなんかで、一寸でも御心配をおかけしたら、すまないと思つてゐますわ。でも、お手紙だけでも下さいませ、私の力になるやうな。そしたら、きつときつと、わたくし勇敢にこの難局が切りぬけられるかも知れませんわ。

兄様　　　　麗子

それに對する磯村の返事は、かうだつた。

お手紙拜見しました。貴女の御結婚の話は、僕をも憂鬱にさせます。貴女のやうな心も身體も淨い方を、どうして、そんなに早く家庭と云ふ荷車に縛りつけなければならないのでせうか。天がける天馬のやうに、貴女は、もつと自由に青春の大空を走つて頂きたいと思ひます。貴女が、心にしまぬ良人に、あなたの珠のやうな御手を差し出される光景を想像すると、僕の胸は義憤の炎に燒かれるやうです。現代の家庭制度や、結婚制度を呪ひたくなります。でも、僕は貴女にかうして頂きたいとか、かうなさつた方がいゝとか云へる何の力も資格もありません。僕に力のないのは、殘念です。僕がせめて、大學でも出てゐたらと思ひます。それに、あなたの生涯の運命に拘はるやうな、大事件に口出しすることも[illegible]しいやうな氣が致します。しかし、貴女が[illegible]て、

御兩親に道理を說いて、當分延期なさることが出來たら、僕はどんなにうれしいでせう。僕が、大學でも出ましたら、誓つて貴女のためにどんなお力にでもなりますから。

晃

麗子樣

二人は、あきらかに愛を感じ合つてゐた。しかし、眞面目な二人は、愛を愛として表すことを愼しみ合つてゐた。だから、麗子は（どうかして、貴君が大學を卒業なさるまで結婚いたしませんから、將來は私と結婚して下さいますか）とは、書かなかつた。磯村も亦（どうにでもして、私の大學を出るまで、結婚しないで下さい。私が、大學を出ましたら、必ず貴女をお迎へしますから）とは、書かなかつた。

しかし、二人の氣持は、それに近いものだつた。なまじひ、戀しいとか愛するとか、なつかしいとか、親愛なるとか、そんな形容詞を投げ合ひする愛人同志よりも、二倍も三倍も深い氣持だつた。

卒業式のあつた晩、麗子は兩親から呼ばれた。

父は、いつものやうに食後の番茶を飲んでゐた。

『母さんからお前に話があると云ふけに……』

と、父は云つた。こんなとき、何か云ふのはきまつて母だつた。

『ねえ、れいさん。お前も、今度學校を出たから、良吉との式は四月の初めに、擧げたらどうぢやらうと思ふんぢやが……』

と、母はきり出した。どうせ、いつかはかう云はれるだらうと思つてゐたが、いくら豫期してゐても、れい子は水を頭へかけられたやうな惡感を感じた。

『……………』

れい子は、返事が出來なかつた。

『良吉は、去年から、學校なんか卒業せんでもえゝから、早う式をあげてくれと云つて、せがんだけれど、せつかく學校でよく出來るお前ぢやけに、卒業させないかんと云うて、待たせてあつたんぢや、なあ四月の初でえゝぢやらうお前も。』

母は、今まで待つてゐたのが、恩惠であるかのやうに云つた。

『でも、お母さん。わたし、まだ結婚なんかしたりたないわ。二十になるまで、待つて貰へんかしら。』

麗子は、一生懸命になつて云つた。

『そんな子供のやうなわが儘云ふたらいかん。二十まで待つたら、どうと云ふことはないんぢやもの。早う結婚して、早う子供でも出來た方が、先きへ行つて樂が出來るんぢやも。』

良吉との間に、子供が出來ることを考へると、麗子は身ぶるひするほどいやだつた。

『お父さん。わたし、もう少し待つて貰へんかしら。』

麗子は、哀願するやうに、父の顔を見た。肉親の父だもの、自分の氣持が、少しでも通じないことは、あるまいと思つて。

父は、さすがに目を伏せながら云つた。

『さう。わしは、半年や一年は、どうなつてもえゝと思うとるんぢやけれど……』

さう云つた父の言葉を、母はすぐ妨ぎつた。

『まあ。何を云ふんぢや、あんたは。こんな事は、きめる時に、キチンと定めんと、ズル／＼べつたりになつてしまふんぢや。女學校を出て、娘がブラ／＼してゐるなんか、あんまりえゝもんぢやありやせん。』

母は、父を押へつけるやうに云つた。母には頭の上らない父だつた。麗子は、父の援助を求めることは、思ひ切らねばならなかつた。



『な、れいさん。お前だつて、良吉と一しよになることは、前から知つてゐることだし、良吉だつて、前からそのつもりでゐることだし、わたしだつて、それを樂しみに、お前を育てて來たのだし、今更一年待ての二年待てのと云へた義理ぢやないと思ふんぢや。これ御見、良吉はこれを麗さんにやつてくれ云うて、昨日送つて來たんぢや。』

さう云ひながら、母は先刻から膝の上でいぢつてゐた指輪らしいサツクを、麗子の前に差し出した。

だが、麗子はその方を見ようとしなかつた。

『さあ、一寸見てお見！　田舍では、一寸見られん品ぢやぜ。』

母はさう云ひながら蓋を開けて麗子の方へ押しやつた。それは、ルウビイの周圍を、小粒のダイヤの輪で、つつんだ指輪だつた。しかし麗子はそれを、ち

らりと見たばかりで手にふれようともしなかつた。

『な、良吉はあの若さで、もう百二十圓と云ふ月給取りやぜ。それに專務さんのお氣に入りで、先々は幾何でも引立てゝくれると云ふけに、生活の心配なんかちつともせいでよいし、舅姑はなし、こんなえゝ話はないおやないか。』

と、母は今までに、いく度も云つたことを、またくり返して云つた。



麗子は、うつむいたまゝ、だまつて、きいてゐた。無念の淚が、だん／＼たまつて來るのを、抑へてゐたが、とうとう抑へきれないで、疊の上に、一粒二粒落ちた。

母は、目ざとくそれを見つけた。

『まあ、お前何が不平で泣くんぢや。親が、こんなに心配しとることを、何が不平で泣くんぢや。わたしが、そんなにお前さんの不爲をして居るかしらん。不承知なら、不承知だとハッキリ云つておくれ。良吉が嫌なら、嫌ひだとハッキリ云つておくれ。えゝ、どうせわたしの子だもの、ロクなもんぢやありませんよ。あたしはあなたのほんとうのお母さんのやうな立派な人と違ふんぢやもの。良吉が嫌ひなら嫌ひだとハッキリ云つておくれ。あゝ口惜しい。八つの年から、わが子同然に育てゝやつたお前から、こんな目に會はされるなんて、あゝ口惜しい。口惜しい。』

それは母が、いつものくせのはげしいヒステリイの發作だつた。

『おい。そんな聲を出して、近所へ聞えるぢやないか。何も、麗子は嫌ひだと云つてゐるわけぢやないんだらう。なあ、麗子！』

父は、母をなだめながら、麗子に訊いた。父の目には、わが子に哀願する悲しみの色が、うごいてゐた。麗子は、父の心を考へると、次ぎのやうに返事せずにはゐられなかつた。

『別にわたし……』

『それ御覧、別にいやだと云つてゐるわけぢやないんぢや。』

『だつて、こんなめでたい話に、涙なんかこぼして……』

母は、まだたけりたつてゐた。

『なあ、麗子！　お前もいろ〳〵考へもあるだらうが、家中が圓く收まるやうに、こゝは一つ辛抱してくれんか、なあ麗子！』

父は再び哀願するやうに、麗子を見た。母の目をしのんでは、麗子をいたはつてくれるやさしい父だつた。

『なあ、麗子！』父は、くり返して云つた。

『えゝ、わたし……』

『四月の初でもえゝだらう。』

『…………』

『それでえゝだらう。』

『えゝ……』

麗子はつぶやくやうに云つた。しかし彼女の心には、良吉と結婚しようとする氣持は、少しも動いてゐなかつた。（つゞく）

麗子の身の上は一體どうなるでせう？

あゝ可憐の麗子！　いとほしき麗子！　投げられた運命の賽ころは、餘りに、いたましいものであつた。結婚の日——それは何と藻搔いても、最早數日の後に迫つてゐる。家にあつても、外に出ても、いやな良吉の哄笑がどこからか聞えて來る。今迄折角培つて來た彼の女の清い戀も、流星の如く淡く消え去るのであらうか。それにしても麗子の胸には強い純情が漲り溢れてゐる。事件は如何に展開するであらうか。次號をお待ち下さい。

更に此の外本誌の連載小說は？

キング掲載の小說は、いづれもスバラシイ大傑作として、盡く天下に定評あるものばかりです。作者諸先生の眞劍さ！　熱心さ！　それは實に涙ぐましいばかりであります。次號に於ては麗筆愈ゝ冴え、才藻益ゝ輝き、どれもこれも興味白熱の大場面續出。必ずや讀者諸君を熱狂亂舞せしむる事と信じます。是非お樂しみにしてお待ち下さい。

政界無駄ばなし

○閣下除けの訓示

野人大臣の稱ある小泉遞相、『閣下、閣下』と奉られるのが大嫌ひ。そこで、よい機會もがなと思つてゐると、この間の貯金支局長會議だ。野人大臣やをら立つて咳一咳『皆さんは大臣といふと直に閣下扱ひになさるが、遞信大臣といへばつまり郵便屋の親方で、若い人達のラブレターを一刻も早くその愛人のもとへ屆けるのも役目の一つでありまして……』とやつたので並居る人々大喝采。後でニヤリ秘書をかへり見た小泉遞相『君、これが即ち閣下除けの訓示といふやつさ』



小泉遞相

○松田拓相かつがる

某日、松田拓相と山本前滿鐵總裁とが新橋の某所で會飮したことがあつた。席上一老妓があつて。『先生、たとへばですね。扇を使ふにしましても、半分づつ開いて使へば、五年や十年使へませう。もしそれ一コマづつを使ふと致しますと百年は使へませう。いつそ扇を開いたままにして、人間樣が顏を扇の前で動かして風を起せば永代使へませう』と洒洒煙にまいたものだ。流石の負けず嫌ひの拓相もすつかり感心してしまひ、人の好い宇垣陸相に此の流を話すと、陸相『君、そりや落語にあるぞ』に、拓相閣下口惜しがり『ひどい妓めッ』



松田拓相

○マルツル鬼總監

カフエー征伐、ダンスホール退治と盛に鬼總監ぶりを發揮せる丸山警視總監が首相官邸でバッタリ會つたのが山道鐵道次官。『やあ、丸山君、けふ君は東京驛へ行つただらう。どうも後姿が君にそつくりだとは思つたが、帽子を冠つてゐられたので目じるしにしてゐる頭が見えず、人違ひをしちやいかんと思つてつい聲をかけずに失敬したよ』といふ挨拶。一名マルツル總監で通つてゐる頭のハゲ上つた丸山總監『日頃素直な紳士だと思つてゐたが、案外君も皮肉屋だね』と兜ちやない――帽子を脱いでツルリと苦笑。



丸山警視總監

○達磨さん節の酒

斗酒なほ辭さなかつた酒豪高橋是清翁もだん〳〵節酒して、この頃は晩酌僅かに五勺くらゐ。その爲二十三貫もあつた體重が、十四貫七百となり、氣分も輕快となつて、毎日二時間ぐらゐ讀書しても、ちつとも疲れを覺えない。達磨翁大喜びで『この分なら長壽疑ひなしぢや、政策は大反對ぢやが酒だけは濱口内閣流の緊縮に限るよ』はめでたし。



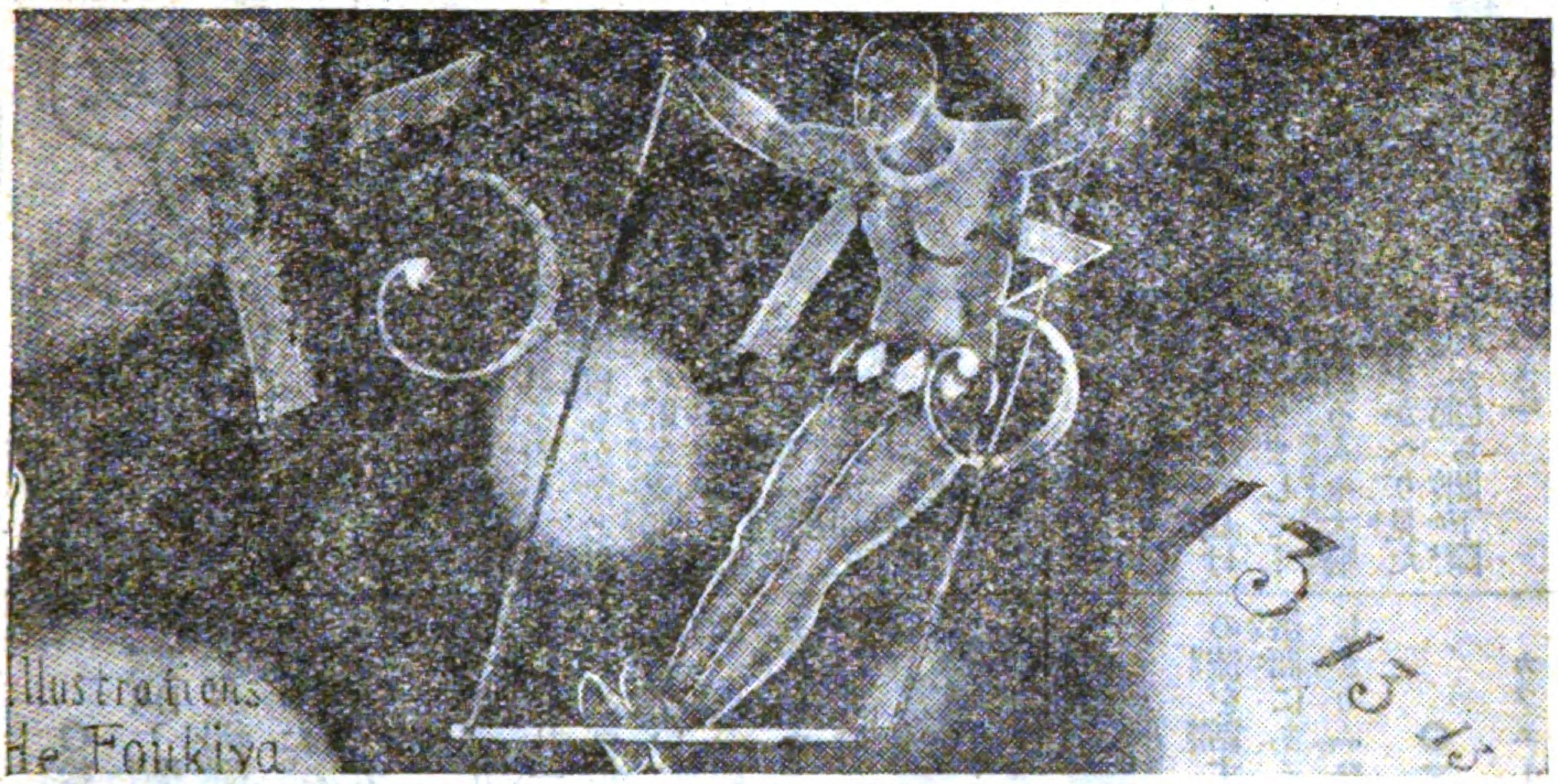
高橋是清氏

○望遠鏡持參の客

首相官邸裏の鈴木書記官長の官舍は、坐つたまゝ麻布、赤坂一帶を見下ろせるといふ景勝の位置にあるが、この頃不思議と望遠鏡を持つたお客が時時訪問するので、どうしたことだらうと思つてゐると、實は溜池ビルの最高階で熱心に踊るダンスがこの官舍から見えるのだとわかり鈴木翰長すつかり感心して『さても世の中には頭のよい人があるわい』だとさ。



鈴木富士彌氏



小説 輕業師

賀川豊彦
蕗谷虹兒畫

一

大天幕の中は、二千人に餘る多數の觀客で一杯になつてゐた。強い葉卷煙草の煙が、春霞のやうに、觀客の上を蔽ひ、中にはその爲に咳をしてゐる者もあつた。樂隊は勇ましくワツフ・オン・ラインの血の湧くやうな曲を奏してゐる。

今しも、イタリーの美しい娘が、四頭の馬を使ひ分けて、その上で鯱鉾立ちしたり、走つてゐる四匹の馬の脊を次から次へ飛廻つて、天女のやうに振舞つてゐる眞最中であつた。

俊太郎は、控室の天鵝絨で作つたカーテンの隙から美しい曲馬娘ソフイヤの顏と、彼女が倦かさず觀客を釣つて行くその呼吸をぢつと見てゐた。場内に撒かれた小砂が、馬の四肢にかけられて輕く舞ひ上る。ハケニー種の壯大な筋肉を持つた四頭の馬は、艶々したその皮膚を電燈に光らせて、氣持がよい程輕快に飛んでゐた。ソフイヤの美しい肌着にちりばめられたダイヤモンドまがひの結晶硝子が、サーチ

ライトに反射して星のやうに光つた。静かにしてゐる時、一目見るだけでもおつとりさせるこの娘の美しい顔が、出蔵前のふつくりした股と腕とによく釣り合つてゐた。彼女が天女のやうに馬の脊から脊へ飛廻ると、天馬に乗せられて、東雲の空を馳つて行く戀神ヴイナスの實物のやうに見えた。

『迚も俺にはあんな美しい眞似は出來ない。俺のブランコ乗りなんか、ソフイヤの曲馬に比べちや、月とすつぽんの隔てがある。あゝ……それに俺はあの娘のすぐ後に出て、この醜いあばた面と脊の丈の短い體軀を見世物にしなければならない。何といふ差だらう。俺は出て行くのは厭だ。それに俺は、昨夜、遊女買ひをした爲に、今日は元氣が拔けてゐる。身體がだるい。少し眼がふら／＼する。こんな時にブランコ乗りをすれば、きつと失敗するに決つてゐる――』

觀客の中には、上流階級のお孃さんらしい人々が多数見える。みんな胸まで露した夜會服をつけ、手に手に鼈甲細工のオペラグラスを持つて、ソフイヤの妙技を倦かず眺めてゐる。輕快なマーチ曲に合せ、觀客のある者は、靴の踵を床板に踏み附け、肩を搖すぶつて、口笛まで吹いてゐた。

『西洋人は何故、こんなに美しいものかなア。その中でもソフイヤはまた特別に涼しい眼元を持つてゐる。何故あの娘は、牛乳色をした白玉と、オパールのやうな青い瞳を持つてゐるのだらう。何故、天はあの娘をあんなに美しく造り、何故俺をこんなに醜く作つただらう？否、道樂した天罰とは云へ、何故ヨーロッパ三界まで日本人の恥曝しに、このあばた面を下げて、下手なブランコ乗りを見せて歩かなければならないだらう？それにもしこれで宙返りする瞬間に落ちでもすればどうしよう――』

二

クリスマスに近いオーストリアの冬は寒かつた。俊太郎は運動着の上に厚ぼつたいマントを引懸けてはゐたが、身慄ひする程だつた。それに今年の春フランスのパリーで遊び過ぎて、サルバルサンの注射をして貰はねばならぬやうになつてから、寒さを感ずる事が頗る鋭敏になつた。梅毒に罹るまで、それ程迄と感じなかつた寒氣が、一寸のことが身に浸みるやうに感ぜられた。その上身體を動かすことは厭になるし、少し激烈な練習をやると、すぐ目まひがした。歳も歳であつた。もう彼れ此れ日本を出てから十三年になる。アメリカで四年、イギリスで四年、そして大陸で五年、俊太郎は日本戀しさに泣かない譯でもなかつた。然し生れ付女狂ひの癖が、魂の髄まで浸み込んで、日本に歸つて窮屈な家庭の生活を送るだけの元氣がなかつた。彼は儲けるだけみんな酒と女に使つてしまつた。そして流れ流れて今年三十一の年になる迄、歐米の空を彷徨いて廻るの

であつた。

彼が軽業師になつたのは、十八の時であつた。最初彼は中學校を半途退學して、米國で苦學したいと云ふ考を持つてゐた。恰度その時彼は、米國行きの軽業師になれば、金も溜るし、洋行も出來ると、大阪のある人から聞かせられ、こつそり一人で、東京淺草の荒木興行部の一員に加はつた。最初彼は玉乘りを稽古させられたが、面白半分に綱渡りを練習するやうになつてから、めき〳〵とその技倆が進歩し、座員一同に認められるやうになつた。

『それなら一生食へる』

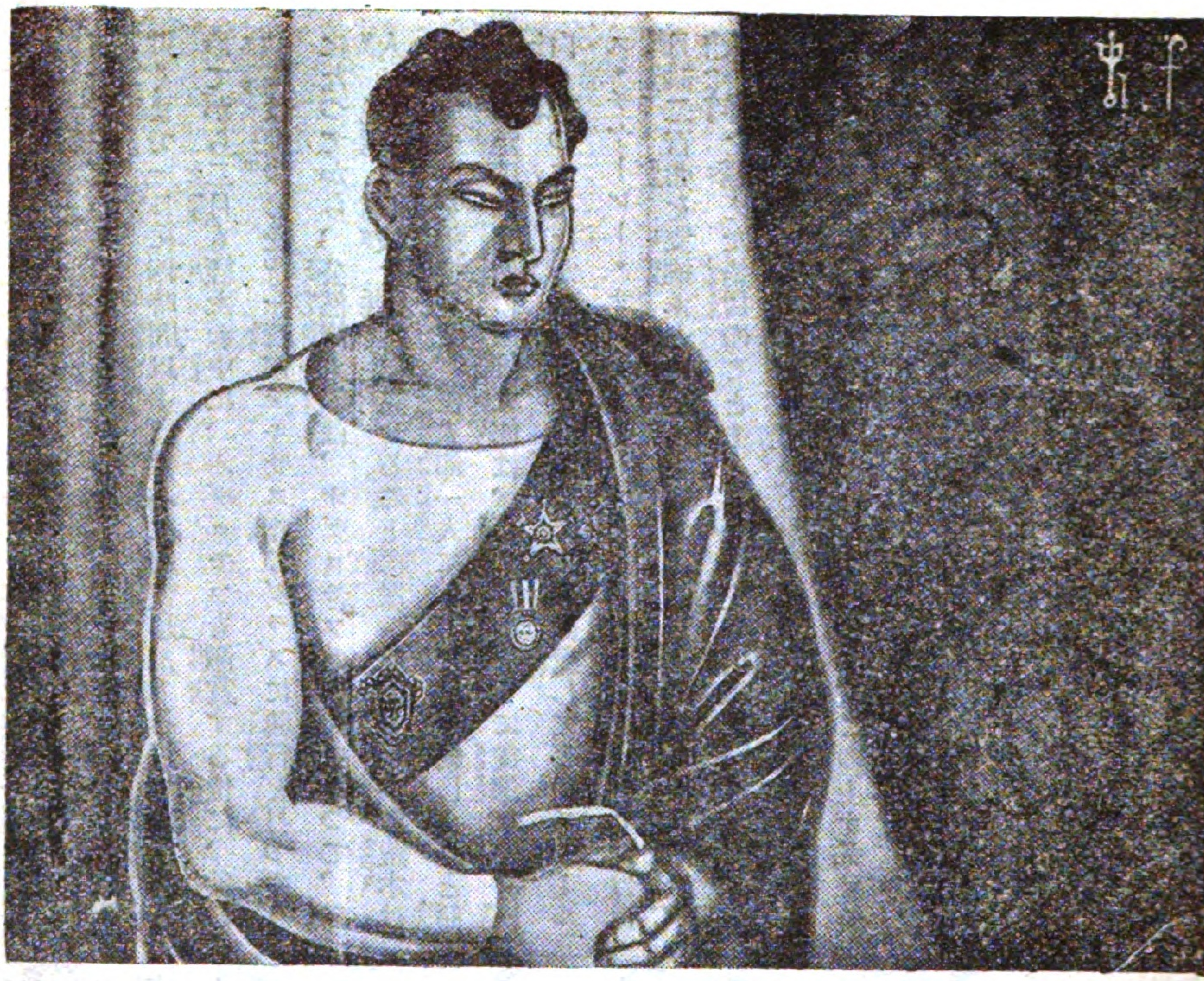
と、座長に保證せられて、間もなくアメリカへ渡つた。俊太郎の綱渡りは、米國到る處のサーカスで拍手喝采を受けた。然し、彼の收入は少かつた。

『綱渡りだけぢや、高い金も出せねえぢやないか、ブランコの宙返りをやるやうになれば、そらあ、月に百弗位は支拂つてもいゝや』

さう支配人の荒木忠一が、チヤプリン髭を撫で下して云つた。その時、ブランコの宙返りをする男は、ロシアから連れて來た今年二十二のオヴモロフといふ青年であつた。荒木は、それだけの事をやらすのに毎月百二十弗を支拂ふ約束をしたことを悔いてゐた。で彼は、俊太郎にブランコの宙返りを練習させて、オヴモロフを追拂はうと腹のうちで決めてゐた。

『宙返りが出來るやうになりやア、そら、喜んで百弗は毎月やるさ』

荒木は、細い眼をなほ細め、險しい聲を出して、そんなに云つた。もうすつかり女狂ひを覺えてゐた俊太郎は、食糧の外に毎月貰ふ六十五弗では迚も足りなかつたので、そろ〳〵ブランコ乘りの練習を始めた。恰度それは、彼がアメリカに渡つて一年半後のことであつた。一行は、コロラド州デンヴァ市でクリスマス興行を打つてゐた。オヴロモフは人の好い青年であつたから、まさか荒木が、自分を追出す計畫があるとは夢にも考へないで、手を取るやうに一々細かに、ブランコ宙返りのこつを俊太郎に教へてくれた。俊太郎もまだ廿歳前ではあるし、中學時代に機械體操をした經驗もあり、一間位離れてゐるブランコからブランコへ宙返りしないで飛付くことはすぐ出來るやうになつた。しかし彼には、オヴロモフがするやうに、逆倒になつて足の甲で自分を吊り下げ、そのまゝ次のブランコに、また足の甲でぶら下ることは、眞似だにすることが出來なかつた。俊太郎は、オヴロモフが片足でブランコに引掛つたり、ブランコの上に鯱鉾立ちしたり、ブランコからブランコへ手を使はないで飛び移ると云つたやうな、手際のいゝ放れ業は絶對に出來なかつた。俊太郎は、オヴロモフの[illegible]も及ばないやうた[illegible]た、



ほと〳〵感心してしまつた。

『人間つていふものは妙な事が出來るものだ。練習のしやうによつては、まるで鳥か蝙蝠のやうに、空中を飛び廻ることが出來る』

　そんな事を思ひながら夜寢ると夢の中で飛行機にも乘つてゐない彼が、魚のやうに空中を泳ぎ廻つてゐる夢を每晩のやうに見るやうになつた。それから間もないことであつた。

『俺は空中が泳げる、いや泳いで見せる。俺は女を絶ち、酒を斷つて、粂仙人のやうに空を飛廻つてやるんだ』

　斯うした無鐵砲な慾望が、彼の胸に突如として湧き上るやうになつてから、彼の技術は一週間も經たない中にめき〳〵と上つた。其代り彼は好きな女買ひも、隱れて飲んでゐたブランデーも止して、神明に契つて宙返りを熱心に練習した。

　その熱心さには破落漢肌の荒木も、流石に吃驚してゐた。

『こうなつちやア、輕業も錢金の問題ぢやありませんなア』

　俊太郎が荒木にさういへば、

『妙技といふものは、錢金を離れて神信心でやらなければ出來ないものと見えるね』

　フランス型に刈込んだ眞黑の髪を荒木は如何にも氣にしてゐるやうに、眞直ぐに上に撫で上げながら、俊太郎に向つて殊勝なことを云うた。

クリスマスが濟んで、デンヴアの興行が打切りになり、天幕が一週間ばかりがら空きになつた時も、俊太郎は朝早くから晩遲くまで一日に四時間以上は熱心に練習した。そして精進を始めてから二月も經たぬ中に、オヴロモフも激賞する位に、彼の技術は進歩した。一行がテキサス州のダラスに興行を打つやうになつてから、公然俊太郎は、オヴロモフの相棒になつて、二人で空中の妙技を觀客に見せることになつた。其頃から荒木はオヴロモフを追拂つて、俊太郎一人にして金を節約しようと話を持ちかけた。然し、俊太郎は、荒木があまりに貪慾なのを面白く思つてゐなかつた。その頃、米人の經營してゐたチャールス・チャーレー・サーカス・バンドは、俊太郎の綱渡りだけに月給二百弗を支拂ふと申込んで來た。然し義理堅い俊太郎は、太平洋を越えた船賃のことや、英語が充分出來ないことも考慮の中に入れて、最初は氣が向かなかつた。然し、荒木は少くとも毎月二千弗か三千弗儲かつてゐるに拘らず、この上オヴロモフを追出して、百弗近く儲けようとしてゐることが、彼の氣に食はなかつた。しかしそれはいろ／＼の理由もあつた。荒木は、サンフランシスコ上陸以來何處で拾つて來たか、別に美しくもなく餘り芳しくない白人の女を一行に加へ、暇があれば、その女などを加へて支那博奕に餘念がなかつた。

さうした事に憤慨してゐた俊太郎は、二年以上も一緒になつてゐた荒木興行部を出て、チャールス・チャーレーのサーカス・バンドに加盟した。チャールス・チャーレーの團體はまた南部の數あるサーカスの中でも特に大きな一團であつて、一行七十人、馬の數だけでも二十頭からあつた。六ケ月位この一行と共に米國の南部諸州を巡業してゐる中に、俊太郎は生れて初めて二千弗といふ大金を貯蓄することが出來た。斯うなると金を貯めることが面白くなつて、彼は好きな女買ひも止め、トランプや賭け事をすつくり止してしまつて、毎日機械的な綱渡りとブランコの宙返りを、一日に二度づつ觀客の前で繰返した。

アメリカに四年ブラ／＼してゐる中に、彼は五千弗貯めることが出來た。そこで彼は、それを資本にして、荒木がやつてゐるやうな曲馬團を別に組織する氣になつた。恰度ヨーロッパに戰爭が勃發する四年前のことであつた。ロンドンに行けば、日本の輕業師の足溜りがあることを聞き、俊太郎は直ちに、意氣揚々とロンドンに押し渡つた。ドックに近いマイルエンドの近くに、プラットを借り、一廉の成金風を吹かせてアイルランド生れの女中迄雇ひ込んだ。

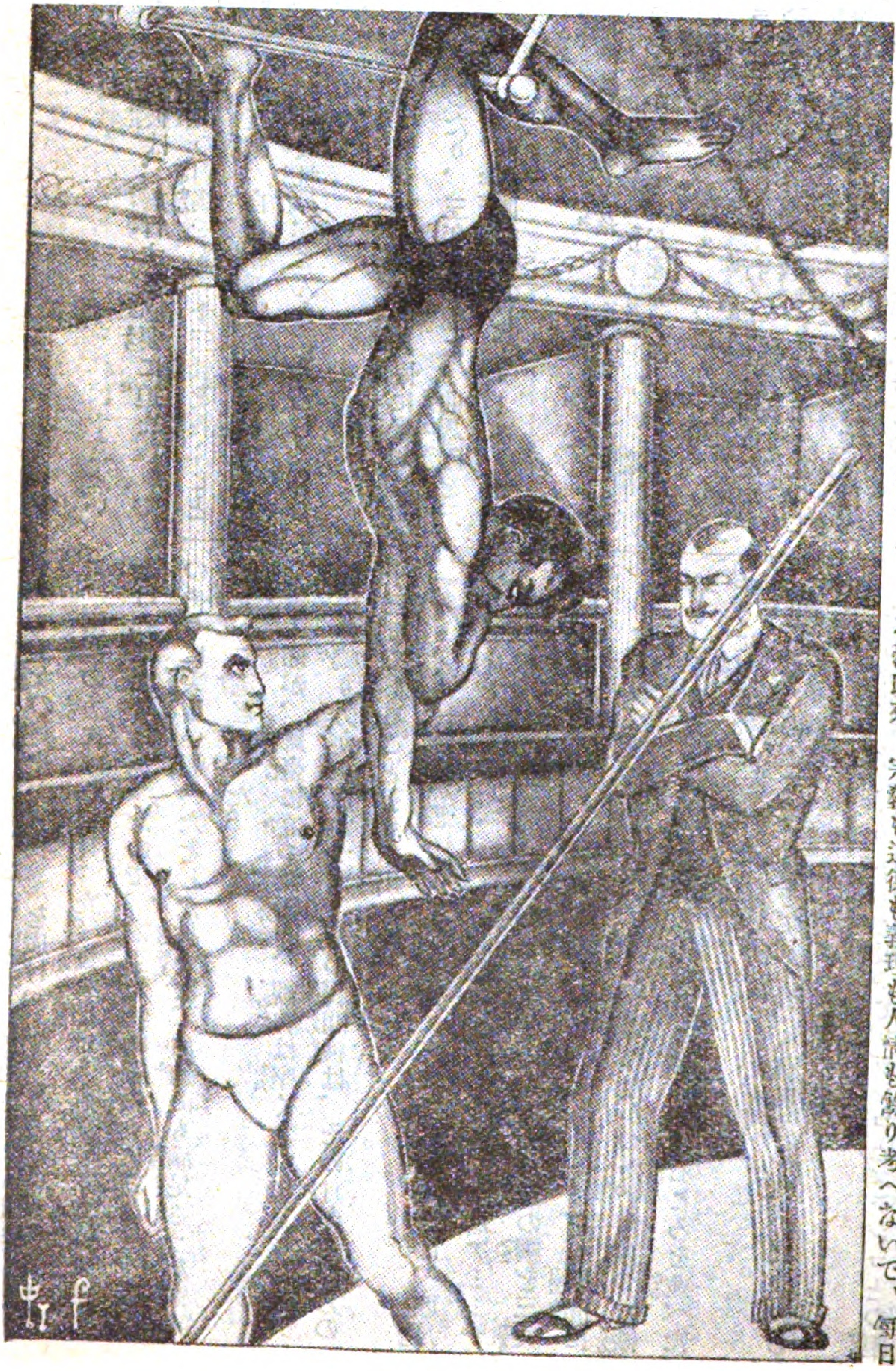
計畫はうまく行つた。日本の輕業師の一行は、英國の各地で、不思議に持てた。英國の四年間は間も無く過ぎてしまつた。しかし其處で自信のついた俊太郎は、フランスの興行を思ひ立つて、一行十三人を引連れ、寄席を中心に興行を打つて廻

らうと、ドーヴァ海峽を渡つた。しかしこの計畫は全く失敗に終つた。フランスの寄席にはイタリーの輕業師が澤山這入つてゐて、日本人などの這入れる餘地は少しも無かつた。その上に、綱渡りをさせてゐた和吉といふ神戸生れの青年が、綱の上から落ちて肋骨を三枚折り、マルセーユの病院で死んでしまつた。その爲に彼は、一千五百法以上の金を空費した。

『斯うしてゐては元も子も食つてしまはねばならない』

斯う氣付いた俊太郎は、一行をすぐロンドンに引上げさせ、そこで曲馬團を解體してしまつた。その時相棒になつてゐた留吉といふ青年が云つた。

『兄貴、矢張り十三つて數は惡いなア、和吉が死んだのは、ロンドンを立つ時に一行十三人で出たから一人省かれた譯だね』



それ以來、宗教も道德も義理も人情も餘り考へないで、毎日

余と女のことばかりしか頭になかつた俊太郎に、恐ろしい一つの迷信を鎹のやうに打込まれたのであつた。それは十三といふ數に對する恐怖であつた。彼は、旅行する必要に迫まられても、月の十三日を避けた。買物の釣錢でも、十三錢を貰ふことを躊躇した。汽車の寢臺の十三號、自動車番號の十三のつくもの、宴會の席の十三人、彼は何故世界がこんなに恐ろしく作られたかを氣にするやうになつた。

それから彼は單獨に、スコツトランド人の曲馬團に參加したり、獨逸人の曲馬團に參加したり、三年半の間に、曲馬團を三つ變へた。最後にイタリー人の曲馬團に參加してオーストリアを巡業することになつた。

年をとると共に彼の技術はだん〳〵落ちて行つた。殊に二十の時フランスでブランコから落ちて足を挫いてから、彼はブランコに對して一種の恐怖をさへ感ずるやうになつた。しかし、彼は、綱渡とブランコの外に生きて行く方法を知らなかつた。それで、何等の感激もなく、何等の興味も持たなくなつてしまつた曲馬團に、彼は一生懸命に噛り付いた。そして彼は、支配人から今にも首を馘られることを毎月氣にかけてゐた。

三

急霰のやうな拍手を浴びてソフィアは控室に引込んできた。身體は汗ばんで、湯立つたやうに眞赤になつてゐた。世話役のイタリー女の婆やが、夜着を廣げ、彼女の身體を受取るやうに、浴場の方に連れて行つた。俊太郎は入れ變りに舞臺に立たなければならなかつたので、右手で接吻を彼女に送ると、薔薇のやうに美しい頰ぺたをした彼女は、如何にも滿足さうな微笑を湛へて過ぎ去つた。

俊太郎が、舞臺に立つた瞬間、觀客は堅くなつてしまつた。拍手の鳴り方が少なかつた。その瞬間彼は、その日が十二月の十三日であることを思ひ出した。

『あゝ、今日は日が悪いや、この前フランスで落ちた日は、四月の十三日であつたが、今日も間違へなければいゝがなア……』

彼はつる〳〵と勢よく天井から垂れてゐた一本の綱を三丈以上も上に登り、ブランコに輕く身を乘せかけた。その瞬間にも十三といふ數が頭にこびり付いて離れなかつた。ちらつと觀客を上から見ると、控室から見た形と變つて、石ころを並べたやうに見えた。

『若しもこの上にでも落ちて、人でも怪我さしたらどうだらうか』

そんな事も考へた。今日に限つてブランコとブランコとの距離が、迚も廣いやうに考へられてならなかつた。もう一間近ければと念ずるやうに考へもした。ちらつと救助網の張り具合ひを眺めてみた。

『大丈夫だ。落ちても大きな怪我はあるまい。十年前の若い氣持で一つ揺つてやらう』

さう思つた瞬間に、彼はブランコを輕く揺り始めた。

一振り、二振り、ブランコはだん〳〵幅廣く揺れる。今日に限つて、ブランコの棒が水平になつてゐないことを著しく感じる。その瞬間にまた十三といふ數と、昨夜遊女遊びをしたけ惰るさとを頭の中で想ひ浮べた。吐き氣が來る。眼がちら〳〵する。

また一振り、二振り、こんど彼は足の甲でぶら下つて蝙蝠のやうな眞似をしなければならない。それは容易である。ブランコの上で鯱鉾立ちして身體を揺られなければならない。それも容易である。やつてゐる中に、大分身體もしつくりして來た。十三年來、練習し來つた筋肉が、しつくり器具に適應する。彼が思ひ切つて乘つてゐたブランコから、靜止してゐたブランコに飛移つた瞬間、下の方から拍手が捲き起つた。

『大丈夫、大丈夫、この調子ぢやア、宙返りは何のことアないや』

飛移つたブランコを彼はまた揺り始めた。然しどうした具合か、今日はブランコの振動の調子をどうしても合すことが出來ない。吊り具合が悪いためか、止り木が斜になつてゐる加減か、一方の振動數と、こちらの振動數が平行しない。先方のブランコが此方に寄つてきた時、こちらのブランコもその力に接近しなければ、宙返りの時に取つ摑まへる機會を逸する。それが今日に限つて、此方が追かけた瞬間に、先方のブランコはあつちへ逃げて行く。

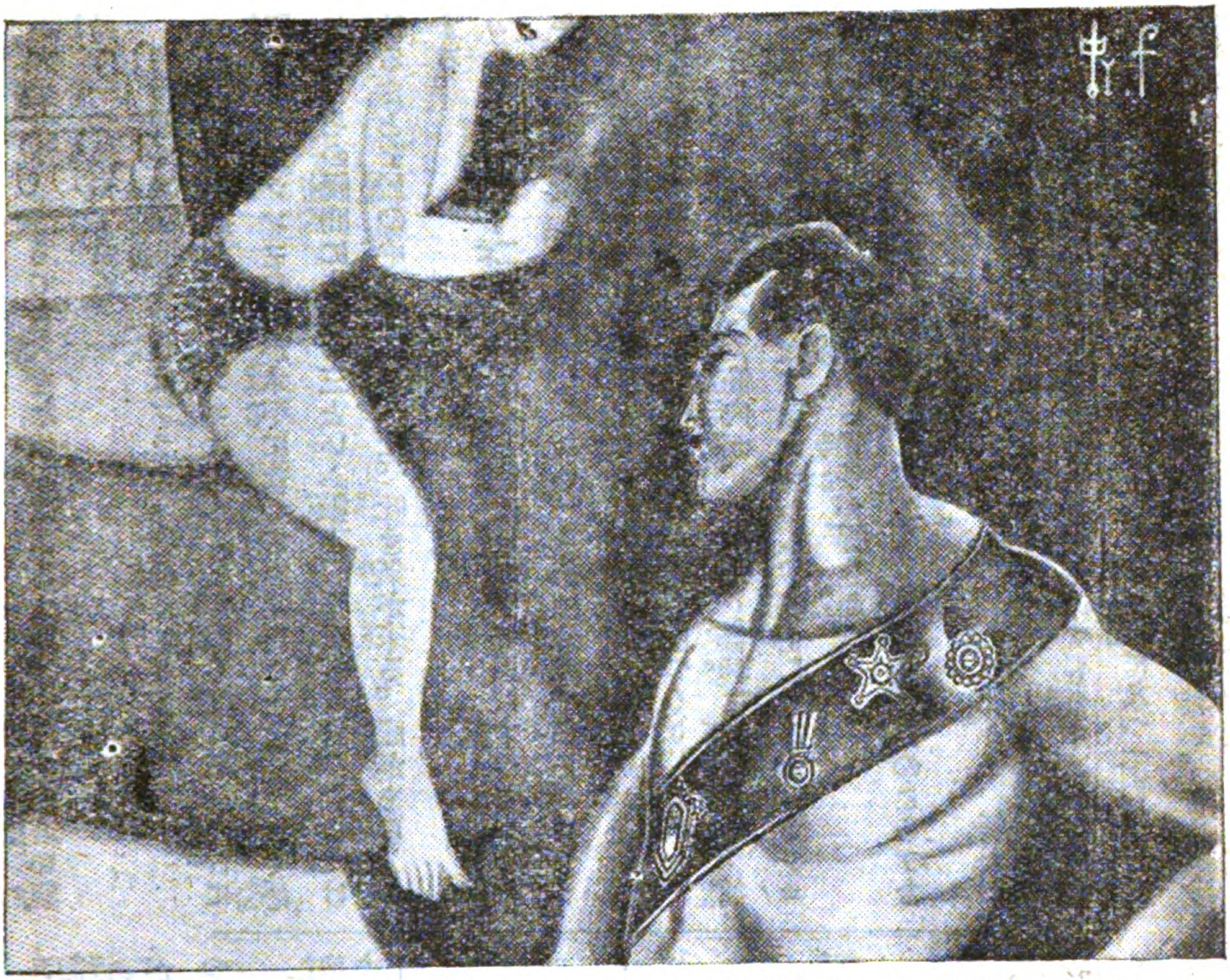
觀客の視點は、凡て俊太郎の一擧手一投足に注がれてゐる。彼等は拍手がしたくてじれつたがつてゐる樣子であつた。俊太郎は、二つのブランコを乘り變へ、乘り變へ、放れ業を拔きにして、二つのブランコの調子を調へようとした。然しどうしてもそれがうまいこといかなかつた。觀客の中には喚いてゐるものもあつた。斯うなると氣が挫けて、ブランコが馬鹿に高く見えて仕方がない。催促の拍手があちら此方からばら〳〵に鳴る。俊太郎はます〳〵じれつたくなる。眼がくら〳〵して動悸が激しく早く打つ。

『あゝ、十三日！輕業師になつてからの十三年目の十三日、親不孝の十三年目、えゝい！一か八かやつてしまへ』

彼は十餘年間の練習と力量を信じて、宙返りをやることに決意した。厭な拍手が下から響いて來る。二つのブランコがちぐはぐになつて調子が亂れてゐる。

『こんな時に宙返りすることは、まるで落ちる爲に宙返りするやうなものだ』

それで彼は、もう一度眼を開いて他方のブランコに乘り移



り、振動を調節せんとした。然しその時、觀客はもう辛抱しきれなくなつたと見えて、注意せよとの意味で手を滅茶苦茶に打つた。そこには技術者に對して、同情も思ひやりもなかつた。宙返りは一つの商品であり、それを見せないことは曲馬團の信用に拘ることであつた。確かに、大きな廣告ビラにも、ブランコからブランコへの宙返りが、繪になつて載せられてあつた。觀客からの冷笑するやうな拍手が繰返された時、俊太郎の頭の中に浮んだ幻は、廣告ビラのブランコ宙返りの繪であつた。

『落ちても下に救助網が張つてあるのだから、少し位の冒險はやらねばなるまい』

斯う思つた瞬間、彼は、足の甲で引懸けてゐた一方のブランコを素早く後方に跳ねて、電光の如く空中で宙返りをし、素早く兩手で他方のブランコに喰付いた。遠方から拍手の音が聞えた。彼は下に落ちなかつたのだ。

『あぶない商賣だ。こんな危い商賣をしなくとも食つて行く工夫はいくらでもあるだらう……今度は宙返りして足の甲でぶら下らねばならぬ』

遠くなつてゐた氣が少し恢復して來た。然し何だか他のブランコに足の甲でぶら下る元氣が、もうなかつた。何だかこんどは落ちるといふことを蟲が知らせる。然し、それをやら

なければ、看板に僞がある。

ゆらり、ゆらり、二つの足の中でぶら下つたまゝ、彼はけだるい身體を振るが、さて、先方のブランコが此方に近づく瞬間を見つめてゐた。四振り五振りするけれども、どうしてもよい位置に先方のブランコがやつて來ない。然も、愚圖愚圖して居れない。こんどは拍手が鳴る前に、もう一度宙返りを見せてやらねばならぬ。

『第一回が、兎に角うまいこと行つたやうに、こんども巧いことゆくだらう。凡てが運だ』

斯う思つた瞬間に、彼はまた宙返りを決行した。ヒユーつと冷い風が、彼の周圍に捲き起つた。一方のブランコが彼の目に入つた。彼は兩足を伸ばして、ブランコの止り木に引掛けようと試みた。右の片足だけが引掛つた。次の瞬間に意地悪いブランコは、その右足からも辷り拔けて、反對の方向に逃げ去つた。

そして、俊太郎は、眞つ逆倒に、舞臺の上に墜落した。

その瞬間に彼は、親不孝をして、大阪から逃げ出してから、昨夜の女狂ひ迄の事を、フイルムをばらまくやうに見せ付けられた。

『罰當りが！ これは神の刑罰だ！』

完全に張られてゐた筈の救助網の一つの角が切れて、彼の身體が舞臺の板通の上に、手酷く投げ付けられた瞬間に、彼は天の一隅から大きな聲で、さう叫ぶ聲を聞いた。

觀客は總立ちになつた。座員は馳け付けた。幸ひ彼は頭部に、何らの損傷を受けてゐなかつた。然し、自分一人で起上つてみようとしたけれども、兩足が棒のやうになつて、全く自由を失つてゐた。身體の右側を激しく舞臺の上に叩き付けたと見えて、右の耳と脇腹と腰が、斬り付けられたやうに痛んだ。

彼は大勢にかくれて控室に這入つた。そして、其處からすぐウヰンナ市の一流の大きな病院に入れられた。そこに一年居つた。溜めてゐた四五千弗の金はすぐ消えてしまつた。彼は無一文になつてカトリツク教會の施療病院に入れられた。そして六ケ月の後公使館の手によつて、日本に送還せられることになつた。

四

師走と云へば、いくら南の國の阿波でも、相當に寒かつた。況して、碌々着物も着てゐない居ざりの俊太郎には、猪山下しの寒風が、骨の髓まで浸み込むやうに感ぜられた。

荷車、自動車、馬力、車、人力車、それに、肩で荷を擔いで行く多くの行商人の間を縫うて、船着場の徳島から、立江の地藏さんまで二里半の道を行くことは、なか〳〵容易なことではなかつた。二つの足が、立派に揃うてゐて歩くのとは違ひ、足腰が立たないで、芋虫のやうに一里の道をやつと一日かゝつて

轉がつて行く乞食の身にとつては、凡てが物憂いことであつた。

俊太郎は勝浦川の堤防を小松島の方に越えた時に、堤防の中腹でさめざめと泣いた。それは四國遍路に廻つてゐた親子連れの女巡禮が、彼を不憫と思つて一錢の金を投げ與へてくれた瞬間であつた。

親に叛き、世に叛き、放蕩のありつたけを盡して、胡麻化しの一生を送つてゐた天罰に、今は居さりになつて蟲のやうな生活を送らねばならないのだ。贅を盡したパリーのホテルで、金に飽かせて遊び狂うた三年前の十二月と、三年後の今日を憶ひ合せてみると、自分ながらに人生の數奇な運命にあきれてしまふのであつた。日本の金に直して一萬圓以上も持つてゐた彼が、今日人に一錢の銅貨を惠んで貰はねばならぬ境遇になると、一年半前にどうして考へ得られたらうか。

『しかし、有り難いことだ、一錢の金でも下さる人心は、ほんとに御大師さまの御慈悲だ』

俊太郎は、笈に菅笠姿の女連れが、遙か向ふの藪の陰に消えてしまふまで、合掌して二人の影を拜んでゐた。

『何でも、お大師さまの御慈悲で腰が立ち、もう一度眞人間になつて勞働が出來るやうにならなければならない』

さう考へて彼はまた險しい堤防の坂道を上に登つて行つた。

牛車が來る、馬力車が來る、それが過ぎ去る度每に、乾き切つた往還の砂埃が、路上に蹲つてゐる俊太郎を窒息させる程捲き上つた。俊太郎は、一つの膝坊主に路上で拾つた繩を括り附け、辛じて動く右手で己の身體を支へ、左手で漸く身體を前方に押し進めることが出來た。馬糞や人間の唾の混つた白い埃が、石川五右衛門のやうに伸び切つた彼の頭の毛から、大阪の波止場近くで惠んで貰つたぼろ〳〵の厚司の上まで、まるでぼた餅に粉をかけたやうに白く降りかゝつてゐた。彼は天罰と、自分の罪を懺悔しつゝ、その白い砂埃に涙を混ぜて、懺悔のコンクリート道を德島から立江まで敷き詰めるのだと彼自らに云つた。

『立江に行けば必ず自分の足が立つ！　あそこで居さりが立つたのだ。だから立江といふのだ。私も立ちたい、お大師さまのお陰をうけて、この罪を赦して貰つて、もう一度眞人間になる。南無大師遍照金剛！』

彼は、二里半の道に三日かゝつた。最初の晩は夜露に打たれながら、上八萬の墓場の中で寢、二日目は勝浦川を小松島に越した民家の軒先で寢さして貰つた。そして三日目の夕刻やつとのことで立江の地藏さんの緣側まで轉がり込んだ。

彼は恭しく本堂の前に身體を投出して、さめ〳〵と己の罪を懺悔し、足腰を立たせて下さい、と地藏菩薩に祈願を籠め



た。其日は恰度十二月の十三日であつた。不思議な縁と云へば縁である。三年前の十二月十三日には、オーストリアのヰンナ市の一流の輕業師であつた彼が、今日同じ月の同じ日に、居ざり乞食として此處に泣き崩れるのであつた。

暮である爲か、昔に名高い四國八十八ケ所第五番の札所も參詣者は非常に少かつた。彼が十五分間以上も佛前に蹲つてゐる間、腰を端折つた商人と、小學校敎員風の筒袖を着た若い婦人二人しか參るものはなかつた。

十二月の短い日足は、早くも地藏堂の深い軒先を暗くしてしまつた。乞食の倭太郎は、懷中十錢の金も無いので、また地藏堂の緣側で一夜を送らして貰はうと、人目に付かぬ本堂の西側に廻つて寒さに慄へてゐた。晩の五時半頃であつた。町にはもう電燈が灯いて、北に歸る烏の聲が、あはれつぽく聞えた。白い衣に角帶を締めた四十格好の番僧が本堂の扉を閉ざし始めた。兩側の扉も閉められた。本堂の大きな四枚扉も閉ざされた。番僧は、本門の潛り戸だけを殘して、二つの大きな戸を引寄せ、叮嚀に閂を詰めた。そしてその足で眞直ぐに倭太郎の所にやつて來て、大聲に怒鳴つた。

『おい、そんな所で寢てゐちやア不可んぜ。火の用心が惡いからなア、何處か木賃宿にでも行くがいゝよ』

さういつた番僧の人相は、何とも云へない險惡なものだ

つた。
『お住持さま、まことに申し兼ねますが、お大師さまのお慈悲で、一夜の宿りをこの縁側でお與へ下さる譯にいかんでせうか』半分泣きながら、俊太郎は膝を据ゑて番僧に歎願した。
『此處は寢る所でないけんな、あなたは其處に居つたらいかんでよ。この前の本堂は、遍路さんの火の不始末から全燒したんでな、遍路さんは一切境内に寢られんことになつとるんですわ』
青く剃りたてた頭を撫で廻して、番僧は嚴然とさういつた。それに對して俊太郎は、當惑したやうな表情をあばたの顏に現して、自由になる左手を前方に差し伸べ、番僧を伏し拜んで懇願した。
『お住持さま、それは御尤もでござりませうけれども、私は身體の不自由なものでございまして、是非立江の地藏さまに治して貰ひたいと思つて、大阪から渡つて來たものでございます。何しろ、徳島と立江の間を三日もかからなければ歩けないものですから、どうか不憫と思召して、今夜一晩なりとも、此處に置かして下さりませ』
さう云つて俊太郎は其處を動かうとはしなかつた。本堂の軒先に數十羽の雀が、ちいちくちいちくと首を振り振り樂しげに跳び廻つてゐた。番僧は縁の下から言葉をかけただけでは物足りたいと思つたか、正面の階段を上り、長い縁側を傳うて一[illegible]處にやつて來た。
『不可ん、不可ん、お前がどんなに不自由な身體であつた處で、此處は寢る所でないんだから、そんな汚い着物着て、この美しい縁側で寢そべつたりなどしたら不可ん』
俊太郎は住持の云ふ通り、縁側は美しいと思つた。欅材の縱が、一間半もあるやうな節のない柾板が、幾十枚も並べられてあるだけに、何處となく落着いた莊嚴さがあつた。
『お前はひつこい奴やなア。こんな處で寢たらお大師樣の罰が當るぜ』
斯う云はれた時に俊太郎は、ウヰンナ市の無料施療病院を思ひ出した。そこで彼は、一年半も世話になつたけれども、一度だつてこんな險しい顏を見せ付けられたことはなかつた。それで、彼は餘程、呪ひの聲を立てゝ縁側から下りようと思つた。然し、彼にはもう動くだけの力が殘つてゐなかつた。彼は軒の雀が羨ましくてならなかつた。『狐は穴あり、空の鳥は巣あり、されど人の子は枕する處だになし』ウヰンナのカトリツク教會で天主教の坊さんに貰つた獨逸語のバイブルの中に、さうした文句のあつたことを彼は想ひ出した。彼はあまりの悲しさに顏を伏せて其處に泣き沈んだ。住職は一旦引返した。しかし、縁側を角まで曲つた處で、また踵をめぐらしてやつて來た。こん

と、大聲を立てゝ頭から怒鳴り付けた。

『何處の乞食かわからんが、こんな美しい緣の上に土足のまゝで上るんぢやない。早く下りろ、下りろ、穢い！』

その罵聲を聞いて、俊太郎は涙に沁んだ顏を住職の方に向け、兩手を合せて拜んだ。

『私は、もう歩く元氣がございませんのですからもう一時間でも、半時間でもよろしうございますから、此處で休ませて下さいませ。そしたらきつと出て行きます』

その聲は途切れ途切れであつた。然しこの住職は餘程癇癪持ちと見えて、彼の願ひを聞くどころか、俊太郎の足許に廻り、臀部を左足で輕く蹴つて、如何にも穢らしいといふ表情を示した。

『愚圖愚圖云はないで、さあ降りた、降りた！　下りなければ巡査を呼んで來るぞ！』

動く元氣もなかつた俊太郎は、臀を蹴飛ばされて急に元氣になつた。彼はまた芋蟲のやうに、五尺の短い身體を前に伸ばしては後に縮め、手に持つた高い足駄をことこと云はせながら廊下を南へ居ざり出した。後には膝に括つた筵に付いてゐた砂埃が、二筋になつて、はつきり檜の柾の上に描かれてゐた。地藏堂の正面迄來た時に、俊太郎はもう一度佛樣に向き直り叮嚀に兩手を合せて御願をかけた。彼は眞劍になつて願をかけてゐる中に、人生の行路難にもうこの上生きてゐることが嫌になつた。

『この儘何處かの川に這入つて自殺してしまひますから、魂だけお救ひ下さい』と云つたやうな祈もしてゐた。また悲しくて顏が上らなくなつてしまつた。其處で彼は持つてゐた二つの足駄を傍に置き、聲を立てゝ、すゝり泣きに泣いた。

『斯うまでして生きて行かなければならないんでせうか、地藏さま、私を不憫と思召すなら、今宵の宿りを何處かで與へて下さいませ』

地藏堂の正面で、また、俊太郎が、うつ向き込んでしまつたので、住持は業を煮やし、

『こら、こら！　またそんな處へ寢込んでしまふんでないよ、貴樣は隨分強情な奴だな。出て行け！　出て行け！』

さう云つた彼は、埃に塗みれた俊太郎の厚司を首筋の所で摑へ、無理にも緣側から突き落さんとした。慌てた俊太郎は、急いで二つの足駄を取り寄せ、禮儀正しくまた地藏さまに一つお辭儀をして靜かに階段を下りようとした。然し、氣の立つてゐた住持は、それを、彼がわざと反抗してゐるのだととつたと見えて、

『貴樣は何處までも強情な奴だなア』

さう云つて、右手に持つた足駄を引つたくり、庭の彼方に投げ付けた。階段を降りかけた彼は何かのはずみで平衡を失つて

俊太郎は、六、七段上からころころと敷石の處まで轉び落ちた。

『ど畜生め！　こんなに美しく拭いてある緣側に、土足の儘で上るとはなんだ。きたない！』

階段から轉げ落ちた俊太郎を如何にも痛快がつて眺めた僧侶は、なほ惡しざまに彼を罵倒した。不思議に俊太郎は何處も怪我をしなかつた。

『これもみんな佛樣が私の信心をお試めしになる手段に違ひない、怒つてはならぬ。恨んではならぬ。南無大師遍照金剛！』

またウヰンナで、したゝか打つた右の耳の上部と、右の脇腹が痛みを感ずる。

『あゝ、斯うしてまで生きて行かなければならぬものか、三千世界に神も佛も無いのか。この五尺の身體を救うてくれる親切な人は居らぬか。』

日はもうとつぷり暮れてしまつた。半ば開いた正門の潜り戸が、青白く空を透して見える。俊太郎は投げ棄てられた足駄を拾はうと、小石混りの大庭を芋蟲のやうに動き出した。『雨模樣だ。傘が無い。さあ、今夜何處で寢よう、寢る處がない』大粒の雨がぽつりぽつり額に降りかゝつて來る。白くぼかした廣い庭の眞中に、投げ捨てられた足駄が、灰色にぼつくり浮き出して見える。

五

冷い雨に濡れながら、居ざりの乞食は、夜も寢ないで德島に歸らうと努力した。もう一度ウヰンナで受けたやうな親切を受けたいものだ。彼の頭には、それだけのことしかなかつた。耶蘇の宣教師の家を探さう。そして一晩でよい温かい布團の中で寢かして貰はう。世界に見捨てられたこの居ざりは勇猛心を起して、水溜と戰つた。戰つてゐる間は自殺したい氣も何處かに消えてしまつた。只追出されたことに對する發憤と、墮落した宗教が形骸に等しいものであることを呪ひつゝ、彼は最も眞面目な求道者として、眞理の道を居ざつて行く氣持になつた。

一生懸命になつたけれども、また德島迄歸るのに三日かゝつた。道々御飯を貰つたり道を訊いたりする中に、多くの暇をとつた。そしてとう／＼德島本町の米國宣教師の屋敷に辿り着いた時には、三日目の朝であつた。恰度宣教師は自轉車に乘つて地方に出掛ける所であつた。それを居ざりの俊太郎は呼び止めた。彼は英語で挨拶をした。西洋人は居ざりの乞食が英語で話すのに吃驚した。俊太郎は、細々と彼の窮狀を訴へた。そして、半分泣いてゐた。

『――日本の凡てのお寺樣があゝいふ風であるとは信じません



けれども、私は愛のない宗教は全く駄目だと思つて憤慨いたしました。然し凡て私が悪いんです。過去三十一年間、私は罪の塊であつたのです。まことに御無理申して濟みませんが、あなたの家の縁の下でもいゝですから、私の寢る所を與へて下さい』

宣教師は彼の英語の達者なのに吃驚してゐる樣子であつた。

『あなたは何故そんなに英語が上手なんですか？ 英語の先生にでもなればいゝでせう』

中脊の色の白い奥の眼の宣教師ローガン先生は、はつきりした英語でさう答へた。彼はまた家にとつて返し、料理番の一室をあけさせ、俊太郎をその部屋に通した。すぐ、夫人も子供も女中も、大勢出て來て、俊太郎の足から濡れた足袋を取り去つたり、まだ乾いてゐない厚司を大きな西洋人の着る寢卷きに着替へさせたり、料理人が布團を持つて來れば、宣教師の夫人が敷布を運んで來、子供が枕を持つて來れば、女中がパンと牛乳を持つて來るといふ調子に、俊太郎は、まるで天の使の一群に取圍まれたかのやうに、急に甦つた。

俊太郎は兩手を合せて、凡ての人を拜んだ。

『市川さん、そんなに人間を拜むものぢやありませんよ』

はつきりした日本語で宣教師が云つた。

『神樣は私達のお父さんですから、あなたは自分の兄弟の家に歸つたつもりで、此處でゆつくりなさい。何日でも何年でもあなたの身體がよくなる迄、こゝで寢てゐてもいゝですから』

さう云ひ殘して宣教師は、また自轉車に乘つて遠い傳道旅行にいつてしまつた。

高い東窓から、師走の鉛色の空が見える。クリーム色に塗つた壁が、如何にも、旅に泣く巡禮の氣を落着ける。机の上に置かれた聖書の金線が光る。表に西洋人の子供等が無邪氣に騷いでゐる。（をはり）

殺して罪なし（譬へばなし）



或る處に一人の娘があつた。その娘は大層疑ひ深い心を持つてゐた。親はそれを怒つて娘を殺さうと思ひ、佛のみもとに參つて問うた。

『どういふ者を殺せば罪なくして安らかに、且つ心に憂へがないでせうか、又どういふ者を殺せば佛のおほめに預ることが出來まするか』

すると、佛はその親に、

『瞋りの心と恨みの心とを殺すがよい、さすれば必ず安らかで心に憂ひがないであらう、私はかういふものを稱歎する』

と、懇ろにさとされた。

面白い數字の話

神代種亮

◇昔の千兩は今の何圓に當るでせうか？

慶長小判一個の重さが四匁七六で、其の中に四匁零二七六九二の金を含んでゐるから、金一匁を五圓とすれば一兩は二十圓一錢三厘八毛四六で、小判千兩は二萬百三十八圓四十六錢である。



併し以上は金質からの計算であつて、若し之を米價を標準として今の金に直すと大へんなものになる。例へば關ヶ原戰後の頃は米一石が銀九匁四（銀六十匁が一兩）であつて、一兩で六石五斗九升五合餘、千兩では六千五百九十五萬石買へたのだから、此の米を今日の平均相場が一石四十圓として換算して見ると昔の千兩は實に、二十六萬三千八百圓に當る計算である。

◇アメリカの國富は去年の上半期に四百三十六億弗增加した。我が國の總財產を千三百億圓と假定し、一弗を二圓と換算すれば日本の國富はアメリカの何年の增收に當るか？



2圓×436億×2＝1744億圓

1744億圓−1300億圓＝444億圓

アメリカ一ケ年に增收する富は日本の國富より遙に多い。驚くべき彼れの富力！

◇一升の白米が六萬八千粒（內務省社會局調査）とすれば三十五錢として一錢で千九百十五粒になります。それを日常用品に比較して見るとマッチ一本が米粒十二粒、割箸一對は五百九十六粒、酒一升一圓五十錢として盃一杯が三千八百六十二粒、敷島一本が千七百十七粒、鉛筆一本（二錢）が三千八百三十粒、爪楊子一本が三十八粒、半紙一枚（一帖五錢）として四百七十八粒になります。煙草一本でもマッチ一本でも米粒で勘定して行くとどんな人でも大切にしない譯には行きますまい。



◇現在百メートル競走の世界公認レコオドは十秒四である。此の速力で一里を走るには概算何分かゝるか？



一里を四キロメートルと概算すると四百十六秒即ち六分五十六秒である。又、地球一周の距離四萬キロメートルを此の速力を以つて走るとすれば四十八日と三時間三十三分二十秒である。


お父さんのおタバコ
宍戸左行作
1
オ父サン
トイッショニ
アルイテルト
ケムダクテ
ムセテシマウ
ワ
2
シャツヲ
ヌグ間
ダケモ
タバコヲ
オヨシ
ナサイヨ
3
キモノヲ
キカヘテ
マタ一ップク
4
タバコヲトリアゲルト
タモトノナカカラ
ベツナノヲトリダシマス
5
6


古イ雨樋ヲ
モッテキテ
障子ノ外カラ
ヘヤノナカヘツキトホシテ
タバコノ煙突デス
ハハァーン
ナールホド
コレデ
家庭円満
オヤ
雨ガフッテ
キタヨーダ
天下
太平

人生の決断

衆議院議員 鶴見祐輔

一

多くの人は、人生の岐路に立ちて、決断の難きに迷ふ。

決断は難きにあらず、恐ろしきなり。

理智をもつて断ずるは、人必ずしもこれを難しとせず、聡明の人にして、尙ほ断ずるところに迷ふは、利害得失を見究むる理智の力の足らざるがためにあらず、これを断じたる後の結果について恐るゝところあるが爲めである。

決断は責任を伴ふ、その責任を自己の肩上に取ることの恐怖が、多くの聡明なる人をして決断に躊躇せしめ、而して決断を誤らしめた。

決断力は、人間最高の精神力の一つだ。

百の知識あるも、一の決断なきは、龍を描いてその眼に點ずることを忘るゝと一般、遂に何の効果をも擧ぐるところなし。

しからば、我々は何故に迷ひ、何故に恐るゝか。

二

寓話 **その一**

葉公の龍

西川光二郎

昔、支那に葉公といふ人があつた。龍が好きで、何から何まで龍づくめ、家財道具は勿論、衣服の模様から家の紋まで龍である。

『そんなに龍の好きな男なら、俺が行つたら嘸喜ぶだらう。』

本物の龍先生が、この噂を耳にして、早速出懸けたものだ。

とも知らぬ葉公は、一室で何かしてゐたが、突然、黒雲に乗つて舞ひ下りた龍が、ぬつとばかり顔を出した。

驚いたのは葉公、

『あッ！ 助けて呉れ！』

叫んだ限り、氣絶してしまつた。

これは、支那流の作り噺であるが、併し、この中に種々の寓意がありはせぬか？

龍ではない、今これを正義として見たら何うか？ 正義を愛し、何から何迄

決断について迷ふあるは、先づその決断せんとする事件の正體を知悉せざるに因する。

如何なる勇者と雖、何等思索すべき材料なくして決断すること能はず。決断の材料を蒐集することは、正しき決断の第一歩である。天下有爲の士、勇氣滿身、人格高朗にし一尚ほ且つ志を當世に展ぶるを得ざりしものの跡について點検すれば、多くは此の人の決断に先立つて周密なる思慮を用ゐざりしことを發見する。思慮とは、材料を蒐集して、これを比較考慮する科學者的態度の意である。

かの家康の一生のごときは、かゝる科學者的態度の好標本である。

三

しかしながら、決断は材料の蒐集と事件の正體の調査とのみより來らず。我々は理性以上のある精神力を用ゆることを要する。

それは勇氣といふことである。

人生の未來は如何なる聰明の人と雖、これを知悉することは出來ない。寸前暗黑である。如何なる變化が足許より起り來らずとも豫見出來ない。かゝる未知の未來に向つて決断するのであるから、茲に七分の思慮と三分の冒險を必要とする。冒險は勇氣の所産だ。

一切の決断は冒險である。

この冒險を恐れざるものにして、初めて快刀亂麻を斷つごとく決断してひるむことなし。而してこの冒險は、理智の所産でなくして、勇氣の所産だ。理智の限界を超越したるところは、我が一身を賭して一斷する。そこに決断の本質がある。

まで正義づくめの人があるが、眞の正義が飛び出して來ると、腰を拔かし、氣を失ひ、さては助けを求めて逃げ出す葉公ならぬ人が、澤山ありはせぬか？

『財寶を抛つて困窮者を助くべし。』と叫ぶ慈善家がある。慈善はこの人の教所とさへいつても良い。然るに、年末道傍で慈善鍋を突付けられると、素知らぬ顔で足を早めて逃げて行く。



善を愛することと、善を行ふことは全く別問題だ。

善を愛するだけなら誰にも出來ることは、弱蟲の葉公が龍を愛したと同じである。善を行ふことは、弱蟲には出來ない。本物の龍に驚かぬ以上の勇氣が要る。そして、これこそ眞の善といふべきことだ。

かの風雲兒秀吉の一生を見る人は、彼が如何に迅速に決斷したるやに驚く。それは彼の渾身の勇氣から來てゐる。天下は往々にして、柴田勝家のごとき荒武者を目して勇者とする。しかしながら、勝家の有したる勇氣は勇氣に相違なかりしも、それは頗る簡單なる勇氣であつた。第二義第三義の勇氣であつた。鐵拳を恐れず、白刃を恐れざりし勝家が大事の決斷に際して如何に逡巡したか。それは彼の精神的勇氣の缺乏から來た。その一大原因は素より勝家の理智の不足であつた。彼は決斷すべき事件の正體を正視することが出來なかつたから迷つたのだ。秀吉は彼の天才をもつて事件を一目瞭然洞觀した。ゆゑに迷ふところがなかつたのだ。

しかしながら秀吉の英斷は、聰明のみの賜物ではなかつた。彼は日本歴史中罕に見る冒險兒であつた。

冒險は彼の天性であり、彼の興味であり、彼の人生の全部であつたとも見られる。冒險してゐるときに彼は幸福であつた。

この冒險的精神が、彼を日本歴史中の人氣男としてゐるのだ。

家康の打算したときに、秀吉は冒險した。光秀の彳亍するときに、秀吉は飛躍した。如水の思索したときに、秀吉は一斷した。

近代米國の快男子ローズヴェルトの一生が冒險の一生であつた。

彼は二十二歳にして紐育州の政治といふ最も溷濁した池の中へざんぶと跳り込んだ。彼は米西戰爭といふ舞臺の幕が開くと、安全な海軍次官の椅子をはふり出して、荒武者隊といふ一體を組織して、その隊長として玖瑪に出征した。大統領在任中も彼はあの大きい米國といふ國を賭けて大ばくちを打つた。パナマ運河の——强奪——と言ふべからずんば横車的解決——のごとき顯著なる一例である。

寓話　その二

壽命の絲毬

安藝三郎

ある日、神樣が、一人の子供に絲毬を與へて、いつた。

「この絲毬は、お前の壽命の長さだけの絲を卷いたものだ。お前が若し早く時刻の經つを欲するなら、この絲を速く繰ればよい。一分間に數年を過ごすことも出來る。これと反對に、時刻の經つのを好まぬなら、絲を繰らずに擱けば宜い。何年何ヶ月でも同じ時刻に留まつてゐることが出來る。」

子供は雀躍して喜んだ。そして、暫くその絲毬を握つて考へてゐたが、漠然として一種の欲望を感じた。

「子供ぢや詰らない。早く大人になつて見たい。」

子供は、俄かに絲を繰り始めた。そして見る見る中に立派な青年になつた。

「戀人が欲しい。」

大統領をやめて後、彼は亞弗利加の森林の中に獅子王を追ひ廻し、歸つて後は、更に南米ブラジルのアマゾン水源地に尋ね入り先人未開の域を横斷した。當時彼は瘴癘の氣に搏たれて四十度の熱に苦しみ歩行すら困難となつた。然るに一行の食糧に制限があつたゝめ、若し豫定の時日にこの無人の地を横斷して人里に出なければ一行は餓死の外はない。そこで彼はこの時、短銃を充塡して腰間に携へ、若し自分が歩行の速力にぶりて同行者の迷惑となる時は、直ちにこの短銃を以て我が頭蓋骨を打ち拔きて自殺する決心であつた。それを歸國して數年後に彼が發表してゐる。

この冒險精神が、ローズヴェルトを偉大にした唯一と謂はざるも、少くも最も重大なる原因の一つであつたのだ。

個人にしても國民にしても、實行世界の雄者となるものは、悉く冒險精神の所持者だ。

決斷の根本には、大小の差こそあれ、みなこの冒險精神が横はつてゐる。危險なところに人間の生涯の味があるのだ。

四

文章の眼目は省筆にある。

雄辯の根本も省言にある。

如何なる文字を省筆をすべきかを知る人が文章家なのだ。如何なる文句を省言すべきやを知る人が雄辯家なのだ。

省筆あつて初めて文章は讀者を動かす。たゞ必要なる文字を省略すれば、文意は明瞭を缺きて效なく、不必要なる文字を長々と羅列すれば讀者は倦みて、何等の印象を

青年はまたも絲を繰つた。美しい戀人が出來た。

『早く結婚したい。』

そして絲を繰つて、結婚した。子供が生れた。早く子供の成長するのを見たくなつて、ぐん／＼絲を繰つた。子供も立派な青年になつた。

鬱勃として湧き上る欲望は、果てしなく續いた。名譽、金、權力……そして其欲望が起る度毎に絲は繰られた。





それと反對に苦痛や失望や悲嘆も、次から次へと生じて來る。その度毎に彼は一刻も早くそれから遁れんとして絲を繰つた。

絲毬の絲は早や殘り尠なくなつた。が、其時は既に、彼は死の床にあつた。神樣に惠まれた壽命の絲毬も瞬く間に繰られ、結局、彼は四ヶ月と十日しか生きてゐなかつた。

何と味ふべき話でないか。

與へざる故に、省筆は文を往る者の最大の苦心である。文章の力は言外の含蓄にある。この含蓄が讀者に迫る餘韻である。この境地に悟入したる士の文章のみ、能く光彩奕々として千古に光被する。

辯についても亦然り。下手の長講義の一句盡し得て餘蘊なし。

決斷についても、我等は同一の天才を看取する。

秀吉の決斷の迅くして、光秀、勝家、一益の輩の遲かりしは、秀吉は省筆の妙を、實行世界に知つてゐたからである。一の事件の決斷について、百の材料ありとして、この百の材料を研究しつくしたる後決斷せんと思はゞ、一事の決斷に一年あるも尙ほ足れりとすることは出來ない。

於玆、文章と辯論との省筆省言が、實行世界に於ても亦、その妙用を發揮する。秀吉とローズヴェルトの決斷の早かつたのは、必要なる材料のみを蒐集調査して、不必要且つ第二義的の材料はこれを省略したからだ。

ゆゑに決斷の前にある重要事は、我々が何を捨て、何を犧牲とするやの選擇だ。この材料の大小輕重を取捨選擇するの力が、多くの偉人が殆んど本能的に持つた天才だ。

五

乍併、かくのごとき思慮と、勇氣と、冒險と、取捨との一切の依つて來るところを考ふるに、茲にその根本に礎石のごとく横はる一の簡單なる事實あることを發見する。

それは一つの標準といふことだ。昔風の言葉で言へば志といふことだ。

我々が材料を蒐集するにも、何を標準として集めるかの尺度がいる。たゞ漫然と集めたるものは何等判斷の用には足らない。

泰西挿話

國民の名譽

織田與四郎

佛蘭西大革命の時、或る佛人が國を逃れて獨逸で生活する事になつたが、もう冬も間近で、今のうちに燃料を充分仕入れておかうと思つた。

恰度、その近くに薪屋が居たが、彼奴は外國人が何も知らないのをつけこんで、早速高高と賣りつけてしまつた。

意外な大儲で有頂天になつた薪屋は、すぐさま居酒屋へ飛びこむと、四邊かまはず、その手柄話を初めた。ところが、酒屋の亭主は評判の正直者だつたから我慢が出來なくなつて、

『知らぬ他國の人を誑すなんて惡いことをなさんなよ。』と云つた。

『何を。それがどうしたんでえ。薪はおれのもんだ。それを自分の好きな値で賣るのに何の文句があるんでえ。餘計な口を叩きやがんない。』

亭主はそれきり口をきかなかつた。

暫らくして薪屋――

我々が勇氣を以て決斷するとしても、それは何を目的とする勇氣なるやの標準がいる。ことに取捨と言ひ省筆省言といふことは、標準あつて初めて可能である。

我々が決斷に迷ふのは、多くの場合、その事件の決斷を迷ふのでなくして、我々心内の標準の動搖である。

我々人間は、賢愚不肖の別なく、色々の慾望目的のうちに迷つてゐる。聖者と雖、常に聖なる能はず、賢人と雖、常に明鏡止水のごとき心は持つてゐない。色々の矛盾した慾望が我々の心中を斷雲のごとく徂徠する。むかしはこれを煩惱と呼び、今の人はこれを誘惑といふ。

かゝる內心の分離が、我々の決斷をにぶらすのだ。一を取れば、他を失ふといふ、二つの慾望の矛盾が、我々の決斷を躊躇せしめるのだ。

かゝる際に秀吉の迷はなかつたのは、彼は日本の支配者たらんとする一念に燃えてゐたからだ。彼の一生はその簡單な標準で統一されてゐる。ビスマークの一生は、獨逸統一といふことで、この統一者は自分だといふ簡單な信念であつた。ことに基督、親鸞、日蓮のごとき宗教家に到つては、その心中の標準はさらに簡單明瞭である。ゆゑにかゝる人々は、迷ふところがなかつたのだ。

史家モムゼンは、羅馬の英傑シーザーを評して、彼の一生の行動は、悉く一つの目標に集中せられてゐたこと、あたかも幾千幾萬の磁石が悉く一個の北斗を指すやうであつたと言つた。シーザーの目標は、羅馬民族の支配者になるといふことであつたのだ。

かゝる目標の發見と把握といふことが、我々の五十年の一生を決定する。如何なるものを目標とする人を偉なりとし如何なるを低しとするやは、これはまた別の議論である。

決斷の基礎は、人生の目標の發見に始まる。（終）

『おい、いくらだい。』

『三ルイですよ。』

『何だと。パンとチースをちよつぴりと、ビール一杯で三ルイだと。』

『その通りだ。パンとチースとビールは私のもんだ。だから自分の好きな値で賣るのに文句はあるまい。それで不服なら警察の旦那のところへ行かう。』

警察へ行けば不正な値で外國人を詐した事が露れるから薪屋は澁々三ルイの金を差し出して歸つた。



すると亭主はその中からパンとチースとビールの實際の値段を受取り、殘金を佛人の所へ届けた上で云つた。

『惡い獨逸人が一人貴方を欺いたからつて、決して獨逸人全體を惡く思つて下さるなよ。』



太平洋の彼岸に咲く名花一輪

東京府立第五中學校長　伊藤長七

大問題となつた席次

『何にツ、日本人の兒に卒業生の代表演説をさせるツて？』

『ヘン、あの顏の色の黄色い奴共が、俺達白色人種の兒より成績がいゝなんて、――校長の奴、氣でも狂ひはしないか』

大正十年十二月、米國加州のオークランドの中學校の卒業試驗に、ミス・ユキで通つてゐる日本人の古田雪子といふ女生が、優等第一席を占め、校長カイ氏から、卒業式當日卒業生總代として演説することを命ぜられた。

それと知るや、生徒の父兄母姉悉く、猛然といきり立つた。處は排日の本場加州、人種的な反感も手傳へば、選擧や政略上の思惑もある。

『とんでもないことだ、吾々が何を名目に日本人を排斥してるか判らないのか、若し、日本人がそんな優良な人種だとなると、これまで吾々の主張したことは、みんな嘘になるぢやないか』

といふので、

（若しカイ校長が、輿論に耳をかさず、有色人種の一少女を、飽くまで卒業生總代に出すといふことを改めないならば、父兄會は一致團結して校長を排斥しよう）

と申合せた。そしてこの事を校長に告げて脅迫すると同時に、盛んに世論を煽りたてた。

然し、カイ校長は頑として所信を曲げなかつた。

『卒業式に代表演説をする人は、人格學力二つながら、卒業生中の最も優れた者でなければならぬ。その要件に適ふならば、皮膚の色が黄色からうと白からうと、そんなことは問題にするに足らぬと思ふ。黄色人種を卒業生總代とすることを、國辱のやうに論ずる人もあるけれど、人種的偏見に囚はれて、優れたるものを故意に貶すといふことこそ、却つて大國民として恥しいことではないか。正義を愛する亞米利加人に左樣な卑怯者はない筈である。私はミス・ユキの學力人格二つながら、斷然他の儕輩を拔いてゐることを認めて、卒業生總代に推したのだ、それが何故に惡いのか』

排日派の新聞は、素破一大事とばかり筆を揃へて校長を攻擊すれば、校長の所

信を可とするものは、一々これを反駁する。微々たる一少女の席次のことが、全加州の大問題となつて、火花を散らしての大論爭に、一週間以上も桑港あたりは、この噂で持ち切りの有樣であつた。

然し、正論は日を經るに從つて、勢ひを增す。ミス・ユキの行狀が世間一般に知れ渡ると、校長の說を是とする者が、段々多くなつた。

『ミス・ユキの家は、さゝやかな雜貨店だが、賴みに思ふお父さんやお兄さんに先立たれたので、今はお母さんとミス・ユキと唯二人で經營してるのださうな、それでミス・ユキは學校から歸ると、お母さんに代つて店番を勤め、一生懸命に家業の手助けをしてる評判な孝行娘だといふことだ』

『學校の豫習も復習も、店番をしながらするのださうだが、それでゐて、高い報酬を出して家庭教師をつけてゐる、吾々の子供より出來が良いのだから、本當に感心なものさ』

『矢張、校長のいふことが正しい』

米國人は一度その論が正しいとなると、存外解りが早い。そこで校長に對して、

(しつかりやれ、僕は排日論者だが、こんど貴君が執られた處置には大贊成だ)

(正義の爲めに戰へ)

といふやうな激勵の手紙が、ドン／＼舞込んで、机上に山積する有樣。

遂に加州で名高い、桑港エクザミナー、桑港クロニクル等の大新聞を初めとして各新聞は、校長と日本少女古田雪子の肖像を揭げて、反動的に賞めたてるやうになつた。

人氣を呼んだ卒業式

こゝに至つて、一少女ミス・ユキの存在が、全加州



の興味の對象となつた。

『どんな少女だらう、顔が見たいものだ』

『それに演説振りも聞いてみたい』

といふので、オークランド中學校の卒業式は大變な人氣であつた。

愈よ當日となると、桑港あたりからもミス・ユキの演説が聞きたいばかりに、日本人といはず米國人といはず續々出掛ける。遂ひに學校の講堂では間に合はず、オークランド市の公會堂で卒業式を擧げるといふ、前代未聞の騒ぎとなつた。

（これは大事になつたぞ、何とか無事に演説を終らせたいものだが、何をいふにも年が若いのだから、此の物凄いばかりの群集では呑まれて仕舞ふかもしれないなあ）



古田雪子さん

斯うなると、同胞やミス・ユキ贔屓の人々は氣が氣でない。萬一、遣り損へば折角のカイ校長の好意も仇（それ見たことか）と嘲りの種となつて、日頃の排日論に油を注ぐやうな羽目にならぬとも限らぬ。

事實、今日の群集の中には、萬一縮尻つたら、大いに笑つてやらうといふ輩も澤山ゐるのだ。いや、縮尻つたらではない――機會があつたら縮尻らせようといふ、執念深い排日黨が澤山ゐるのだ。

定刻には、さしも廣い公會堂も、參列の人々で一杯になつた。しかも溢れた人人は蹴らうともせず、扉の口から、窓から、顔を並べて一心に中の様子を窺つてゐた。

やがて、式の順序が進み進んで、市長はじめ來賓の祝辭が終り遂ひに古田雪子孃が、卒業生を代表して答辭を述べるべく演壇に立つた。

『ワーツ』

と滿堂喚呼して拍手で迎へる。

殆ど耳を聾さんばかり、氣の弱い者なら、大人でも頭がポーツとして、何が何やら判らなくなる程の騒ぎ方だ。

しかも日本人――わけて女は軀が小さい。演壇に立つた雪子孃の姿は、米國人から見れば可憐そのものだつた。

（あんなお人形のやうな兒が、果してこの大勢の聽集に向つて、滿足に物が言へるだらうか）

誰も彼れもさう危みながら、一心に耳を澄して、雪子孃の發言を待つてゐた。

やがて雪子孃は、徐ろに口を開いた。

『滿堂の淑女並びに紳士の皆さま』

流石に上氣したらしく、顏に薄く紅葉を散らしてゐるが、その聲音はいともはつきりとして、態度にも微塵の搖ぎもなかつた。

『お許しを得て、こゝに卒業生を代表して、一言御禮をかねて所感を述べさせて戴くことの出來るのは、身に餘る光榮と存じます』

言辭如何にもしつかりしてゐるので、滿堂鳴りを沈めて聞き惚れる。

斯くて雪子孃は、これ迄の恩師の丹誠を謝し、更らに堂々と論旨を進めて、將來の希望に迄及び、そして見事に結んで滿堂に會釋した。その間、咳一つ聞えず、誰れも彼れも恍惚として聞き惚れた。

そして、靜々と壇を去る雪子孃の姿に、初めて吾に返つた聽集は、誰も彼も力一杯、心からなる賞讃の拍手を送つた。

（何といふ頼しいしつかりした少女であらう、校長が第一位に推したのも無理がない。これが日本人なのだ。吾々は今迄、有色人種といふだけで、日本人を下目に見てゐたが、これからは改めて見直さなければならぬ）

その日の歸途、加州人士の誰れも彼れも、心からなる溜息を禁ずることが出來なかつた。

私はその當時、視察旅行の途次、加州に滯在してゐたので、その情況を親しく見聞したが、一少女の力も、時に驚異的な効果を生むことを知つて、密かに邦家の爲めに慶賀し、且つ、日本人としての強い誇りを感じたのであつた。（終）

◎太平洋をめぐる偉人

クック（太平洋探檢者）
シドニー（濠洲の開發者）
マツキンレー（布哇併合者）
ルーズベルト（パナマ運河權獲得者）
ペルリ（日本に來た米國最初の使節）
エツケナー（太平洋横斷航空家）

女物語

本田美禪

磯田長秋畫



同情に泣く將士の闇涙

『然うであつたか』

聽き終つた雅樂之介は溜息をして頭を垂れた。

軍師影治の所説によると、罪はみな匪徒の盟主阿蘇惟前にあるらしい。

だが、手を下して愛人早苗の首を掻いたのは駒市である。いかに誘惑をされたため、然うしたことをしたにしろ、主人同樣の早苗の命を縮めた者に制裁を加へずに置く法はない。其れに軍師影治初め、家中の者は一人も怪童駒市の大罪を糺明しようとはしないのである。『もう駄目だ、矢ツぱり俺は妻を捨て、家來を捨てゝこの土地を立退く外に道はない。男子に生を享けながら、女子に屈服して阿容々々と存へてゐるわけにはゆかぬ。駒市めの首を討ち、早苗の靈に手向けずに立退くことは無念だが、今この場合致し方ない。むゝ……』雅樂之介は齒を嚙んで、深くうな垂れた頭を其の儘、脚下をじつと見つめてゐると、瞼を切つて涙が落ちる。

軍師影治は其の狀を冷やかな眼で見ながら續けた。

『で、其んな事情で、馬場駒市は小兒心に、早苗樣お首を頂いて行つて敵を欺き、五千兩の大金を受取つて來て御當家の軍用金の一分に宛てたい。其れはつまり御當家のため、また二つには殿のお側に、かのおん力のある以上、殿の御行跡は斷じて直

らぬ。憚りながら一命に替へ…………と考へたゝめの昨夜の振舞――ではなからうかと存じますので、死に當る大罪を犯した者では御ざいますが、その衷情を御憐察下さるやうに願ひ上げます』

『では駒市めの大罪は其のまゝで置く所存なのじやな』

『いや』と景清は靜かに抑へて、『罪を問ふまでもなく、渠めは既に今頃は、川尻において敵の手で討たれてゐる事と存じます』

『…………』

『で、願へます事ならば、渠めが罪は不問に付せられ、早苗樣おん事もすつぱりお諦めあそばして、今夜の弔ひ戰には殿御自身にて采配をお振り下さるやうに願ひ上げます。名護屋に在す太閤殿下も、一擧にして所在蜂起の兇徒を屠りつくした趣き、お聽きあそばしたらいかばかり御悦喜あそばすで御ざいませう。以前と違ひ一城の主人とおなりあそばした殿の御覺悟も是れを機會に、確とお改め下さいますれば、憚りながら臣下一同、みな祝着に存じ上げます』

『むゝ……』と雅樂之介は唸いたばかりで、尚ほ矢はり口を開かず、脚下をじつと睨んでゐたが、暫くすると快活に、『いや分つた、外の事は兎も角も、早苗のための弔ひ戰に躬に指揮せよと申すなら躬は欣んで采を執る』

『ではお聽き入れ下さいましたか』

『うん』と雅樂之介は大きく頷く。

『難有う存じます。其れでこそお家は萬代、方々お禮申されい』

はつといふと並居る將士は、物の具さし着座したその場において一齊に兩手を支いて頭を垂れる。

『奥方樣、殿の御武具を』

『あい』と答へながら體を起すと、小雪は既にお袖に命じて、自分の側へ運ばせて置いた赤貝摺の具足櫃を兩手で持つていそ〳〵と夫の側へ寄つて來る。眞に其れはいそ〳〵である。斯うなつて來ると、武勇絶倫、膂力萬人に優れた勇婦も普通の處女と變らない。赤貝摺の櫃の中には、眼の醒めるやうな緋縅と、金小札に鍬形を打ち龍頭の前立の燦として輝いてゐる兜とが、づツしり重く入つてゐるのだ。是れをあの美貌の夫に被せたらいかに美々しく見えよう、繪卷物にある武將の姿を今眼の前に見るやうな……吁、何といふ嬉しいことかと思ふと足は戰いて來る。一歩々々夫の側へ近づくにつれ胸は高鳴る。覆面の裡の醜い面は燃えたつやうな氣さへする。

滿座の將士も其れと察して、みな闇涙を呑んでゐる。其れは同情の涙なのだが、その一面では祝福してゐる。

その中にあつて最も深く欣んだのはお袖と角内、將來のことは兎も角も、眼の前に見る情景は、夫婦和合の第一歩、琴瑟相和

和の前曲である。で、櫃を持つた小雪の姿が、夫の側へ近づくと同時に渠等兩名も主人雅樂之介の側へと馳けつけ、小雪に手傳つて主人の體へ櫃の物の具を着けてやる。

まづ鎧下の直垂を着け、胴を着け、臑當をつけ、草摺を着け、袖を着け、弓籠手をつけて要所々々の蜻蛉結びに括り終ると、小雪は一歩後へ退つて兜を持つて跪づく。雅樂之介は太刀を佩き、金の采配を手に持つて、床几に悠然と腰を掛けると、滿座の者を靜かに見廻はす。武者ぶりだけは百萬騎の大將としても恥かしくない。

『では是れで好いのじやな』

『は』景治はじつと見仰げて、『天晴れなるおん武者振り、其れに奥方樣御武勇をお添へ申せば龍に翼の譬へ其のまゝで御ざいます。吹けば飛ぶやうな兇徒共、今夜鏖殺にし次第に、朝鮮出陣のお願ひをお出しあそばしては如何です』



『はゝ然うもまゐるまい』と雅樂之介は微笑しながら、『殿下仰せには二三年、領地にあつて武藝を修めよ、明國

にまで手入するには七八年はかゝるであらう。ゆる〳〵と修行して、一人前の武士となつたら、その時從軍を願へとあつたに、今はまだ以前のとほりの大腰抜けの雅樂之介、斯うした許は方々の大將らしく見ゆるであらうが、その實は五月人形、殿下大切の御軍に出陣をする資格はないのじや、はゝ、はゝゝゝは』と自分自身を嘲けるやうに哄笑をする。

實際其れに相違ないので、滿座の將士は面を見合つて心の中で嘆息してゐる。

『いや、餘事は兎もあれ、兇徒を寄せる刻限には大分の間があるのであらう、其れまでにゆる〳〵と早苗の回向いたして置かう』

『勿論の儀に御ざいます。方々』と景治が一座にいふと左右兩側に並居る將士は、みな起つて來て死骸の周圍をぐるりと取り巻いて着座する。

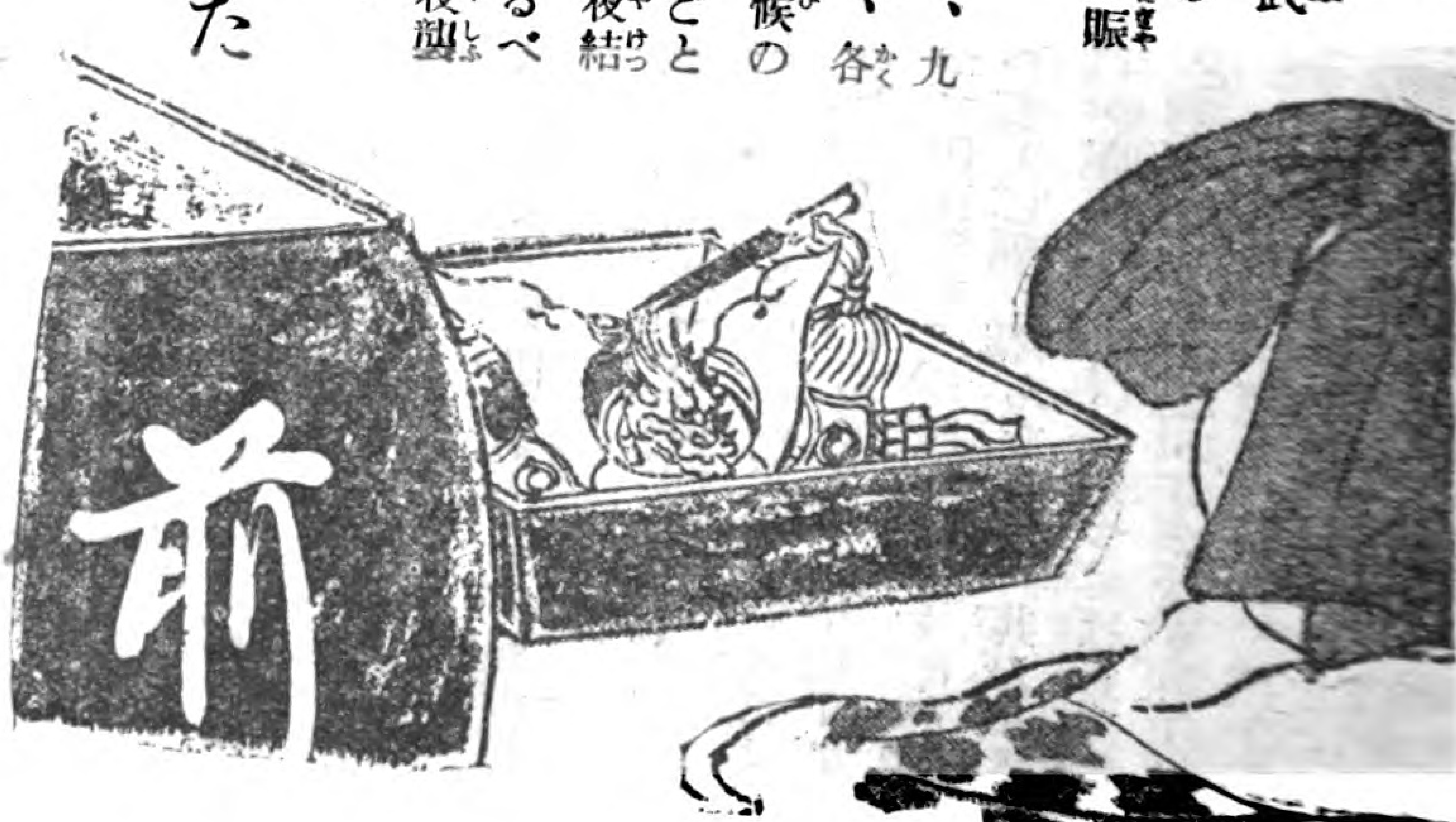
誦經の聲が再び起る。鐘の響き珠數を揩る音、導師の經の尻につき、武骨な、然し心の底から、哀悼の意を表して唱ふる將士の稱名の聲などが、ごつちやになつて檜造りの廣い道場を搖がし初めた。

暫くすると日は暮れて、死者の靈前には御燈明が、將士の間には燭臺が白晝のやうに點された。

夕餉には酒が出た。通夜の名で夜を深かし、夜討に寄せる兇徒等を引ッ包んで討つ豫定であるから、將士の意氣は軒昂してゐる。酒の旺むに從つて、其等の過去の武勇談だの、功名談だのが語り出され、次第に賑かになつて行く。

その中に夜は更けて、九つ近くならうとした頃、各方面に配置してある斥候の者の報告が來た。案のごとく所在雌伏の兇徒は今夜結束をして、濱町城を屠るべく密に起つて四方から夜襲の勢を進めて來たのだ。

血塗になつた敗殘の猛者



『殘念だが致し方ない』阿蘇惟前は怒氣に戰く絶望的な調子でいつた。

その眼の前には猿渡丹波が默然として立つてゐる。黒皮縅しの鎧の袖には、血が生々しくついてゐる。辨慶のやうな坊主頭

や、鬼髭の生えた厳い顔にも血が點々とついてゐる。その周圍には二十餘名の壯士が平太張つて呻吟してゐる。濱町城の夜襲に敗れて、兵器を杖に辛うじて茲まで逃げて來たのだが、奮鬪中に負うたる重傷は體一面にあるのであるから、鎧の袖も草摺もみな血みどろになつてゐる。

庭は白々と明けんとしてゐる。北の方、未明の天に、曙光のやうな明るさが一刷毛漂うて見えるのは、渠等が昨夕濱町へ夜襲をかけるに先だつて、城中の兵を威嚇するため、城下の町を燒き立てたその殘炎の反映なのだ。

『もう斯うなつては潔よく』と惟前は續けていつた。『茲で力々と枕を並べて切腹する外に道はあるまい』

『いや』考へてゐた猿渡丹波は、頭を振りながら靜かにいつた。『切腹は何時でも出來ます。案外にも城兵に備へがあつて慘慘に討ちなされたのは時運といふもの。存へて居りさへすれば、再擧の策は幾らでも拙者廻らして御覽に入れます』

『だが、加々爪景治とかいふ、あの城中の軍師のいつた言葉で見ると渠等の許には、躬の根據地たる目丸を初め、田小野、馬の谷、須原住など、味方の者の潜伏して居る所の地理はいふまでもなく、人數、人名、その他の事も詳細に調査を遂げた報告が屆いて居るやうに思はれる。幸ひにして討ち漏らされた味方の同勢が再擧を謀るに足るほどの數があるにせよ、もう隱れ家とする所はないのだ』

『其所です』と猿渡は押へるやうに、『實は拙者、斯る場合に、逃げ込む穴として屈強の地を撰んで置きまして御さいます』

『ほう何所にの？』

『この方角に當る所で』

『五家の庄か』

『御意』

惟前は眼を舉げて、未明の天に聳つてゐる内大臣山と天王山との間の空中をじつと眺める。五家の庄はその向ふにあるのだ。

平太張つてゐる傷者等も、喘ぎながら眼を舉げて、賴母しさうに向ふを眺める。

五家の庄といふのは、隣郡（八代郡）の山間にある、葉木、折付、樅木、椎原、久連子の五部落をいふのだが、其所には平家の落人と、菅家の裔たる雜座氏とが住んでゐる。古來四方との交通を絶ち、天險によつて四百年來、地頭守護の支配を受けず、獨立をして兩族共に自適の生活を營んでゐた。其んな者のあることは、各時代の領主地頭も噂に聞いて知つてはゐても、家臣をやつて征服するほど重大な者ではないのであるから、みな其のままで放つて置いた。で、兩族は蕃殖をして、今では相應の人口となり、其所に物語りにあるやうな小王國を形づくつ

て、靜永以來、建長以來の、榮華の夢を追ひながら種族を全うしてゐるわけなのだが、前記のとほり天險の地で、樵夫獵師の徒輩さへ境外の者は渠等種族の、一分の消息も傳へてゐない。其所へ猿渡は着目したので、この別世界へ逃げ込めば、濱町城の討手は勿論、新領主（小西）からも太閤からも討手を向けられる心配は毛頭ないと信じてゐるのだ。

『成程！』や丶あつて惟前は頷きながら言葉を續けた。『五家の庄へ逃げ込めば、今爰にゐる我々の命はお身のいはるるとほりに全うすることが出來るであらうが、然し麻貴の手の者や、穴山一角の手の者は、みな城中で討死してゐる。其れに我とお身の手の者だけが存へて居つては義理が立たんでないか。其れもせめて百人近くも殘つて居ればまた何時か再擧を企つる望みもあるが、九死一生の者ばかり、たゞ僅か是れくらゐ殘つてゐるのでは什うにもなるまい』

『いや』猿渡はまた靜かに抑へて、『我等と共に逃げのびた勇士は爰に居るだけですが、麻貴等の手の者も追々と爰へ落ちのびて來るでせう。仰せのとほり百名以上は必と生き殘つてゐますから、然う御落膽なさらぬやうに』

『だが我々が生きて居つては、宗家の幼主惟光に累を及ぼさぬものとも限らぬ。外にゐて反旗を樹てた我等はたとへ全滅しても、名譽ある歴史を有する阿蘇の血統は絕やしたくない』

『其れもまた拙者には工夫が廻らして御ざいます。過般もお話說したやう、吉良雅樂之介の愛妾と、渠の舊朋輩だつた──今は濱町城中にゐて、主人雅樂之介の小姓をして居る加地五郎太といふ者の危艱を尼ケ崎にて救うて、拙者のためならば何時たりとも犧牲になるといふ起誓文、認めさして御ざいますから、萬一の場合には、其れをもつて御幼主のお命乞をいたします』

『だが早苗とかいふ愛妾は、一昨夜怪童の手で首を搔かれたといふではないか』

『縱し其れが誠であつても……』と猿渡は尙ほ怯まず續ける。『吉良雅樂之介の胤を宿した──妊娠中の早苗の命を救つてやつたには相違ないゆゑ、加地五郎太を抱き込んで、其れを云ひ立て丶御幼主のお命乞を申し出れば聽容れられぬ道理はない筈。將來の事は一切を拙者にお任せ下すつて、このま丶無事に五家の庄をさしお引揚げのほど願ひ上げます。あれ、あれを御覽あそばせ、那れへ四五十人味方の者が一團となつてまゐります』

『お丶成程』惟前は眼を擧げて麓の方を嬉しげに見る。

夜は白々と明けきつて、朝霧の起つ山路を、喘ぎ〳〵兵器を杖に峠の方へ登つて來る。渠等も矢はり惟前を盟主と仰ぐ主將と共に、昨夕城中へ斬り込んで、激しく奮闘をしたのであつたが、八面埋伏、手具脛引いて待つてゐた多勢の包圍攻擊に會

ひ、力盡き刀折れて、據なく無念を忍んで血路を開いて城外へ出て、手いたき敵の追撃をやつと免れて來たのであるから、みな甚だしく疲勞してゐる。中には九死一生の狀態にある重傷者もある。烏合の衆の悲しいことには、物の具とても滿足につけてゐる者は甚だ少ない。兵器とても其のとほり、刀槍がその主なる物で、弓や鐵砲は十人に一挺あるかないかの有樣、彼我の優劣はもう其れで明かだつた苦戰を續けて、困憊の身



を今宮へ引き摺りながら來たのであるから、その步は毫も捗取らぬ輕傷者でも四五ケ所は手足に傷を受けてゐる。四五十人の一團中に、血に彩られてゐぬ者は殆どないほどの慘狀である。其れが段々と峠の方へと這ふやうにしてやつて來るのだ。

兇徒這々五家へ落つ

『みな大分の手傷のやうだが』惟前は渠等を見ながら、悼ましさうな調子でいつた。『でもよく逃げ了せてまゐつたものだな』

『敗北したら目丸をさして引き揚げるやうに申してあつたし、白藤津留等の要所には、敗殘の者を取りまとめ、引率をしてまゐるやう拙者手の者を五六名配つて置きまして御ざいますから、其のとほりにして助け合ひつゝ

まゐつたものと心得ますが、あの樣子では渠等の外にも、未だ多數生き殘り、四方に散つてゐる者があるかのやうに存じられます。兎も角も渠等を引き連れ、些とも早く五家へ落ち、再擧の策を立てるやう御決心のほど願ひ上げます』

『む……』と惟前は考へてゐる。

『武士の意地と、小さな義理と、婦人の情に囚はれて、死をお撰みになることはこの際御無用に願ひ上げます。死は易く、生は得難い、且つ大功を立つるは、小さな挫折屈辱はじつとお忍び下さらなければなるまい儀かと存じ上げます』

『其れは然うじやが……』

『ま、兎も角もこの場は一應』と猿渡が諫めてゐる間に、血みどろになつた勇士の群は、渠等の側へ近づいて來た。

『目、目丸の殿……』

『猿渡殿！』

『殘念な事で御ざいましたな』と悲憤の聲を揚げながら、勇士



の群はばた〳〵と崩れるやうに地上へ平太張る。

總大將と參謀の、無事で其所にある姿を見たので、張りつめてゐた渠等の氣概は、一時に挫折したのであつた。

『勝敗は兵家の常だ』と猿渡は激勵するやう、『この度の一揆には、縱し敗れてもこの次の一揆の際には必と勝つ。落膽しては相成らん』と鋭く浴びせた。

『然しもう我々は……』

『みな重傷を負うて居ります』

『其れに後からは城兵が追擊の手を進めて居ります』

『是までは辛うじて、勵まし合つてまゐりましたが、もうこの上の防戰はこの體では出來ません。吁、苦しい、其所らに水は御ざいませんか』

『水は五家へ行けばある』

『何ッ？』兵太張つた勇士の群は、怪しむやうに丹波を見仰げて『五家といふは平家の落人の居る所では御さいませんか』

『然うじや、この山の向ふにあるのじや』

『然し大分の道程で』

『否や』と猿渡は頭を振りつゝ『道程は五里ばかり、いはゞ眼と鼻の間にある上、あれに見ゆる内大臣山の麓をちよつと北へ廻はれば、もうすぐ五家の入口じや』

『でも我々には五里は勿論、一里の道もこの上はもう歩けさうに思へません』

『其れに五家へ行く道は、鳥獣すら容易には通へぬやうな險路のみ續いてゐるやうに聞いて居ります』

『其所じや』猿渡は微笑しながら『一夫道に横はれば萬卒通りがたしとある本文どほり天險の地が、道路の至るところにあるのじや』

『では迚も我々は』

『まア聞け』と猿渡は早くも抑へて『で、まゐるには苦しいが、其所が落人の我等に取つては、勿化の幸ひだと申さにやならぬ。假令ば今お身等と共に、勇を皷して落ちて行く。その後からは城兵が追撃の手を冲して來る。其れを防ぐには平地にあつては頗る困難を感ずるが、天險の地を利用して防げば拙者一個でも易々敵は喰ひ止め得られる。幸ひにして拙者は無事だ。殿をしてまゐるから安心をして行かるゝが好い。さア奮起して歩まれい。水もあの山の向ふには必ずあるに相違ない。殿！』と今度は惟前の方へと眼を向け『是れだけの人數があれば、再擧は樂に圖られますから、御覺悟を翻へし、何卒五家へお落ち下さい。尾張中村の賤民ですら、奮起して瞬く間に天下一統の大業を成就いたしたでは御さいませんか。勿體なくも神の御末の血筋を引ける大宮司家の柱石同樣のお身でゐながら――而て多年振はさる宗家の家業恢復の雄圖をお抱きになつてゐながら、然る怯弱なるお心ばへでは――はゝゝゝ平素剛愎の殿にも似合はぬ。さア何卒お先へ』

『では兎も角も恥を忍んで……』と惟前も心を決して、進まぬ足を運び出す。

重傷の上に疲勞しきつた勇士の群も生き得る限りは生きてゐたいのは山々である。刀折れ力盡きたとはいへ、阿吽の息の絶えざる間は、主家再興の念願はやみ〳〵捨てるわけにはゆかない。で、猿渡の激勵に會ひ、睡りかけた氣魄の眼を開き、血みどろになつた自分の姿を、泣いて見廻はしてゐた一同は、盟主惟前が五家へ落つべく決心をして旆を南へ、歩を運び出した姿を見ると、兵器を杖に體を起して、また蹌々と歩き初めた。

この時は日は高く昇つて、水無月末の蒼天に火のやうな威を輝かし、また今日も燬くやうな暑さを送りかけてゐた。

向ふには嶮岨が疊々として起伏してゐる。國見、烏帽子、鉄子等の山脈である。麓には青石原、砥用、尾群等の諸部落が、夏木立の鬱蒼と繁茂し展開してゐる中に、描いたやうに指點せられる。路は北から南へ通じて、羊腸、また羊腸、所謂九十九折なるものが、牛馬は樂に通られる。爰は目丸の山腹なのだ。

女將決意天險を探る

惟前一行の落ち行く姿が、南へ消えて暫くしてから、麓の方に一隊の人馬の影が見え出した。丸に二つ引の白旗が四五旒その中に翩へり、鎧の札や兜の星が日に煌耀と輝いてゐる。領主吉良の軍勢が、討ち漏らしたる兇徒等を勦滅すべく大擧して追撃の手を進めて來たのだ。

隊伍整々、旗鼓堂々――といふほどではないが、小雪が自身馬を乘り出し、城兵の半を率ゐて、衆に先だつて來たのであるから、主將に續く軍勢の意氣は衝天の概がある。軍師加々爪澁治以下、物頭格の部將等はみな逞ましき馬に跨り、差物などを負うてゐる。先頭には鐵砲組、二番手には槍組、三番手には弓組、四番手には步卒の一隊――といふやうに隊形正しく、粛々として進行して來る。

峠へ來ると馬を駐めて、小雪は部下の將卒に休息すべく令を傳へた。その傳令使はお側去らずのお袖が悍々しく執つたのだつた。かの女も矢はり馬に跨り、腹巻を着け、鉢巻をして、大薙刀を携へてゐる。小櫻縅しに身を固め、紫縮緬の覆面をして、男性の武將を見るやう、腰に大太刀を佩いてゐる主將小雪の武者振とは絶好稀有の對照である。

『貴女も暫しお馬からお降りあそばしては如何です』とお袖がいつた。

『いや、妾は矢はりこのまゝが好い』と小雪は答へた。手に持つてゐる采配は日に燦として輝いてゐる。

『でもお疲れで御ざいませう』

『ほゝゝ』と小雪は笑つて、『まだ半日にも足らない乘馬じや。いかほど道が險しいからとて、さう容易には疲れはせぬわよ』

『その御勇氣が殿樣におありあそばすと好いのですのに』

『またいやるか』

『は……』お袖は恐縮して口を噤んだ。

『殿の御出馬にならぬのは、早苗どのゝお忌中ゆゑ、決して戰陣に臨むのをお厭ひになつたわけではないのじや』

『其れは好う存じてゐますが……』

『ならお噂は斷じて爲やるな。多寡の知れた一揆を討つのに、然も敗殘の兇徒を追ふのに、殿の御出馬を待つには及ばぬ。妾が來れば澤山じや』

『御免あそばせ』
『詫びるには及ばぬが、向後は口を愼むが好い』と叱つてのけたが、その心中の寂しさは什うすることも出來ぬのだつた。
斯る時に眞先かけて、討ち漏らしたる兇徒の謀首、阿蘇惟前を初めとして參謀の渡丹波などと一個殘らず討つて取り、殿下お心にかけられてゐる肥後一圓の草賊を根絶したる快報を名護屋の御本營へ飛ばしたら、いかに御感賞あそばすことかと思ふと彼女は夫の姿の、爰に見えぬのが悲しまれるのだ。いふまでもなく快報は夫の名をもつてするのだが、其れにしても實際に、夫の力、夫の指圖で、討つて貰へぬのが物足りないのだ。
昨夕にしても然うだつた。城中の要所々々に、手配りをして伏兵を置き、五百に近い決死夜襲の兇徒を鏖殺する大事な場合に、雅樂之介は自身の口から五月人形だと稱したとほりに、少しも活躍はしなかつた。身に緋縅しの鎧をつけて、鍬形打つた兜を頂き、金の采配を持ちながら、早苗の死骸の側にゐて、廊下へさへも出ようとせなんだ。
鐵砲の音、矢叫びの聲、亂刄亂撃の凄じい響は城の四方に起つて、城内一圓に修羅の巷と化し了つたかと思ふばかりの大激戰があつたのだつたが、主將たる渠の姿は、どの方面の城兵も見かけた者は一個もなかつた。『まつたく五月人形だ』『あれではいかに奥方が躍起となつて騒いでも駄目、元來腰が起たぬのだ』『腰抜侍！腰抜大將！其んな者を主人に持つては、いかに我々に武勇があつても、朝鮮征伐の軍勢に加はることは駄目かも知れぬぞ』『厄介な者を主人に持つた。たゞ頼むのは奥方ばかりだ』『然うだ、奥方を男にしたら、加藤福島も及ばぬくらゐの大將になるに相違ない。女だつて強くさへありや大將になれぬ筈はない』『いざといふ場合には、奥方樣を押し立て〻朝鮮征伐に出かけよう』などといつて臣下の者は、夜が明けてまで誹謗してゐた。勿論決死夜襲の兇徒は、豫定のとほり鏖殺しにして、捷ち誇つたる渠等の意氣は、斗牛を呑むの概ある折から、餘計に其れは酷いのだつた。
其んな事も今の小雪の胸にはまざ／＼と浮かんで來てゐる。
『吁、情けない！昨夕討ち漏らした兇徒等を追撃するやうに極つた時にも、妾はそつと御出馬あるやう、お諫め申して見たのだが、矢はりお心は動かなかつた。いかに御柔弱な御氣性とはいへ、元々男子でゐらつしやる。其れにお側には妾もゐれば軍師を初め多くの猛者がお附き申してゐるのであるから、多寡の知れた兇徒を恐れて御出馬にならぬ筈はない。矢ツぱり是れは何所までも怒つて拗ねてゐらつしやるのだ。今日までの妾の爲打を憎んで拗ねてゐらつしやるのだ。この樣子では何時になつたら……？』と思ふと眼には涙さへ浮く。
が、今は軍旅にあるのだ。討ち漏らしたる兇徒を追うて、馬

を城外へと進めて來たのだ。無用な感情の囚虜となつて躊躇つてゐるわけにはゆかない。で、そつと涙を拭つて、馬の頭を立て直し、休息するやうに命を傳へた部下の軍務を眺めてゐると、軍師加々爪景治が、かの女の方へたッ〱と馬を進めて來て一禮した後、途々樵夫獵師を捉へて、訊問をしたところによると、兇徒は五家の要害へ逃げ込んだらしく思はる丶。五家といふは云々な所であるといふ事を、かの女に委細披露した。



『ほう、五家といふは然やうな所か』好奇心に馳られた小雪は微笑みながら軍師にいつた。『話說には聞いて居つたが、然やうな許が今の世に實際あらうとは思はなかつた』

『御意』軍

師は當惑の色を見せつゝ、『で、五家へ逃げ込みましては、討滅するに道はなく、縱しありましても味方の兵士を損ずるのみで目的は容易に遂し得られぬやうに愚考いたすので御ざいます』
『成程のう』と小雪は沈思してゐたが、暫くすると斷乎たる決心の色を見せながら、『然し人間の住んどる所じや。たとへいかやうな天險を要害として居るにせよ、討伐されぬ道理はあるまい。其れに、五家の者共にせよ、古來代々の國主領主に、謁見の禮を執らざるばかりか、貢租を毫も上納せぬとは、言語道斷の致方、領主としては恕しては置かれぬ者共と申さにやならぬ』
『御說では御座いますが、五家の八代郡にあるので、御當家御領內の人民とは申されぬので御ざいます』
『でも加藤家御支配の中ではあらう』
『いえ、小西家の御領內です』
『其れにしても殿下の領民、殊に殿下御懸念の不逞の兇徒を推量どほりに庇まふやうな事であつたら、殿下に弓を引く者と斷じて討つてのけても好い筈、殊に兇徒の軍師たる猿渡丹波と申す男は、妾の手にて生捕つて訊ねにやならぬ事があるのじや』
『その儀は豫て伺つて、よく存じては居りますが……』
『ならいふとほりにしてたもれ』小雪は屹と命令するやう、『いづれにしても此のまゝで引返すのは吉良家の名折れじや。其れに源平時代から、然やうな許に引き籠り、境外不通の別天地を營んでゐた者共の生活の狀も實見したい。追擊の手を緩めずに是れからすぐにまゐつて見よう』
『は……』といふより外には、軍師は返す言葉がなかつた。
『ではまた兵を進めるやうに』
『は』と軍師は隊列の方へと戾る。
小雪は立てた馬の頭を、また南へと靜かに向けると、手綱を悠々と操り初める。北ぐるを追うて進める軍勢、士氣は張りきつてゐるのだが、何にしろ道は嶮しい。一二町每に見仰げるやうな阪路に出會うては行くのであるから、先頭にあるかの女の馬も然う急いでは出されないのだ。後から續く隊列は、阪路の上を蜿蜒と、長蛇のやうに畝つて進む。丸に二つ引の白旗は、深山おろしに吹かれては翩翻として天に舞ひ、馬上の武者の差物はみな音を立てゝ搖れてゐる。

（つゞく）

稀代の女丈夫小雪將軍！ その颯爽たる武者振を見よ！
夫を懷ふ妻の愛と、領民を安んずる主將の威と、二つの重荷を華奢纖細の裏面に包んで、あはれ一鞭長驅、纖手に不逞を屠らんとすれば、敵もさる者、窮鼠猫を咬むの血陣を張つて、最後の勝負を此一戰に決せんとする。
夢圓かなる境外不通の別天地、果して馬蹄の塵と化するか 息を殺し固唾をのんでたゞ次號の戰報を待つのみ。諸君おまち下さい。

早春

中河幹子

近郊の梅の盛りをつくるビラ電車の中にわが眺め居り
早春の巷にみちてゆく人の若やかにしてたのしめるらし

原田琴子

この森の樹々のこぬれはかゞやけり吹くとしもなき早春の風
ふるさとの安房ぞなつかし春浅み晴れたる空に鳶とぶ見れば

中原綾子

ほのかなる心疲れもうれしけれ妻なる者の正月の宵
初春や涙になれし袖をかへしかりそめながら舞はんとぞ思ふ

生田花世

けさ降りし雪は消えゆき麥の葉の色つやつやしきさらぎの畑
梅の花山かげにさく伊豆の旅熱海おもほゆさむきまひるに

茅野雅子

いちじるく蕾ふくらむ木瓜の木に雫たまれり早春の雨
眼にしるくかげろふのたつ日だまりに開かむとする紅木瓜の花

村上鬼城

早春や木屋町畔の假の宿
雪しろに押流さるゝ鵜舟かな
春雨や窓あけて見る和歌の浦

湯ヶ原にて　荻原井泉水

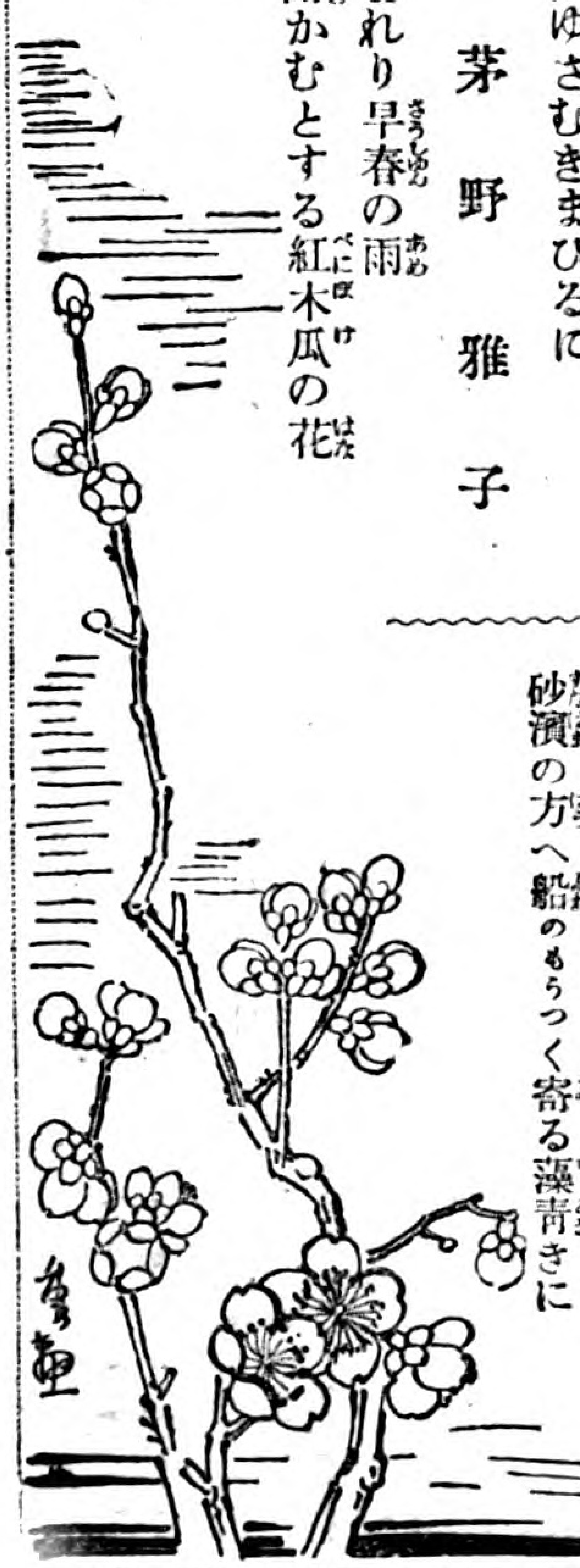
出るに入るに春浅く橋の水音
川音さびしい温泉宿の火鉢の抽斗

臼田亞浪

霜の草もぞもぞと我が日向かな
足袋固し杜の響き見返しぬ

爐べ　河東碧梧桐

蜜柑葉なり枝なり爐べの蟲膝拂ふ
砂濱の方へ船のもらつく寄る藻青きに



血ろくろ傳奇

土師清二
岩田專太郎畫



一

踊る黒き手

籐表を布いた三疊ばかりの小室で、犬飼のお豊と怪しい勇肌の男は、對座して話してゐるのです。

桐火鉢、細形の銀燭、白絹の座蒲團、床には唐の徽宗皇帝の筆になつた白狗之圖の小軸が掛けられてあります。その軸の前に据ゑてある狛犬の香爐は、これも唐か三韓傳來

の珍什に相違ありません。しかもその狛犬の口から伽羅香の紫煙が一すぢ、絲のやうにのぼつてゐるのです。

床を背後に、白絹の蒲團の上に行儀よく坐つてゐるお豐——いつの間に着替へたか、黑地の小袖、黑紬白紐の被布です。たゞ頭髮だけは、先刻のまゝの簪卷です。

『貴方が、あのやうな下卑に追はれていらッしやる……どうなすッたのでせう？』

と、お豐は婉然といひました。

『なアに、面倒ですから……』

言葉尻を濁して、怪しい勇肌は兩手で膝頭を押へたまゝ伏目で答へました。

『でも』とお豐は云ひかけて止しました。この男が云ひたがらないことを押して訊いては、助けてやつたと鼻にかけてゐると思はれるのが癪だつたのです。

すると、怪しい勇肌は、

『失禮ですが、わッしの腑に落ちぬことがある。なンてえいふのかな……後學のためだ。これはかういふ譯、仕掛だと云つて頂きたいンですが、如何で？』

伏目のまゝ、さう云ひます。

『えゝ、申上げてよいことだけは、お答へしますわ』とお豐。

『先刻、わッしが、岡ッ引に追はれて此方へ逃げ込んだ時、お宅の犬は一聲も吠えなかつた。ところが、わッしの直ぐ後から追込んで來た岡ッ引、此奴には一度に吠えかゝつたのだ。この仕掛を承りたいンですが、どうでせう？』

『さア……』

お豐は、笑つて答へません。そこで勇肌が催促するやうに顏をあげた途端、お豐の滑かな唇が綻びて、

『犬は賢くて、敏いものですわ。ですから貴方を怪しい人と思はなかつたのでせうよ。その反對に岡ッ引を怪しい者と犬が思つた——と、かうお考へにならない？』

『なるほど、左樣で』

と、怪しい勇肌は皮肉に笑つて、



『お宅の犬は、怪しい者には吠え付かず、怪しくない人間に吠え付くのだらうツて……わツしには、さう思へます。はゝゝはゝ』

『さうおきめになつて、お置きなさいまし』

『さうですか。ぢやコレでお暇します。御雑作になりました』

怪しい勇肌は、ペコリと他人を馬鹿にしたやうなお叩頭をするのでした。

『お歸りですか』

お豐は、立上つて勇肌を玄關まで送り出しました。

『左樣なら、御免なさいまし』

と云つたかと見ると、サツと門の外へ姿を消した怪しい勇肌。

『立派な素性だね』

お豐は、ひとり言です。お豐は怪しい勇肌が普通の人間でないことを看破つたに相違ありませぬ。それほど鋭い、一目で裏の裏まで見貫くお豐の眼力を以てしても、

『あの人は、どうしたツていふのだらう？』

と重ねて獨言たずにはゐられなかつたのです。如何なる目的があつて、何事を企んで、立派な素性の人間が勇肌に化け岡ツ引に追はれるやうなことをしてゐるか——お豐にはソレが判らないのです。さうして、



私の家へ逃げ込んだのは、私に對して何か目的があつたのではないか……？

お豐は、さう考へずにはゐられなかつたのです。

大身代のお店の娘御が浚つて行かれたらしいのですが、あの岡ツ引はわツしが下手人か、その仲間だらうと思つてるやうで……。

あゝさう〳〵！ あの人は、そんなことを云ツたツけ……？

とお豐は、迂乎〳〵聞いた最初の口上を今になつて思ひ出しながら、先刻の小室に戻つて、猶少時ナニか考へてゐましたが、

『お俊や』と呼びました。

『はい』

　と答へて、そッと襖を開けたのは、髪を禿にして振袖の十歳ばかりの女の子です。

『嘉兵衛を伴れて來ておくれ』

『はい。畏りました』

　お俊と呼ばれた禿振袖の女の子は、縁から庭下駄を突ッかけ、飛石づたひに植込の闇の中に吸込まれました。それから間もなく現はれたのは窓から灯の洩れてゐる犬小舍の軒下です。

『嘉兵衛さん』

『オウ、お俊ちやんかい』

『あい。御主人様がお呼びですよ』

『俺に御用か、ヨシ〳〵』

『白は寢たかい?』

『あゝお寢みだ』



『黒主は、起きてる?』

『いや、黒主様もお寢みだよ』

『さう、みんな寢てるのね』

　と、お俊がつまらなさうに佇んでゐるところへ、手燭を取つてヌッと出て來たのは銀のやうな白髮頭です。

『お待遠さま。さ、行かう』

　犬作の嘉兵衛は、先になつて禿姿のお俊と二人犬小舍を出て、母家に向つて進みました。

　お豊のゐる部屋に入つた犬作の嘉兵衛は、お豊に目禮をし、こんどは床の間に向つて合掌しました。床に掛つてゐる徽宗皇帝筆白狗之圖を拜んだのです。終つて頭をあげた嘉兵衛、

『御用でございますかな?』

　と凝ッとお豊を見るのです。

『今朝、あたしの留守中お出でになつたお客は車坂かい?』

『はい。惠心寺といふ眞言寺で清淨庵といふ庵室で、そこの尼さんが犬を欲しいと仰有るのださうです』

『番犬かね?』

『はい。金に縦目はかけぬとか、そんな口振でございました』

『尼さんに番犬……訝しいねえ』

お豊は思はずニツコリしました。その笑顔に惹入れられるやうに犬作の嘉兵衛もニヤリとするのでした。

惠心寺内清浄庵の尼といへば、甚之助と阿波屋の娘お鶴――この二人の行方不明に關係の深い阿波侯の元の寵妾慶了院お伊勢の方のことに相違ない。さうして獰猛な番犬を欲しがつてゐるのは、怪しい勇肌を怖れてのことに相違ありません。が、何も知らないお豊は、

『明日、玉斑でも伴れて行つて來ようか』

さう云つて煙草箱を引寄せ、一ぷく吸ひつけるのでした。

二

道岡三十郎は青い顎を撫でながら、慶了院お伊勢の方をジロリジロリと見てゐる。姥櫻といふ奴だな、いゝ女だ――とでも思つてゐるのでせう。

山ノ宿の藤吉は、恐る〳〵伏目になつて云ふのでした。

『下手人は、私奴が身命をかけてお繩をかけます。しかし阿波屋さんも、生田樣にいたしましても、何より大切なのはお二人樣――甚之助樣とお鶴さん、このお二人が無事でお歸りになるのが一番大切なことゝ心得まして及ばずながら私奴、それから同道しました道岡樣のお智恵も借りまして、甚之助樣が今夜御當庵にお戻りになるやうに致したのでございます』

と、さすがにお伊勢の方は、驚き且つ歡び、思はず一膝乘出しました。

『甚之助樣が……此所へ？』

『左樣でございます。お戻りになるに就ては萬一のため、警護旁ゝ私奴、それに道岡樣にも御苦勞を願つた次第で……』

と藤吉は慇懃至極、畏る〳〵といふ態でいふのです。

『生田樣は？』

『はい。一切私ども二人にお委せを願つて參りました』

『さうですか……』

とは云つたものゝ、慶了院お伊勢の方は、生田辨左衛門の次男である甚之助を、生田の屋敷へ歸らせず何故この庵室に戻らせるのか――そこに不安を感じないではゐられなかつたのです。

お伊勢の方と藤吉の問答を、相變らず顎を撫でながら聞いてゐる三十郎は『藤吉奴ウマクやつてやがる。甚之助が此所へ歸ると知つたのは犬飼の家へ追込んだ怪しい勇肌が落して行つた手紙で知つたのだ。ソレを俺達の働きで判つたやうに云つてやアがる。人を食つた奴だ』と心中呆れ、可笑がつてゐるのです。

口先にかけてはそれほどな藤吉も、長く話してゐれば辻褄が合はなくなるから、餘の事は何も云はず、早速に、

『甚之助様は、お駕でお歸りになります。就きましてはお玄關のお室を拜借いたしたうございます。私ども兩人、甚之助様のお歸りを待つことに致します』

と切出して慶了院の前を引下り、三十郎と二人で玄關側の小部屋に坐込みました。

執事の又右衞門が火鉢、茶、菓子などを運んで來る。小娘が座蒲團を捧げて來る。二人は如何にも重々しい様子で、行儀よく坐つて待つてゐるのでした。

『おい、藤吉』

『ヘツ、なんです?

『一ぱい食はされるのぢやねえか……』

『大丈夫です。彼奴は屹度甚之助様を返して來ます。が、生き身で返すか、死骸で返すか……氣になるのはソレだけです』

と、二人はヒソ〳〵話してゐる……表は又雪模様でシーンとした靜けさが、窓に忍寄つて來るやうです。

トツトツ……トツトツトツ……

跫音が、こちらへ響いて來る……。

『ヤツ、來たやうですぜ!』

腰を浮かせて藤吉、尚も耳を澄ましてゐると、玄關から名を呼ばれて思はず吊込まれた藤吉、

『藤吉さん、藤吉さんはこちらでござンすかね?』

『おゝ!』

と唸るやうに云つて、玄關へ飛出しました。見れば一挺の町駕です。

『旦那が藤吉と仰有るンで……お客様をお受取りなすツておくンなさい』

駕舁の一人が、提灯を差しつけると相棒は垂を刎上げる。すると、ひよろりと出て來たのは甚之助です。髮も衣服も元のままであつたが、下緒を括合はして鮫鞘の兩刀を首から脊中にブラ下げてあるのが、普通の様子でありません。

『お歸りなさいませ』

と藤吉が、鋭く目を働らかせつゝお辭頭をする前をボウとしたまゝ横切つて、そこにゐる三十郎にニツと會釋をし、そのまま奥へ踏込んで行くのです。その後を追はうとする藤吉を、目で押へて三十郎、

『やられてるぜ。氣が狂つてるらしい。後は内の人にやらせて……おい!』

『さうだ!』

といふや否や、藤吉は玄關から門へ、三十郎も續いて外へ出

て行くのです。

粉雪のチラづく闇の凍路を、ホイ……ホイと驅け去つて行く空駕……。

『頼みますぜ！』と一聲、三十郎にかけて置いて藤吉は、バラバラツと驅け出した。車坂を登り切つて上野宿坊の塀下、駕の背後二三間まで近づいた藤吉、

『おいツ、駕、待てツ』

『へい』

ピツタリ止る駕。追付いて『コレだ』と十手を見せると同時に、

『俺と一緒に來てくれねえか』

ジワリといふのです。

『へツ……な〻〻……なンで……』

『い〻から來いツてンだ！』

威丈高になつて、後棒の腕を逆に捩上げようとした途端、

『うツ……』

反返つた藤吉の袖の下から、顔を出したのは怪しい勇肌の闇にも白い顔と威勢のい〻聲です。

『おい、駕屋ツ駈出せ！　大丈夫だ』

『ソレツ』と駕は一目散。

當身をくれて抱上げた藤吉の圖體を、路へ叩きつけ跳び除くところへ飛鳥の如く追縋つた三十郎、

『エイツ』

抜打の一刀！

『タツ！』

右へ開いて立直つた怪しい勇肌の眞向へ、息も繼がさず無聲殺刀の追打！　鋭い呼吸です。また跳び退る途端に前へ流れた紺法被の襟を切先にかけてスウツと切破つたと見る間一髪のび切つた水車刀！

身を屈して避けたと見えたが及ばなかつたか？

パツと宙に散つた黒煙！　血か？

『エイツ！』

と叫んだ怪しい勇肌の右手が閃めいた瞬間！

『タツ……』

三十郎、二足退つてピツタリ大刀を下目青眼。爪先刻にジリツ……ジリ、ツ……と切先鋭く附廻はして來るのです。

怪しい勇肌は——と見ると、彼は三十郎の水車刀を避けか



ねたか、體を屈した途端躍り氣味に立上つた髷の刷毛先を拂はれ、元結は切れて散バラ髪……匕首を逆手に振冠つて、爪先起つて呼吸を計るのです。

あれほど鋭く追打に追打をかけた三十郎が突如一呼吸退さつたのは、勇肌が體を屈した途端、拔くなり投げつけた匕首の鞘の不意打に、思はず第四刀の追打を沮まれたものと見えます。

しかし、勇肌が如何に手練ありといへども、三十郎は手だれの大刀、刃渡二尺八寸に剩らうといふ大業物、それに呼吸も纔がさぬ追打の鋭さ、剛膽不敵の三十郎です。勇肌は刃渡一尺に足らぬ匕首、その上先を取られて呼吸に亂れが出て來るのを、どうすることもできないのです。

藤吉はどうしてゐるかと見ると、この兩人の死鬪を他所に、大地にのびたまゝビクリとも動かないのは、餘程ひどく當てられたものと見えます。

降つてゐた粉雪も何時か歇んで、夜氣沈々……。

三十郎は、大刀の切先をジリ、ジリ、ツと上げかゝつたやうです。



三

鮫鞘の兩刀を脊中でブラ〱させながらズン〱奥へ踏込んで行く甚之助の後から執事の丈右衛門は、震へ聲で、

『甚之助様……生田様！』

と漸く聲をかけました。と、振向いて、

『母上は、ゐらるゝか？』

甚之助は、さういふのです。

『はゝ……母上と仰せでござりますか……はゝ……母上？』

今にも泣出しさうな顔をして、丈右衛門は甚之助を見るのです。此所へ來て母上だなどといふ甚之助は氣が狂つたのだ——丈右衛門はさう思ひました。侍の魂たる兩刀をブラ〱脊負つてゐる恰好が既に氣狂としか見えません。

『判らぬ奴だ。お伊勢の方はゐらるゝかといふのぢや』

『はッ、御在庵でござります』

『案内せい！』

『はッ……』

『先へ行け、先へ立てッ』

『はッ……』

と丈右衛門、恐る〱甚之助の前を擦り抜け、先に立つてお伊勢の方の部屋まで行き、襖の外から、

『申上げます。生田甚之助様お越しでござりまする』

『おゝ……』と呻くやうな聲が内でしたのは、お伊勢の方が思はず發した聲に相違ありません。同時に甚之助はサッと自分で襖を開けるや否や踏込んで立開張つたまゝ、お伊勢の方をジロリ見つめるのでした。

『訝しいなア、コレが俺のおッ母さんか……はッはゝゝゝ……こりや可笑しい。この女……生田辨左の女房ぢやないか……はゝゝゝ……生田辨左の女房ぢやないか、生田辨左の……アリヤ女房……アリヤ女房ッ……』

手拍子を取つて今にも踊り出しさうな恰好をするのです。

驚き呆れてゐるお伊勢の方、丈右衛門は氣が氣ではありません。が、捨置くこともできません。

『まゝ……甚之助様！ ナニを仰有るのでございます。お靜かに……お靜かになさいまし』

『嘘吐き奴ッ、退れ！』

『はッ……いゝえ、いけません！』

丈右衛門は懸命です。甚之助の前に立塞り首にかけた下緒を手早く解いて鮫鞘の兩刀を取るより早く抱へて部屋を出て行きます。氣狂に刄物——と思つたのでせう。

『甚之助様……』

と、お伊勢の方は、屹度なりました。

『なんぢや？』と甚之助。
『下においでなさいませ』
『坐れか……』
『はい。こゝへ、おいでなさいまし』
『愛さうなことをいふ女ぢや。そちは何者だ。名乘れ！』
と甚之助は、お伊勢の方の膝頭に我が膝を打ツ付けるやうに坐つて、睨みつけるのです。哀しさうに微笑みながら、慶了院お伊勢の方は甚之助の肩に手をかけました。
『お鶴を返せ！』
『お鶴とは、阿波屋の娘でございますか』
『狸奴ツ』
『えツ？』
『はツはゝゝ……生田辨左の女房ウぢやないか……殿の目……殿の目を盗んだ女房ぢやないか。狸々々……狸奴ツ』
手拍子足拍子、躍上つたかと見るとお伊勢の方の肩口を蹴飛ばし、仰向けに倒れかゝる奴を飛違つて切髪の髻を掴んで容赦もない氣狂力！　右へ引き左へ振つて床を踏鳴らし躍上る跳上る狼藉です。
『アレツ……』とお伊勢の方、思はず一聲あげたが、下賤の女と違つてそのまゝ齒を噛みしばつて右へ左へ振られるに委せてゐます。

思へば——甚之助は生田辨左衞門の胤としても、また阿波侯の胤にしても、お伊勢の方にとつては生みの我が子でした。その我が子が氣が狂ひ、あられもない狼藉を生みの母に加へてゐるのです！
そこへ引返し飛込んで來た丈右衞門、見るより甚之助を羽交締に抱き竦める。それをジロリと振返つた甚之助、
『辨左來たか……汝の咽喉笛に、やがてお伊勢の方が噛み付くぞ！　覺えて置け！』
と云つたかと見ると、直ぐケロリと何事もなかつた顏になる甚之助を、丈右衞門は必死に宥めすかし漸くお伊勢の方の部屋から連れ出したのであります。
お伊勢の方は、凝ツと目を瞑りました。亂れた衣紋、こぼれかゝる髮、眞青な顏です。唇がブル〳〵顫へてゐるやうです。耳の側で幾百千の小鉦を叩くやうにジヤン……と鳴つてゐる耳の底に漂うてゐる一ツの聲は『生田辨左の女房ぢやないか』といふ世にも怖しい呪ひの聲です。秘密を發からうとしてゐる呪ひの聲です。
氣の狂つた甚之助が、何故生みの母の秘密を節面白く謳ふのか……？
誰が氣狂に、そんなことを教へたのか？
お伊勢の方は、亂れ狂ふ心の中で、その正體を掴まうとしま

した。

と……お伊勢の力の目の前に煙のごとく浮びあがつて來たのは、阿波屋の使と僞つて逢ひに來た怪しい勇肌の顏でした。

『おゝ……あの男！』

全身水を浴びた心地で、ハッと目を開けた途端、正面の襖がスウッと開いて、黑裝束覆面の男が宙を踏むやうに近づいて來るのです！

『アッ……』

身を反らして思はず後へ手を突くお伊勢の力の顏へ、顏を擦付けるほど近づけて、覆面は云ふのです。

『氣を付けろよ！　甚之助の生命をな……いいか。お前と辨左衞門の秘密を節面白く唄ひ出した甚之助だ。生かして置いては夕メにならぬと思ふだらう。そこで辨左衞門は甚之助を殺したがる……判つたか。おい、甚之助に氣を付けろよ』



ムッと顏に息吐が掛るほど顏に顏を寄せて囁く黑裝束覆面の男……お伊勢の力は觀念の瞳を閉ぢたまゝ呼吸を彈ませてゐるのでした。

漸く我に返つたお伊勢の力の前に、ガタ〳〵震へてゐるのは、黑裝束が殘して行つた泥の跫跡を一ツ〳〵見ては、その跫跡を傳うて部屋の外へ出て行かうとしてゐる丈右衞門の恐怖に身も世もない姿でした。

『やッぱり……夢ではなかつたのか！』と思つた途端、クワッと目の前が闇くなつてお伊勢の力は仰向けに倒れてしまひました。

四

『さア入ッしやい〳〵！　今が丁度々々……一ノ谷は熊谷敦盛の組打、下から抱へて足を絡んで、鐵漿黑々の薄化粧、敦盛さんが一振り振つてといふところ……兩馬の間にドシン……組伏

せましたるは丹次直實……さア入ツしやい入ツしやい……一枚！二枚ツ三枚イッ』

木戸の呼込が木札を叩いて叫んでゐる。内ではドンチャン三味線鉦太鼓、舞臺は今や一ノ谷組打の場だ。熊谷は大猿、敦盛は小猿、二人とも犬に乘つて、牽かれる綱に從つて竹箆の刀を振廻してゐる……場所は深川八幡の境内、ピツシリ並んだ見世物小舍、物賣店の掛小舍。今日御縁日といふので、一ぱいの參詣人、見物人です。

大鳥居から見物人の中へ、混れ込んで來たのは山ノ宿の藤吉と道岡三十郎。二人はブラ〳〵見世物小舍の方へやつて來ました。



『えゝと……犬と猿の芝居、此奴でござンすね』

『うム。入つて見るか』

『さうですね』

と藤吉、ズッと木戸番に近づいて、

『頼むぜ』

『ヘツ……あツ左樣で、御苦勞樣でございます』

『いや！ いゝナニもしてくれるな』と押へて置いて三十郎を振返る。三十郎は藤吉の後に跟いて木戸を通ります。

『はゝア猿が泣いてやがる、熊谷直實愁嘆の有樣といふところですね』

と面白さうに無駄口を吐きながら藤吉はジロリと一撫に見物の顔を見廻して、聲を落し、

『ゐない……一ぱい食つたか』といふ。

『うム』と三十郎は、うなづいてそのまゝ猿芝居を見てゐるのです。藤吉は猶も見物人をあれこれと見廻しましたが、阿波屋

の娘らしい女の姿は見えません。
『ゐないときまれば、出ませうか』
『さうか』と三十郎。
で、二人は又小舍を出て、人の波の中を裏門へぬけ、横町へ曲つて『きねや』と網行燈をかけた小料理屋の奥の部屋に坐りました。
『姐さん、滅法冷てえ手をしてゐるぜ』と藤吉は女中の手を握つて『ゾツと寒くなつた』
『アラ御戯談を。ではお熱いのを――』
『あゝ頼む』
『はい、畏りました』と女は出て行きます。
『慶了院、甚印の方は本當だつたが……この鶴印も本當でせうか……どうも、あツしにやア……』
藤吉は、さう云つて仔細らしく腕を組むのでした。
鶴印といふのは阿波屋德右衞門の娘お鶴のことに相違ない。藤吉の話の模樣から察しると、鳥越で出會した怪しい勇肌が落して行つた手紙に『甚之助はこれ／＼の日に慶了院に返してやる。お鶴は深川八幡境內の犬藝猿芝居の小舍に置いてやる』と書いてあつたので、それを便に藤吉は三十郎と二人で、八幡境內に出張つて來たらしいのです。
そろ／＼不安になつてきたらしい藤吉は、三十郎の見込を聞いて見たくなつた。そこで『あツしにやア』と切出したのでした。
『なア藤吉』
と三十郎は懷から出した右の手で、例のごとく青い顎を撫でながら、
『甚之助、お鶴――それもそれだが、俺には腑に落ちねえ』
『へツ、なンです？』
『何のために彼奴が、阿波家老牛田辨左衞門、お伊勢の方、阿波屋德右衞門なんかを狙つて脅したり苦しめようとしてゐるのか――そこが俺には判らねえよ』
『へえ……』
『お前も、判つちやゐねえのか』
『わツしや、阿波德から娘がゐなくなつたから探してくれろと頼まれた――云つて見りやソレだけの話でござンすが……』
『しかし藤吉』
『へい？』
『彼奴の造り口は金を取らうとしてゐるのでもない。これから先のことは判らンが、俺の見當では彼奴は大きな怨みを懷いてゐるンだ』
『なるほど！』
『牛田辨左衞門、お伊勢の方、阿波德――今のところぢやアこ

れだけだが、藤吉、よく見てゐるがいゝ、まだ〳〵彼奴に狙はれて苦しむ奴が出て來るに相違ない。もッと大物が彼奴に苦しめられるに違ひねえ。大きな怨みだ。さうでなくちや彼奴が遠廻しの、眞綿で首を締めるやうな苦しめ方をする筈がない。手取早く殺つてしまはアな』

『で……貴方は、どうなさいます？』

と云つた藤吉は、そろ〳〵自分の身の上が怖しくなつてきたのです。頭の上に幾千貫とも知れない大盤石がジリ〳〵落ちかかつて來る心地がする……。

『一件から手を引くか――といふのか？』

三十郎は、例の冷たい苦笑ひで、蔑むやうに藤吉をジロリと見るのでした。

『ヘツ……えゝまア……』と藤吉。

『俺は、コレがあるからな』

と云ひながら、袖口からのぞかせたのは白布で卷いた左手！それを一目見ると藤吉は思はずハッと呼吸を呑まずにはゐられなかつたのです。

一昨日の夜、上野宿坊の塀下で怪しい勇肌との死鬪で三十郎は左の小指一本と藥指の第二關節を切落された……三十郎に活を入れられて漸く息を吹返して見ると怪しい勇肌の姿はなく、三十郎の手からタラ〳〵血が滴つてゐた……その時の有樣を藤吉は思ひ出したのです。

『藤吉、お前も覺悟しろ。彼奴の手から逃れッこはねえぜ。かうなつたら此方が殺すか、彼奴に殺されるか。二ツに一ツ、逃れッこはねえと思へ。俺も不具にされて手を引く譯にいかぬ。お前だつて一度は彼奴に殺されたのだ。彼奴に怨みがあれば、此方も彼奴に怨みがある。いゝか』

三十郎は、粘ッこい。蛇のやうな執念さです。それを聞いてゐる藤吉は、だん〳〵眞ッ青に顏の色を變じて來るのでした。

そこへ漸く先刻の女中が酒肴を運んで來ました。だが、藤吉の俄に打つて變つた樣子を見て取ると戲談も云はず早速出て行つてしまひました。

いくら呑んでも藤吉は酒の味がしません。三十郎はチビリチビリ默々とやつてゐました。いゝ加減なところで切上げて、二人は『きねや』を出ると、今度は三十郎が先になつて八幡の境内へ引返して行くのでした。

時刻は七ツ(四時頃)、出盛つてゐた參詣人、見物人の引潮時。客を呼んでゐる物賣の聲も、ドガン、ヂヤガンとやつてゐる見世物の鳴物の響もダレ氣味になつて聞える頃です。

三十郎は、懷手のまゝ犬藝猿芝居の小屋に近づきます。

藤吉は、その時になつてハッと氣が付いて三十郎の前を驅けぬけるやうにして木戸番に渡をして、二人は見物席に踏込みま

した。

と、見ると、舞臺は中休と見えて、犬も猿も太夫も見えず、樂屋もシーンとしてゐます。

藤吉は、見物席を見廻しました。すると次ぎの幕を待つてゐるらしいマバラな見物人の中に、丸太柱に脊を寄せて茫然と立つてゐる娘がゐます。

がッくり崩れた文金風高島田、少し開張けかゝつてゐる胸……眼鼻立……？……！

『ア、……ゐた！』

思はず叫んだ藤吉、立竦んで、歩き出さうにも足が利かない……。

『あれか？』と三十郎。

『へい……！』

途端に藤吉は足が前へ出たので、娘の前に近づきました。

『お鶴樣！　お迎へに參りました。お迎へに參りましてござります』

お鶴は、無言無表情、藤吉の顏をぼんやり覗込むのでした。

三十郎は、こちらからお鶴の樣子を見ながら『これも甚之助と同じ手だ、氣狂にされてるな』と思ふのでした。

五

神田筋違御門を出た一挺の駕、若黨二人がお供で馬場を左に御成小路を眞ッ直ぐに池ノ端へとつて行きます。

不忍ノ池に沿つた道を一町ばかり西へ進んだ時、若黨二人は顏を見合はせてピタッと立止りました。

と、駕は知つてか知らずにか、そのまゝトットと驅出します。間もなく左へ駕が廻つて見えなくなるのを待つて、若黨二人は來た道を引返しはじめました。

『お互に御苦勞だな。夕暮の寒風に吹かれるのは格別だ』

『いゝ心地か、はゝゝゝ』

と二人が高笑ひ、今まで突袖にしてゐたのをそのまゝ懐手に直さうとした一人が、思はず石に躓いてヒョロッとなつた途端、トンと肩を打ッ突けて、

『御免なさい。相濟みません！』

『ナニッ？』

ひよいと振返ると、頬冠を取つて小腰をかゞめてゐる男、何時何所から現はれたか袢纒腹掛紺股引の勇肌だ！



『元＊の御老中溜之間詰余田伊豫守樣御家來衆でございますな？』

『えッ……』

と若黨兩人、驚きの聲を發した途端、素早くお叩頭を一ッした怪しい勇肌は、

『お邪魔樣でございます』

と云つたかと見るとそのまゝ向直つて先刻行つた駕の後を追ふやうに足早に去つて行くのです。

『怪しい奴！』

『いや、捨て置け、職人らしい、ナニをするものか』

『さうか……しかし俺どもを伊豫守樣家來と知つてゐる……訝しいぞ』

『だが、もうゐないぜ』

さう云はれて一人の若黨は、勇肌の行つた方を振返つたが、シーンとした夕闇で、四邊に人間らしいものゝ影も見えないのです。

『そのうち駕が戻つて來るだらう。明朝早くお迎へに出直しだ。お供はツライねだぜ』

と一人の若黨は、面白さうです。かうして若黨二人は元來た道を御成小路の方へ スタスタ行くのでした。

こちらは怪しい勇肌――突嗟に若黨に突當つて余川伊豫守の家來と確めれば、もう若黨なんぞに用事はない。そのまゝ池沿ひの道を、急いでやつて來たのは、黑門、黑板塀の宏壯な一構、表がかりを一通り見て置いて引返



し、門の前まで來ると、内から、

『相棒、急いだり！』

と聲がしたかと思ふと、流れ出るやうに出て來た一挺の駕。勇肌はそいつを遣り過したかと見えた途端、引違へに――門の内へ。吸込まれるやうに消えて行くのでした。

ピッタリ閉め切つた障子に、今帶を解きかけてゐる男の影法師が映つてゐる……その前に跪いてゐる女の半身が映つてゐる……それと見て怪しい勇肌は、男は確かに江戸城溜之間詰余田伊豫守廣武、女は愛妾お萬の方だ――と見て取り、雪見燈籠の陰からヌッと半身を現はし、植込の闇を縫ひながら一歩、一歩窓の下に近づくのでした。さうして窓下の壁に蝙蝠のごとくピッタリ體を附けてしまひました。何時の間にか黑布の頰冠、袢纏を裏返して早速の黑裝束、腹掛の丼には匕首を一口忍ばせてゐる樣子です。

『風呂は、立てゝあるか』

と云つてゐるのは、紛ふ方無き伊豫守の聲です。

『はい。立てゝございます。直ぐお越しになります？』

といふ聲はお萬の方です。

『其方も一緒に浴るか』

『えゝ、お供いたします』

『では、行かう』

と伊豫守は褞袍に着替ると、お萬の方と部屋を出て行く氣配……勇肌は、音もなく壁を離れると、體を屈しました。正に跳躍する一瞬前の體構です。大地を蹴つて跳ねあがり、窓枠に兩手をかけたかと見る間もなく、スル〱ッと障子を引開け、乘越えて部屋に踏込んだのです。それと同時に疊に全身ピタッと伏つたのは自分の影法師が障子に映るを防ぐ用意でした。

彼は、今脫ぎ捨てた伊豫守の衣服の疊み目に手を入れました。

取出したのは袱紗包、手早く解くと出て來たのは金唐革の大型の紙入です。それを開いて中から一通の書附を引拔くと同時に腹掛の丼に押込み、元のやうに紙包にして衣服の間に挿込んで置き、猶も部屋の内を見廻したのです。と、彼の目に附いたのは床の間の刀掛に飾つてある銀梨地柄の兩刀でした。見ると同時に、

『お……！……』

思はず呻つて、我にもなく悲憤と驚きの聲を洩した途端、間近く、

『思ひがけない珍客、よくわせられた』

といふ伊豫守の大聲です！

『チエッ、失敗つた……』

窓から出ては覺られると突嗟に判斷したか、怪しい床脇の地袋戸棚を引開けるや否や身を忍ばせ、襖を音もなくスウッと閉めてしまひました。幸ひ中には掛軸が四五本入てあるだけで、頭を屈めてゐれば坐つてゐられるほどな廣さです。彼は凝ッと呼吸を殺しました。その耳へ、

『折角の御保養中、お伺ひするのも如何かと存じましたが、急にお耳に入れたい儀がございまして……』

と聞えて來たのは、彼に取つて聞覺えのある阿波家の家老生田辨左衛門の錆太い聲です。

『あゝ左様か』

と伊豫守は輕く受流して、ズツと部屋に入つて來ました。その後から辨左衛門、お萬の方が續いて入つて來る氣配です。

やがて三人は座に着いた模樣でしたが、伊豫守は將軍の直臣で、しかも幕政に參與する老中以上の溜之間詰、辨左衛門は蜂須賀家の江戸詰家老で陪臣です。二人の身分には雲泥の隔りがあると云つてよいのです。

その二人が、何の因縁で結附いてゐるのか？　しかも斯うして夜中云はゞ隱れ家の妾宅に押しかけて來るところを見ると、二人の間には秘密に結ばれた特別な因縁、關係がなくてはならないのです。

『まア、用談は用談として、風呂はドウぢや。寒いでな』

伊豫守は、さういふのです。云はれて辨左衛門ハツと氣が付いたやうで、

『お撥仕いたしまする。貴方様は？』

『行きかけたところぢや。見らるゝ通りこの體ぢや』

と伊豫守は褞袍を張つて見せて『ハヽヽヽ』と他人を馬鹿にしたやうに笑ふのです。

『恐入ります、はゝゝゝ』

辨左衛門も笑ひました。追從笑ひといふ笑ひ様です。

『では、待つて貰ふかな。こゝではいけまい、あちらへ御案内してな』

と伊豫守が、お萬の方へ言付けるのを斷つて辨左衛門は一人殘された體になり、伊豫守とお萬の方が出て行く後姿を見送つてから、床の間に向直りました。さうして雪舟筆の山水の掛軸を拜見する體で、床の間に膝行した辨左衛門。掛物を見る體ながら目は、刀掛に注がれてゐるのです。さうして――、

何事か感慨深く、兩刀を見てゐる辨左衛門の兩肩を、出拔けにムズと摑んだ者がある！　不意で、

『アツ！』

思はず聲を擧げて振向く顏へ、カアツ……痰唾を吐きかけるや否や、脾腹を一蹴！　グンと蹴つたから堪らない！

『うツ……ウ、ヽン』

海老のごとく體を曲げ、辨左衛門は、のたうち廻るのです。その耳元へ口を寄せて、怪しい黑裝束の男は、

『辨左……苦しいか。汝の倅のところへコレから行つてやる！　汝の倅のところへ行つてやるぜ』

と吹込むやうに云つたかと思ふと、窓の障子を引開けヒラリと庭に飛降りました。

のた打ちながらも辨左衛門、

『お出合ツ……曲者……お出合ツ召され……おで…お出合！』

と叫びました。

（つゞく）

光

川路柳虹

斑點が無數に、
唸りが近よると
銀の翼が光つて
頭上をかすめすぎるプロペラー
ひろい空。

工場の煙りがゆるく
まつすぐに上る。
のびやかな光のな
かで
小鳥たちの囀り。

荻原井泉水

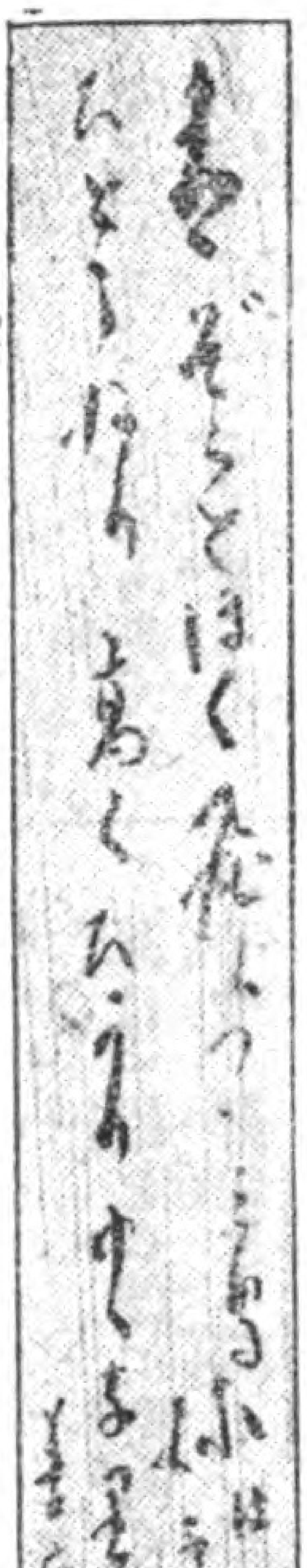
初春の水平を煙あげ
てゆく船

佐佐木茂索

しほはいまみちたるならん舟のりの　かけ聲きこゆ
夜はしらみつつ
目さめしがいまだくらけれふなうたの　かそけきを聞く
小床のなかに

青ぞらとほく飛びつゝみゆる球は更にひとうねり高くひかりゆくなり

土岐善麿





寺內爲治郎畫

さしつけられつつ　取る手鏡の
光りがまぶしい　角かくし

平山蘆江

磯に寄せてきほひふくるる大き浪
ひかりを卷きて打返りたり

杉浦翠子

川上 三太郎

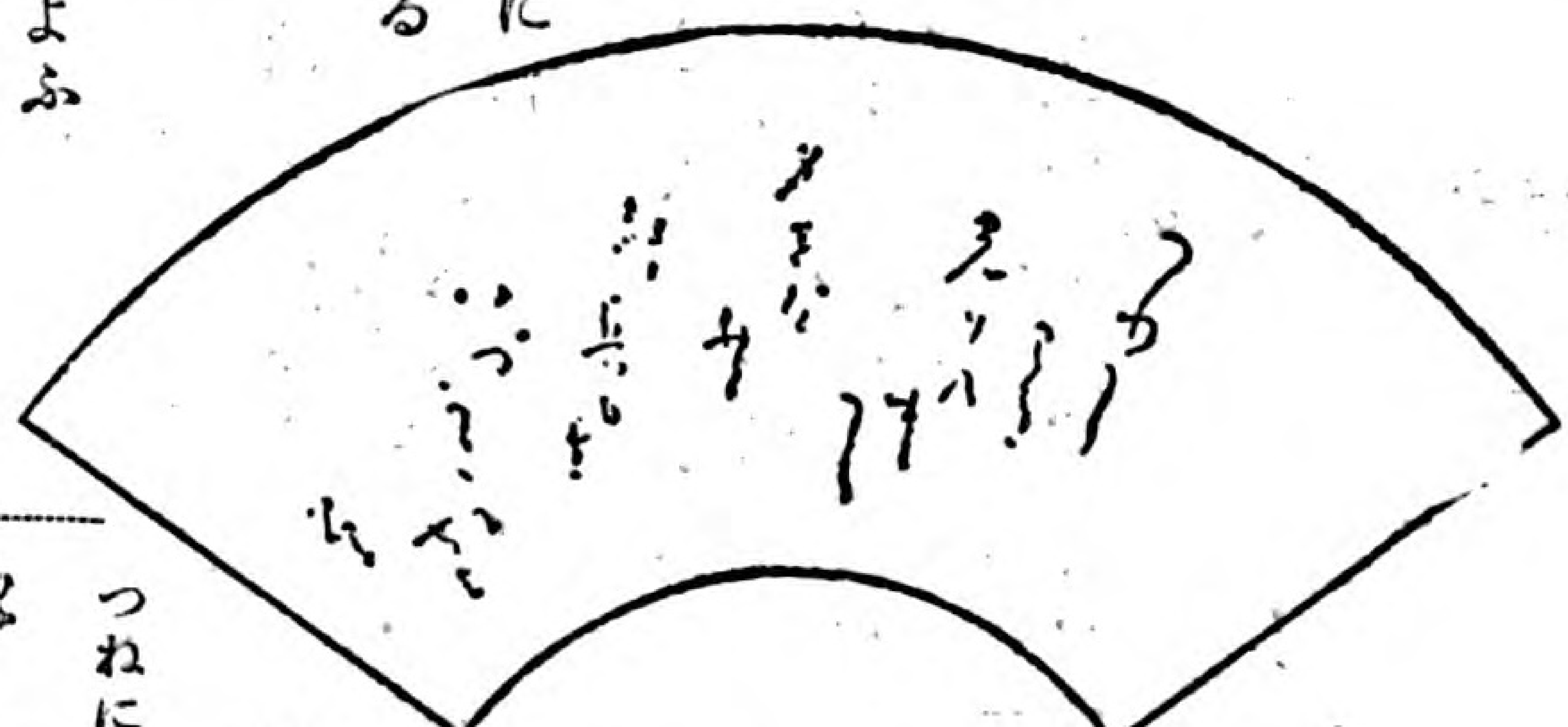
模範村知事の祝辭に陽の光
初日の出字引にはない雲の色

若山 喜志子

その生命の光は常にみづからに
かがやくものを忘れてぞをる
生れながら光に生くる人間の
さても不思議やかくはさまよふ

高木 角戀坊

マネキンの違ふ所は目のうるみ
夜を忘れてエヂソンは年を取り

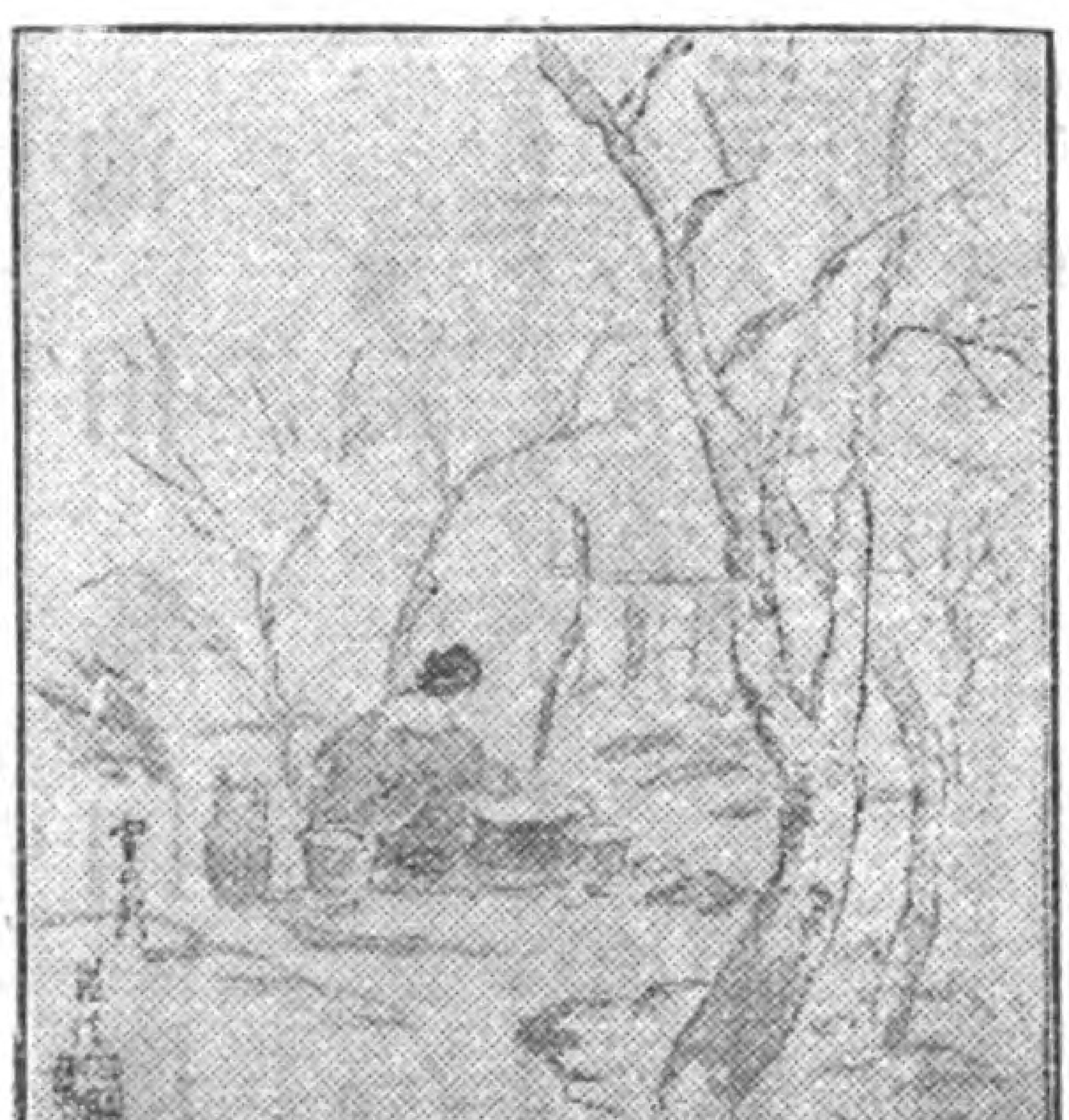


太田 水穂

天上に月の光りのみつるとき玉の王女は生れましにけり
雲ひとひら月の光りをさへぎるは白鷺よりもさやけかりけり
梅ばやし月の光りのさし入れば花は霰に似てつばらなり

與謝野晶子

つねにわれ
光りの中に
身をばおく
紅く眞白き
いづかたにせよ



富田溫一郎畫

伸びる力をもみ出す秘訣

能率增進協會々長 池田藤四郎



1

人間は、アタマに故障のない限り、恐ろしい底力をもつて居るものだ。この點に對して、何人も異存はあるまい。

ラヂオのやうなものを見ても判る通り、世界の隅から隅へ、三味線や琴の音が、空中を傳はつて瞬く間に届くといふのも、元々人間の細工に外ならない。

一命に關する大事件に出會うた場合、人は自分でも信じられぬ程の怪力を出して、危機を脱することがある。震災當時には、さういつた例が幾らもあつたやうだ。

猛獸に追詰められて、手も足も出なくなつた狩人が、チヨツトした機轉で、その毒牙を免かれることもある。

發明王エデイソン翁が、過去五十年間に成し遂げた功績を、篤と吟味して見ると、能くも人間があれ程のエライ種を播いたものだと驚かずには居られない。

この上管々しく實例を擧げるまでもなく、人間のアタマとカラダには、思ひも寄らぬ力が潜んでゐるのだ。

神業にも比すべき偉業を成し遂げた人物を見て、その人を單に天才だと言つて了つたのでは面白くない。

謂ゆる天才と呼ばるゝ人も、大部分は人並以上の努力を拂つたからこそ成功したのだ。

この伸ばせば伸びる力を、モミ出さずに居ると、人は一生下積みで終るかも知れない。

普通の力士も、攝生を守り、稽古に勵めば、イツとはなしに、持つて生れた力が約束通り伸びるだけ伸びて、終に天下の横綱と呼ばれるやうになる。

もしもそれをモミ出さずにゐたならば、恐らく普通の荷揚人足以上には進まなかつた事であらう。

この底力をあくまでも誘ひ出して、手一杯に働かせるには、何よりも現在の仕事に興味を有つことが必要だ。

仕事に面白味を覺えぬやうでは、十二分に力がはいらない。

どうすれば思ふ存分力がはいるかといふに、それは決して

近來の快事『眞劍宣傳』

劍道範士 高野佐三郎

キング新年號拜見しました。敎訓的な記事や、興味ある文章が滿載され、眞に力と力の大結晶と思はれます。特に「眞劍」を宣傳して居られるのは何よりも愉快に思ひます。「眞劍」といふは勿論物事に一心不亂になる事を形容しての言葉と思ひますが、劍道で申せば命をかけての眞劍勝負、その緊張した精神、その眞摯な態度、敵を倒さずば止まない意氣、それが平生の修行にも、處世上にも極めて必要なことゝ思ひます。

困難なことではない。

2

こゝに斯ういふ話がある。

當時アメリカで誰知らぬものなきマクレーン式鑄鐵法といふのがある。

その元祖マクレーンと云ふ人は、當年六十五歳であるが、九歳の頃、鑄物工場に小僧として雇はれ、殆んど十九年間は普通の日傭人夫同樣であつた。彼は別に學校へ通つたこともなし、全くの無學であつたから、物を識りたくも讀むことが出來ず、已むなく耳學問によらなければならなかつた。

そこで人をつかまへては、ムヤミに質問を發して、不審の點を質して居た。

それが今日のやうに世が開けて居たならば、喜こんで親切に敎へて呉れる人も多かつたらうが、その時分の鑄鐵工場に勤めて居た職工などは、仕事の暇を見ては下らぬ遊びに耽るといつた風で、小ウルサク色々の事を聞かれるのが面倒でたまらず、マクレーン青年の質問癖を憎むやうになつて來た。それが妨げとなつて、彼は何處でも長くつとまらず、前後二十回も職をはなれるといふ始末であつた。

運よく彼は或る時勤め先きの支配人から一冊の雜誌を惠まれた。

『お前の知り



たい事は、この雜誌にみんな委しく出て居るから、これを見れば、何も斯もよく判る。この部屋にある雜誌はどれでも構はず持つて歸つて、ゆつくり讀みなさい』と親切に言はれた。

忙しい支配人は、この小僧を相手にして、イロハのイから敎へてやるだけの時間がなかつたのだ。マクレーンは一生懸命、雜誌を讀み初めた。碌々文字も讀めないのに、六かしい專門語づくしの雜誌を讀まうといふのだから、その困難はとても一と通りではなかつた。

それでも熱心といふものは恐ろしいもので、人に聞いたり、辭書を賴つたりして、同じものを十遍も二十遍も繰返して讀んで居るうちに、朧氣ながら少しづつは書いてある事柄が判つてきた。

彼は實地の仕事を心得て居たから、全くの素人が專門書を讀むのとはちがつて、いくらか吞込みが早かつた。

折よくその頃同じ工場へ、化學を修めた學生が見習にやつて來た。

何處でもよくあることだが、實地に通ぜぬ學校出のものは、職工から馬鹿にされがちだ。ところが、天の引合せとでも言はうか、幸ひ彼は學問に憧れきつて居たマクレーン青年と、スグさま懇意になつたのだ。



一方の不足を片方が充たし、片方の不馴れを一方が導くといつた具合に、學問と實地の兩方が、まことに都合よく行はれた。

それが緣になつて、終にマクレーン青年は、鐵ともつかず純粹の鋼ともつかぬ一種の鋼鐵を作ることに成功した。

現にマクレーン式半鋼鐵と稱へて、世界各國至る處に用ひられてゐるものがそれである。

この無學の青年は、自分の伸びる力を信じて居た。それをモミ出す唯一の方法は、自分の仕事に徹底することだと氣がついて居たればこそ、十九年の長い月日を普通の職工で通したのだ。

彼は文字の不自由を厭はず、仕事の合間合間を見ては、その學理を究むることに專心したのだ。

マクレーン式鑄鋼法は、現に年々五千人以上の得業士を出して居るほどに世界的のものとなつた。無學の一青年が長年苦しんでモミ出した力の結晶は、天才の御籤でも幸運の賜でもなかつたのだ。

毎日手がけてゐる銘々の仕事を、機械的にやつて居たので

は、折角伸びる力が萎縮して了ふ。深く突き込んで特にこれを究むれば、力は無限に伸びるものだ。
自分の仕事に何か一工風すれば、それだけ力が伸びたことにも當る。

3

それは頭の働きがそうさせたのだ。

高等の教育を受けた東京のある青年は、先代から靴屋を承け繼ぐことになつた。
何分商ひが商ひであるから、學友の手前、何となく恥かしい思ひがした。その上毎日店先へ出て客に接するのが、堪らなくイヤであつた。思切つて廢業しようかとも考へたのだが、流石に親類縁者の思惑もあつてそれも出來ず、いやいやながらその儘商賣を續けてゐた。
すると、或日のこと、一名の學友が訪ねて來て、話しの序でに、仕事の興味と云ふ問題を持出しては、次のやうなことを語つてゐた。
『斯うして君も親讓りの商賣を、イヤな顏もせずに續けて居るのは實に感心だ。お互に學校を出ると、兎角學士樣だといふ己惚もあつて、小賣店の經營などといふことは、迚も考へられぬものだが、君はよくマア斯うして毎日お客の無理を聞いても、腹を立てずに辛抱して居られるネ。矢張り仕事に興味があるからだらう』
さう云はれて靴屋の若主人は、何事か思ひ當るところがあつた。



それは學生時代、教室で小耳にはさんだことが、フト胸に浮んで來たのだ。
それは或る時、講師の某博士が述べた講義の一節であつたのだ。
『何事につけそれに興味を感ずるやうになるのは、その事柄に關して有ゆる知識を集めることだ』
これを平たく燒直してみると、仕事を能く覺え込んで了ふと、それに面白味が出て來るといふ意味だ。
彼は其時まで、靴といふものがどうして出來るものやら、それさへ聞いたこともない。唯モウ無我夢中で商ひに從事してゐたのだ。なんの面白味がなかつたのも、決して無理ではなかつた。
靴を客の手へ渡して、客から金を受取り、夜分賣上げを締めるといふこと以外、別段頭を働かせることもなく、一體自分は何のために學問をしたのだらうと不審をいだく程であつた。そ

れでは嫌氣もさす筈だ。

彼は學校當時の筆記を本箱から出して見た。成程講師の講義中には、今の言葉がハッキリと出て居る。

それはその頃アメリカで有名なハーヴアド大學の哲學教授ジエームズ博士の講義を引用したものであることも判つた。

段々筆記を讀みかへして居るうちに、色々の實例が目の前に現はれてきた。

『曾て或る製紙會社の簿記方は、自分の出世が遲いのに業を煮やして居た。その內に氣のついた事は、彼自身製紙事業に全く不案內であつたことだ。單に帳面を相手にして居たのでは、仕事そのものに面白味を感じない。

彼はその日からジエームズ博士の處方を試すことに決心した。先づ第一に製紙原料のパルプとは如何なるものであるかを知らうと努めた。どういふ木材からパルプが生れて來るものか、それを知るため林業に關する書物までをも漁り始めた。次でボロの研究に取りかゝつた。如何なるボロが、どういふ紙に變るものか、それを知りたかつたのだ。色々の藥品も調べてみた。



斯うして熱心に一と通り紙の製造順序を知り盡してから、更に今度は工場見學に出かけ、工場の內外を、得心の行くまで見もし、聞きもしたのだ。製造の一切を頭に入れてから、次にその販賣方面の研究に着手した。幸ひ簿記方であつた御蔭に、得意先の名前は別段數へられるまでもなく、よく承知して居た。從來は單に普通の權兵衞、太郎兵衞以上に何の意味もなかつた得意の口座が、今度は全く別の味ひを持つやうになつて來た。彼は約二年間を費し、業務の餘暇を利用しては、紙の製造販賣に關する一切を究めて了つた。

斯うなると仕事が面白くなつて堪らない。軈て彼は販賣方に廻され、愈よその身につけた知識を、實地に應用する機會を得たのだ。無論好きこそもの〻上手なれで、彼は拔群の成績を擧げた』

靴屋の若主人は、この筆記を讀んで全く生れ變つた氣分になつた。

人間といふものは、少しの心がけで、その體內に宿る底力を出し得るものだと、彼はしみ〴〵悟つた。

若主人はその日から、熱心に靴の研究に取りかゝつた。

一足の靴を作るまでには、有ゆる製造工業がそれに關係して

居ることも能く解つて來た。

獸に牛皮と云つても、その産地次第で、それ〲變つたものがある。馬、山羊、其の他特種動物の皮なども、その源に遡つて研究してみると、言ふに言はれぬ面白味が出て來るものだ。靴の裏地に使ふズックその他の切れ地、ゴム踵、甲皮や底革を縫ひつける縫ひ絲、眞鍮や銅の鋲釘、ゴム糊、代用擬皮等、それからそれへとその源を突きとめてゆく興味は、却々に盡きない。

ついでは、それを機械で作る順序手續き、手縫ひの靴、それこれを一と通り頭へ入れてしまふには、少くとも二三年の修業が是非共必要だ。

若主人は熱心にそれを研究した。知識は覇氣を促すとは能くも言つたものだ。彼は日本人の履物をすべて靴に變へなければならぬといふ考へを實現するため、アメリカから製靴機械を輸入して、其當時世間を驚かす程の廉價で機械靴を發賣した。

伸びる力は、萬人一樣に備はつて居る。それを十二分にモミ出す唯一の手段は、現在の仕事に通曉しそれに興味を感ずるまでだ。自分に面白味のない仕事で、成功しようと焦つても、それは到底無理だ。（終）

讀者應募漫畫

父ちやん天晴

平野鏡治



親父の教訓

志村つねや



親父『一本

一本は誰でもたやすく折れる。ぢやがかうしてたばにしてはなか〱折れない』

此時馬鹿力のある三男の金時、親父の手からもぎ取つて氣合諸共、エイヤツポキン。一同たゞ啞然。

カクレン

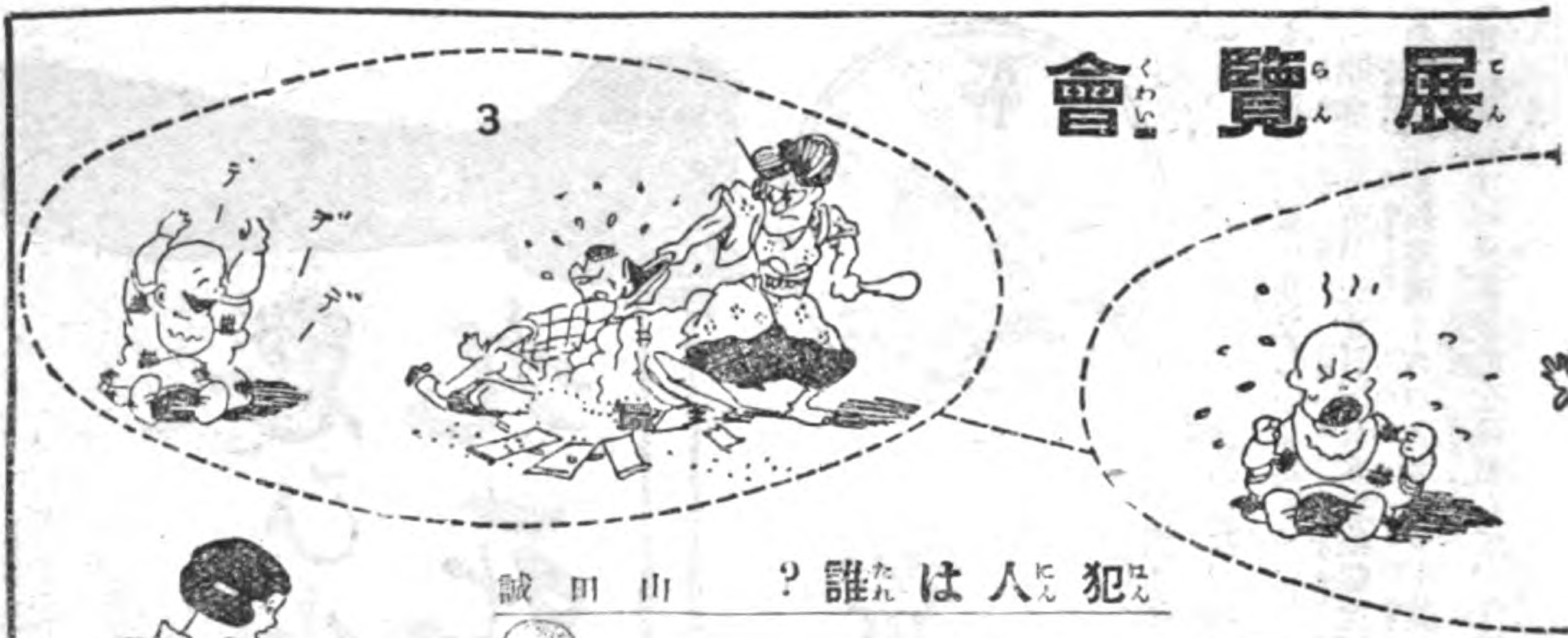


雪だるま

川合四郎



展覽會



犯人は誰？　山田誠



『さあ、此處にあつたお菓子をだまつて取つた人は誰？　手を見ればすぐ分りますよ』といへば末つ子の凸ちやんがあわてゝ――。

ボ　大野利平



女天下　石河義夫

一、また妻君にいぢめられてゐる、なさけない亭主だな……。



二、我輩だつたらこんな風に……（空想）



三、ところが、結婚してみると、獨身時代の意氣は何處へやら。





荒れ狂ふ海上へ墜落

日本航空輸送研究所　渡部萬二郎



『ヤア、潜水艦だ！一イ、二ウ、三イ……六隻ゐるな、何時見ても軍艦の行動は勇ましいなあ』

昭和三年五月三十日、日本航空輸送研究所の東西定期航空機イスパノスイザー號は、堺市に輸送すべき郵便物を滿載して、午後一時五十分、高松市を出發した。操縦士は藤原輝夫君、機關士として同乘したのは斯く言ふ僕。

その日は珍しくも物靜かな日で、空は紺碧に澄み切つて一抹の白雲も見えず、遙か彼方にぽつかり浮んでゐる淡路島の西端から、霞のゆら／＼棚引いてゐるのも、如何にも長閑な眺めである。

と見る――、直下の油を流したやうにどろんとした瀬戸内海を、母艦に誘導されつゝ、二列縱隊を作つて進んで行くのは、六隻の潜水艦だ。波を蹴立てた跡の水泡は、恰も二本

の尾のやうに長く長く、海上に平行して白く殘つてゐる。

『軍艦の行動も勇ましからうが、こんな日には、飛行機の勇姿も滿更ではあるまいぜ』

『さうだ、絶好の飛行日和だ――』

話の中にも機は一路東に進む。高度は約二百米突。

『おや、――あれは』

指さるゝ儘に、直下の海面を注視すれば、これはしたり、單葉水上機が一機、我が乘機と同じ速度と間隔を保ちながら、一路東に走しつてゐる。

『ナンだ、海に映つた我機の影ぢやないか』

『さう――』

二人は相顧みて莞爾とした。

それ程にも靜かな日和だつた。

出發前日修理した不安な空氣壓力計も、〇・三キロの目盛上に固定されたやうに微動だもしない。規則正しく響く單一な爆音は、ともすれば眠む氣をそゝる。

上空から見れば廣いやうで狹い播磨灘、機は早くも飛び過ぎて、やがて繪のやうな明石の上空にさしかゝつた。行く手の大阪は霧に包まれて判然と解らぬけれど、此處迄來れば、後、僅に十五分の行程である。

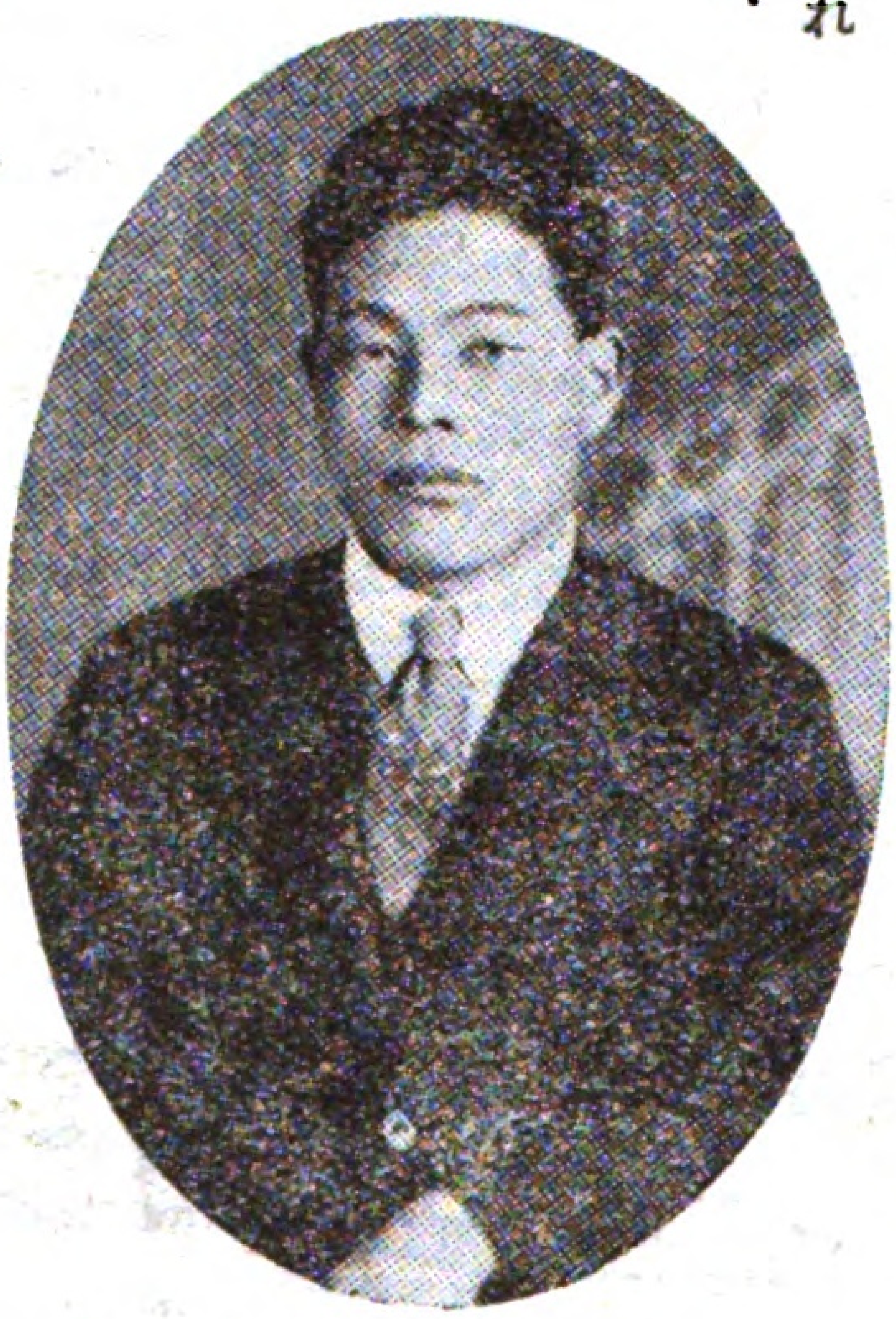
『あゝ、今日の飛行は樂だつた』

思はず僕は呟いた。

と、――その言葉が終るか、終らぬに、突如！眞に突如、發動機が異様な音を立てた。

『や！』

と目を睜はる裡に、忽ちプロペラーは、ブルツ／＼と制動機を掛けられたやうに、異様な震動と共に廻轉を緩めて、目に見えるやうに緩くなつてしまつた。



渡部萬二郎氏

故障―不時着―修理―次ぎから次ぎと頭に浮ぶ、焦燥、不安。何といふ皮肉であらう、一瞬にして、天地が覆へつたやうに、逆境に喘ぐ身となつたのだ。

藤原飛行士は直ちに下げ舵をとつた。機は時速六十哩を示しつゝ下降を續ける。僕ははつと唇を嚙んで前方を見詰めた。

しかも天は愈ゝ皮肉だ。今迄通つて來たところは平穩、鏡のやうだつたのに、淡路島一つ越えた此方は、紀淡海峽を通つて來た西南風に煽られて、海面は白馬が群をなして走しつてゐるやうに、波浪が白く吠えてゐる。

『何といふ間の惡さだ』

この儘、荒浪の上に不時着すれば、轉覆か――破壞か――いづれにせよ、容易ならぬ結果を生ずるに違ひない。ゾッとして思はず身震ひした。

と見て、沈着にして大膽、そして細心な藤原飛行士は、緩かな右廻りスパイラルを始めた。そして下降しつゝも揮發油のコックを切り換へ、手動ポンプを押すなどして、いろいろと恢復に努めてゐる。が、發動機の音は正

常に復しない。然し、その沈着な操縦振りに勵まされて、漸く冷静に返つた僕は、延びあがつて共々適當な着水場を捜し求める、——と、大倉谷の海岸が心持ち靜かなのが目に映つた。

『占めたッ！ 大藏谷の海岸へッ』

二度目の右旋回——

この邊は六甲續きで左程高くはないが、淡路島に對立して聳ゆる山だけに、いつも惡氣流を作るところだ。今、その山の中腹を旋回しようとした時に、運惡く例の惡氣流がどつと機にぶつかる。忽ち機は上下左右の別なく、盛んに煽られ、煽られる。

この時既に機は水上五十米突の處に降つてゐた、と、またも左翼に大きなあふり！ 忽ち機は右廻りキリモミの狀態になつて、急轉直下落下した。

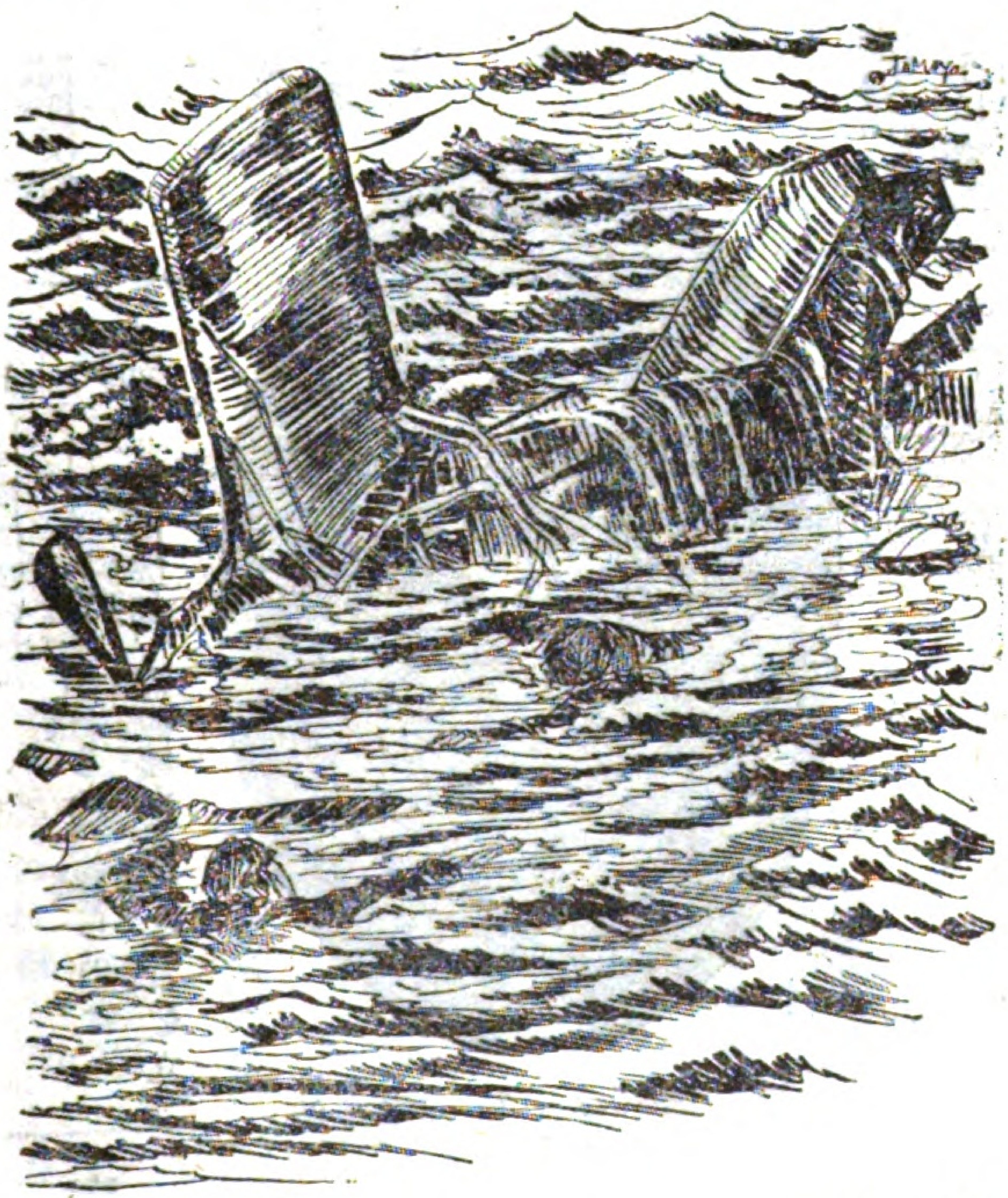
『駄目だ——、墜落——危い——死』

水面は恐しい勢ひで近よつた。

と、耳をつん裂くやうな恐しい水音。

× × ×

如何して水底から浮び出たか、如何して飛行機から離れたか、全く無我夢中だつた。



が、ポッカリと水面に浮び出たら、機から僅か離れたところに、藤原飛行士が泳いでゐた。が、ずぶぬれになつた飛行帽の中から、恐怖に戰く眼を大きく開き、唇から血を噴いてゐる顔をのぞかせ、ガラスの壊れた眼鏡を首にかけてる姿は、實にすさまじいものだつた。——恐らくは僕もさうだつたらうが…

『さうだ、死なゝかつたのだ』

墜落の際、機を這ひ出すべく必死の努力を續けてゐた僕達は、水に衝突した際に、反動を喰つて投げ出されたのであつた。

こみあぐる、生の歡喜——

が、それもしばし、傍に左翼はまだ形を殘してゐるけれど、右翼は取付部からもぎとられ、胴體は眞逆樣にひつくりかへり、眞二つに折られて浮舟は内部の肋骨をさらけ出し、兩脚支柱は飴のやうに曲がつた悲慘な愛機の姿を見た時、——身震ひする程の戰慄を覺えた。

『兎に角、本部と郵便局に急報しなければならぬぞ』

藤原飛行士は、どこかひどく打つたらしく、全く弱り切つてゐるやうに見える、僕は傍に泳ぎ寄つて兎も角も浮舟の破片に縋らせた。四邊はタンクの破裂したところから洩れ出る揮發油とカストル油でドロ〱、こんが

らかつた臭氣に鼻がつん曲りさうである。

藤原飛行士がこの有様では、僕が泳いで急報するの外はない、編上靴に飛行服の重みでとても泳ぎ憎いが、海岸までは僅か四五十米突、元來泳ぎには自信がある、『儘よ』とばかり拔き手を切つた。

漸く海岸について振り返ると、四邊にゐた漁船が直ちによつて來て、藤原君を救ひあげてゐる。

『さうだ、報告より先きに郵便物を助けねばならぬ』

早速僕は飛行服や靴を脱ぎ、人々の止めるのも肯かず、郵便物を搜すべく再び海へ飛び込んだ。

肩や腰、手足まで實に痛い、矢張り墜落の際に打つたのであらう、泳がうとすれば釘でも骨に打ち込まれるやうに烈しく痛む。が猶豫は出來ぬ。飛行機は潮に流されてゐる、まご〳〵すれば行嚢も沈むに違ひない、若し郵便物を永遠に海底に沈めたなれば、信頼して托した人々に申譯がない——と思ふ一念で、一生懸命泳いだ。

かくて救援に來た漁師達の援助で、行嚢と塔載品の一部を搜し出した。そして五個の郵便行嚢を完全に明石局に届け、墜落の原因、飛行機の狀態、郵便物の處置、搭載者の負傷の狀態を詳しく本部に報じたら、何かしらホツとして、涙が止め度なく流れ出た。

本部から急援のくる間、附近の野澤別莊で手當を受けたが、傷は後約一週間で全治した。

墜落の場所が今少し淺いか、或は地上だつたら、到底今日この物語りを書く事が出來なかつたであらう。



柳ヶ瀬隧道の大惨事

敦賀驛詰列車荷扱手　楳谷下一

ウオータローの戦ひの前夜降つた小雨が、ナポレオンの砲兵隊の行動を手間どらせた爲めに、大英雄の運命が傾いたといはれてゐますが、人間の運といふものは、本當に微妙なものだと思ひます。私は敦賀驛駐在の列車荷扱手をしてゐるものですが、ホンの僅かのことから、運よく死ぬべき命を拾つたことがあります。

昭和三年の十二月六日、午前十時半敦賀發の梅小路行貨物列車に乗組むことになつた私は、いつものやうに氣輕に出掛けました。この列車には、指導員、機關手、機關助手、車掌及び列車荷扱手等、合計十人の乗務員が乘つてゐました。

この貨物列車の後部には、いつもは車掌室

を指定連結してゐます。(これは舊い四輪の二等客車を改造したもので、乘務員の執務に便するやう特にデスクや椅子等も備へつけてあるものです)ところがこの車掌室に平常は、後部車掌と列車荷扱手二名、都合三名乘つて行く慣しになつてゐますが、どういふ都合かその日に限つて、この車掌室が連結してありません。仕方がないから後部の車輛に、貨物と同居して行くことになりましたが、とても狹くて三人は腰を下せないのです。

『おい、枚谷、君は前の方へ行けよ』

『馬鹿を言つちやいけない、君こそ邪魔だから、何處かへ行くがいゝ』

『おや、ジヤンケンで決めよう』

といふので冗談半分ジヤンケンをやると、見事私が負かされました。このジヤンケンが一命を左右する程、重大な意義を持つてゐようとは、神ならぬ身の知らう道理がありません。

『態を見ろ』

と仲間の嘲笑を浴びつゝ、私はスゴ〳〵其處を去つて、前部の連中の仲間へ入れて貰ふことになりました。

これから登りになるのでこの列車は前と後に、機關車を二臺つけてゐます、しかも双方とも日本で使用中の機關車の內では最大の牽引力を有するD50形式のものですが、換算六三輛の貨車悉くに、米、油、石炭等の重量品ばかりを滿載してゐたので平地でも却々大變なのに、向ふ先は四十分の一といふ上りの急勾配なので、思ふやうに速力が出ません。ガタン〳〵と物凄く喘ぎながら、やつと登つて行く有樣でした。

敦賀を出て十哩ばかりくると、運轉速度は愈々減じて、ともすれば止まるのではないかと思はれる程です。

『こりや、變だぜ』

『ことによると立往生かな』

みんな心配して窓から首を出して見る。

若しいけなければ、退行する外はないが、さうすると時間で運轉する鐵道のこと、重大な支障を生ずるのは解り切つてゐるので、強い責任觀念から、行ける處まで行かうと猶も必死の努力を續けて行く裡に、柳ケ瀨トンネルにさしかゝりました。

この柳ケ瀨トンネルは、明治初年に竣工したものですから、今日のものに比較すると頗る不完全であり、且つ中が非常に狹く、列車が通ると人は横になつて立つてゐられない程です。しかも四十分の一の上り勾配で約一哩もあるのですから、斯かる場合には、非常に厄介な處です。

ところが、何といふ運の惡いことでせう、隧道へ這入ると愈々速力が減じて、殆ど牛が歩むやうにのろ〳〵になりました。

『や!』

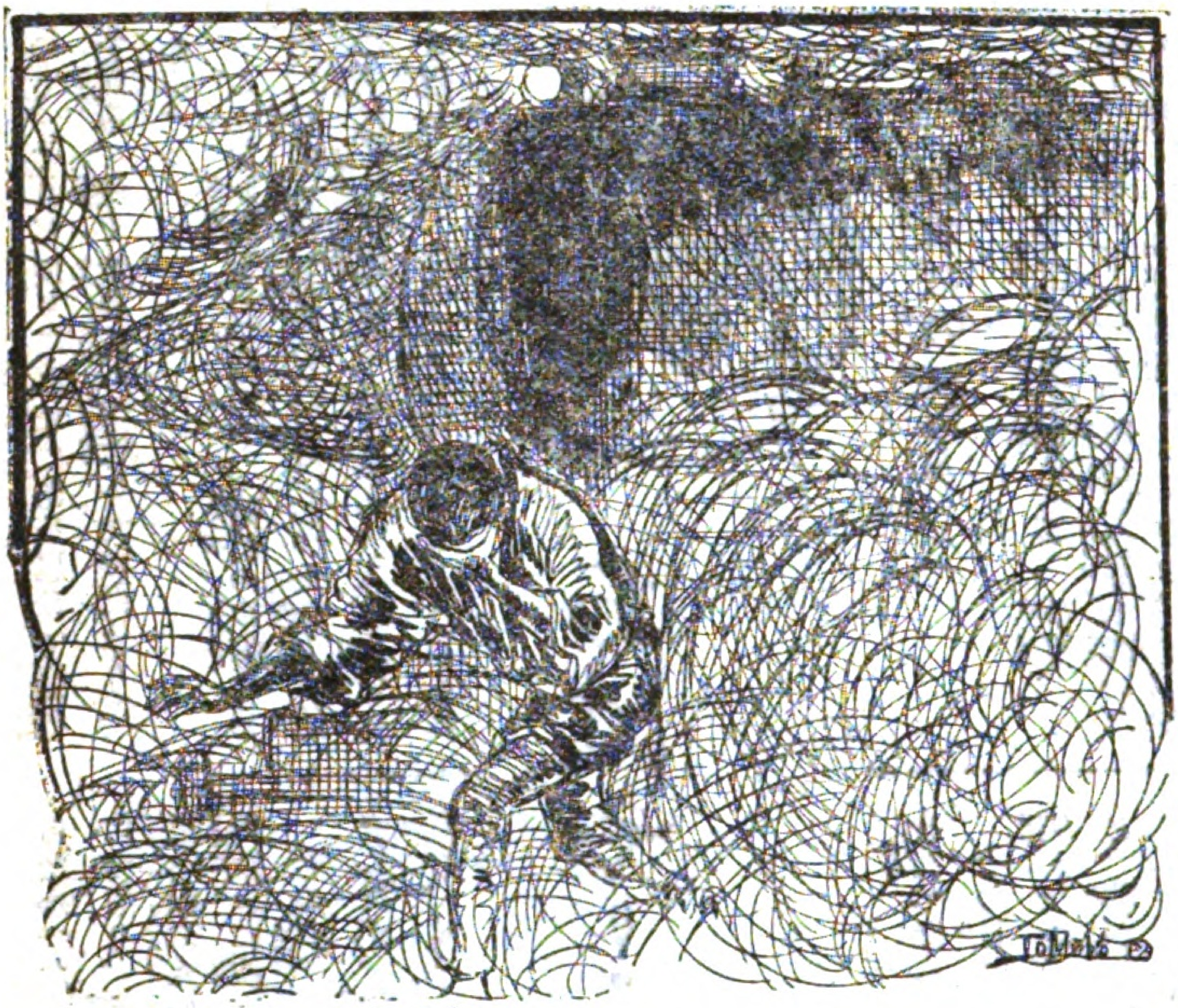
『いよ〳〵いかんぞ』

と顏見合せてゐる裡に、機關車が空轉を始めもう二十間位で隧道が終はるといふところで列車は全く前へ動かなくなつてしまひました。

『さあ、大變だ』

車が止まると同時に、私は次の驛へ急を報じようと戸を開けて外へ飛び出しました。と、忽ちプッと咽せてしまひました。隧道の中は濛々たる煤煙で、眼も口も開けてゐられたものでありません、無理もないことで、二臺の大型機關車から吐き出す煤煙と蒸氣が、折からの逆風に煽られ、波打つて狹い隧道を

後から前へと押し寄せて來るのですから……頭はヅキン〳〵痛くなる、胸は壓へやうもない程苦しくなる。しかも列車の横は歩行さへ自由に出來ない程に狭いのです。私は何處を如何歩いたのか知りません、無我夢中でもがいてゐる裡に、氣が遠くなつてしまひました。



吹き來る風に寒さを覺えて、ふと我に返ると、私は隧道の出口の處に倒れてゐました。體中は眞黒になつて汚れ、頭は物で叩かれるやうに痛みます。

『君、氣がついたかね』

さういふ聲もなんだか夢のやうに『大勢の人々がガヤガヤ何か騒いでるな』と思つたまゝ、また意識を失ひました。

再び正氣に返つた時には、私は山間の小さな寺の本堂に收容されて、手厚い看護を受けてゐました。それで間もなく自分で歩けるやうになりましたが、頭はひどく痛み、意識も朦朧としてゐて、本當に元の氣分になる迄には、隨分長くかゝりました。そして人から當時の狀況を話されて、よくもまあ助かつたものだと、今更のやうに身震ひしました。

その時、程遠からぬ次の驛で待ち合せてゐた反對列車の乘務員達は、待てども暮らせども吾々の列車の姿が見えぬので『何か異變でも起つたのではないか』と見に來ると、隧道の入口に私が眞黒くなつて倒れてゐる、『さあ、大變』と中へ這入らうとしたが、追風に送られて隧道から濛々と煤煙が吹き出すので、誰も彼も辟易してしまつた。近所に居合せた線路工夫等も『よし、俺れが行つてやる』と勢ひ込んで、タオルで口や鼻を蔽うては中へ這入つてみるが、みな五六歩も進めば苦痛に耐へかねて逃げ出す仕末、暫くは手もつけ得ず啞然としてゐたのであるが、空しく放置すれば乘務員の命が危いといふので、遂ひに勇敢な二機關手は死を決して中へ突進して、機關車へ辿りつくと、無慘なるかな、乘務員は悉く正體がない。或は機關車の上に火口を開いたまゝ火焙りになつて倒れてゐるものもあれば、貨車の中に口にタオルを當てたまゝ伏してゐるもあり、下へ降りて眞黒な煤煙に汚れた溜り水の中に倒れてゐるもあるといふ有樣。幸ひ機關車に電燈が點いてゐた

ので、それを便りに戰場にある思ひで逆行を試み、漸く次の驛へ退行したのださうである。

こんな狀態であつたので、後部の車輛にゐた二名の者は一番ひどい目にあつた譯で、他の者は昏睡狀態にあつたものの、みな息を吹き返したが、この二人だけはもうどうにもならなかつたのです。私は鼻も口も煤煙が一杯につまり、顔中眞黒に汚れた殆どその人とも思へぬ二人の骸を前にした時、人目も憚らず男泣きに泣きました。

その夕、他の人達もそれぞれ病院に運ばれましたが、機關助手の人は遂ひに二人の後を追ひ、もう一人の機關助手は遂ひに氣が狂つてしまひました。

『敦賀を出る時、若しジヤンケンに負けなかつたら……』

と思ひ出づる毎に、今でも私は總身粟立つやうに覺えます。



あはや！馬賊の大虐殺に

在滿洲琿春　堀内敬三

綠林に殺氣あり

大正九年九月十二日の朝まだき、突然、『ド、ドン、ドン』と、物凄い銃聲が轟いたかと思ふと、琿春城外にある日本人居留地へ、彈丸が雨霰の如く降つて來ました。

『素破！　一大事』

と、吾も人も膽を冷して騒ぎたて、取調べてみると、それは昨夜城内に潜入した馬賊團が、退却を容易ならしめるために、威嚇射擊を行つたものと判明しました。

その日はそれで濟んだので、幸ひ人畜に被害がなかつたけれど、追々集る情報によると、我が商埠地は恰も俎上の魚のやうな狀態にあるので、居留民一同、安き心はありませんでした。

『なんでも馬賊は、城内と城外を一時に襲ふ計畫らしかつたが、手筈が狂つて、一隊だけ城内を襲うたのださうだ』

『そいつは大變だ！　あの仲間は狙つたが最後、ものにせずには置かぬからな』

時は所謂『高粱長じて綠林に殺氣あり』といふ季節、油斷は出來ぬと當時在任の秋津副領事は、居留民會長と謀つて自警團を組織すると同時に、支那官憲に保護を依賴し、また朝鮮總督府警官の應援を求めたりして、防備に腐心してゐました。

警報！

十月一日の夕、かねて放してある間諜から

『今夜、賊團は琿春を襲はん』

といふ、非常警報に接しました。

覺悟はしてゐたものの、いざとなると二百の居留民吾人と共に、非常に當惑したのは女や子供の仕末です。馬賊襲來の懸念はあつたけれど、いろ〳〵生計上の都合もあり、一面その儘無事に終はるかもしれぬといふ風な慾も出て、未だに避難させずにあつたのが、今となると大變な足手纏ひです。

『安全地帶にやりたいが、對岸の朝鮮の慶源まで五里、一番近い訓戒へさへ三里はあるんだからナ、それにこの騷ぎで馬車はなし』

『よし、馬車があつたとしてからが、直き夜になる――晝は良民を裝うてゐる輩さへ、夜になれば馬賊以上のことをやり兼ねない土地柄だ、却つて危い』

『それにその方へ逃げるのには、今賊の駐軍してるといふ、關門阻子へ僅か一里しか離れてゐぬ地點を通らねばならぬが、恐くは見張りもつけてゐるだらうし、飛んで火に入る蟲も同樣だ』

結局、みんな領事館に集合して、防ぎ戰ふより道のないことが判りました。然し、悲しい哉我領事には、武力を以て居留民を保護すべき職權も武器もないのです。僅かに警察署に歩兵銃が十挺あるに過ぎません、これでは如何にもならぬ。唯、頼むところは、警報を受くると同時に、巡査部長以下三名を訓戒へ派遣し、國境警備隊へ應援を乞うたので、どうにか持ちこたへてゐる裡には、援軍が來るだらうといふ、果敢ない希望ばかりでした。



有害無益な支那軍隊

私はこの日、傳令として各所に散在する居留民の間を駈けづり廻つたので、防禦本部の觀ある領事館に引揚げた時には、文字通り綿のやうに疲れてゐました。でも休むことも、休む氣にもなれません。その裡にとつぷり、暮れてしまひました。さあ、愈よ初まるだらうと思うてゐると、果して新市街の町外れ、西大廟の附近から『ズドン』と一發、銃聲が轟きました。

『やつたな!』

思はず顏を見合せる。

と、續いて豆を炒るやうな銃聲。

『消燈! 各員部署につけッ』

素破とばかり、警備團長が叱咤する。

それで部署についたといへば體裁がいゝですけれど、この時には十挺あつた銃器も、連絡や通報巡察に行つた者が五挺携帯したので、たつた五挺残つてゐるだけなのです。でも私達は、

『日本男兒だ！　死んでも退かぬぞ！』

といふ氣で居りました。

二分三分と經つ程に、敵の銃火は益々優勢に、そして段々接近して參ります。折柄、領事館の表門に押し詰められてくる一隊があります。僅かばかりの星明りで透かして見ると、服装は確かに支那の正規兵です。

『なんだ、もう敗けたのか』

私はこの時ばかりは本當に腹が立ちました、恐くは同胞悉く同様だつたらうと思ひます。かねて弱いことは知つてゐたが、相手は馬賊だから、多少頼りになることと信じてゐたのに、開戰五分か十分で、早くも敗退するとは呆れてものも言へません。でも味方とすればまさか射つ譯にも行かず、直ちに門を開けて收容しようとしました。ところが、これが大變な破綻の因でした。雪崩れ込む支那兵隊に紛装して追尾して來た馬賊は、得たりとばかり同時に門内へ亂入して來ました。

『あつ！　馬賊だ！　馬賊だ！』

と氣付いた時はもう遲い。忽ち四邊は修羅の巷と化しました。入り亂れて、打つ、蹴る、殴ぐる、滅茶苦茶です。私も腰にしてゐた日本刀を引き抜いて、滅茶苦茶に振り廻しました。暗さは暗し、斬つたのか、突いたのか、そんなことが判るものでありません、唯、盲ら滅法に暴れ廻りました。

その裡に、裏門にも賊が迫つたらしく、門扉を破るらしい恐しい音と共に、時々物凄い叫喚が聞えます。

領事館燒かる

その時、

『やつ！　燒打だ』

といふ誰れかの絶叫を耳にして、ハッと氣がつくと、如何にも門衛所からメラ／＼と燃えあがる火影、――と、忽ち、炎々と燃えさかつて四邊を照し出しました。

敵はこれに力を得て、新手をさしかへ／＼て猛襲して來ます。味方はその度毎に傷く者が殖えるばかりです。然し、本館には在留邦人の婦人子供を收容してあります、若し前線の戰鬪部隊が殪されたら、恐らくは見るにも聞くにも忍びない慘劇を演ることでせう。私達は唯その事を慮るばかりで必死になつて戰ひました。然し、遂ひに利あらず、

『退けえッ』といふ號令が下されました。

私達は涙を吞んで本館に引揚げました。

折から第一官舎、第二官舎にも火の手が揚りました。名物の北風に煽られ、炎々と燃えあがる火炎は硝子窓に物凄く映ります。

斯かる間にも敵の彈丸は、絶え間なくふりそゝいで來ます。折々、窓口から投入する手榴彈の爆發の音は、館内を今にも覆すかと思はれる程に轟きわたり、悲鳴、叫喚、宛がらの阿鼻地獄です。

その時、梯子を横へて窓際を走る人影が目に映りました。私は吃驚して駈け寄つて見るとそれは友人丸谷幾登君でした。

『危いッ！　何をするかッ』

『御紋章を外すんだ、馬賊風情に領事館の御紋章を汚されてたまるかい』

『さうか、やれッ！』

と、私も思はず窓から半身を乘り出した

時、團長が叱咤しました。

『丸谷を殺すな！ 行けッ』

何んでも五六人、一度に飛び出したやうです。その援護の下に勇敢な丸谷君は、十字火を浴びながら、梯上十尺のところで、悠々働いてゐます。遂ひに金光燦然たる御紋章を捧持して丸谷君が引揚げた時には、思はず一同で『萬歳』を叫びました。

が、その喜びもホンの一瞬の間でした。忽ち天地も覆るやうな大音響と共に、館内は晝のやうに照し出されました。それは敵の投げた手榴彈が不幸にも館内の火藥庫に命中したのです。續いて小銃彈の自爆する音が、豆を炒るやうに『パリ〳〵』響きます。消防どころか危くて寄りつくことが出來ません。



見る見る館内は炎の海と化しました。

『萬事休す矣』

窮 鼠

止むなく秋津領事は御眞影を捧持し、一同これに從つて、構内に唯一つ燒け殘つてゐる炭庫に引揚げました。然し、狹い炭庫には總員を入れる餘地がありません、仕方なく、私達比較的戰鬪力を剩してゐる者は、炭庫のかげの煉瓦塀の際に踏み留まりました。

敵と同等の武器を持つて對峙する戰鬪では、さほど心細さを感じないでせうが、たよるに足る武器も持たず、敵の矢面に立ちながら、最後の時の至るのを待つといふ心細さはとても斯樣な瀬戸際に立つた人でなければ、推し測ることが出來ますまい。

敵は私共の塀際に避けたのを悟つたか、五尺の煉瓦塀一重の構外から、盛んに手榴彈を投じます。が、幸ひこの手榴彈は、彈の中心から、三十度以上の落下角度がなければ、發火しない舊式の露式松毬狀のものであつたので、餘り近距離なのと、塀があるため角度がとれず、一つとして自爆しませんでしたが、萬一、爆發したら鏖殺されたでせう、然し何時迄も無事にゐられよう筈がありません、その裡に秋の夜も、どうやら明けかゝりました。斯かる重圍の裡にあつて白日に曝されるといふ事は、何れの點から見ても絕望です。

『どうせ死ぬ位なら、脫出を試みて見よう、萬に一つ、誰れかゞ助かるかもしれん』

誰からともなく、そんな提議が出ました。

今の場合、否やのあらう道理がありません。そこで、全隊を二つに分け、一隊は御眞影を守護して炭庫に留り、萬一の場合には御眞影に殉ずる決心をし、殘る大部隊は婦女子と共に、圍みを衝いて出ることになりました。

私はその突出部隊に加はりました。そして一同と共に、比較的敵の手薄な裏門から、喚めき叫んで討つて出ました。私はこの時も、滅茶苦茶に暴れて日本刀を振り廻しました。一二度は確かに手ごたへがあつたやうにも思ひますが、果して斬つたのやら、毆つたのやら、お恥しい次第ですが、よく覺えてゐません。唯、氣がついて見ると首尾よく圍みを破つて、同胞と共に、滿洲名物の山芋や白菜の延び切つた畑を、こけつ、轉びつして、全身血塗れになつて逃げてゐました。

この冒險は二重の功を奏しました。賊は最早館内に人なしと見、それに本館が燒けて掠奪の對照を失つたので、圍みを解き、若干の哨兵を止めただけで、市中へ掠奪に出掛けたので、御眞影も守護隊も無事なることを得ました。この事件で、邦人は死者十一名、傷者三十九名を出しました。更に事件後七名の發狂者を出したのを見ても、如何に慘鼻を極めたか思ひやられませう。今から考へると私が無事であつたのは全く天佑といふ外ありませぬ。所謂、滿蒙の權益は斯うした同胞の血と汗で守られ、且つ作り出されて行くことを、内地の方々に知つて戴きたいと思ひます。

進行し來る列車の眞先きに倒る

北勢鐵道大泉東驛長　近藤勘治郎



『危いッ！　今來ちや駄目だッ』

けたたましく口々に叫ぶ聲。

と、非常汽笛。

折柄列車進入の合圖のために、信號機を取扱つてゐた私は、吃驚して頭をあげると、今しも線路を横切つて向側のプラットホームへ渉らうとしてゐる老人の姿が眼に映りました。

老人は餘程耳が遠いらしく、氣狂ひのやうになつて叫んでゐる人々の注意も、何處吹く風かといつたやうな顏付きで、悠々歩いてゐますが、汽車はもう二十米突程の距離にまでやつて來てゐます。

機關手はそれと氣付くや、無論、急停車の



近藤勘治郎氏

手段を執つたらしいのですが、惰力で却々止まりさうにもありません。

私は吾を忘れて飛び出しました。

そして脱兎の如く走り寄り、老人の帶際をとつて引きあげようとしましたが、折悪しく一時間程前に、小雨が降つたゝめ、踏み切り板が濡れてゐたので、ツルリと足を滑らして、老人もろ共重なつて線路の眞中に打倒れました。

この時にはもう列車は十米突ほどの所に迫つて來てゐました。

『失敗つた、やられた』

私は萬事休止矣！　と思ひましたが、逃れ得るだけ逃れようと、殆ど本能的に滿身に力を入れて、上になつてゐる彼の老人を、手と足でプラットホームへ跳ねあげ、自分は宛ら、毬のやうに線路の外へ轉り出ました。

それと殆ど同時に、列車は私の腰と片足を掠めて其處を通過し、約三四間程先きで止まりました。

この恐ろしい出來事に、機關手は眞蒼な顔をして機關車を降りて來るやら、大勢の人々が駈付けるやら、一時は大騒ぎを演じましたが、幸ひにも私が腰と足に輕傷を負うたゞけで二人共助かつたゝは全く神佛の加護によるところと思つてゐます。昭和三年七月二十三日の午前十一時頃の出來ごとです。



瀕死の病體を飛行機に托して

陸軍航空兵少佐　石田房雄

誤診から危機一髪

忘れもしない大正十五年四月二日、私がまだ所澤にゐた頃のことである。これといつて思ひ當る原因もないのに、夕方から胃の上部が痛み出した。が、何糞ッ今に恢るだらうと痩我慢してゐる裡に、恢るどころか、痛みは益々烈くなつて、夜の十一時頃になると、臥ても起きてもゐられない程になつた。そこで慌てゝ附近の醫者を招んで診て貰ふと、

『胃痙攣でせう』

と痛みを止める注射をしてくれた。

それで七轉八倒の苦痛は一時去つたが、奇怪にも、翌三日には痛みは胃の下部に移り、翌々四日には左下腹、五日には右下腹が痛み出した。この間四日、醫師の命ずるまゝ、蒟蒻で徹底的に溫め通したのである。

だが、胃痙攣にしては餘り長過ぎると、航空隊附の加藤軍醫に診せると、

『コリヤ大變、盲腸炎だ、水で冷せ』

といふ。

驚いてその旨を町醫者に通ずると、

『そんなことはない』

ととりあはぬ。

途方に暮れて寺師博士に裁斷を乞ふと、

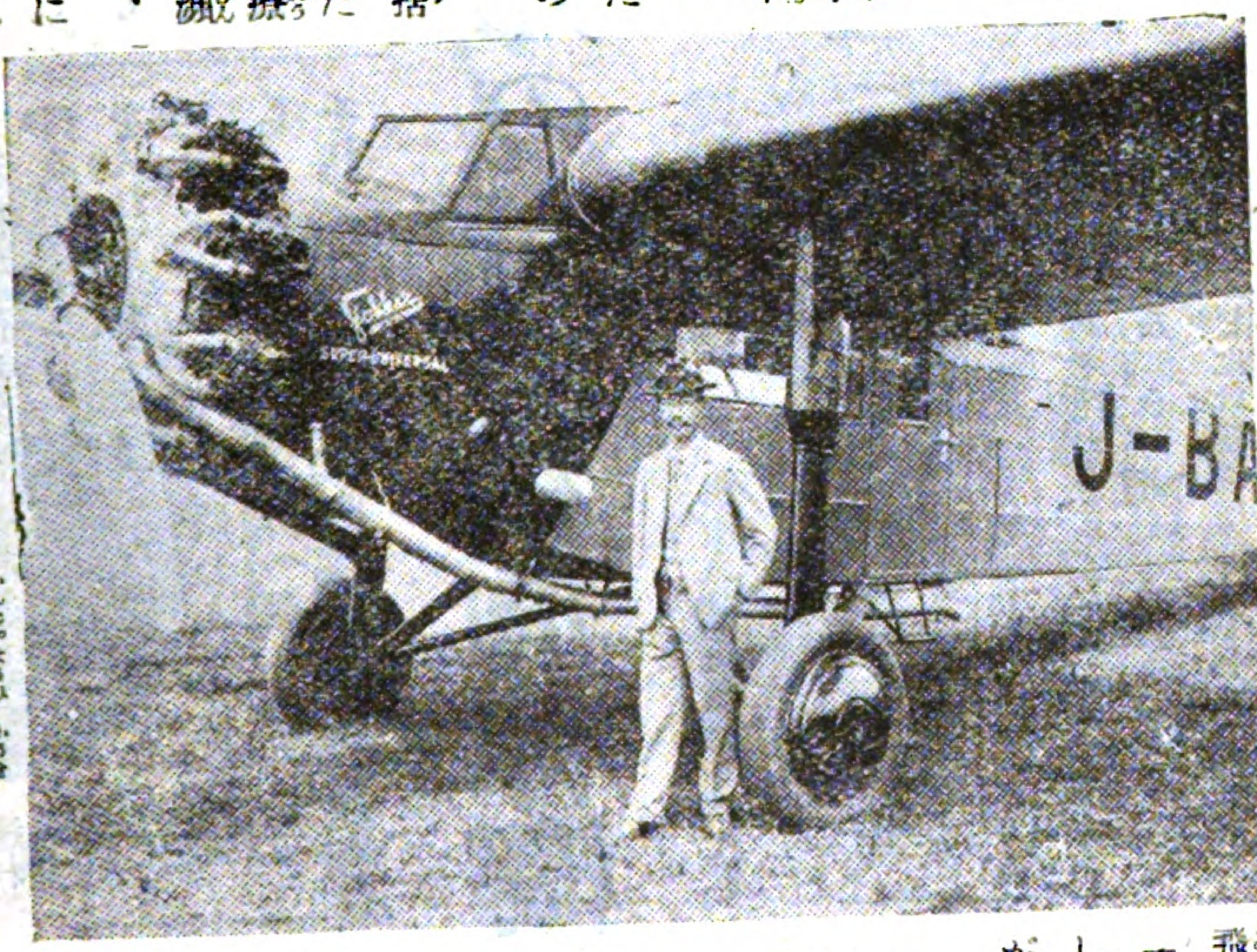
『確かに盲腸炎だ』といはれたので町醫者はスゴ／＼退却した。

然し、町醫者の誤診から、冷すべきところを、四日間も溫め通したのだから堪らない。知らぬ間に病はドン／＼進んで、もう手もつけられぬ程惡化してゐた。

　十日には右下腹が膨れ初めた、だが、その當時の僕は『盲腸炎は恐しい病だ』位の醫學知識しか持つてゐなかつたので、加藤主治軍醫が『大丈夫です』といふのを眞に受けて一向平氣であつた。ところが、口では大丈夫だと言つてゐるものの、加藤軍醫や寺師博士の心配は、一通りや二通りではなかつたのだ、切開の時期は既うに過ぎてゐる。といつて捨てても置けぬ、遲走せにでも切開したいのだが、所澤にはその設備がない。それに自宅療養は何かにつけて不都合だけれど、まさか瀕死の病人をガタ／＼搖れる自動車や電車で、遠く運ぶ譯にもゆかぬので、空しく見殺しにせねばならぬかと、內心非常に焦つてゐられたのだ。

死ぬのかと直感

　十三日の朝には、下腹部の腫が段々大きくなつて、腫を皮下に入れた位になつた。



石田氏と氏の命を救つた患者用飛行機

『軍醫は大丈夫だと言はれるが、氣休めに嘘を吐いてゐるのではないかナ』と、氣を廻してみる程流石に心配になつて來た。ところへバタ／＼オートバイの音がしたかと思ふと、飛び込んで來たのは山口上等看護長。

『飛行機に乘つて、今直ぐ立川の病院へ入院して戴くことになりました。毎日午後は氣流が惡いから、至急仕度をして下さい』

と足下から鳥が立つやうにせきたてる。

『僕の病はそんなに重いのかネ』

『え〻、餘りお輕くはないとのことです』

と看護長は聲を落す。

昨日も軍醫は大丈夫だと言つて居たのに、これはまた意外なこと『さては僕は愈よ駄目か』ギヨツとした。

　それから看護長は、隣室に行つて妻とヒソヒソ何か話し合ふ、惡い方へ氣を廻し、耳を欹てると果して入院の打合せだつた。

『妾も同乘して行きませうかしら』

『ナニ寺師博士と私が附き添つて行きますから大丈夫です、奧樣は至急入院の用意をして下さい、直ぐに自動車を寄越しますから』

聞いて二度吃驚。

（寺師博士まで附き添つてゆくとは、愈よ唯事ではない哩）としつかり觀念した。

我國の航空醫學の泰斗である寺師博士が、前に獨逸から買入れたユンケル飛行機を改造し、五人乘の患者輸送用の飛行機を作られたのは、このことのある約半年前のことである。が、一向病人が出ないので、未だ使用せぬことを知つてゐたので『僕も飛行將校だ！よし、同じ失ふ命なら、死出の首途に我國の航空醫學史の第一頁を飾り、斯界に貢獻しよう』と決心した。

やがて擔架に移されて家を出た。ペエールを被されてゐるので、途中の景色は見えなかつたが、土地の小學校の前を通る時、窓際を過ぎた櫻花の一ひら二ひらが、ペエールの隙から、僕の顔を訪れて來たのには、折も折、時も時、ホロリとさせられた。

僕の家から、飛行場の寺師博士の室までは十五町位もあらうが、その間の苦しかつたこと、二里も三里も運ばれたやうに感じた。

『どうか飛行機に早く乘せて下さい、そして此室の前から離陸して下さい』

と苦痛の餘りさう哀願したところ、

『今日は生憎南風だし、それに大事をとつて飛行機は飛行場の一番隅に置いてあるから、』

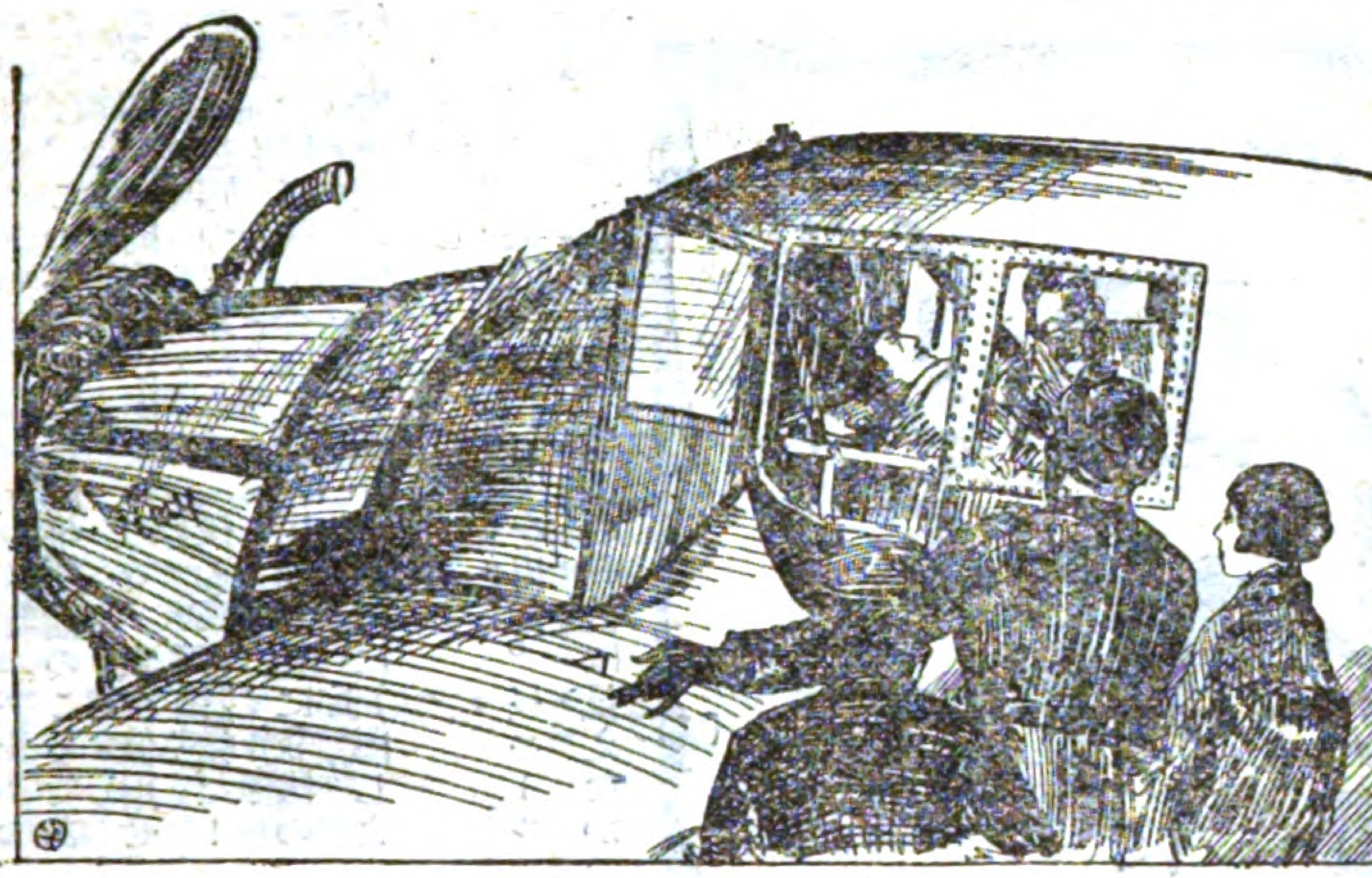
といふ返辭、儘ならぬものだと思つた

愈々飛行機で

やがて、熱、脈搏、呼吸等の詳しい臨床診察があつて、再び擔架で飛行場に運び出された。

飛行機へ乘せられるのは、思つたより容易だつた。足を曲げる必要もなく、臥した儘、しかも蒲團ぐるみ樂々と飛行機の中に納まつた。應急の醫療器具も搭載せられ、操縦者た

る秀島大尉、寺師博士、山口看護長も乘組んで、飛行機は勇しくスタートを切つた。



ところが、滑走して、今や離陸しようとする刹那、どうした譯か發動機が、パン／＼鳴り出して機が浮揚しない。再び滑走して元の位置に戻り、更にスタートしたが、矢張り同じことであつた。

その日は瀕死の病人が飛行機で入院するといふので、S少將をはじめ、飛行場には多數の見送人が來てゐたが、この有樣を見て、『試驗飛行の時には、發動機の調子がよかつたのに、愈々半死の病人を乘せて飛ぶ段になつて、發動機がいふことをきかなくなるとは皮肉だな』と囁きあつたといふことである。

再點檢の結果、こんどはうまく飛んだ。斯くて僚友に送られて一路立川に向つた。

飛行中は、寺師博士と山口看護長が兩側で見護つてゐてくれた。體溫計は挿したまゝ、脈搏は計り通しである。

乘心地は實に樂だつた。一體飛行機は三四十米突滑走すると、直ぐに尾部が浮き揚るから、尾部に附してある橇が土地を彈くために起る振動が、患者に響いてくるのはホンの一瞬時である。そして着陸の際も何等の衝激をも感じない。且つベッドはスプリング仕掛けだし、そしてベッドと機體の結合にも充分の緩衝裝置がしてあるから、飛行中の一切の振動は少しも患者に影響せぬやうになつてゐた。

斯くて十五分の後には、僕は立川の陸軍病院のベッドの上に、安々と臥すことが出來たのである。間もなく妻も自動車でやつて來た。

飛行したがために、熱が三分位昇つたゞけで、格別のこともなかつた。早速、院長はじめ、全部の軍醫の診察を受けたが、最早手遲れで切開することが出來ぬので、餘儀なく徹底的に內科的療養をすることになつた。その日から、いとも懇切な手當を受けた甲斐あつて、盲腸部が破裂することもなく、多量の膿が便となつて體外に排出されたゝめか、卵子大の腫も翌朝ペシヤンコになり、入院三日目から平熱になつて奇蹟的に一命を拾つた。

かくて、一ケ月後には、すつかり恢つて退院したが、あの時、若し不行屆な自宅治療を受けるか、乃至は自動車で立川か東京に運ばれたら、とても今頃はこの世にゐなかつたらう。私の經驗からして、早く一般の人々も、飛行機によつて重病者を運び九死に一生を得られる域に達せしめたいと祈つてゐる。（終）

廻文番附

横綱 長き夜のとおの眠りの皆眠ざめ 波乗船の香の良きかな。

大関 さくら木の訪ひし香は花の園 縄張り侯かし人の氣樂さ。

関脇 草々の名は知らぬらし花守も 名は知らぬらし花の咲く咲く。

小結 むらしはて見つゝ摘草名は知らし 花咲く見つゝ摘みて走らむ。

前頭 むら草の名は知れぬしら此の庭に 殘らし濡れし花の咲くらむ。

同 みなの川傳へつ流れもつしきし 敗れかなつへ立つわかの波。

前頭 今朝皆はうち群れ夢中花見酒。

同 眺めしは野菊の莖の初め哉。

同 消ゆる子の片見に見たか殘る雪。

同 草の名は知らず珍らし花の咲く。

同 神の留守遠く吹く音するのみか。

同 白子屋お玉また親殺し

行司 婦人難産難澁。 長崎屋の燒魚。

年寄 私の皺。 かたみ見たか。

勧進元 キング

横綱 疾く立たし里の篁雪白し 消ゆらむ方の戸さし敲くと。

大関 惜しめとも遂に何時もと行く春は 悔ゆとも遂に何時も止めしを。

関脇 村鳥は離れ立ちもす枝に葉に 絶えすもちたれ縄張りとらむ。

小結 むらさきもつひ破れつゝそ女の身の なほそつつれや何時も着さらむ

前頭 眺むらむ門を訪ひなば草に木に 咲く花人を咎むらむかな。

同 むら草に草の名は若し備はらは なそしも花の咲くに咲くらむ

前頭 黍こいだ雇ひの人や大根曳き。

同 啄木鳥の飛ぶや小藪と軒續き。

同 消ゆるまた庭の木の葉に溜る雪。

同 木か竹か見すかす霞影高き。

同 岸に咲く色香も輕い草錦。

同 雉子の片股鷹の食。

熊本縣 杉山武夫作



檢察官

(露)ゴーゴリ原作
福永渙

露西亜の田舎市の出來事である。

ある時、中央政府の檢察官が市に入込んで、秘かに市政を探つてゐると云ふ噂が立つた。驚いたのは市長初め重だつた役人たち、ふだん職權を笠にきて人民から道ならぬ賄賂をとり、政務は惰け放題に惰けてゐるのだから、それが露見したら大變である。

俄かに狼狽を初めた。

その中に誰云ふとなく街の第三流どころの宿屋に泊つてゐる都會風の青年の容子が、どうも檢察官らしいと云ふことになつた。その實その青年はフレスタコフと呼ぶ露都の役所の一屬吏に過ぎなかつた。碌々宿料も拂はないので宿屋から厄介者扱ひされてゐる人物だが、然し、疵持つ足の市の役人たちは、てつきりそれは身分高き高官が世を忍ぶ手段だと見てとつたのである。

フレスタコフは宿屋からます〳〵冷遇されるばかりだつた。ある朝など十一時になつても朝飯を持つて來ない。干乾しにされては堪らないので催促をすると、不精無精、給仕がスープと燒肉とを搬んで來て、

『御飯はモウこれきり差上げられませぬ。宿料を頂戴出來ねば、市長さまに告訴すると主人が申してをりました』と佛頂面をして出て行つてしまふ。文句などはどうでもい い。何しろ腹ペコだから忽ち平らげてしまつた。そこにポカリ室に入つて來たのは當の市長だつた。いよ〳〵主人が告訴をしたに違ひないと直感したフレスタコフ先生、見る見る顔を蒼くして顫へ出した。所が市長は市長で、山高帽子のつもりでボール箱をかぶつてゐると云ふ慌て加減。

『御免下さい。私はこの市の市長として旅客や御身分ある方々には失禮のないやう平素心掛けてをりますので——はい』

と頗る恐縮の體である。だが面喰らつたフレスタコフには市長の挨拶なんか耳に入らない。ひどく昂奮をして、

『か、金は屹度拂ひますよ。拂ふには拂ふが今、ないから、ど、どうも仕方がないです。然るにこの宿で食はせるものと來たら、肉は



丸太のやう、スープは水のやう、實に甚だ人を、ば、馬鹿にしてゐる』

と吃りながら辯解をすると、市長は低頭平身、宿屋の不都合を重々お詫びをした上に、

『では、他の最上等の旅館にお移り下さるやう。どうか私と一緒にお出を願ひます』

だが、フレスタコフは、こんな甘い手には乘らないぞと云つたやうな顔付。親切ごかしに監獄にでも連れ込むものと早合點したから堪らない。ひどくせき込んで、

『一體、き、君には什んな權利があるんだ。君のやりかたによつては、ぼ、僕は直接國務大臣に會つて事情を述べねばならない。實にぶ、無禮極まる』と喚つてかゝつた。それを市長の方では、檢察官が既に自分の罪惡を何も彼も知つてゐて怒鳴りつけるのだと誤解して一縮みになつた。

『ど、どうか、それだけはお許し下さい。お助け下さい。私には妻も小さい子供も厶います。お上の体給だけでは茶や砂糖の代にも足りませんので——つい——でも賄賂をとつたと申してもホンの少しばかりで、只、二三度に過ぎません』

『賄賂——それがどうしたと云ふんだ。君に妻子があるために、僕が監獄に行かねばならない——そんな理窟が何處にあるんだ。兎に角、僕は拂ふよ。金が出來れば屹度拂ふ。只、今のところ、手元に一文もないから困つてゐるんだ』



どうも二人の話はシックリ合はない。だが、市長は自分の心に引較べて、てつきりこれは賄賂の謎をかけてゐるのだと思ひ込んだ。で、恐る〳〵、

『私は市長と致しまして、旅客のために盡す職務を持つてをります。もしお金が御入用で厶いましたら——』

と圓滑に切出して見ると、フレスタコフは至極、あつさりと、

『では二百圓ばかり貸して貰ひたい』

と云ふ。で、市長はわざと要求額の倍額をフン發して、やれやれ、これで皆が安心と思つたのである。

間もなく市長は檢察官を優遇するために、自分の邸に伴ふことになつた。途中、學校や慈善病院などに馬車を停めて、自ら案内に立ち、市長の職務が如何に困難であるかと云ふことや、如何に勤勉忠實なる自分であるかと云ふことを知らしむるために、嘘八百を並べた。市長の邸では、豫て申付けてあつたと見え、山海の珍味をとゝのへて待つて居た。市長は妻のアンナと娘のマリヤとを紹介した。其時分にはフレスタコフも、市長が自分を買かぶつてゐることに氣がついてゐたので、中央政府の高官になり濟まし口から出まかせの與太を飛ばしてゐた。その中に、市の郵便局長、慈善病院長、學務監督などの連中が三拜九拜して同席の光榮を忝うした。フレスタコフはます〳〵盛んに法螺を吹く。自分の家はペテルブルグ（露都）第一流の家柄で、屢舞踏會などをひらくが、そんな時には各國の大使公使は勿論、伯爵、侯爵、さう云ふ連中が山蜂見たいに集まつて騷ぐ。卓子の上

には七百圓もする西瓜が載り、スープは鍋に入れたまゝ巴里から汽船で搬んでくるなどと吹きまくつた末に、

『私は一度大臣になつたことがあります。實は再三辭退したが、國事多難の際だからと云つて中々きかない。その中に陛下のお耳に入つたので、已を得ず引受けた。然し私は役目は引受けても斷じて不正は許さん。樞密院でさへ私にはビク／＼してゐる。私は毎日宮中へ參内する。私は明日にでも元帥になるんだ』

　フレスタコフ先生、調子に乘り過ぎて、うつかり足をすべらし、椅子から床の上に倒れてしまつた。これを役人たちは恭しく抱きおこすと云ふ有様である。

　その中に市長が氣を利かせ、部屋を改めてフレスタコフを休息させた。後で一同はホッと一息。樞密院をやりこめた話や、明日にも元帥になる話を持出して恐縮と尊敬の念を深めて行く。夫人と令孃は主都の社交場裡のはなやかなこと、七百圓の西瓜、汽船で搬んでくるスープの話などで、すつかり魅惑されてしまつてゐた。

　役人たちは一旦家へ歸つて禮服に改めて、再びやつて來た。彼等は一人づつ檢察官に拜謁して、各自の職務上の缺點を大目に見て貰ふべく手段を講じようとするのだつた。一番初に拜謁を申込んだのは裁判所判事。

『拜謁の榮を得まして光榮に存じます。當地の地方裁判所判事八等官、チャープキンと申します』

『おかけなさい』

　フレスタコフは鷹揚な態度で迎へる。

『はい』

『判事になつて得る所がありますかね』

『九ケ年勤續の功勞に對しウラヂミル四等勳章を戴きました。勿論、將來も勤勉努力、政府のためお役に立つ覺悟でムいます、はい』



判事は掌に紙幣の束を握つてゐたが、それを少しづつ前に差出すやうな手つきをして話した。

『あなたは何を握つてお出です』

『は、はい』

　判事は間誤ついて紙幣を床の上に落してしまつた。

『金が落ちましたよ』

『いえ、そんな事はありません』

『いや、金だ』

　フレスタコフは紙幣を拾ひ上げ乍ら、

『どうです。これを私に貸してくれませんか』

『はい、いえ、決して、――大變、け、結構に存じます』

徹頭徹尾、判事の態度は滑稽なる嚴肅に始終した。學務監督、郵便局長、この他の者も次々に贈賄をしたので、フレスタコフは千圓近い金をポケットに納めた。その上、數日の後には市長の娘マリヤとの結婚の約束まで出來たので、ボタ棚以上の上氣嫌である。然し、あまりいい氣になつてゐると化けの皮がはげるので、ある日伯父を訪問すると云ふ口實をつけて逃げ出すことにした。市長は上等の馬車を仕立てて門口に見送つた。

明け日、役人たちは市長の邸に集つて、檢察官をうまく丸め込んだことを喜び合つた。娘の婚約まで成立した市長は殊更有頂天だつた。そこに郵便局長が慌てて這入つて來て、

『諸君、驚くべき事件が出來た。あの檢察官は僞者だ』と叫んだ。

『なに、にせもの』

『こ、この手紙を見てくれ』

突出した手紙は、フレスタコフが逃げ出す間際に、友人に送るべくポストに入れたものであるが、局長は郵便事務の缺點でも發見して政府に報告するものと氣を廻し、開封したのだつた。その手紙には市長や郵便局長等の馬鹿さ加減を悉く並べたてた末に、

『――いつか君と二人で無錢飲食をして料理屋の亭主からコツ酷い眼に逢はされたことがあるね。所が今度はまるで反對だ。誰でも俺に矢鱈に金をくれる。實に風變りな土地だよ。君だつたら笑ひ死するかも知れない』と云ふやうなことが書いてあつた。

さア大變！　手紙を見た一同は大騷ぎをおつ初めた。何しろ誤魔化すことばかり知つて誤魔化されるのを嫌ふ連中だから口惜しさも人一倍である。中にも一番馬鹿を見た市長は地團駄踏んで呶鳴り立てた。

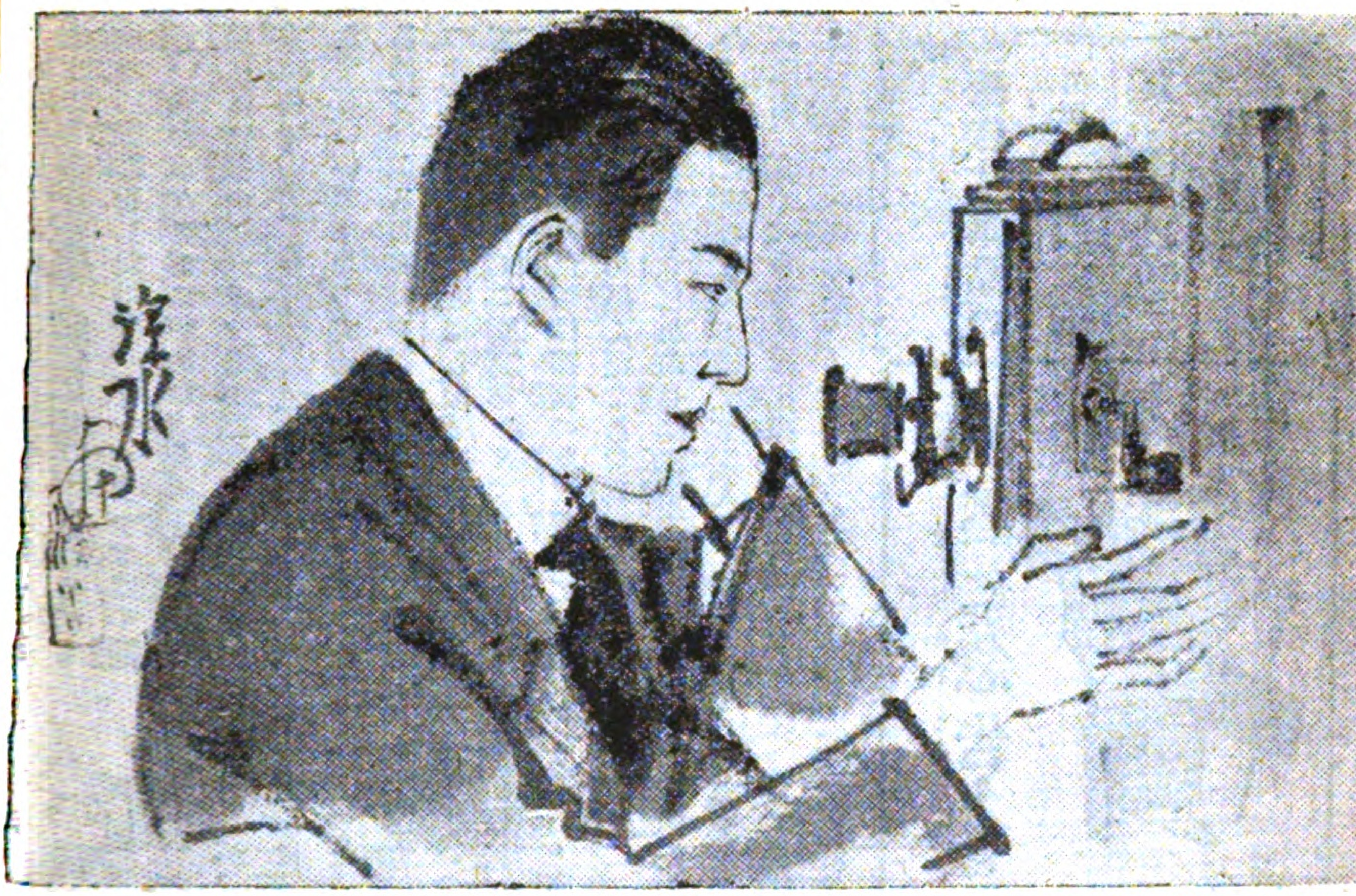
『俺のことを去勢馬のやうな大馬鹿だとぬかしてゐる。ふ、ふらちな奴だ。――だが、かうなると何も彼も破滅だ。破滅だ。呼び戻せ彼奴を！』

そこに一人の憲兵が這入つて來て姿勢を正して云つた。

『特命によりペテルブルグより到着されました高官の方が、即刻出頭せよとの命令で厶います。××旅館に御滯在中であります』

これこそ本ものの檢察官。プン〱怒つてゐた一同は、口を噤み、唇をひん歪めたまま突立上つた。

（終）



春遠からず

加藤武雄
伊東深水畫

幻の華

しげ子が、その出版社――K社で働きはじめてから三月あまりが經つた。

「K社の美しい女事務員」――それが、そこに出入する人達の間にしきりに評判された。出版社で雜誌社を兼ねたK社には、文士とか詩人とか云ふ手合がよく顏を見せたが、美しいものに對して、とりわけ美しい女性に對して、一倍敏感な彼等が、しげ子のやうな存在を見のがす筈が無かつた。事務室の隅に、こつそり隱れるやうにして働いてゐるしげ子だつたが、彼女はいつの間にか彼等の中の人氣者になつてしまつた。

秋原禮吉も、稀には、そこから出てゐる雜誌に寄稿する事もあつたが、しかし、彼は、性質としてそんな所へ顏出しする事を好まなかつたので、その「美しい女事務員」に就いてはたゞ、遠い噂として聞いてゐただけだつた。もし、禮吉が、彼女を見、そして、彼女が何人であるかを知つたなら――。

一度こんな事があつた。

それは、豫約募集の定期刊行物の、その月の分が發送濟みになつて、月のうちでも一番閑な頃の或日の事だつたが、午の休みに、ぼんやり暖爐の前に立つてゐたしげ子は、けたゝましく鳴る電話のベルを聞いた。電話係りの者がそこに居無かつたので、代りに受話器をとりあげた。

『K社ですか？』

ぶツきらぼうな調子だつた。

『は。』

と、しげ子は答へた。

『今、そつちへ、水野君が行つてやしませんか？　水野三郎君が――。』

『水野さんと仰有るんでございますか？』

水野。といふ音が一寸はつきりしなかつたので、念の爲めに問ひ返した。

『さうです。水野です。――編輯部の横井君を訪ねて、そちらへ行つてゐるといふ事ですが、もう歸りましたか？』

『お待ち下さいませ。うかゞつて見ますから。』

しげ子は、卓上電話を編輯室へつないで聞いて見たが、來てゐないといふ横井の返事だつたので、

『お待たせいたしました。あの、いらッしやらないといふ事でございますが――。』

『然うですか？』

と、電話の聲はやゝ口籠つたが、

『ぢやあ、もし、水野がそちらへ行つたら、歸りに僕の家へ廻つて呉れるやうに云つて呉れませんか？』

『かしこまりました。水野三郎さんでございますね。』

『さうです。水野三郎です。ぢや、お願ひします。』

そこで、電話を切つてしまはうとしたので、

『あ！　あの――もし、もし――。』

と、しげ子は慌てゝ呼びとめて、

『あなたは、どなた樣でいらッしやいますか？』

『は、は。』

と、輕い笑ひが聞えて、

『忘れてゐました。萩原と仰有つて下さい。萩原禮吉です。』

『かしこまりました。』

『ぢや、お願ひします。』

電話はそこで切れた。しげ子が電話口を離れると、いつの間にか其處へ來てゐた同僚の菊子が、

『電話、どなたから？』

と聞いた。

『萩原さんて方ですの。』

『萩原禮吉さん？』

『えゝ。』

『あの方の詩が今月の「黑潮」に出てゐるわね。』

菊子は文學少女だつた。だから、萩原禮吉の詩もいくらかは

讀んでゐた。萩原禮吉の詩は、東條晋吉のほど美しくも無いし、何だか判りにくくて六つかしいといふのが菊子の意見だつた。

『さう？　詩を書く方なのね。』

その時は何氣無く聞き捨てたが、あの電話の聲が何時迄も耳に殘つてゐるやうな氣がした。——しげ子は、一種の好奇心に驅られながら、その邊に置いてあつた「黑潮」をとりあげて見た。それは、K社から出てゐる文藝雜誌だつたが、頁を繰つて見ると、萩原禮吉の詩が出て來た。その詩は「幻の華」と題されてゐた。

菊子の云つた通り、それはむつかしい詩であつた。それにも拘らず、その詩は強く彼女の胸を擊つた。



そこには、未だ見ぬ戀人に對する痛切な思慕の情が歌はれてゐた。

未だ見ぬ戀人――それを、手にしがたき幻の華となげいた詩の意は彼女にも强い共鳴を呼ばずにはゐなかつた。未だ見ぬ戀人――その、幻の華はしげ子の胸にも咲いてゐるのだ。

しげ子は、しかし、知らないのだつた。その詩の作者が自分にとつて何であり、自分が、その詩の作者にとつて何であるかといふことを――。

その日、やりかけた仕事の都合で、しげ子一人だけが後まで居殘り、いつもより三十分程遲れて社を出た。暮れ易い初冬の日は、五時少し過ぎたばかりで、埃ッぽい夕風の中に、もうちらちらと灯影がともり出してゐた。

彼女は、神樂坂の通りを、肴町の停留所の方へと急いだ。ショオルに襟を埋めて、うつむきがちに歩いてゐたしげ子は、ふと、路傍の交番の前に人だかりがしてゐるのを見て、思はず歩みを停めた。

『女の子だよ。迷子だろ。』

『さうぢや無い。宿無しの乞食の子だ。』

黑山になつてゐる人々の中からそんな會話がきこえた。刹那、しげ子の頭には、みち子の姿がきらめいた。彼女は衝き動かされたやうにして、群集の中に分け入ると、物狂はしい昂奮に前後を忘れて前の方へと突き進んだ。

荒々しい調子で何か云つてゐる巡査の足もとに背をまるくうづくまつてゐる子供。雀の巣のやうな髮を襟首に亂して、着物の裂目から、痩せた肩の一部を見せたその子供は、しげ子が歩み近づいた時、泣きたゞれた眼でふと此方を向いた。

その顏を見ると、しげ子はほつとした。まるで見知らぬ子供だつた。

しげ子は、逃げるやうにその人山の中を出た。

そして、五六歩あるき出した時であつた。

『鏑木さん！』

呼びかけられて、びつくりして振返つて見ると、編輯部の横井が、にや〳〵笑つてゐた。

『あら。』

しげ子は思はず赤くなつた。

『どうしたんです？』

『迷子――迷子なのね。』

『迷子ぢや無い、乞食の子ですよ。』

しげ子は、益々狼狽しながら云つた。

『かあいさうね。』

『は、は！　妙に昂奮してゐるんですね。』

『でも―かあいさうなんですもの。』

『あなたは人道主義者ですね。』

『そんなむつかしい事は知りませんけど――でも、かあいさうですわ。』

『美しい人といふものは、不思議に心までやさしいものですね。』

　横井は、ねばりッこい調子で云ひながら細い眼の、眼尻を鍵にして笑つた。――此の若い記者の次第に露骨になつて來た態度に、ひどく迷惑してゐるしげ子は、早く別れてしまひ度いと思つて、押默つてゐた。

『だが、そのやさしさが、却つて相手を苦めるんですよ。』

『……。』

『あなたは、最初のうちは、何だかひどくつんとしてゐるやうに見えましたよ。美貌を誇ツてるツて風にね。しかし、さうぢや無いッて事が、だん〳〵わかつて來たです。あなたは大へんつゝましやかな人だ。あなたはモダアンぢや無いですね。僕は、モダアン・ガアルなんてものは大嫌ひなんです。』



　しげ子は、振捨てるやうに早足に歩いた。横井は追ひ縋るやうにしながら、一生懸命にしやべり續けた。

『だが、あなたは又あんまり憂鬱過ぎる。久喜さんは、あなたに「憂愁夫人」ッて名をつけましたよ。――そりや、勿論、あなたの性格でもあるだらうと思ひますが、僕は、それだけぢやあ無いと思ふんですよ。ね、あなたはいつも何か考へ込んでばかりいらッしやる。あなたはひどく不幸らしく見えます。何があなたをそんなに不幸にしたか？　僕はそれを知り度いんです。で、僕は、もし、あなたがそれを許して下さるなら、僕の生涯を擧げて、あなたの不幸を除く事の爲めへ盡したいと思ふん

です。』

横井は、まづい云ひ方で――まるで下手な翻譯のやうな口調で、しかも、熱心に云ひ續けるのであつた。

『ありがたう御座います。』

さすがに默つてばかりも居られないので、しげ子は、半ば、口の中で斯う云つた。

『あなたの身の上話ツてなものを、僕に聞かして呉れませんか？ いゝえ、僕は單なる興味で、それを聞かうツてんぢや無いんです。』

『でも、私の事なんか、お聞きになつてもつまりませんわ。お話するやうな事は何にも無いんで御座いますもの。』

『いや、そんな事は無いです。ねえ、一つ聞かせて下さいませんか？』

横井は執拗に繰返した。――早く停留所まで行つて電車に乘つて、此の忌はしい對話からのがれ度いと、しげ子は益〻急ぎ足になつた。



『こんな事云ふと、へんにおとりになるかも知れませんが、どうぞ、僕が飽迄も眞面目だといふ事を信じて下さい。あなたのやうな人は、あらゆる男性が目をつけます。だが、多くの男性は大抵不眞面目です。うつかりしてゐるとどんな目に會ふかも知れません。明眸禍といふ奴です。美しい女性は、その美しさ故に苦められるのです。僕はね、あなたの爲めに護りの騎士になつてあげたいのです。』

『ありがたう御座います。』

しげ子は苦笑せざるを得なかつた。

が、その時は、もう停留所の直ぐ傍まで來てゐた。しげ子は、相手があとの言葉を云ひ出さぬうちに、小腰をかゞめて、

『あの、私、こゝで――。』

『電車へ乘るんですか？——どうです。その邊で晩御飯を食べようぢやありませんか？』

『いゝえ。私、急ぎますから——。』

しげ子はきつぱりと云つた。

『まあ、いゝでせう？　つきあつて下さいな。』

『ありがたう御座います。でも、私、今日は急ぎますから——。』

二人が、そんな風に押問答をしてゐる時だつた。飯田橋の方から馳つて來た一臺のタキシが、交通整理の爲めにそこで停められたが、そのタキシの窓から、そこに立つてゐるしげ子の姿を認めた一双の眼があつた。

或る取引

タキシの主は、あの女優の藤原藤代であつた。藤代は、それがしげ子である事をみとめると、急に座褥からはじき上げられたやうにして、運轉手に呼びかけた。

『こゝでいゝの。こゝでおろして頂戴。』

そして、扉から飛び降りた藤代は、高踵の爪先を輕く、裾短かに細い脛を、つい、つい、ついとをどるやうな歩調で運んで、しげ子の傍に歩み寄ると、いきなり、その肩に手をかけて、

『しばらく。』

と、なれ〳〵しげに笑ひかけた。しげ子はびつくりしたが、それが欣助の友だちで、二三度會つた事のある活動女優だと知ると、ほツと息をついて眼を瞬つた。

『どうもあんたらしいと思つたら、矢張あんただつたわね。本當にしばらくですわねえ。』

顏面一ぱいの大袈裟な表情で、藤代はさもなつかしげに云つた。

『本當にしばらくでございますわねえ。』

しげ子は辛うじて笑顏をつくつた。

『私ねえ。あんたにお目にかゝりたいと思つて居ましたの。』

『…………。』

しげ子は物惑はしげに對手の顏を見上げた。

『一寸でいゝんですから、私、お話し度い事があるんですけど——。』

藤代は、しげ子の同伴者の方へ眼をやりながら云つた。

藤井は、一寸立場を失つたかたちで、もぢ〳〵してゐたが、

『僕は、ぢや、失敬します。』

案外あつさりとあきらめて、くるりと踵をかへして去つた。

『構は無いんですの？　おつれの方。』

『えゝ。』

『ぢやあ、あの——。』

と云ひ掛けて、藤代は敏くしげ子の顏色をうかゞひながら、

『私、あの榎本さんのお話をしようといふのぢやございませんのよ。私、他の或る方——あなたを探していらツしやる方の爲めに、是非あなたにお目にかゝり度かつたので御座います。』

欣助の他の人——欣助の他に自分を探してゐる人——。しげ

子の心を激しく波立つた。その藤代の顔が、しげ子の眼の前で、見る〳〵、氣味の惡い妖女から美しい天使へとかはつて行つた。

『私を警戒なさらないでもいゝのよ。ねえ。』

藤代は他意無く打解けた調子で、

『――別にその方から賴まれてゐるッてわけぢや無いけど、でも、私、すつかりあの方に同情しちやつてるの。それで、是非あなたをあの方に會はせてさしあげ度いの。』

しげ子は、たゞ、異樣な胸の波立を抑へ兼ねるだけで、返す可き言葉も知らないのであつた。

『だけど、こゝで立話も出來ないわね。どこかでお茶でも頂きながら、お話しませう。ね、いゝでせう。』

藤代は、然う云ふと、返事も待たずに歩き出した。あまり思ひ掛けない成行に、前後を考へて見る餘裕もなく、しげ子は藤代のあとについて歩き出した。

とある喫茶店の階上――幸ひ、他にあまり客も無かつた。二人は隅の卓にむかひ合つた。

『あの方ねえ。』

と、藤代は椅子につくと直ぐにはじめた。

『それはもう、夢中になつてあなたを探してゐるのよ。――いいえ、榎本ぢや無い、あのもう一人の方よ。』

『でも――。』

しげ子は漸く口を開いて、

『私を探して――それは本當で御座いますの?』

『まあ、どうして? あなたはそれを疑つていらッしやるんですの?』

藤代は眞赤な唇を開けて、さも驚いたといふ表情をした。

『でも、私、わからないんでございますの。その方はどうしてそんなに私を――私を探していらッしやるのでせう?』

『まあ!』

藤代は再び驚きの聲をあげた。附黑子が、濃目の頰紅の上で躍つた。

『その方、どんな方でいらッしやいますの?』

『あら、あなたは本當にその方を御存じ無いんですの?』

『えゝ。』

『ぢや、あの方にお會ひになつた事、無いんですの?』

『えゝ。』

それが、みち子に指環を呉れた人、あの霧の夜の露地のすれ違ひにちらと顔を見合はせた人であること――それだけはわかつてゐる。だが、その人と自分とがどんな因緣で結ばれ、その人がどういふわけでそんなに自分を求めてゐるか? それは、しげ子にとつて全く不可解なことなのだ。

『何だか信じられない事だわねえ。』

と、藤代は、卓に肘をつき、すこし突出すやうにして、頤を兩掌にのせて、まじ〳〵としげ子の顔を打戍つたが、

『ぢや、本當にその方の事些とも知らないのね?』

もう一度然う繰返した。

『え〻。本當に——

——その方、どんな方でございますの。——

——お名前は何と仰有るんでございますの？』



『まあ、名前もお知りにならないの？』

『え〻。何も存じませんの。』

『——兎に角、その方はね。それはそれは熱心にあなたを探していらッしやるのよ。それで、あなたを愛していらッしやる事も慥かだわ。』

『まあ！』

と、しげ子は赤くなつた。

『その方、榎本さんの許へいらしッた事がありますわ。丁度、私その場に居合せたんですけど——でも、榎本さんはすつかり白ばツくれて、慘酷にその方を追ひ返してしまつたのよ。私、傍で聞いてゐて、榎本さんが憎らしくてたまらなかつたわ。』

『まあ——。』

と、しげ子は消え入るやうに云つた。では、自分があんな男の世話になつてゐた事を、その人は知つてゐるのだ——然う思ふと、急に心が暗くなつた。

『ね、今日はお目にかゝれて本當によかつたわ。私、その方をあなたに會はせてあげ度いの。あなたは今何處にいらッしやいますの。それを私に教へて下さいましな。』

しげ子は、それを云つていゝものかどうかと、思ひ惑はざるを得無かつた。此の女は、欣助とも親しいのだ。もし、此の女の口から自分の所在が欣助に知られてしまつたら——さう思ふと、不安だつた。欣助が今に尚ほ執拗に自分を追ひ求めてゐるといふ事は、夏子夫人を通じてしげ子は知つてゐた。

『ね教へて下さいな。私、是非會はしてあげ度いのよ。』

『でも——。』

『あなたは會ひ度く無いと仰有るの？』

『い〻え。さうでは御座いませんけど——。』

しげ子は慌てゝ打消した。會ひ度く無い事は無い。いつの間

にか、濃くかもされてゐるこの不思議な戀心——その未だ知らぬ人の姿を夜々の夢にも抱いてゐる彼女なのだ。だが、彼女はその人に會ふのが何だか怖ろしいやうな氣がした。それも、こんな身體になつてしまつて——と思ふと、彼女は今更のやうに失はれた處女が哀しかつた。

『ね、あなたの今いらッしやるところ、それを私に敎へて下さいな。』

藤代は繰返した。

欣助は、しげ子を忘れる事が出來無かつた。しげ子が姿を隱してからもう半年以上も經つたが、欣助は、しげ子を探し出してもう一度自分の所有にしようといふ慾望を捨てる事が出來なかつた。否、時が經つにつれて、彼の執着は益々強くなりまさるのであつた。

しげ子を自分から隱したものが、夏子である——といふ事を、彼はいくらか勘附いてゐた。彼は、その事で、屢々夏子と爭はずにはゐられ無かつた。

『それは、あんたの邪推。私は何にも知りません。』

夏子夫人はいつもつめたく笑つてゐた。

『でも、私、あの人があんたから逃げた事をあの人の爲めに喜んでゐるわ。ほ、ほ！　こんな事で、あんたも、いくらか眞面目に苦んで見る氣持になれゝばあんたの爲めにも幸福だと思ふわ。』

『何が幸福だ！』

と欣助は苦惱に引歪められた顏で怒鳴り出す。

『僕の幸福——たつた一つの幸福を、君は僕からとりあげちまつたんぢや無いか？　どんなに白ばッくれようと、僕あ知つてゐる。あの女を逃がしたのは君なんだ！　君は一體何のうらみがあつて、僕にそんなあだをしたんだ。』

『何のうらみ？　ほ、ほ！　別にあんたなんかにうらみなんかありやしないわ。』



『ぢや、どうして、あんな事をしたんだ。僕を苦しめて、何が一體面白いんだ。』

『私、何もしやしないけれど――。』

と、夏子も白々と笑ひながら、

『でも、欣助さん、あなたは然うして苦んでゐると、いくらか人間らしく見えるわ。』

『何だつて？』

『苦むなんてことは、凡そあなたらしく無い事だけど――でも、あんたでも、然うして苦しむツて事を知つてゐると思ふと、矢張人の子ツて氣がするわね。――でも、未だそんな事では駄目よ。』

『どうして駄目なんだ？』

『そんな苦み方ぢや駄目。ねえ、あんたはこれまでずゐ分澤山の女の人を苦めて來たでせう。その女の人の苦んだだけを、みんな苦まなければあなたの罪は許されないのよ。あんたは、然うして苦んでゐるやうに見えるけど、相變らず、毎晩方々をあそび廻つてゐるでせう？　そんな事ぢや、未だ本當に苦んでゐるとは云へ無いわ。』

『苦しいから餘計に遊び廻るのだ。――僕あ、あの女さへ、戻つて來て吳れりや、すつかり生活を一變するつもりでゐるんだ。』

『それが間違つてゐるのよ。あの人に戻つて來て貰ひ度かつたら、先づ、あんたのそんな風な生活を變へなけりや駄目。』

『何を云つてるんだ。僕あ、君の、そんな賢女振つた意見なんか聞き度かあ無いんだ。』

――今夜も、そんな風の言葉の投げ合ひをしたあとで、ひどくむしやくしやした氣持で、欣助は歸つて來た。歸つて來ると、書齋の安樂椅子に身體を投げつけて、何か血走つたやうな眼で、じつと投げ出して宙に浮べた足尖のあたりを見つめてゐた。

彼のしげ子に對する愛は、今や激しい憎みに變質しつゝあつた。酒が腐つて酢になるやうに愛は酸敗する憎みになる。酸敗するやうな愛は、勿論眞實な愛とは云はれない。眞實な愛は金である。どんな事があらうとも、錆びたり腐つたりはしない筈だ。だが、欣助の愛は金では無かつた。

――夏子夫人が云つた通り、眞に人を愛することは苦しい事である。まことの愛は必ず苦みを伴ふ。苦みの無いところにまことの愛といふものはあり得無い。そして、まことの愛はまたどんな苦みをも勇敢に忍ばしめるものなのだ。じつと苦みに忍ぶ心の中で愛は益ゝ美しく鍛へられる。たとへば、金は炎の中で益ゝ輝きを加へるやうに。――だが、欣助は、それだけの忍苦の精神を缺いてゐた。彼は苦みに堪へる事が出來なかつた。苦みの中に一すぢの愛を護りおほせる事の出來ない彼は、その愛を、いつの間にか激しい憎みに置き換へてゐた。

『畜生！』

彼は心の中にうめいた。

いや、どんな事があらうともあの女を見つけ出さずには措かないぞ。どんな事があらうとも屹度あの女を見つけ出して、もう一度自分の所有にして見せずには措かないぞ。おれのこれほどの愛を裏切つて逃げたあの憎む可き女に對して必らず思ひ知らせてやらずには置かないぞ！

彼は斯う心の中でうめいた。

女中がはいつて來た。

『あの、藤原さんて方がいらツしやいました。』

『居ると云つたのか？』

『いゝえ。まだ何とも申上げては居りませんけれど——。』

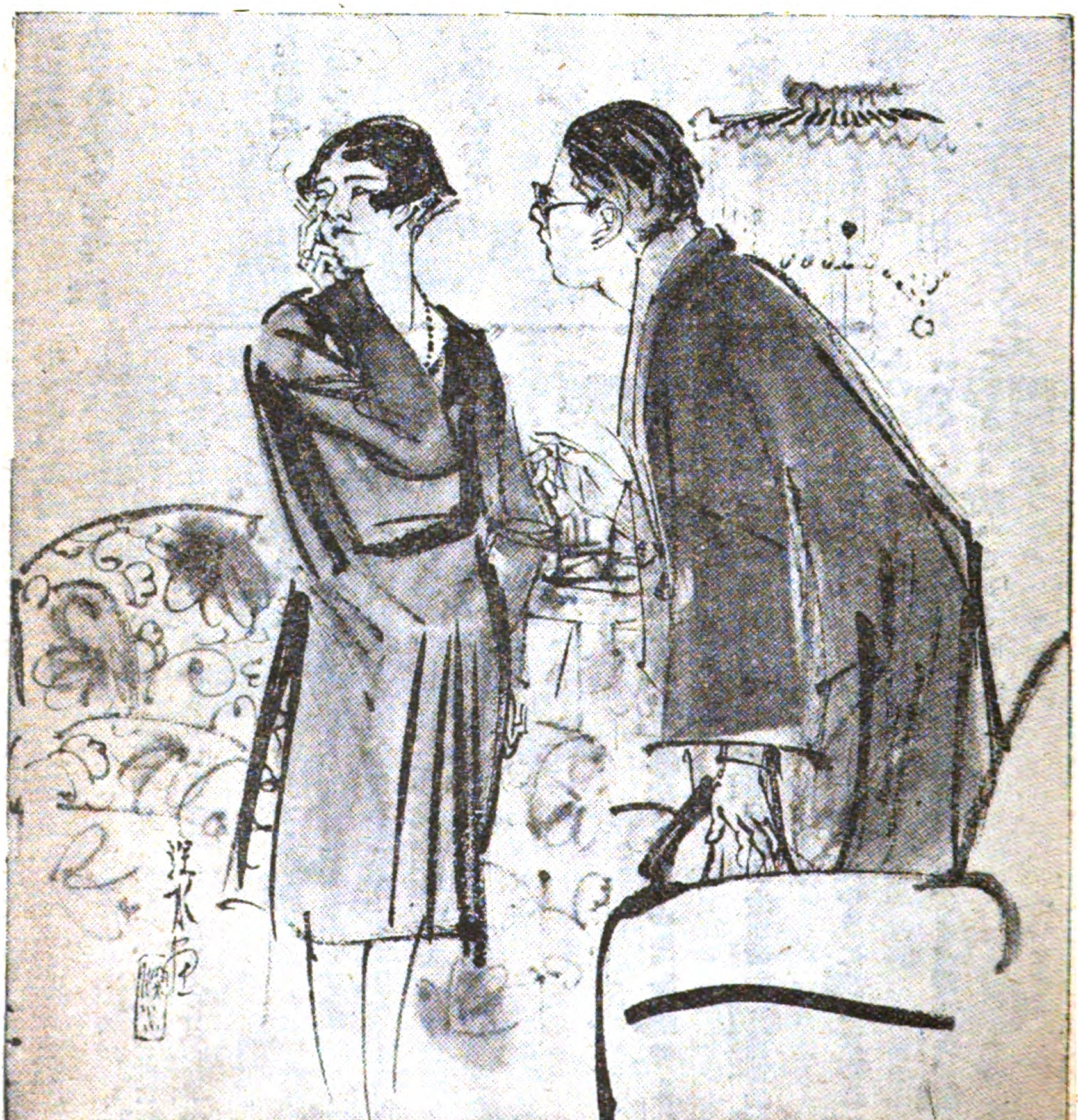
若い女中は、ひどく不機嫌な主人の様子におびえながらおど／＼と云つた。

『うるさいな。』

眉を寄せて、一寸考へるやうにしたが、

『兎に角通しとけ。』

女中は出て行つた。



三十分も經つてから、欣助が澁い顏をして應接間へ出てゆくと、藤代は腹立たしげに、いきなり斯う云つた。

『ひどく待たせるのね。私、もう待ちくたびれちヤツたわ。歸つちまはうかと思つてたところよ。』

『ぢや、歸つちまへば宜いぢやあ無いか？』

『まあ！』

『別に御招待申上げたおぼえもないやうだがね。』

『そんな事仰有つて、私がこのまゝ歸つちまつたら、どうなさるの？』

『どうもしないさ。』

『今夜、私がどんな用事でおうかゞひしたかわかつて？』

『用事だつて？』

『——それがわかつたら、三十分も一時間も待たせたりする事を、あなたは屹度後悔なさるわ。』

欣助は、ふん！　と鼻先で笑つてから、大きな口をあいて欠びをした。

『——ぢや、私これから萩原さんのとこへ行くわ。』

藤代は腰を浮かしかけた。

『萩原のところへ？』

『えゝ。萩原さんに敎へてあげた方が矢張宜いんだわ。』

『何を萩原に敎へるんです。』

『あの人の居るところをよ。』

『あの人？』

『えゝ。あのしげ子さんの居るところ、私とう〳〵つきとめちヤツたのよ。』

『そ、それは本當ですか？』

欣助は思はず椅子から立ちあがつた。そして、藤代の顏に噛く眼を据ゑながら、掴みかゝりでもするやうな荒々しい樣子で問ひ返した。

『うそだとお思ひになるなら、それでも結構よ。』

『敎へて呉れたまへ。何處に——何處に居るんです。』

『それをお敎へする爲めにおうかゞひしたんですけど——私、何だか、お敎へするのが可厭になつたわ。』

『敎へて呉れたまへ。あの女は何處にゐるんです？』

欣助はせき込んだ。

『さあ、どうしませうかね？』

藤代は白々と笑つた。

『敎へて呉れたまへ。敎へて呉れたら、どんなお禮でもします。』

『勿論、それは一つの取引よ。見事つとめおほせた女探偵の一役だわ。十分報酬をいたゞかなきや——。』

藤代は、そのためにどんなにか苦心したやうに裝ひながら云ふのだつた。

『いくらでも——望むだけの報酬はあげますよ。だから、敎へて下さい。敎へて下さい！』

欣助は迫つた。

（つゞく）

修養一夕話

空腹を抱へて草鞋を拾ふ

工學博士　田中龍夫

一人の若者があつた。彼が北海道で職を失ひ、東京をめがけて青森へついた頃は、既に嚢中無一物であつた。仕方がない、水でも飲みながら徒歩で東京まで行かうと覺悟した。その時、ふと彼の胸中に一つの考へが浮んだ。

『一體全體、人間と云ふものは、どん底まで落ちぶれて居つては、何等の善事も出來ないものか知ら』と。

併し彼の心の中には健氣にも『否な否な』と答ふるものがあつた。

彼は青森から盛岡仙臺へと街道をのたくつて來るとき、あちらこちらに草鞋の脱ぎ捨てられてあるのに氣がついた。草鞋と云ふやつは、決して兩方揃つて切れて居るものではない、まだ／＼履ける達者な草鞋がある。彼はそれを拾うては輕く肩になげかけて、奥州街道をのたくるのであつた。今日も一足、明日も二足と拾ひ集めつゝ。

世間は廣い一足の草鞋さへはきかねて、旅の路を痛ましくも辿るものが少くなかつた。

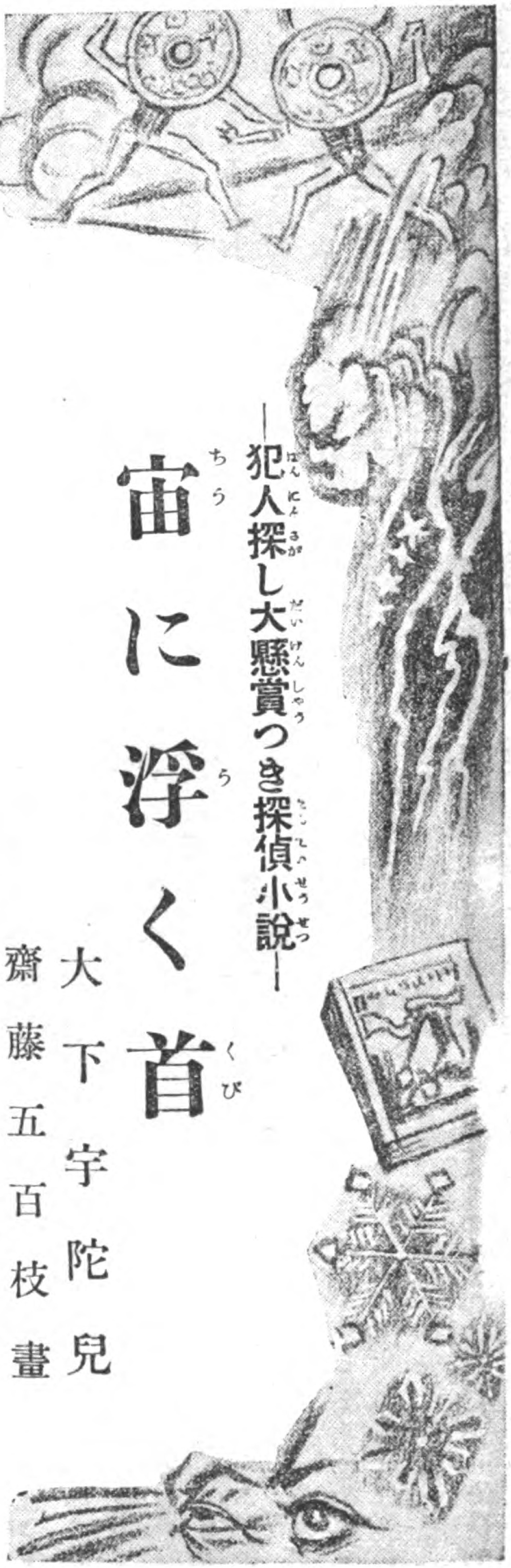
かかる老爺や老婆を見るとき、彼は、いつも肩の上の草鞋をめぐむのである。人生の路頭を踏みまよひ、老いて助けなき彼等は、一足の古草鞋をめぐまれて、地獄で地藏菩薩にでもあつたか、生神さまにでも出遇つたかの思ひをなして、禮を述べて行くのであつた。



斯くしてどうにかかうにか東京まで來る間に、七十幾足と云ふ草鞋を惠んだとは、當の本人から、私の聽いた直話である。

さうして、この人こそは、隱れたる人類の恩人、長門秋吉の本間俊平氏に外ならぬ。然り、實に二十五年を一日の如く、大理石掘りつゝ人の子のために、萬斛の涙を注がるゝ本間俊平氏である。

私はつく／＼思ふ、百萬長者になつて始めて慈善が出來るのではない、偉大なる人になつて始めて大事業が出來るのではないと。よしよし、我等も今日只今より、草鞋一足、貧しき兄弟に捧げて行かうではないか。隣りの兄弟に、やさしき言葉一つかけて行かうではないか。そこに人生の本當の歡びがあるのではなからうか。（終）



──犯人探し大懸賞つき探偵小説──

宙に浮く首

大下宇陀兒

齋藤五百枝畫

奇怪な探偵

一

玄雲寺の和尚は當時まだ歳が若く三十二歳、名を北條浩順といふのであつた。

學識は非常に豐富だともいはれてゐたが、この男の性格やその他については、その時村松氏も語つてゐたやうに、變人若しくは奇人といふのが一番當つてゐたらしい。ひどく無口な人物であつて、必要以外のことは殆んど喋らなかつた。そして稀に他人と何か談話をするやうなことがあつても、そんな時に彼は相手の顔を妙に傍眼も振らずに眺めてゐる癖があつた。さうした時の眼眸には、然もどこか特徴のある、不思議な薄氣味惡さが附きまとつてゐる。それで村の中には、

『浩順さんと話し込んでゐると、どういふものか、背筋の邊りが變にゾクンと寒くなる。』

と、そんなやうな噂話もある位だつた。眼立つてどうといふ奇行もなかつたけれど、それでゐて村の人々とはどこか反りの合はないところがあり、そのため、だん／＼と交際する人も少くなつたし、終ひには檀家先からも嫌はれてしまつた。すると又和尚の方では、それをまるで待ち望んでゝもゐたかのやう、寺の中は荒れるに任せ、一人つきりで酒を喰ひ、一人つきりで

讀書をしてゐた。峯島警部補と村松氏とが玄雲寺へ踏み込んで見ると、その和尚の讀書してゐたのが、意外にも犯罪に關する書籍ばかりであつたのを發見し、呀つと驚かされたわけなのだつた。

肝心の浩順和尚が、その時既に寺から姿を消してゐたのは、前章に於て述べた通りである。當局ではその和尚を逮捕するため、それから後果していかなる手段をとつたのであらうか。又當夜玄雲寺の床下へ潜り込んだ疑問の人物は、果して何者であつたのであらうか。——物語の筋は、こゝで急に四年の後へ移るのである。

その四年といふ歳月を經た、詳しくいへば或る年の四月十二日の午后のこと、茲に東京は丸の內東洋閣ビルデイング內に事務所を有つ、菰田剛介といふ私立探偵のもとへ、一人の眉目秀麗な帝大の學生が訪ねて來たのであつた。

この菰田剛介については、讀者諸君のうちに、或はそれとお心當りの方が有るかも知れない。彼はそれよりたつた一年ばかり前に、今いつた場所で私立探偵を開業した男であるが、それ以來多數の難事件をもの〻美事に解決して、めき〳〵と名を賣り出した探偵だつた。但し、それと一緒に、彼が非常に醜怪な容貌の持主で、然も明かに六十歳以上の老人であるといふことも知られてゐる。ヨボ〳〵の、見苦しい顔をしたチンチクリンな老人、とかういつて置けば間違ひはなささう。さうして、そのやうな見窄らしい風采なのにも拘らず、一旦何かの事件に出會したとなると、若い者も到底及ばぬ程の元氣さでもつて、テキパキとその事件を片附けて行く、大體がさういつたやうな人物なのだつた。

今、その菰田老人の事務所を訪れた青年は、最初受附で『荻原昌之』と書き込まれた名刺を差し出し、猶事件の依賴に來たのだといふ旨を附け加へた。そして、そこに待たされること四五分間、やがて彼は、窓から濠端の電車通りを見下ろすやうになつてゐる、ガッチリした事務室へ通されたのだつた。

『やア、御遠慮なくどうぞこちらへ。』

窓際の大型デスクに坐つてゐた菰田老人は、顔を上げて這入つて來た青年をジロリと眺めた。そして青年の座が定まるのを待つていきなりいつた。

『ウム、あんたはナンぢやね、長野縣飯沼村出身の方ぢやね。』

青年はひどく吃驚したらしい。

『えッ、どうしてそれが判るのです？』

『判ることがあるから判りますよ。』と老人は理由もいはずに笑つて答へた。『ところでしかし、あんたの依賴する事件といふのを、大體先づ承りませうて。』

その口調には、その事件の內容を薄々と知つてゐるやうなところさへある。そして、こちらからは何を訊いて見る暇もない程、極めて事務的な無駄の少い言葉である。青年は一寸呆氣にとられた恰好で、それでも漸くにして語り出したのが、筋道だけを拾つて見ると、大體次のやうな事柄であつた。

即ち彼は、老人に圖星を指された如く、飯沼村出身の帝大工科の學生であつたのだが、郷里には相當大きな酒造家の娘で中坪美代子といふ愛人を有つてゐた。二人は既に婚約の間柄で、大學の方を卒業し次第、すぐに結婚式を擧げる豫定になつてゐたところ、美代子が最近行方不明になつた。その事件について、孤田探偵の名聲を聞き、それでこの事務所まで來たといふのである。

青年の言葉が一寸途切れたところで、老人は輕く頷いた。

『ぢアあんたは、その美代子といふ令孃の行方を、この私に捜索して貰ひたいといふんでせうな？』

『さうです。』と青年は答へた。『實は僕は、郷里から美代子さんの失踪したといふ電報をこの東京で受取つて、一旦は信州まで行つて來ました。そして、それからあなたに依頼したらと思ひ付いて、又上京して來たといふわけなんです。』

『警察の方などへは屆けたのですかな？』

『無論屆けて、捜索願ひはしてあります。しかし、僕が村へ歸つて調べて見ると、これは到底普通の人では解決の出來さうもない事件なんです。』

『何故ですかな？』

『つまり、その美代子さんの失踪した以外に、村では去年の夏頃からかけて、まだ二人の女が行方不明になつてゐるのです。さうしてその二人の女が、どちらも十九歳の娘であつたわけです。今いつた美代子さんは去年十八歳でした。それで今年は十九歳になり、さうすると忽ち行方不明になつてしまつたのです。』

十九歳の娘ばかりが失踪したのだといふ、青年の言葉は俄然奇怪なものとなつたのだつた。孤田老人は、その時見苦しい顏のうちに、一種異樣な表情を浮べた。そしてすぐに口を挾んだ。

『ほほう、それは仲々問題ぢや。――が、そこでナニかな、田舍の娘などといふものは、時々この華美な東京の空氣などに憧がれて、親や兄弟の許さないのを、こつそりと逃げ出して來ることがある。そのゐなくなつた娘達といふのは、實のところ、さうした事情ではありませんかな？』

『それは、さうです。少くとも前に失踪した二人の娘については、村でも一般にさういふ噂が立つたやうです。未だに行方も分りませんが、大體はそんなことだらうといふ推察で、今日までのところ過ぎてゐました。』

『つまり、それで今までは餘り問題にならなくて、村も平穩であつた、とかういふことになるんぢやね。』

青年は我が意を得たりといふやうに頷いた。

『その通りです。が、そこで僕が村へ歸つてからよく調べて見ますと、その娘達は二人共に、不斷着のまゝでゐなくなつたといふことが判りました。二人とも時期は別なんですが、どちらも夜になつてから、一人は藤の湯といふ湯へ行つたまゝ歸らなくなり、一人はすぐ近くの親戚へ行くといつて出掛けたまゝ歸つて來ません。――村を逃げ出す位なら、例へどんな事情にしろ、若い娘のことですから、着物位は着更へた上で、又多少の



荷物も持つてから逃げて行くのが當然だと思ふのです。』

『なるほど。そいつはまア理窟なんぢやが、よろしい、それであんたにとつて一番重大なのは美代子孃のことぢやらう。これは又どんな樣子で行方不明になられたのぢやね。』

『大體、他の娘達と同じなんです。もう一週間以上も前のことになるのですが、實はその晩美代子さんは、村の小學校に當直してゐた、加瀬木敏枝といふ女教員を訪ねたさうです。——最初からいひますと、その二人は同じ縣立の女學校を卒業した間柄で、その女教員が今度新しく村へ赴任して來たわけなんですが、そこで美代子さんは、夜の九時頃になつて別れを告げたことまで判つてゐて、それつきり家へは歸つて來ません。そして、その別れを告げる際に、美代子さんは女教員から美しい繪本を借りて來たといふのですが、後に調べて見ますと、その繪本の表紙だけが、歸る途中の路に落ちてゐました。——女教員の加瀬木さんに訊いて見ると、それは繪本といつても外國の子供などが持つてゐる、大きな、英文入りの繪本ださうで、美代子さんはそれを、妹に見せるのだといつて借りたのださうです。』

青年はそこでゴクリと唾を嚥み込んだ。そして老人は、非常な熱心さで訊き返した。

『フーン、するとその、本の表紙の落ちてゐた場所といふのも問題ぢやて。——多分、非常に淋しい所ぢやらうね。』

『さうです、恰度玄雲寺といふ古寺の横手に當つてゐます。

いつたいがその玄雲寺といふのは――』

青年がかういひかけた時である、菰田老人の瞳は怪しく輝いた。が、青年はそれに氣が付かない。彼はそこで、四年前に起つた妙子殺し事件を、最初に樋口敬三が死體を發見したところから始めて、村の資産家村松俊太郎氏の非凡なる推理により、遂に玄雲寺の浩順が犯人と目さるゝに至つたまで、一通り説明したのであつた。

『で、そんな譯で、その浩順和尚の顔は僕もよく見かけたことがありますが、兎に角、彼はそのまゝどこかへ逃亡してしまひ、それについて又僕は、今度いろ／＼の噂も聞いて來ました。つまり、今お話をした村松さん、この人が當時浩順の逃げた時に「こんな恐ろしい人物は、早く捕まへてしまはないと、又どんな恐ろしいことを仕出來すかも知れない」とかういふ豫言をしてゐるのです。美代子さんがゐなくなると同時に、今度は村でも騒ぎ出して、「その浩順が何處からともなく村へ歸つて來て、かうして娘達に殘虐な所業を働いてゐるのではないか」とそんな風にいつてゐるものもある位なんです。考へて見ると、前に殺された妙子といふのが、矢張り十九歳だつたさうですし、この説にも強ち根據のないこととばもいへません。――要するに、僕の懸念してゐるのは、美代子さんがあの妙子といふ娘と同じ運命に陥入つたのではないかといふことなんです。』

青年は漸くさういつてしまつて、顔には不安の色を濃く浮べた。果然、村松氏の豫言が適中しかけてゐたのである。

菰田老人はしかし、この時何故かニヤリと笑つた。さうして口調だけは相變らずの調子でいつた。

『いや、よく分りました。――が、するとその村松さんといふのは、仲々立派な探偵眼を備へてをられる様子ですな。あんたは私のところへ來る前に、何故その村松さんに事件の捜査を依頼して見なかつたのぢやね。私がこゝから出向いて行つても、多分、その村松さんだけの手腕位しか揮へませんぞ。』

『それはです。』と青年は少し遠慮しながら答へた。『實は僕は、こゝへ來る前に、早速村松さんのお宅へ伺つて見たことは見たんです。』

『すると――？』

『すると村松さんはゐませんでした。奥さんだけがをられてその談話によると、村松さんは一年半ばかり前からひどく健康を害されて、今は或る土地へ轉地療養に行つてゐるし、殊に非常に衰弱してゐて、とても相談には乘れないだらうといふんです。僕は仕方なしに、自分の家へ歸つてから聞きましたが、するとそれはもう僕ばかりでなく、前に娘を失くした人達も、又警察の方からも、度々村松さんを訪ね度がつてはゐたのださうですが、いつも僕と同様に、村松さんには會へなかつたさうです、猶よく訊ねて見ると、村松さんがさうして轉地療養に出てからは、時によると村へ歸ることもあるさうですが、村の人達には絶對に會つたことがないとのことで、それがもう今いつた通り一年半も前からになります。――仕方なしに、といつては

失禮ですけれど、そこで僕は、あなたが最近一年間ばかりで非常に名を賣り出した探偵であるといふことを思ひ出し、それでこちらへ上りました。』

　何氣なくそこまでいつて來て、青年はこの時、ふつと妙な顏をした。そして孤田老人の顏を覗き込むやうにした。

　老人は、微かに狼狽の體である。急いでポケツトから太いパイプを取出し、それに刻莨を詰めてポカ〳〵と喫かし始めた。

　甚だ奇妙な沈默である。

　青年は何事かを幾度もいはうとしては唇を歪ませ、それから漸くのことでいつた。

『や、さうでした。――兎に角です、僕の方はそれで、何も村松さんでなくつたつていゝわけなんです。あなたのやうな一流の探偵でさへあれば結構なんです。』

　だが老人は、その青年の言葉を聞いてゐるのかゐないのか、先刻までの熱心な樣子はどこへやら、頻りに莨をポカ〳〵やつて、ぢつと眼を閉ぢたまゝである。それで青年は猶もいつた。

『で、くどいやうですが、僕の方では、それが村松さんの手であらうと、又孤田さん、あなた御自身の手であらうと、要するところは美代子さんを初め、村の娘達が失踪した原因を突き止めて戴いて、ならうことなら、美代子さんの無事な姿を見せて貰へれば結構なんです。――いかゞでせう、一つお骨折りを願へませんか。』

　老人は何か思案するらしく、まだぢつと默つてゐる。そして、青年が再び口を開かうとした時、漸くにして次のやうにいつた。

『よろしい。それ程にいはれるなら引受けませう。』

『えッ、引受けて下さる?』と青年は元氣づいていつた。

『引受けます。今夜の最終列車で信州へ行きます。その汽車の中で、猶詳しいことは伺ふとして、しかしその前に條件がありますよ。』

『どんな條件です。』

『村へ行つても、あんたは私のことを決して探偵だなどといはないことです。名前は、成るべく平凡な山本義雄とでもいふことにして置いて、それから猶、今の村松といふ、さうですな、その田舍探偵の名前だとか、或は又以前の妙子殺しの事件のことを、絶對に口へ出さないやうにして下さい。いゝですか。』

　青年は思案して答へた。

『いゝです。』

『では、よろしい。兎に角、夜行で新宿から乘ることに致しませう。』

　それで二人の約束は出來たのだつた。

　青年は、間も無く、一旦はその事務所を辭し去つた。

　そしてその歸りがけ、彼はエレベーターの中で頻りに小頸を傾むけながら、『妙だなア、妙だなア。』と呟いてゐたのである。

二



　それから殆んど十日ばかりしてーー。

『やだい、やだい、俺んがだい。』

『何が俺んがだいもあるものか。仙には拾はせてやつただけだつちうによ。』

『何いふだ。俺が拾つただだから俺んだによ。』

『まだいふか。よこせといつたらよこしてしまへ！』

　長い冬が終つて、信濃はその時、漸く櫻の咲いた春なのだつた。天龍川の水が僅かに濕んで、稍濁りに濁つたのが岸をゆるやかに浸して流れ、所々に銀色の眼を吹いた柳が見える。恰度そこは、あの瘤七と呼ばれた唐澤與七の所有してゐる水車小屋の下であつたが、見ると二人の惡太郎らしい少年が、眞中に挾んだ非常におどけた顏をした、そして青鼻を一本ずんと垂らした、一見して白痴らしい少年に向つて、口汚く何か罵つてゐるのであつた。

　おどけた顏の少年は、瘤七の子供の仙太である。



　仙太は、身體も痩せてゐて小さかつたが、今、メリヤスの股引に足袋を穿いたまゝの脚を膝のあたりからぐちよ〳〵に濡らし、さうして片方の手を、爪が掌に喰ひ込む程固く握つてゐる。

　惡太郎等のいつてゐるところから見ると、仙太が天龍川の中で何か見付けて拾つて來たのを、二人が仙太の低能なのを幸ひ、捲き揚げようとしてゐるらしい。そのうちに、惡太郎等は仙太の身體を無理矢理に押へて、その握つてゐる片手をこじ開けようとしたのであつたが、途端に仙太は『わーん』といつて泣き出した。

　奪らうとする奪られまいとする、その拍子に仙太の大切に握



つてゐた何か小さな物が、長暢な春の日射しに黄色い光をキラリと放つて、そこから四五間離れた土手の向ふ側へ飛んで行つたのだつた。

悪太郎が一寸眼配ぜをした。そして、一人は猶も仙太の身體を羽搔ひに締め付け、一人がその土手の向ふ側へ走らうとした。

が、するとその時のことである。水車小屋の上手からは、巨大な體軀を有つた瘤七が、ぬつとばかり現はれた。そしてその場の樣子を一眼で見ると、滿面に朱を注いで走つて來た。

『うぬら、家の仙太をどうするつちゆんだ！』

猛獸のやうな憤怒なのだつた。悪太郎等はハッとして振向いて、忽ちバラ〳〵と逃げて行く。漸く仙太の傍まで走り寄つた瘤七は、忌ま〳〵しげに悪太郎の逃げた方を眺めやつてそれから骨ばつた大きな手を仙太の肩へ抱く樣にして載せた。

『われ、あの餓鬼らと遊ぶなつていつて置いたによ。それ鼻をかむんだ。チーンといへ、チーンといへ。』

仙太はまだげく〳〵と泣いてゐた。そして父親は、荒々しい言葉ながらも、一生懸命でそれを宥めてゐた。

村には、内にどんな恐ろしい事件が潛んでゐたにしろ、表面は矢張り伸び〳〵とした農村なのだつた。低能の仙太は、今土手の向ふへ飛ばしたものを、父親が出て來て叱れたため、ふつと忘れてしまつたらしい。小さな身體を甘える樣に父親の腰の根にすり寄せて、コチ〳〵と水車小屋の方へ歸つて行く。

その時しかし、土手の向ふでは、ちつとその二人を見送つて當惑顔に彳んでゐる男があつた。

その男は、肩には黒い四角な鞄をぶら下げ、緣の除れた山高帽を冠り、古風なフロツクコオトをだらしなく着てゐた。そして、氣味の惡い黒眼鏡をかけ、白い髯を生やしてゐた。

かの奇怪なる探偵、菰田老人なのである。

彼は、先刻からその土手の蔭に腰を下ろして、頻りに何か考へてゐたのであつた。そしてそこへ、仙太の手から飛んだ小さな品物が、キラリ眩しく日光を照り返しながら、スツと空を切つて落ちて來たのであつた。仙太と與七とを見送る彼の右手には、その小さな品物が、行儀よく載せられてゐるのであるが、そのうちに彼は、それを仙太に返してやらうとでも思つたものか、二三歩だけ水車小屋の方へ近づいて行つて、しかし、ピタりと又立停つた。そして、今度はそれを指につまんで、片一方の爪で彈いて見て、次には眼鏡を外して仔細に吟味した。

『おお！』

忽ち、何を發見したのかから叫んで、それから、水車小屋は見向きもせず、それを片手に握りしめたまゝ、一散に村の家並へ向けて走つたのである。

だが、するとこの時、菰田老人の姿が恰度村の家並と天龍川との中間にある、例の玄雲寺近くまで差しかゝつた時、今度は同じ土手の曲り角になつた別の側から、ムツクリと頭を擡げて來た人物がある。

その人物は、青いソフトに詰襟のレインコートを着てゐたが、やがて、ツカ〳〵と水車小屋に近づいて行つた。

『搦七さん、ゐるのかい？』

『はい、をりますだ。』答へて出て來た搦七は、ひよこりと頭を下げて笑つて見せた。『やア、これア、荻原んとこの坊つちやまでねえか。何か用が有るだかね。』

その人物は、荻原昌之であつたのだつた。

『うん、一寸ね、仙太を呼んで見れないか。』

『仙太をどうしますだ。』

『なにね、お駄賃を上げるから、少し訊き度いことがあるのだよ。』

呼ぶ前に、仙太はそこへ顏を出してゐた。

『あ、大きくなつたね。』

お世辭のやうにかういつて置いて、荻原青年は仙太からいろいろのことを訊かうとした。無論、川から拾つたものが何であつたかといふのである。

すると仙太は、それに對して滿足な答へは容易に出來なかつた。そして最後に、それでも『穴の明いたゼニ』だといつた。

『フム、穴の明いただといふのか！』

青年は、考へ〳〵水車小屋を後にしたのであつた。

三

讀者諸君も恐らくは御推察になつてをられるやうに、菰田老

人と荻原青年とは、あゝして東洋閣ビルデイング内の事務所で邂逅した次の日、既にこの飯沼村へ乘り込んで來てゐたのである。

孤川老人は、賣藥行商人といふ觸れ込みで、飯沼村の村外れに近く、古びた宿屋の一室に腰を落ち着け、青年の方は、村人の手前、全然未知の間柄らしく裝つて、無論自分の家に起居してゐた。

狹い田舍のことで、誰かどすぐにも孤川老人を疑ひさうなものなのを、何故彼が疑はれずにゐたかといへば、それは老人が、どこから手に入れて來たのか、山本義雄名儀になつてゐる行商人鑑札を所持してゐて、これを來るとすぐに村の駐在所の巡査に示してあつたからだつた。老人は一方にさうして置いて、それから約十日間、毎日のやうに村の内外を商ひにかこつけて廻り歩いてゐたのであつた。

この間に、老人はいつたい何を劃策してゐたのであらうか。それについては、流石の荻原青年さへも知ることが出來なかつた。最初の四五日、青年は毎晩夜になるとひそかに老人の宿を訪れたが、老人は何事も口を噤んだまゝで語らないのだつた。然も六日目からは、當分の間、訪問をお斷りするといはれたのだつた。

琳七の水車小屋で、青年がこつそりと老人の擧動を見張つてゐたのは、いつたいが最初東京で會見した時もさうだつたし、それが又今述べて來たやうな事情で、青年は、何がなし、老人の一擧一動を見逃せなくなつたからなのだつた。彼が最も注意してゐたのは、老人が村松氏の邸へ行くかどうかといふ點である。すると、果して老人は村松氏の邸へも藥の鞄をぶら下げて入り、恰度それが晝飯時でもあつたのだが、殆んど三十分ばかりして出て來たこともあつた。しかし、それだからといつて、青年の頭には何もハッキリした結論が出て來なかつた。老人の樣子を見てゐると、それが村松氏の邸でなくとも、同じやうに長い時間を費して何か話し込んでゐることが度々あつた。そしてかの妙雲寺へも（この時はもう住職が變つて、寺の内部も見違へる程綺麗になつてゐる）矢張りのこ〳〵と這入つて行き、何氣なく藥を賣つて來る樣子なのだつた。

そこでしかし、このやうにして次第に氣分の苛立たしくなつて行つた荻原青年が、それでも漸くにして、老人の態度に何か變つたところのあるのに氣付いたのが、今の、水車小屋の出來事を見てからである。

青年はその夜、一晩中まんじりともせずに考へ込んで、絶えず『穴の明いた錢』のことばかり繰返してゐた。

『仙太の言葉が正しいとすれば、結局は五錢白銅か十錢白銅のことになるが、しかし、それを孤川老人があゝしてひどく大切さうに持つて行つたところを見れば、その白銅に、いつたいどんな秘密があるのであらう。』

考へてゐるうちに、ふと、又しても思ひ出すのは、あの東洋閣ビルデイングで會つた時に感じた、どう説明することも出來

ないやうな疑問である。言ひ換へると、それは孤田老人その人に關する疑問である。こゝでハツキリいつて置くと、青年にはその孤田老人の存在と、村松俊太郎氏の存在と、更に今では、かの浩順和尚の存在と、この三つの存在が、奇妙にこんぐらがつて考へられるのだつた。といつて、その三人が、見たところでは皆別々の人間であるのだつたし、どう説明していゝのか判らない。無理矢理に押し詰めて行つたところでは、目下のところ、たつた一つだけ解決法があつた。それは、當つてゐるゐないかは別として、その三人が、孤田老人を長兄とする、兄弟なのではあるまいかといふことであつた。村松氏を中として、浩順和尚を末弟として見れば、何か知ら、薄つすらとした光明が見えて來る。

『さうだ、さうに違ひない。そしてその三人の間には、何か非常に複雑な因縁があるんだらう。』

實際、一度は慥かにさう考へたこともある。が、それにしても、その因縁がハツキリと判らないうちは、矢張りどこかに霧のかゝつたやうなところがあるのだつた。——その夜彼は、暁近くからトロ〳〵と眠つて、その三人の顔の間を、五錢の白銅と十錢の白銅とが、蛙のやうに脚を出して游ぎ廻る夢を見たのである。

その翌日、青年はもう晝近くなつてから眼を覺ました。

そして遅い朝飯を済ますや否や、ぶらりと外へ飛び出した。寝過したために、恐らくはもう孤田老人が宿からどこかへ出掛けてしまつて、すぐにはそのあとを跟けることが出來ない。村松の誰彼にそれとなく訪ねて見て、今日は老人がどの方角へ向いて出掛けて行つたか、それを確かめる心算である。

それで、彼の足は自然に村外れの老人の宿の方へ向いて行つた。

すると、その宿まではあと二町足らずといふところが、そこだけ家並がポツリと切れて、人通りの少い縣道になつてゐる。そこまで行つた時、彼は、

『や！』

といつて足を停めた。

向ふから孤田老人が、呑氣らしく腰にはビクをぶら下げ、肩には釣竿を載せて、ニコ〳〵しながらやつて來たのであつた。

『どうもな、益々迷宮入りの觀があるんでな、暫くの間釣りでもやつて、氣分の轉換をしようと思ひますのぢや。』

こちらから何もいはぬ先きに、老人は青年の傍へ近づいて來て、人目を氣にしながら、かう嘯いて通り過ぎた。そして間もなく縣道を横へ外れて、そのまゝスタ〳〵と天龍川の方へ曲がつて行つた。

『よし、それぢやアこつちも出掛けてやるぞ！』

青年は狼狽てゝ一軒の荒物屋へ駈け込んだ。

そして、竿とテグスと鉤とを買つた。

何喰はぬ顔で訪ねて見ると、老人の方も今朝になつてから、その同じ荒物屋へ來て釣の道具を買つて行つたらしい。が、老

人の買つて行つた鉤は、普通には蚊頭と呼ばれてゐる毛の附いた鉤であつた。

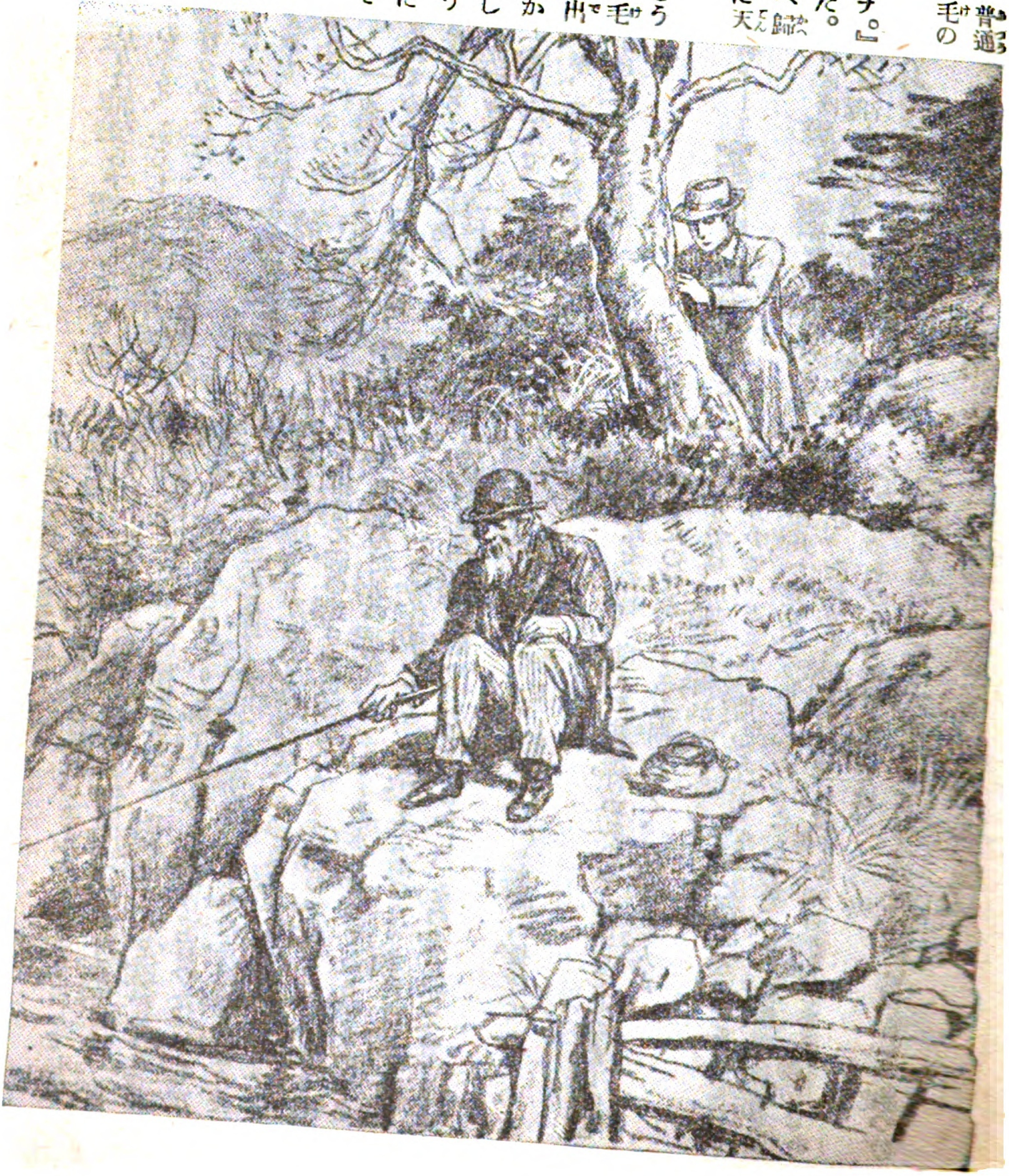
『畜生、又何か企らんだナ。』

青年は思はずさう叫んだ。

そして自分も大急ぎで家へ歸つて仕度をし、同じやうに天龍川へ出掛けて行つた。

一般にどこの地方でもさうであるが、殊にこの地方で毛鉤釣りといへば、朝の日の出ないうちか、それとも夕方かに限られてゐた。今、かうして老人の出掛けて行つたやうな眞晝時には、どんな名人にでも雜魚一匹喰ひ付くことではなかつたのだつた。

風が吹かうが雨が降らうが、天龍川の岸に二人の奇妙な閑人の姿が毎日のやうに見受けられるやうになつたのは、それから後殆んど二十日



ばかりの間である。

その間に、肝心の美代子孃の行方は相變らず判明しない。生死不明の愛人のことを忘れたかのやう、かうして荻原青年がさも呑氣さうに釣りにばかり出掛けるのを見て、村の中には流石にそれを不審に思ふ者もないではなかつた。

が、さうした人の村の誰彼よりも、寧ろ最も不審の念を禁じ得なかつたのが、當の荻原青年なのであつた。老人と彼とは、いつも影の形に副ふやうにして、一方が瀨頭で針を流せば、一方はすぐとその對岸から糸を垂れてゐた。そして青年は、機會さへあれば、老人に何か話しかけようとしてゐた。

ところが老人の方では、あの朝行きずりに一寸言葉を交したきり、その後はむんずとばかり默り込んで、妙に說明をして呉れないのだつた。それでも青年が、釣りを始めてから五六日經つて、努めて何氣なく言葉をかけたことがある。

『どうです、喰ひつきますか。』

『いや、駄目ですよ。』

『場所が惡いんぢやないですか。――毛針には、瀨の早いところの方がいゝんです。』

實際老人は、その時毛針釣りには最も不適當な、流れがどんよりと緩んでしまつて、青い藻の浮んだ場所で釣つてゐた。それで青年は半ば本心からかういつて見たのであるが、すると老人は、

『や、大きにさうかも知れませんて。――ぢァ一つ、場所を變へてやつて見ませう。』

といつて、未練氣なく岸を離れ、ぐん／＼と步き出してしまつた。が、見るとその老人が無雜作に肩へ擔いだ釣竿には、肝心の絲が附いてゐない樣子である。青年はそれを確かめて見る心算で、今度はこつそりと老人のあとを跟けて行つた。そして老人が、そこからは大分川下に當る、石を木の枠に組み込んだ防波堤の陰へ下りるのを待つて、そつと上から覗いて見た。そこは相當に瀨の速さがあつたので、普通の毛針だと、水面には一列に並んだ針の頭が、スイスイと水を切つてゐる筈なのである。が、その場合果してそれは見えなかつた。竿には流石に絲だけが四五尺餘り附いてゐて、しかし、その先きがプツツリと切れてゐた。

老人は針の無い絲を、繰返し／＼水面へ投げてゐたのである。

青年はその日、老人には氣付かれぬやうにしてそのまゝ自宅へ戾つたのだが、すると間もなく、今度は老人が、

『釣りでは一向に獲物がないから――』

といつて、どこか近所から古い投網を買ひ込み、それを提げて天龍川へ行くやうになつた。ところが、この投網が又亂暴なもので、それでも最初の二三日は何か知ら獲物のある樣子であつたが、そのうちに村の中では、

『藥屋さんの網には穴が明いてゐるのではないづらか。起しつけら一つ取つて來たことはねえつちらに。』

といふやうな戯れ口が利かれ始めた。荻原青年がそこで或る夜のこと、老人の宿の裏手へこつそりと忍び込み、そこに置いてあつた投網を調べて見ると、意外、なるほどその網には裾から少しく上へ上がつたところに、どこか棒杭にでも引つかけたのであらう、小さいのや大きいのや五つ六つの穴が明いてゐて、中には悠々と人の這ひ出る位の穴も見えたのだつた。

孤田老人はしかし、その次の日も相變らず破れた網を肩にして出て行く。

穴の明いた錢と穴の明いた網と、今度は二つのことがこんぐらがつてしまつたのだつた。

四

『兄さま、戸袋のところに、こんなものがあつたけん。』

飯沼村もやがて五月の中旬近く、ぼつ／＼農繁期に入つて來た或る朝である。荻原青年が寢床の中で眼を覺ましたところへ、彼の弟でまだ小學校へ通つてゐたのが、一通の手紙を持つて入つて來た。

見ると、セピア色の横封筒で宛名は達筆に荻原昌之殿と認めてあつたが、切手の貼つてないところを見れば、郵便局の手を經たものでなく、差出人が自分で持つて來て、戸袋の隙間から差し込んで行つたことがすぐに分る。封を切ると、中は有合せらしい安物の卷紙へ、筆で次のやうに書いてあつた。

冠省

急用有之、約一週間の豫定にて旅行仕り候ところ、留守中は、猶々御配慮宜しく願上げ候。敬白。

餘りにも簡單な文面であつて、これだけでは一寸譯が判らないのであつたが、するとさうした文句のあとに、『針の無い男』と書き添へてあつた。

いふまでもなく、孤田老人の仕業なのだつた。

どんな理由で、どこへ旅行したのかは別として、殊更に針の無い男といつて斷つてあるのは、老人が既に、荻原青年のそれを確かめた時のことを知つてゐる證據でもある。

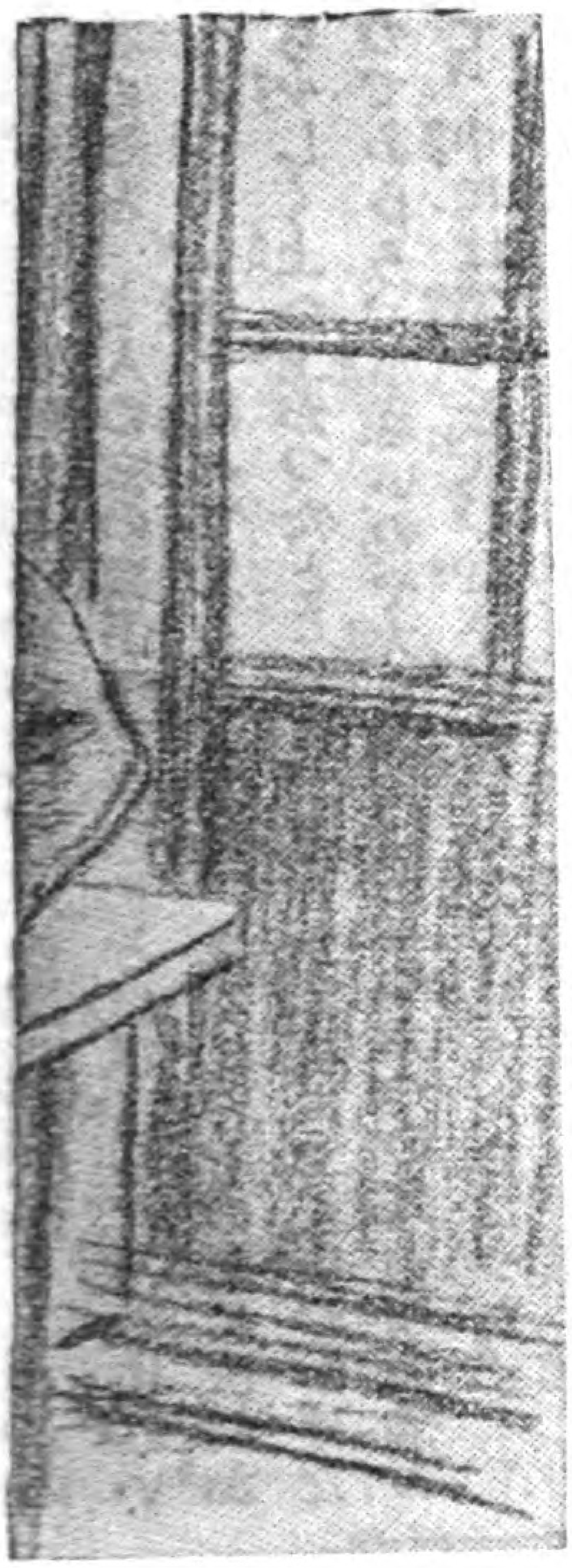
『呀ッ！』

青年は、呆れると同時に、初めてカッとした怒りを感じた。

それから又、今かうして手紙を讀んでゐる自分を、老人がそつと見張つてゐるのではないかと、どこか薄氣味の惡い氣持さへした。

『うぬ、どうして呉れよう！』

急に不機嫌になつてしまつた荻原青年は、それから後毎日のやうに老人の宿へ押し掛けて行つては、宿の者に何か訊き出さうとして焦つたり、又は無理に老人の借りてゐた部屋へ通して貰つて、あちらこちらと探して見た。今は、美代子孃の行方を探るよりも、老人の怪しい態度を突き止めることが、何よりも大切なことになつて來たのであつた。



だが、この間には殆んど何も獲る所が無い。さうして、愈よ老人の手紙にもあつた一週間目の日が來た時のこと、青年は、もう歸つてゐるかも知れぬといふ意氣込みで、朝早く老人の宿へ押し掛けて行つたのであるが、すると彼は、まだ向ふまで行き着かぬうちに、意外な人物に出會してしまつた。

村の駐在所の巡査が二人先きに立つて、峯島警部補が肩章嚴めしく歩いて來たのである。

『や、いゝところで會ひました。』

顔馴染みである村の巡査は、最初にからいつて青年を呼びとめた。そして、警部補と青年とを引合せた。

『峯島さん、これが先刻申上げて置いた荻原君なんです。あの、山本といふ老人とは時々何か話をしてゐたのを見たといふ者もありますし、殊に、今聴いて來た通り、荻原君はあの宿へ近頃度々出向いて、頻りに老人のことを訊ねてゐたさうです。どうでせう、一緒に行つて貰つて、訊いて見ませうか。』

孤田老人の山本義雄については、この時既に何か事件が持上つてゐるらしい。荻原青年は、それで一も二もなく駐在所まで隨いて行つた。そして最初に、峯島警部補から次のやうな手紙を見せて貰つた。

拜啓

時下春暖の候御機嫌如何に御座候や。小生その後病弱のため一向に御面談の機を得ず迚に殘念に存じ候。

ついては小生今回久方ぶりにて轉地先きより歸郷仕り、目下相變らず病床に罷在り候所、實は一昨夜小生邸内に侵入したる鼠賊有之、幸にして小生居室近くまで忍び寄り候時、家人これを發見して大聲に騒ぎ立てたる爲一物をも獲ずして逃走仕り候へ共、右、念のため御通知申上げ置き候。猶々同人の逃げ去りたる後、家人をして庭上を檢せしめ候所、塀の附近に、山本義雄名儀の賣藥行商人の鑑札一枚を發見仕り候間、同封の上御届けに及び候。

家人の言によるに、同人は小生留守中も二三回は御用聞きに參り、その節、邸内を甚だ胡亂氣に見廻しゐたことなどもありたる由にて、此段御參考までに申添へ候。但し、小生は目下病勢甚だ面白からず、到底御面談は叶ひ難く候間、同人御取調べの際御必要有之節は、書面を以て御申越し下され度く、或は家人を以て代理出頭致さすべく候。



先は右要用まで。　　　　　　　　　　敬具。

珍らしくも村松俊太郎氏から、最初の殺人事件以來親しくたつた、峯島警部補へ宛てての書簡なのである。後に判つたところでは、流石の村松氏がこれを文字通り鼠賊と解釋して、不用心さの餘り、その旨を知らせたのであつた。

荻原青年がそれを讀み終るのを待つて、警部補は初めていつた。

『かういふ譯でしてね、他ならぬ村松さんのことでもあるし、私が早速出張して來たところなんです。――ところが、宿へ行つて訊いて見ると、本人はこの一週間以來、どこかへ旅行に出掛けたといふことでした。それが手紙から見ると、一度旅行に出てから歸つて來たのか、それとも旅行したと見せかけてそのまゝ身を潜めてをつたのか、兎に角、本人が二三日前からこの村の何處かにゐることは確かなのです。――こんなことは、直接村松さんに御目にかゝれると雜作なく片附くかとも思ふのですが、そこでいかゞですか、多分あなたも、あの老人について何か知つてゐることがあるでせう？』

そこで青年が、折角今までは默つてゐたのを、美代子失踪事件から始めて、孤田老人を連れて來たこと、及びその老人の不可解な態度を突き止めようとしてゐたことまで、一伍一什を打明けたのに無理はない。ほんの要領だけを掻いつまんで話すうちに、峯島警部補の顏色は變つた。

そして最後に、青年が老人から受け取つた手紙を出して見せた時、警部補は到頭ウムといつて呻つた。

『見覺えがある。この筆蹟には見覺えがある！』

『えツ。』と青年が驚いて訊ねた。『誰です、誰の筆蹟だといふんです？』

警部補は、もう一度その手紙を讀み返して、見てそれから今度は巡査にいつた。

『君、こいつはあの浩順和尚だ。前の事件の時、僕は寺の方を調べてゐて、彼の書いたものを幾つも見てある。素晴らしく立派な筆蹟たんだ。――うん、老人に化けてゐようがどうであらうが、明かに彼奴に違ひない！』

（つゞく）

大懸賞犯人探し〆切迫る!!

美人殺しは果して誰？

今にも解決の曙光を見るかと思ひの外、事件は急轉直下、突如！奇怪な孤田探偵の出現に依つて、却つて果てしれぬ迷宮に入り、讀者を謎から謎へ引き廻して探査を惑はすばかりである。見よ！この汲めども盡きぬ面白さ！而もこの複雑極まる大構想に些の破綻も見せざる作者の巧妙さ！流石は斯界の鬼才大下宇陀兒氏の傑作である。

さて興味ある犯人探しは愈ゝ本號である。美人殺しはそも誰？事件は未だに五里霧中、紛糾は紛糾を重ねて何の手掛りも摑めず、誰に嫌疑のかけやうもない。併し諸君の烱眼と鋭い推察は必ずや眞犯人を登場人物中に突き止めずには措かぬであらう。

警察すらも手を燒いた難事件である。が又それだけに探査に深い興味があるといふものだ。紙上縱横に諸君の探偵眼を働かせて、美事犯人を突き止め、競つて投書して呉れ給へ！

懸賞規定

用紙　官製はがき。表に宛名を、裏に住所姓名と『犯人の名』を書く

宛名　東京市本郷區駒込坂下町四八　大日本雄辯會講談社『キング懸賞部』

〆切　昭和五年一月二十五日

發表　本誌四月號誌上

賞品　作者大下宇陀兒氏立會ひの上、厳重なる抽籤法により正解者の中から當選者を定め、左記の賞品を贈呈す。

一等　美術置時計　拾名
二等　金蒔繪硯箱　貳拾名
三等　本社特製萬年筆　參拾名
四等　純銀特製メダル　貳百名
五等　特製銅メダル　壹千名

泰西出世美談

沈默の少年

――世界的の大新聞社長――

『徒弟一名至急採用志願者は至急申込まれたし』といふ新聞廣告を見ていの一番に活版部にやつて來た少年があつた。ぼろぼろの服に破れた帽子をチョコンと頭に載せてゐた。その少年は早速雇ひ入れられて文選掛を命ぜられた。何處の國でも新參者はいぢめられるのが常、入社の翌日はもう、『こりや何處の掃溜からかつぱらつて來たのだい、素敵な帽子だあねえ』とからかはれた。が少年は別に哀しい顔も見せない。それが面憎いと三日目には印刷用のインキを頭に塗りつけた。それでも知らぬ顔をしてゐるのでザアーとばかり上から注ぎかけたりした。頭と云はず顔と云はず眞つ黒々。



今度こそ怒るだらうと故參の職工達は笑ひ乍ら待つてゐた。が少年矢張りチッと押默つたまゝせつせと仕事に側目もふらなかつた。職工達は案に相違の顔附でいつか笑ひ聲も止んだ。

その時になつて始めて少年は洗面所へ行き顔や頭を丁寧に洗ひ元の通り又押默つて仕事をつゞけた。

日が經つに連れて少年は仕事の方でも知識の方でもおのづと頭角を現はし、只の少年でないことが次第に分り出した。

この沈默の少年は後に世界の大新聞と云はれる紐育トリビユーンの社長となつた。その名はホレスグリリー。

一本のピン

――佛蘭西の大統領――

今から約百四十年以前の事である。秋の或日、佛國の首都パリの某銀行へ職を求めに來た一人の青年があつた。別に紹介狀も持たないし大した經歷もないので支配人は態よく斷つたが、それでも流石に悄氣返つた青年のたどたどしい後姿を哀れと見たか、何とはなしに窓から見送つてゐると、突然青年は身をかゞめて何か拾ひ上げて上衣の內かくしへ藏ひこんだ。

見れば一本のピンである。居合せた人々はみんな笑ひ出した。が、支配人は笑へなかつた。『感心な男だ。金を扱ふ人間にはあの心がけが肝腎だ』

その夜、支配人から青年の許へ『明日から出勤するやうに』と云ふ手紙が出された。

その青年は支配人の鑑識に違はず忠實に働く中に、出納掛に拔擢され、やがて幹部の地位をかち得たのみか、遂には當時第一流と云はれたその銀行の頭取となり、果は代議士、大統領と鰻上りに出世して行つた。



ナポレオン沒後のフランスの青史に永く名を留むるラフイットこそ、四十年前に、銀行の庭でピンを拾ひ上げたところの青年であつた。



諧謔小說

ガラマサどん

佐々木邦
細木原青起畫

社長自叙傳係

給仕に從つて社長室へ向つた私は胸が早鐘をついた。

『何の用だらう？』

と獨り言のやうに、それとなく給仕に訊いて見るほど不見識を極めた。

『存じません。』

と答へて、給仕は駈け出す拍子に、折から廊下の曲り角だつたので、誰かに突き當つた。それが畑君だつたことゝ、畑君が私に、

『やあ。』

と聲をかけたことゝ、私が何とも應じなかつたことを未だにハッキリ思ひ出す。尚ほ足許にゴム・バンドの新しいのが一つ落ちてゐたことも覺えてゐる。人間、九死一生の場合には迚も頭腦が明晰になるものだと聞いてゐたが、確かに然うだつた。

私は先づ秘書の松本さんのところへ出頭して、

『何か御用でございますか？』

と恐る〳〵伺ひを立てた。松本さんは頷いた丈けで、

『此方へ。』

と私を社長室へ案内した。絨毯と窓掛の色彩が強く目を射つて、素晴らしく立派な部屋だつた。

『やあ。』

と社長が書机から中央の卓子へ進むだ。

『…………』

『お掛けなさい。』

『はあ。』

と私は二度目のお辭儀をして腰を下したが、宣傳部の椅子とは勝手が違ふ。身體が深くめり込むだのに、少からず慌てた。

『熊野君はいつ入つたんでしたかな？』

『一昨年の春からお世話になつてゐます。』

『ナカ〱御勉強のやうですね。』
『何う致しまして。』
『え〻と、御足勞を願つたのは他のことでもないが……』
と社長は言ひかけて、
『松本君。』
と呼んだ。
『はあ。』
と松本さんは直ぐに秘書室から現れた。
『あの雜誌を取つてくれ給へ。』
と社長が命じた。松本さんは書机の上から取つて來て渡した。私はそれを「新大衆」の最近號と認めた刹那、もう運命が定つたやうに思つた。私の書いた探偵物が載つてゐる。
『他のことでもないが……松本君、一寸。』
『はあ。』
『君もこ〻にゐてくれ給へ。』
『はあ。』
『熊野君、他のことでもないが、君は小說を書くね？』
『はあ。その雜誌の記者と知合で、賴まれたものですから、つい。』
と私は告白と辯解を一緒にやつた。
『中島君から聞いて、讀むで見た。』
『…………』



『探偵小說は黑岩淚香以來久しく讀まなかつたが、ナカ〱面白かつた。』
『…………』
『しかし君は何故本名で書くんだね？』
『さあ。』
『雅號はないのかね？　雅號は。』
『ありません。』
『斯ういふものを書くなら、雅號をつけないといけない。尾崎紅葉、幸田露伴、皆あるぢやないか？』
『はあ。』
『やるなら本式にやる方が宜いよ。』
『もう致しません。本務の妨げになるやうに誤解されると困ります。』
『何あに、構はないさ。しかし熊野權次郎ぢやいけないよ。會社員剝き出しで、些つとも文章家らしくない。』

『匿名にすると宜かつたんですが、以來もう一切愼みます。』

と私は何うやらお叱り丈けで事濟みになりさうにも思へて、一々下から出た。

『社長。』

と秘書の松本さんが存在を示した。

『何だね？』

『この頃は雅號なんてものは時代後れで、流行らないんです。』

『そんなことがあるものか。』

『いや、その證據に、新しい小說家は皆本名ですよ。』

『はてね。』

『それで熊野君も本名をお使ひになつたんでせう。』

『熊野君、然うかね？』

『はあ。』

『それぢや雅號よりも本名が流行る？』

『はあ。大體然うした傾向です。』

『ふうむ。妙なことがあるものだね。何うも合點が行かない。』

と社長は考へ込むだ。



『兎に角、私はこの會社が本務ですから、以來書くことはもう差控へます。』

と言つて、私は頭を下げた。

『いや、それには及ばない。』

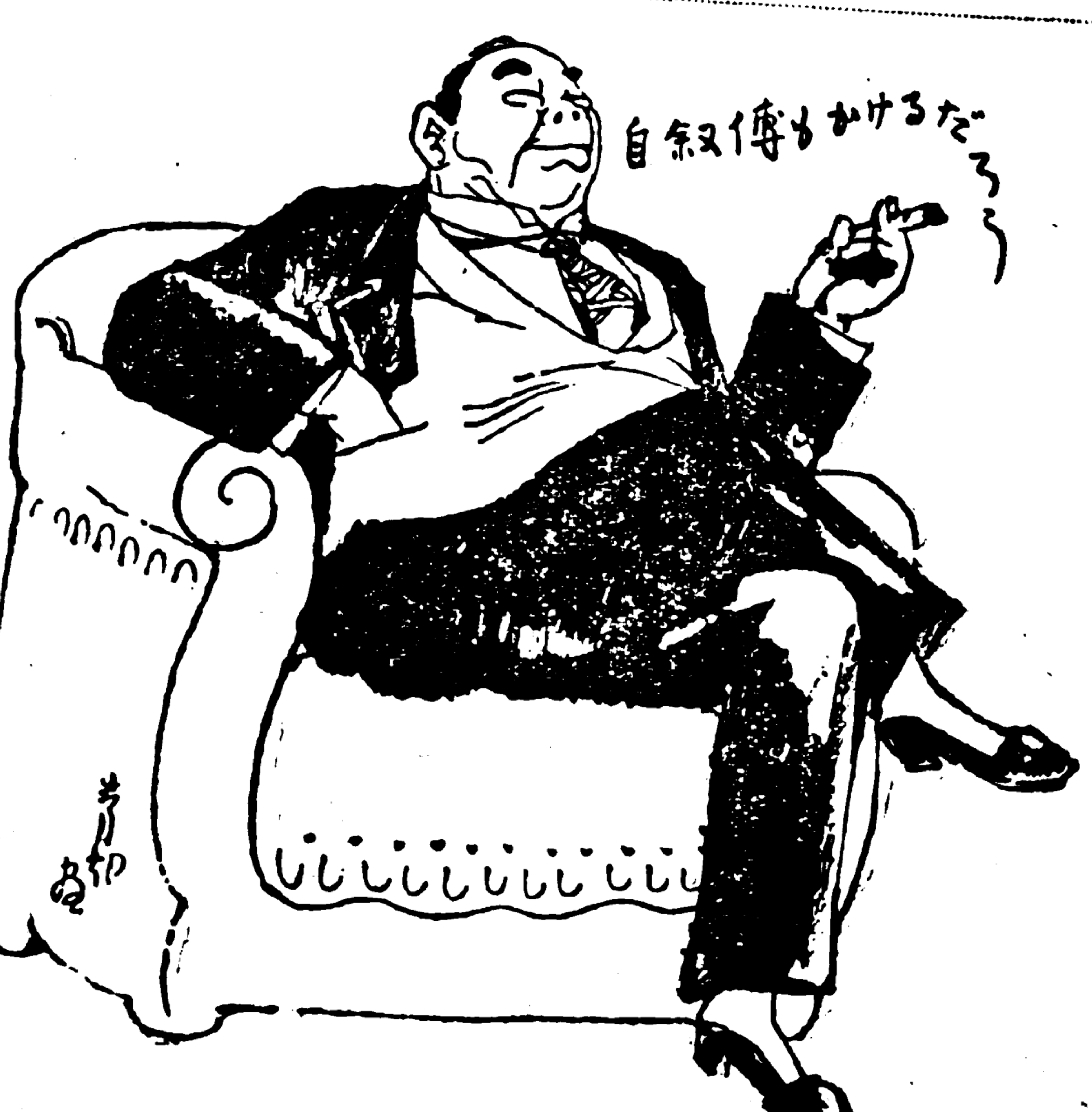
『……………』

『結構ですよ。實は熊野君。』

『はあ。』

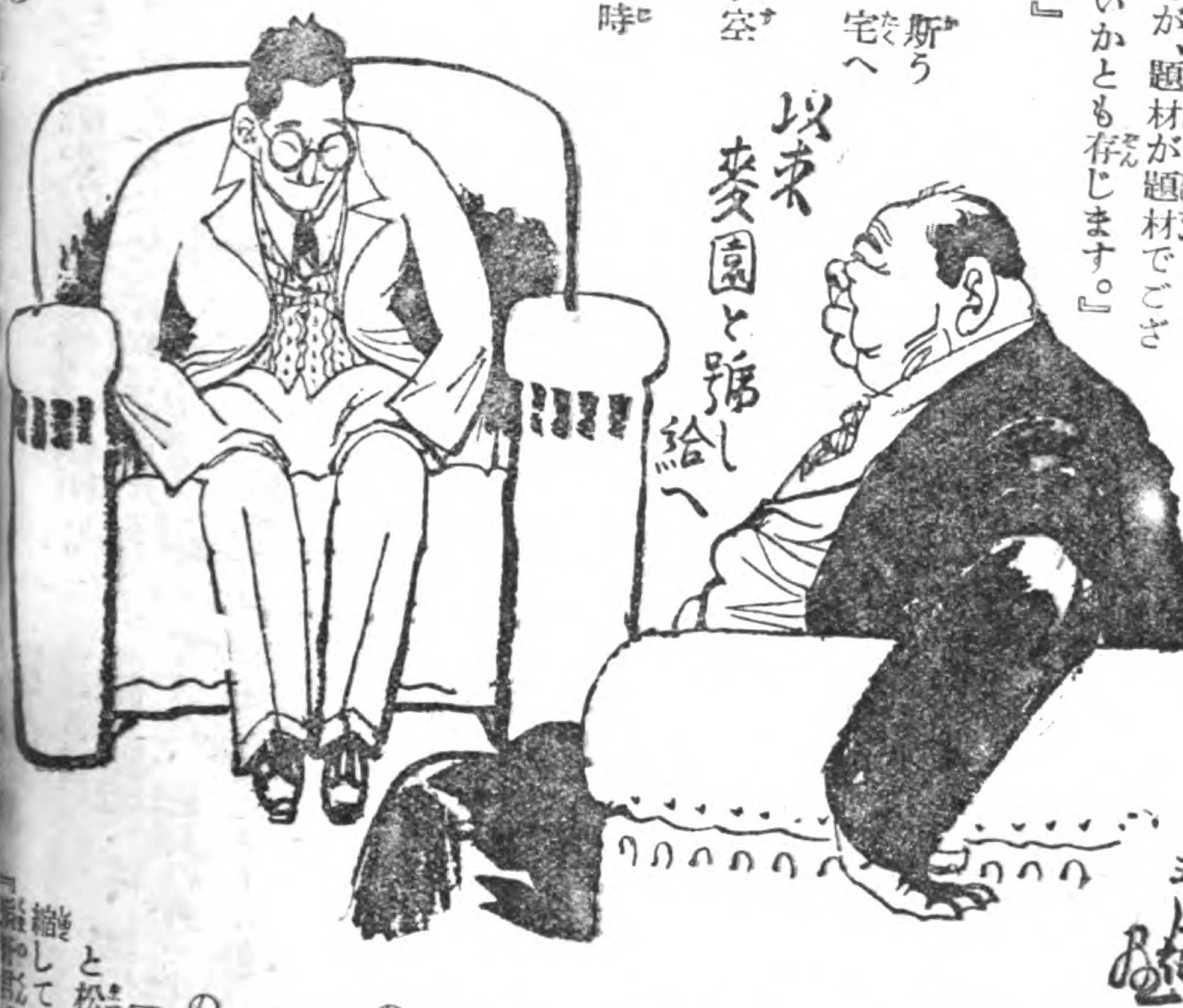
『我輩も考へて見れば、もう取る年で、先が短い。今の中に自叙傳を書いて貰ひたいと思つて、この間から然るべき文章家を探してゐた。しかし會社外のものに賴むのも具合が惡いから先頃中島君が義太夫を聽きに來た時、相談して見たら、君が、ナカ〱達者だといふことだつた。』

『はゝあ。』
『それから君の書いたものを二三種讀むで見たが、皆面白い。何うだね？ 探偵小説がいけるくらゐなら、自叙傳もいけるだらう？』
『さあ。』
『似たり寄つたりのものだ。』
と社長は至つて大ざつぱに考へてゐる。
『はあ。』
『何うだね？ 君、一つ引受けてくれるか？』
『はあ、私の力で出來ることなら、犬馬の勞を辭しません。』
と私は首が飛ぶのかと思つて心配してゐた矢先だから、殊更意氣に感じて、直ぐにお受けをした。
『それは有難い。』
『波瀾重疊の御生涯と承はつて居りますから、餘程浩瀚なものになりませうな？』
『上中下の三冊に纒めて貰ひたい。』
『はゝあ。』
『明治大正昭和に亙つて、こんな桁外れの男が眞の少しばかり國家に盡したといふことを聊か後世へ傳へたいと思つてな。』
『はあ。』
『二三年かゝつて、ゆつくりやつて貰ひたい。粗製濫造ぢや困る。』
『心得ました。』



『偉人傳といふと語弊があるが、大體その意氣込で宜しい。』
『はあ。』
『罷り間違へば、現代の青年を多少裨益しないとも限らない。』
『いや、社長の御一生は後進の模範でございます。』
『そんなこともなからうが、讀み方によつては、千載の後懦夫

を喚起せしめるかも知れない。』
『はあ。』
『君の筆なら必ず相應のものが出來るよ。』
『さあ。自信はありませんが、題材が題材でございますから、或は書き好いかとも存じます。』
『早速心掛けてくれ給へ。』
『はあ。』
『種々と註文があるから、斯うつと、今晩、何うだね？ 宅へ來てくれまいか？』
『伺ひます。何時頃がお手空きでございませうか？』
『さあ。七時過、いや、八時頃、御足勞を願はうか？』
『承知致しました。』
『それでは。』
『失禮申上げました。』
『御苦勞でした。』
と社長は頷いたが、
『熊野君、一寸。』
と思ひ直した。
『はあ。』
『君に雅號のないのは我輩の



自叙傳を書く上に何うも面白くない。熊野權次郎著では如何にも社員に頼むだやうで、具合が惡い。』
『自叙傳と仰有るからは、無論社長御自身の御著述でございます。』
『いや、人に書かせたものを自分の名で發表する次第には行かない。』
『しかし自叙傳でございます。』
『それにしてもさ。』
『ハツハヽ。』
と松本さんが矛盾を認めて笑つた。
『こら、何だ？』
と社長はむづかしい顏をした。
『はあ。』
『自叙傳を人に頼むのが可笑しいのか？』
『いや、決して然うではございません。』
『我輩は部下に本を書かせて自分のもののやうな顏をする社長や頭取と違ふ。』
『はあ。』
と松本さんは可哀さうに首を垂れて只管恐縮してゐた。
『雅號の。』

『はあ。』
『雅號のないのは、我輩、どうしても感心出來ない。』
『はあ。』
『松本君、君は何う思ふ？』
と社長は不機嫌になつてゐた。
『それは無論號のある方が本式でございませう。』
『ございませうではハッキリしない。』
『ございます。』
『熊野君、今も言つた通り、熊野權次郎では文章家らしくない、素人に書いて貰つたと思はれると、折角の自敍傳に權威がつかないから、君、一つ雅號をつけ給へ。』
『承知致しました。』
『我輩が考へてやらうか？』
『何うぞ願ひます。』
『バクエンは何うだい？』
『はあ？』
『バクエン。』
『何う書きますか？』
『麥園。麥の園さ。麥酒會社に勤めてゐるから。』
『結構でございます。』
『それぢや以來麥園と號し給へ。熊野麥園。如何にも文章家らしい。』
『有難うございました。』

と私は謹むで拜受した。不可抗力になるのだが、相手が社長だから仕方がない。松本君は私を廊下まで送つて來て、
『御苦勞でしたね。』
と犒つた。
『種々とお世話になりました。』
と私はお禮を言つて、額を撫でたら、汗をかいてゐた。
『大役を承はりましたな。』
『はあ。』
『大將、あの通りですから、これから先が思ひやられますよ。』
『私も何うして宜いのか分りません。』
『心得を話して上げませう。その中宅へいらつしやい。』
『是非伺はせて戴きます。』
『要するに、何と言はれても、逆らはなければ宜いんです。』
『はあ。』
『元來豪傑氣取のところへ、勳章を貰つてから誇大妄想が手傳つてゐます。西郷どんとガラマサどんと何方だらうなんて言ひますよ。』
『綽名を御存知ですか？』
『そこです。私はつい「それはガラマサどんです」と口走つてしまひました。「こら、ガラマサとは何だ？」と笑ひながらでしたが、早速逆捻ぢを食はせました。』
『危いですな。』

『うつかり出來ません。』

『氣をつけます。』

『萬事うまく調子を合せることです。しかし精々日露戰爭時代の頭ですから、然う恐れることもありませんよ。』

『はあ。』

『簡單です。今の麥酒がその一例でせう。』

『あれには驚きました。』

『御自分の言條は必ず通します。』

『何うしてあんなに御機嫌が惡くなつたんでせうか？』

『あれは私が口を出したり笑つたりしたからです。』

『はゝあ。』

『お山の大將ですからね。』

『飛んだ御迷惑をかけました。』

『何あに。しかし好い人ですよ。一旦目をかけたからには一生捨てません。我儘な代りに人情味たつぷりです。大將が直接お頼みするなんてことは滅多にありません。これを機會に精勵を見せるんですな。それぢやその中いらつしやい。』

と松本さんは秘書を勤めてゐる丈けに如才ない。昨日までは通り一偏の交渉で、會つても知らん顏をしてゐたが、今日は私の肩を叩いてくれた。平社員も社長の息がかゝると違ふ。



宣傳部の机へ戻つたら、仲君が、

『何處へ行つてゐたんだい？』

と訊いた。

『社長室さ。』

『え？』

『ハツハヽヽ。』

と私はもう得意になつてゐた。

『何の用で？』

『仕事を頼まれた。』

『君がかい？』

『然う見括つたものぢやないよ。』

『おい、本當かい？』

『嘘をつくものか。』

『社長室へ呼ばれたこと丈けは確かだね。先刻廊下で行き會つた時、顏色土の如くだつたもの。』

『あの時はテッキリ首だと思つたが、世の中は案外なものさ。』

『何うしたんだい？』

『話して宜いんだか？　悪いんだか？』

『含むで置くよ。』

『實は社長の自叙傳を頼まれた。』

『ふうむ。』

『何うしたものだらう？　君の勘辨を借りたい。』

『しかしもうお受けをして來たんだらう？』

『うむ。』

『それぢや勘辨も何もないぢやないか？』

『一寸お世辭を使つたのさ。』

『こん畜生！』

『ハツハヽヽ。』

『しかし有望だよ。』

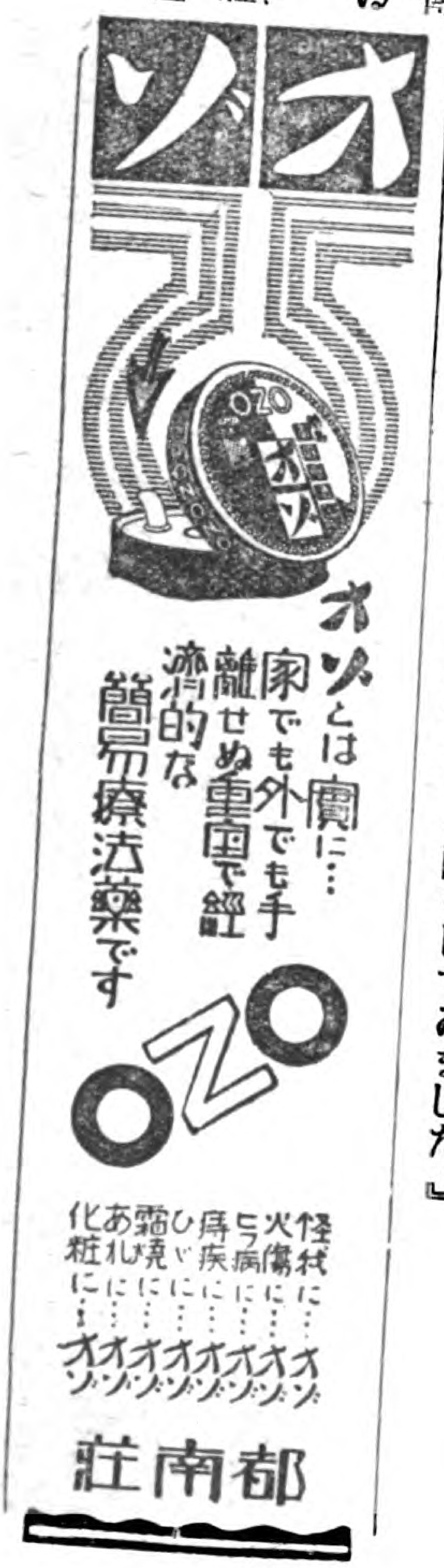
『悪い兆候ぢやなからう。』

『ガラマサどんは一旦認めた人間は意地にも引き立てる。君はこれから芽を吹くよ。』と畑君も私の前途を祝してくれた。

その日の退出時刻に、庶務課長の中島さんから呼び出しが來た。今度は安心して出頭すると、辭令だつた。社長秘書兼務を命ずといふのが一枚、昇給が一枚。自叙傳完成後編纂料が貰へるのだらうと思つてゐたら、覿面なのに驚いた。

『宣傳部の仕事は今まで通りにやつて、社長の都合の好い時丈け秘書を勤めて戴く。』

『はあ。』



『秘書兼務といつても、松本君がなさるんだから、君の式に過ぎない。社長から呼び出しのあつた時丈け詰めてゐれば宜しい。まさか社長自叙傳係とも書けないから、秘書兼務としたので、松本君とは全然仕事の性質が違ふ。』

と中島さんはその邊に誤解のないやうに説明した。

『承知致しました。』

『社長もナカ／＼考へてゐる。』

『何故でせうか？』

『自叙傳を會社の俸給で書かせる。』

『しかし私は餘り公私の別を立てゝ戴かない方が結構です。』

『何うして？』

『會社の俸給なら永久的です。お役目が濟むだからつて、まさか引き下げることはございますまい。』

『成程。君も考へてゐるね。』

『實は、中島さん。』

『何だね？』

『私はこの間から大心配をしてゐました。』

『この問題でだらう？』
『はあ。小説を書くのが祟つたのかと思ひまして……』
『ハツハヽヽ。』
『或は因果を含められるのかと略覺悟を極めてゐましたところ、全く案外でした。』
『實はこの間は序をもつて一寸驚ろかした氣味もある。』
『お人が惡いですな。』
『ハツハヽヽヽ。』
『しかし有難うございました。』
と私は滿足だつた。公私混合でも、俸給の上るに苦情はない。會社の金なんてものは何うせ誰かが使つてしまふ。
　折しもあれ、室内のものが一齊に立ち上つて姿勢を正した。見ると社長がノツソリ入つて來た。私は特別丁寧に頭を下げた。
『熊野君。』と社長が私を呼んだ。
『はあ。』
『時間の都合がついたから、これから直ぐに家へ歸る。君も一緒に來ないか。』



『はあ。』
『もう仕事は濟むだんだらう？』
『はあ。直ぐにお供致します。』
と私は大得意だつた。室中の視線が私に集注した。
『それぢや出掛けよう。』
『一寸外套を着て參ります。』
『玄關で待つてゐる。』
と社長は先に立つた。
　私は社長と同乘で會社を出た。附近の交叉點で一寸の間止まつてゐる中に、電車を待つてゐる社員達が社長を見かけて脫帽した。私が會釋したら、私にもお辭儀をした。虎の威光は借りるまでもなく、側に坐つてゐると自然に身につく。
『社長。』
『何だね？』
『今日は好いお天氣でございますな。』
『うむ。』
『昨日は一日曇りましたけれど。』

『はあ。一昨日は一日時雨れました。』

『然うだつたかね。』

『冬初めのお天氣は何うも長續きが致しません。』

と私は話してゐるところを見て貰ひたさに、大に努力したのだつた。我ながら淺ましいと思つたが、仕方がない。會社員には會社員の本能がある。

自動車の中は略對等だつたが、新邸に着くと大將と一兵卒の關係に戻つた。私は應接間へ通されたきり、二時間近く待たされた。尤も女中がお茶を代へに來て、

『唯今御入浴中でございます。』と報告した。次に、

『唯今電氣按摩をかけていらつしやいます。』とあつた。

『唯今血壓を計つていらつしやいますから、もう直ぐでございます。』と五杯目のお茶が出てから間もなく、

『何うぞ此方へ。』といふことで、食堂へ案内された。社長は和服に着替へて、夕刊を讀むでゐた。

『やあ。』

『お邪魔を申上げます。』

『何あに、一向構はんよ。』

と好い氣なものだ。御大將として長年修業を積むでゐるから、人を待たせることが些つとも苦にならない。

『さあ。何もないけれど。』

『恐れ入ります。』

と私は相對して大きな食卓についた。廣い西洋間でガランとしてゐる。

『男鰥だから、生憎と御接待が出來ない。』

と社長が沈むだ調子で言つた。去年奧さんを失つて、もう後を貰はない。これには、

『貰ひたくても、あんな爺さんのところへ來るものはあるまい。』と貶すものもあれば、

『いや、社長の成功は半ば奧さんの内助による。それを忘れないから、病中も實に大切にしたさうだ。何處までも義理を立て通すところが矢つ張りガラマサどんのガラマサどんたる所以さ。』

と褒めるものもある。實業界の巨頭にも拘らず、若い時から品行方正の人だつた。近頃、一世の師表をもつて任じて自叙傳を思ひ立つたのも、その邊の確信から來てゐるのかも知れない。存在を認められたので急にお太鼓を叩くやうに思はれては困るが、私も内心夙に社長の人格に興味を持つて、陰ながらの贔屓だつた。無論癖はある。しかし人間味たつぷりの人だ。社長が、

『男鰥だから……』と淋しさうに言つた時、私は自叙傳記者といふ矛盾した職分を眞劍でやる決心がついた。人間て奴は妙なところで感じる。

私達は食事中、早速その自叙傳の打ち合せを始めた。

『熊野君、急に君を煩すことになつたが、實は一朝一夕の思ひつきぢやない。この一二年、手當り次第に傳記書類を讀むで見た。しかし何うも氣に入らん。初めから教訓の積りで書いてゐ

るから、肩が凝つてしまふ。』

と社長は葡萄酒を飲みながら語り出した。

『はゝあ。』

『例へば、孔子さまは三十にして立つたから、お前達凡人も、所謂而立で、三十にして立たなければいけないといふやうな註文をしてゐる。些つと無理ぢやなからうか？』

『はあ。』

『我輩はあゝいふ教訓の押賣をしたくない。第一、讀む人間が可哀さうだ。』

『それでは教訓は全然拔きで參りますか？』

『いや、違ふ。讀むで教訓にならなければいけない。』

『御道理でございます。』

『一つ新機軸を出して貰ひたいな。』

『精々努めます。』

『小説を書く君に目をつけたのも、その邊の期待から來てゐる。』

『生ひ立ちから面白く筆を起しませう。』

『いや、生ひ立ちなぞは何うでも宜しい。』



『はあ。』

『例へば我輩が元治元年に生れたといふやうなことは問題でない。』

『はあ。』

『それよりも我輩の精神を書いて貰ひたい。』

『無論それが眼目でございます。』

と私も骨が折れる。

『例へばシエキスピールの生れた年は學者間に意見が一致してゐない。各自區々別々のことを言つてゐる。』

『はゝあ。』

『西洋紀元の基準になるキリストにしても學者の研究によると、誕生日が二年間違つてゐるさうだ。』

と社長は耳學問で案外のことを聞き込むでゐる。

『はゝあ。』

『豪い奴になると、生年月日なんか問題でない。』

『はあ。』

『人間も履歴書が時々要るやうぢや駄目だ

『恐れ入りました。』
と私は覺えず頭を掻いた。
『ハツハヽヽ。』
『耳が痛いです。』
『年代に疑問があつても、シエキスピーヤの精神キリストの精神は分つてゐる。それを書いたものがシエキスピーヤ傳キリスト傳ぢやあるまいか？』
『御道理でございます。』
『君は我輩の經歷を書かうと思つちやいけない。』
『はあ。』
『日常我輩に接觸してゐて、見聞したところを書けば宜しい。』
と社長は漸く要領に達した。
『すると自叙傳よりは寧ろ實行錄でございますな？』
『いや、生きた實行を材料にして自叙傳を書くのさ。』
『成程。』
『例へば、今日は社長がどんなことを言つたとか、あんなことをしたとか、と覺えて置いて、成るべくそのまゝに書いて貰ひたいのだが、下手をやると、速記錄みたいなものになる。』
『はあ。』
『速記錄なら速記者を賴む方が早い。しかしそこを巧く案梅して、ガラマサどんの精神を如實に現すのが君の腕さ。』
『成……』
とまで言つて、私は後を呑み込んだ。危い。
『社長。』
『何だね？』
『ガラマサどんてのは何のことでございますか？』
『君は知らないのか？』
『はあ、一向。』
と私は松本さんの覆轍に鑑みたのだつた。
『我輩のことさ。』



『はゝあ。』

『君は未だ日が淺いから知らないのだらうが、我輩の綽名ださうだ。』

『はゝあ。』

『社員の中には存外不屆ものがゐる。しかしそれも我輩の精神が部下に徹底してゐない證據だと思ふと、慚愧に堪へない。熊野君、君も責任が重いぜ。』

と社長は豪傑氣取にも拘らず、矢張こんなことを氣にするのらしい。

『大體要領が分りましたが、自叙傳として筆を起す關係上、一應社長の御經歷を伺つて置きませんと、何うも都合が惡いやうに存じます。』

『それは無論子供の頃からの艱難辛苦を詳しく話す。』

『何うぞ願ひます。』

『追々さ。今ぢやない。』

『はあ。社長の御一生は奮鬪の御一生でございますから、自叙傳から絶大の感激を受けて生活を立て直すものが必ず出て參りませう。』

『さあ。無論然うあつて欲しいんだが。』

『私も全力を盡します。』



『讀みさへすれば、多少の教訓はある積りだ。』

『いや、讀者以外にも裨益するものがございます。』

『誰だね？　それは。』

『直接編纂の任に當る私はいの一番でございます。お蔭を持ちまして、好い精神修養が出來ませう。』

と私はこのところ取入り專門だつた。

社長は上機嫌で話し込むだ。葉卷の灰をコーヒの中に落しながら、不圖思ひ出したやうに、

『熊野君、これが我輩の癖だ。長い間の惡い癖さ。家内が始終やかましく言つたが、未だに改まらない。』

と溜息をついた。

『召上らないで、灰皿に御利用のやうでございますが。』

『然うさ。灰皿に落せば宜いのに、コーヒの中へ落す。チュッと音がするだらう？　これが何とも言へない好い心持だ。』

『はゝあ。』

『家内は口やかましい女だつたけれど、亡くなつて見ると淋しいよ。』

『御同情申上げます。』

『いや、つい、詰まらない愚痴になつた。ハツハヽヽヽ。』

『何う致しまして。』

『熊野君、我輩はコーヒについてはもつと勇猛な思ひ出がある。』

『早速承はりませう。』

『我輩が熊本をおつ走つて東京へ出て來たのは明治十七年、二十一の時だつた。これは覺えて置いてくれ給へ。』

『はあ。』

『或日同鄕の先輩のところへ賴つて行つたら、お茶の代りに妙なものを出した。甘くて苦くて頗るうまい。「何ですか？」と訊いて見たら、「コーヒ湯ぢや」と言ふ。その頃のコーヒはこののと違つて、角砂糖の中へ仕込むであつた。砂糖ごと熱湯で解かして飮む。』

『私も子供の時飮むだことがあります。』

『それは感心だ。』

『しかし餘りうまかつたとも覺えてゐません。』

と私は味まで思ひ出した。

『ところが我輩は田舍漢だつたから、東京の紳士は實に豪いものを飮むでゐると思つて、悉皆敬服してしまつた。我輩も一つ何日コーヒ湯の飮める身分になつてやらうと發憤して勇猛心を起したのさ。』

『はゝあ。』

『しかしコーヒ湯はナカ〳〵飮めん。これは迚も駄目かとさへ思つた。』

と社長は又コーヒの中へ葉卷の灰を落した。

（つゞく）

佐々木氏の靈筆冴えて次號はいよ〳〵本舞臺へ!!


左官の子モーションかけて叱られる
（夢平）
晩酌へ劍劇の子は大上段
（葉村）
エプロンへ霰を受ける幼稚園
（玄々子）
屁をひつて熱いと風呂を掻き廻し
（久治）
乘客も追ひぬかれると腹を立て
（里遊）
敵味方共に仰いだホームラン
（千鳳）

零落て女性の强さうなづかれ（痴佛）



追羽根にカメラ向ければアラと逃げ（好洋）



賣上げて歸る鍋燒唄になり（利喜馬）



棟上げの餅に打たれて嬉しがり（照波）



女の子泣かされた子について來る（秋泉）



若夫婦子のない內は猫を飼ひ（忠）



川柳漫畫

素文

繪になる川柳の投句を歡迎（宛名……キング懸賞部）



キング講座

痩せる法肥る法

醫學博士 大森憲太

福の神と女優

福の神の像を見るに、惠比須でも大黑でも布袋でも、皆まる〳〵と肥つてニコニコしてゐる。肥つてゐるのは、何となく陽氣で明るく愛嬌がある。肥つてゐる婦人に面と對つてお多福などといふと叱られるけれども、お多福の言葉には愛嬌者といふ意味が多分に含まれてゐる。この福の神やお多福の面が、古い商家などによく飾つてあるのも、何となくふさはしい感がせぬでもない。

一體、肥滿家と金滿家とは親類同志のやうで、今日でも重役級の人といへば、でつぷり肥つた赭ら顔の人を想像させる。また、あの人は近來大分肥つて來たが、お金も出來たらうなどといふ。概して、男は痩せた貧弱なのよりも肥つた堂堂たるものを希望するやうである。

これに反して、女は一般に痩せることを喜ぶ。何としても痩せたいと希望する人が多い。殊に若い婦人が肥滿するのを好まぬのは、世界萬國何處へ行つても同じことだとみえて、いろ〳〵と苦心をしてゐる。

日本でも、痩せるために酢を飲むといふことがある。西洋諸國では、婦人はすべて甘い物をたべると肥るといつて、甘味を忌む。コーヒーでも砂糖を入れないで、苦いのを我慢して飲んでゐる。

女、必らずしも福の神を喜ばないわけでもあるまいが、女は姿體の美をもつて己が生命とするからであらう。姿體の美を極度に尊重するものは、何といつても女優であらう。この頃ハリウッドの活動女優の一人の食量をしらべたのをみると、一日僅かに三五〇カロリイの食物で辛抱してゐることが書いてあつた。婦人

食事十訓

醫學博士 岡田道一

一、種々の食物を混食する事が必要。

二、白米より半搗米、半搗米より玄米の方滋養豐富と知るべし。

三、珍味の食に向ふとも腹八分にて止めよ。

でも一日二二〇〇カロリイは必要なのである。
　近頃、名古屋で女優志願の一女性が、脚線美を欲するために、コブラの脂肪を外科的にメスでとつて貰つたといふ話がある。

何故肥るか

　食事は日常のことで、これを何のために食つてゐるかなどと一々意識して食つてゐる人などはない。何のために食つてゐるか、勿論生きんがためであるが、これを醫學の立場から見ると、日々の營みはこれを一種の建築にたとへることが出來る。遺傳體質といふ土臺の上に、毎日毎日食物といふ材料で家を築き上げてゐるのである。日々の活動は、この家が使ひ古されて破損してゆくのと同じである。
　然らば何故肥るかといふと、その原因は極めて簡單である。一つは材料が多過ぎるのであり、一つは家の破損消耗が異常に少いためである。即ち必要以上に材料を取込む、言ひかへれば過食をすると、滋養分が過剩となり、これが脂肪の形となつて肥滿を來たすことになる。また一方、消費が少いといふことは、運動が不足であるといふことであつて、自動車に乘つて飛び廻る重役、帳場に坐り込んでゐる女將などに肥滿者が多い理由である。

四、よく嚙れたものは半ば消化と同然。
五、肉食の後には必ず果物を食ふべし。
六、茶、コーヒー、酒は成るべく控目に用ひよ。
七、食事はゆつくり食後は一休み。
八、食前には手、食後には歯を洗へ。
九、あまり熱きもの、あまり冷たきものを用ふべからず。
一〇、間食は成るべく避けよ。

　この理由から肥り過ぎる人がいかに養生すれば瘦せるかといふ問題は容易に解決がつくわけである。即ち脂肪肥滿の人は、食ひ過ぎを愼しむか乃至は減食を實行し、他方ではなるべく盛んに運動し、肥滿せる脂肪を消耗させる工夫をすればいゝのである。
　道理の上からは斯く簡單に言へるのであるが、さていよ〳〵實行となると、なかなか難かしい。近頃、肥滿の害が說かれて、糖尿病、腎臟病、高血壓病などでその治療を求めて來る人はあるが、その目的を達して歸る人は甚だ少い。
　第一、減食といふことが、決して容易でない。人間は旨い物が食べたいと同時に、適當の滿腹感を要求する。それゆゑ食物としては、うまくて、あまり滋養にならない、而も腹のふくれるやうなものが必要である。少く食べて、それで腹一杯に物を食べた感じを與へる。これは一體出來る相談であらうか。
　瓢簞から駒を出すほどの藝當であるが、しかしこれが案外簡單である。求めよ、さらば與へられん。道は近きにあるのである。

フレッチヤアの咀嚼法



アメリカの商人で、フレッチヤアといふ人があつた。若い頃、大いに食ひ大いに飲み大いに働いて、非常な裕福の身となり、四十歳頃には世間の例にたがはず大兵肥滿で、身長五尺五寸の體重二十三貫となつた。榮養がみなぎつてゐるわけであるから、力がついて活潑でなければならぬ筈だが、どうも勞れが出易く、力が脱けたやうで、一夜の睡眠によつても左程元氣が回復しない。仕事が第一面白くない。本來、人生の絶頂にあるべき年齡にありながら、最早費ひ果された老いぼれの老人になつたやうな感があつた。

或る時、保險の申込みをしたところが、謝絶せられて初めて驚いた。これはいかぬといふので、それから温泉だ何々療法だと、いろ／＼試みたが、とんと効果がない。そこで不圖思ひついたのは、グランドストウンが子供に教へて、一口の食物は必らず三十回咀むものだといつた話である。これに暗示を得て、自ら一種の咀嚼法を案出し、これを體驗してみた。

睡眠十訓

醫學博士　高野　六郎

一、睡眠は活動の源泉なり。
二、寢室は成るべく暗くせよ。
三、深い睡眠に長寢の要なし。
四、早寢早起は健康富裕賢明の基。

ところが四ケ月後には體重が六貫も減じて、目方が標準體重に近くなつたばかりでなく、力も增し大いに元氣も加はつた。何をしても成績がよくなつた。それでこの健康法を一生涯說いてまはつたのである。

この咀嚼法といふのは、一食を三十分かゝつて、食塊三十を二千五百回咀む、即ち一口の食物を八十回ばかり咀むわけである。咀んで咀んで咀みぬいて、唾液がドロ／＼になるやうにする。さうしてゐると、食物は半流動物となつて、自然にドロリと咽喉をすべつて食道にはいる。さうして食べる間は、他の事は何も考へないで、たゞ咀むことばかりに考をむける。口でも咀み、頭でも咀む。これがフレッチヤアの咀嚼法といつて、彼れ獨特の健康法である。

ところが、これをやると、不思議に食量が減る。敢へて食物をまづくする必要はなく、十分旨く味をつけたもので差支へないが、この法を行ふと、まづい半搗米でも黑パンでも味が出てうまくなる。これが瘦せる法の本當のコツである。

五、寝床の中では手足を伸して仰向けに。
六、寝具は絶えず日光消毒せよ。
七、眠る前には食物を取るべからず。
八、寝て居る間も良い空氣を吸へ。
九、寝ながらの讀書は最大禁物。
一〇、寝る時は必ず寝卷に着代へよ。

食物をえらべ

次に、痩せるためには、尚ほ食物の種類を選擇することが必要である。卽ちなるべく滋養分が少くて、しかも腹のはるものを擇ぶのである。滿腹を覺えるといふのは、病氣のための場合もあるが、普通食べる食物の性質と容積に關係する。

痩せる食物として適當なものは、まづ脂の少い肉、卵、それから主として植物性食品である。同じ肉でも、獸肉は魚肉より滿腹價が大であつて、獸肉を食つた時の方が魚肉を食つた時より、同じ目方で早く滿腹し且つ空腹を感ずることが遅い。鷄卵は獸肉よりやゝ劣るが、この肉と卵は普通の分量を取つてよろしい。そして肉は焼いたものゝ方が、煮たものよりも、同じ目方で早く腹がふくれる。植物性食品は容積が大きい割合に養分が少くてよい。但し、五穀、麵類、甘藷、ジヤガイモなどの澱粉質のものは、植物性食品の中でも消化がよくて吸収がよい上に養分が多いから、なるべく分量を減ずべきである。女の好きなもの、芝居、こんにやく、芋、南瓜といふが、芝居はとにかく、これらの食物はみな澱粉質で肥るものゆゑ、痩せたい人は節したがよい。

減食の際に、なるべく大量に取るべき食物として、野菜と果物をすゝめる。野菜では炭素の少い菜つ葉がよく、大根、青菜、蕪、キヤベツ、トマト、胡瓜、茄子、アスパラガスなどがよい。果物では梨、林檎、苺、蜜柑類、桃などである。容積を多くする意味で、白米よりも半搗米、白パンよりも黒パンがよい。またパンも甘藷も焼いたものゝ方が滿腹感が大きい。これと同じ目的で、養分がなくて砂糖氣の少い茶、コーヒー、スープなどもよろしい。茶腹も一時といふくらゐである。砂糖は澱粉と親類同志で、砂糖類、餅菓子などを食べ過ぎると肥る。これは西洋婦人が既に心得てゐる事實である。

同じ肥るといつても、筋肉發達のために體重がふえるのは結構なことである。とにかく痩せる法といふのは、肉質を減



らです。不必要な脂肪を減らすことであるから、減食をするにしても、筋肉の原料となる食物中の蛋白質、卽ち肉、魚、卵などの分量を減らす必要はなく、脂肪と澱粉を減らす工夫をすべきである。

運動及び瘦せる藥

尙、瘦せるためには、減食をする一方に、盛んに運動をする。運動を勵行すればするほど、瘦せる目的に副ふわけであるが、脂肪肥滿の人は一般に心臟が弱く、それでなくともだるくて運動が困難なものである。尤もだるいくらゐなら、强制しても運動を行ふべきであるが、但だ心臟の弱い人には運動は禁物である。心臟の弱い者が運動をすると、容易に動悸が高まり、息切れがし、汗をかき易く、足に腫みが生ずることもある。それゆゑ、心臟のよわいものは、右のやうな現象の起らぬ程度に運動をする外はない。

以上の如く、フレツチヤアの咀嚼法を行ふと共に、運動を盛んにし、また一方減食をして漸次瘦せる法を講ずるのであるが、減食するといつても、ハリウツドの女優のやうに半減以上は危險である。三割減ぐらゐで行けば大抵は瘦せるものである。これでもうまく行かないといふのは、單純な肥り方でなく、體質に基づくものであるから、これは瘦せる藥(甲狀腺劑)を服むのであるが、これには危險が伴ふから必らず醫者の監督がなくてはならぬ。

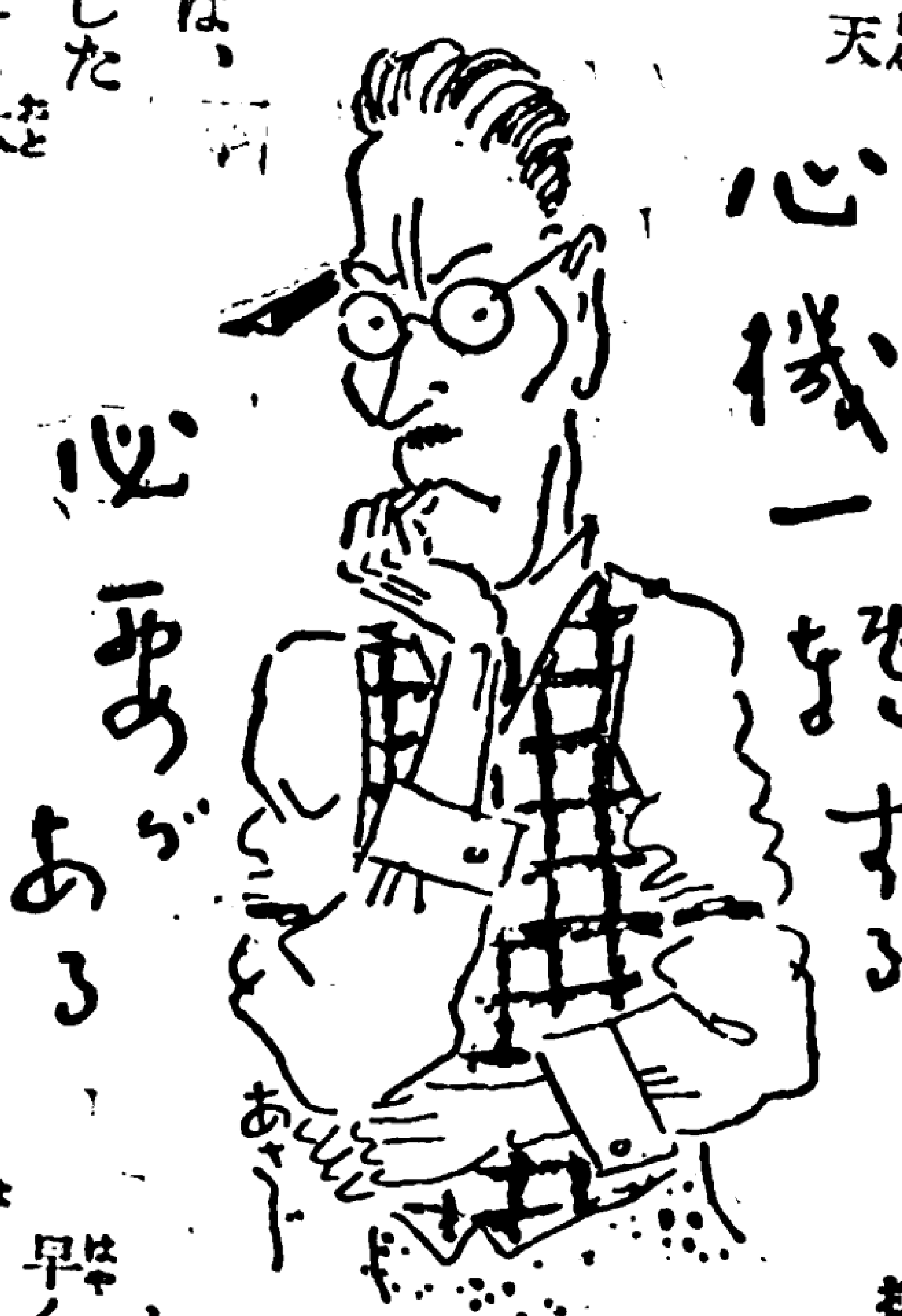


心頭を滅却せよ

世間には又瘦せて困るといふ人がある。瘦せる原因は、肥る原因と反對に、つまり榮養分の輸入が少いことと體內の消費が多過ぎることに歸する。體內の消費の多過ぎる例としては、病氣殊に熱病とか肺結核などであるが、他にも特に瘦せる病氣といふのがある。卽ち糖尿病とバセドウ氏病である。これは食つても食つても瘦せる。これらは病氣を治療すればいいわけであるし、そして多くは好都合に全快しうる。

それから又多忙で落ちつかない人とか、せつかちな人、或は神經衰弱の人なども瘦せる。これらはその原因を除けばいいわけだが、半分は天性によるので、これがなか〳〵難しい。これは心頭を滅却すれば火もまた涼しといつたわけで、心機を一轉する必要がある。この種の人はあまり志が遠大で、慾が大に過ぎ、しかも力之に及ばないので、焦燥とヂレンマとによつて起る。私の友人で、ある紡績會社の課長級まで昇進した人があつた。せつかちな口早やな人だが、事務上の材幹は優秀で、その成績も等輩を拔い

てゐた。これが肥りたがつてゐたが、肥らない。すると、卒然喀血をして肺病の宣告をうけた。大いに驚いて、あらゆる手段を講じたが、あせればあせる程悪い。丁度京都の支店長をしてゐて、西田天香さんを知つた。ところが、學生時代から痩せて蒼い顔をしてゐた男が、病氣で一層やつれてゐたのに、天香さんを知つてから一年か二年のうちに見違へるやうに血色はよくなり、曾て知らないほど肥つて來た。殊に目立つたのは、[illegible]せつかちないら〱した樣子が失せて、いかにも大人らしく落ちついて來たことである。かくて今日も或る會社の重役をしてゐる。肥るためには、まづこの友人の如き心境が極めて必要である。



增食と安靜の必要

さて肥るについての心の用意は出來たとして、第二の手段は即ち食を增して榮養の不足を補ふことと、體內の消費をなるたけ減ずることとである。

增食といつても、食ひ過ぎると消化不良を起す。そこで食物を擇んで滋養分を成るべく多く攝取することにせねばならぬ。一般に蛋白質——肉魚類は多量に取つても肥らぬ。肥るためには脂肪と澱粉を多量にとる。但し脂肪は早く腹がはるから、成るべく消化のいゝバタや卵黄、クリームなどを擇び、澱粉類では米、パン、麵類などの糟の少い消化し易いものがよい。それから嵩ばつて腹のはる野菜や果物を過食してはいけない。酒の少量は胃を刺戟して消化を助けるから頗る有効であるが、勿論過飲はいけない。水分を多量に取ることも、滿腹感を訴へるから避けねばならぬ。尚、調理に注意し、目新しい料理をすると共に食器を擇ぶ。食より器といふ位で、これらは食慾をすすめる上に必要である。

體內の消費を減ずるためには、安靜が必要である。食後一二時間は安靜にするがいゝ。中にも晝食を十分とつた後の安靜が是非必要である。併し安靜が過ぎると、食慾が減退し、神經過敏になる恐れがある。そこで病人などでは、まづ十分に安靜をし、そろ〱脂肪がたまつて體重が增して來たところで、少しづつ運動を始めるくらゐがよい。

運動十訓

文部省體育課長　山川建

一、運動は生命の動き活力の流れ
二、運動は體位を向上し精神を健全にす
三、運動は男女老若それぞれ適切に選べ
四、運動は健康の良友なり、生涯親しめ
五、運動は體力に應じて適度に行へ過勞は禁物
六、運動は毎日行へ、日光に浴し大氣に觸れて
七、運動に併せて榮養と睡眠を正しく取れ
八、運動の効果は不節制が破壞す
九、運動は興味を持つて行へ興味に溺れるな
十、競技は公正に行へ運動精神の發揮が肝要

それから夜は十分に睡眠をとり、晝間は適當に日光や外氣にふれて、食慾を増進させることが大切である。また温浴と水浴とは食慾を増進する。場合によつては、轉地などは食慾増進に大變効果のあることがある。暑中には山へ、寒中には海へ。しかしこれは一般には贅澤であるが、秋といふ季節は何人にも訪れるので、これが自然の轉地である。この秋の亢進する食慾を利用して肥ることが、最も賢い方法である。

以上は肥る法であるが、しかし注意すべきは脂肪肥滿と筋肉肥滿の相違である。筋肉發達が眞の健康で、これには結局よく食ひよく働くといふ事が根本である。

どつちが健康か

一體、肥つた人と瘦せた人と、どつちが健康か。一般に肥つた人が健康のやうに思はれてゐるが、多數の統計によると、反對に瘦せた人の方が長壽である。健康の標準を長壽にとつて、長生きをした人が健康であるとしてみると、瘦せた人の方が強いことになる。あまり肥つた人は、アメリカなどでは保險會社で受けつけない。死亡率が多いのである。

しかし三十歲以下の若い人には、可なり瘦せた方の死亡率が高い。これは結核年齡で、結核は瘦せた人が罹り、罹ればまた瘦せるからである。故に三十歲以下では、瘦せた人と肥つた人との死亡率が殆ど同率である。從つて四十歲以下の人は肥るやうにし、四十歲以上の人は瘦せるやうにするのが健康の法である。

一般に瘦せたとか肥つたとかいふけれども、一體それは何を標準にするかといふと、これは學者によつてその標準が違ふ。各相當の理由があつて違ふのだが、しかし大差は無い。

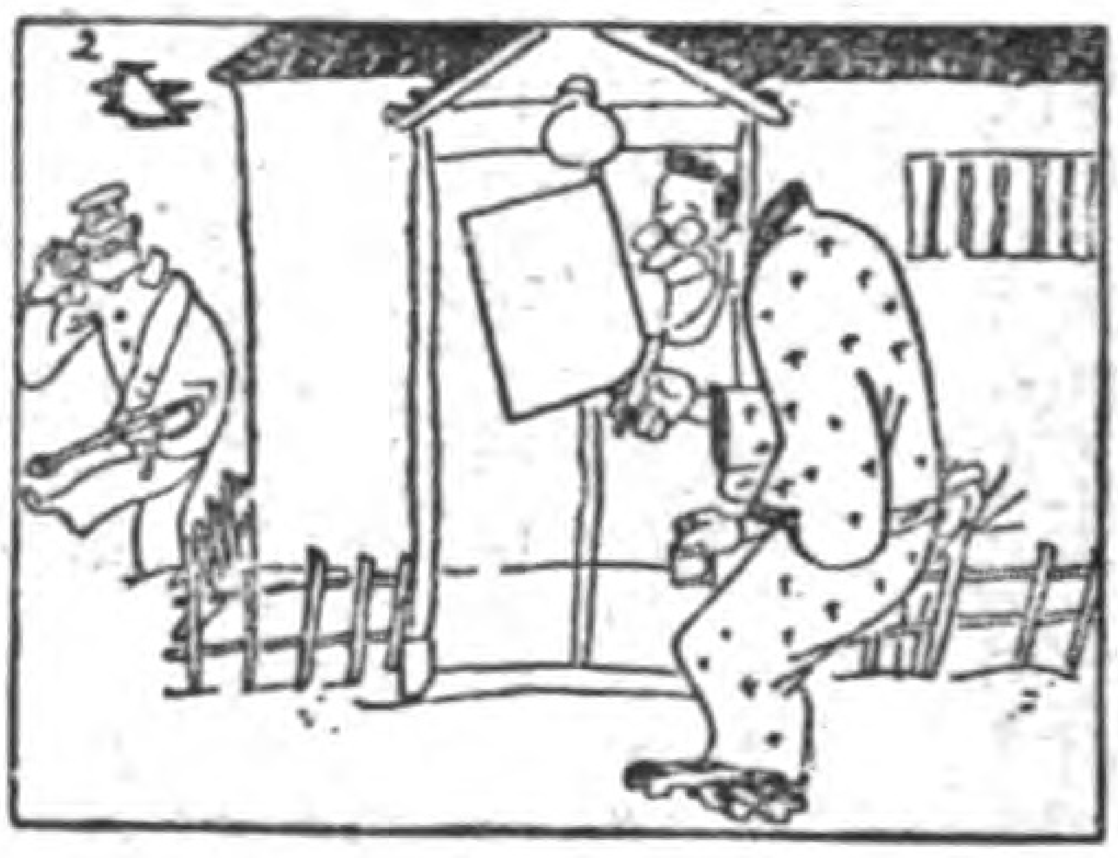
吾々は便宜上次の方法をとつてゐる。卽ち身體をメートルで計り、例へば一米五〇糎と出れば、その一米を捨てゝ、端數をその人の瓩數とし、この場合五〇瓩をもつて標準の體重とするのである。五尺五寸の人ならば、十三貫五百に相當することになる。これは大多數の統計によつたもので、どの年齡でも大體この見當の人が一番多い。從つて身長の高い人は、その體重も多いわけである。これを標準として、之より肥つた人は瘦せるやうにし又、之より瘦せた人は肥るやうに工夫すべきである。（終）

漫畫 在宅旅行

野口五郎



一、貧乏な郊外生活者夫婦『あなた、明日の晦日には又借金とりに責められることよ』『うむ……何とかしなくちやなるまいて……新聞紙でかまどを焚くやうじやねはははッ』



二、『名案々々かうしておけば、借金取りも鶯の聲、世間ていはよししめ／＼』夜警のお巡査さん、『郊外は物騷ですから戸締りを注意なすつて下さい』



三、米屋、酒屋、八百屋、魚屋、『おや／＼本日より向ふ一週間は旅行中につき左様御承知か？　借金を六月もためといて、旅行でもねえもんだよ』



四、泥棒、『こら在宅して旅行中とはけしからん、新聞紙を火鉢にくべて暖をとつて居るやうぢや大金もあるめえが、さあ有り金を出せッ』



五、夜半留守宅の筈の家の窓からもれる時ならぬ煙に行人、あわてふためき、『ウワーッ大變だ／＼、おーい、みんな來てくれ、あの家が火事だ火事だ』



六、火事所か泥棒の居催促――火事とまちがへて難なく御用『お蔭で今夜から枕を高くして眠れます借金もあなたの功勞で帳消しにしませう。在宅旅行なんてなか／＼馬鹿にはなりませんや』と胴あげ。

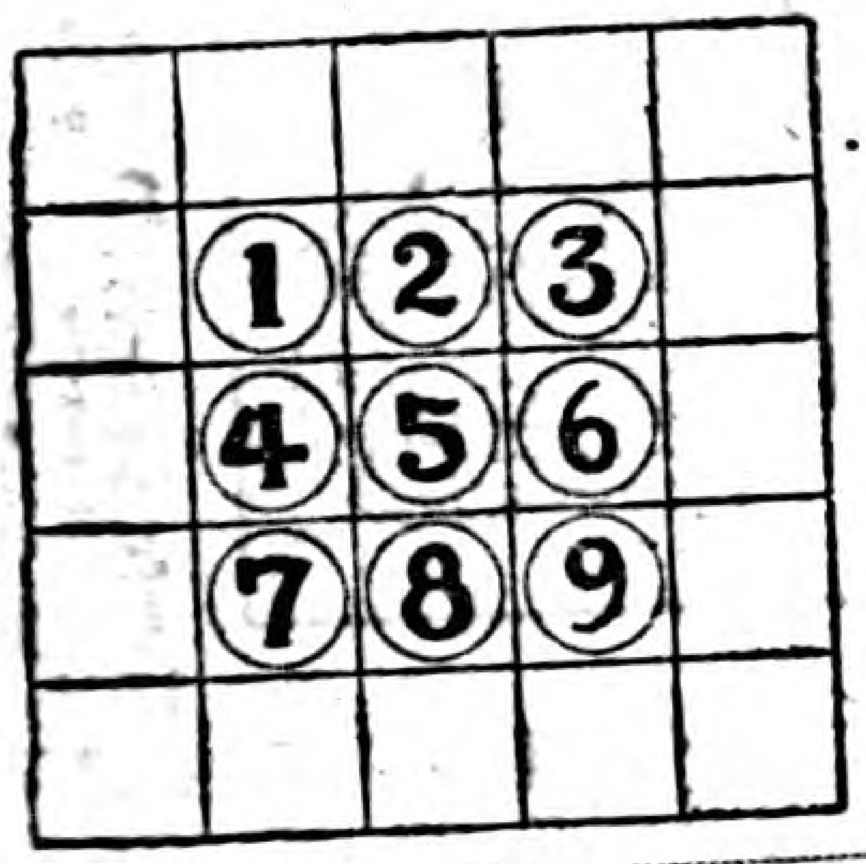
萬人熱狂

新案智慧くらべ

一、ジャンピング・ゼ・ジャンプス

これはなか〳〵六ケ敷いが、それだけに興味ある問題です。

先づ九個の丸をボール紙でつくり、これに1から9までの數字を書き入れます。そしてその丸を、圖に示すやうに1の丸は1へ、2の丸は2へ——といふ風に列べて置きます。



さて、問題は、御承知のチェッカーの様に飛んで、最後にたつた一つの丸、即ち5の丸を圖中5の位置へ殘して、他の丸は全部除去してしまはうといふのです。

但しこの場合、チェッカーとは異つて、各々の丸は垂直にも横にも又は斜にも、つまりあらゆる方向に飛ぶことが出來ます。例へばですね、5の丸は6の丸の上を一つ飛び越えられます。この時飛び越えられた6の丸は除いてしまふことになるのです。更にその5の丸は又斜に9の丸を飛び越えることが出來ますが、越えられた9の丸が除去されることは前の時と同様です。かくして各々の丸は各々の丸を飛び越えてその都度一つ宛の丸を除いて行き、最後に5の丸を圖中5の位置へ殘すといふステキに面白い難問なのです。最も少い回數でやられる方が智慧者です。さア皆でやつてごらんなさい。

二、頓智大學生の奇問

1、一問仕候。或地の某ホテルに投宿せる若夫婦あり、十三番室に入れり。或日外出して來りしに下女、「十三番さんのお歸り」と云ひしに、若夫婦大いに怒りて勘定もそこそこに出でたりと。彼等は何故怒りたるか。



2、明月かくれ、寺右にあらはれ、闇に音消えて、日出づ。——一體これは何のことだらう。

3、母と云へば一度も合はず、婆と云へば二度も合ふといふ不孝者があります。何でせうか。



三、楕圓形の花畑

ハテな？と庭師は、庭の片隅で、頭を掻きながら思案してゐました。つい今しがた、彼はそこの主人に楕圓形の花畑を作つてくれと頼まれました。處が生憎彼の手許には楕圓形を畫く何の道具もありません。唯三本の杭と長い一本の細繩とがあるばかりでした。そこへ

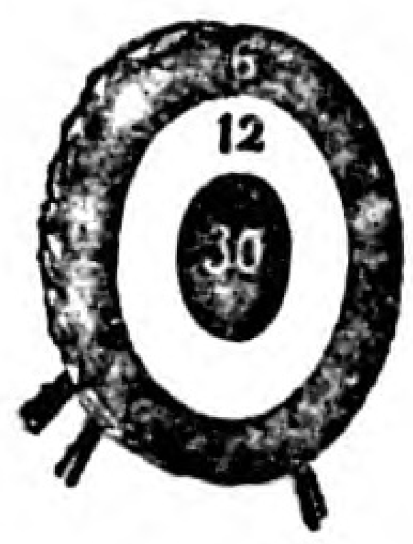
困つてゐる彼を見かねて、軈て内から出て來た主人は云ひました。『なアに、君、かうすればわけなく出來るだらう』早くも主人の手は杙の一本を取上げました。さて、主人はそれからどうしたでせうか。



四、弓の名人

此人は六本の矢を持つてゐます。的は内部から三十點十二點六點といふ割合になつてゐます。今此の人が矢一本について平均十七點づつの點數を得たとしたならば三十點に何本十二點に何本六點に何本當てたのでせう。此の答へは普通六分間位で出來る筈です。





五、三本のステッキ

お爺さんには可愛いお孫さんが三人ありました。彼等はお爺さんの知らぬ間に、日頃お爺さんの愛用してゐるステッキを名々が二本宛持つて、御隱居部屋に運びました。ところが、お爺さんがそこへ行つて見るとステッキの數は六本ではなく三本しかありませんでした。さてお孫さん達の運んだのが事實とすれば一體どうしたのでせうか。

六、不思議な三十四

圖の空欄へ、ある數字を一つ宛書入れると縦から數へても、横から數へても、そして斜から數へても合計が三十四になります。又、四隅の數字四つを數へても、三十四になり、圖を眞中から四分してその一區劃内の四つの數を加へても、その合計は矢張り三十四になります。

	12	6	
	1	15	

ある數字とは何々か。

七、焰の方向

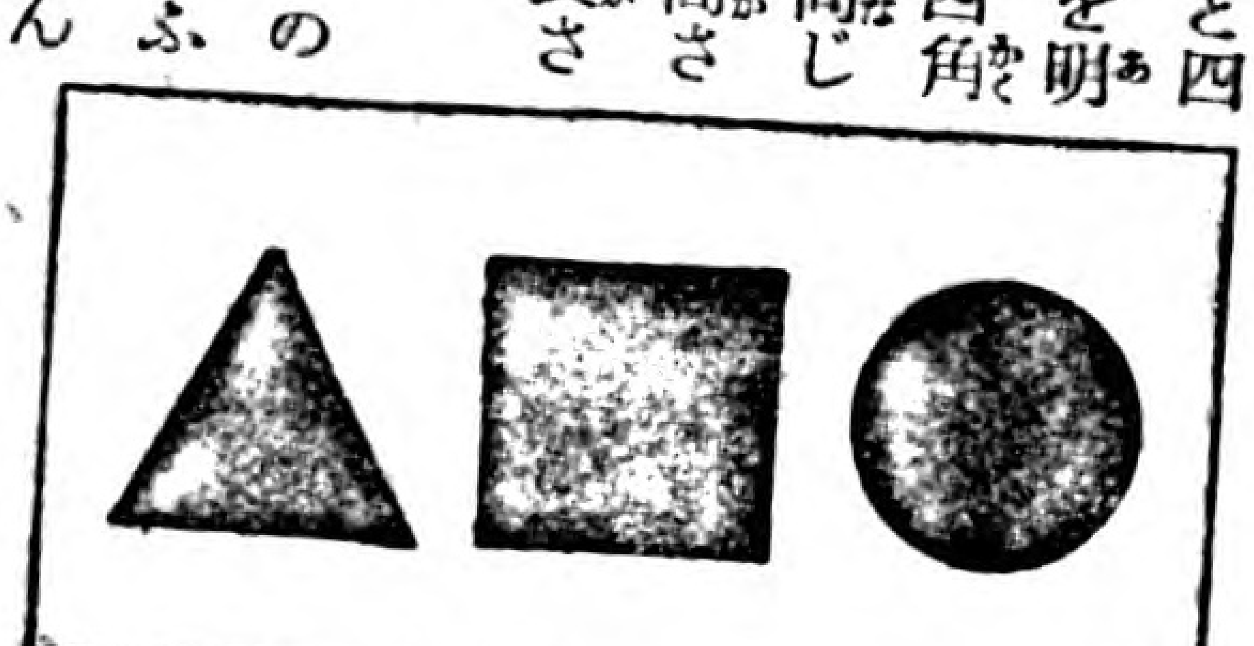
蠟燭に火を附けて手に持ち、その手前に小さな厚紙を立て（名刺があつたら名刺でもかまひません）口で強く吹いて御覧なさい。その時蠟燭の火は何方へ倒れますか。



八、三つの穴に合ふ栓

厚いボール紙へ圓と四角と三角の三つの穴を明けます。圓の直徑と四角の各邊とは、長さが同じです。三角の底邊と高さも亦圓の直徑と同じ長さです。

今一つの栓で此三つの穴のどれへでも間に合ふやうにするには栓をどんな形にすればよいでせうか。栓は出來るだけ小さい方がよろしい。



（解答は三三四頁にあり）



食道樂漫遊

大辻司郎

アメリカ式日本料理

鶏から卵が生れるのか、卵から鶏が生れるのか――此の問題の解決がつきますと、人間は食ふために生きてゐるのか、生きてゐる爲めに食ふのか――といふ事も自然に解決がつくのださうで、目下専門家の手に依つてそれ〳〵研究中だと聞いて居りますが、兎に角私の如きは正に判然と食ふ爲めに生きて居る方に起立する人間であります。從つてアメリカを歩いて居ります中も、始終パク〳〵食つてばかり居りました。勿論食通なぞといふ大それた味覺はありませんが、所變れば品變る。また名前も變つて居ります。何しろあれだけ澤山居るアメリカ人が、どんな型でどんな物を食つて居るか、私の興味的數覗みは湧然と活躍し始めたのであります。



さて日本とアメリカとの間にある太平洋――これがまた頗る退屈なものと見えまして此の上を船で漂つて居る人間で、欠伸とノビをしない者は一人もありません。私の如きは一日に幾度か大きな口をあき、何回か兩手で空氣を差し上げました。此の一人ダンスを續ける事約十四日、ドシンと船が着いたところは桑港です。やれ〳〵とモルモットのやうに地上へ第一番に飛び上つた私――その私の腹の大部分を占めて居る胃袋が先づ要求したのは何だと思ひます？　船の中の洋食でゲンナリした私の錯覺的味覺は、暖かい白いホク〳〵飯の上へ鼈甲のやうな澤庵を二切ばかり乘せて、焙じた番茶をその上へかけ、サラ〳〵サラとあゝ喰べたいなあ――でありました。

一人の一心は恐ろしいもの、この日本料理が食たい喰べたいで私は一生懸命、日本人町を探しました。すると桑港の極めて日當りの惡い一角に、いやありました〳〵日本人町。しかも大概が日本料理屋です。貧弱な八百屋、

ローズ物の雜貨店、その間に挾まつて羅馬字の店看板——曰く、ニッポンリョーリ、洋食和食、日本人向料理、ミカド、龍田川、妙義山なんてのもあります。その外一寸お手輕樣、家族同伴向、すき燒牛肉——。

私は早速定食といふのにありつきました。すると先づ出て來たのはサシミですが、トマトがツマについて居るンです。日本なら刻み大根だがトマトは振つてます。さうして山葵の代りに芥子がチョッピリ、然もサシミの陳列たるや七五三、三段の陣備へではなくつて、恰も表現派の背景のやうにハート型、又は四角、三角、切山椒のやうにヤケに細長いのもあります。その上それがアルミニユームの皿へ乘つて、ニューと出て來たのには流石の大膽不敵な私も少しくタジ〳〵でありました。それから雞卵と淺蜊の浮いて居るお味噌汁——然し戀しい懷かしいで無我夢中で喰べました。



食傷新道を散歩する

さてそれから二三日は食傷的散歩です。目下日本でも流行のチャプスイといふやつ。店看板に日本チャプスイ——元來チャプスイはアメリカン支那料理ですそこへ日本といふ字が乘つて居る。日米支三國提携まことに國際的であります。それからまた『當店特製マカロニライス』といふのがある。これは頗る奇拔なものです。例の伊太利の饂飩の上へ御飯が盛つてあつて、その上豚の肉の破片がパラパラと散文的に撒いてあるンです。それを昨日までシカゴで犬殺しをして居たといふやうな見るからに溫和しさうな親父が盛つて出すのを、そのオヤヂの眼の前で食ふンです。かなり勇ましい人間でないと一寸やれません。要するにアメリカの日本料理は戀し懷かしの一心で喰べないとまことに恰好がつきません。たとへば日本の字で『キャベツ巻』と書いてあるから、例のあの空氣枕みたいな、あれだナと思つて、『君、濟まない、キャベツ巻を賴むよ』と注文すると、やがて出て來たキャベツ巻は、白キャベツの中に澤庵が包んであるお香物です。あら！

『肉サラダ』と書いてある。ではこれを——とそいつを賴むと、現はれたのは肉は肉でも魚の肉で、そこへ胡瓜が刻み込んである。一口やると酢がかゝつて居る。なあンだ、こりや『キューリ』の『サンパイズ』だ！

次は桑港の支那料理ですが、日本人町と違つて支那人町は實に素晴しく立派なものです。完全に地の利を得て建物は堂々と雲に聳え、非常に高い坂の頂邊に大きく盛り上つて居るのです。さて其處で喰べる支那料理はお約束の燕の巣やら鱶の鰭。その外むづかしい新聞社の活字箱みたいな字が澤山並んだ献立表を見ると、餘り澤山あるので何が何だか一寸も解りません。ところがそのむづかしい支那語の隣りに英語が書いてあるのはよいとして、そのまたお隣りにカロリーが書いてあります。つまり「さて昨日は六十五錢で何カロ

リー攝つたから、今日は四十錢で何カロリー
にして置かう！」
といふ事になるンです。



或る時私が此の立派な支那料理館で、此のむづかしいカロリー料理を、目の色變へて喰べて居りますと、折柄食事時だと見えまして此館の主人や雇人も矢張りパクつき出しました。ところが日本だとお客様に見えないやうにコソ〳〵これをやるのですが、支那人は實に堂々と食ひます。先づその支那人の主人を始め、お帳場さんの比律賓人、入口へ立つてお客が來ると案内をする六文半位な足をした古典的な婆さん、預かつて居る居候、先妻の遺兒、今の妻君の茶目太郎、料理人の見習、半人前の皿洗ひ、等、等、等―それがゾロゾロ私の喰べて居る食卓までのして來て、私と同じやうな速力と歩調と、態度と努力で食事を始めたのです。さうして何れも鑛物工場のやうに素晴しく湯氣の出る飛上りさうに熱い物をお茶にして、佛様へ供へる御飯のやうにウントコ盛りにした御飯。それを一尺二三寸もあらうといふ天麩羅屋の箸みたいな二本の棒で喰べ出しました。その光景たるや實に壯觀で恰も手品を使つて居るやうにも見えれば、管絃樂の指揮棒のやうにも見えるのです。私はアメリカで私よりもつと正に判然と食ふために生きて居る人間を初めて發見致しました。

さて今度は臺灣料理です。桑港には臺灣料理が一軒半あります。半といふのはチト可怪ですが、此の店は借金の抵當に店を半分差押へられて、店先の半分で營業して居るのです。その一軒半で桑港在住の臺灣人は間に合はせて居ます。ブリキで出來た大きなパイナップルの模型を屋根の上に乘せて居るのが實に妙です。

彼女の晝食代十五錢

紐育に入ります。紐育は非常に忙しい、トンと目覺し時計の中に居るやうです。例のジャズといふ氣狂ひ音樂、あれは先づ此の紐育の町の足取を刻んで居るやうなものです。その中でもブロードウエーの雜沓時、四十五丁目の邊りは全くお話の外、物凄いものがあります。その正午の十二時から一時まで、あの蜂の巣から出て來る〳〵、先づ諸々の重役、諸々の支配人、諸々の會計係、諸諸のタイピスト、諸々の電話ガール、その他昇降機給、見張ボーイ、倉庫番の親父、使ひに驅出しボーイなぞが、何れも自分の胃袋へ粗飯を呈しに出掛けるのです。それは全く文字通りの粗飯です。たとへばあの美しい足をして、絹の衣服をひらひらと、白魚のやう



な指の先で、エー、ビー、シー、デーをチョンチョンチョンと叩いて居るタイピスト——もつともタイピストだつて婆アも居ますが、そのタイピストの晝飯代は驚く勿れたッた十五錢です。即ち彼女は先づソーダファンテンへ行きまして、三尺高い木の椅子へ腰打ちかけ、二本の足をブラリと垂らして、大理石の卓子へつかまりながら、一杯五錢のソーダ水をチュウチュウとやりながらゲップが二三回出たところで、ハットドックを喰べるのです。御承知の通りハットドックは餡の入らない餡パンみたいなものを輕く燒きまして、それの横へ腸詰の細いやつを一本、挾んでフーフー吹かなければ迚も喰べられない程熱いもので、それへ一寸カラシをつけるのです。先づ日本の梅干入りの結飯と言つたやうなもので



ベースボール、ボキシング、公園、海岸、等等、人の出る所には大概出て居ます。さて彼女は此の熱い熱いやつを丹念に勇敢に喰べ終つてから斯う言ひます。

『妾、お金が惜しいのぢやなくつてよ。お金のかゝつた贅澤な美味い物を喰べると肥るから、それで十五錢で濟ませるのよ。』

アメリカの女は大概夜は無代です。といふのは夜は必ず男のお友達と食堂に行くからです。買物でも何でもさうですが、男と女と連れ立つて食堂に行つた場合、女が金を拂ふといふ事は大變失禮にあたるといふ規則がありますので、彼女等は決して拂ひません。ですからたとへばかのタイピスト嬢が、

『貴方、今晩九時に妾と一緒に晩の御飯を召上らなくツて？』

と一言、隣りの刻明に三年貯金をして居る會計係に言ひさへすればそれでいゝのです。それで晩の生活の保證がつくのであります。

さて紐育には日本料理を喰べさせる家が五軒ばかりありますが、中に、『生鰻到着』なンて書いたのが目につきます。生鰻といふのは內地で喰べる鰻の事ですが、外國では一度干して火を入れた物許りなのです。『生鰻到着』といふ意味は先づ伊太利邊りで漁れた鰻なんでせう。本當に生で死んで居る譯なんです。然しカバヤキの匂ひが懷かしいなンて、ウッカリこれを喰べようものなら、一人前約四ドル、日本の金で八円許り取られます。私も此の鰻丼一ッで完全に目をまはした一人であります。お金の話が出ましたから、一ッ値段

感謝

新年號はお蔭樣で素晴しい大評判、發賣早々、全國到る處賣切れの大盛況!! 讀者より、書店より、註文殺到思ひ切つた大增刷を斷行しました。

社員一同感謝に堪へませぬ。

それにつけても三月號は、是非お買洩れのないやう、此際、書店へ豫約しておいて下さい。

をハッキリ申し上げませう。その方が實感味が迫りますからよろしいと思ひます。先づ布哇で日本式御料理、會席だと十圓位、繩暖簾式なら定食一圓あれば腹九分目、それへお茶でもお代りをすれば、全く腹十分になります。お香物もありますが、何だか名の解らない葉ッパの漬けたのです。澤庵もあります。セピア色になつて居りまして、これをチーズと稱へて居ります。桑港邊りの繩暖簾式日本料理は矢張り五六十錢見當、ロスアンゼルスは二割方値段が高い。その代り品物がよろしい筈であります。筈などといふことはまことに無責任なやうですが、何うも筈らしいのであります。紐育も矢張りそれ等と略同樣ですが、要するに外國の日本料理といふものは確かに一つの存在ですな——いえ、本當に錯覺的味覺の存在です。



メキシコ南蠻

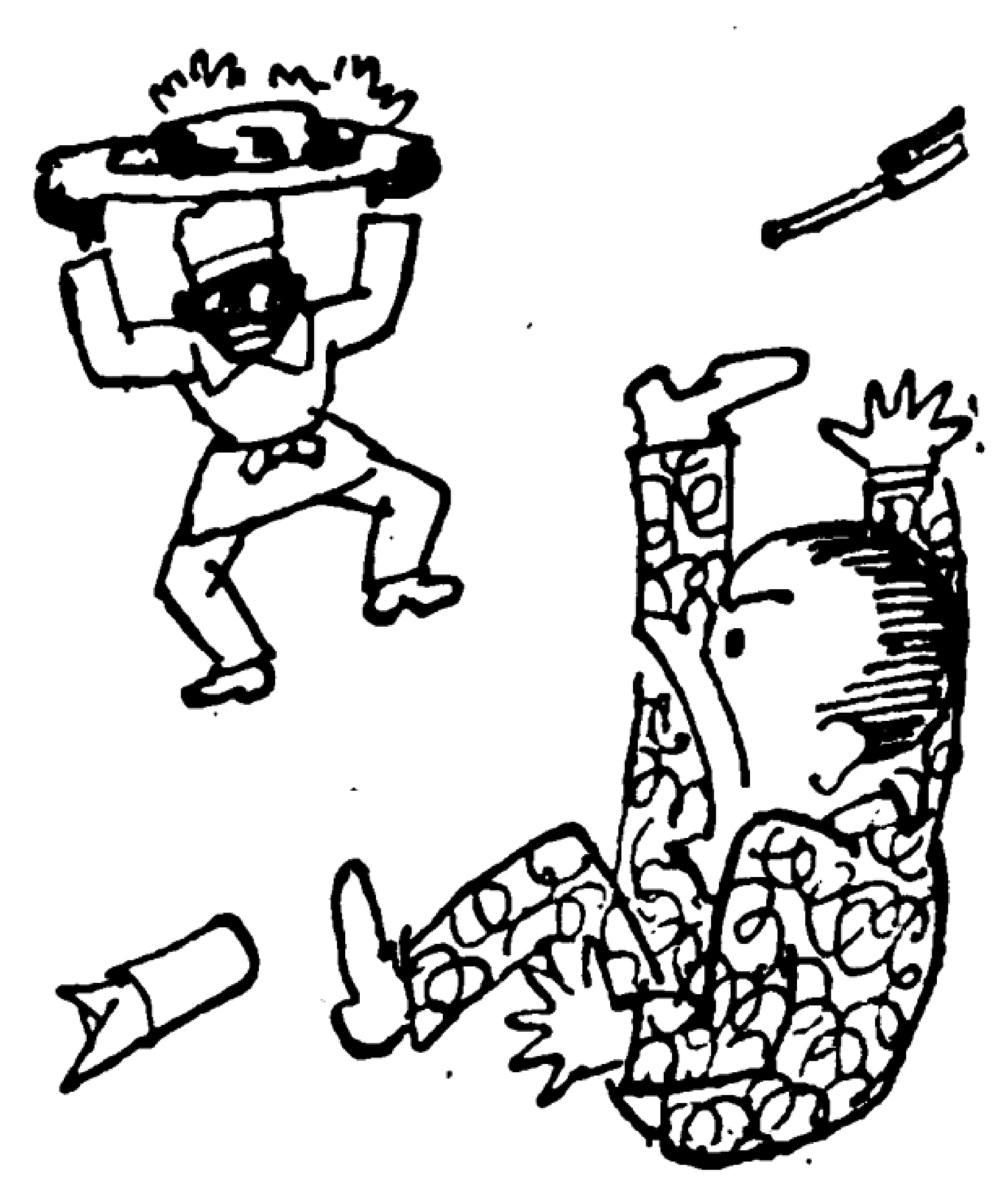
我が懷かしいウイリアム、エス、ハートのメキシコに入ります。メキシコの食物は森羅萬象、總ゆる物悉く眞黑なカレーが附いて居ます。エルパソといふところから這入りますとウオーレスといふ町がありますが、そこには八百人ばかり日本人が居ますが、その中約四百人、即ち半分は散髮屋さんとその一黨であります。此の町の床屋さんは實に全盛を極めて居ます。何れも決して西洋剃刀なぞは使はず、悉く傳統的な日本剃刀を右手に、大和民族の誇りを見せて、メキシコ人の髭を當つて居ります。一體彼等は何故日本人の床屋さんを好むか？　それは元來メキシコ人には髭ッ面が多い。ところが外國の床屋はみンな剃りッ放しであります。ですから直ぐ生える。それに引替へて日本人はいち〳〵克明に一本々々根本まで發掘するのですから、剃られる方も道路工事でもされて居る氣持で、今後は未來永劫、永久に髭が伸びようにも、毛根が無くなつて居るから大丈夫だといふ安心立命します。それで流行るのださうですが、食物の話だのに何だつて床屋さんの事を申し上げたかと言ひますと此の床屋さんが揃ひも揃つてみンな饂飩を賣つて居るのです。此の饂飩たるや日本特有の饂飩かけに例のメキシコ特有の眞黑なカレーが掛つて、そこへ豚の破片が、紅葉のやうに散つて居るのです。



さうして此のカレイ南蠻が日本の十錢に當ります。日本と同じやうに十錢で饂飩が喰べられる事が、馬鹿に懷かしみを感じましたので、私も髭を剃に出かけました。然かも此の店は饂飩許りは決して食はせません。必ず頭髮を刈るか髭を剃らなければ不可ないので

す。毛髪と饂飩の關係――一寸哲學的な問題です。

最後に洋食の失敗を申し上げます。それはシカゴから紐育へ行く途中の汽車の中でした。腹がグーグー鳴り出したので食堂へ這入りましたが、給仕が黒人で言葉が少しも解りません――もつとも白人でも解らないのですが――仕方がないから献立表を一心不亂に睨みつけて、漸くその中から多分これがビフテキだらうと思はれる文字を發見しましたので、ヤレ安心とそれは心の中、心の表は悠然たる態度で堂々とそれを誂へました。するとやがて遂に はずビフテキがやつて來ました。然し私は思はず『うへエ――』と聲を上げたのです。何故と言へば先づ洗面器程もある大きな皿の中に、直徑二尺もあらうかといふントニ王様の靴の底みたいなビフテキが、實に血腥さく忽然として現はれたのです。然かもそのテキ附屬品として馬鈴薯、三ッ葉、芹等、等、等、



が恰も大森林のやうにこんもりと茂つてその莊嚴無比な具合は、何うしてこれが人間の口へ這入るかと思はれる位――つまり異人でさへ四五人かかつて片づける物を、私が一人で誂へた譯なンです。傍に居た紳士淑女はみンなクスくす笑ひました。それに對して私はカーツとはなりませんでした。然しそのテキ一挺か四弗五十錢日本の九圓といふ支拂命令を受けた時には、思はず紐育の鰻丼と一緒にカーツとなりました。それ以來日本へ歸つて來ても私はテキに鰻丼は斷つて居ります。決然神様に誓つて斷ちました。若し嘘だとお思ひになるなら――?!

（完）



義士物語

意地競べ出世の一刀

磯村野風
さし繪　近藤紫雲

上

『中村、どうやら雪にでも成り相ぢや、もう一日泊つてはどうぢや』

『忝ないが、明日は御用のある日ぢや、出直して參る迄も、今日は歸ることにしよう』

『では氣をつけて行かつしやい』

『御身も隨分養生さつしやるが好いぞ』

中村勘助は、急ぎ足で山中温泉を出た、二里許り來たかと思ふ頃、果して白いものがチラ〳〵降り出して、暫くすると風さへ加はり、二三間先きは見えない位な吹雪となつた。

『こんな事なら、間瀨の云ふ事を聞いて、もう一晩泊つて參れば好かつた、オ、幸ひあれに百姓家がある、無理にでも賴んで、一夜厄介になる事に致さう、許せよ』

勘助はがらりと戸を開けて飛込んだ、中では老爺が圍爐裏の傍でぷかり〳〵と煙草を飲んでゐた。

『これはお武家樣、非道い雪で嘸お困りでムいましたらう』

『察しの通り、大雪で難澁の者ぢや、どんな所でも苦しうない、一晩泊めて呉れぬか』

『え〳〵、お安い御用でムいます、マア〳〵、草鞋を取つてお上りなされませ』

『忝ない、うーむ、蘇生つたやうな思が致すな』

『嘸お寒かつた事でムいませう、婆さんや、もつと薪をうんと持つて來なさい、何、大きくつて燃えが惡からうつて……よしよしぢやあわしが一つこなしてやらう、お武家樣、少々御免下さりませ』

老爺は土間に下りて、隅つこの方に立かけてあつた、柄の所だけ古手拭で卷いた古刀を取り出し、瘤だらけな太薪を切株の上へ立てて置いて、片手上段に振冠つて、よいしよッと斬下すと、すぱりと美事に二つになる、又太い瘤たんだらけなのを選り出して、うんとしよつとやると、まるで空竹でも割るやうにさくりと眞つ二つに裂ける、勘助が見てゐて感心した。

『老爺、そちは大分出來るな』

『ヘイ、何がでムいます』

『かくすなよ、大分ヤットウが行けるなと申すのぢや』

『御冗談仰有りませ、劍術所か刀の抜きやうも存じませぬ』

『でも全然心得が無うては、左樣易々その瘤薪は割れぬ筈ぢや』

『それがお武家樣、習ふより馴れろでムいますよ、ほらこんな具合でムいますよ、よいしよッ、(ザクリ)アハヽヽヽ』

『不思議ぢやな、それは鉈とも違ふやうぢやが何だ』

『何ね、鉈が無くなつて困つた時、古つゞらの中を引つかき廻しましたら、こんなものが出て來ましたので、鉈代りに使つてゐるのでムえますよ』

『フーン、一寸見せて呉りやれ』

勘助が手に取つて見ると、眞つ赤に錆びた古刀だ。

『一つ拙者にやらして見て呉れ』

一番太さうな薪を立てゝ置いて、えいつと斬下して見ると、まるで豆腐でも切るやうにザクリッ。

『うーむ、好く切れる。どうぢや老爺、これを拙者に讓つて呉れぬか』

『折角だがお武家樣、それは賣れましねえ鉈にするものが無くなるだからね』

『いや、只呉れとは云はぬ、一分出すから讓つて貰ひ度い』

『一分？　ほ、本統かね』

『決して、僞りは申さん、サア、一分納めて貰ひ度い』

『賣つたが最後、たとへ刀は返しても、金は返しましねえぞ』

『ハヽヽ、小祿ながら赤穗浪士中村勘助正辰、口が腐つても、左樣なことは申して參らんから安心いたせ』

『お武家樣、あとで屹度後悔なさいますぞ』

『餘計なことを申さんで、賣る氣があるなら賣つて呉れ』

『賣りますとも、ではお餘儀なしに此金は戴いて置きます、お陰で欲しい〳〵と思つてゐた鉈が買へて、こんな嬉しいことは有りましねえ、だがお武家樣、後から金を返せなんて云つても駄目でがすぞ』

『くどく申すな、武士に二言はないわい』

下

翌朝は雪が晴れた。

勘助は心ばかりの謝禮を置いて、一分で買つた古刀を携へて赤穗へ歸つた、そして丁度道順であつたので研屋太兵衛の店へ立寄つて、研上げて呉れるやうに頼んだ、少くとも半月位は懸

るだらうと思つてゐると、六日目の朝、太兵衛はアタフタと勘助の家へやつて來た。

『太兵衛、大層早朝から參つたな』

『へエ、實は先日の錆刀で厶いますが……』

『駄目か』

『駄目所か、マ、マ、正宗で厶います』

『何、正宗？』

『御値段を申上げては恐入りますが、まづ一本と云ふ所で厶いませうな』

『一本？』

『百兩なら、手前何時でも頂戴いたします』

『ウーン、しまつた』

『ア、、吃驚した、承れば百姓から一分でお求め遊ばした刀だ相で……これこそ本統に掘出しもの、お芽出度う存じます』

『默れ、掘出しものが何が芽出度い、苟も兩刀を帶する身が、何も心得ぬ百姓より、只同樣で名刀を買求め、利益を計らうなぞとの所存は毛頭持たんわ』



『でも旦那樣……』

『重ねて申すと、此の一刀で其方の素頭を打つ放すぞ』

『ウヘエー』

袴の股立を高々と取上げた勘助正辰、正宗の一刀を小脇にかかへると、飛ぶが如くに百姓家へ馳けつけた。

『老爺居るか』正辰は息をはずましてゐる。

『そーら云はねえこつちやア無え、一分取戻しに來やがつた、お武家樣、今頃來てもう駄目だよ』

『駄目、何が駄目なのぢや』

『あの一分で鉈を買つて、殘りは酒を買つて飲んで了つた、その鉈が見掛倒しでちつとも切れやがらねえんだ』

『實は老爺、あの刀は正宗と相判つた』

『マ、マ、まさむね――』

『捨賣にしても一百兩からの價がある。いかに存ぜぬ事とは云へ、かゝる高價の品を僅か一分位で買ひ求めたは拙者の誤り、只今改めて其方に戻すから、受取つて呉れ』

『御免蒙ります、正宗か村正か知んねえが、一旦賣つた以上はお前樣のものだ、わしが受取る筋がねえ、第一自分が勝手



に買つて置き乍ら、今更戻すなんて卑怯でねえか、お前様、武士に二言はないといはつしやつた事を、もう忘れたかね』

『決して忘れは致さんが、其折と今日とは話が違ふ』

『いやだ、たとへ何と云つてもいやだ、横川村の甚五兵衛は、受取らねえと云つたら、首がすつとんでも受取らねえだ』

『面白い、貴様が横川村の甚五兵衛なら、拙者は淺野内匠頭長矩公の家來中村勘助正辰だ、刀にかけても受取らせて見るぞ』

『刀で來るなら肥柄杓で對手になつてやらあ、横川の甚五兵衛の肥柄杓と云つたら、村名物の一つだ、まご〳〵してゐると、下肥を頭から引つかけて、向脛をかつ拂ふぞ、婆さん猫なんか抱いてゐないで、その一番大きい方の柄杓を出さねえか』

『吐いたりな甚五兵衛、眞つ二つに致して呉れる之れへ出え』

『出ねえでどうするものか、今卯とぢを拵らへて呉れるから覺悟をしろ』

年は取つても、氣は壯んな甚五兵衛、大柄杓を横一文字に構へて、戸外へ飛び出した。

『オイ〳〵甚五兵衛、年甲斐もないどうしたと云ふものだ、お武家様、御腹も立ちませうが、どうぞ御勘辨を……手前は當村の名主利左衛門と申しまするもので……お話は先程から承つて居ります、どうか私にお任せを願ひます、コーレ甚五兵衛、何故そんなに柄杓を振り廻すのだ、ハイ〳〵よーく分りました、ではお武家様、斯様なされてはいかゞで厶いませう、その刀をいつそ御領主様に御獻上遊ばしたら……』

『うむ、流石は名主好く氣がついた、持主甚五兵衛に苦情さへなくば、殿に獻上したいと思ふが、老爺其方の考へはどうぢや』

『俺はその刀さへ受取らずに濟めば文句は無えだ』

『左様か、それでは左様云ふ事に致す、剛毅木訥は仁に近しとやら、百姓乍ら見上げた其方の志、行掛りとは云へ危く其方如き律氣ものを斬り棄てる所だつた』

『わしもすんでの事に、お武士の卵とぢを拵らへる所だつた』

『アハヽヽヽ、貴様は却々面白い奴だな』

刀を淺野公に獻上し、一伍一什を言上すると内匠頭、

『近頃の美談である、甚五兵衛には一代三人扶持を取らせろ、又中村勘助には五十石を遣せ』

とあつて、泰平の世には珍らしい出世で御座います。

この勘助正辰こそ、後に大石を頭領と仰ぎ同志と共に吉良家へ討入り、主君淺野内匠頭の鬱憤を晴らした赤穗浪士の一人、義士物語中村勘助のお話は之にて讀切といたします。（終）

東西笑話選





◇旅の空

初めてロンドンへ出た田舍者、

『あゝ、俺はロンドンへなんぞ生れねえで可かつたと思つてゐるんでがす』



道伴れ『如何して?』

田舍者『だつてはあ、東を見ても西を見ても、ちつともわしの知つた者が居ねえでがすから、こんな所へ生れたら一生話相手もなかんべえと思つて――』

◇チップ

『オイ、ボーイ君、飯代だけは丁度あるんだがねえ、君にやるチップが無いぜ』

『さうですか。ぢや鳥渡待つてて下さい。只今勘定書を直して參りますから――』

◇彼女の節約

妻『ね、あなた、お互に節約しませうね』

夫『うむ』

妻『ぢやア帽子を買つて頂戴よ』

夫『何だい、まだ此間買つてやつたばかりぢやないか、いまお前自分で節約しようと言つた癖に』



妻『だつてお隣りの奥さんが妾のと同じですもの、うちを引越すよりは帽子を買代へた方が安上りよ』

◇切腹

浪人が暮の拂ひに窮し、大屋へ行き店賃のことわりに行つた。すると大屋、『この暮は待れませぬ』『では腹を切ります』と肌を脱げば、腹に十文字の墨が打ちがしてある。大屋も仕方なく、『それでは春まで待ちませう』『それはお聽濟み忝う御座る』と墨を縦の一だけ消す。『モシ、横の一筋が消えませぬ』『これは米屋へ行つて消します』



◇先生の希望

女教師、ヂミーの惡戲に愛想をつかして、

『あゝ、ほんとに貴方のお母さんは子供をどんなしつけ方をするんだらう! 妾が一週間も貴方のお母さんになれば……』

と嘆息すると、

ヂミー、『先生、そんなら大丈夫ですよ、うちへ歸つたらお父さんに先生が僕のお母さんになりたがつてるつて云つてあげますよ』

◇別れ

ある將軍が散歩に出ると、道端の乞食が、

『どうぞ一文やつて下さい。哀れな癈兵で厶います』

將軍『癈兵ぢやと? 嘘だらう? 本當なら號令が出來るぢやらうから、一つ此の乃公にかけて見ろ』

乞食『氣を付けッ! 頭あ右ッ! 元へ!



財布を――出せッ!』

そこで將軍が財布を出すと、乞食はそれを受取つて、
『よし、今日の教練は終りッ。別れッ！』

◇斷髪異聞



母親『さあ、今日は床屋へ行くんです。そんなに髪が伸びてちやみつともないよ』
男の子『やだい。やだい』
母親『如何して？』
男の子『だつて髪を刈ると女みたいになるからやだい！』

◇親族會議

親族會議が終つて老人のいとも難しげに呟くを聞けば、
『はてさて、呆れたものだ！よくあんな下らないことを親類の前で云はれたことだ！俺はまあ親類だからと思つて默つて聞いてやつたが』

◇藪蛇

夫『お前は人間を何によつて判斷するね？』
皮肉な妻『わたし、その人の奥さんの着物を見て、御主人の人物を判斷しますわ』

◇寒山拾得



一人は寒山、一人は拾得と銘々に名乘りを上げて出る狂言があつた、ところが二人連れ立つて出ると、どう間違つたのか、先の者が『これは寒山拾得と申す者にて候』と云つてしまつた。そこで後の者がすつかり面くらつて、だが早速の氣轉、
『われらもやはりその連れにて候』

◇御代は見ての歸り



機智に富んだ見世物小屋の親爺、小屋の入口へ『入場料はいりません』と書いて置いた。間もなく小屋もはち切れるほどに、大入滿員となつた。所がお客が出ようとすると、出口には屈強な番人が二人も頑張つてゐて、ちやんと次のやうに書いてあつた。
『出場料、御一人前五拾錢也』

◇低能

男『幾ら金があつても低能な男となンか結婚しては駄目ですよ』
女『えゝ。ところで貴君お金持？』

◇へらず口

父親『お前何だつてそんな雀の巣のやうな頭をしてゐるんだ。お父さんなんぞ若い時はいつもキチンと櫛を入れてゐたもんだ』
伜『（父親の光輝燦然たる禿頭を仰いで）だつて僕、年を老つてからお父さんのやうな頭になりたくないです』

◇好都合の怪我



借金取『頭をお怪我なすつたさうで、其後如何でムいますか』
借りのある男『有難う、あれ以來スッカリ記憶力が惡くなつて、殊に金錢の事に關しては、皆目記憶を失つてしまひましたよ。アッハッハ……』



鮮血迸る拳闘大試合

鳴弦樓主人

昨年七月二十七日夜、丸の内報知講堂に行はれた緒方哲夫對瀧澤吉助の拳闘試合は近時隨一の興味ある大試合だつた。

すべて競技には、天才又は鬼才が出現して、はじめてその競技の普及發達を見るもの、早い話が、日本の角力にしても、常陸山梅ケ谷の二天才出でて、角力全盛の時代をつくり、高石鶴田出でて日本水泳の黄金時代を見たではないか。拳闘また然り、若し天才鬼才出現して、一擧世界選手權を獲得すると云ふやうになれば、それこそ急速なる普及發達を見るに相違ないのである。イヤ事實、拳闘は、この種の競技中、最も普及性を有してゐるものなのである。宜なり、わが國最近に於ける拳闘は、日と共に流行發達し、現に、學生拳闘に於ても、早稻田慶應明治を始め、その他の各大學では、逸早く拳闘部を置いて日に隆盛に赴きつゝあり、東京大角力協會に於ても、力士をして拳闘を學ばしめようとしてゐるし、またこれが紹介開拓者としては、帝國拳闘協會が、矢繼早やに猛烈なる試合を演じて、拳闘ファンの異常の興味を唆り、試合毎に增加する觀衆を收容しきれずにゐると云ふ狀勢から見ても、いかに拳闘が急速な勢を以て勃興しつゝあるかゞ察せられる。

この時にあたり、七月二十七日夜、瀧澤對緒方の大接戰は、試合が試合、人が人だけに、開會前、早くも、異常のセンセーションを捲起し、ファンは勿論、ファンならぬ人々にまで、一戰如何にと血を湧かせたが、更にその近來かつて見ない激戰の現出によつて拳闘試合の眞の興味を、心ゆくばかり味はしめ、いやが上にも拳闘熱を煽り立てたのであつた。

まつたく、胸のすくやうな一戰であつた。日本にもかう云ふ試合が續出すれば、それこそ拳闘は競技界を風靡して了ふだらう。

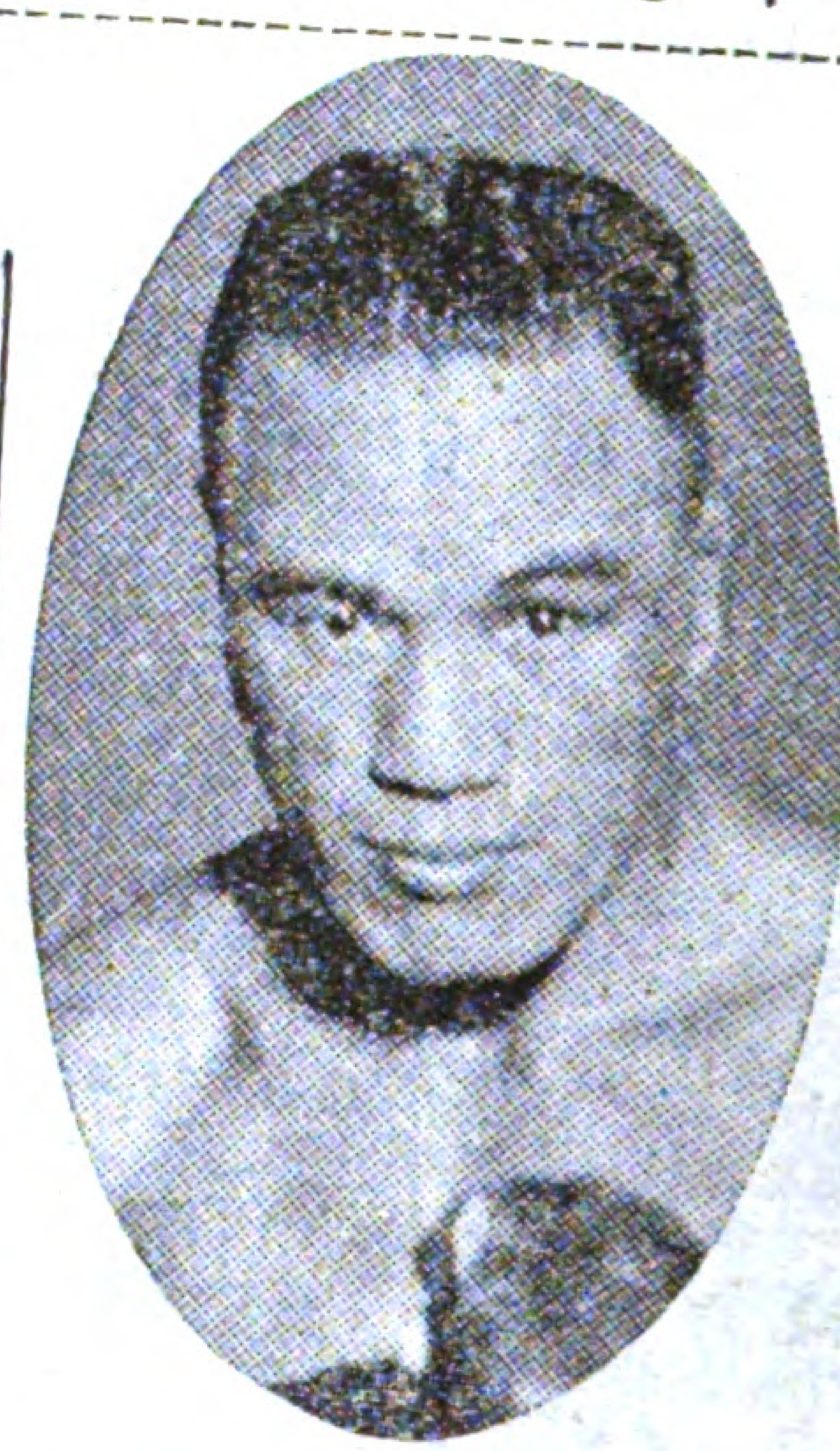
ムツソリーニ首相が、その二人の愛息に拳闘を習はせ居り、前米國大統領クーリツヂ氏もその息にこれを奬勵し、爲にその

息は英國オックスフォード大學の拳鬪選手だつたと云ふ理由も、かう云ふ試合を見ると成程と首肯されるのである。

筆者は、曩に、本誌に於て、世界ヘビー、ウエイト（この級の事については、あとに詳說する）の大選手、天下無敵のタニー對デムプシーの一戰を紹介したが、あのジヤック・デムプシーが、かつて南米の強者フイルポと戰つた時には、彼れは、フイルポの一擊に、リング（試合場）の三本の繩を飛び越えて、眞逆樣に毆り落されて了つた。

審判者は、このノツクダウン（撲ち倒される）されたデムプシーが起ち上れないのを見ると、規定によつて、一秒、二秒、三秒……と時間を數へはじめた。十秒間に起ち上れなければノツクアウト（完全なる負）になるのである。

然るに、七秒……八秒……九——この聲が叫ばれた時だつた、彼れは猛然とリングの上に躍り上つて戰を續け、その後僅に五十七秒間に強敵フイルポを完全に征服して了つた——この時の入場料、無慮三百萬弗、世界の拳鬪ファンをして熱狂措く能はざらしめたのであつた。



瀧澤選手



緒方選手

日本にも、今日の機運を以てすれば、やがてかう云ふ大試合を見ることが出來よう。

遮莫、七月二十七日に於ける緒方、瀧澤の一戰は、正に日本に於けるこの種大試合の先驅と云ふべきである。

以下、拳鬪を解しない人々にも會得出來るやうに、出來るだけ親切にこの一戰を紹介して見よう。

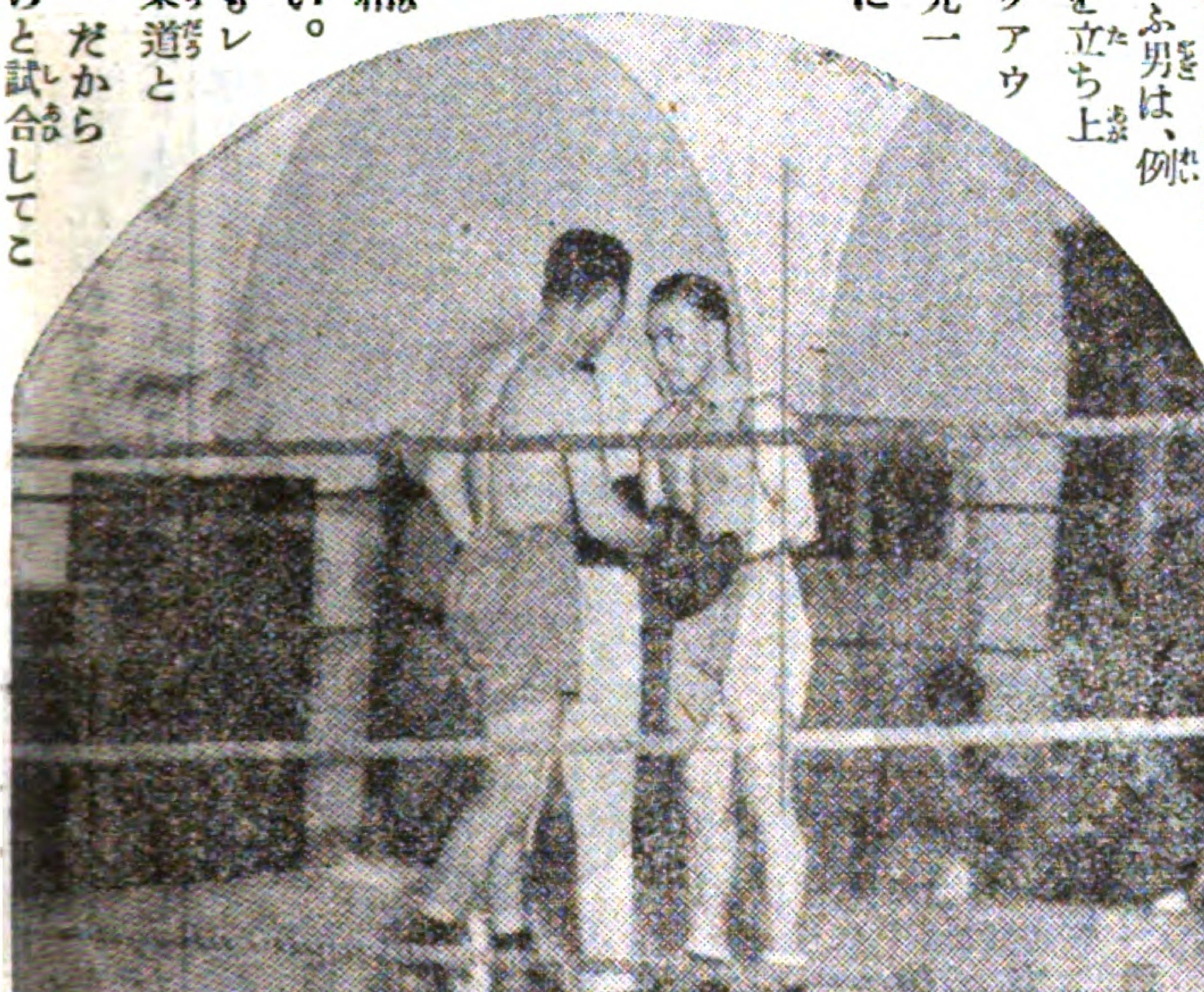
○

緒方哲夫は、現に農業大學の拳鬪師範であり、明治神宮ライト・ウエイト選手權者である。瀧澤吉助は帝國拳鬪協會の師範代であり、同じくライト・ウエイト級の代表選手である。

ライト・ウエイト級選手と云ふのは、百三十五ポンド以下（十六貫二百以下）百三十五ポンド以上（十五貫六百以上）の體重を有する階級の選手で、緒方は、一昨年の神宮競技にライト・ウエイトの選手權を獲得したのである。

即ち、拳闘に於ては體重によつて、色々の級が分れて居り、體重に於て、十八ポンド（二貫目强）の差あるものとは試合出來ない規定になつてゐる。つまり科學的な西洋人の頭腦では、體重の輕いものが、體重の重いものに勝つと云ふやうなことは考へられない。體重の重いものは、當然に輕きものに勝つものと考へてゐるからである。かの有名な英國拳闘家、ジプシイ・ワイルドと云ふ男は、例の規定時間、十秒間以内に敵を立ち上らせなかつた――所謂、ノックアウト七十餘人、而かもそれが一九一四年中、驚くべし、一ケ年間に五十餘人をノックアウトしたと云ふ、恐らくこれが空前にして絶後であらう記錄を殘した一人であるが、その相手と云ふのは、みな彼れの體量、百ポンド(十二貫)級の敵と戰つたので、誰れでも彼れでも、相手を選ばずに戰つたのではない。

かう云ふ點に於ては、拳闘もレスリングも、共にわが國の柔道とは、全然趣を異にするもの、だから外人は、小さい者が大きいものと試合してこれに勝つと云ふ柔道が不思議で堪らないのだ。



宣誓――正々堂々と闘ふ上からは、假令死すとも怨みなしと開始直前の誓ひ。(左、緒方選手。右、瀧澤選手。中央荻野審判)

○

さて、瀧澤吉助、緒方哲夫の兩人は、今颯爽とリングに出場した。

見る一方緒方哲夫が、五尺六寸餘の長身なのに對して、他方瀧澤は五尺四寸ながら肩幅廣く、さすがに双方とも、現今の新興日本拳闘の代表的選手だけに、その體軀筋肉は、見るからに隆々と發達し、その硬軟自在なる筋肉を包む皮膚は、ピーンと張り切つて、打てば鏘然たる音を發するかと思はるゝばかり、燦たる燈火に光り映えてさながら金屬の感がある。

緒方は當年二十五歲、目下無所屬。瀧澤は當年二十七歲、帝國拳闘協會の代表。一昨年、神宮選手權大會に覇を爭つて以來今日が第四回目の顏合せである。

消息通は、このことについていつてゐる。

『一昨年の神宮競技――あの時は六回戰だつたが、緒方は一回戰に於て、早

も瀧澤をノックアウトして勝つた。その間タイムは僅に一分五十秒であつた。すると去年、瀧澤がその復讐戰を申込んだ。

さう……？　あれは去年のはじめだつたな？』

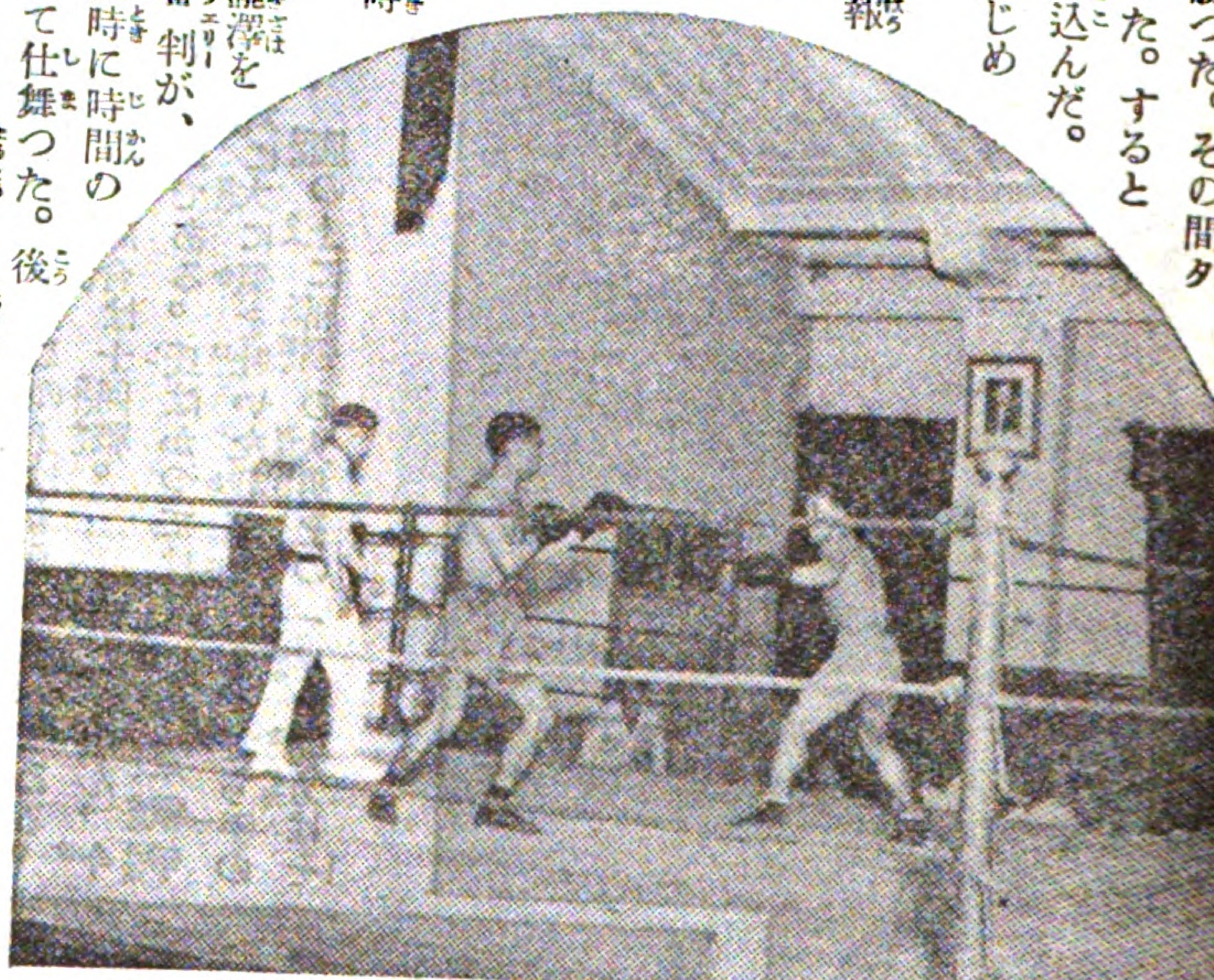
『一月だ。場所は矢張りこの報知講堂であつた。壯烈な大試合になつて、滿堂を唸らせたものだつたが、結局第七回戰に入つて緒方はひどく齒を傷め、棄權して敗けた。』

『第三回目は今年の五月、日比谷で顔を合せたのだ。あの時は面白かつた。』

『最初緒方が優勢で二度まで瀧澤をノックダウンした。一度は、審判が、九秒までカウント（勘定）した時に時間の鐘が鳴つて惜しくも長蛇を逸して仕舞つた。後半になると反對に瀧澤が優勢となり、到頭、八回目でテクニカル・ノック・アウトを宣告されて緒方の負となつた。』

『テクニカル・ノック・アウト？』

『テクニカル・ノック・アウトと云ふのは一方が鬪ひ疲れ、鬪志を失つた場合審判の宣告で優勢の方を勝とするのだ。』



いざ！火蓋は切られて、サッと　へに入つた選手

『すると緒方は、三戰二敗、一回負け越してゐるんだな。』

『さうだ、今度は緒方から復仇を申し込んだのだ。』

實に緒方は瀧澤に對して三戰二敗、今度敗ければ四戰三敗、最早、瀧澤に對して勝味なしと云はれなければならない。彼れたるもの、今度と云ふ今度は、どうしても勝たなければならないのだ。而も我から復讐を申込んだからには、彼には充分な練習と自信があつたらしい。一方申込まれた瀧澤にとつて見れば矢張り斷じて負けられぬ大事な試合である。今度倒せば完全にライト・ウエイトの代表者と自他共に許される。況んや帝國拳鬪協會の名譽を脊負つて立つてゐる以上、是が非でも打ち倒さねばならぬ責任がある。

その爲めか、さすがの彼れ瀧澤も、場馴れ、試合馴れのしてゐるにも拘はらず、今度は異常の昂奮、默默たるうちにも日夜對瀧澤の策戰に餘念なく、はたの眼にも、胸中の心熱は察せられた。

それと見たのは彼れの先輩荻野貞行氏、試合前の二三日を、この昂奮から落付けようとして、夏の夜の寄席に誘ひ出し、出

來るだけ、彼れの心を和らげ落付かせようとした。

實際また、拳鬪試合は、想像以上に猛烈であるため、試合者も異常の昂奮を帶びるもの、爲めに試合直前は、練習もやめて、ひたすら試合の念から遠ざからしめる必要がある。でないと、立派な堂々たる試合が出來ないのだ。

さて、二人は、歩み寄つて握手宣誓した。――この上はもう死んでもいさゝか怨まないしるしである。試合は十回戰。

審判は帝國拳鬪協會の師範荻野貞行氏である。氏はかつてはアメリカに轉戰して連勝、日本人の爲に大に氣を吐いた我が日本拳鬪界の大先輩である。この人、腹の上に屈强の大男をのせ、靴ばきで力いつぱいハネさせ得ると云ふ飛んでもない身體、さすがに十年、拳鬪で叩き上げた鐵軀ではある。

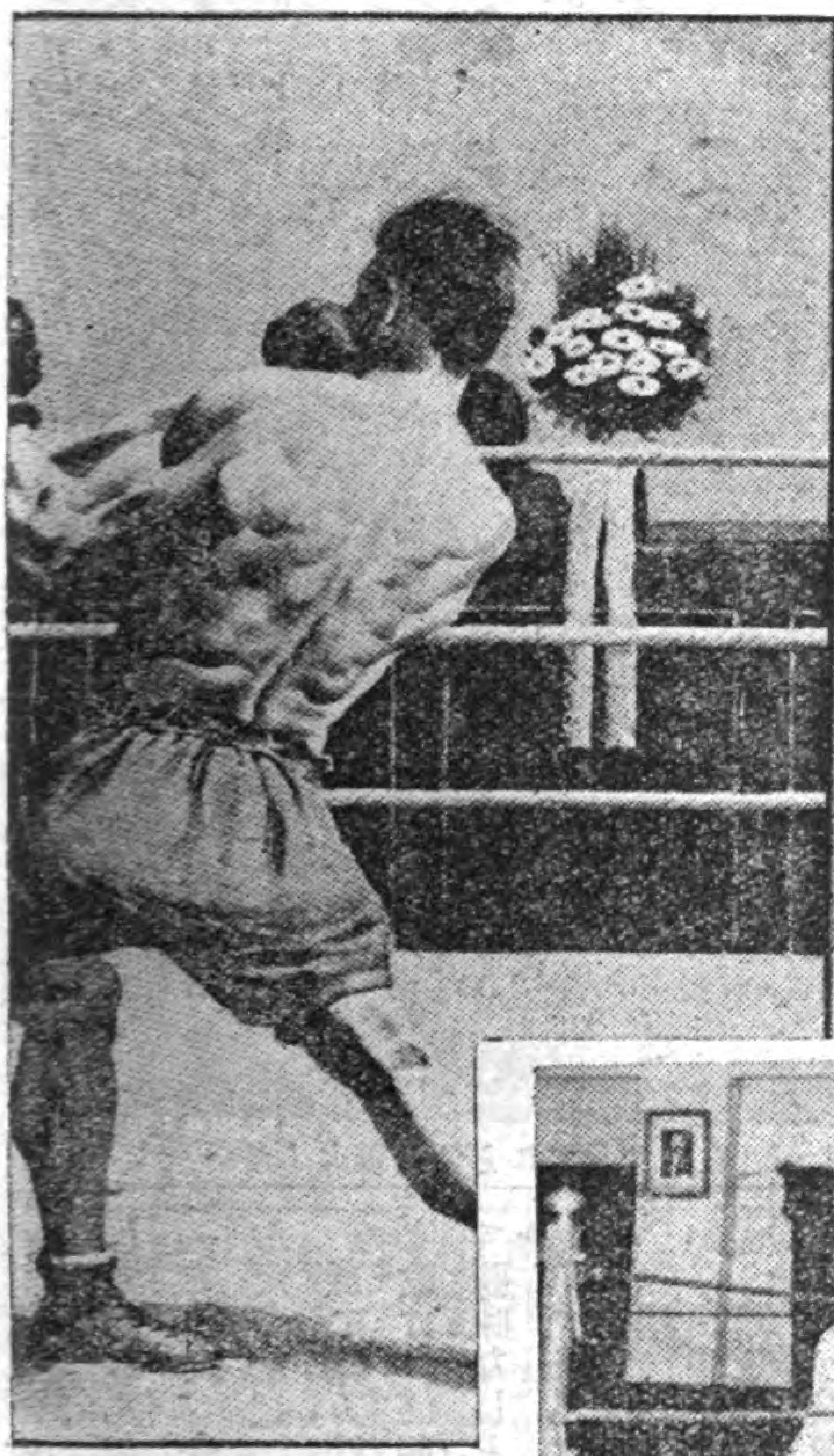
『瀧澤!』

『緒方!』

『復歸しろ!』

觀衆は先づ昂奮熱狂した。

二人はサッと左右に分れた。今ぞ熱戰! 火蓋は切られた!



緒方は、前構へを狹く、突出しに迅き構へ、彼れ得意のストレートを繰出すに便なる構へであるに對し、一方瀧澤は、右手をグッと後ろにひき左手を充分の守勢に構へてゐる。

これなん、今日の策戰爭ひ、打ち手の早い緒方はそ



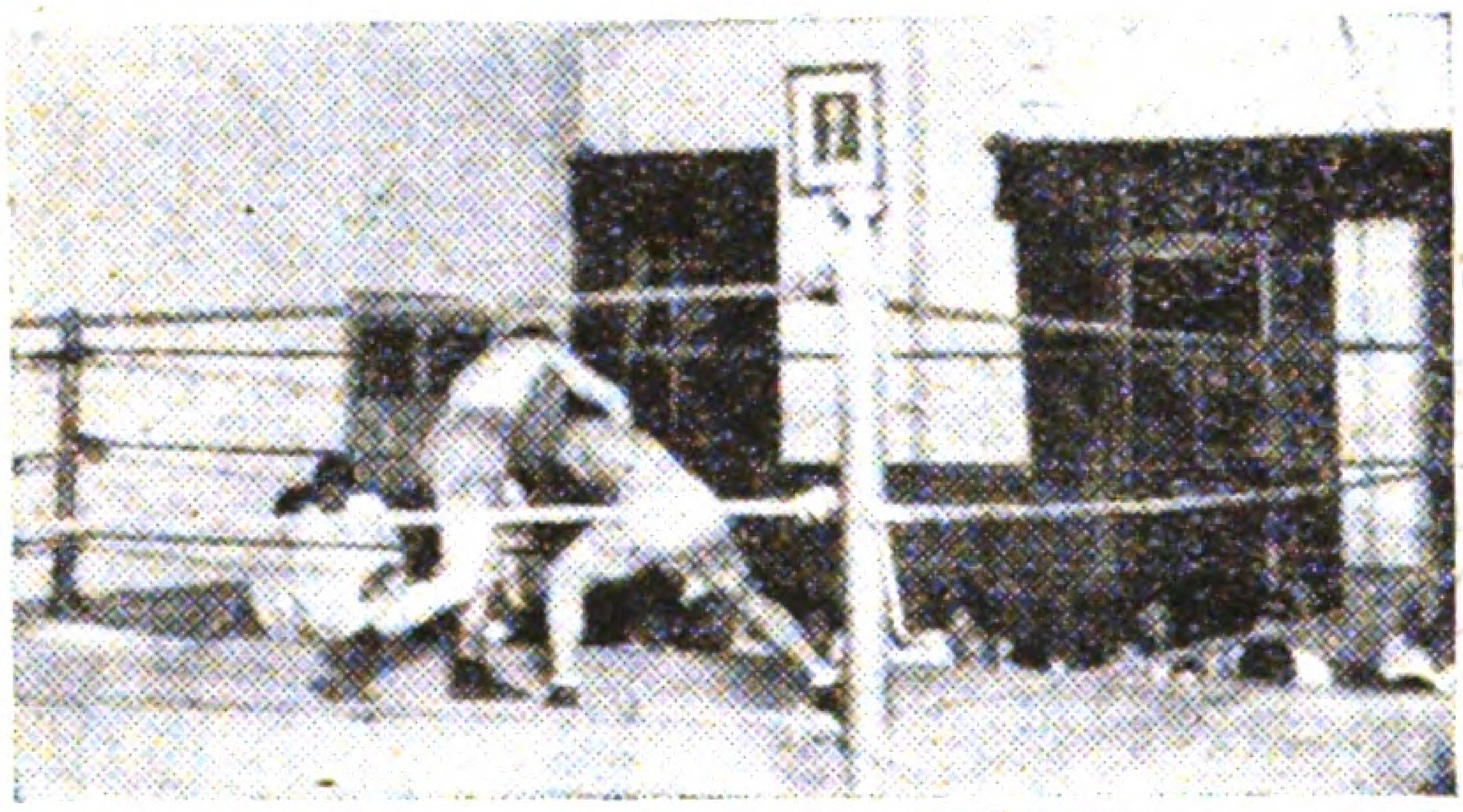
第一回戰は終る。(補助者が、肩を揉み水を飲ます。選手を勞り勵ますのである。三分間鬪ひ、一分間休息するのが職業選手試合の規定)

*の得意の右ストレート(相手の顋、目鼻を眞直に突く)で、猛烈果敢、一氣に敵を突きすくめて了はうと云ふ策戰に對し、瀧澤は、その攻擊を知つて、飽く迄敵のストレートを防ぐべく左手の守備を充分に構へ、敵の攻擊を持久するか、乃至また敵の繰出す、ストレートを潛り、飛込んで、敵の腹部を突くフック(手を鈎型に曲

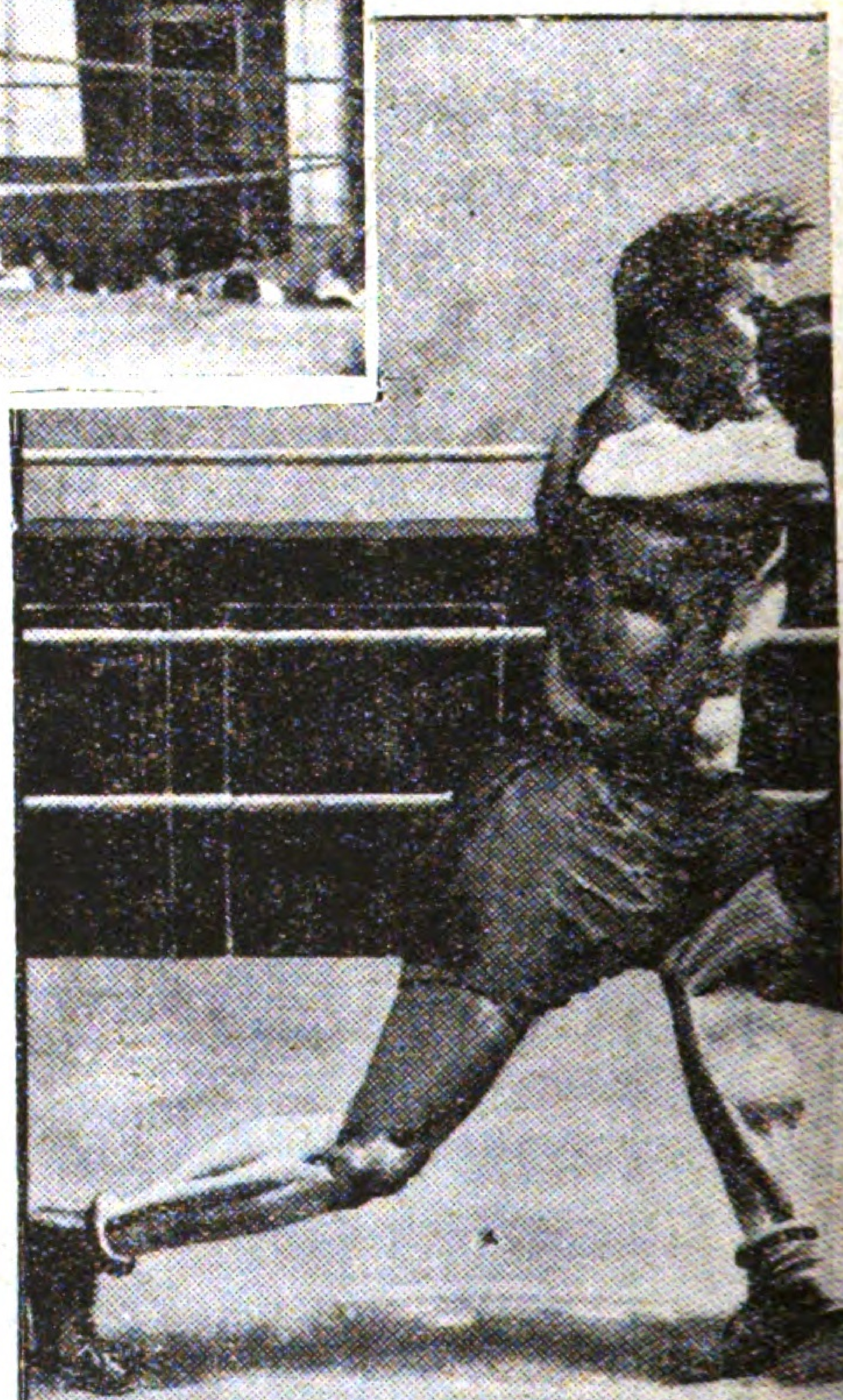
げ側面より頤、又は腹部を突く）の妙手に出でようと云ふのだ。

果然、緒方の攻撃ははじまつた。彼れのグローブは、小刻みに動いた、突き出さんとする。が隙がない。なほも突かんとする。一瞬、右腕セキレイの尾と戦けば、この空間――突かんとし、突かせじとする慄動の空間は爆發した。

繰出す！　繰り出す、緒方のスウイング（横毆り）機關銃の如きそのストレートを、相手は懸命に拂ひのける。突く！　拂ふ！　突く、はづす！　緒方が左右兩腕は、ウナリを生じて亂射亂打、さすがの瀧澤も、その手裁きの迅さ猛烈さに、見る見る顔面二三本の痛手を蒙つたが、こゝぞ、持久のカンドコロ、何糞とばかり頑張りつゝ、パッと身をかゞめれば南無三寶、さながら金屬の打合ふ如き音と共に兩者の體はブッかつた。――瀧澤の頭と、緒方の胸と！　瀧澤は、かくして敵のストレートを防いだ。



第二回戰に入つて鬪ひは
いよいよ壯烈！



『緒方』

『早くやれ！　離れろ』

が、さう易々とは離れられぬ、緒方は敵の兩腕を抱へ上げて殺した。ウッカリ離れようものなら、その離れぎはの機に、ズーンと一撃、瀧澤得意のフックで腹の中をデングリかへされて了ふ。

二人はこゝを愼重に構へなければならない。

タイム！　その時規定の三分間は來た。

二人は審判の聲に分れた。共に數條の熱汗が銀線の如くその波打つ胸を流れてゐる

三分戰つて一分休む――これが拳鬪試合の規定、二人は退いて休憩した。

○

第二回戦――。

緒方は、依然、遮二無二、機關銃のストレート。敵は懸命にそれを防ぐ、拂ふ、かゞむ、打ちつゝ逃げる――瀧澤は、緒方のやうに素早い連打はしないが、一度打てば極めて的確なあたり、敵をしてノックダウンする程の打力を有してゐる。

機やありけん、瀧澤の進出、猛然と馬をかへして敵のストレートを制しつゝ進んだ。

こゝぞと緒方も立向へば、俄然、瀧澤の飛躍一番、頭を下げて飛込んで來た。

『アッ！』

『フック！』

何さまこの勢でフック一本見舞はれたら事だ！

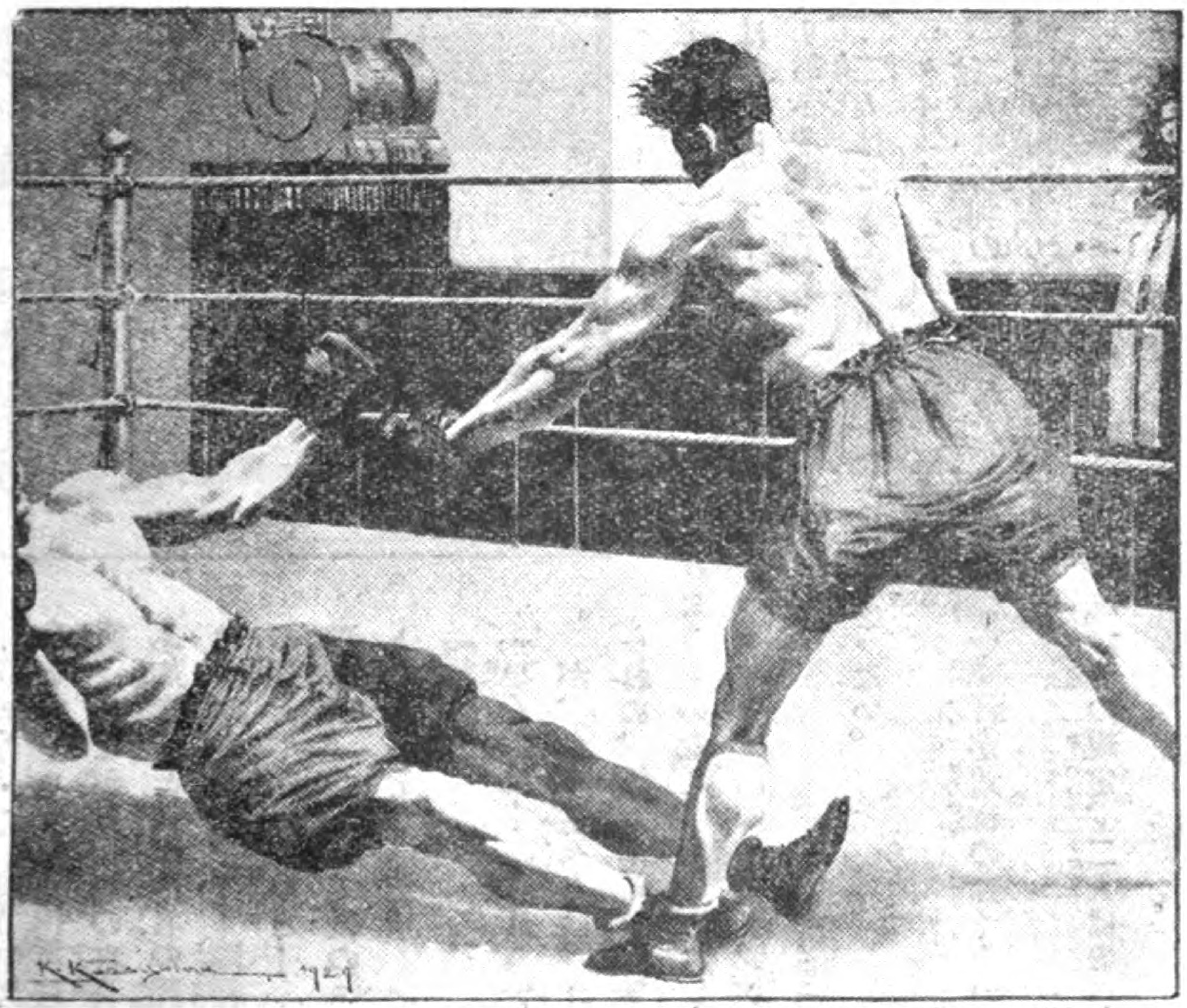
『何を！』緒方も、ハッと身をちゞめ氣味、咄嗟にこれを防がんとすれば、驚くべき哉戞然の響き！ 觀衆ハッと膽を冷す時、見よ！ 緒方の眉間から鮮血サッとほとばしり出た。

と見る次瞬、瀧澤の前頭も血を噴いた。恐らく緒方は、傷の場所が場所だけにクラ〳〵ッとしたに相違ない。が彼れは怯まなかつた。一條の血線流れて目に入つても、なほかつ彼れは怯まなかつた。遮二無二突いた。荒れに荒れた。

時に第二回のタイムの合圖。

附添の人々は、忽ち二人をリングの隅に運んで應急の手當てをした。

休憩を終へて第三回。



世界のライト・ウエイト選手權を九ケ年間保持して、向ふところ敵なかつたベンニイ・レオナード（米人）が、

『およそ拳闘に於ては、足は猫よりも敏く、兩腕は電光の流れの如く閃き、而かも聰明なる頭腦を以てせなければならぬ』と云つてゐるが、事實、拳闘は、米國のレスリングや、ロシヤの角力などのやうな悠長さ鈍重さを以てしては忽ち敗れて了ふ、飽く迄機敏で、飽く迄勇敢で、飽く迄攻撃的でなければならないのだ、一瞬、誤れば、忽ち敵の一撃にノックダウンされて了ふ、この點わが國柔術に所謂アテミの連續の如く、足は使はないが、琉球の武技唐手に相似たるものがある。

さるにても、瀧澤は今、斷然、奮起した。最早奥の手の出し所、彼れは猛然として襲撃した。モロに下腹部を狙つて大きく……『ソレ行く！』

御參なれと緒方の應戰、敵がくゞつて來る出端を小刻みに打つて應じた。初心者だと、から云ふ時、えて組合ひ、捻ぢ合になるものだが、さすがは兩人、早くもパッと離れて相對すれば、此の一進一撃に兩者の傷はいよ／＼血を噴き、更に流れて胴體を染め、共に血みどろ汗みどろ、而かも飽く迄戰はんとする攻撃に燃ゆる顔面は、物凄くもまた繪の如く、青白き昂奮のうち、焔の如く立つてゐる。

○

次いで第四回戰。緒方は何故か攻撃しない。

『緒方、どうした！』

實は緒方はカウンターの策戰に出たのであつた。自分から攻撃に出ず、敵の飛び込んで來る出端を左手に受けて置いて右手で顎を撲ち伸さうといふのだ。

『瀧澤、それッ！』この時だ、瀧澤は一氣に飛込んで行つた。

まさにそれは緒方の待ち構へてゐた思ふ壺であつた。が、ガーンと緒方の眼はクランだ。またしても、敵の頭が目の下にブツカッたのだ。緒方の眼からは火の玉が出た——イヤたしかに緒方はその思ひだつた。がどうだらう、この瞬間、無意識にグーンと右手を伸して突いたストレート、渾身の力が入つて瀧澤

の左顎を突き飛ばした。

途端、緒方はクラ〳〵ッとした。同時に瀧澤の體は折れるやうに倒れた。

『ア、ノックダウン！』

○

緒方は、危ふく氣が遠くならうとしてハッとわれに返つた時、彼れは自分の策戰圖に當つて敵瀧澤が倒れてゐるのを發見した。

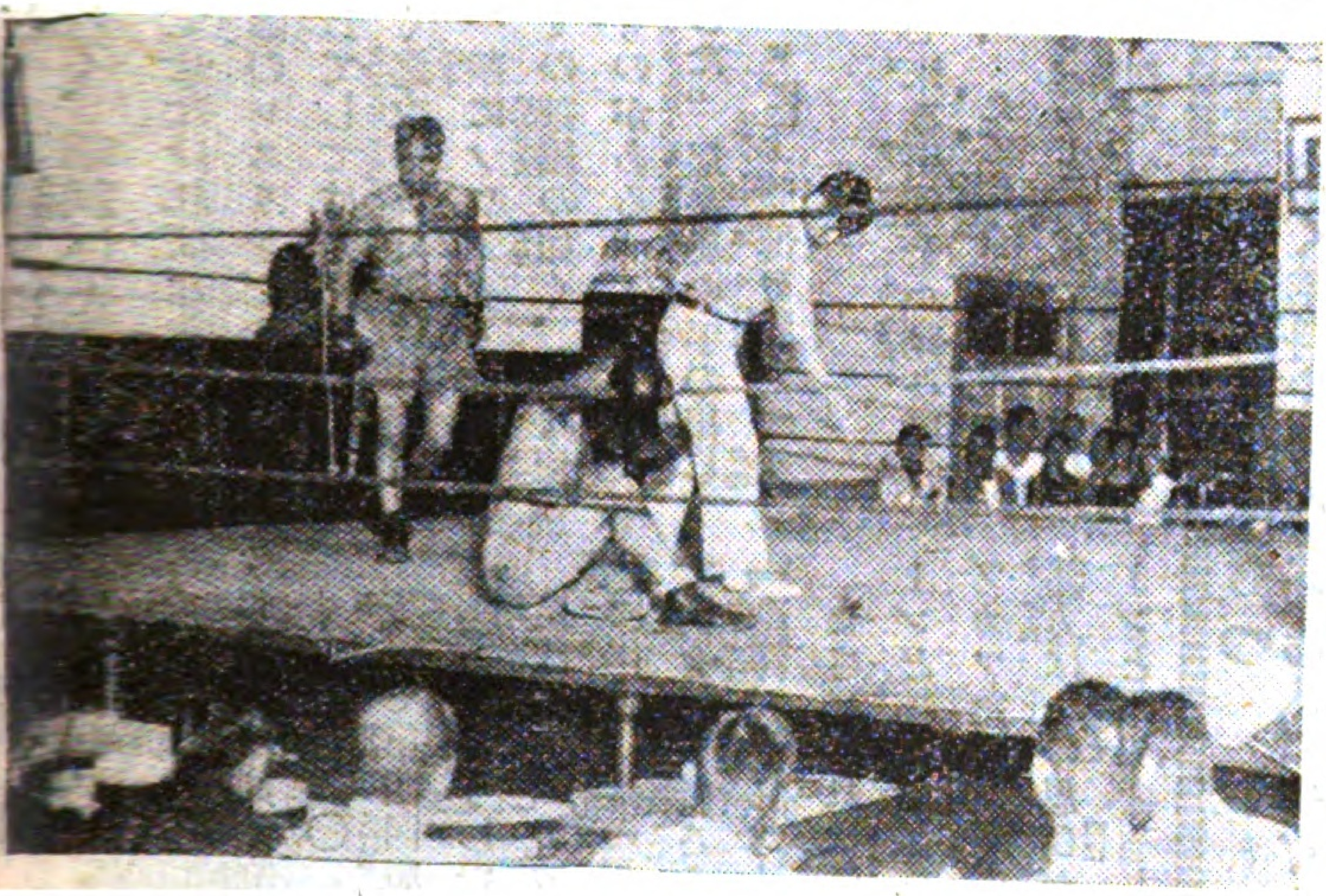
審判は、例の十秒を數へはじめた。

一…二…三……三秒の聲が審判の口を出づる時、リングの繩につかまつて奄奄たる氣息を上げてゐた瀧澤は、見よ！　ガバと起ち上つた。

『オヤ！』

しかし一回のノックダウンぐらゐで立ち上るのは何でもない。黒人拳闘家ジョウ・ジャネットは一試合に於いて、三十二回もノックダウンされたが、倒れて起き、倒れてはまた起き、つひに相手を毆り倒して勝利を得たと云ふ記錄さへある。

今も、瀧澤は、決然として立上つた。



審判はタイムを勘定しはじめた
三秒‥五秒‥八秒‥瀧澤は遂に起てないのか……

『こゝだ！』

こゝを猶豫してなるものかと、緒方は敵に些の猶豫を與へず

ズーン、ズーン……ズーン……續けざまに猛撃三本のストレートを敵の顎に叩きつけた。

瀧澤は倒れた。

審判は、タイム（十秒）を勘定しはじめた。

三秒……五秒……八秒……十秒……あゝつひに瀧澤立てず、うなじをあげて戰友緒方の顔を見上げ莞爾たる微笑を投げた。

『緒方勝てり！』

滿場總立ち、潮の如き拍手はこの兩雄に送られた。緒方はつひに復讐した、宿志空しからず、激戰四回つひに四戰二勝の同成績に漕ぎつけた。

彼れは鮮血點々たる身體を修羅王の如くリングの一隅に立つた。そして、熱汗しとど血に紅き體に大きく勝利のイキをした。

觀衆は、再びこの勝利者に急霰の拍手を送つた。

『緒方！　よくやつた！』

即ち一昨年以來、この二人はいづれも四戰二勝、五角の成績、かの有名なジャック・ブリツトン（ウエルター・ウエイト選手權者）は、英人テツド・リユースと戰ふこと十八回にして一勝一敗の連續、一九一六年から一九二二年に至る六年間に、この二人の間には、十八回にわたつてウエルター・ウエイト選手權の爭奪戰が行はれたと云ふ。知らず、緒方瀧澤の戰ひもまたこの例にならふか。兎まれ彼等は日本拳鬪の開拓者である。

終りに、拳鬪試合に禁じてある規則を書いておく。

一、ベルト以下（臍下）を打つこと、
二、ノツクダウンから起上らうとする相手を打つこと、
三、相手に抱きつき加擊すること、
四、相手を抑へつけること、
五、腕の内側又は肘で打つこと、
六、頭又は肩などで相手を打つこと、
七、グローブを開いて掌で打つこと、
八、角力のやうに、ロープ（繩）に押して行くこと、
九、故意にダウン（倒れる）すること、
十、罵聲を浴びせること、
十一、故意に後頭部及び腎臟の上を打つこと、
十二、レフエリー（審判）の命に應ぜぬこと。

（終）



人間の強味を遺憾なく發揮した

名物男 傘の親分

阪中紅潮

大阪天王寺區堂ケ芝の住人で、本名杉山政吉といふよりも、『傘の親分』で通り、この邊一帶の興行小舍、露店商人は固より、これら全國同業者間の元締格として、親のやうに敬慕せられてゐる名物男がある。

この男、不具も不具、兩手とも無いばかりか、僅かに完全な左足一本で奇蹟的に生きてゐるといふところから、誰いふともなく『傘の親分』。それでゐて雨と降る人間苦の限りを味ひ、しかも人のため世のため骨を吝しまぬその人物が、一層この『傘』の異名を輝かしいものにしたのである。

この男だとて生れおちるときからの不具ではなく、立派な五體をもつて生れたのだが、家が貧しいので、好きな學問も中途で止して、早くから機械工として働いてゐるうち、大切な右手を犧牲に供してしまつた。

片手を失つた彼れは、人の情にすがつて、石鹸、筆墨、賣藥などの行商をしたり、露店の香具師となつてみたりしたが、生來の負けじ魂は、密かに景氣のいゝ興行物に目をつけて、早くも何事かを企てようとしてゐた。しかし、資本どころか、母親一人を抱へて、其日の糧にも困る貧乏ぐらし。かてゝ加へて、右手の不完全な治療が、禍をなして、左手までが丹毒に冒かされ、病勢は日に〳〵つのるといふ慘めさ。だが、彼れは決して怯まなかつた。貧苦と病患に喘ぎながらも、彼れは人知れず口藝の修業に必死になつてゐたのである。果然、左手もまた切斷されるの已むなきに至つた。こゝでいよ〳〵覺悟をきめた彼れは、二三の人を語らつて、口藝を看板に緣日の小舍を張ることになつた。細字や武者繪の口書き、口細工、桶の箍入れ、かうした口藝を見せて木戸錢を取るのだが、彼れはこの時もう立派な藝人になつてゐたのである。

この珍らしい藝人は、意外の人氣と同



生活戰場の闘士

情とを得て、興行はまづ上々の出來であつた。そこで彼れは、他の見世物などと一座し、太夫兼興行主として各地を巡業して歩いた。母を思ひ子を案ずる母子は、かくて旅にまで苦勞を共にした。

かうしてやうやく生活の路がひらけたかと思つてゐると、三度び不幸が彼れを襲ふの災厄に會した。右足が神經痛で激しく痛み出したのである。彼れはなまじひに不自由な右足が、どれだけ藝を妨げ、捨身の技を阻むことかを思うて、醫師に切斷を希望したが、その無謀をいましめられ、止むなく彼れは或る信念のもとに右足を一切使はぬことに決意した。

さうして右足が病的に萎縮して、最早何の役にも立たなくなつた時に、彼れは初めて『傘』の繪を看板に、綱渡り、足の曲藝などを口藝に加へ、如實に『傘男』の評判を恣にすることになつた。

不幸を不幸とせず、不幸を利用してここに活路を見出さうとする彼は、まことに勇敢なる生活戰場の闘士といはねばならぬ。

母がまづ安心して此世を去ると、彼れは稼ぎ溜めた蓄財の全部を抛つて、前後三ヶ所に亙り大阪に於て二輪加、萬歳、劔舞、江州音頭の小舍をかけた。その後種々の沿革こそあれ、この種興行の小舍掛けは、實に彼れが草分けで、今高級萬歳の一流どころで幅を利かせてゐる某々なども、その昔は彼れの傘下で働いてゐたものである。

藝人として世に處すること二十年、艱苦奮闘の努力は酬いられて、『傘』の藝は天下一品の折紙を附けられ、到るところに好評を博すると共に、多年辛苦の間に磨き上げた彼れの人德は、やうやくこれを藝人社會の仰ぐところとなり、彼れが老いて斯界を隱退する時分には、大小の同業者は招かずして『傘』のもとに靡いた。かくして、彼れは見世物興行の元締格として、樂隱居の身となつてゐるのである。

今や、彼れは六十三歳にして、起居他の助けをこそ借れ、その傘下に衣食するもの少からぬと共に、よく貧民を賑はして、その餘生を樂しみつゝあるのである。（をはり）



二宮尊德

武者小路實篤
尾竹竹坡畫

先づ無一物になれ

或る日金次郎の處へ眞壁郡辻村の村長の源左衛門と、同郡の門井村の村長の藤藏とがたづねて來た。二村とも旗本の齋藤某の領地なのだが、齋藤某は負債が多いので、來年の租稅まで今年中に納めろと云ふやうな有様で、何とか理由をつけては土地の人の財をとりあげること許り考へてゐる。それで住んでゐるものに逃げ出すものが多く、土地はますく〳〵荒れ、貧乏のどん底に落ち入つてゐた。村長の二人はそれを心配して、何度も事情を訴へて、あはれみをかけてもらはうとしたが、いつもききいれられず、ますく〳〵とり上げられる一方だつた。

それで二人はどうすることも出來ず、いろ〳〵考へた結果、落ちつく處は金次郎の事だつた。そして櫻町の人々がどんなに理解ある支配のもとに働いてゐるかを興奮して話しあつてゐる内に、金次郎の下に引越して來た　くな　つた



のだ。そしてそれをたのみに來たのだ。
金次郎は二人の話を同情して聞いてゐたが、彼は彼らしい答へを與へるより仕方がなかつた。
彼は二人が今逃げ出して來たがるのは同情出來た。しかし彼はそれまでに二人に話すべきことがあると思つた。彼はいつも人に持つてゐるものをのこらずすてさすのが好きだ。損をせずに、たゞ都合のいゝ方に走ることを好まない。彼はこの時も、二人に、自分の持つてゐるもののこらずを出來るだけ高く賣つて、それを地頭にさゝげてしまへと敎へないわけにはゆかなかつた。とりにくるものには全部とらしたらいゝではないか、そして無一物から生活のたてなほしをしたらいゝではないかと思つた。その決心のないものは我黨の士ではないと思つてゐた。無一物になればいくら相手がとりたくもとれない。とれる間はいつまでもとるが、とれなくなればすてるより仕方がない。
彼は二人に先づ無一物になることをすゝめ、それでもなほ地頭が無理を云ふなら、又生活が出來なくなるなら、その時、私の處に來たらいゝでせう。必ずあなた達の失なつただけは返してあげる。失なつただけの廣さの土地をわけてあげると云つた。
しかし二人はそれを聞いて感心はしたが、すぐ實行する勇氣はなかつた。
源左衛門は歸つたあと、地頭から求めて來たものを出すのを拒んだ。其處でとう〳〵財産を奪はれて他國に逐ひ出された。しかし金次郎の處へは來なかつた。藤藏の方は持つてゐるものをのこらず賣つて地頭にさゝげる意志を發表しただけで、用金を催促にきたものがおどろいて歸つていつた。全部とり上げるだけの勇氣はなかつたのだ。それで藤藏は無事に生活をつゞけることが出來た。(トルストイの無抵抗主義を實行することを尊德は實地において知つてゐた)
金次郎の覺悟があれば何も恐れるものはないのだ。しかしその覺悟を萬人にのぞむことは無理である。



事の成否はその人に存す

矢張り眞壁郡に靑木村と云ふ村があつた。石高八百五十石

で、旗本川副某の領地だつた。

昔は公料で元祿時分には百三十戸も民家があつて、相當に賑はつてゐたが、川副氏の領地になつてから、川の壞れるのを直す費用が出なくなつて、水田がだめになり、皆やけになつて居た。

それで田に茅がはえて原に化し、其處に火がついて三十一軒の家がやけてから、二十九軒きり民家がなくなり、ある旅人がかう云ふ歌をよんだ。

『家ありやすゝきのなかの夕烟』

其處で其處の村長が、どうかしてこの村をよくしたいと思ふやうになつた。さう思ふと第一に頭に浮ぶのは金次郎のことである。

村長は名を館野勘右衛門と云つて、眞面目な男だつた。それで村の人をあつめて、二宮金次郎樣のたすけをかりて村を再興することをおたのみしようと云つた。皆元より賛成した。

勘右衛門は『二宮と云ふ方は眞心をもつておたのみしないときいては下さらない方だ。皆さんはそれは御承知でせうね』

『承知です』

それで皆一心一體になつてお願ひすることにきまつたが、金次郎にたのむ前に先づ地頭のゆるしを得ておく必要があるので、すぐ勘右衛門は上京して川副氏にその由を話した處川副氏も喜んで承諾し、用役の並木柳助をよび、自分で手紙をかいて金次郎にそれをわたしてたのむやうにと云つた。

それで勘右衛門も大いによろこび、柳助や他の村の代表と一緒に櫻町へ行つて金次郎に再興の方法をきいた。

金次郎は云つた。

『君達は水がないと云つて田をあそばして何にもしない。水がなければ畑としてそれをたがやせばいゝのに、それさへしようとしない。よく生かせば田よりも畑の方がとくな位ゐだ、田は一作切り出來ないが、畑なら二毛作が出來る。それをしないのは君達が働くのをいやがつて怠けてゐるからだ。私の道は勞苦して働く道だ。だから怠けもの、君達は私の云ふことはきくことは出來ない。君達の村の衰へるのは當然なことだ。自業自得だ、私の力ではどうにもならない。君達がいくら來てもそんな怠けもののあつまつてゐる村はどうすることも出來ない。二度ともう來ないでほしい』

『どうぞそんなことをおつしやらないで、私達は心を入れかへて之からは本氣になつて働き艱苦にたへますから、どうか御助力下さい』

『だめだ、口さきでそんなことを云つても、又今そんな氣になつたつて、すぐ又なまけるにきまつてゐる。怠けるくせがつきすぎてゐる、そんな村はどうにもならない、だから今のまゝに

ほつたらかしておく方がいゝ』

『いゝえ、私達はどんな苦勞も辭しませんから』

『君達はどんな苦勞も辭さないと云つてゐながら、やさしいことーつしないではないか』

『あなたがおつしやつて下されば、どんなことでもいたします』

『きつとか』

『はい』

『それなら、まづ君達の畑にある茅を全部かつてとゞけてほしい、そしたら相當の値打で買つてあげる。茅があるので火事が出、家がやける恐れがあるのに茅一つ刈らうとしないやうな心がけではどうすることも出來ない』

『きつと刈つて參ります』

『それなら出來るだけ早く刈つて持つて來てほしい』

『承知いたしました』

勘右衞門等は歸つて來て、皆に云つた。

『茅を出來るだけ早くかれ、そして二宮樣をおどかして上げろ。私達が怠けものでないことを示さなければいけない』

皆、夢中になつて茅を刈り出した。朝早くからくらくなるまで、そして刈りも刈つた、千七百七十八駄刈つた。

其處で金次郎の處にそのことが報告された、金次郎は人をやつて其數を見させ、普通より高い値でそれを買つた。

皆大よろこびをした。

『本當に早く刈ればよかつた、火事にあはずにもすめたのだ。どうして氣がつかなかつたのだらう』

さすがに金次郎の着眼はするどいと皆感心した。

御禮に勘右衞門が出かけると、金次郎は云つた。

『あなたの村で雨のもる家はありませんか』

『ないどころですか、大がいの家はもります。食ふ事でさへむづかしいのですから』

『社の家根はどうですか』

『矢張りもります』

『それはいけない。社は大事にしないといけない。それでは早速、神社や、民家の家根をなほして上げますから、わるい家をしらべて知らして下さい』

『畏まりました』

勘右衞門達は歸ると、すぐ家根のもる家や、社をしらべ、すぐそれを金次郎に報告した。

金次郎はすぐ物井の村長をよび、

『青木村の神社や、民家の家根をすぐふくやうにして下さい、金は私が出しますから』

物井の村長は金次郎の性質を知つてゐる。

すぐ大勢をつれて出かけて、片端から家根をなほした。

青木村の連中はびつくりした。それと同時に喜んだ。そして二宮金次郎の處へあがつた。

『それは私の志にすぎません。しかしあとはもう君達でいゝやうにやつたらいゝでせう。私のやり方は難しくつてあなた達には出來ないから』

『いえ、どんなことでもやります』

『それなら開田の仕事に全力をおつくしなさい。それが出來たら、私が骨折つてこはれた堰をなほして水が田十分に入るやうにしてあげますから』

勘右衛門達はすつかりよろこんだ。

『ありがたうございます』

と心からお辭儀した。

そして村へ歸つてから、大よろこびで皆にその話をした、

皆はこをどりしてよろこんだ。



『それはよかつた。それはよかつた』

そしてお互に勵ましあつて荒れ放題、荒れた土地を熱心に開墾し出した。

信じるもの丶力は強い。こんなことをしてゐても水路が出來なければつまらない、そんな疑ひは彼等にはなかつた。金次郎の信用をおとしては大變と思ひ、又金次郎に輕蔑されることは不名譽に思ひ、又云はれる通りすれば救はれると云ふことを信じ切つてゐたから働くのに張合があつた。希望があつた。又働き出して目に見えて美しく開墾されてゆくのも愉快だつたにちがひなかつた。

そして大部分開墾が出來たのを聞いて金次郎は始めてやつて來た。櫻町は金次郎を信じなかつたので七年たつても思ふやうに仕事がはかどらなかつた。青木村の人は金次郎を信じてゐたからごくわづかの日數で見ちがへるやうによくなつた。

金次郎は丁寧に觀察してよろこんで云つた。

『今迄の皆さんとはまるでちがつて、今度は實によく皆さんが働かれたので、こんなに早く開拓が出來たのです。私はこんなうれしいことはありません。大地は正直です。ほつたらかしておけば荒れるのは當然です。



皆さんが働けばこんなに立派にもなるです。働くと働かないのは白と黒とのやうにちがひます。この調子で怠らなければ再興は僅にわけないことです。それでは約束の通り堰をなほして十分水が水田に入るやうにしてあげませう』

皆、勿論よろこんだ。

金次郎は櫻川の水勢を調べ、東山へのぼり必要な木と石のあるのを調べ、そして出來るだけ多くの人をあつめた。近村の人も雇つた。そして云つた。

『堰をつくるのは早くやらなければいけない、いつ大水が出ないとも限らない、天候は人爲でどうする事も出來ないことだ。それで非常な力で働いてもらひたい。そのかはり一日米一升二合、錢二百が今のきまりだが、今度の仕事はいつもとちがふので二朱あげる。力の足りないものは半日働くことにして一朱あげる。そのかはり怠けて働かないものは邪魔になるからすぐことわる。半日も働けない人も今度は斷らなければならない』

皆、金が多くもらへるので大よろこびした。そして金次郎の指圖にしたがつて東山から岩や材木をどん〱はこび出して櫻川の兩岸につみあげた。仕事は實にはかどつた。

そして金次郎は毎晩、酒のみは酒を、甘黨には餅をふるまつた。

岩や材木が勢ひよくすべて運ばれた。

川幅一ぱいに茅ぶきの小屋をつくらした、そして茅を十分に乾かした。

皆は何をするのかわからなかつた。しかし云はれたまゝ、不思議に思ひながらそれをつくつた。やがてそれが出來た。すると金次郎は云つた。

『誰かその家根にのぼつて家をつないだ繩を切れ』

だが誰もこはくてのるものはなかつた。

『どうして家根にのつて繩を切るものがないのか』

『でももし繩を切つたら家が沈み生命を失なふかも知れませんから』

『よろしい、君達が怖くつて出來ないなら私がする』

金次郎は家根にのらうとした。

皆『あぶない』と云つてとめた。

『あぶないことを君達にしろと誰が云ふか』

金次郎は平氣で家根にのつて無雜作に繩を切つた。小屋は非常な勢ひで流されて堰のこはれた所にひつかゝつて沈んだ。金次郎は少しもおどろかなかつた。萬事が彼の思ふ通りになつたからだ。

彼は岸へ上るとすぐ云つた。

『石や材木を家の上になげろ』 皆興奮して石や材木をなげた。水は完全にせきとめられた。

その上に堰をつくらした。そして大小の水門をつくらせ、少しの出水には小門をあけ、大水の時は大門をあけさせるやうにした。五十日はかゝると人々が思つてゐた仕事が十日で出來金も今迄の半分もかゝらなかつた。そして丈夫なことも無比だ

つた。
（金次郎は勞働するものを厚遇することがどんな結果になるかを實によく知つてゐた。その點フォードの先驅者とも云へる。元よりフォードよりは精神家であるが）
働くものたちはよろこんで極樂普請だと云つた。
それが出來上ると金次郎は水路をなほし、水を田に導いた。水は勢ひよく、かれ切つてゐる田を片端から滿して行つた。人人は歡呼した。
其處で金次郎は村の内で孝悌篤實善良なものを投票させ、それを賞し、貧しい人達を救助し、道をつくり、橋を架し、農具や、農馬を貸し與へたりして、村の面目をすつかりかへてしまつた。
金次郎の血は青木村のすみ〴〵まで通ひ出した。村の復興は目に見えて成就した。
櫻町の經驗がこゝで生れたのである。
元よりこゝには勘右衞門のやうな男がゐたからでもある。
金次郎の弟子の高慶はかう云つてゐる。
『里正勘右衞門のこの村にあるのはたとへば泥中に蓮のあるが如く、勘右衞門なくば先生亦何ぞ良法をほどこすを得ん。古より事の成否は要するにその人に存す』云々。
金次郎はよき人を得たのだ。又勘右衞門はよき師を見つけたのだ。（つゞく）

花嫁花婿　空中新婚旅行

川村みのる



○白川雲男君は、新婚旅行を飛行機ときめた。蓋し天は空々漠々、誰に氣兼ねもなくこれ位完全に二人きりの世界はあるまい。

日比谷大神宮で目出度く式を濟ました新郎新婦は、直ちに自動車を飛ばして立川原頭に着くと、鳩ポツポのやうな單葉上翼式の飛行機が頭丈な胸を張り、銀翼を擴げて歡迎してゐた。早速雲男君は細長い軀を折疊んで平和の象徴、鳩ポツポの胸の中に新夫人光子の君の手を取つて仲よく搭乘する。けたたましい爆音と共にプロペラが回轉を初めると、『さやうなら、御機嫌よう』の聲が見送人の間から湧き起る。仲媒人の横田さんなどは頭は禿げても元氣はモダーン。股を張りさけるばかりに踏廣げて、飛行機に飛つきさうな恰好『さア飛ぶぞヤツー　飛んだ。萬歳！』と大はしやぎである。

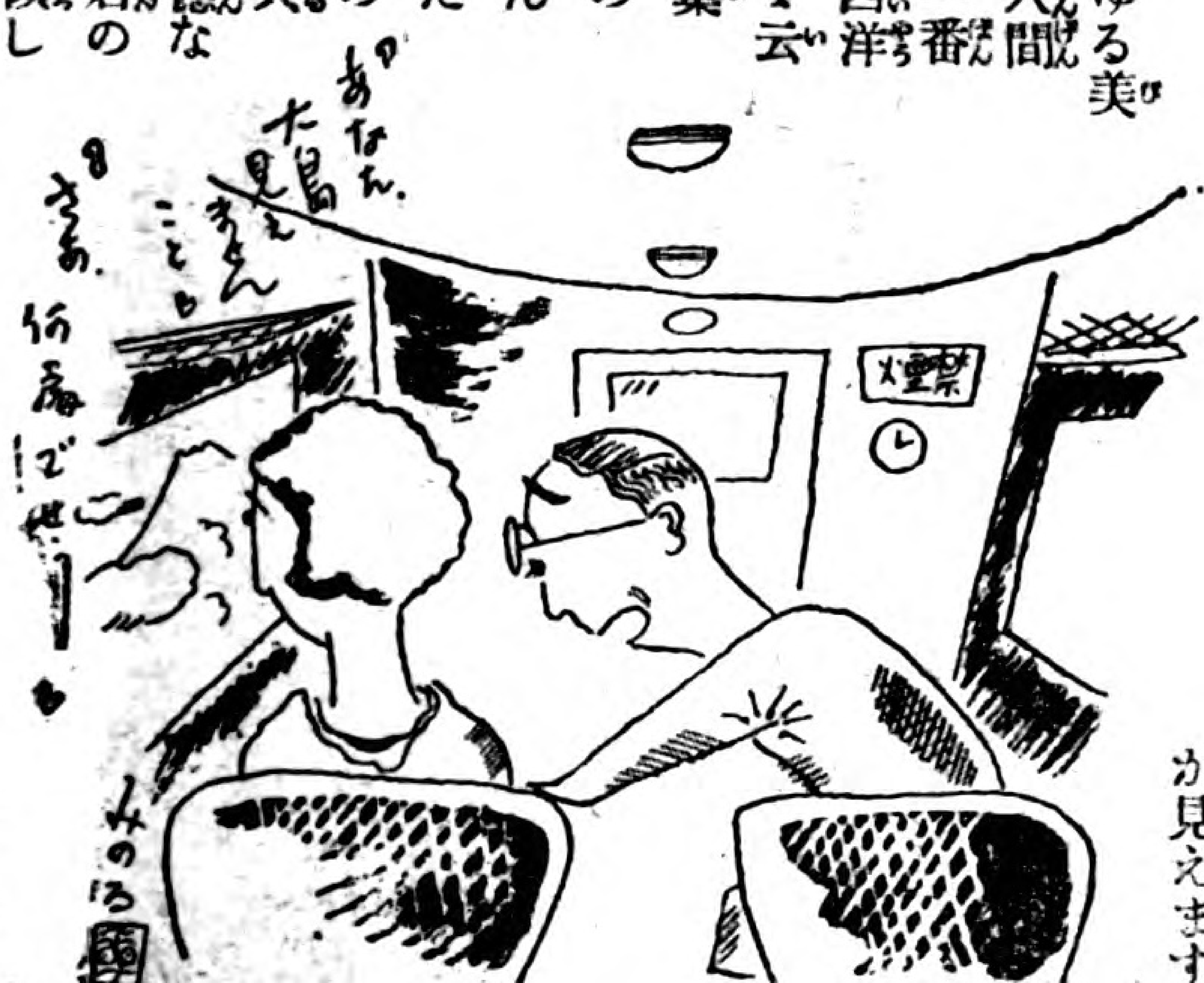
滑走約百五十米、纔てふんはりと機が浮いたかと思ふと、大地はドドドドと奈落の底に落下して行く。ある空點まで上騰すると、目的地のコースに向つて急旋回。八王子、馬入川、大山、酒匂川、相模灣、速い速い、迚も速い。正に高速度パノラマだ。しかも上空から俯瞰すれば山川の美などあつたものでない。山はいたづら小僧のカサツパ頭のやう、川は食べこぼしたウドンの一筋にしか過ぎない。

『あらゆる美の中で人間の美が一番だ』と西洋の誰かゞ云つた言葉が、傍の光子さんの馥郁たる香料の匂ひと共に、遺憾なく雲男君の胸を占領してしまふ。

いつの間にか光子の君の恐怖感も緩和されて、度胸が出たらしく

『あなた、大島は見えませんこと』との御宣託だ。飛行機も速いが、現代的妻君心理のテンポも速く、モウあなたと御出なすつた。

『さア、何處でせう。島の大島は見えないが、大島絣のやうなものが見えますね』



耕地整理をした劃然たる田畑が、雲男君には大島紬に見えるらしい。歌留多の源平戰のやうに見えるのは街の家並にして、鐵道線路を匍つてゐる汽車は毛蟲のやうである。

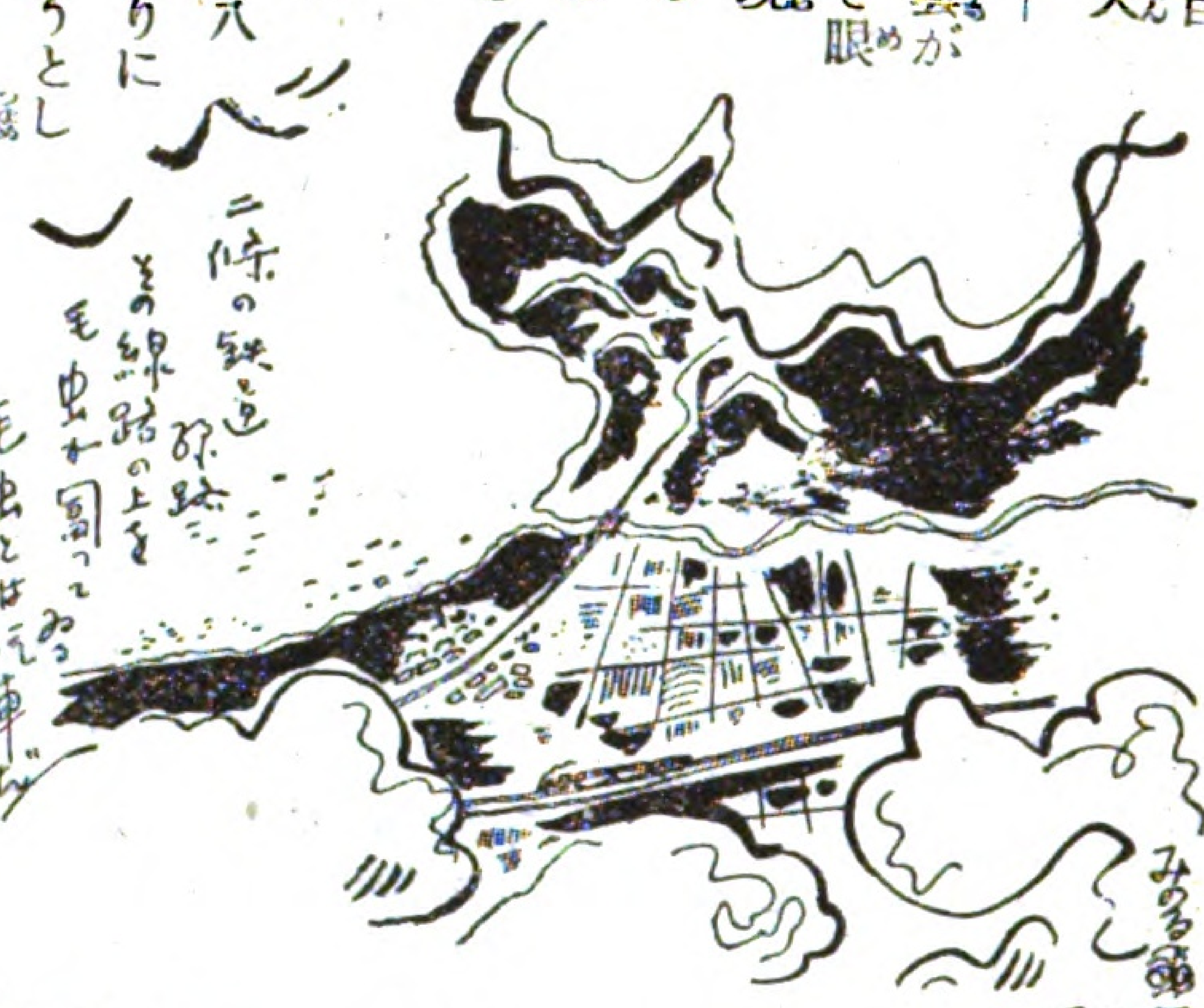
二十七分弱にして箱根にかゝり、二子山も蘆の湖の眞上も密雲重疊、——機は上空へ上空へと雲を凌がうとする。白雲は燦然と陽にキラメキ

ながらジャズならぬプロペラの爆音に、ラララ……と亂舞をつゞけてゐる。

千五百米の天上界。——ふと雲が千切れて眼の前に現はれたのが富士の神山。『どうだね』と云ひたさうだ。八合目あたりに衝突しようとして機は巧みに燕のやうに外れて行く。ハラハラさせられる。

だが、懸命の冒險は、いやが上にも互の魂を渾然融和させずには措かない。

昔、仇同志が同じ船に乗り合せ、大暴風を食つて仲直りしたと云ふ話がある。況んや新郎新婦の冒險に於てをやだ。



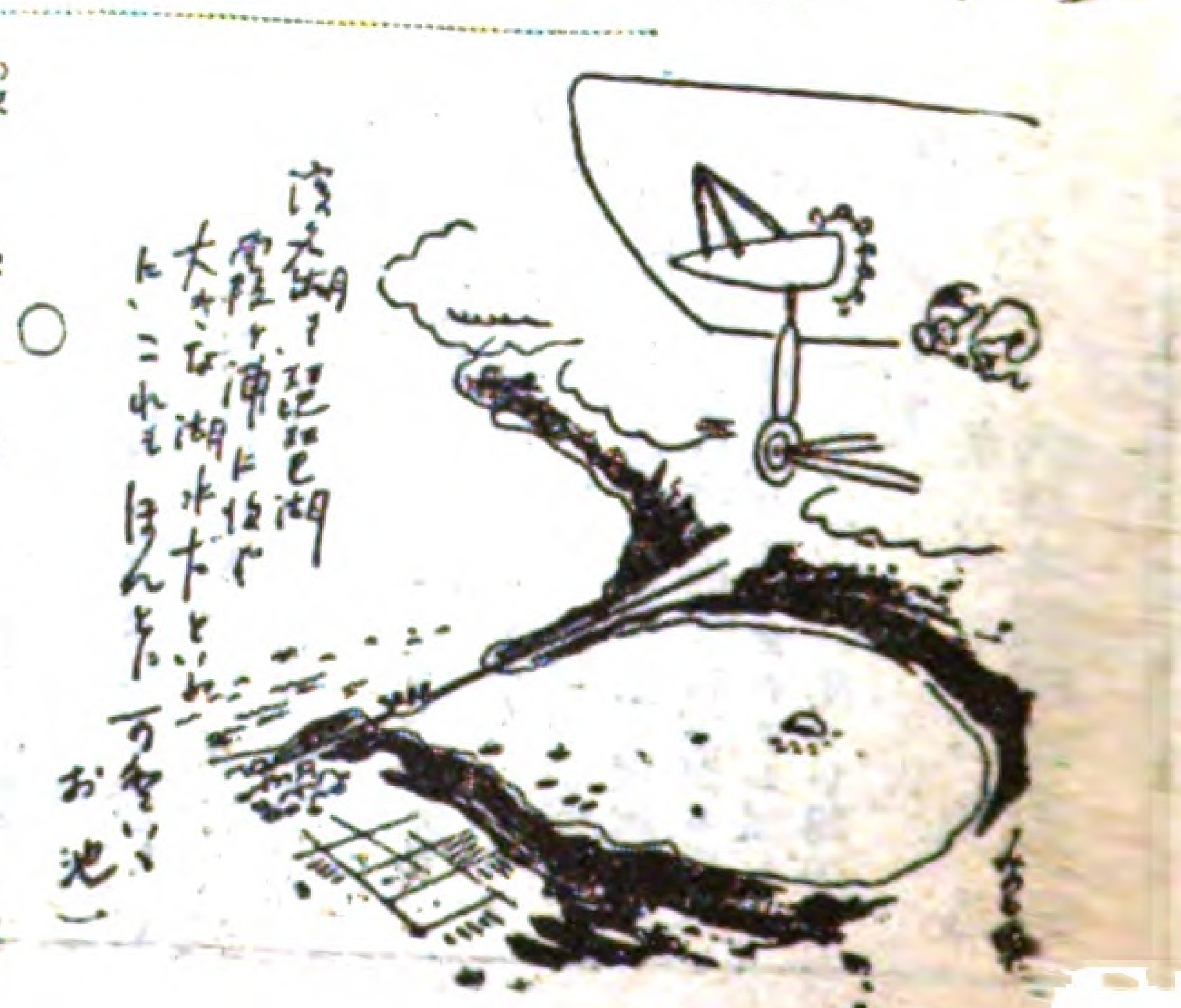
三保の松原は百八十米と云ふ低空飛行。羽衣も昭和の世には天女と同伴だ。しかもその天女の光子さんは太鼓を叩くかはりに、コンパクトで、何かのはずみに化粧くづれのした頬つぺたを叩いてござる。

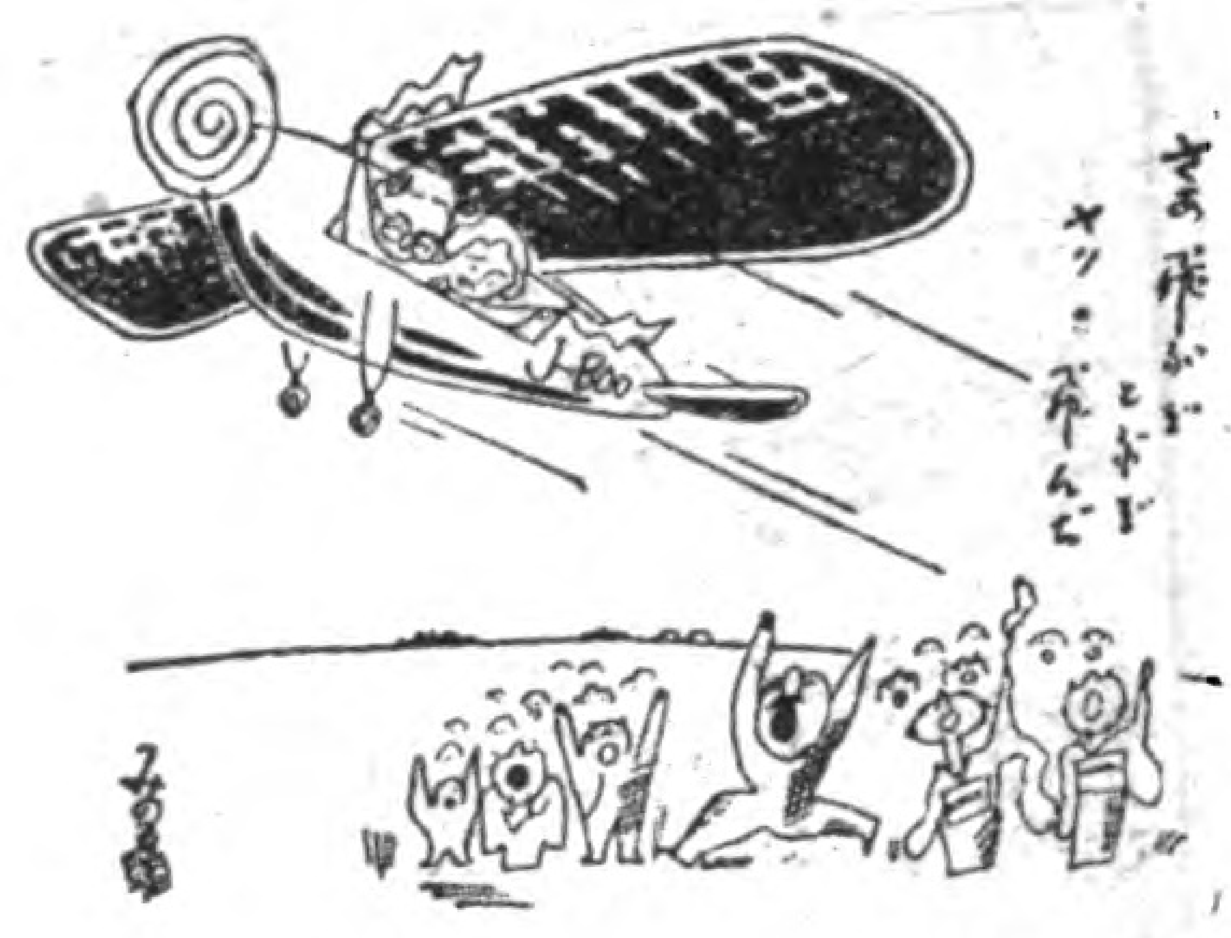
一時間經過。二人きりの天上界と思ひきや、向ふから上りの郵便機サムソンが泳いでくる。『無粋な郵便奴、犬に食はれて死んぢまへ』と思ふ間もなく、電のやうにすれ違つてしまふ。

クリーム色の一筋の細い紐は東海道、鉛色のマッチを御丁寧に並べたのが靜岡市街。

『まア、あなた、可愛い』

光子の君の白魚のやうな指の行方に視線を落せば、盆景のやうな濱名湖だ。琵琶湖、霞ヶ浦に次ぐ大湖水もホンの可愛いお池である。池に浮んだ木の葉は舟で、白い條を曳いてゐるのは水蟲のやうなモーターボート。辨天島は一寸摘んで食べて見たいほどの蜜豆だ。音に聞く遠州灘に渦巻く怒濤も、大空から見下ろせば鰯の刺身





花嫁（はなよめ）
花婿（はなむこ）

空中新婚旅行

川村みのる

○白川雲男君は、新婚旅行を飛行機ときめた。蓋し天は空々漠々、誰に氣兼ねもなくこれ位完全に二人きりの世界はあるまい。

日比谷大神宮で慶く式を濟ました新郎新婦は、直ちに自動車を飛ばして立川原頭に着くと、鳩ポツポのやうな單葉上翼式の飛行機が頭丈な胸を張り、銀翼を擴げて歡迎してゐた。早速雲男君は細長い軀を折疊んで平和の象徴、鳩ポツポの胸の中に新夫人光子の君の手を取つて仲よく搭乘する。

けたたましい爆音と共にプロペラが回轉を初めると、『さやうなら、御機嫌よう』の聲が見送人の間から湧き起る。仲媒人の横田さんなどは頭は禿げても元氣はモダーン。股を張りさけるばかりに踏廣げて、飛行機に飛つきさうな恰好『さア飛ぶぞヤッ！　飛んだ。萬歳！』と大はしやぎである。

滑走約百五十米、軈てふんはりと機が浮いたかと思ふと、大地はドドドドと奈落の底に落下して行く。ある空點まで上騰すると、目的地のコースに向つて急旋回。八王子、馬入川、大山、酒匂川、相模灣、速い速い、迚も速い。正に高速度パノラマだ。しかも上空から俯瞰すれば山川の美などあつたものでない。山はいたづら小僧のカサツパ頭のやう、川は食べこぼしたウドンの一筋にしか過ぎない。

『あらゆる美の中で人間の美が一番だ』と西洋の誰かゞ云つた言葉が、傍の光子さんの馥郁たる香料の匂ひと共に、遺憾なく雲男君の胸を占領してしまふ。



いつの間にか光子の君の恐怖感も緩和されて、度胸が出たらしく『あなた、大島は見えませんこと』との御宣託だ。飛行機も速いが、現代的妻君心理のテンポも速く、モウあなたと御出なすつた。

『さア、何處でせう。島の大島は見えないが、大島絣のやうなものが見えますね』

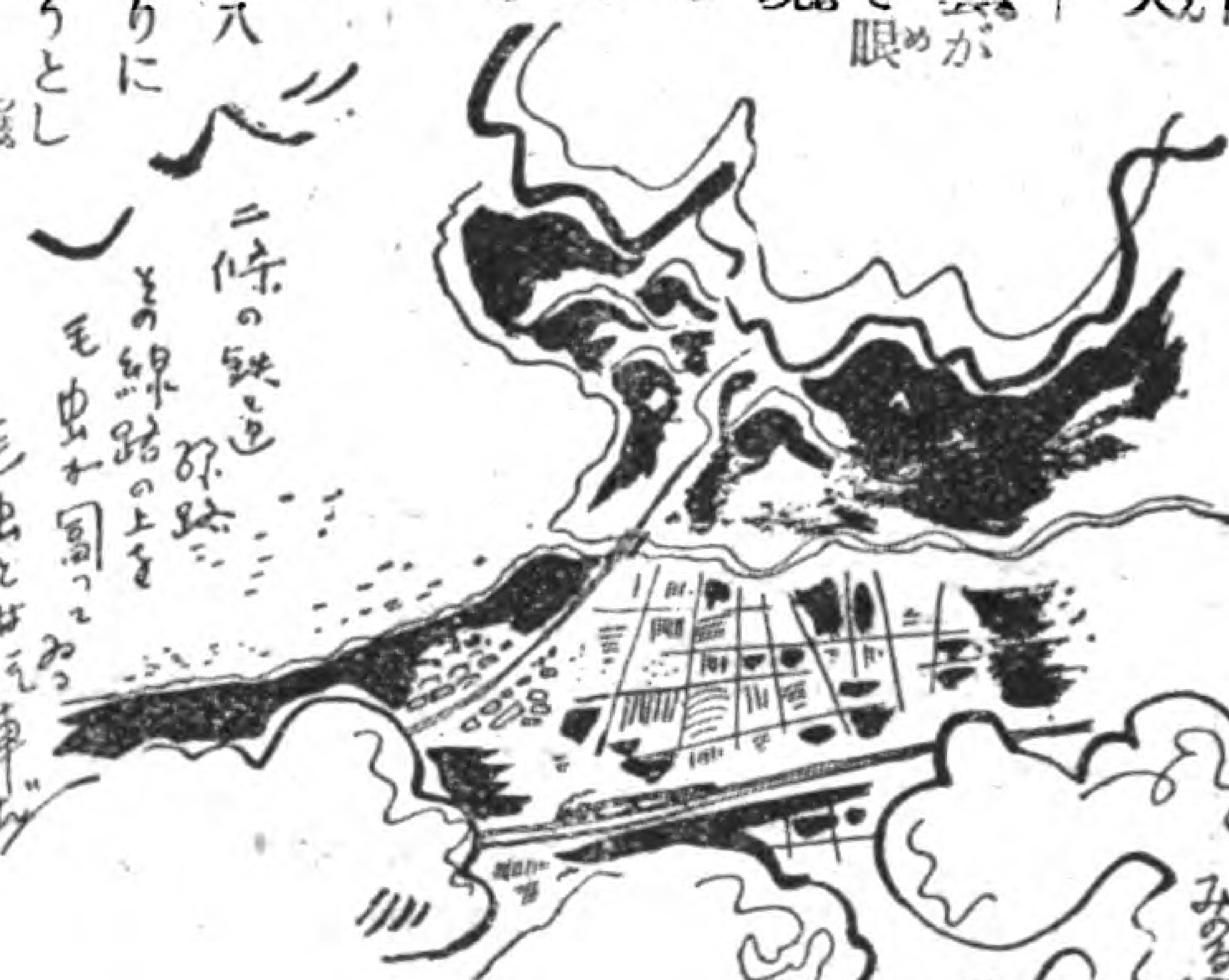
耕地整理をした劃然たる田畑が、雲男君には大島紬に見えるらしい。歌留多の源平戰のやうに見えるのは街の家並にして、鐵道線路を匍つてゐる汽車は毛蟲のやうである。

二十七分弱にして箱根にかゝり、二子山も蘆の湖の眞上も密雲重疊、――機は上空へ上空へと雲を彡かうとする。白雲は燦然と陽にキラメキ

ながらジャズならぬプロペラの爆音に、ララ……と亂舞をつゞけてゐる。

千五百米の天上界。――ふと雲が千切れて眼の前に現はれたのが富士の神山。『どうだね』と云ひたさうだ。八合目あたりに衝突しようとして機は巧みに燕のやうに外れて行く。ハラハラさせられる。

だが、懸命の冒險は、いやが上にも互の魂を渾然融和させずには措かない。昔、仇同志が同じ船に乗り合せ、大暴風を食つて仲直りしたと云ふ



話がある。況んや新郎新婦の冒險に於てをやだ。

三保の松原は百八十米と云ふみゐる[illegible]低空飛行。羽衣も昭和の世には天女と同伴だ。しかもその天女の光子さんは太皷を叩くかはりに、コンパクトで、何かのはずみに化粧くづれのした頬つぺたを叩いてござる。

一時間經過。二人きりの天上界と思ひきや、向ふから上りの郵便機サムソンが泳いでくる。『無粋な郵便奴、犬に食はれて死んぢまへ』と思ふ間もなく、電のやうにすれ違つてしまふ。

クリーム色の一筋の細い紐は東海道、鉛色のマッチを御丁寧に並べたのが靜岡市街。

『まア、あなた、可愛い』

光子の君の白魚のやうな指の行方に視線を落せば、盆景のやうな濱名湖だ。琵琶湖、霞ヶ浦に次ぐ大湖水もホンの可愛いお池である。池に浮んだ木の葉は舟で、白い條を曳いてゐるのは水蟲のやうなモーターボート。辨天島は一寸摘んで食べて見たいほどの蜜豆だ。

○

音に聞く遠州灘に逆巻く怒濤も、大空から見下ろせば鱠の刺身



を並べたほどのうねりだ。

○

機は爆音高く渥美灣、知多半島、伊勢灣、鈴鹿川――龜山指してジャンプをつゞける。『カメ山』と街外れの地上にクッキリと航空標識の文字が眼につく。

さア、此處まで來ると今度は鈴鹿山脈横斷だ。『俺を跨いだら承知しねえぞ』とばかり重疊たる鈴鹿山脈は寢込んだ山賊のやうな形をしてゐる。そこを揶揄ひ氣味に、或は高く或は低く雲を突いて飛びに飛ぶ。お蔭で機の動搖甚だしく、又しても光子の君は恐怖けがついて雲男君にすがり付いて來た。雲男君は唐突に電流の高壓線にまきつかれたやうな軋感。ピリピリ、パチパチ、ピカリ、パチ。丁度、眞下は伊賀の上野、その昔、荒木又右衞門が寄らば斬るぞの亂鬪に、三十六人なで斬りにしたと云ふ地點。昭和の御世は治まりて寄らばピリパチだ。飛行機火事が起らなかつただけがめつけものであらう。



笠置の山も一飛びに、青丹よし奈良の都。大佛殿はサイコロの大きさ。猿澤の池も豆ほどにしか見えない。しかし、春日山、嫩草山と覺しき綠の小山は流石に絶景だ。

○

『綺麗ですわね』といつの間にか光子の君は元氣を回復してゐる。

『綺麗です。だが、やはり人間の方が美しい。殊にあなたなんか――』

『私――オホホホホ』

『アハハハハ』

雲男君は云ひたい事をやつと云ふ事が出來て滿足した。

奈良を後ろに生駒にかかる。ケーブルカーが手にとるやうに見える。肥つた象の尻のやうな丸い傾斜の山を越えると大阪の街だ。ペツペツと毛がはえたやうに見えるのは林立せる無數の煙突である。

機はスラ〱と下向。大阪城を後ろに大きくカーブして城東練兵場、木津川尻に着陸滑走。東京大阪間を僅かに二時間半。すべてが極度に緊張した歡喜と驚異の刺戟的連續であつた。

双方の兩親、仲媒人の横田夫婦に無事安着の電報を打つて、この夜の新郎新婦は寶塚温泉に投宿。新夫人光子の君は、床についても尚且、飛行機に搖られてゐるやうで眠れないと云ふ。そこで合作の一首がなつて、友人數名に繪ハガキを出した。（終）



一行博士

○強力なX光線は壁を通して三町の先迄影響を及ぼす。(X光線を扱つてゐる病院の三町四方は子種が少い)

○木炭はよく濕氣を吸ふ、十貫目の炭の中には一貫二三百匁の水が含まれてゐる。

○太陽の放射する熱量は一年に三〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇億カロリー其二十二億五千萬分の一が地球迄屆く。

○空中から人間が落ちる最大速度は一時間百二十哩、空氣の抵抗のため其以上は速くならぬ。

○大戰に敗れて破産した獨逸國民は勤儉貯蓄の結果、十年足らずで貯金五億圓を突破。

○米國ロスアンゼルス近くの或養鷄場は世界一の稱あり。鷄の數が三千萬羽、それが生む卵の數が毎朝十萬個。

○電燈が一番普及してゐるのは日本、日本が電燈のために消費する電力は一年間に約百萬キロワット。

○東印度の「伽羅の木」は一匁の値段が四圓で世界一の高價な木、香料になる。

○石炭の黑い色が面白くないといふので米國では着色石炭流行、赤色、綠色が大評判。

○四千尋の海底に厚さ五分、中が眞空の大硝子球を沈ると水壓の爲硝子の細い組織を徹して海水が浸込む。

○一九一四年以來獨逸の小學校では新しいピアノを購入してゐない、復興に關する國民總動員の一例。

○人間が六十歲迄に喰た食料品の熱量を炭に換算すると平均一千三百貫、其一部分が血液となり體を温める。

○ロンドンの商業區には晝間は四十三萬六千人が活動してゐるが夜間になると一萬三千人になる。

○ノーフオークの驛長エス・バストー氏は鐵道に奉職する事五十年、昨年退職したが其翌日が彼の最初の休日。

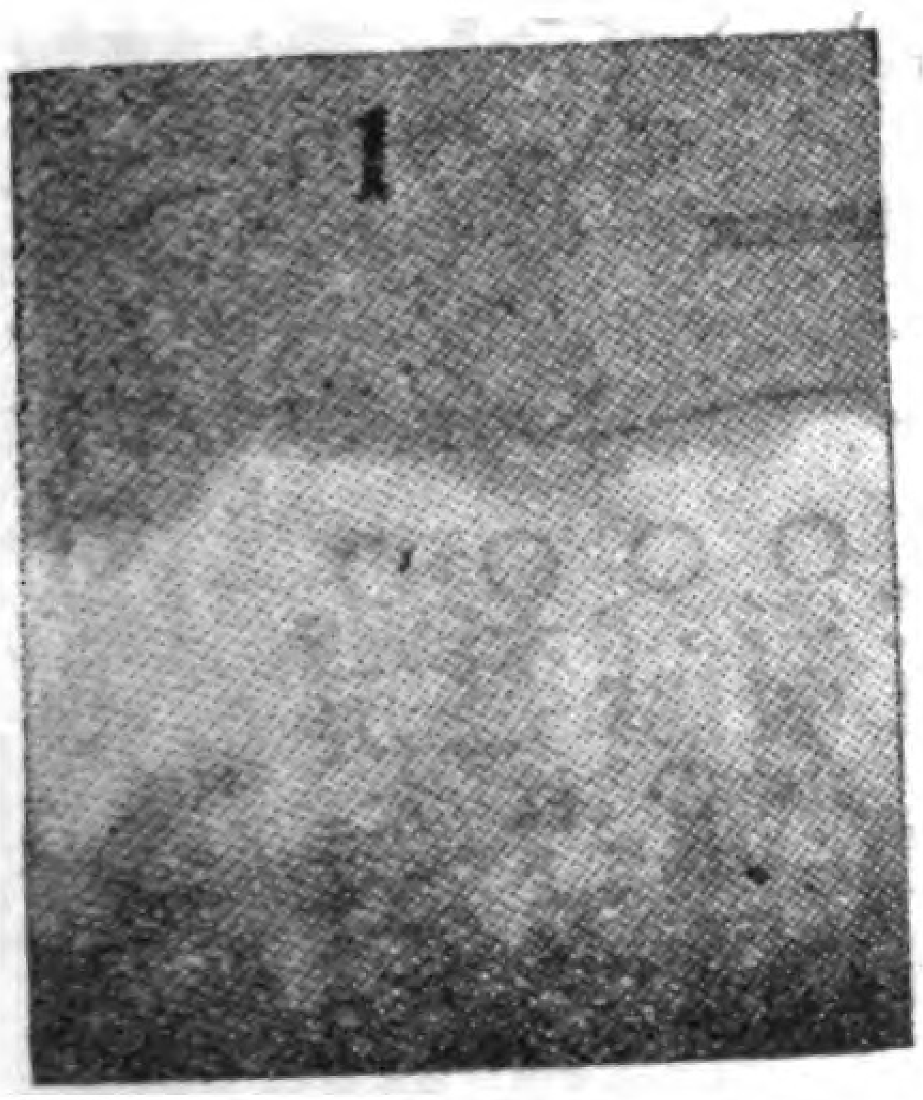
○懷中時計の螺旋は朝捲くに限る。夜捲くと冷い夜氣で收縮した螺旋が一層硬化し不良となつてしまふ。

新文明科学ニュース

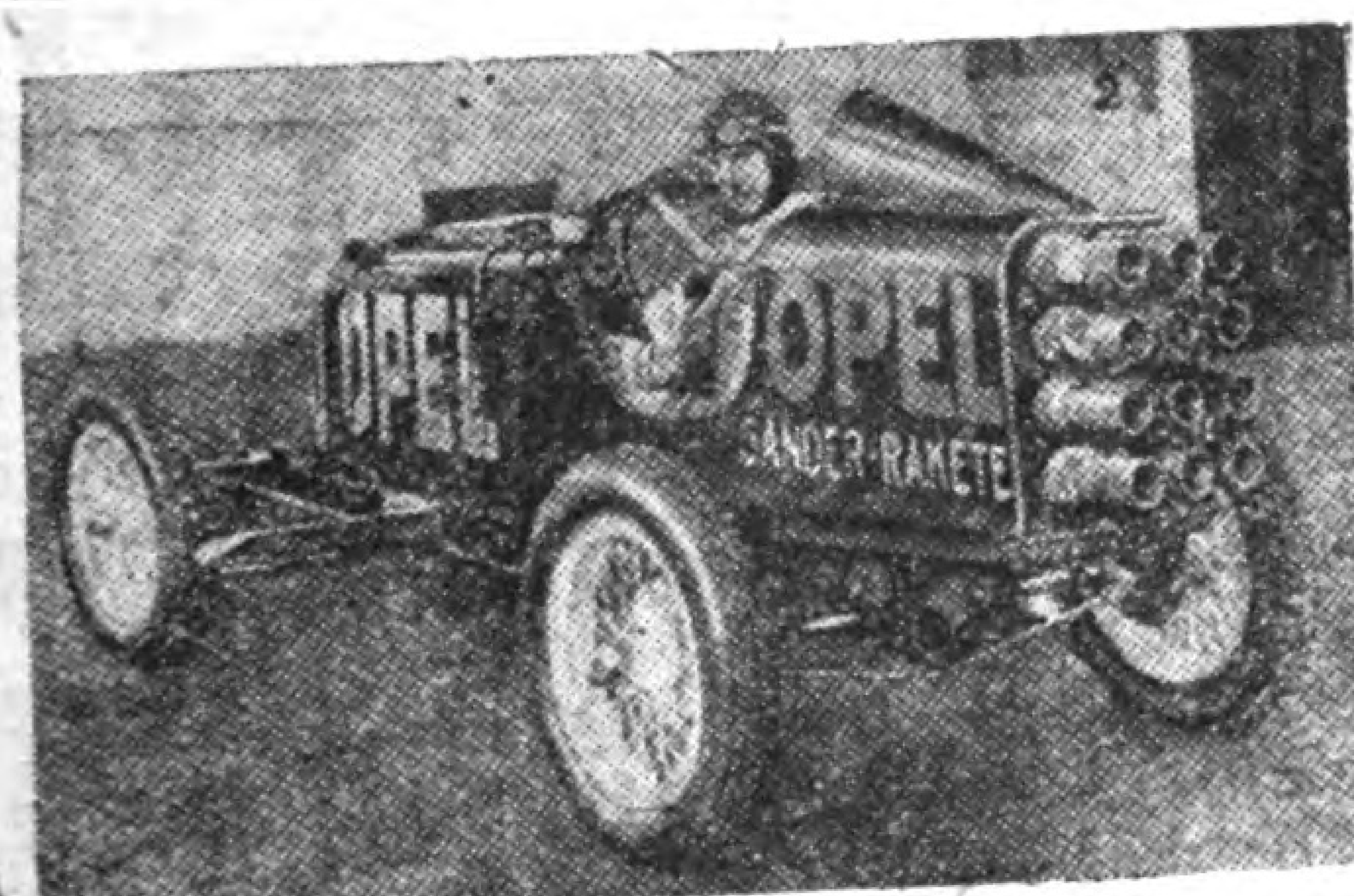
◎火薬飛行機と火薬自動車

小銃なり大砲なりを發射すると、ドカーンと反動がある。

なぜ反動が起るかといへば、火薬が爆發するとガスに變る、その容積が膨脹して細長い銃口から急速度で大氣中に飛び出し、その力で彈丸を遠方へ押出すと同時に、銃口の周圍の空氣に飛び出したガスが突き當るからである。

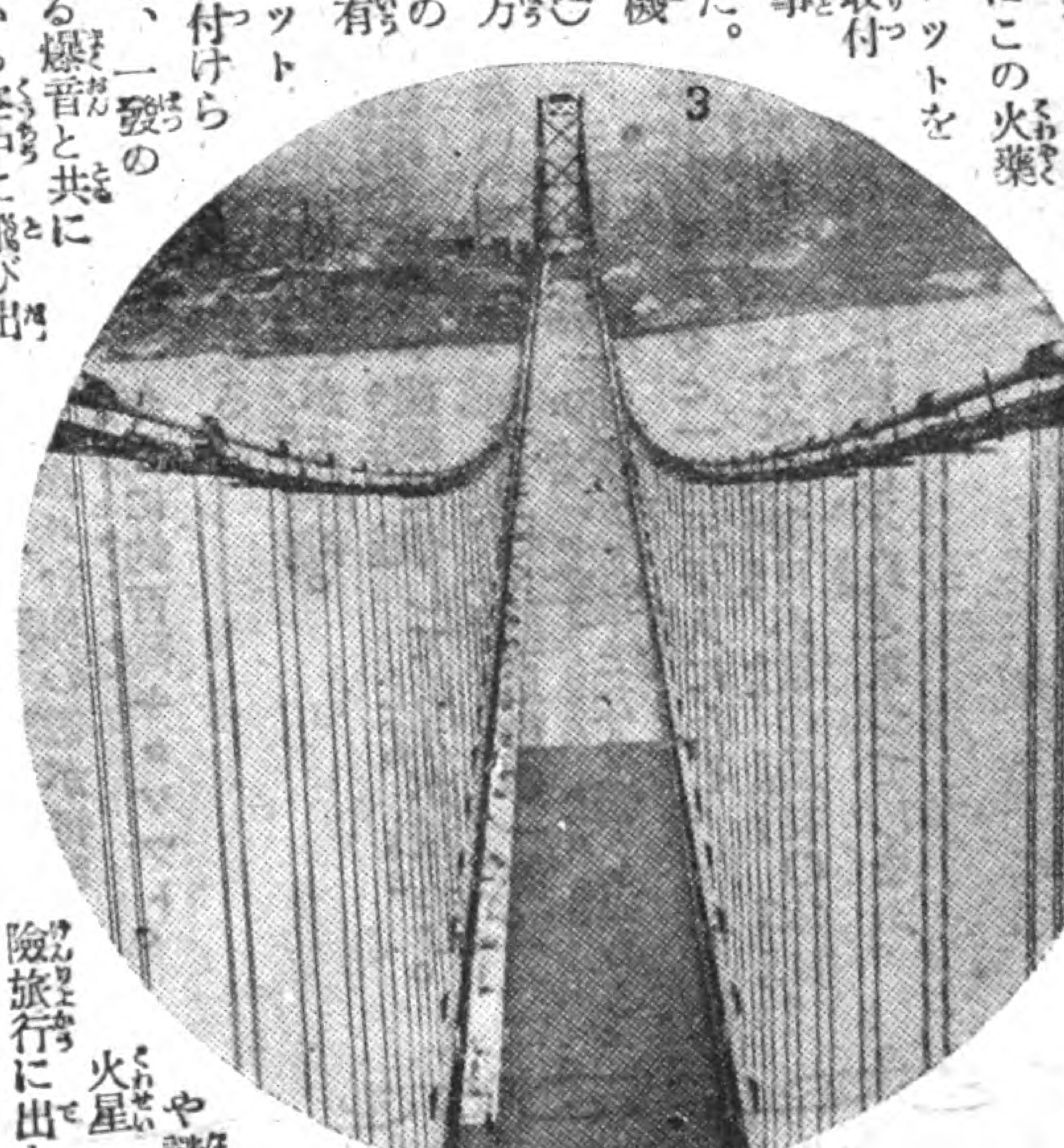


今から三年程前に、この理論を應用して素晴しい速さで走る自動車（第二圖）を獨逸で發明した人がある。發明者のマクス・バリエル氏は、これをロケット自動車と稱してゐる。



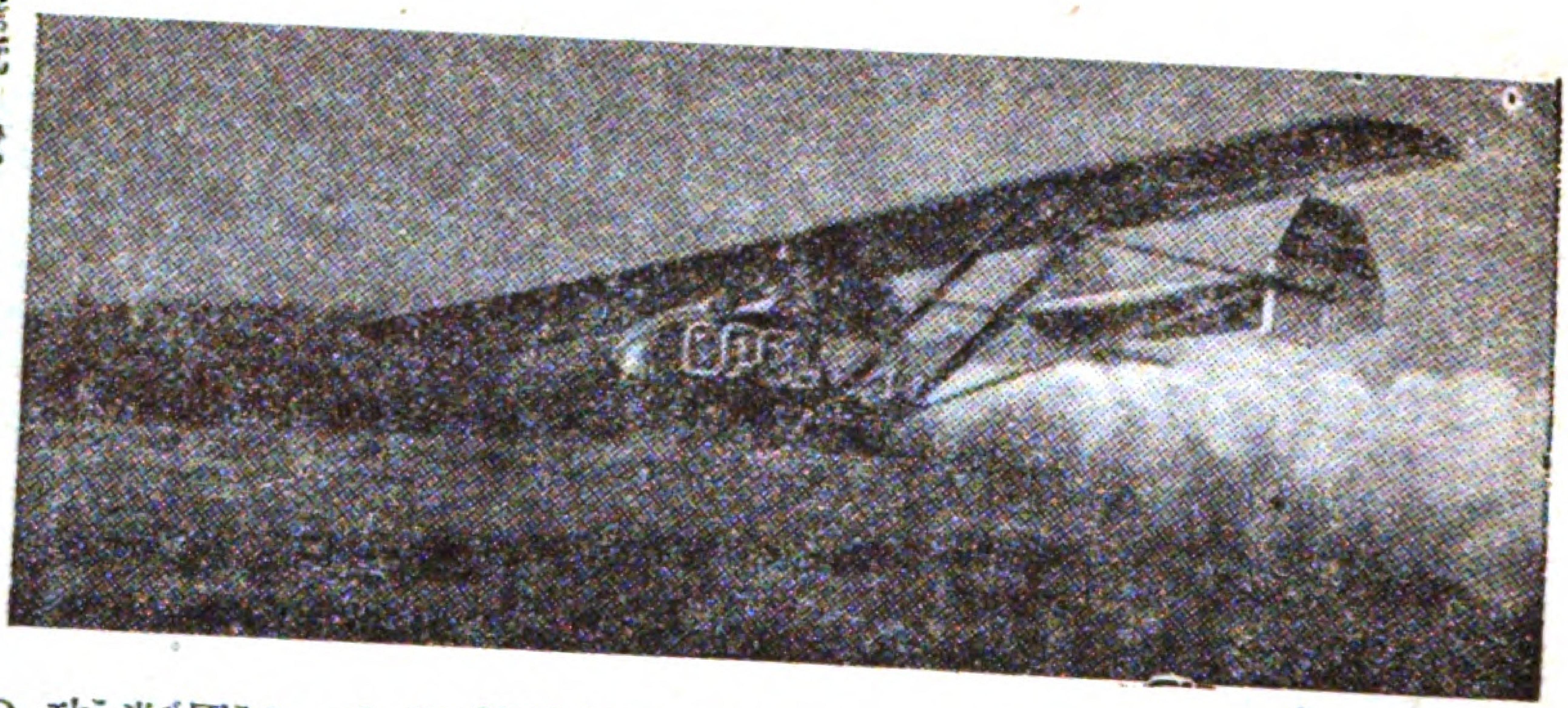
ところが最近、同じロケットの研究をしてゐた有名な獨逸のオペル自動車會社の重役、フリッツ・フォン・オペル氏は、見事にこの火薬應用のロケットを飛行機に取付けて飛ぶ事に成功した。その飛行機（第一は圖）機體の後方に十六個の發射管を有するロケット装置が取付けられてゐて、一發の轟然たる爆音と共に滑走臺から空中に飛び出し、順々に次の發射管が爆發して、後方へ白煙をたなびかせつゝ飛行するのである。一體如何なる必要からこんな物が發明されつゝあるのかといへば、實はこの恐るべき新しい仕掛けを利用して地球外の手近な月の世界や謎の火星へ探險旅行に出かけようといふのである。





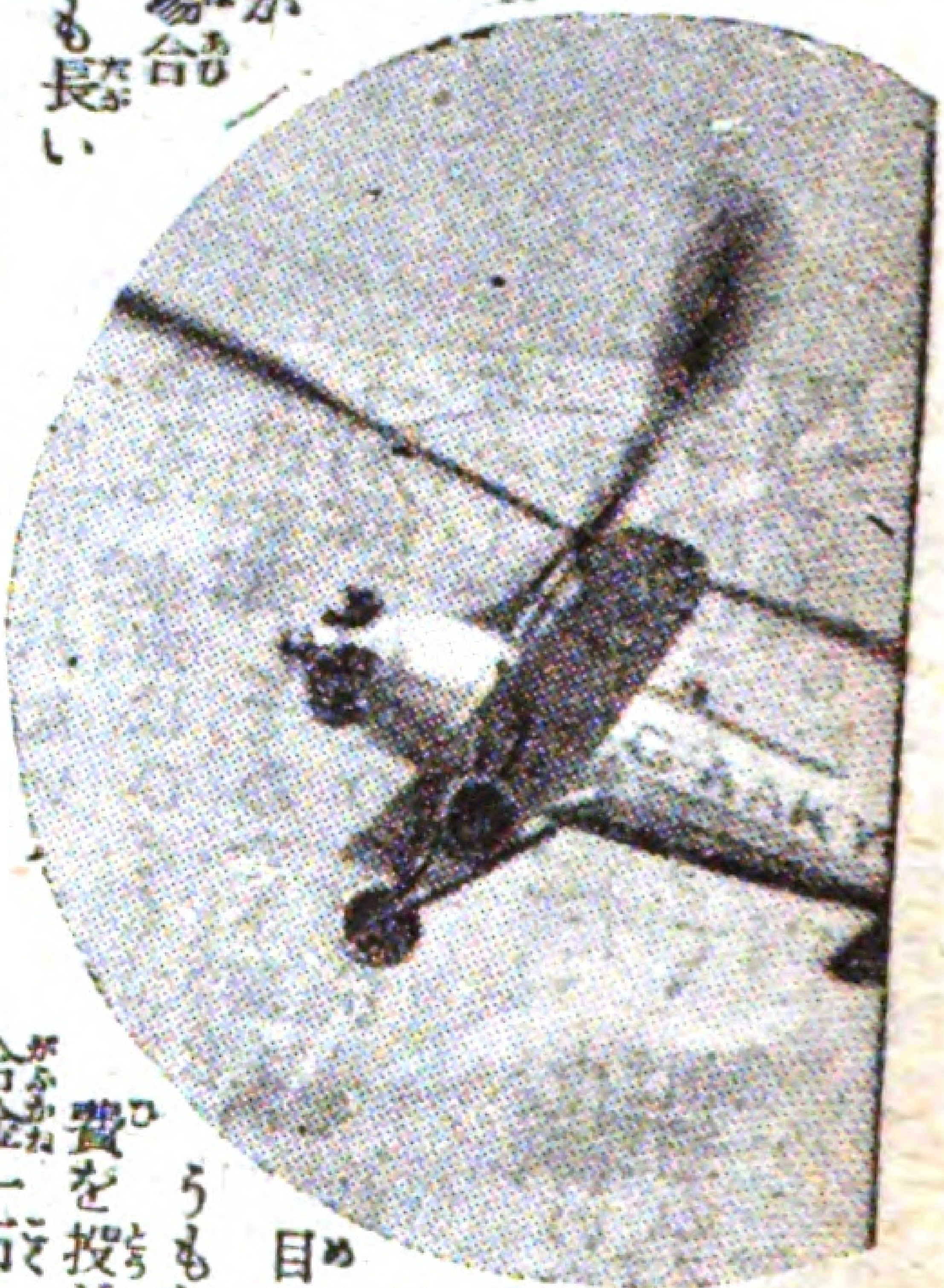
◎世界一の長橋

第三圖は、米國ミシガン州に新設された世界一の長橋アンバサダー・インターナショナル・ブリッヂの張間を、一方の脚塔の頂上から見渡した光景である。それの車道の幅は、四十七呎で、五列の通路を設けるに



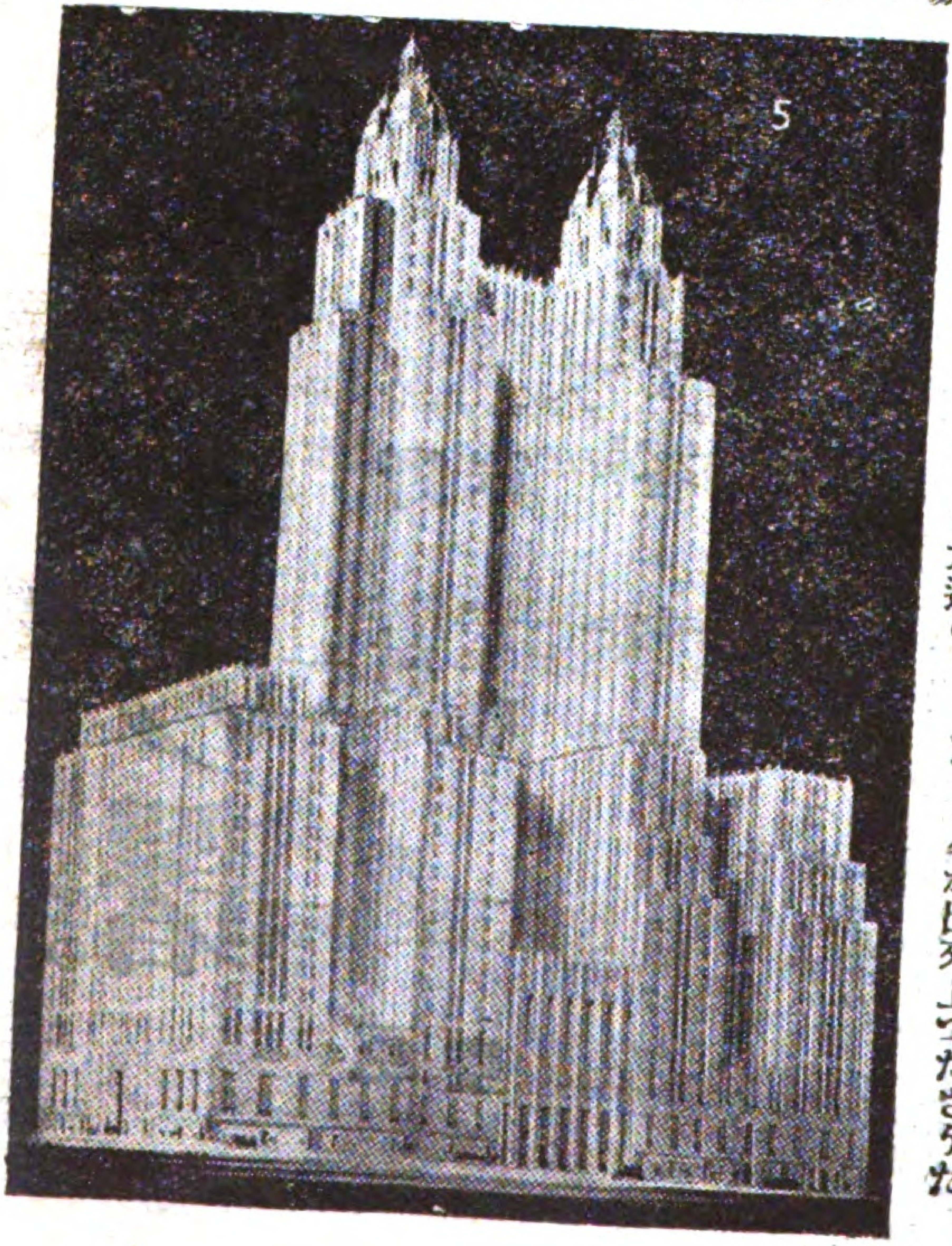
充分の廣さである。塔から塔までの間隔が一千八百五十呎、全長の張間が最近落成したのである。

◎オートヂヤイロ



現在專ら用ひられて居る飛行機が陸を離れる場合には、ぜひとも長い距離の滑走をしなければならぬが、少しく滑走をすればすぐ其場から飛び上るやうな飛行機が、二三年前或スペイン人が發明した。卽ち少し滑走すれば風の力で廻轉して竹トンボの理論で垂直に飛び上るのである。これをオートヂヤイロといふが、これが現れてから此式の垂直離陸飛行機が各國で考案されたが、第四圖は、北米ピットカーンで最近試驗に成功したジユアン・ド・セルヴ教授のオートヂヤイロである。

◎世界一のホテル



世界一競爭病に祟られた米國人は、今度八千萬圓といふ普通の日本人には死ぬまでお目にかゝれさうもない總工事費を投じて、土一合金一石といはれる紐育の、しかもレキシントン大通りの四十九番街から五十番街にまたがる公園寄りの地に、第五圖やうな地上四十四階のウオルドルフ・アストリア・ホテルといふのが建立される事になつた。

ホテルではないが、今まで世界一の摩天閣を誇つてゐたウールオヲースのすぐ近くに、地上八百八呎の、自動車で有名なクライスラー・ビルデングが出來上つたさうだ。



霧の中の曙

野村愛正
林唯一畫

意外な客

果して精二は蘭子の愛を受入れたのだらうか？　それはともかくもとして、二人の行方はそのまゝわからなくなつてしまつた。

一粒種の最愛の娘である。それと知つた蘭子の兩親は仰天せんばかりに驚いて、すぐ樣あちこちに電報を打つて手配を頼んだが、二十日經つても一向消息がない。買つた切符によつて東京に向つたらしいことはわかつてゐる。泰造はひどく苛立つて、妻の兼子を連れて上京して來て、かつて蘭子が寄寓してゐた下落合の親類に落着いて、

『誘拐されたのですぢや。精二といふ奴は實に不屆至極な奴ぢや。惡黨ぢや！』

行きがけの駄賃に、復讐の意味で連立されたものと思つてゐるのである。疚しさもあつて、憤懣の全部を曝けだすことが出來ないだけに、一層殘念で耐らない。口を極めて精二を罵る――東京の人達は、精二の人物を知らない。一方には酒見との縁談が、もう結納といふところまですすんで

ゐた際でもある。賑かなことの好きな、モダンな蘭子が、兩親を棄て、何一つ不足のないその良縁を棄てゝ、裸體一貫の百姓の青年と走つた理由が發見出來ない。まさかそれほど強い愛を持つたことは考へられないので、誰も泰造の言葉を信じた。かうして蘭子は、まるで意志を持たなかつた人形のやうな扱ひを受けて、精二一人に家出の罪を背負はせることになつた。

　泰造は、あらゆる方法を講じた。私立探偵社にも搜索を依賴した。引離してしまへば後はどうにでもなるといふ氣持で、圓滿に解決を着けてやるから居所を知らせといふ僞瞞の廣告も度度新聞に出した。が、やつぱり音沙汰はない——蘭子に對する愛情も愛情だが、和田ともあるものが村の輕輩の若僧のためにしてやられたといふ傲慢な怒りが燃立つ。泰造は、精二を八ツ裂きにしても足りないほどの憎しみを感じて來て、

『どうしても引捕へますぢや。引捕へて、蘭子にもあんたに詫をさせますぢや。何年かゝらうと、わしの財産を消費盡すまでは！』なぞと、酒見にも繰返し〳〵いつた。

　酒見も蘭子の失踪を知つて非常に驚いた。泰造にもはじめて合つて、前後の事情も聞いた——面目がないと同時に、娘かあいさもある。辯明の意味で蘭子はどんなにその結婚を希望してゐたか、やゝ誇張して傳へられたりしたので、彼もすつかりみんなと同じ考へを持つことになつた。

　實際、酒見は、蘭子を疑へなかつたのである。承諾を仄めかした手紙の返事といひ、東京驛で歸郷を見送つた時の愼ましやかな中に籠められた處女の匂ふやうな婚約といひ——愛情がそんなにも急激に變るものとは思はれないので、

『及ばずながら僕もお手援けさせて頂きませう！』と泰造にもいひ、探しださずにはおかないと自分にも誓つた。

　それほど彼は蘭子を愛してゐたのである。五年前に知つて以來、大切に育てあげるやうにじツとその生長を瞶めて來て、やうやく見事な花が開いて、將に自分のものにならうとした刹那に、奪ひさられたのだ。失つたものはより美しく、より尊い。殊に、下らない男に誘惑されて——おゝ、愛するものが、どのやうに無慘に蹂躙られつゝあることか？　かうした想像から來打擊は殆んど致命的なもので、ともすれば唆かされて、はげしい絕望に走らうとするのを踏止まるだけでも、非常な努力を拂はねばならなかつた。

　いろ〳〵手を盡したことも空しく、二人の行方は更にわからない。たうとうその年も暮れて、蘭子の兩親は十二月にはひると一應歸郷したが、思切つたのではなかつた。一月下旬には、今度は父の泰造が一人で上京して來て、再び搜索をつゞけることになつた——二月のはじめの、から〳〵乾燥した、寒さのきびしいある夕方のことである。酒見は、その書齋で卓子に向つてゐたが、勉强なぞは手に付かない。獨逸語の書籍を開いたまま、思ふともなく悶々と悩ましい思ひに捉はれてゐると、ふと玄關の鈴が鳴つた。誰か來客のある樣子である。やがて家政婦がやつて來て、

『和田さまのお嬢さまがお見えになりました！』と傳へた。

『えツ、瀾子さんが……一人で……？』酒見は、自分の耳を信じかねて、狼狽て椅子から立上つたが『さうか、すぐに應接に……いや、こゝがいゝ。こゝに通つてもらつて下さい。』

一人になつたほんの一分か、二分の間に、酒見の頭腦は急速に回轉した。一瞬の不審は忽ち解決して——瀾子は返つて來たのだ。おそらく誘拐者の手から遁げだして來たに違ひない。さうして自分の愛を信じてくれるために、自分を介して兩親に詫をいひに來たのだらうと想像した。

愛の嘆き

まもなく扉が開いた。その間に挾まれて、周圍を切取られた額緣の繪のやうに瀾子の姿が現はれた。

騎馬でこの家を訪れて來た時からまだ半年經たないのに、なんといふ變化だらう。瀾子は、斷髪には不似合なほどに見窄らしい着物を着て、明るかつた、快活だつた顏にも憔悴の色が濃い——一眼その服裝だけを見た酒見は、弄ばれて饐朽ちた花、といふやうなものを感じた。憐憫とも、同情ともいひやうのない氣持に思はず涙含しくなつて、

『お、瀾子さん！』と感動的に叫んで、兩手を差出した。『よツく……さアどうぞ！』

だが、瀾子は、水のやうに落着いてゐた。臆した樣子もなく、惡怯もせず、靜かにはひつて來て——哀しげな、けれど平和に滿ちた眼でじッと酒見を見上げて、

『ご免下さいまし、酒見さん。あたくし、あなたを、裏切つた同樣のことをいたしまして……お詫にまゐりました！』といふ。

『そんなことは……まアお掛け下さい。』

暖爐の傍にソファーを引寄せて瀾子を掛けさせ、酒見も相對した。が、感情が胸一杯で急には口も利けない——瀾子の方は、どこまでも穩かな調子で、

『すつかりお聞きのことゝ思ひます。さぞ、奇矯なことをする女だと、お蔑みになりましたでせうね？ でも、お話すればきつとわかつて下さいますわ。あたくし、さうしてお宥し頂からと存じまして……！』

といつて、精二に生命を助けられて知らず識らずの間に愛を持つやうになつてゐたことから、家出の前後、尤も父の不遜な不正についてはかなり省略したが、その事情や氣持を詳しく語つた。彼女は、單に破約の詫に來たのではなく——酒見がどんなに自分を愛してゐたかよく知つてゐる。一時的にしろ、瀾子自身も、その愛に應へる決心をした。このことが後々までの精神的な負債となつて來たからで、

『……わざ〳〵かうして瀾子のために家までお建てになつたりしたことも、何もかも存じながら……お應へする氣持さへ持たなかつたら、裏切つたやうに責められずにも濟んだのですわ。でも、お一人で書齋へ籠つていらッしやることを想像しますと

……あたくし、自分の幸福のためにお卷添したことがとても苦しくて〱……せめて宥すといつて頂けたらどんなに心が輕くなるだらうと存じまして、上京したら是非お伺ひするつもりでした。そして、やうやく、今日、その機會が……。』といふのだつた。

はじめ、酒見が、蘭子が悔いて歸つて來たやうに考へたのは非常に間違つてゐた。家出の理由も、聞いてみると誘拐どころではなかつた。眞實に生きんがために素裸體になつて立上つた勇しい男女の物語である。殊に、かうした關係にある場合、尋常の女なら逃げたり隱れたり、出來るだけ顏を合せまいとするのが普通であるのに、彼女は苦痛を忍んで立派に前に立つた。而も、それは、彼自身の氣持の中にはひつて、深い思遣りを持つからで――何人がその彼女を非難することが出來よう！

同時に、彼は、今まで、自分が蘭子といふ女の眞價を、ずつと〱低く見積つてゐた間違ひを知つた。驚嘆の眼を瞠つてしげ〱と瞶める中から――更に彼女に對する新たな愛情が、暴風のやうにはげしく燃上つて來るのを見た。

あゝ、哀れな愛よ！　これが返つて來てくれたのだつたら、たとひ十度叛かれた後であつても、彼は猶快く迎へることは出來る。だが、さうではないのだ。酒見は、思はず知らず激情に慄へて來て、

『蘭子さん、宥すも宥さないもない。あなたは、僕のことなぞは決して氣にならないがいゝ。あなた自身のために勇しく、眞直にすゝんで下さい。たゞ……僕のあなたに持つ愛情は、あなたの境遇がどう變らうと、永久不變なものです。どこまでもあなたの幸福を祈つて行きます！』といつた。

『濟みません……濟みません……！』

兩手を膝に重ねて絞るやうに握合せてゐた蘭子の頰に、はげしい惱みの痙攣が走つた。と、眼から、涙が、絲をひいて滴り落ちて、

『お氣の毒な……お氣の毒な酒見さん！』とわづかに呟きながら、犇と顏を覆ひ、身を悶えて嗚咽しだした。

酒見は額に指を當てゝ下を向いてゐた。その肩が泣吃るやうに喘いだ。かうして愛しても報いられない男と、愛されてゐても報いることの出來ない女とは、深い悲しみの中の沈默に落ちて行つた。

機械の災禍

鐵だ。鐵槌だ。起重機だ。

巨大なビルデングが建築されつゝあつた。鐵骨が梯架のやうに縱横に積重ねられ、千手觀音のやうな幾つもの手、起重機が、象がその鼻で自分の背に荷物を運ぶやうに、重い鐵材を輕と上に引上げて行つた――蘭子が酒見を練馬の家に訪ねた頃、精二はこの建築場で働いてゐた。わづかな手蔓によつてここで働くやうになつてから、まだ幾日も經つてゐなかつた。

カタ〳〵〳〵、カタ〳〵〳〵。

機關銃を發射するやうなけたゝましい音を立てゝゐるのは、電力によつて鐵に鋲を打込んでゐるのである。まはりには高層な建物がぎツしり立並んでゐて、近くの東京驛では、汽車や電車が出たりはひつたり、警笛、汽笛の絶間もない。街路を、廣場を、自動車は織るやうに走りまはつてゐるし――機械と、直線と、スピードの合奏する喧噪な、奇怪な交響樂！　これが近代都市風景なのだ。

今更ながら、精二は、自分の新しい周圍に驚異の眼を瞠つた。

殊に、そこでは、人間がみんな魂を失つてゐた。田舍の仕事には、人間的な個性が働きかけることによつて土も愛を持つて來るのだつたが、都會の勞働には全然それがない。人間の力は、鐵や、機械と同じく、單に構成の一部分にすぎないのであつて――いや、はじめは人間の手や足の代りに發明された筈の機械といふものが、今では却つて傲然と人間を支配し、驅使してゐるのを見た。だから働いてゐる人々は、終日、それハンドルをまはせ、だ。それスイッチを入れろ、だ。自分といふものを持つ暇なぞはないのだつた。

その日は、肌膚を裂くやうな冷い風が大東京の空を吹捲つて來て、裸體の鐵骨と衝突して悲鳴をあげてゐたが、夕方近くになると、たうとう雪がちら〳〵降りだした。が、まだ終業までにはもうすこし時間があるので――やつぱり機械の唸る音はつゞいてゐた。またしても起重機が……。



突然、凄じい物音が轟然と起つた。建ちかゝつてゐる鐵骨も、あたりの建物も、一齊にふる〳〵とはげ

しく身震ひした。

機械化されてゐても、人間には、寒さや、疲勞や、飢ゑがある。ともすれば忘りがちになりやすいかうした間隙に乘じて、魂もない癖に冷酷な物質が、まるで復讐でもせうと待構へてゐたかのやうに、時々慘忍な惡戲を仕掛ける——象の鼻、起重機の鎖が斷れたのだ。途中まで引上げてゐた重い鐵材が、その下の地上で働いてゐた罪もない人々の上に、ばらばらと容赦なく落下して來た。

忽ち叫喚と狂亂が卷起された。誰かの、

『やられたッ！』と叫ぶ聲が聞えた。

精二は、近くにはゐたものゝ、運よくこの災難からは遁れた。一時はぎよッとして棒立ちに竦んだが——すぐに驅出して、第一番に現場に驅附けた。が、一眼見たばかりで髪の毛が逆立ち、思はず慄然と恐怖に顔を覆はずにはゐられなかった。



それは腥慘といふ以上の光景だった。全身を膾のやうに碎かれて即死してゐるものもあれば、抑附けられたまゝ手足を苦しみ悶踠いて呻いてゐるものもあった。中には、幸運にも、血みどろにはなりながらも生命に別條なく、のこ〳〵匍ひだして來たものもある——精二は、集つて來た人々と一緒に救助に着手したが、二人や三人の力で何百貫といふ鐵材が自由になるものではない。鐵骨の上からみんなが下りて來るまでには、何かに支へられてまで生きてゐる人々も、そのまゝ蛙のやうに潰されるかも知れないのだ。一秒を爭はねばならぬことに氣が着くと、

『よおしッ、おれが持上げる。みんなで引出してくれ！』

鍛え上げたサムソンの肩を役立たせうといふのである。精二は、咄嗟に、一つの鐵材の端の、わづかな隙間に這込んで行つて――四肢を地に突き、齒を喰ひしばつて、雄獅子のやうに唸つて猛然と突張つた。背が、肩が、みり〳〵音を立てゝ、顏が眞赤になつた。

『よオ、素晴しいぞ。それ引出せ！』

殆んど超人の仕業である。いくらか緩みが出來たので、一人の人間がその間から助けだされた――が誰も周章してゐる。今やどれだけの力が使はれてゐるか察してもみないで、

『待て。もうすこし頑張つてくれ。もう一人引出すぞ！』

尋常では出來ることではないのだ。たゞ、その獻身的な精神力のみがなし得させたのだつたが――もう一人と聞けば、今暫らくつゞけなければならない。精二は、更に勇氣を驅立てゝ、死力を自分の全身に投げかけた。

だが、人間の體力は無限ではない。朱を濺いでゐた顏は汗に粘り、紫色から蒼白に變つた。マドレーヌ市長のジヤン・ヴアルジヤンが馬車の下からフオーシユルヴアン老人を救ひだしたより十倍の精力を、精二はこの十秒間に使つたかも知れない。突張つた手も、足も、食ひしばつた齒も――殊に、肩が、脊骨が、肋が、たしかに碎けたと思つた。最後の力を使ひ盡して、次第に眼が昏みかけた頃になつて、

『出たぞ、まだ生きてゐる……！』

といふ悦びの聲を、どこか遠くの力で聞いた。大石を支へてゐた鷄卵は潰えた。精二は手足を伸して氣を失つてしまつた。

夜になると、雪はます〳〵はげしくなつた。

永遠の愛情

外は吹雪になつた樣子だつたが、部屋は暖爐に汗ばむほど暖かかつた。時間が經つにつれて、二人の氣持もだん〳〵いくらか輕くなつて――酒見は、その後どうしてゐるか、はじめからずツと東京にゐるのか、なぞ訊く。蘭子も急に元氣附いて、

『いゝえ、ついこないだまで神戸にゐましたの。精二さんは大變數學がよく出來るので、物理學校に入學したがつてゐますが、何より職を見着けなければならないでせう。それで早目に上京して來て……あの方は、ある建築場の臨時雇の人夫に出ることになるし、あたくしはあたくしで、やうやく筆耕の口を見着けて……。』

『おや、蘭子さんが内職を……？』酒見は驚いて遮つた。

『そりやさうですわ。もう、遊んでゐられる境遇ではなし……。』蘭子は明るく笑つた。

何一つ不自由のない富豪の令孃が、内職までしてゐる！ 酒見は、また暫くじツと蘭子を瞶めてゐたが、その勇氣の湧いて來る源泉を察しると、深い溜息を吐いて、

『幸福ですね！』と噎るやうにいつた。

『えゝ、そりやアね……！』といつたが、その蘭子の調子にはどことなく悲しげなものがあつた。

この會見によつて、酒見も、はじめて精二といふ人物をいくらか知つた。まだ好意を持つといふほどにはなれなかつたが、泰造から聞いてゐたほどの惡者ではないこともわかつた。蘭子のためにすこしは安心するやうな氣持にもなつて――兩親が非常に心痛して探してゐることなぞも話つて、

『このまゝでは、あなたもまだ決して全部が幸福だとはいへませんね。及ばずながら僕も盡力してみませう。如何です、一度お歸りになつてご覧になつては？』

とすゝめると、蘭子は涙を浮べて悦んで、

『えゝ、あたくしも、とてもそんなに長くわかれ／＼になつてゐられさうにありませんのよ。歸れといつて頂けば、いつでも飛んで歸つて行きたいと思ひますけど……たゞね、兩親が、蘭子と同じやうに他人の子までも宥して下さるでせうか？』

和解にはまだ早かつた。無理にそれをさせうとすれば、自分が蘭子を奪ひ返さうとするのと等しくなる。泰造の意志をほゞ知つてゐる酒見は、詮方なく默つた――まだ／＼辛い試練の日のつゞくことを知つた蘭子も、同じく暫く悲しげに沈默してゐたが、やがて氣が着いて、突然の訪問を重ねて謝した上で、

『つい遲くなりました。あたくし、歸らせて頂きますわ！』といつて立上つた。

引止める譯に行かない。酒見もつゞいて立上つて、玄關まで送つて來てみると――風はいよ／＼はげしく、降りしきる雪は地上を吹掃はれて、空中に舞上つて亂舞してゐる。とてもこれでは駄目だ、自動車で送らせうといつたが、蘭子は固辭して受けなかつた。

『停留場までですもの、譯はありませんわ。これが一等いゝのですのよ……！』

コートも着てゐないが、一向氣にもしてゐない。露西亞の女みたいにショールを頭からすツぽり被つて、平氣に歸つて行かうとする――その勇氣をどこから掴んだか？　酒見は、精二の感化を考へるより前に、それほどの性格を持つてゐた蘭子を、よく囀る美しい小鳥くらゐにしか考へてゐなかつたことをまたしても思ひだして、その自分の愛情を愧ぢ、後悔した。同時に、その殉情的な、健氣な態度にます／＼深く打たれて、思はず涙含んで、

『蘭子さん、僕はいひましたね、たとひあなたの境遇がどんなに變つても、僕の愛情は變らないツて？　それを忘れないで……

……この後も、やつぱり前々通りの友達として、時々は消息も聞かせて頂きたいし、もし萬一何か思案に餘つたことが出來た場合には、いつでも遠慮なくやつて來て下さい。僕で出來るだけのことはします！』としみ／＼いつた。

振返つて見上げた蘭子の眼が、新しく潤んで慄へた。かつて相談のために歸郷の際、東京驛まで見送られて、今度會ふのは晴れの式場だらうと思つた。その彼と、誰があの時、かうした再會を豫想したらう？　小さな手を差出して、精二と酒見の手を握緊めて、

『有難うございます。お約束させて頂きますわ。どうぞ、蘭子を……堪忍して頂戴！』

いひ棄てゝ、涙を抑へて渦巻く吹雪の中に驅出した。そして烈風に追はれながら、一人寂しい路を停留場へ急いで行つた。

二人の生活

かなり遲くなつて、蘭子は、眞白に雪に塗れて芝の宇田川町の露路の奥の寓居に歸つて來た。下階は老夫婦に養女一人、その二階借である。出掛けて行つたことは精二も承知してゐるが、こんなに遲くまで一人で待たせておいたと思ふと濟まない氣がして、持つて歸つた哀傷も忘れがちにいそ〳〵と上つて行つて――みると、精二はまだ歸つてゐない。意外に思つて、

『おや、どうかなすつたかしら……？』

訊いてみても階下でも知らないといふ。なんとなく不安も感じられるが、途中で寄路をしたとしてもやがて歸つて來るだらう。蘭子はそのまゝ二階に引返した――精二は、隨いて來る蘭子を強つて拒みもしなかつたが、その愛を受入れるでもなかつた。乞はれるがまゝに神戸を迂回し、共同生活もつゞけてゐるが、二人は夫婦ではない。そんな關係は微塵もなかつた。

これは、蘭子を愛さないからではない。いな、精二も、彼女に對しては、強



いく〳〵愛情と、感謝と、尊敬の念さへ持つてゐるが――愛を受入れて、辛酷な波瀾だけが豫想される前途を共にするのは、彼女を最大の不幸に陷いれることである。愛すればこそ、一生を塵に埋らすに忍びない。深く考へて、ひそかに兩親、といふより寧ろ、學識、人物、いづれの點からいつても最も蘭子に相應しい酒見の手に返すつもりでゐるのである。それが眞に彼女の幸福を冀ふことであつて、同時に四方八方圓滿にをさまつて、誰も傷付けないで濟むと思つてゐるのだつた。

たゞ、蘭子の內面にはひつて考へると、いひやうのない感激に打たれる。容易な決意ではないので、もし過つて輕々しい態度をとれば、彼女を取返しのつかない窮地に追込むことになる。そこで氣長に構へて、時間の經過による自然の機會を靜かに待つてゐるのであつて――深い思ひやりと、謙讓な精神から來てゐる。蘭子も、一方には遣場のない惱みもあるにはあつたが、この精二の氣持は實によく理解して、

『さういふ考へ方をなさる人だから好きなのよ。蘭子、あの方

を選んだことに間違ひはなかつた！』と、却つてます〳〵愛敬の念を深めて行くものとなつた。

だが、いづれにしても、たとひそのまま永遠の處女のまゝで彼の傍に殘ることになつても、蘭子は、最早引返して行くことは出來なかつた。出來なくはなからうが、絶對にしてはならないのだ。從つて殘されてゐる路はたゞ一つ、精二に成功してもらふことだ。させることだ――彼女も彼の愛を知つて、いつか受入れられることのあるのも信じてゐる。それは、おそらく、精二が、愛する資格、いひ替へると蘭子の一生の幸福が自分に保證出來ると感じる時で、假りに社會的にいへば相當立派な地位を得た上であらう。さうなれば兩親も和解してくれる。非難や嘲笑の聲も賞讃に變るに違ひない。一日も早くその重なる悦びの日を來させなければならない。意地にもなんにも、石に噛りついても、身を粉にしても……！

心は反射する。蘭子の、この獻身的な、一生懸命な態度は、よい意味でどれ



蘭子だけ精二を刺戟し、鞭撻するかわからない。たとへば、蘭子が、生活費だけでも迷惑をかけまいと、夜の目も寝ないくらゐに働く。重いものを持つたこともない大家の令孃なのだ。精二も、勢ひ、奮然と立上らねばならなくなつて——新しい運命開拓のためである。晝間のはげしい勞働にへとへとに疲れてゐても、歸つて來ると、一夜として勉強を怠つたことはない。見てゐる蘭子はその眞劍な氣込みに打たれて、いよいよ眼を瞠らずにはゐられなかつた。

二人は、かうして夫婦でもなく、戀人同志ともいへなかつたが、また兄妹でも、友達でも、主從でもない。一種特別な深い純愛によつて互に援けあひ、慰めあつて、非常に緊張した、けれど傍目にも羨しいほどの日々を送つてゐる。だから、慣例を破つて精二の歸宅が遲れても、疑惑といふやうな氣持はすこしも持たなかつたが——なんとなく心配で、心が重くなる。酒場のこともあるので筆耕の仕事にも手が着かず、獨りぽつねんと待つてゐると、階下の養女の春枝がそッと跫音を忍ばせて上つて來て、

『蘭子さん、大變よ。あたし、死んでしまひたい！』といつて、いきなりその場にわッと泣伏した。

蘭子は吃驚して、

『まア、どうしたのよ、春枝さん？』

不安な一夜

『あたし、お妾にやられることになつたの。とても嫌らしい老人で……！』

聞いてみると、今晩話がきまつて、かなり纏つた金が受取られ、明日にも連れて行かれるのだといふ——間借してまだ二十日ばかり、あまり詳しくも知らないが、春枝は蘭子より二つ年上で、顏も十人並み以上である。いろいろ語るところによると、こんなことははじめてゞはなかつた。かつて一度、藝者とか娼妓とかに賣られかゝつたことがあつて、驚いて生れた家に逃げて歸つた。すると養父母は非常に怒つて、法外もない養育料を請求して來た。が、實家は貧しい百姓で、ないので拂へない。切破詰つて自殺せうとしたが、これも邪魔がはひつて果さず、結局連戻されたといふのだつた。

蘭子は、この春枝が、今までも銀座のカフェーで働いて養父母を養つてゐることにひどく感心させられてゐた。美しく結上げられた島田髷の崩れかゝつた姿を見ると、頭腦がだんだん燃えて來て——金、金だ。かうした不正が行はれる世相に對して、耐へがたい憤怒が感じられる。事情は違つてゐるが、精二の後を追つて出た中にも同じ感情は多分に含まれてゐることだ。暫くじッと唇を噛んで考へてゐたが、

『春枝さん、構はないわよ。もう一度お逃げなさい。逃げておしまひなさい！』と強氣にいつた。

『でも、田舍のお父さんが、また養育料のことで苦しめられると思ふと、それが……。』

『それもさうね……。』

『ですから、死ぬのが一等いゝのよ。あたしが死にさへすれば、何もかも……。』

『いゝえ、死ぬのはいけない。あたくし達、誰でも、最後の最後まで、雄々しく、立派に闘つて潸抜けて行かなければ……春枝さん眞面目よ。あんたには戀人はなくて？　あんたのためにはどんな犧牲でも拂つてくれる方が……？』

『ないの……。』

『困つたわねえ……！』蘭子は、深い思案に暮れた。

實際、蘭子は、春枝の立場とすれば、死ぬといふのも無理はないと思つた。たゞ、彼女に、不幸な境遇から來たものか知れないが、誰にでも泣縋る癖があつたり、自殺したがる常習的傾向のあることなぞは一向知らない。まだ、それほど懇意といふでもない年下の自分に打明けてくれたことだけでも、どんなに苦しんでゐるかよくわかる氣持がする。そのまゝ見殺しにするやうなことは出來ないので――明日にもといへば精二に相談してゐる暇もない。咄嗟に思案をきめて、家出の際に持つてゐた唯一の貴重品のダイヤの指輪を取出して來て、

『春枝さん、ともかくもあんたにこれを預けておくわ。どうにもならなくなつた場合には賣るとかなんとかして、逃げだす旅費なり、養育料の足しなりにして頂戴。三百圓や、五百圓にはなると思ふの。後のことは、また精二さんの智慧を借りていゝ

やうにします。だから、決して死ぬなぞ考へないで……！』といつて、困惑する春枝の手へ無理に握らせた。

この指輪こそ、蘭子が、二人の將來の萬一に備へるつもりで大切にしておいた全財産だつた。

春枝はやうやく階下に降りて行つた。時計を見ると午前の二時である。それなのに、精二は、まだ歸つて來ない！――暫く忘れてゐた不安が、更に十倍のはげしさで襲つて來た。蘭子ははツと顔色を變へて、

『きつと何かあつたに違ひない……！』

さうでなければ、精二が默つて外泊する、そんなことがあるものか！　立つてもゐてもゐられなくなつたが、この雪の夜中に出掛けて行つて訊くことは出來ない。詮方なく夜明けを待つことにして――三時、四時、五時、眠るどころではなかつた。捩曲げられるやうな思ひにまんじりともせずに一夜を明して、六時になると新聞が配達された。急いで取つて來て、電燈の下に社會欄を擴げて見て、

『あツ！』といつて顔を覆つた。

不安のまゝに想像した、その通りの記事が二段拔きで載つてゐた。昨日、大林組の建築場で起重機から鐵材が落下し、六人の人夫が死傷した。早速附近の病院に運んで手當を加へてゐるが、藤崎精二の名も重態の一人の中にあつた。

瀕死の中に

仰天したといふより、眼眩を感じた。蘭子は、暫く瞼を押へてゐたが、何より取亂してならない場合だと氣が付いた。負傷したのは昨日、狼狽てみても仕方がない。靜かに立上つて帶を締直して、

『さう、これから後は、あたくしの身體もますく大切だわ……！』

自分も倒れるやうなことがあつてはならない。體力が必要だ。蘭子は、二十や二十一の女に似氣もなく食事に取りかゝつたが――やつぱり駄目で、呑込む度に淚が溢れて來る。無理矢理に一膳だけ呑込んで、仕度をして階下に降りると、老夫婦も、春江も、聞いて吃驚して玄關まで見送つて出た。それでも忘れない。口ではいへないので、眼顏で、

『しツかりなさいよ！』と春枝を勵ましておいて出掛けて行つた。

雪は餘程小歇にはなつてゐるが、まだ降りつゞいてゐる。蘭子は、運轉しだして間もない電車に乘つて、新聞で知つた病院に訪ねて行つて――通された病室には、薄暗い電燈がたゞ一つ、朝の光の中にまだぼんやりと點つてゐた。十疊ばかりの褪茶けた疊の上に、内外科取混ぜて四人の患者が頭を突合せて呻吟してゐる有樣は、まるで貧民窟そのまゝである。蘭子は、案内してくれた看護婦に、

『どんな容態でせう。助かるでせうか？』

訊いてみたが、危險だといふより外に詳しいことはわから



ない。主任の醫師は、十時頃でなければ出勤しないといふ――他人を救助するためにすゝんで自分を砕いた負傷ではあつたが、誰も認めてやるものはなかつた。精二は、他の負傷者同樣に扱はれて、胸に厚く繃帶を卷いて、うと〱と嗜眠狀態に陷つてゐた。額に手をやつてみると燃えるやうに熱い。が、氣配を感じて眼を瞠いたので、

『蘭子よ。來ましたのよ。おわかりになりまして？』

といふと、これだけはわかつた。微かに眼で頷く――してやらねばならぬことが澤山あるに違ひないが、皆目樣子がわからない。じり〱して待つてゐると、十時すぎになつてやうやく主任の醫師が出勤して來た。早速面會していろ〱訊いてみると、肋骨が二枚も折れて、內出血さへ起してゐるらしい。絕對に回復の望みはないかと繰返すと、

『左樣、何しろあのまゝでは、手當も充分行き屆くといふ譯に行かない。まづ……。』

病室を靜かな單獨の部屋に移して、看護婦も雇つて、極力やつてみれば或ひは、だがそれも保證は出來ないといふ。蘭子は、眞向から打ち下されたやうな打擊を、肉體的にまで感じて――もし、彼がこのまゝ死んでしまつたら？　おゝ、考へるだけでも怖しい。が、死を考へるよりも、第一に醫師の言葉に從はねばならない。助かる方法も講じてみず、盡せる手を盡さずに殺しては、後々までもどんなに心殘りのことだらう。ところが、精二一人を特別に、といふことは出來るものではなかつた。さうするには、會社の方と手を切つて費用を負擔せねばならない。金、金だ。その費用がどうして出るか……？

『あのダイヤさへあつたら……？』蘭子は後悔した。

だが、自分を輕率だとは思はなかつた。春枝の方も生死の問題である――身の皮を剝ぐやうにすれば二日や三日の費用は出る。その後のことは全然當はないが、なんとかする。自分の生命にかけて、是非、なんとかしなければならないのだ。蘭子は、決心をして、ともかくも病室を移してもらふことを醫師に賴んでおいて、

『まだ絕望はしない。蘭子、しツかりおし。まだ最後ぢやないわよ……！』

自分に囁きながら、よろめく足を踏締めて精二の傍に引返した。そのすぐ〱である。看護婦がやつて來て、

『あなたは和田さんと仰有いますか。ご面會の方が表の應接にお待ちになつていらツしやいます。』といふ。

『さう、どんなお方？』

『如何ですか。電話でございますから……。』

こゝにゐることを知つてゐるものはほかにない。春枝が見舞に來てくれたのであらう。蘭子は急に心强くなつて、急いで敎へられた應接にやつて來て――なんの氣もなく扉を開けた。途端、眞青になつて叫んだ。

『まア……お父さん……！』

訪客は意外にも父！　事件は更に事件を孕み興味いよ〱白熱す。

（つゞく）

名士　愛嬌話　縮尻話

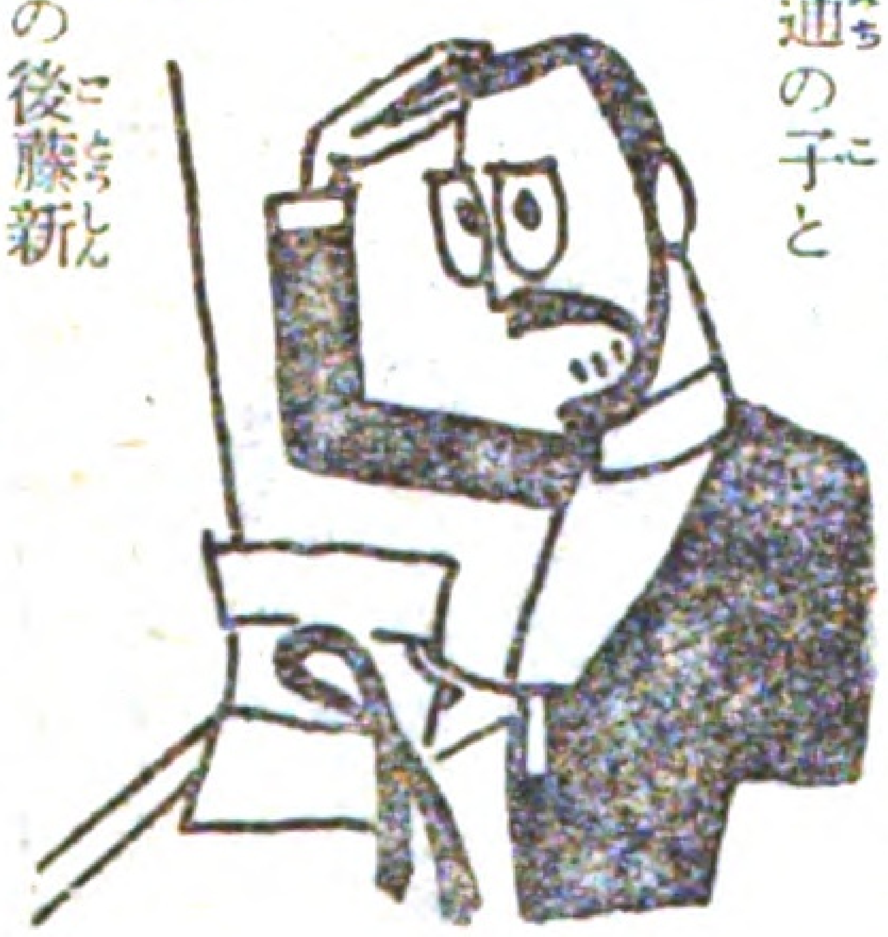
○午睡中の散髪

後藤朝太郎氏が北京（今の北平）の友人を訪問した時の事である。戸外に剃頭的（床屋）のかいねの響きがビーンと鳴つた。その晩公使館に招かれてゐた氏は、早速うちへ呼び入れ散髪に取りかゝつた。最初のほどは壁に向つてゐる蠍を話題に片言交りの支那語で話してゐたが、何時しか居眠りに這入つた。午睡中の散髪は日本に居ても支那に居ても氣持のよいもの、その儘すやすや寢入つた。目が醒めてみると、驚いた事に頭がすつかり支那式になつてゐる。いくら手鏡をとつて見直してみても最早取返しがつかぬ。が、床屋は至つて眞面目で『ツオンゴヤンツ（中國樣子）であるからよろしい、何處が惡いか』といふ。友人達は腹を抱へて笑ふ。仕方なくそのまま其晩公使館の大ホールへ出かけて行つたが此處でもよつてたかつて笑の種であつた。それから二三年は何時も北京で床屋の話が出る度にひやかされたといふ。



○ネクタイの贈り物

今の牧野内大臣が、墺太利駐剳公使だつた當時といふから、もう彼れこれ四十年の昔にならうか、一代の雄後藤新平伯が初の洋行で、赤毛布よろしく歐洲へ乘り込み、一寸ウインの我が公使館にもやつて來た。牧野公使に敬意を表したいといふのである。應接間へ通される、やゝあつて公使が現はれた、名にしおふ大久保利通の子とある牧野公使の前、いかに傲岸とはいへ、當時の、衞生行政か何か調査に行つた小役人の後藤新平では、一寸對等の挨拶とは行かなかつた。



歸る時になつて、公使館の小吏が、『ちよつと後藤さん』と玄關で聲をかけた。振りむくと、何か紙包みを持つて、

『これを公使から……』

何か知らぬが受取つてホテルに歸り、開いてみるとネクタイが這入つてゐる。その瞬間、そこの鏡に映つた自分の頸には、これはしたりネクタイが無い。さすがの後藤伯、暫らくは『ウーム』

○賞めてはいけない

支那では人を訪問して、そこに飾つてあるものをあまり賞めてはいけない。詞をきはめてほめる事は、それを此方へ贈れといふ意味になる。

とは知らぬ三上參次博士、或時濟南城内で春夏秋冬の墨竹を激賞した處、後から贈物として宿へ屆けられた。御禮に何を挨拶したらよいか博士は大變困つたとの事である。



三上博士漫像



◎無いもの盡し

時計の振り見て油斷ない、論より實行間違ひない、流行追へば身が持てない、借金背負つて立たれない、運は待つては居られない。

新作なぞなぞ

◎喧嘩の仲裁とかけて……入港する船、心はとめていかり(碇)をしづめる。

◎赤ん坊のお話とかけて……石臼心はした(下)がまはらぬ。

◎全集本とかけて……老人の齒、心はぬけると揃はぬ。

◎モダン娘とかけて……正月過の餠、心はかび(華美)に手こずる。

手品 不思議の蠟燭

畫用紙を蠟燭の長さに切り、その紙で蠟燭を卷き、合せ目を糊で附けたら、蠟燭を拔き取る。次に蠟燭の芯の出てゐる方を一分ほど輪切にして、紙製の贋蠟燭の先端に嵌め込む。この贋蠟燭を客の前に持ち出し、點火して見せた後、御覽の如き蠟燭、これを只今手のうちに搔き消して御目にかけますと云つて突然と兩手でクシヤクシヤと揉み潰し、二三回手を上下する間に素早く揉み殼は、豫め用意して二三寸開けておいた卓子の抽斗の中に落してしまふ。『蠟燭は美事に姿を搔き消しました。然かも只今の蠟燭は、これ此の通りポケットの中へと潜んで居ります』と前以つて入れておいた本物の蠟燭を取り出して見せるので大喝采。



◎數字の歌

四四八四四七二八億十百三九二二 三四九十四萬萬 四二三四萬 六一十

(解) よしやよし何はおくとも御國ぶみよくぞ讀まましふみよまむ人

◎珍妙商賣さまざま

○ホツて食ふ、井戸屋。

○スツて食ふ、印刷屋。

○トツて食ふ、寫眞屋。

○ハツて食ふ、經師屋。

○オツて食ふ、織屋。



笑ひ話

◇巧妙なる催促

今年六つになつた坊や――

『をぢちやん、新年おめでたう。母ちやんがね、さう云つたよ、をぢちやんにお金貰つたらなくしちやいけないつて。』

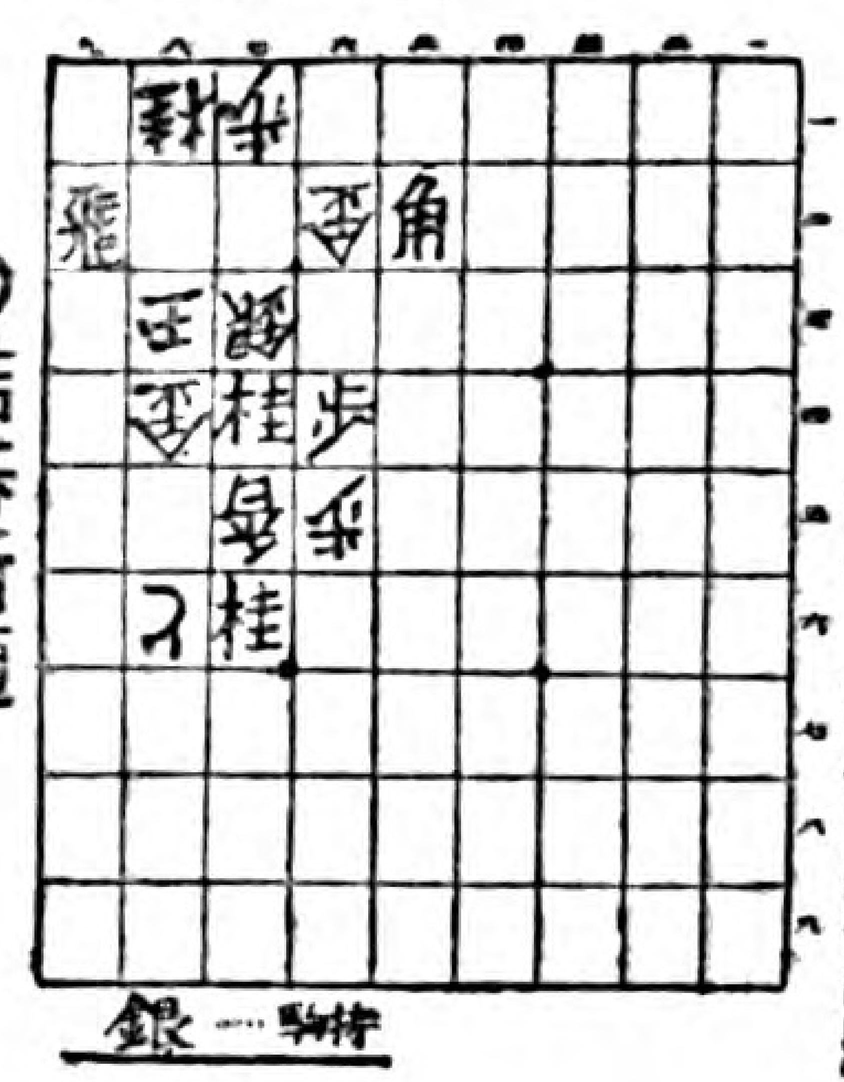


◇名を換へる

『わたし坊やには「フランネル」と云ふ名前をつければ善かつたと

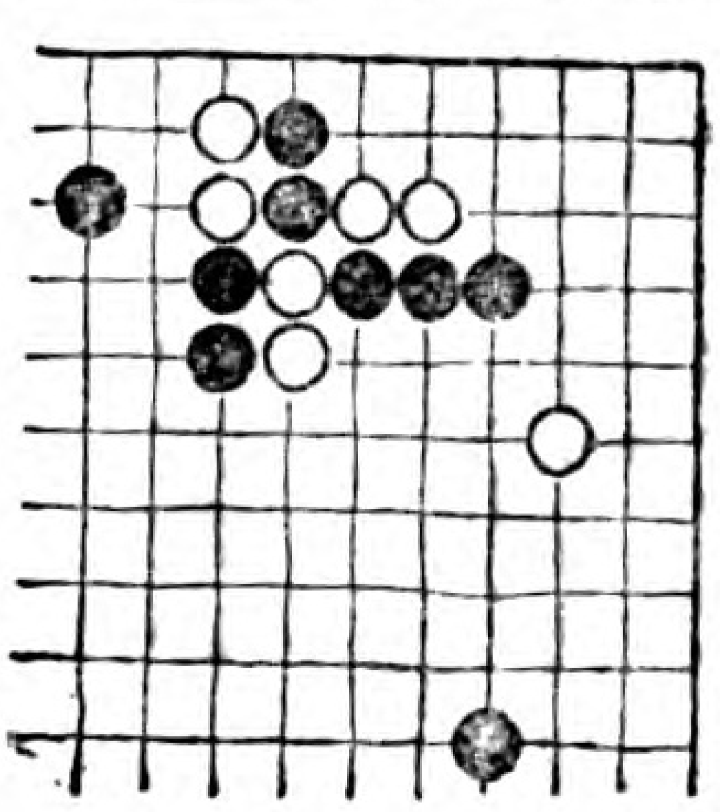
○詰將棋新題

八段 金易二郎出題



○詰碁新題

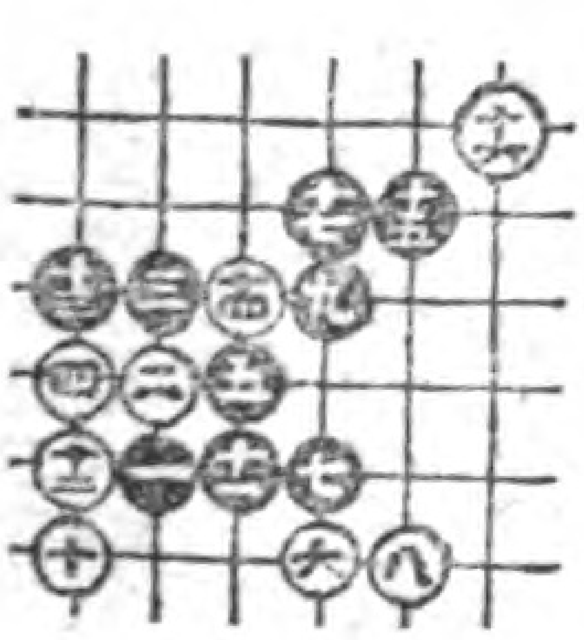
七段 瀨越憲作出題



黑先手にて最善の手段を問ふ。

○聯珠新題

珠叟 淸水吾石出題



本題は十七の四追含みで白の防ぎ手がなくなりました。併し十以後のどれかを打替へると白必勝です。其手はどこに潜んで居るでせうか。

本欄解答三三五頁にあり

思ひますわ。』

『何故ですの？』

『でも、お湯を見ると縮むんですもの。』



◇父の嘘

母『いけません。何といつてもいけません。チヨコレートは、三度きりしかあげられませんよ。』



ボツビイ（絶望して）『あゝ、お父さんが、お母さんは氣が變り易いと云つてたんだがなあ。』

◇室内遊戯◇

カードの投入れ

先づ競技者を二組に分け部屋の眞中に帽子を仰向けに置き、それから同じ距離になるやうに各組が半圓を描いて坐り、トランプの黒札と赤札を分て兩組が持つのである。用意が出來たら、黒組と赤組とが交互に一人づつカードを帽子の中へ投げ込むのである。そして全部終ると帽子の中の赤と黒の枚數を調べてそれを記録して置く。第二回目には一度に二枚づつ。第三回目には三枚づつ第四回目には四枚づつ。最後には全部の持札を一度に投げ込むのである。そして帽子に入れた枚數の多かった組が勝となる。



東京

好一對町名地名

△東郷坂（麴町區）
▼乃木坂（赤坂區）
△日の出町（芝區）
▼霞ケ關（麴町區）
△富士見町（麴町區）
▼駿河町（日本橋區）
△團子坂（本郷區）
▼阿部川町（淺草區）
△狸穴（麻布區）
▼鼠坂（小石川區）
△岩戸町（牛込區）
▼神樂坂（牛込區）
△臺所町（神田區）
▼竈河岸（日本橋區）
△鶯谷（下谷區）
▼初音町（小石川區）
△桶町（京橋區）
▼芋洗坂（麻布區）
△末廣町（神田區）
▼扇橋（深川區）



◎滑稽發句

蝦口を忘れて何もかはず（蛙）哉
學生の胸に煌めくぼたん（牡丹）哉
口なし（山梔）や鼻から先が直に顎
獵人に追はれて木から猿すべり
（百日紅）
春鮫（春雨）や船底囓る音高し。



武勇講談

三家三勇士

大島伯鶴
井川洗厓畫

珍客の來訪

江戸表に於て水戸家御指南役を承はる和田平助政直先生、まだ年は若いが劍道に於ては達人の譽が高く、從つて主君光圀公の御覺えもめでたく、日々の入門は市を爲すやう。さすが小石川水戸家の廣々たる道場も、門弟のために押すな〳〵の盛況、朝から日暮れるまで、竹刀の音が勇ましく聞えてをりまする。ところで、この平助先生、まことに立派な人物、上を敬ひ、下を憐れみ、家庭にあつては母に孝養を怠らず、一人の妹を勞り、只今では藩中の模範と噂をされるほどになつてをります。

今日は稽古休み、大概の若い者ならばブラ〳〵遊びにでも出掛けるのですが、平助先生はさうではございませぬ。稽古休みといふ時には、妹 とともに母の部屋へまゐりまして、終日母の機嫌をとり、茶など飲みながら、面白をかしく世間話に耽ける。それが一つの日課のやうになつてをりまする。

今日も 妹 の點てる茶をすゝりながら、母親と頻りに笑ひ話をして興じてを

ります。傍らに父親政勝の代より奉公をしてをります下郎の久助、早や六十の坂を越して七十に垂たる木訥の老爺、たゞ主人の為めを思ひ、一心に奉公の道を守つてゐる、誠に忠實な男でございます。この頃は仲間から若黨に引上げられ、萬事家政を助ける身となつてをります。

平『久助』

久『はい〳〵』

平『此方へはいれ』

久『はい』

平『其方も一服お相伴をしたらよからう』

久『有難うございます。お嬢様のお點て前を久振りで頂戴いたします。私はもうこの茶の道などは一向に心得ませぬが、それでもどうやらこの頃はお嬢様のお導きで、幾らか飲む術を覺えましたが、このお茶の道といふものは、なか〳〵作法がむづかしいものでございますな』

平『アハヽヽヽ、さう何も堅苦しくせいでもよい。茶といふものは心安く飲むのがやはり茶の道だ。なまじひ妙な手附や身體つきをしては、却つてをかしなものぢや』

久『有難う存じます、……それにつけても旦那様、かうやつて一家揃つてお茶を飲んで、笑つて樂しく一日をお送り遊ばす此有様を、亡き親旦那様が御覽遊ばしましたら、どんなにまアお喜びなさることでございませうなア』

平『さうだなう。お父上は御早世をなされたが、今頃お達者でゐられたら、全くお喜びのことであらう……拙上、語らぬことを久助が言ひ出しまして、貴女さまに昔の事など思ひ出させ、御機嫌を損ねるやうで恐れ入ります……久助、もう一服いたゞくか』

久『はい、有難う存じます』

話の折しも『頼ーむ、頼ーむ』といふ案内を乞ふ聲。

平『これ久助、玄關に案内がある』

久『はい』

平『早く取次に出なさい』

久『はい、けれども折角點てゝいたゞいたこのお茶を勿體なう存じまして……』

平『馬鹿を申せ。茶などは後でゆつくり飲める。早く行け』

『頼ーむ』

久『えゝ折角飲みかけた所へ誰だえ。けふは稽古休みで、人の來べき譯はないのに……』と、ぶつ〳〵言ひながら、爺は玄關へ。

二十三四、鼻筋通り口元締り、眉毛濃く、凛として氣高く、萬石以上の若殿様かと思ふばかり。供の者も二三人、そのうしろには若黨草履摑みの仲間。一人の武士は袋に入つたる刀をさゝげ、一人の武士は鞄を肩にいたして佇んでをります。久助見るより、さてこそお大名の若様がお弟子入りに來たに違ひないと思ひますから、玄關式臺へピタリ兩手を押付けて、

久『へ、ーッ、何れからお越しにございまするか』

若『和田先生御小屋は當家か』

久『はい、和田平助政直宅は當家にございます』

若『兄上は御在宿か』

久『はい、その……』

若『いえさ兄上は御在宅か』

久『はい兄上と仰しやいますると、誰方樣で……』

若『オ、其方に突然かやう申しても分るまい。それがしは紀州名草郡和歌山虎伏山竹垣城の主紀伊大納言頼宣の家來にて和佐主膳正の倅大八郎正純と申する者。この度父病身の故を以て御役御免を願ひ、隱居なされたるゆゑ、それがし父の家督を相續仰付けられ、主水正と任官をいたし、この度上樣の御召によつて江戸表へ出府、今日より柳の間詰を許され、兄上にも久々にて御目にかゝり、御喜びをいたゞかんものと、わざ〳〵推參いたした』

久『エーツ……さては貴下樣でございましたか。豫て主人から承はつてをりましたが、京の三十三間堂で八千八百七十八本の矢を通して天下一の額を上げ、弓を執つては當



代の名人、仔細あつて乃公とは義兄弟の縁を結び、生れる時は別なれど、死ぬる時は一緒にと約束をした弟が出來た。乃公の弟は一萬二千石、兄の乃公が三百石、澤山も違はぬが、一萬一千七百石違ふ弟を持つたと、主人がもう自慢に申してをられました。今も其のこと

でございます。お茶をいたゞきながら、あゝ和佐大八郎はどうしたらう、久しく會はぬが無事で居るかなどと、お噂でございました。噂をすれば影とは此事か。定めし主人も喜ぶことでございませう』

大『アハヽヽヽ、面白い爺だな。早う取次いでくれ』

久『はい〳〵。え〻〳〵もう取次ぎませいでか』と、いそ〳〵と奥へ馳込んでまゐりました久助、いきなりそこへ兩手を仕へ、

久『旦那樣』

平『何ぢや、久助』

久『まア珍らしいことで、今日は何といふお目出度い日でございませう』

平『何だ。唐突に、どうした譯だ』

久『あの紀州和歌山から和佐樣がお訪ねでございます』

平『なにッ大八郎が訪ねて來た……ウーム、それはまア。……母上、今噂をしたばかり。成程影がさすとは此事でござらう。妹、その邊を取片づけなさい。珍客到來ぢや……あゝさうか。それはまアよく來てくれた』

早速、平助自身玄關へ立出でて見ると、なる程、和佐大八郎、凛として佇む樣、威あつて猛からず。

平『オ、和佐氏か。よくまアわさ〳〵訪ねて來てくれた』變な洒落をいふもので。大八郎も懐かしさう。

大『オ、兄上、いつもながら御機嫌よく恐悦至極』

平『いや、御身にも變りがなくて目出度い。先達ては御書面によつて承知いたした。御尊父御隱居をなされ、貴殿が御家督御相續、主水正と御任官をなされたる趣き、早速御悦びの返事はまゐらせた筈。御落手下すつたか。兎にも角にもようこそお訪ね下された。さアどうぞ』



大『兄上、只今下郎まで申入れましてござるが、この度上樣の御召によつて出府仕り、今日より柳の間詰仰附けられましてござれば、何卒御喜び下さるやう』

平『ウーム、それは重ね〳〵目出度い。まづそこは端近ぢや。さアどうぞ此方へ……いや、供の方々大きに御苦勞ぢや。久

助、二三の門弟を狩り集め、お供の衆を道場脇の座敷へお通し申し、十分御款待いたせと申し附けろ。さア〳〵和作氏』

平助が先きに立つて奥へ通し、まづ母親と嫁に紹介せる。早速酒肴の用意。今も昔も同じことで、かういふ場合には御殿のお臺所へお願ひをすると、やはり現今ならば傳票を書いて持たしてやるといつたやうに、昔はまさか傳票といふこともありますまいが、一年のメくゝりにこれがお食祿から差引かれるといふやうな事が、お屋敷にはあつたさうで、そのくらゐの便宜は御殿で計つてくれたのでございます。早速料理を取揃へまして、これから義兄弟が盃を酌み交し、さいつおさへつ嘻々として笑ふ聲。平助の屋敷の內は和氣藹々としてをります。久助は唐紙の外にゐて、これを聞き、

『あゝえらいものだな。乃公の所の主人は三百石で、弟分が一萬二千石。大變な弟を持つものだな。かういふ所を親旦那樣にお見せ申したら、どんなにお喜びなさることであらう。親旦那樣もお殿樣が古今の名人だとおつしやつたほどの名人、おえらかつたが、今の旦那樣もえらいものだな』と、獨言をいひながら、涙をこぼしてをります。

又も意外の珍客

折しもまたもや『賴まうー、賴まうーッ』といふ案內の聲。

平『久助、久助はをらぬか』

久『はい、此所にをります』

平『白痴者め、何だ、そこにゐるなら、玄關のあの案內の聲が聞えぬか』

久『最前から聞えてをります』

平『聞えてゐたら、なぜ取次に出ないのだ。それが其方の役ではないか』

久『でも、只今お二方のお話を聞漏しましては、親旦那樣の所へまゐりまして、お話のしやうもございませぬことゆゑ……』

平『馬鹿め、始めたな。アハヽヽヽ、併し小言もいへぬ。……和作氏、これはな、拙者が幼ない頃、この爺の背中に負ぶさつて小便までもさせて貰つたものぢや、アハヽヽヽ。今では御殿で同樣ぢやが、やはり亡き父のことばかり申してをる。まことに實直な愛い奴でござる……これ久助、其方が冥途へまゐる時は、父上の前で喋ることを拙者がそつくり書いて持たしてやる。さア〳〵早く玄關へ取次に出ろ』

○『賴まうーッ』

平『それ、早く行かぬか』

久『えゝ面倒な。本當にまア折角の所を。何所の何奴だ。こんな所へ……ドーレ、といふのだ、畜生め』

大變な取次があるもので、玄關へ出て舞良戸を開いて見るとこは如何に。紺緞子大縞紋深々取つたる野袴、同じく紺緞子の背割羽織、金銀鏤めたるひのくり千段の大小に朋貫の柄絲を付け、縫つたての白足袋、紺足袋に草履、片手に鐵扇をさげて立つてゐる一人の武士、見るからに厳めしさうな人物。どんな譯

倒しの扇屋に見せても、篠黨の旗頭熊谷二郎丹次直實といふやうな恰好、五條橋の扇屋方の店先に立ち『扇屋上總、扇、所望いたしたし』とでも言ひたさうな形をして立つてゐる。これを見ると、久助が驚くまいことか、兩手を突いて、ブル〳〵ッと身慄ひをしました。

久『何れからお越しにござりまするか』

武士『これ〳〵下郎』

久『はい』

武士『當家は空家かな』

久『いゝえ、そんなことはございませぬ』

武士『拙者、最前から咽喉の痛くなるほど案内を請へど、一向にいらへがない。身共空家と存じた』

久『どうも恐れ入ります。つい來客がございまして、取込んでゐたものでございますから、お取次が遲くなつて相濟まぬ儀にございます』

武士『いやなに、以後氣をつけたがよい。時に和川先生お小屋は當家か』

久『へえ、和川半助は當家でございます』

武士『先生御在宿か』

久『はい、在宿致してをります』

武士『然らば取次げ。それがしは尾張の家來星野勘左衞門藤原繼忠と申する者、先生の御高名を承知いたし、一本お手合せ願ひたく〳〵推參いたしたと、疾く〳〵取次ぐやう』

久『エ、ッ、オ、ッ貴下樣でございましたか。尾張樣の御家來で星野勘左衞門樣と仰しやつては、たしか京の三十三間堂で八千四百四十五本の矢を通して天下一の額を上げ、弓を取つても名人だが、太刀を取つても達人ぢや。劍弓兩道の達人。えらい者だ。あゝ星野勘左衞門は天下無双の豪傑だ。鳥勘左衞門とは違ふと……』

勘『何を言ふ。これ下郎、下らぬことを申すな。アハ、、、

面白い奴ちや。早く取次げ』

久『はい〳〵、委細承知いたしましてございます』

あわたゞしく奥へ飛込んで來て、唐紙サラリと押開き、

久『旦那樣、旦那樣』

平『何だ』

久『早く裏からお逃げなさいまし』

平『何だ。何のために逃げるのだ』

久『愚圖々々してゐては貴下の命がなくなります』

平『馬鹿を申せ。それがしが何で命がなくなる。理由を申せ』

久『でも旦那樣、世の中に乃公が恐ろしいと思ふ者は、尾張の家來星野勘左衞門ぢやと平素仰せられたではございませぬか』

平『ウム、その勘左衞門が如何いたした』

久『貴下の首を取つてしまふといつて、今玄關へ參りました』

平『拙者の首を取ると……』

久『へえ』

平『どういふ扮裝をいたしてをる』

久『いや、その身裝の嚴めしさ。まづその日の扮裝を見てあれば、銀小札なしたる萠黃糸縅の大鎧を草摺長に一着なし、同じ毛糸五枚錣、突盔の兜をいたゞいたることにして、三尺の太刀を都鳥揚羽形に帶び流し、二間柄の槍を小脇にかい込み、ヤアヤア和田平助に見參なさん、ボン〳〵……』

平『何故そんな所を叩くのだ』

久『叩かないと調子がつきませぬ』

平『講釋と間違へるな……まさかそんな姿はして來まい』

久『いえ、さうではございませぬが、この家は空家かと、頭ごなしに脅かされました』



平『アハヽヽヽヽ、まつたく星野勘左衛門がまゐりしよな。それは〱珍客到來』

思はずニツコリ笑つた平助が、振向いて和佐大八郎の顏を見ると、たんとも飲まぬ酒に大八郎は眼の縁をホンノリ櫻色——色の白い方がポッとなると櫻色になりますが、伯鶴のやうな色の黒いのがポッとなれば海老茶色、南蠻鐵色などはあまり感心したものではございませぬ……その櫻色の面も何時しかサッと蒼味を生じ、左手に置いたる三池典太光世の一刀の繰形に手を掛けたかと思ふと、拇指でぷつりと鯉口を切つて、膝を立て直した樣子。

平『大八郎、いやさ和佐氏』

大『はい』

平『貴殿は星野勘左衛門の名を聞いて、刀の柄に手を掛け、鯉口を切つたな。いや、さうあらう。星野勘左衛門のために、御身の師匠吉見園右衛門殿は、三十三間堂の通し矢に打ち負け、主君に合はせる顏がないと、終に緣端に於て腹切つて相果てた。七尺去つて師の影を踏まず。師の恩は須彌より高く蒼海よりも深し。如何にもして師の恥辱を雪がんと、命を賭しての御身の通し矢、八千八百七十八本を通して、見事天下一の額を上げ、亡き師の恥辱は雪いだもの〻、勘左衛門はやはり吉見氏の敵、出會ひ次第に眞二つと、彼れの首を狙ふといふことは、



識てよりこの平助も存じをる。併しこゝは往來山途や、山の中ではござらぬぞ。水戸中納言光圀卿御屋形内だ。徒らに劍戟の沙汰に及ばれては、拙者の迷惑貴殿の不爲め、併し御身と拙者とは義兄弟、斬れといふなら斬りもする。突けといふなら突きもする。無論助太刀といふことは免れぬ。が、少し拙者に考へがある。兎に角こゝへ勘左衛門を案内するから、拙者が斬れと聲を掛けるまで、決して刀の柄に手を掛けてはなりませぬぞ。』

大『はい……』

平『お分りなら、それで宜しい……これ妹、母上ともぐ〳〵和佐氏をお欵待いたせ。ドレ、拙者お出迎へ仕らう』

大八郎を宥めておいて、平助は玄關へ出てまゐりましたが、玄關に立つて待つてゐた勘左衛門が驚きました。散々頼む〳〵といはせておいて、やう〳〵取次が出たかと思ふと、それが引ッ込んだツきり、膿んだとも潰れたともいつて來ませぬから、どうも變な家もあるものだと、勘左衛門呆然といたしてをる所へ平助が出て來た。

平『これは〳〵星野先生、ようこその御來訪。さアどうぞ此方へ……』平助の方では見知り越しですが、勘左衛門は平助を知りませぬ。

勘『誰方樣でござるか』

平『いや、拙者お訪ねにあづかつた和田平助平政直……』

勘『なに、さては和田先生にて在せしか。知らぬこととは申せ、これは意外の失禮。それがし事は星野勘左衛門……』

平『いや〳〵その御挨拶はあとのこと。そこは端近でござる。どうぞズーッと、ズーッとどうぞ』

驚いたのは勘左衛門、苟且にも三十五萬石水戸光圀卿の御手直し役、初對面の客に對して、あまり隔てのない物の言ひやう。もつと見識のある男かと思つたが、案外に輕るはずみの男だなと思つたが、言葉に逆らふわけにもゆかず、

勘『然らば御免を……』

と、被り物を傍らに置き、大刀を左手にさげて、平助の案内につれ、奥の一間にはいらうとして、見ると酒宴の席。

勘『あいや和田先生、手前はかやうなお席へ御案内を受ける覺えはない。お見受け申せば、御來客もあり御酒宴の席。これは甚だ以て迷惑千萬。どうか手前は道場へ御案内、是非一本お手合せ願ひたく……』

平『アハヽヽヽ、星野先生、それがしとても水戸光圀公へ手直しをいたす和田平助政直、逃げも隠れも仕らぬ。御所望とあらば何時何時でも御相手いたす。併し是非とも貴殿に御紹介せいたしたき人物もござれば、御迷惑ながら暫時この席へ……』

勘『左樣か。甚だ迷惑にはござれども、然らば御免を……』

と、澁々勘左衛門は設の席へ着き、チロリと向ふを見ると、和佐大八郎正紀が左手に刀を引付け、顔を向ふへ外向けて、何となくかう體がブル〳〵顫へてゐるのは、所謂武者ぶるひ。いざといへば拔討ちに斬らうといふ身構へ。物騒千萬な席へ案内されたものでございます。

想ひ起す長物語

席定まつたる時に、和田平助が、

平『さて星野先生、御紹介する人物といふのは、これに控へをる年若の武士。定めし先生も御承知ならむ、去る貞享三年四月十二日、京都三十三間堂にて明六ツから暮六ツまで一萬本の數矢を積んで通し矢を爲了せし紀州家の家來和佐大八郎正純、當時父の家督を繼いで主水正と任官いたし、それがしとは仔細あつて義兄弟の緣を結び、生れる時は別なれども、死する時は共にと約束いたした仲でござる。どうかこの後とも宜しく御別懇に願ひたく、手前より御紹介をいたす』といつた時に、勘左衛門、丁と膝を打つて、

勘『いや、それは〳〵豫て御高名は承知仕る。お年は若くいらせらるれど、弓を取つては稀代の名人。過ぎし昔の鎮西八郎爲朝は强弓取つての達人。太政入道淸盛も亦弓取つての名人。那須與市宗高は扇の的を射落して天下にその名を知られたりと聞く。その三者をも凌ぐ弓取りこそは和佐氏なれと専らの評判。あゝよい所で御目にかゝり、本懐至極に存ずる。それがしことは尾張の家來星野勘左衛門藤原繼忠と申する者でござる。以後御見知り置きを願はしく存ずる』

勘左衛門は兩手をついて何氣なく慇懃の挨拶。平助がヂロリ大八郎を見たが、挨拶をする樣子もございませぬ。

平『これ挨拶をいたさぬか。これ大八郎』疊を二つ三つ叩かれて、大八郎、しぶ〳〵ながら、

大『初めて御意得申す。それがし事紀州の家來和佐主水正正純と申する若年者でござる。以後御見知り置かれるともどうとも勝手に召されい』まるでブルドッグが喰付きさうな聲に、勘左衛門驚いた。これは飛んだ所へまゐり合せたと思つたが、苦笑ひをして顏を外向けてゐる。

平『さて星野先生、大八郎より御挨拶が濟めば、貴殿に改めて御

無心がござるが……』

勘『ハ、ア、拙者に改めて無心とは……』

平『餘の儀ではござらぬ。たしかに其品。御身の腰に帯せらる脇差の小柄、それをちよつと拜見させていたゞきたい』

勘左衛門がまた驚いた。世の中に無作法千萬な者もあればあるもの、初めて會つた者に、刀の小柄を見せろとは、これは變だわいと思ひましたが、厭だともいはれませぬ。

勘『然らば御覧に入れる。甚だ粗末の物、御笑觀下されたい』

平助の出した扇の上へギラリと抜いて載せた小柄、平助はヂッとそれを見まするると、粗末どころか中身は關兼繼の鍛へました小柄、素銅に一輪牡丹の浮彫は後藤祐乘の作、誠に澁いものでございます。確かにそれと見て取つた平助、やがて打ちうなづいて大八郎の方へ向き直り、きつと容を改めながら、

平『和佐氏、これなる小柄に見覺がござらうかな』と云つてすいと小柄を突付けられた其時に、恩師の仇たる勘左衛門の所持する小柄、見るのも汚らはしいとは思ふが、義兄の差出すもの、見ぬ譯にもならず、澁々眼を移しますと、はて何所となく見覺えの品。尙もよく眼を据ゑてヂッと視てびつくり。



大『プッ、これは……』

平『覺えがござらう。いやさ、覺えなくてはならぬ筈。和佐氏、想ひ起せば貞享四年四月十二日、明六ツより暮六ツまで一萬本の數矢を積み、差取り引詰め、射たりやな通したりやな五千本。正午少々前、暫時休息とあつて、幕張りの中に入り、暫らくの休息。稍あつて再び矢場に立つ身となり、白張の胴弓、七分半の矛詰り、白鷲の遠矢、がつちり番へて空に照る満月の如く彎きしぼり、それとの合圖諸共に、よつぴき兵と切つて放てばこは如何に、如何なる小手の狂ひにやありけん、矢は外れて庇を射削り、しまつたと乙矢を射れば砂を掃き、これは〳〵といふうちに百二三十本の徒矢。その時、的和佐氏、御身いかゞなされた。

を視つめ、早や頬を傳うて流るゝ涙は瀧津瀬の如く、「弓矢の神の加護はあらざるか。紀州熊野に安置し奉る熊野權現の利益はないか。あな怨めしや」と、たゞ茫然たる折しも、數萬の見物は水を打つたる如く、どう成行くことかと固唾をのむ其時、見物の中よりして天地に轟く大音を揚げ、「ヤアヤア和佐大八郎卑怯未練なり。汝通し矢を仕損じたる時は、その場を去らず切腹するの覺悟でないか。死に後れしか。卑怯者よ。未練者よ」と呼ばはる者あり。その時、御身いかゞなされた。持つたる弓をガラリと投捨て、見物の方をハッタと睨付け、「言ふな見物。さてこそ星野勘左衞門の配下の奴等、我等の通し矢を爲損ずることを神かけて祈つたりしよな。望みに任して通し矢は仕損じたれど、武士の面目、見ん事この場に腹搔切つて見せてくれる、我が最期のほどを見て、後の世の語り草にせよと、小刀ギラリと引拔いて、あはや脇壺へ突立てんと爲すその折しも、飄然と現れたる一人の浪人、御身の手首を取り、「死は一旦にして安し。生は難きを忘れしか。御生害暫らく」と、幕張りの中に引入れ、御身の兩の腕を起倒流の柔術を以て揉みほごし、この凝りの毒血を取らねば相成らずと、小柄を拔いてその血を取りしが、その時用ひた小柄は卽ち此品。如何でござる、星野先生」



勘『プッ、どうしてそれを和田氏には御存じ……』

平『あゝ花も實もある星野氏。それがしも其時は大八郎とは赤の他人。さりとてまだ若年者のこの壯擧、あゝ紀州家は良い家來を持たれたと、矢來の外に見てありしが、憐れや大八郎五千本にて仕損じ、すんでに腹切らんといたす覺悟の體。「あゝかゝる名人を失ふは紀州家のみの損失ではない。日本國の損失、いかにもしてお助け申さばや」と、急ぎ門口に馳着けたるその時は、旣に

時おくれしとみえ、早や先口の浪人がござつた。今や門を鬩むる足輕と押問答の最中。その時、足輕共を引受けて、貴殿を門内に入れた一人の武士があつたでござらう』

勘『オヽいかにも黑木綿の紋付、旅の武士……』

平『それぞかく申す和田平助政直』

勘『オヽツ、さてはあの武士が和田氏でござつたか』

平『和佐氏、御身が危きを助けられ、浪人の名を尋ねんと、袖を捉へしその時に、「我れは今日ゐて明日は白浪の、所定めぬ浮浪のもの、住所などのあるべき筈はない。又會ふ道もある花の山、何れ再會いたすでござらう」と、袖振拂つて立去られた奥床しさ。あゝえらい人もあればあるもの、襤褸をまとうてをれ、何れ名のある武士と、それがしその時後を尾けて行くほどに、五條小橋際の茶店に入り、立派やかなる武士に姿容を改めて、再び茶店を立出でしその浪人。はて不思議やと茶店の老爺にたづぬれば、あれこそ尾州家の臣星野勘左衛門と聞いた時の驚き……星野先生、花も實もある其許のお仕打、武士の龜鑑、何時か此事を大八郎に知らしむることもあらんかと、時機の到るを相待つうち、珍らしや今日のこの會合。これぞ弓矢神の御引合せ。あな忝じけなやと思ふにつけ、星野先生、ようこその御入來。拙者今日までたゞたゞ貴殿をお慕ひ申してござつた……さアそれとも大八郎、師の仇ゆゑ一刀の下に斬る、平助にも助太刀せよと申さるゝか。それとも御身のためには命の恩人、こゝに手をついて、禮を述べらるゝか』

息をも吐かぬ長物語。

義を結ぶ三勇士

平助の言葉をぢいツと聽いてをりました大八郎、この時ハラハラとはふり落る涙止めもあへず、兩手を仕へ、

大『へ、ーッ……さういふ事とも知らずして、今日までたゞ師の仇たる勘左衛門、出會ひ次第眞二つと、御身を怨み居つたるは、拙者重々の誤り。平に御容赦の程……』あとは言葉も出でませぬ。勘左衛門は大八郎の手をあげさせ、

勘『あゝいや和佐氏、御手をお上げ下さい。取れば輕し取らねば物の數ならず捨つべきものは弓矢なりけり。實に武士道、主持つ身の、奉公の二字ほど辛いものはござらぬ。相手の吉見氏と通し矢の腕くらべをしようとは、夢思ひ設けざりしこと。それが謂ゆる殿様御料簡。尾張紀州は御一家御一門にありながら何の事ぞ。尾張の家來に負けるなと、互ひの主君の意地づくから主命つひに默し難く、三十三間堂に於ての通し矢、それがしは八千本、吉見氏は七千六百五十本、お氣の毒にも吉見氏の敗れと相成つたが、そこが武士の面目、主君に合せる顏がないと、其場に於て腹切られたが、あゝお懐はしきことゝ思へど返らぬこと、せめてものことに亡き吉見氏の菩提をと、それがし屋敷の佛壇に、明けても暮れても燈明供へて御回向申してをる次第でござる。然るにこの和佐氏の御再擧、見事に爲了せられるゝやうにと、陰ながら祈りかけてお斷り申したが、失禮ながらまだお

若うござつた差取り引詰めちとお急きなされた。その急いた爲めに行損じられたが、こは一大事とそれがし早速幕張りの中に飛入つて、貴殿の危きをお救ひ申したなれど、もとより恩も義理もあるものではござらぬ。何事も水に流してお忘れあれ。既に慶元兩度の戰ひも相濟みしが、尚ほ豐臣恩顧の武士諸所に隱れ、徳川の天下を狙ふ者決して少からず。今三家の家來呉越の思ひをすることもあらば、それこそ以て徳川の家にとつては由々しき大事。徳川家輔佐の任に當る尾張紀伊水戸の三家の臣下、心を一致して御奉公の道を守らば、徳川家の繁榮は日のあたり。和佐氏、和田氏、何とさうではござらぬか』

かう言はれた時に、平助は嬉し涙に暮れながら、

平『へ、ーッ、恐れ入つたる星野先生の御教訓。就てはこの平助大八郎の兩名、以後格別の御指導を願ひたく、若年者ではござるが、若くは弟分として何卒御盃を下さる譯には相成るまいか』側に聽いてゐた母親もそれへ膝行り出で、

母『女だてらに要らぬ喙ではございまするが、和田の母、最早七十の坂を越えたる身が、御媒介役を勤めまする。何と悴共へ御盃を……』と、いはれて、勘左衛門ニッコリ笑ひ、

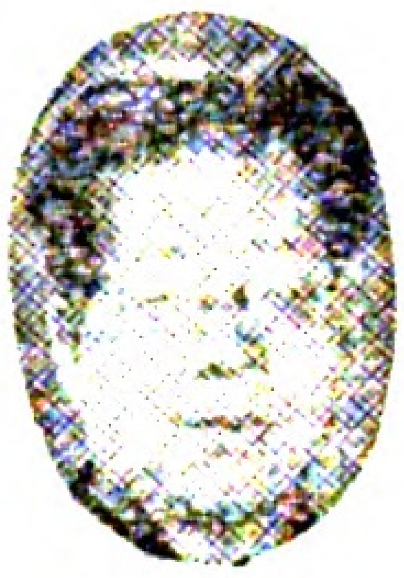
勘『こは御母公様の仰せ、辱けなき儀でござる。さらばそれがしは年長者、失禮なれども御兩所に盃まゐらせん』と、早速銚子土器を改めまして、こゝに三名義兄弟の縁を結びましたのは、後年御三家三勇士とて、天下にその英名を謳はるゝに至りましたこれぞそのはじまりでございます。この三勇士の會合は、さながら桃園に義を結ぶ玄徳・關羽・張飛もかくやあらんと思ふばかり。世間の人はいかにこれを羨んでございませう。然るに圖らずもこの席へ周防岩國より悲報到來。平助政直は三百石の祿を抛つて敵討の助太刀、再び日本國中を遍歴するお話は次號に申上げます。（つゞく）



桃園に義を結ぶ玄徳・關羽・張飛

『キング』新年號を讀みて

全篇に漂ふ明るさ



文藝家 上司 小劍

『明窓淨几』といふ熟語があります。私の最も好きなことばの一つであります。キングの新年號を通讀して、第一に感心しましたのは、全篇に漂ふその『明るさ』であります。明るくて健かで一味のユーモアをもつてゐます。玉杯に美酒を盛つて、それが溢れかけてゐるといふ氣がしました。その美酒は決してアルコールを含んだ毒酒でなく『生命の酒』でありませう。私はキングの新年號を讀みかけて、急に机の上の掃除を始めました。『明窓淨几』といふことばを如實に表はさんがために。一幅の通俗經典。それがキングの新年號だと言つても、過當ではないでせう。

誠意の結晶



貴族院議員 藤原銀次郎

私は業務上から講談社と深い關係に在るので、聊かその編輯に對する苦心を窺知してゐるのである。聞く所に依ると、この一册の新年號を作る爲めには編輯當局は數ケ月前から計畫を練り研究し審議し細心の注意と非常の努力とを傾けて漸く大成したとのことである。この一册は實にこの誠意の結晶である。これを手にせらるゝ江湖の諸彥は這間の消息を何よりも雄辯に事實の上に認めらるゝであらう。私は目出度新春の初頭に於てこの新年號が全國津々浦々まで配布せらるゝ時丁度目錄に載せてある繪の樣に、各階級の家庭で年寄から子供まで滿足を以て愛讀せらるゝ有樣を想像して欣賀に堪へぬのである。

健全の氣分充實



大阪每日新聞社長 本山彥一

俗事紛糾の際なりしも一度之を手にして思はず卒讀せり、老生如き新聞經營者に取りても裨益するところ少なからざるも、わけて老若一般に萬人向きとして記事と云はず、挿繪と云はず誌面の隅々まで健全の氣分を充實し、しかも表面道學者らしく諷諭せずして、

風流かゞみ

○咎は無いぜん

麻布鳥居坂の戸川內膳邸から出火して、死傷數多出した時、

この火事は人の命を鳥居坂
これより上の咎は無いぜん

と、落首したものがあつた。松平樂翁年僅かに十三歲、田安御殿にあつたが、自分の歌は彼の落首とは餘程違つて居るとて、近侍に示されたのを見れば、



この火事は人の命を鳥居坂
怪我の事なり咎は無いぜん

これを傳聞した者は、いづれも其仁心に感泣したといふ。

○清少納言の上の句

清少納言が一代の才女であつたことは、あまりにも有名である。或る年のきさらぎ、晦日に、風が吹いて雪が少し降つた。すると殿

よく讀者の心裡に感銘を與ふる方針の徹底せる點は最も苦心の存するところなるべし。思ふに此新年號の如き恐らく前年の新年號の編輯を終ると共に、慘憺たる苦心を重ねて計畫に着手せられしものなるべし。而して全社員一致團結の奮闘となり一點の間斷を見ざる點は老生の敬服措かざるところなり。



讀者奉仕の現れ

文藝家　中村武羅夫

修養と娯樂との無限の寶庫「キング」の新年號は、四百五十餘頁の老大な本文と口繪とを、一流大家名家の佳篇玉什を以てぎつしり埋めて、他に二冊の別册附錄をおまけに添へて、それで普通號の定價で發賣された。この破天荒なる廉價には、先づびつくりした。内容はもちろん一粒選りに吟味を重ねられたものばかり、どの一つを取つて見ても、直ちに血となり肉となる心の糧でないものはない。よくぞこれだけ集めたもの哉！　この素晴らしい出來榮えも、講談社一流の讀者奉仕の熱誠の現れであらう。



錦上花の二大附錄

博報堂社長　瀬木翠蒲

雜誌キングは雜誌界の大王で、安大無邊全國民の愛敬の的である、迎春の準備に忙しい、どの家庭でも、キングの新年號を備へることを忘れないであらう、なぜなればキングを以て自己の修養向上の指導者として、大過なき、否、幸多き昭和四年を送つた人々は更に來るべき新年をより以上の幸福なる年たらしめようと願ふであらうからである、殊にキングの新年號には『キング名訓集』と『科學的運命判斷』二大附錄があつて錦上更に花を添へてゐる、即ち前者は心新たに新年の計を立つるもの、鏡となり後者は努力奮闘、開運の鍵となる、げにキングは新春に新らしき人生の航路に舟出する人々の春帆となり幸福の順風に各〻志ざす彼岸に達せしめるであらう。



斯界の王座

秀英舍社長　杉山義雄

毅然たる指導精神の下に、千錬萬鍛の編輯を經て出で來る『キング』に就ては居常畏懼措く能はざるものである。この外貌のみを模せんとするも容易に近似する能はず、其精神に至りては遂に窺む可らず、之れ『キング』が斯界に王座を占むる唯一無二の理由と信ず。

相の中將が主殿司を使者に、

すこしはるあるこゝちこそすれ

と下の句を書いて寄越し、「とく〱上の句を附けよ」と催促した。清少納言は直ちに、



そらさむみ花にまがひてちる雪に

と詠んで返した。

○女とや見ん

中村鯉長は、本名を丹波屋久米太郎といひ、歌舞伎の女形であつた。自分の職業が職業なので平生女子の嗜みを守つてゐたが、もと〱男子であるから時には粗暴の行ひがないでもなかつた。

その述懷の歌に、

春雨の强からずまたよわからず
女とや見ん男とや見ん





落語 犬の眼

三升家小勝
谷脇素文畫

御承知の通り、何事にもお色氣といふものがございます。朝起きてお早うございますといふのもお色氣。片つ方がお早うといふのを、片つ方が『何が早いんだ。手前ばかり早いんぢやアねえや』と云つたら喧嘩になる。それでは色氣がない。ちよつとした事にも色氣といふものはございますが、同じ人間でも御婦人は萬事にお色氣があります。土臺身體がやさしく出來てゐるところへお化粧といふことをしてお色氣をそへる。ところが、何にしても男はさつぱりしたのをいゝとしてあるから、どうしても色氣に乏しい。病でもさうで、御婦人の方はちよつと風邪をひいて、頭痛がするといつて、色の白い所へ玉屋の即効紙などを小さく切つて貼つていらつしやる。これが誠に色氣がある。尤も御婦人でもお婆さんが梅干を貼つたのはあんまり粋ではない。中には干いたのをむしつて食べて居るのがあるが、熱の逆戻しは有難くない。或は癪といふ病、これがまたお色氣がある。癪に嬉しき男の力などといふ。これに次いでお色氣のある病氣は眼病。眼のわるい女の子が眼の縁を赤くして、紅絹の布で拭いてゐる。これがまたなか〳〵色氣がある。ところが、色の黒い男が、まさか紅い布でも拭けないから、白いハンケチか何かで拭いてゐる。色の黒い所へ白いハンケチだから調和が悪い。まるで黒板塀へ越中褌が引つかゝつた樣で、餘りいゝ圖ぢやない。○『どうしたい、おい』△『エエ』○『どうしたよ』△『ウム、どうも弱つちまつた』○『杖をついてるが、よいよいになつたのか』△『よい〳〵ぢやアねえ、眼がわるいんだ』○『さうか。道理で此頃見えねえと思つた』△『巫山戲ちやいけねえ。眼がわるいから見えねえつて譯ぢやアねえ』○『何しろ、眼が惡くつちやア困るだらう。併し眼にもいろいろ性質があるが、何だお前のは……』△『みんなの言ふにや、あめだつてんだ』○『あめ……』△『ウム、中に雲がかゝつてゐるといふんだ』○『フヽツ、馬鹿だなア。眼で茶番をされてゐやアがる。ドレ、乃公が見てやらう』△『お前に分るか』○『分らなくつてよ……ア、これは雨ぢやアねえ。天氣だ』△『エ、』○『天氣だよ』△『天氣……？』○『ア、天氣だとも。眼の中が星だらけだ』△『毆るぜ。冗談ぢやねえ。人の眼をおもちやにするな』○『何しろ、眼が惡くつちやア氣が詰

いで面白くなからう。醫者にかゝつてるのか』△『醫者にもかゝつてゐるが、捗捗しくいかねえ』○『錢を惜しんで下らねえ醫者にかゝるから、捗捗しく癒らねえんだ。幾日ばかりになるんだ』△『さうさ、今日でかれこれ七十五日ばかり』○『ウーム、長いな。大概忘れる時分だ。何でもいゝ醫者にかゝつ。て、うんと錢を使へ。構はねえから家を潰すか眼を潰すか、何つちか片ッ方潰す覺悟でなくつちやいけねえ。うんと錢を使へ、うんと……』△『うんと使へつたつて、うんと使ふだけありやアしねえ』○『無え？間抜な奴ぢやアねえか』△『ぢやアお前持つてるか』○『乃公はねえ』△『何を云つてやアがるんだ。使ひたくつたつて錢がねえから困つてゐるんだ』○『そこだ。友達が大勢あるぢやアねえか。手前だつて平常手拭だ稲荷樣の提灯だと、年中義理を出してるだらう。此方が身體がわるい時や何か又先方でそれだけの事をするのが當前ぢやアねえか。それが浮世の義理だ。一



兩づつ集めたつて、五十や百の金は出來るだらうぢやねえか』△『さうなりやア有難えが……』○『成るもならねえもあるものか。何でもいゝから、友達に任せておけ。世の中に友達ぐらゐ結構なものはねえ。女房でも何でも友達に任しておきねえ』△『おい〳〵冗談言つちやアいけねえ。女房を友達に任せる奴があるものか』○『手前それだからいけねえ。女はあれッきりねえと思つてるんだらう。そんな尻の穴の狹いことをいふな。紡績會社へ行つて見な。女がウジヤ〳〵ゐらア。この間もあんまり女があり過ぎて、陽氣が惡いから腐るといけねえといつて、佃煮にした所がある』△『巫山戯ちやいけねえ』○『まアその位のものだ。くよくよするな。乃公がいゝ醫者を敎へてやるから、そこへ行きねえ』△『何處だ』○『横濱にヘボンさんといふ西洋のお醫者がゐたらう』△『ウム』○『あの人

の弟子でシャボンといふ人がゐるんだ』△『へーえ、シャボンなんぞも値が上がつた方ぢやアねえか』○『何を云ひやアがる。このシャボンさんに癒してもらひねえ。少し療治はあらひ粉だといふが、生活はせつけんだ』△『お前も口上茶番をやつてるぢやアねえか……家は何處だ』○『家は築地だといふから、行つて癒してもらへ』△『さうか。有難い。ぢやア行つて來るぜ……ア、有難い。持つべきものは友達だ。冗談をいひながらも、いろいろ心配してくれらア……併し豪氣なことにやア、眼がわるくなつたら感がよくなつて來た。眼がわるくなると、耳の方が幾らか役に立つて來るんだな。横町の角へ來ると、スーツと風が來るやうな心持がする。これで横町といふことが分る……はてな、築地といへば、此近所だ。聞いてみよう……えゝ少々伺ひます』×『はい〳〵』△『この邊にシャボンさんといふお醫者樣がございますか』×『ア、いゝ所でお訊きなすつた。シャボンさんは直きこの向ふだ。お前さん、お眼がわるうございますね』△『へえ』×『それはさぞお困りでせう。私がそこまで手を取つて上げよう』△『濟みませんねえ』×『さア〳〵お出でなさい』△『有難うございます』×『こゝがシャボンさんのお屋敷だ。門をはいつて、この突當りが玄關だから』△『有難う存じます。どうも濟みません。日本は國が小さくつても貧乏でも、人間が強いのと深切なので持つてるんだ……ア、こゝが玄關だな。御免なさい。お頼み申します』醫『ドーレ……』△『えゝ濟みませんが、眼がわるくつていけねえんで、どうか一つ療治をしてお貰ひ申したうございます』醫『ハ、ア、何方からお出でなすつた』△『えゝ八丁堀からまゐりました』醫『アア左様か。生憎先生御不在だ』△『へーえ、先生も眼がわるいんですかい』醫『眼はわるくはない』△『だつて、今、ふさいで居るといつたぢやねえか』醫『ふさいで居るのではない。不在、留守だといふのだ』△『ア、留守ちやしやうがねえ』醫『先生は御不在だが、私が診て上げよう』△『お前さんに分りますかえ』醫『[illegible]



Ⅳ

ない。先生の許しを受けて代診してゐるのだ。さア此方へおはいり。そこにテーブルがある。その前の椅子におかゝり』醫『誰が西洋料理を食はせるのかね』醫『誰が西洋料理を食はせる奴があるものか……ドレ、お見せ……おや〳〵、大變に汚ない眼だね』△『綺麗な眼なら、見て貰ひに來やアしない』醫『それは御尤もだ。けれどもちつと手術が遲れたな』△『幾日ばかり……』醫『分らないな。日ぢやアない、眼の療治が手遲れだといふのだ。どうもこれは刳抜かなければいけない。、、、、ちよいと刳抜いてしまはう』△『刳抜く?……人の眼だと思つて、あんまり荒ツぽいことをしちやアいけねえ』醫『いや、刳抜いて療治をしなければ、よく癒らないよ』△『驚いたなア。酷い目に遭ふといふのは是だね』醫『洒落てはいけない。なアに譯はない。腐つてる所を刳抜くのだから、痛くも何ともない』△『お前さんは痛くなからうが、此方は痛い』醫『そんな意氣地のないことでは療治は出來ない。景淸なんぞ御覧。何ともない眼を、賴朝の顏を見るのが癪に障るといつて、自分で刳抜いてしまつた』△『へーえ、ぞんざいな奴だね、景淸といふ奴は……』醫『けれども眼病といふものは、何となく色氣のあるものだ』△『冗談言つちやアいけねえ。痛くつて色氣も何もありやアしねえ』醫『お前さんは色氣はなくつても、芝居を御覧。芝居でも女の眼のわるいのは、第一朝顏だ』△『朝顏は入谷が名物だつたが、此頃はなくなつてしまつたつてね』醫『それは花の朝顏』△『ぢやア便所の朝顏かい』醫『話がきたないな。芝居では朝顏、本名は矢部觀負の娘深雪というて武士の娘だ。戀し〳〵に眼を泣き潰し等といつてな、後にこれは大井川で眼があいた』△『へーえ、どうして癒つたんで』醫『宿屋の主人德右衛門が腹を切つて、その血で藥を服ませたら眼があいた』△『そいつは有難い。ぢやア濟まねえが、お前さんちよいと腹を切つておくんなさい』醫『冗談言つてはいけない。私は自腹を切るのさへ

嫌ひだ』△『誰だつて嫌ひだ。まだ他に朝顔がありますかえ』醫『朝顔はないが女で眼のわるいのは袖萩だ』△『へーえ、眼がわるいのに何も淋しい所を通らなくつたつていゝんだ』醫『何だい、△『追剝だらう』醫『追剝ではない。袖萩、△『つぶし餡かえ。あれは三好野がいゝつてね』醫『分らないな。前方謙杖館の所へ出て來る。戸を叩くにも叩かれず、この垣一重が黒鐵の……』△『おい〳〵踊つちやアいけねえ』醫『男で眼の悪いのが澤一だ。三つ違ひの兄さんと……』△『もういゝよ。早く療治しておくんなさい』醫『ア、さうか。さアそこへ腰を掛けて。いゝかえ。ハツ、ヤツ、ヨツ……』△『どうしたんで』醫『もう刳抜いて了つた』△『もう抜いたのかえ』醫『譯はない』△『まるで蜊剝くやうなことをするんだね』醫『これで周圍のわるい所を除つてしまへば直ぐ癒る……さア宜しい。この鉢に湯がある。藥が調合してあるから、これで中を洗ひなさい』△『へえ、有難う……おやおや先生、球があるうちはさうでもなかつたが、球を除つちまつたら、大きな穴になりましたね。粗相つかしいのが落ちるといけねえから、瓦斯燈でも點けておかう』醫『馬鹿だな、此人は。眼へ瓦斯燈を點ける奴があるものか』△『だつて、この間東京驛の傍の穴へ貴族院議員が落ちたつてね』醫『そんなことはどうでもいゝ。さア洗つたら、中をよく拭きなさい。球を入れ直して上げるから』△『さうでございますか』醫『球もすつかり磨いて綺麗にして上げる。玉磨かざれば光なしといふのはこれだ。ピカピカ光つて來た』△『へーえ、それは有難い。どうか早く入れておくんなさい』醫『いゝかえ。入れるよ。ヤツ』△『アイタ、、、、こいつアいけねえ。アイタ、、痛いよ先生。こじつちやいけねえ』醫『こじる譯ぢやアないけれども、少しこの球が、、、ふやけてはいらなくなつた』△『エ、ツふやけたえ？ 炭酸を入れたのかえ』醫『炭酸などを入れるものか。湯の中へ浸けておいたから、ふやけたんだらう』△『おや〳〵、はいらなけりやどうするんで』醫『日向へ出して乾しておかう』△『人の眼を梅干と間違へてゐる。どうか早くお賴み申しますよ』醫『まア一服おやり……何かえ、何日頃から悪いのだえ』△『もう七十五日からになります』醫『さうか。隨分長いね。



もつと早くから來ればよかつたのに。總て人間の身體の中で一番眼が肝心だ。眼がわるいと、何事もうまくいかない。第一、芝居でも……』△『朝顔や袖荻ならもう澤山ですよ』醫『さうかえ。お分りならお話をしないが、物を口で味はつても、眼で見ないと其物が旨くない。眼で



味はつて口で味はふ』△『へえ成程』醫『さアもう乾いたらう。入れて上げよう……おや〳〵お前の眼の球がなくなつてしまつた』△『エツなくなつたえ。いよいよ玉無しは驚いたね。どうしてなくなつたんで』醫『ア、この庭の切戸が開いてゐたので犬がはいつて來てお前の眼の球を食べてしまつたのだ』△『おや〳〵いけねえな。どうするんです、先生』醫『どうするつたつて、外にしやうがない。お待ち〳〵。今、あの犬の眼球を刳抜いて、お前の眼へ入れてやらう』△『さうしたら、犬が見えなくなりませう』醫『犬の腹へ二つお前の眼球がはいつたから、今に芽がふくだらう』△『茶柿のやうだな。大丈夫ですかえ』醫『大丈夫だ……それ、犬の眼球を刳抜いてしまつた。犬は杖をつくことが出來ないから、當分困るだらうが、仕方がない。人の眼球を食つた罰だ。ア、丁度い〻。お前の眼にしつくり合つた。さア開いて御覽。そつとだよ、そうつと』△『へえ、有難う存じます……やアよく見えます』醫『どうだえ。

よく見えるだらう』△『おや先生よく見えますがみんな逆さに見えますぜ』醫『アア入れやうが違つた。それは逆まだ』△『おやおや間違へつこなしにしておくんなさい』醫『よしよし。今度は大丈夫だ……靜かに〳〵。それ、どうだ』△『へえ、成程。これは先生よく見えますなア。先の眼球より此方が遠眼が利いて暗い所でもはつきり見えます……ア、先生、彼所へきたない姿で頰冠りをした奴がウロウロしてをりますぜ。あ〻いふ奴が靴を持つて行つたり、干物を引つ攫つたりするんです。一つ脅してやりませう。ウーツ、ワン、ワン〳〵』醫『おい〳〵さう齒を剝出して吠えてはいけない。まだ眼球を入れたてだから、あんまり大きな聲をしたり、力を入れたりすると飛出してしまふ。明日又お出で空氣が洩るやうだといけないから、もう一遍見て上げる』△『へえ、有難う存じます。左樣……アツいけねえ。これはうつかり表へ出られない』醫『どうして』△『まだ鑑札が受けてない』（完）

趣味と実益 家庭セクション

美容の秘訣公開

頰の高い人

頰の出てゐる人は、その高いところは日本髪の鬢、洋髪なれば耳かくしの毛で隠すのが一番利口です。白粉のつけ方は、顎の先を白くし、襟の白粉も濃くつけます。さうすると鼻が高く見えます。頰紅は寧ろ兩の下頰(口の兩脇)につけた方がよいやうに思ひます。それから眉はいゝ、くつきりと稍太めに描きます。顔には白粉が少しあつてよろしい。又耳朶に紅はあつてはいけません。



丸顔の人

顔の丸い人が長く見せるためには白粉を衿から顔の方へ稍深く塗り込むで、その頰のところに頰紅を縦長にはきますと、多少丸味を見ぬやうになります。無論鼻の白粉を顔よりは濃い目につけ、小鼻に赤味を入れてそこにかげをつけて鼻を高く見せ、額には白粉のないやうにして、日本髪であれば前髪の取り方は細く、中を膨らませて高くし、洋髪なれば七三にして、耳かくしの毛をぴたりと頰につけさせながら前に出しますと餘ほど細目に見えて來るものです。

細顔の人は丸顔の人と反對に考へればよい譯です。

お金の掛らないマッサーヂクリーム

マッサーヂをしつけた人は一日しないと氣持の悪いものです。こゝに簡單でお金の掛らないマッサーヂクリームがあります。それはあの洗粉をクリームに代用するのです。洗粉を丁度マッサーヂクリームを水で溶いたほどの柔かさに溶かして、それをクリームと同じやうに顔につけて指でマッサーヂします。其効果はマッサーヂクリームでしたと違ひません。あとは洗顔します。

子供の―病氣と季節

○感冒 一月二月十二月に多く、八月が最も少ない。

○頭痛 五月六月七月に多い。

○腹痛 五月六月七月に多く、一

お氣をつけぬと笑はれますよ



奥様と女中の問答



女中　デパート等で時々、同じ柄で同じ生地だのに、値段だけが二、三圓も違つてゐる場合があります。そんな時どちらを求めた方がいいでせうか。

奥様「安からう惡からう」と云ふ言葉がありますが、大抵の方はこの言葉を思ひ出して、一圓でも高い方を上等と思つて、お買ひになる方が多い様です。さう思つて見ると、何となしに、値段の高い方が生地がよく見えるものです。

ところが、實際はそんな場合には生地の良いのは値段の安い方で、値段の高い方は決して生地がよくはないのです。それは何故かと云ひますと、値段の安い方は問屋の方で最初に大量的に造り出したのですから値段も安く充分生地にも念を入れて造つたのですが、それが一度デパートへ出ると大變好評で見る見る品切れになりさうなので、後で又追加として少しばかり急造して店へ並べさせたものなのですから値段だけは如才なく高くされて居ますが、品物は何うしても一段落ちる譯です。

女中　買物に行つた先きで店員などに『これは派手でせうか』と相談する事はないでせうか。

奥様　おやめなさい。『それは御派手の様ですね。こちらは如何ですか』と云つて呉れる商人はあるものではありませんから。

女中　章魚は死んでから四度色の變はるものださうですが、ほんとうでせうか。

奥様　捕りたては赤く、暫くすると白と赤との斑色になり、其の次ぎには眞白になり、最後には疣が黒くなります。此の疣の黒くなつた時は、最早や腐敗に近い時ですから、絶對に求めてはいけません。

月三月十二月に少ない。
○消化器病　七月八月九月に多く一月三月に少ない。
○歯痛　五月六月七月に多く三月十一月十二月に少ない。
○外傷　五月九月十月に多い。（文部省調査）

ある刑事の話



留守中押賣その他に接した時には主人の留守であることとや、家族の少いことを對手に知らせぬ様注意し、最初に主人の厳命だからと云つてキッパリ斷りムダ口をきかぬ様にします。どうしても動かぬ押賣に接した場合は、さり氣なく席を外して裏口から隣家に通知し、隣家の人が交番へ届けることに相談し合つて置くとよろしい。



話の最中に時計を見るは失禮。見る必要があれば一段落ついてから。



お菓子はハンケチか懐紙を膝に敷いて頂く。菓子鉢や茶托の上で食べるものではない。



床の懸物、活花は畳一枚距いて見る。鼻先を突き付けて見るものではない。



洋服のポケットに手を突込んでゐる事は懐手と同様に無作法。



ズボン釣に手を觸れる事は、特に婦人の前では絶對禁物。

經濟的な珍料理

肉の御飯、おさつと林檎のお菜

挽肉を醤油と味淋とお砂糖で味をつけて置く、御飯は例へば三合の米に、醤油とお酒と半々にして約一合程入れ、水加減を普通にして炊き水の引きぎはに、右の肉を網杓子ですくひ上げ御飯の上に載せ、お櫃に移す時、良く交合せる。



おさつは、大きいお芋一つに對し林檎一つの割合、先づおさつの皮を引き極く薄く切つて水に取りアクを去り、鍋に入れて軟く茹で水氣を去つて、暖かい中手早く裏漉しにする。

其れに一寸砂糖を入れて味をつけ、林檎は皮を去りアラレに切つておさつの中に交ぜ合せて進める、食慾の減じた時からして召し上ると、美味しく食べられます。

卯の花あげ

卯の花を二錢か買うて來て、玉葱を大二つ計り細かくミヂンに刻み、其にメリケン粉を交せ、平らに圓め胡麻油であげると一寸オツな物が出來ます。經濟料理です。卯の花代りに、ジヤガをうでて摺りつぶして入れたならば猶美味です。

豚肉を鷄肉の樣に食べるには

豚肉の油氣のない處を買ひ、炭火の上に金網を載せて燒き、之をおすましの種に使ふと鷄肉と一寸間違ふ程さつぱりして美味です。

晴着の後始末

晴着は着る時よりは藏つて置く時の方が多いものですから、後始末の注意が特に必要です。用が濟みましたら衿を揮發油で拭き、風を通してから火熨斗をかけます。表ばかりでなく裏の皺も伸して置かないと、表までその皺が移つて折角の手入が無駄になります。衿には當て紙をします。紋には紙より眞綿を當てた方がよいのです。紙ですと色の燒けるのがありますから、その場合は、紋も同じ樣に幾分色が變るからです。刺繍のある帶は、刺繍の部分を折らない樣にしませんと、糸が寄つて癖がつきます。



知つて置きたい寸鐵ノート

○產前によい食物は山の芋、產後によい食物は鯉。

○埃のかゝつた洋服が水氣にあへば虫喰の因。

○貝は冷水から大根と共に茹でると柔くなる。

どんなものでも役に立つ

○古ゴム靴は破損しても大抵は底の部分は丈夫なものですから、その利用法としては、爪先だけを殘して全部切り落し、スリツパにするか、又は底だけにして鼻緒をたてゝ草履に用ひても大變永く保つものです。その他としては、底を適宜の大きさに切つて、下駄の齒に短い釘で打ちつけますと、齒もへらず、歩き心地もよいものです。

○ソフト帽子を巧みに考案致しますと、スリツパを二足分はとる事が出來、大變重寶なものです。

○不用になつたネクタイは細かくきれいに縫ひますと、立派な婦人用の帶留になります。

○浴衣その他の使へなくなつたものを集めて置いて、二寸幅位に裂き、長くつなぎ合せて、こよりの樣にし、ぐる／＼と手に卷きつけて綴ぢつけて行きますと、臺所、洗面所、その他の敷物として、大變重寶なものになります。

草履の德用比べ

○フエルトの上物は色白く質硬く、水分を吸收しない。

○色が黒ずんでゐて、水に當ると保ちが惡く、少し穿くと變形するのは並物。

○耐久力は上物一足と並物五足位の割合になる。

○コルクの上物と並物との耐久力は一足と二足位の相異で、フエルト程ではない。

○フエルトは鼻緒や表を取替へて二度も三度も使用出來る。

○コルクの臺は、鼻緒や表より先にまゐつてしまふ。

○結局はフエルトの上物が値段の割合にして、五倍も六倍も德用です。

○銀や錫を磨くには重曹がよい、銀時計も同じ。

○香奠返しは、佛式は四十九日、神式は五十日祭。

○額は相對して向合ひに揭げないもの。

○アルミニユームを磨くにはシヤボンに限る。

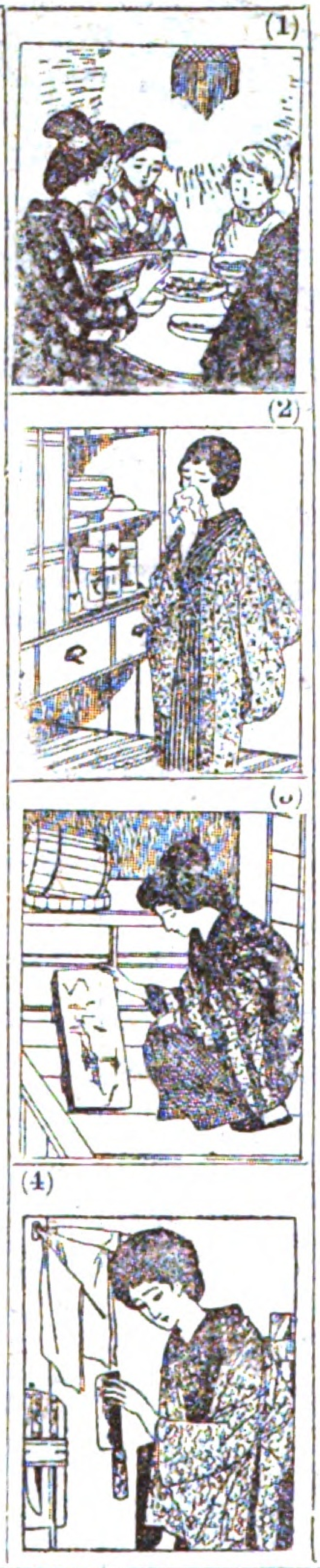
○汽車汽船に醉ふ人は進行の方に向つて腰かけると醉はない。

奥様覺え帳

胚芽米と半搗米

胚芽米は白米のやうに、出來るだけ白くし乍ら、しかもその胚芽を八〇%内外保留させたものです。

半搗米はこれに反して、胚部の殘留等には少しも頓着なく、唯白い程度丈を基準としたもので、普通玄米と白米の中間程の白さに搗いたものです。但し半搗米は胚芽米に較べて糠分が多く殘存してゐるので、消化吸收率に於て劣つて居るが、ビタミンBの含有量は兩者ほゞ同じで、大體から云つて榮養價値は大差のないものです。



臺所の惡習慣 (1)お茶碗は其の都度洗ふが、お箸は其のまゝ箸箱へ。(2)お勝手の棚は度々拭くが、鼠入らずの中は濕氣芬々。(3)お櫃は眞白に磨くが、俎板の上はいつもジメ〳〵。(4)布巾の洗濯は怠らないが、庖丁の柄は眞黒け。

スの古などならば、お座敷用にも用ひられます。

御存じですか

○フライ鍋を美しく保つには、使用した後必ず藁灰で磨く樣にすれば美しくなるばかりか、錆を生じる事もありません。

○下駄表を美しくするには、乾いた藁でこするとよく、これは疊に應用しても同樣に效果のあるものです。

○甘味ある林檎でも皮をむいて少し置く間に色が變つてまづさうになり勝ですから、大きな器物に鹽水を作つて入れ、其中に皮をむいた林檎をつけて置いて食べる方が良い、來客の折などは特に此方法は必要。

○玉子、牛乳、オートミル、スープ、人參などは、毛髪の發生を促進する食物です。何となれば、此等の食料品の中には、毛髪の組成分に必要な、硫黄、鐵分、石灰分を含有してゐるからです。

見よ！キング三月號

▲果然！世に問ふ大長篇戲曲――眞山青果氏大力作

江戸城總攻め

官軍の先鋒は既に川崎まで殺到して來た。江戸はもう目と鼻の間。總攻撃の日は愈々迫つて、風雲は刻々急を告げてゐる……その時、突如として一人の巨漢が、靜岡に在る西郷の陣營に現れた。その面には決死の色が浮んでゐる。彼は何者ぞ！薩軍は急に色めき立つた。事件は慓悍無比の桐野、村田をはじめ、大西郷を中心として如何に展開されてゆくか！南洲研究を以て畢生の事業として居らる〻眞山氏が、心血を注がれた大雄篇！これこそ文壇の大收穫！

歡聲萬雷！續

弘法大師

捲き起る颶風、襲ひ來る怒濤、運命に見離された一葉の扁舟の中に在つて、眞言祕密の法を説く大師の姿の神々しさ！志を千里の外にのぶるその偉大さは一端萬人の胸に迫る！（渡邊默禪氏作）

身代をつくる秘訣

いよ〳〵出ていよ〳〵妙！谷孫六氏の慧眼と才筆は、今や盡く天下

▲奇人變人名物男

三寸釘を食ふ男、一生大學生で暮した男、六十年間戀人を待つた男等々。

▲新作落語 看板敵

兎角仲の惡い商賣敵をめぐつて起る珍劇、喜劇。一讀抱腹絶倒。（森暁紅氏作）

▲珍遊戲珍スポーツ

世界中のありとあらゆる珍らしい遊戲、競爭、催し物を盡く蒐めた面白い大アルバム。

々發表される特選讀物

の視聽を集めてゐるが、就中本篇は誰にも出來る利殖金儲の虎の卷。不景氣突破の快文字！　これこそ見逃しては大變！

キング大講堂

當代一流の大家が轡を並べて、文藝、宗教、社會、政治、經濟等苟しくも人間生活に重大なる問題は盡く拉して來て、これに明快なる解決を與ふるといふ新計畫、質問自由、眞に開放された大衆大學。

滑稽百出笑ひの座談會

これこそ眞に笑の爆彈！　漫談家德川夢聲、大辻司郎、文藝家森曉紅、矢野錦浪、落語家三升家小勝、講釋師大島伯鶴、俳優新井淳、漫畫家田中比左良、池部鈞其他の諸氏一堂に集つて、とつておきの珍談奇談失敗談の大放送！

寺内元帥とクロパトキン將軍

日露の形勢は刻々に急を告げてゐる。折しもあれ皇帝の秘命を帶びて突然來朝したのは、露國陸軍の大立物、クロパトキン將軍である。これが接待の大任を受けた寺内元帥の胸三寸に、帝國の安危はかゝつてゐる！　嗟雨か風か！

◎連載小説は愈々佳境！天下を擧げて熱狂亂舞

千艘隱し浦

一言一句肺腑をつく　江見水蔭氏の大傑作

胸に戀を秘めつゝ雄々しくも公益のために一身を捧げ、粉骨碎身する涙ぐましき男女の物語。

天台座主大僧正梅谷孝永猊下推奬

傳教大師

大倉桃郎

本田穆堂畫

勅命によつて國々に一ケ所づつ、朝廷の分置した寺があつた。金光明四天王護國寺といふのが本稱で、それがいはゆる國分寺であつた。一國の祈願所として國司の民政と連絡し、民衆教化の使命をもつてゐた巨刹である。

その一つである近江國滋賀郡所在の、近江の國分寺に寶龜十一年の秋——現代からは千百五十年前——學僧が一人缺員となつた。

その頃の僧侶は世間から頗る崇敬されてゐた。國分寺學僧の補缺となる事は、佛門に志す者のほまれであつた。

それを選むのはその國分寺の住持行表法師であつた。行表は世に聞えた大德で多くの弟子をもつてゐた。その中の誰かを選むことはわかつてゐたが、さて誰を選むであらうか。我こそと思ふ弟子は胸をときめかせてゐたであらう。



傳教大師御畫像

神童廣野

現代でも國分寺といふ地名が諸國に殘つてゐる。それは奈良朝時代に於ける國分寺の跡である。佛法全盛のその時代には、

『耶奈志どのは學問すぐれてお師匠様に御信用がある。今度はあなたが選まれるであらうと、皆が云うてをりますぞ』

穩かな夕暮である。掃かれた後の石段に新しい紅葉の散つてゐるのが鮮かである。

寺門からそこへこぼれ出た二人連れの青年の一人が、相手に云つた。

『ふゝお勵りぢやな』

と、相手は賞められて腹は嬉しさうな苦笑をした『學問と云へば元成殿。あなたの方が俺よりも遙かにたちが佳いさうぢやに』

『いやく途方も無い』と、元成は賑かに手を振つて顔を反らした『わしはいかん。わしは鈍根ぢや。自分でわかつてをる』

『しかしなあ。何というても御弟子中では岩別殿、蘆屋殿が古參ぢやで、選まるゝとなるとやつあの二人の内かと俺は思ふが』

『さあ古參は古參でも、から申しては濟まぬが些と——』

『ふ、ふ、ふ』と、耶奈志は首肯く。

推奬の辭

天台座主大僧正　梅谷孝永

傳教大師は佛教界の泰山北斗である。夙に天台の一宗を起し、國家人類のため佛陀の慈悲を光揚せられたことは炳として日星の如きものがある。

今、大谷桃郎氏の大師傳を披閲するに、簡易平明の裡によく大師の風貌面目を傳へて躍如、その得度入門の始めより、渡唐歸山の末まで、苦行、力學、開教、聖戰の跡凡そ洩す所なし。

今や、世道人心萎靡して振はざるの時、雜誌キングが、その廣汎の讀者を通じて、崇高なる大師の風格、卓拔無類のその事跡を廣く世に傳へ、大いに人心を砥礪するところあらんとするは最も時宜を得たるものと思ひ、敢て玆に推奬する所以である。

『は、は、は』

二人は笑ひながら下りてゆく。と、そこへ下の並樹道から上がつて來た少年がある。同じく行装の弟子の廣野であつた。黒色の絁の衣に白袴を着けて髮は總角の童形である。二人に行きあふと道を避けて、おとなしやかに頭を下げた。兄弟子たちへの敬禮である。にっこりする。

目鼻立が綺麗である。たゞの綺麗さではない。肉つきふつくりと、聰明さうでしかも柔和圓滿の顔である。温かみの深い美しさである。鳥をも蟲をも懷かしみなづけ、誰にも愛せられさうな面ざしである。

『廣野殿よ。何處へ參られた』と耶奈志が、目を細めて微笑した。

『はい。實家へちよつと參りまして、只今歸るところでござります』

『あゝ、親御へ御機嫌伺ひをなされたかな。廣野殿はいつも親思ひぢやな。まことに感心なお心がけぢや』

『よう孝行をなされる。人の子の手本ぢやと誰も評判してをりますぞ』と、元成も可憐らしさうに云つた。

『そのやうなお言葉を頂いては耻かしうござります』と、廣野は顔を紅らめた『私は遊びに參つたのでござります。父上母上に甘えてつい歸りが遲うなりました。急ぎますから御免なされませ』

もう一つ頭を下げると、小急ぎに二人の側を離れた。その後ろ姿を元成は立止まつて見送つた。

『あ、元成どの如何したのぢや』と、行きかけてゐた耶奈志が顧つた。

『然うぢや』と、元成は首をひねつて友のそばへ寄る『あれは如何ぢや』

『如何ぢやとは何ぢや』



と、耶奈志は怪しさうに問返した。

『いや今度の事についてぢやよ。廣野殿はまだ少年であるゆゑ、誰も人數に入れず噂にも云はぬやうなが、しかし考へると同學の中では慧悟絶倫の秀才ぢやな』

『むゝ。然う云へば然うぢや。あれは神童ぢや。あれには大人も及ばぬよ。とは云へあれは新ぢや』

『新ぢであらうと修業が優れてをればよいわけぢやに』

『しかし齢ぢや。まだ十四歳ぢやでなあ』

『齢は足らぬ。夫れは知つてをるが、惜しいものぢやなあ』元成は首をひねつたのである。

だが廣野は行表門下では、押しも押されもせぬ才學第一であつた。惜しむのは元成だけでは無かつた。師の行表もその稀なる大器の少年を、一少年であるからとて埋めておけなかつた。齢には不足があつたが、表向は十五歳にして、とう〳〵學僧の補缺として、國司廳へ申告した。廳務を預かる近江大掾藤原俊房から都の治部省へ上と申して、間もなく

太政官から省へ許しの達しがあつた。省から聽を經て許し狀が下つた。

その頃は僧籍に入るには、治部省の印のすわつた得度の許し狀——度牒——を得ねばならなかつた。それには夫れだけの修養を積んでゐなければならなかつたが、廣野は少年ながらも、既にその域に達してゐたのである。

廣野は國分寺の同郡内、琵琶湖畔三津（後の坂本）の三津首百枝の子であつた。昔應神天皇の御宇に、後漢の孝獻帝の苗裔登萬貴王が日本へ歸化して三津の地に封ぜられたが、百枝はその子孫で正八位下、土地の名家であつた。廣野はその一粒種であるが、百枝もその夫人の藤子も佛法の渇仰者であつたから、それから又廣野が幼少から學問好きであつたから、夫妻は我が子の將來に名僧智識の望みをかけて、行表法師に入門させたのである。

それは一昨年の事であつたが、足かけ三年目の今年、多くの兄弟子を超えて早くも度牒を得たのである。

かうしてその年十一月十二日、剃髮得度して最澄といふ法號を師から授けられた。もう俗人ではない。廣野ではない。國分寺の學僧最澄沙彌である。

我が子の修業を勵ますために、めい〳〵も佛法隨喜のために、寺近くに住んでゐた百枝夫妻は、涙を流して我が子の最初の成業を歡喜した。



山嶽の大法燈

それから五年を過ぎて延暦四年。

その頃の佛教は三論、法相、律、華嚴、成實、倶舍の六宗。それを奈良六統と唱へて奈良が佛教の最高學問地になつてゐた。

最澄も奈良に出てゐたが、もう諸宗の蘊奥を究めて十九歳のその年の四月六日には、東大寺の戒壇で高僧たち立會の下に佛戒を受けた。受戒したので沙彌から比丘に進んだ。

いよ〳〵僧として成業したのである。

が、この若い比丘は間も無く佛教の中心地を見捨てゝ、故郷へ歸つた。父母は久しぶりの對面を喜びながらも不審した。

『最澄よ。そなたは奈良で身を立てる筈では無かつたか』と、百枝は質ねた。

『はい。以前はそのつもりでござりましたが、最早奈良が厭やになりました』

『でも位高き僧に進むには、此上ともに奈良で修業を積むのが大切であらうに』と、藤子も諫しんだ。

『しかし僧位や僧官は修道の邪魔でござります』と、最澄は靜かに語つた『奈良は寺々の堂塔伽藍の善美さ壯嚴さ、實に目を驚かすばかりでござりまして、それにつれて僧侶たちも貴人同樣の月日を送つてをります。これは佛法全盛のおかげでござりませうが、しかし僧たちは夫れに慣れ、世の人の尊敬に慣れて、增長して榮華驕奢を極め、修道よりも私慾に耽つてをります。いかに學識は深からうとも、行ひは穢れてをります。全盛が毒になつて奈良の都の佛法は、最早全盛腐れになりかけてをります。それゆゑに私は見限つて歸りました――』



たゞ夫れだけでは無かつた。最澄は各宗の高僧について學ぶうちに、天台法華の教義も讀んでゐた。天台は支那では盛んであつたが、日本ではまだ一宗として立つてゐない。たゞ法文が渡つてゐるだけであるが、最澄はその教義を讀んだゞけで、それが他の六宗よりも優れて奥深い事を早くも見透してゐた。その徹底した頭には奈良六統の教義はもう物足りない。まして夫等の僧侶は日常の生活が墮落してゐる。それに愛想をつかして、天台法華の一宗を日本に立てたい。腐敗した宗教界を一新したい――その革新の大

願望を抱くに至つたのである。

それには愈よ深く修道を積まねばならぬ。淸淨地に身をおいて鍛練工夫を重ねたい。その決心を抱いて歸郷したのであつた。

最澄はそれを恩師の行表にも告げて、その年の七月十七日。生れた土地の三津に湖を流してゐる日枝山に分入つた。淸淨地を求めるためである。

山は近江山城の兩國に亙る。木々深く雲霧深く、峻峰怪嶽重疊した幽絶境である。若い比丘は昼の暗い森林に屐を飼ひ岩を攣ぢた。遍く山中を巡つて一つの溪谷に會心の地を見つけた。ぐるりも虚空も老樹に蔽はれて、淸き流を前にし、削り立つ崖壁を背にした岩上である。そこに小さき草堂を設けて、經典の研究に入つた。

その白熱した向上の氣魄は、自ら風貌に溢れて無双の威厳を放つたであらう。怪鳥異獸も妨げをせぬ。山妖水魔も近づかぬ。幽寂境に日夜の瞑想苦行を續けて、やがて救世利民の誓願を立て、その大慈悲の願文を書いた。

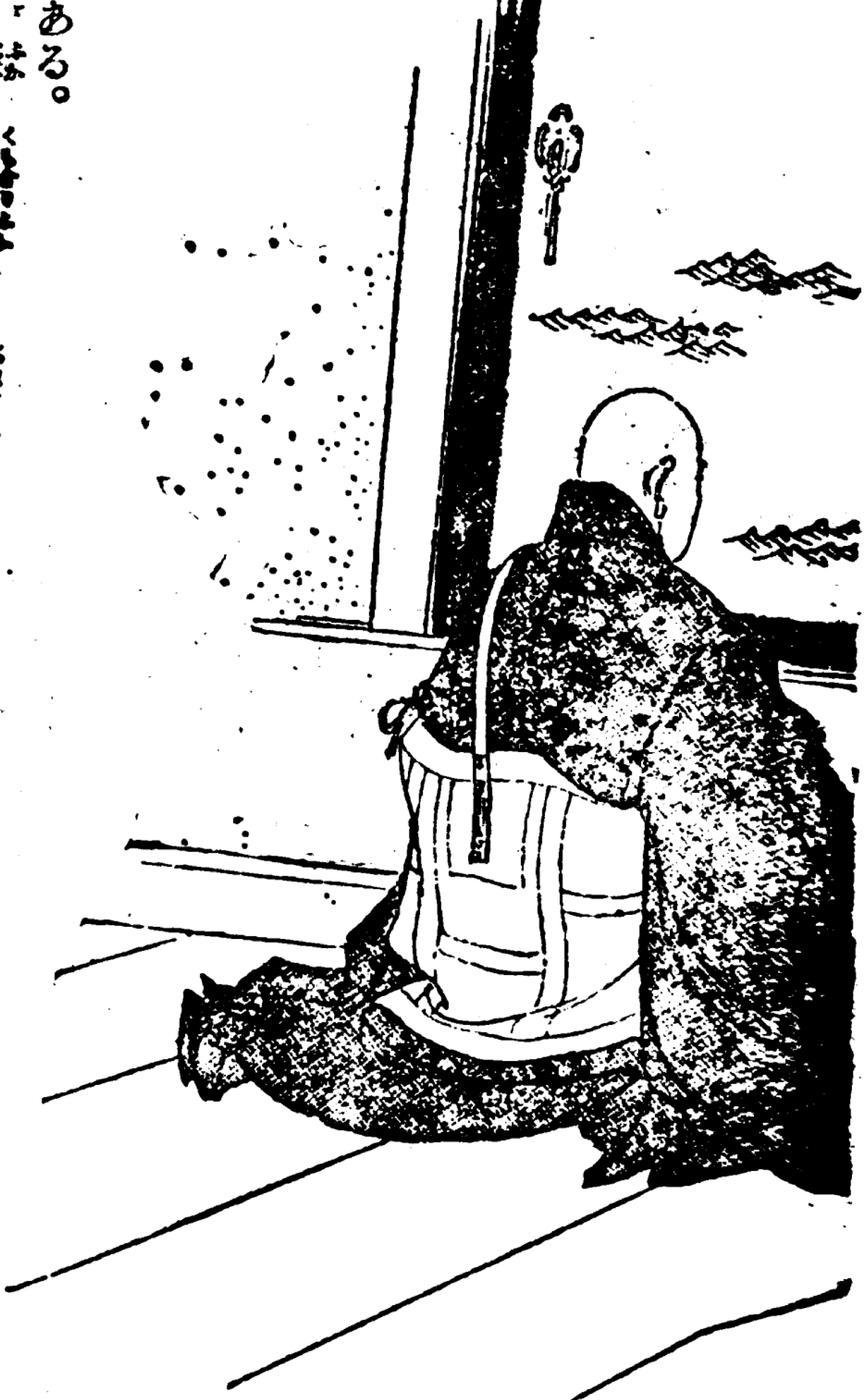
奈良には同學の友が多い。その中で前から最澄を重んじてゐた者は、今、淸淨地に聖なる苦行を積むと聞いて、一人二人五人、慕うて尋ねて來る。弟子となり行を共にする。それが次第に多くなる。

時の内供奉——それは選まれて朝廷に優遇されてゐる十人の淸僧である——その一人の壽興禪師も最澄の願文を見て、その博大深遠な理想に感じて、わざく山中へ交りを求めに來た。

年月は過ぎた。

研究は徹底して弟子も愈よ多くなつたので、二十二歳の時我が信ずる天台法華を、一宗として開宗する決心を固むると共に、山中に良材を捜した。虚空藏尾根のあたりで見つけたのは巨大な倒れ木である。

試みに枝を伐ると微妙な香氣があたりに薫つた。稀有の靈木である。幹を三段に伐つて齋戒沐浴して藥師如來、釋迦、彌陀如來。三體の像を彫刻し、それを本尊佛として山頂大嶽の近くに道場建立の工事を起した。



これが竣工して一乘止觀院と名づけた。これを中堂として別に毘沙門護國堂、一切經藏を增築し、總稱は日枝山の名に因んで比叡山寺と號した。こゝを法城として、奈良六統の都會の宗教に對して、教界革新の山嶽宗教の大法燈を掲げようとするのである。

時の帝は桓武天皇である。英明におはします帝は、宗教界の頽落を前から認めさせられてゐる。屢ゝ僧侶懲誡の詔を下されてゐる。若き最澄の比叡山の經營は、恰もその大御心に一致してゐた

もう一つ。その頃は帝は帝都を奈良から山城の長岡に遷してゐて、更に同國平安に遷す御計畫があつたが、平安の三方は山脈續きである。その中で勝れて高く壯美秀麗なのは比叡山である。しかも平安の鬼門にあたる。平安が帝都となつた曉には、比叡山は王城鎭護の法城たるべき形勝無双の方位に聳えてゐるのである。



その絶好の地の利を占め、帝の新都御經營と時を同じくして、新宗樹立の基礎をつくつてゐたのである。

平安が帝都となつたのは延暦十三年。その頃には最澄はもう帝の御信任を得て、比叡山を王城鎭護の道場たる位置に進めてゐた。

狂風大濤の中

遣唐大使藤原葛野麿、副使石川道益の一行が、四隻の船に分乘して肥前松浦潟を後に、はるけき海の旅に上つた。延暦二十三年七月六日の朝である。

その二番船。判官菅原清公の船には、最澄が弟子の義眞を連れて便乘してゐた。

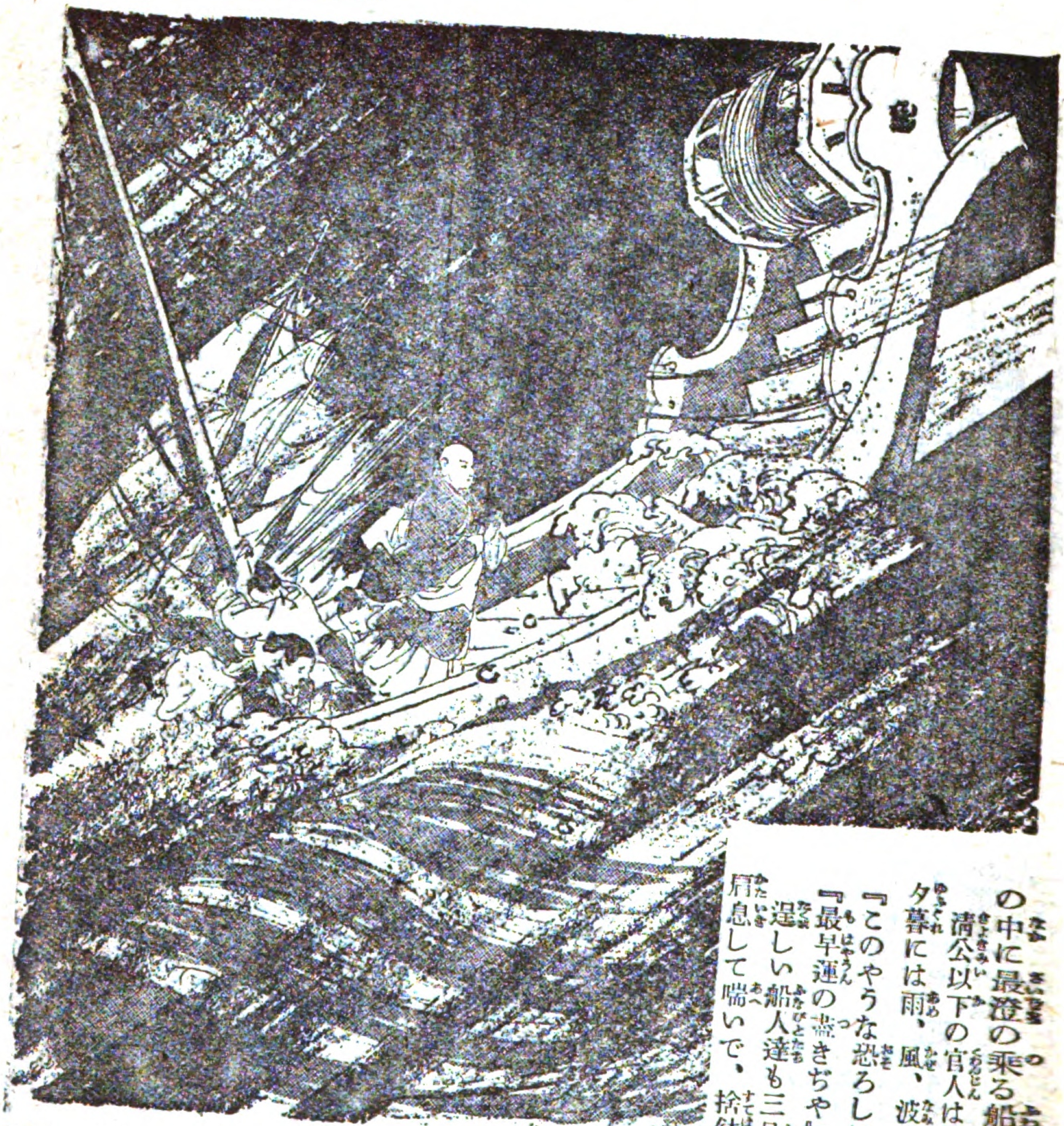
天台法華の法文は、日本にはその一部が渡つてゐるだけである。最澄はその全部を知りたい。全部の眞髓をつかみたいがために、勅許を得て入唐するのであつた。

海路は平穩であつた。

が、次の日は次第に天候に狂ひが來た。宵月の出る頃には、慌しく雲が流れて、月を消して虚空を漆黒に抹した。海は險しくさわついて來た。やがて息を塞ぐほどの強風が吹き出した。

四つの船は帆を縮めて顚覆を防ぐ。篝火は焚かれない。互ひに呼びかはして連絡を取つたが、その聲も波風のうなりに消され勝ちである。礫崩しに大雨も來た。

一夜を荒れ明けた曉には、後になつたか先になつたか、或ひは海底に葬られたか、三番船四番船は影を消してゐた。次の夜を送つて明けると一番船も見えなくなつて、吼え荒れる大濤



の中に最澄の乗る船だけが、木の葉と揉まれて漂うてゐた。荒れは續いてその夕暮には雨、風、波、募り募つて絶頂に達した。清公以下の官人は船暈に臥並んでゐる。

『このやうな恐ろしい時化には生れて以來遭うた事がない』

『最早運の盡きぢや』

逞しい船人達も三日越しの苦闘に精根も盡きかけてゐる。肩息して喘いで、捨鉢にうめいた。が、最澄は胴の間に突立つて人々に諭した。

『みな〳〵よ挫けるな。この船にはわしが乗つてをる。求法のために渡唐する最澄法師が乗つてをる。佛力は廣大無邊ぢや。必ず此船を護つて下さる』

柔和圓滿の相に微塵の曇りもない。傾き覆る船の大搖れにも心身に寸毫の狂ひも受けぬのである。穩かな大音で語り續けた。

『みな〳〵聞かれよ。最澄はこの渡海の前に宇佐八幡宮に參籠して、海上安全の祈りを捧げた。その時八幡大菩薩の夢のお告げがあつた。是れより西に香春明神あり、佛法守護の明神なりといふお告げぢや。その示

驗を頂いて最澄は明神社へ詣でた事であるが、立願のその夜。左の肩は人間に異らぬが、右の肩は岩石となつてをる梵僧が、幻の如く眼前に現はれ、海上急難あれば必ず擁護するであらうと告げられたのぢや。明る日香春嶽に上つて一つの大石の前に行きあたつたが、不思議やそれは前夜の幻の僧の右の肩と寸分異はぬ形であつた。さてこそ前夜のは香春明神の示驗と悟つたが、みな〳〵よ。最澄はかやうな奇瑞を得てをる。この荒れは如何に烈しくとも、この船に災難は無いであらう。最澄はこれより明神に祈る。見よ〳〵今に靈驗の光りが現れるであらう。屈するな屈するな』

諭して船首に歩んだ。奥底の知れぬ波の力は虚空に刎ね奈落に吸ふ。風は横さまに吹倒さうとする。だが最澄はよろめきもせず屹立した。高く珠數を捧げて押揉み〳〵祈禱した。音聲の威嚴は強烈な信念の響きである。船人たちは耳を傾けて次第に尊さを感じて來た。挫けた心が甦り疲れた手足の輕くなるのを覺えて來た。その時最澄が叫んだ。

『おゝ。みな〳〵よ』と、密雲暮色の天の一方を指さした『明神の加護の光りがあらはれた。あれを見られよ』

船人も官人たちもその方を仰いだ。指さす最澄の手が、その信念の力が擲ち描いたやうに、その方に一道の光りがあつた。閃き消える稲妻ではない。紫金清淨の色がしばらく動かぬ。

『おゝ。おゝ。嬉しや有難や』

とあつて薄れて又鮮かな靈光となつた。

『おゝ。おゝ。おゝ』人々は合掌して伏拜んだ。嬉しさあまつて泣咽びつゝ拜んだ。

明神の加護。その奇瑞を得た一船は俄に飛び立つた。荒るゝがまゝの夜となつたが、夜の更くる頃には次第に風が鎮まつて、雲きれかけの大海の空に一つ二つ星が見えそめた。

船が支那明州に着いたのは、唐の徳宗皇帝の貞元二十年九月一日である。そこで判官一行に別れ、最澄は義眞と從者とを連れて、台州の天台山に向つた。

天台山は天台宗の中心地である。天台の典籍は悉くそこにある。最澄は一年近くをそこに送つて、天台の法門を究め盡し、經典、疏、記類四百六十卷を得て歸朝したのであるが、いよいよ宿志の天台法華宗を立て、朝廷からも宗教界からも一宗として明らかに認められたのは、四十歳の正月であつた。

後輩に學ぶ

『光仁どのよ。我が師は高雄の空海どのの弟子となられるとか。さやうな說を聞きましたが、眞でござるかな。』

弘仁三年の初冬の事である。木々に影瘦せがして山氣は殊に冷かである。その叡山の夕暮の庭に集うた若僧たちが、最澄の高弟光仁を取りまいて詰り問うた。

『左樣ぢや。近いうちに』と、光仁はもの柔かに答へた『高雄の道場へお越しなされて灌頂を受けらるゝのぢや』

『それは異なことぢや。我が師は既に先年大唐に於て眞言の敎

法を受け灌頂法を授かつたお方ぢや。日本へ灌頂を傳へたのも師が最初であつた。その先輩が何故に後進の空海どのから改めて、灌頂を受けられねばなりませぬかな。』

『なるほど師は最初に眞言を日本へ傳へた。しかし師はもともと天台を修むるために入唐した事。眞言の敎法も受けられたが、その方は深くおさめになるおいとまが無かつたのぢや。しかし空海どのは師と同年に入唐し、師よりも一年遅れて歸朝された。その間眞言を專修された事ゆゑ、眞言に於ては我が師は空海殿を尊敬なされてをる』

『ならば眞言は空海殿が大智識。それでよい。しかし我が師は天台法華の開祖ぢや。一宗の祖師が何が故に、眞言に膝を屈しなさるゝか。天台は眞言に劣つた敎法でござりますかな』

若僧たちは語氣が激して來る。我が師が空海を師とする――それを叡山法燈の大恥辱として憤るのである。

光仁は靜かに首肯いた。

『わしも初めは疑惑を起した事ぢや。しかしながら皆様。師の御心は遙かに高いのぢや。この叡山が四方を瞰下すが如く高いのぢや。聞かれよ』と、愼重に言葉を次いだ。

『師は一宗の祖たる今も凡僧の御心で絶えず修養をなされてをる。謙つた御心で諸宗の學問もいよ〱深くおさめられてをる。それゆゑに優れたものを有つ者へは、長幼上下の差別なく敎へを乞はるゝ。無我の佛心を心として學ばるゝのぢや。まして空海殿は眞言の大智識であるゆゑ、師は弟子の禮を執つて灌頂を受けらるゝのぢや。それは眞言の妙諦をも天台に合せて、天台の敎法をいよ〱圓滿無缺とする爲ぢや。先輩が後進に膝を屈する。それは常人には忍び得ぬところながら、道を求め法をおさむるためには、師は何人にも喜んで座を讓るであらう。それが佛の心ぢや。皆様こゝを考へられよ』

光仁は一同の顏をじつと見廻して、

『ありやうはわしも、皆様と同じ不滿を抱いてをつたが、師の御心を理解してからは迷ひも覺めた事ぢや。皆様。師は左様に高く廣く清淨な御心ぢや。眞に〱尊い向上の御修養ではあるまいか。』讃仰の熱情を目に湛へて光仁は語つたのである。

犇いてゐた若僧たちも、しんとして顏をうつむけた。

最澄の心は光仁の説いた通りであつた。それから間もない十一月中旬、最澄は灌頂を受くべく洛外清瀧の高雄山寺に向ふ事となつた。

そこには眞言秘密の眞髓を授くる灌頂壇がある。それは七年の前、唐から歸朝した最澄が、初めて眞言を日本へ傳へた時に、勅命によつて築き、そこで高僧や高位高官の人たちに灌頂を授けた壇である。が、その後空海が更に深く眞言をおさめて歸朝し高雄山寺において灌頂を行ふことになつた。

最澄としては曾て他に授けた身が、今は後進から授けらるべく入壇する事になるのである。しかし法を求むるに熱心な心胸は清風明月の如く高朗闊達である。

世にまれな、立派な體躯に慈悲柔和の相を備へた最澄は、そ

の面に希望と歡喜を輝かせて叡山の我が道場を出た。高弟の光定、圓澄、光仁たちが供をした。それらも師と共に入壇するのである。師



弟ともに空海に對して弟子の禮を執るべき出山である。

『何といふ聖き御修養ぞ

『尊き御姿ぞ』

山を下りゆく師の影を見送つて、若僧たちは涙を浮べて伏拜んだ。

この年最澄は四十六歲。空海は三十九歲。

大乘戒壇

――最澄法師が叡山に大乘戒壇を建立する望みを抱いて、朝廷に請願をしたさうぢや――その噂が奈良六統の僧侶たちを、驚かしたのは弘仁十年の春である。

戒壇は僧徒に佛戒を授くる式場。

奈良東大寺と、筑前觀世音寺と、下野藥師寺との他には無い。

その三ケ所の何れかで戒を受けねば、日本の僧は比丘に進めぬ。宗教界に重大な權威をもつた戒壇。

今、世間に凄まじい勢ひで弘まりつゝあるのは天台法華と眞言である。眞言はまだ一宗としての公驗を得てゐないが、天台は確實に開立された新宗である。舊來の諸宗はそれに壓倒されて日に月に影が薄れてゆく。とは云へ三ヶ所の戒壇は六統の手にある。それあるがために新興の天台法華僧の受戒も支配してゐたのである。

が、叡山ではその支配下を脱して、別に戒壇を設けたいとある――と聞いては奈良六統の者默つてゐられぬ。

『最澄法師め增長した』

『大非望ぢや。憎い奴め』

騷ぎ呪つた。

しかし最澄はその請願には生命も惜しまぬ決心をもつてゐた。それには大主張がある。

『釋敎の中、出家に二類あり、一は小乘の類、一は大乘の類である。天台法華は大乘の敎法であるから、大乘の戒壇を設けたい』と、いふ意味であつた。

つまりは從來の三ヶ所の戒壇は小乘の戒を授くるところであるから、叡山の學徒はその戒を受くべきものではないといふ主張である。

その意味の請願の表文を、朝廷に上つたのは三月十五日のことである。時の帝嵯峨天皇は右大辨良峰安世の內奏によつて、表文を叡覽の後、朝廷の宗敎局とも云ふべき綱所に下して意見を諮はせられた。そこは宗務統括の高位僧たる僧綱たちの事務所であるが、僧綱たちは何れも奈良六統の僧である。

それが奈良七大寺の意見を問うたので、奈良の宗敎界が騷ぎ出したのであるが、その意見を代表して大僧都護命外五僧綱が連署して、抗議表を上つたのは夏になつてゞある。

十月に入つて帝御名により內匠頭藤原是雄から、その抗議表を最澄に賜はつた。

最澄は熟讀玩味して、

『僧綱の方々は舊來の小乘の敎法に囚はれてをらるゝ。大乘の戒法を知らずに只罵詈誹謗の文字を並べられてをる。嫉妬我執に目が昏まれてをる』と、高弟たちに云つた『よし〳〵此辯駁をわしは書くであらう』

やがて起草したのは顯戒論三卷である。それは大乘戒壇建立の正しき理由を、經典によつて確實に證明し、僧綱たちの抗議を微塵に論破した大文章である。それに大乘戒の系統を明らかにした血脈譜一卷と、再度の上表文とを添へて朝廷に上つたのは、次の年の二月である。

その使をしたのは高弟光定である。

先づ內匠頭是雄に提出して手續きを濟ましたが、四五日過ぎて是雄は、光定を招いて、

『戒壇勅許となる節は、この度の上奏書類は主上のお手許に止

めおかる丶事となる。又却下の節は願ひはかなはぬものと思はれよ。しかしながら主上は表文を覧はして、正しきものは許し正しからぬものは許さぬと、仰せられた事である。聖慮は澄める水の如しと心得られよ』と、諭した。

師を正しと信ずる光定は喜び勇んで叡山に歸つた。一山の弟子は近く勅許の下ることを信じてゐた。

上奏の書類け例によつて綱所に下つた。僧綱たちは集まつて夫れを讀むだ。各ゝ目を皿にして缺點を見出さうとした。再度の抗議に頭を絞つた。しかし顯戒論の説くところに毛ほどの隙も無いのである。奈良六統の内今まで大徳碩學と云はれた僧は多かつたが、いづれも駁論を書くのを躊躇つた。

なまじひ楯をついては出る釘打たれる。又も恥を搔く事になる。さりとて最澄を引出して寄つてたかつて辯論するにしても、相手の雄辯、明智、深遠な思想は以前からの度々の説法の模様でわかつてゐる。うち勝てる見込は無いのである。

つまりは今の宗教界に、最澄と太刀打するほどの大人物は、眞言の空海の他に無い事になる。六統から云へば眞言なるものも忌々しい新教法ではあるが、この頃は事情があつて空海は、最澄に對して不快をもつてゐた。それがつけ目である。

空海は打つて出ぬか——然う思はずにゐられなくなつた。がその空海は何と感じたか。この宗教界の大問題に無頓着であつた。論争の渦には捲きこまれずに、眞言布教の旅に出てしまつた。

最澄から云へば敵は多くても、すべて沈默したのである。矢面に立つ敵は無くなつたのである。眼界は涼しい。もう勅許を待つばかりとなつた。が、それが下らぬ。

次の年になつた。やはり下らぬ。

また次の弘仁十三年となつて五十六歳を迎へた。その二月十四日には傳燈大法師位を授けらるとの詔が下つたが、戒壇はまだ許されぬ。許されぬうちに晩春の頃から病に罹つた。

死期は近いと覺つて四月十九日、諸弟子を集めて天台布教、修道、護國、利民の遺訓を與へた。

五月の中旬には高弟義眞に死後の一宗の事を囑んだ。

六月となつた。その四日に——弟子の目には叡山の草木も萎れ、照る日も影が暗かつたであらう。最澄は中堂の側の中道院で、枕を北



に顔を西にして横臥しながら、靜かに法華壽量品を誦みながら、唱和する弟子たちの聲の中に、午前八時微笑を湛へて入寂した。

× × ×

初七日が來た。

閑院右大臣藤原冬嗣、中納言良峰安世、權中納言藤原三守、右中辨大伴國道の一行が勅使として叡山に上つた。

それが何のためか、一山ではもうわかつてゐた。最澄の宿望、戒壇建立の請願のために、二年前に上奏した顯戒論——それに對する御沙汰書治部省の官符を、勅使は携へてゐたのである。

勅使は初七日の法場に臨んだ。右中辨大伴國道が、靈牌に對して其官符を傳達した。

——傳燈法師位最澄の奏狀を檢するに、曰く、それ如來の制戒は機に隨つて同じからず、衆生の發心も大小また別なり——。

嚴かに讀みあげた。

光定、義眞、圓澄以下弟子たちは、しん／＼として耳を澄ました。

それは大乘戒壇勅許の官符であつた。最澄生前の願望は入寂後七日目に達したのである。日本三ケ所の戒壇。それが四つとなるのである。奈良六統の迷妄は破られて、天台の法燈に大權威を加へるのである。

讀み終ると義眞が辨官の前に進んで、うや／＼しく官符を頂戴した。うや／＼しく捧げて亡き師の靈前に移した。と、義眞は合掌したまゝに首を垂れた。その肩はわな／＼震へて、息が喘いだ。堪へられずに咽び泣いたのである。

諸弟子は後ろから夫れを見た。師の靈はいかに嬉しく享けたまふか。その感激がひし／＼と迫つた。すべてが歡喜の涙を絞つた。

天台は支那から傳へたのであるが、傳へた最澄の天台法華宗は傳へたまゝではない。それは日本化した教法であつた。

日本化の宗教は最澄から始まる。

入寂の後四十五年目、清和天皇の御宇貞觀八年の七月、最澄へ傳教大師の諡號が下つたが、本朝の大師號もそれが最初である。傳教大師が日本の宗教史に遺した功蹟は、云ふまでもなく偉大であるが、その逸話となると、記錄は後世の諸高僧に比べて少ないやうである。それは筆者の調査が貧弱のためであらう。しかしこの物語に記したのは少ない中の一部分に過ぎぬことをお斷りしておく。（終）



、宗祖烈祖列傳は大好評！ 續々と賞讃感謝の辭を辱う致して居りますが、寔に私共編輯者の本懷であります。次號には別項豫告の如く、『弘法大師』傳を掲載致します。切に御期待を希ひます。

世界の人氣者
—ダグラス夫妻物語—

米國フォックス・ニュース日本代表 田中欽之



メリー・ピックフォード、ダグラス・フェアバンクス夫妻

一

ダグラス・フェアバンクス！
メリー・ピックフォード！

御兩所おそろひで、舊臘十六日、日本をノックしたのだから、映畫ファンにとつては、素晴らしい出來事だつた。

尤も、夫妻が日本を訪れようといふ氣を起したのは、十年も前からだつた。それがのび〳〵になつて居て、今度といふ今度愈〻實行されたのだから、彼等にしても非常な滿足だつた。

日本の映畫の發展を目のあたりに見て

『ブラボー、ブラボー』

只もう無性に喜んで居た。

一體、第一流の人氣俳優と人氣俳優との結婚は、珍しくないことだが、大抵はすぐ背後に破綻がひかへて居る。

彼等夫妻のやうに十年以上も、昔にかはらぬ熱情をもちつゞけて、しかも將來も斷じて破綻しさうもないやうな夫婦愛の中に浸つて居る事は、驚くべきことである。二人が交際をするやうになつたのは、實に私達がまだラスキー會社で働いて居る頃だつた。フェアバンクスは、此時一方の人氣役者として王者の地位を占め、メリー・ピックフォードも、女王の待遇をうけて居た。ところが、彼は非常な社交家であるにも拘らず、女人を近づけることは、彼自から警戒して居たらしい。

『ダグラスは、女に對して至極あつさりして居る』

一般に、さういふ風評だつた。

『どうだね、二人一緒にして見ようぢやないか』

私共は、單に其場かぎりの物ずきから、此の兩優の顏つなぎをさせようと

した。

『同じ會社に居る同じ彼等の二人だ、會つてもよからう』

フエアバンクスも、そんな風な意味合で、彼女をお茶の會に招いた。

メリーは、喜んでやつて來た。

『今度は、わたしの方で、お招きするから、來て頂戴』

彼女も同じやうに彼を招いた。

云はゞ、それが二つの魂を結びつける機縁となつた。まことに不思議なわけだつたが、理解し合つた彼等は、かうして夫婦生活を營むことになつた。處が、夫唱婦隨その家庭が又理想的だと他から羨まれゝくらゐ。

今や、彼等は映畫界の世界的流行兒としてのみぢやない、一個の人間として、ほんとうに幸福なのである。

二

ダグラスは一八八三年生だから、今年は四十六、男ざかりである。大學を出た年に、有名なステージ俳優ヘルネクレーン氏の一座に入つてコメデー役者をつとめた。それが彼のスタートだつた。



ダグラス氏の處女主演映畫『小羊』の一場面

市俄古の綿王シエリー氏の愛孃が、ゆくりなくも、彼の舞臺姿に魅せられて、どうしても、結婚せねばならぬと云ひ出した。

——それが彼の先妻である。

で、舞臺を退いて、一時岳父シエリーの援助によつて石鹼工場を有つた。さうかうして居る中に、シエリーが大失敗をして、裸一貫になつた爲、彼も亦舵を失つた船のやうなもので、うごきがとれなかつた。

『まゝよ、又舞臺へ逆もどりだ』

彼は、工場をたゝんで、今度は映畫俳優として打つて出た。一九〇七年、今からざつと二十餘年ばかり前である。

彼が主演で作つた最初の映畫は、有名な『小羊』である、これは日本にも來たので、皆さま御承知の筈。此の出世作を皮切にして、『出たり入つたり』、『地下に降りる』、『アリゾナ』といふやうな名作を矢つぎ早に出して、またゝく間に人氣の焦點に立つて了つた。

剛健そのものゝやうなあの體格にしてからが、四肢に漲りあふれて居る凛々たるあの男らしい意氣にしてからが、アメリカ魂の權化といつてもいゝ。全アメリカの人は、彼をスクリーンの上に見出すことによつて、たゞ譯もなく、やんやと喝采したのは、彼の男性的活劇が、ヤ

ンキー氣質にピタリと來たからである。實際又、彼は大のスポーツ好きでもある。拳闘もやれば、ランニングもやる。角力よし繩飛よし。撮影所内には、一周一哩のトラックや、立派な馬場が作つてある位で、愛馬は二十五頭も、厩の中に繫がれて居る。その又厩の綺麗なことは、日本の金持の屋敷も及ばぬ程である。

此ういふ武張つた一面に於て、彼には又優にやさしい一面もある。油繪もかく、古畫の鑑識も出來る、音樂に對しても亦一かどの聽手となることが出來る。

一番嬉しいのは、彼には、人種的僻見のない事である、だから彼の周邊には、各國の人物が集まり、それを又親切に世話して、きつと一人前の監督なり、俳優なり、技師なりに仕上げてくれる。ビック・フレーミング氏、ジョン・ファナーベリー氏、リチャード・ローソン氏、アーサー・ローソン氏、ブルモンタナー氏等は、みな彼に引立てられた人々である。日本人に對しても、やはり同じやうに好意を有つて居る。

『私は日本の武士道が好きだ』

さう云つて、伊藤五段から柔道を學んだ事もある。彼の居間には、日本刀、槍、弓、其他日本の昔の武器が行儀よく並べてある。小谷ヘンリー氏を始め、多くの日本の技術家が彼に養成されたが、私も前後八年間、彼の助手として働いたのだつた。



撮影の餘暇、柔道を研究するダグラス氏とデンプシー氏(拳闘家)、敎ゆるは筆者田中氏

三

愛妻のメリー・ピックフォードは、加奈陀の生れだと聞いて居る。小ちやい時にお父さんに別れて、一家は苦境に陷つたが、そんな關係で舞臺の人となつたらしい。

彼女がラスキー社に映畫女優となつて雇はれた際、逸早く彼女に眼を止めたのは、名監督マーシャル・ニーラン氏だつた。

『メリーは、どんな場合にも、ノーと云はない、どんな條件にも應ずるし、どんな困難にも、服從するし、彼女位、自分の命令通りに動く女優は居らない。監督を信じて、監督の命のまゝに動くことは、よい映畫をつくるのに、一番大切だ、技術や性格は二の次だ、……彼の

女が、いつも技倆以上のはたらきを見せて居るのは、その爲だ』

ニーラン氏はかういつて居る。

何せ、可憐な演出振は、米國人の人氣の的になつて居る。美人投票では、とも角、人氣投票ならば、いつだつて彼女が第一になつて居る。

歐洲大戰當時は、此の人氣者は國家の爲に巷に出て、自由公の賣出を手傳つた。撮影所の力は一時おつぽり出して、彼女は全國の遊說に歩いた。

メリーの自動車が止ると、わアーッと群集が押しよせて、吾も吾もと公債を買ひとつた爲、一日に百萬弗を賣上げた事さへあつた。

おまけに私財を投出して、サンデヤゴに私設聯隊をつくつたのも此の前後であつた。彼女は、時々出かけて行つては閲兵をやつたが、兵士の足並が揃つて、號令が隅から隅へ行屆いて、誰一人命に背くものはなかつた。

最も此の美くしい可憐な聯隊長殿閣下の命なら、誰だつて喜んで聞くであらうけれども……。米國政府が、メリー・ピックフオードを名譽陸軍大佐に任じたのは、物好きからではない、此ういふかくれたる國家的貢獻を認めた爲である。



ユ創立の契約書にサインする四巨人（向つて左よりチヤリー・チヤプリン氏　ダグラス夫妻　デー・ダブリユー・グリフイス氏）

『メリーは、お母さんにも孝行だし、道樂者の弟にさへも親切です、……だから妻としてほんとうに、ベスト・ハーフですよ』

主人のフエアバンクスが、時々細君自慢をするのも無理はない。

此の人氣のある夫妻と、デー・ダブリユー・グリフイス氏及チヤリー・チヤプリン氏――この四人の大立物が集つて組織したのが、現在のユナイテツド・アーチスツ社である。一九一九年、今から十年前の創立であるが、今日では米國映畫界の主座を占めて居る。

それにしても「エドワード（ダグ夫妻は私を斯く呼んでゐた）君の國に行つて富士山が見たい」と、口癖のやうに云つて日本を憧れてゐた彼等夫妻の、漸く思ひ叶つた日本訪問も、餘りにあわたゞしいことであつた。

全くほんの一瞥しか出來なかつた。陰に陽に日本映畫界の爲に多大の聲援を吝まなかつた彼等夫妻に對して、私共は十分の歡迎が出來なかつたのを殘念に思つて居る。

どう云ふ譯でせうか

問 風邪をひけばなぜ香がわからないのでせうか？

答 感冒に罹ると鼻の內面の粘膜が腫上つて多量の粘液が出ます。そのため香が鼻の感覺を司る膜まで屆かないのです。また一つには感冒の病原菌から生じた毒素が、嗅覺神經を傷めるため、香が屆いても、神經が鈍つて居てそれを感ずることが出來ない爲です。



問 酒に醉ふとなぜ物が二重三重に見えますか？

答 酒の中に含まれて居るアルコホルが、眼球を動かす筋肉を痲痺させるので、二つの眼球が同じ方向に向かないから兩眼揃つて一物を凝視する事が出來ません。二重に見えるのは兩眼が別々に見たことを腦に報告するからです。グルグル廻りをするのは眼に移るものを兩方の眼がい、い、てんでにその瞬間々々の狀態を腦へ報告する結果です。



問 多季足が溫まらぬうちは、なぜ寢付かれないでせうか。

答 褥に入つても足が冷えてゐるのは、血液が腦に多く集まつてゐる證據で、概して腦に充血してゐる間は安眠出來ぬものです。足先が溫まるのは腦の



智慧くらべ解答 （本文二六八頁）

一、5を8・9・3・1・の上を順に飛ばしなさい。次に7を4の上を飛ばします。今度は6を2、7の上を順に飛ばし、最後に5を6の上を飛ばします。すると5だけが中央の位置に殘り、後は全部取り除かれます。

二、(1)、「爺さん婆さんのお歸へり」と聞きちがへたから。(2)、時間。(3)、暦。

三、先づ地上に杙を二本適度に離して打込みます。次に繩の兩端を結んで輪を作り、之を地面に擴げて、二本の立てた杙はその繩の輪の中にゐるやうにします。次に殘つてゐる一本の杙の先で此繩の輪を外の方へ引張りながら地上に條を書いて行くと椅圓形が出來ます。杙と杙との間の離し方と繩輪の大小とに依り、椅圓形の形も割合に細長くなつたり、圓形に近くなつたりしますが、何れも椅圓形に相違ありません。



四、三十點に二本、十二點に三本、六點に一本。

五、子供は輪になつて、ステッキの兩端を兩手に持ちながら運びました。



六、

②	7	9	⑯
13	12	6	3
8	1	15	10
⑪	14	4	⑤

七、厚紙を間に置かないで吹けば、勿論火は風の行く方向即ち向ふの方へ吹き倒されますが、間に圖の樣に厚紙を置いて吹きますと、火は向ふへ倒れないで自分の體の方へ向つて來ます。これは口から吹き出した息が厚紙に衝き當り、急にひろがつて進み、同時に

血液がその方にまで流れ去るためで、そこで輕度の腦貧血を起して寢入ることが出來るのです。



問　水を飲む時ゴクンと音のするのは、なぜでせうか。

答　水を咽頭より食道の入口に送る時、そのあたりにある空氣が急に水と上下の交替をなすためにゴクンと音を發するのです。

問　寢言を言ふのは、どういふわけでせうか。



答　夢を見て居る時の或る觀念が、たま〳〵言語を司つてゐる神經を刺戟し、そのため無意識のうちに言葉を發せしめるからです。

問　ヒビやアカギレの切れるのはどうしてゞせうか。

答　冬は皮膚から脂や汗が出るのが少くなる上に外界の空氣が乾燥してゐるので、皮膚が乾き過ぎて龜裂を生ずるのです。その淺いのがヒビで、深いのがアカギレです。

問　白粉燒けした人は、下眼瞼がなぜ黑くなるのでせうか。

答　下眼瞼は血液循環の緩慢なところです。それ故、皮膚の吸收した白粉の鉛分を血液が充分に持ち去ることが出來ず其處に溜るからです。



問　電球が古くなると暗くなるのは、どういふわけでせうか。

答　電球の中の線が熱せられるに從つて、その表面が消滅飛散して電球の內面に附着して曇らすためと、線が細つて光を出す表面が小さくなるためです。





厚紙の向側の空氣が外の場所より　くなります。そこに風が起り、火焔がこちらに向くのです。

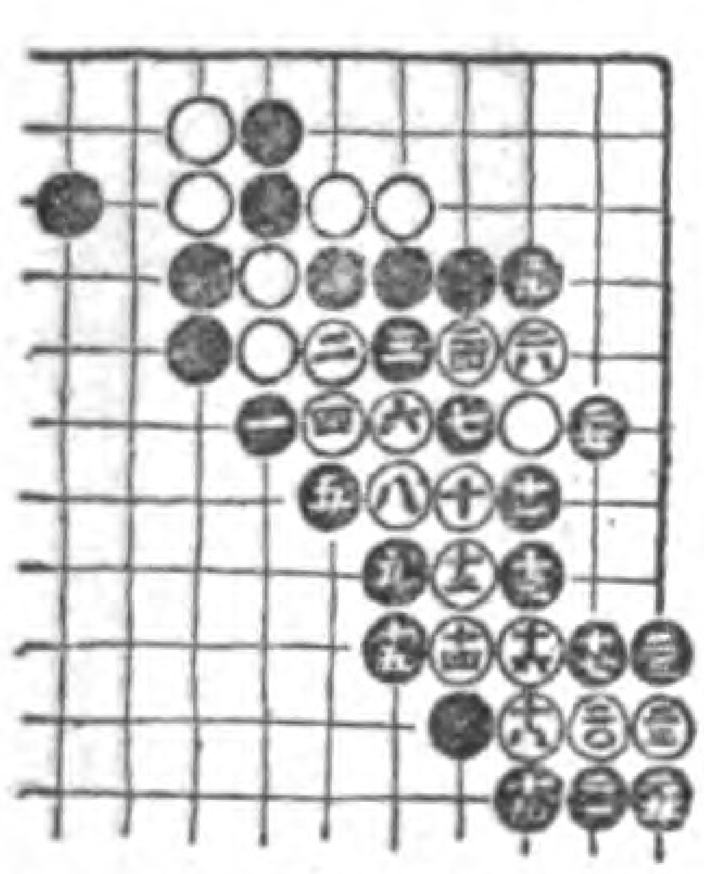
八、先づ卄圓い穴と同じ圓形で高さも圓い穴の直徑と同じの栓を作ります。卄栓は圓い穴へ嵌めればピタリと合つて栓の役を務めます。此栓を横にして四角な穴へ入れると之又旨く適合ひます。今度は此栓の一方の端の直徑の所から斜に切り落しますと此處に平な三角の面が出來ます。之を三角の穴の上に乘せると三角な穴を塞ぐことが出來ます。三角の穴を塞ぐために栓の一方を斜に切り落しましても他の二つの穴を塞ぐ時の差支へにはなりません。



娛樂室解答

（本文二八六頁）

○詰將棋解答
九四銀、同金、八二桂ナル、同銀、七四角ナル、同玉、九四飛ナル、七三玉、七四龍、同玉、八四金マデ。



○詰碁解答
白二六は黑七のところ　黑一以下の手順を追うて征にて白を捉り得るなり。



○聯珠解答
問題の十四は(い)に止めたので黑が(イロ)と打進んで勝筋を作りましたが白は十四から斯ら打替へると▲の處が黑三々禁で白勝です。
要は黑十一が惡手で之を(ろ)に引けば黑必勝です。



探偵實話　公使館の怪火

東京齒科醫專教授
醫學博士　西村豊次
小寺健吉　畫

一

『もう大分遲いやうだが、何時になるね』

大きな卓子によりかゝつて、往復文書に眼を通してゐた獨逸公使は、一等書記官ヴヱルゼーク男爵に聲をかけた。

『〇時五十分ですな』

『そんなになるかね、……ぢやア、跡はベツケルト君に整理をたのんで、引きあげようかい』

『はア』と、男爵も疲れた身を椅子から起して、若い書記生のベツケルトをふりかへる。

『すまないが、君、今夜中にこれ丈片づけて貰ひたいが……』

分厚の書類を彼の卓子の前にどさとおいた。

『よう厶います』
格別驚きもせず、ベッケルトは、手輕に引きうけた。
『明日、早朝本國へ電報で報せなけりやならぬ、……氣の毒だが、たのむ』と、公使もつけ足した。
『畏りました』



『では、わし達は歸るが、……此うと、門番のタピアを頼んでくれい』
『タピアは、さつき使に出したので、まだ戻りませんが……』
『……？』
『あゝ、さうかね、それなら好い、……さアかへらうか』
ヴェルゼーク男爵を促して、公使は此の部屋を出た。
こゝは、南米チリーの首府サンチアゴの獨逸公使館、時は、一九〇九年（明治四十二年）二月九日の夜である。獨逸公使は、至急を要する事務整理の爲、遲くまで詰めてゐたのだが、ベッケルト書記生に殘務を一任すると、そのまゝ引あげて、寢についたのである。
時刻にして、それから三四十分も經つたであらうか。
『火事です、火事です』
公使の寢室の扉を破れるやうにノックしたのは、コックである。
『何？　火事だ？　何處だ？』
寢衣姿で扉の處へ出ると、パーッと眼の前が明るくなつて、もう公使館が火の手につゝまれて居た



『あッ、……重要書類を出せ』と、公使はコックに命じたが、此時は、焔は館全體にひろがつて、所詮中へ身を躍らすことは出來なかつた。

消防隊は、時を移さずして馳けつけたが、天氣つゞきで、からくに乾いてゐた爲、火勢は募つて、見る見る中に、隣屋へも飛火がした。消防隊の盡力で、火はやうやく消し止めたが、公使館は、丸燒けだつた。

失火か？　放火か？

公使は、考へた。當時、サンチアゴに於て、獨逸公使が市民から憎まれて居るやうな事實は少しもなかつた。

『やつぱり失火だな、殊によると、ベツケルトが、夜遲くまで働いてゐたので、眠氣がさして何かやり居つたな』

公使は、それより外に思ひ當ることがない。で、ベツケルトの行方をさがしたが、何處に居るのか、火事が起つて以來、姿を見せなかつた。

『はてな、彼は十分信頼出來る忠實な男である、火事と聞けば、誰よりも彼よりも第一番に自分の處へ馳けつけねばならぬのだが、何うした事か』

心配になつて、四方へ手を廻したが、どこにも居らなかつた。

燒跡を探すと、果然、ベツケルトは黑焦の死體とな

つて、發掘された。何人か、殆んど辨別がつかぬ位に燒けたゞれて居たが、死骸の傍には、彼が平素かけてゐた眼鏡が落ちてゐた。右手の中指には、指輪もはめてゐた。指輪には、妻君の名前、Nathalia Lopez の頭文字のN・Lが彫りこんである。

『ベッケルトだ、可哀さうに、逃げおくれたと見える』

公使は、さう云つた。

檢證に來たチリーの醫師は、何せ、原形を止めぬ位に燒けこげて居るので、これが何者であるかは、識別する事は出來ないと言明した。

公使は、此の死骸を引取つて埋葬すればよかつたのだが、念の爲、死骸の解剖をしたいと云ひ出した。そして、二日後に、二名の獨逸醫師が、これを解剖した結果、意外な事實を發見した。

ベッケルトの死は、燒死ではない、他殺である、胸部に創傷があつて、大動脈が切斷されて居ると發表した。

これが爲、事件は一層こんがらかつて來た。

二

『ベッケルトは、火事の起る前に、何者かに殺害されて居る』

獨逸醫師が、此う認定した以上、智利の官憲も、默つては居られない。

犯人は、何者か？

すると、事件の起つた夜、門番の智利人エゼキエル・タピアが、使に出たッきり戻つて來なかつた。

『どうも、タピアが怪しい、さう云はれると、ベッケルトは、もう一つダイヤモンドの指輪を大切にして嵌めてゐたが、死骸にはその指輪が見當らなかつた』

ます／＼タピアに對する疑ひが濃厚となつたので、智利警察官は、彼の行方を搜査した。だが、何うしても捕縛されなかつた。

『智利人が、獨逸公使館の書記生を殺して、公使館に放火したとなると、大變なことになる、草の根をわけても、タピアをさがせ』

政府でも、警察官に嚴命を下した。

で、タピアの女房を警察署へ拘引したのである。

『お前は、亭主の居所を知つて居るだらうが、どうだ』

『いゝえ、旦那さま、タピアはあの晩家へは戻りませんので』

『それなら心當りがあるだらう』

『一向、これといふ心當りも厶いません。……でも、旦那さま、タピアは何もベッケルトさんに恨をもつて居るやうなことは厶いません、わたしは、タピアが犯人だとは思ひませんが、いかゞなもので厶いませうか』

『そんなことは分るもんか、出來心で惡事を働く奴は澤山ある』

警察でも、タピアの搜索については、全く手がかりを失つた。

折柄、妙な噂が傳つた。丁度、火事の起つた晩、夜中にサンチアゴの町の一角で、智利の名望家が、被害者のベッケルトに出會つたといふので。

『それは不思議だ』と、警察官が調査をすゝめた。

『あなたが、ベッケルト書記生に御會ひになつたのは、何時頃ですか』

『左様、何でも一時半頃だと記憶して居る、私が此方から歩いてゆくとベッケルト君が下うつむいて、あわたゞしく、用事ありげにかけてくる……、ハテナと思つて、聲をかけた』

『返事をしましたか』

『それがをかしいので、ベッケルト君ぢやないですかと、獨逸語で問ひかけると、人違ひでせうと、たしかに獨逸語で答へた、そんな馬鹿なことはない、ベッケルト君に相違ないと思つたが、相手が急いでゐるので、それなりに別れて了つた』

『それは、怪しい』

警察官の方では、ベッケルトに一時半頃出會つた者が居るとすれば、明かに火事の起つた後である。ベッケルトは死んでは居らぬ、生きて居るのだと云ひ出した。

獨逸公使は承知しない。

『犯人が檢擧出來ないので　その口實として、さういふ事を云ひふらすのだらうが、怪しからんことだ、黒焦げの死體がベッケルトでないとすれば、一體、あれは何者だ、……呆れた話です』

警察にくつてかゝる。

此うなると、事件は迷宮に入つて、眞犯人が一層分らなくなる。

死體がベッケルトだ、いやさうでないといふ論爭をハッキリさせる爲には、勢、ベッケルトの骨格の特長を見極めねばならない。ベッケルト夫人は、豫審廷へ召喚された。

『ベッケルト君には、何か此れといふ特長はありませんでしたか、齒がかけてゐたとか何とかいふ……』

豫審判事がたづねた。

『はい、その齒で思ひ出しましたが、實は、主人は、臼齒のどれかゞ無く、平生、私も年をとつたものだと、不平して居りました、それから下顎の齒に金冠をかぶせてありましたが……』

『あなたのお話丈けでは心元ない、何しろ御承知のやうに、全く死骸は燒け切つて居るのですから……何か證據はありませんか』

『齒醫者の受取證が殘つて居ります』

『それを御提出願ひたい』

さういふので、夫人から受取證を判事の手にわたした。それによると『痲醉拔齒五、金充塡四、白金充塡四、白金充塡金冠一、合計五十ドル』を支拂つて居たことが判明した。

かくと聞いて、智利人の國民的名譽の爲に、蹶然として起つたのは、サンチアゴ市齒科醫學校長ドクトル・ゼルマン・ヴレンズエラである。

『被害者が、ペッケルトであるか何うか、歯牙検査の必要がある』
自から裁判所に申請した。

三

獨逸公使は眉をひそめた。
『今更、歯の検査をしても、そんな事が分るものでない』
ムッとしてゐたが、裁判所はヴレンズエラ博士の申請を許可して、改めて博士に検案を命じた。
博士は、先づ門番タピアの女房から訊問してかゝつた。
『お前の亭主には入歯でもあるか』
『いゝえ、そんなものはムいません、至つて歯は丈夫で、一本の抜歯もムいませんが、どうして先生、そんなことを御訊ねになりますか』
『む、それ丈確めておけばよろしい、タピアが無罪になるんだ』
『有難うムいます、そんな事で、家の人の罪が晴れるなら、わたしは何んなに嬉しいか知れません、ほんとうに歯は丈夫でムいましたよ』
『よし、分つた』
博士は、ついで真黒焦げになつた被害者の頭蓋骨を丹念にしらべて、報告書を作りあげた。



『自分の推定では、黒焦死體は、ペツケルト書記生の死體ではなく、門番タピアの死體であると考へる』

博士は、此う云つた。

『何故かと申すに、これがペツケルトの死骸だとすれば、拔齒がなくてはならぬ、且下の齒は金冠が被せてなければならぬ、然るに死體の頭蓋骨によつて、齒牙檢査をすると、顎部には三十二本の正常な齒牙が殘つてゐる、一本の虫齒すらもない、火事の爲に上顎齒七本は破壞されて居るが、何等齒科的操作を受けた跡がない、下顎齒の四本は、ところ〲缺損して居るが、臼齒が全部完全で、齒は普通の大きさで平均し、咬合せは完全であつた、して見ると、タピアの死骸でなければならぬ』

意外な發見である。

今迄、被害者はペツケルトとのみ信ぜられてゐたのが、此の報告によつて、根柢からくつがへされた。

のみならず、加害者とのみ信ぜられてゐたタピアが、却つて被害者であると判つて、智利人は眼をまるくした。

ペツケルトは、反對に加害者らしいといふので、今度は彼に對する搜査が行はれた。

ペツケルトは、何處へ姿をかくしたのだらうか。

段々搜査がすゝむと、火事の起る二三日前、ペツケルトから、つくり髭や變裝具の註文があつて、これを屆けた者が現はれた。

愈々犯人は、『ペツケルトに違ひない』といふ確證を握つたので、八方に手をまはした爲、つひにロツキマイ山中で、智利人の爲に捕縛されて了つた。すつかり變裝してゐたので、一寸見分けがつかなかつたが、齒の特長が證據となつて居るので、彼も動きがとれなかつた。再びサンチアゴへ護送されたが、取調べの結果、彼はすつかり罪狀を自白した。

ペツケルトは、公使館の秘密書類を盜み出す爲に、機會をうかゞつてゐた。

丁度、公使から殘務整理を托せられたのを幸ひ、今夜こそは、目的を遂げようと考へた。それには、罪跡をくらます爲め

に、自分は火事で燒死んだ體に見せかけようとした。」

そこへ使に出した門番のタピアが戻つて來た。

『御苦勞だ、ウイスキーでもやれ』

醉はせて置いて、鋭利なナイフで、一突きに突殺し、自分の指から指輪をぬきとつて、彼の指にはめさせ、眼鏡を傍において、公使館に放火した。

火の手があがるのを待つて、彼は姿をくらました。

途中で、知合の智利人に聲をかけられた時は、ぎよつとした。だが、人違ひでせうと、馳けぬけるやうにして、深夜の闇の中に吸込まれて行つた。此ういふのである。成るほど、かく迄に手の込んだトリックを用ゐては、全く罪跡をくらまし得たと考へたに相違ない。

現場には、手がかりになる何物も殘つて居らぬので、それに死骸は黑焦になつて辨別がつかぬので、何うにも搜査の方法がつかない。

幸ひ、ヴレンズエラ博士の齒牙檢査の申請があつて、始めて手がかりがついた。それが爲、智利政府は、此の事件があつて後、齒科醫學について、特別の保護を與へ、理想的な齒科醫學專門學校を建設した。

此の事實は、石井衞太君の調査にかゝる一場の探偵實話である。私共齒科醫からといふと、死體の原形を留めずして、その判定に迷ふやうな場合でも、齒牙檢査によつて、判定出來る。それが今迄の犯罪搜査上に於て、無視されてゐた傾向があるが、此の實例によつて、蒙をひらき得たのは、最も愉快とする所である。

―終―

お斷り

◇鐵血政策の序曲
◇大人物の眞面目

右二篇、前號に豫告しましたが、編輯の都合上掲載出來ませんでした。あしからず御諒承下さい。

わが社一同の熱情を披瀝して
親愛なる本誌愛讀者諸君に訴ふ

（是非御覽下さい 是非々々御知り合に 御勸め下さい）

◎私共の社では、利益があれば、それを雑誌に注ぎこむ主義でやつて居ります。それだけ雑誌は段々良くなります。安くなります。

◎自分の爲ばかりを考へる樣では廣い世間の同情同感を得る事はむづかしい。世の爲め人の爲めを圖る事です。私共は『道徳によらざれば斷じて發展なし』と堅く信じて居ります。

◎衆愚といふ、何といふ誤ぞ。大衆は賢明である—どこ迄も恐懼、戒愼。内容は勿論、用紙に印刷に、飽くまで細心の注意を拂ひ、又思ひきつて金をかけ、良いもの、面白いもの、安いものを作るに限る。自然天下の信認を得、發展成功疑なしと存じます。

◎面白く、どこまでも面白く、飛切り面白くと工夫しなければ、多くの人に讀まれるものではない。併し、それだけでは、まだ足らぬ。その上に感激あり、知識あり、何物か得るところがなければならぬ。そこに非常な苦心が存するのであります。

◎やつてやつてやり抜くのが私共の信條です。たとへ骨が碎けても、身が粉になつても、我等兄弟八千萬の爲めにやり抜かずにはおかぬこの誠心、天日も照覽あれと只々一同は日々夜々一生懸命です。一心不亂です。

◎名士諸先生も、この精神を買つて下すつて『講談社の雑誌のためなら、どんなことでも……』と、誰方も熱烈にお骨折り下さる有難さ！血のにじむばかりの御苦心、魂を打ち

こんでの御執筆、之が面白くなくて何としませう。之が喜ばれなくて何としませう。

●よいものを宣傳することは道德である。キリストも日蓮も、大確信を以て宣傳した。私共一同は世間一部の批評などは恐れず、勇敢に思ひ切つて宣傳して居るのです。少しでも多く讀者を得、讀者諸君と共に天下を淨化したいと夢中になつて居ります。

●雜誌は文化のバロメーターである。最近我國の雜誌の發達は、世界の注目するところとなつて來た。いよ〳〵益〻發達せしめ、日本の威信を全世界に高めたい、高めずには置かないと一同逆せ上つて居ります。

●今や我國は實に大切な時である。私共は精限り根限り、報國の誠を致さねばならぬ。冀くは雜誌によつて、天下を明るくし、日本を景氣よくしたい、と過分の大願を抱いて、炎の如く燃え立つて居ります。

●何分にも德足らず、學乏しく、志徒らに大、力之に伴はず、社内一同會議又會議、工夫又工夫、尙及ばざる處多し、大方諸賢のお教を仰ぐの情益〻切なるものがあります。

●本社九雜誌の新年號大賣行本社創業以來の大盛況！實に愉快です大歡喜です。社内一同血は燃え肉は躍つてゐます。天下のこの信望に對してもいよ〳〵奮勵努力、さうだ〳〵今年こそは益〻天下の爲同胞の爲一層の大飛躍を遂げ之に報いる處がなければ相濟まぬと大騷ぎ致して居ります。

●どうぞ私共一同の此衷情に御同情下さい。毎月〳〵一部でも多く御知友に御勸め下さい又私共の爲大小何なり御氣附の點は忌憚なく御教へ下さい、切に〳〵熱願申上げます。

大日本雄辯會講談社　同人一同

美談の華・逸話の泉

母の禱り

嘗ての羅馬法王セント・オーガスチンは大學者として、大智識として、將又聖者として、その名を後世に殘して居るが、彼の青年時代は、實に放蕩無頼の大酒飲みで手の附けられない不良青年であつた。



彼の放蕩時代に於いて、一番彼に手古摺らされた人は彼の母モニカで、モニカは常に神樣に祈願を籠めて彼の素行を矯正しようと心を碎いて居たが、オーガスチンの亂行は日に日に募るばかりであつた。一日、オーガスチンが一週間も家を空けた揚句に歸宅したので、モニカは彼の部屋へ入り、泣いてその亂行を責め、改心を迫つた。フラ〳〵に醉つ拂つて居たオーガスチンは『何をッ！』とばかり、母を靴先で蹴倒して了つた。それでも、泣く泣く部屋へ歸つて行つた母の後姿を見ると、多少氣掛りだつたと見え、そつと母の部屋を覗いた。母は、床に跪いて我子の爲めに專心神に祈りを獻げて居た。それを見た彼は、飜然として悟るところあり、それ以來一滴の酒も口にせず、一向勉學にいそしんだ。

腹を切れ

函館に叛旗をひるがへした榎本武揚が百計つきて降伏した時、時の官軍參謀黑田清隆は榎本等の助命を引受け歸京したが反對論が多くて自說がとほらない。百方手をつくして助命の沙汰を願つたが何うしてもいかぬ、とゞ西鄕南洲の所へ賴み込んで曰く、

『若し榎本の助命が出來ない時は、自分も引受けた關係上、腹を切らなければならぬ。何うか先生の御盡力に預りたい。』



すると南洲は、

『黑田さん、あんたお死になさい。方々賴んで步かないがいゝ。』

黑田は呆れて南洲の顏を見てゐたが、南洲の言葉はそれッきりだつた。が、黑田もさるもの、突嗟に南洲の腹をよんで、誰れにも賴まず、死を以て榎本の助命說を主張し、つひに、初志を貫

徹した。

悪習を矯める

會津若松のあたりには、むかしから間引と云つて墮胎することが一種のしきたりになつてゐた。瓜生岩子はそれを矯め直さうとおもつて、いろいろ考へた末、最も人情的な方法を選んだ。岩子は先づ觀音講に入つた、集るのは大方女連中だから、きまつて他人の噂をする。

『何處其處のおかみさんは又出來たさうな、今度はきつと間引だらう。』



かういふ話を聞くと、岩子は直ぐその家へ尋ねて行つて、『今度生れる兒を私に下さるまいか。』と賴み込む。どうせ間引つもりだから、貰つてくれるものがあるのは願つたりかなつたりであるから、快く承知をする。すると岩子は大喜び、産衣やおしめの支度をして持つてゆく。生れるとお祝ひの鰹節をとゞけるといふ風であつた。

七日か十日かして『では約束どほり貰つて參ります。』といふと、生れて見れば可愛いし、乳を飲む顏をだん〳〵見てゐるとどうして手離すことなど出來るものではない。

『他家へやる處ではございませぬ。』と云つて今度は斷る。

『では又ほかで貰ふことにしますから、どうか大切にお育てなさい。』

このやうにだんだんやつてゆくうちに、自然に墮胎の惡風が改まつたといふことである。

笑顏の勵まし

『緋文字』といふ小説は、米國の文豪ホーソーンの傑作である。彼は最初、或る官省に勤めてゐたが、如何なる故か免職された。彼は今後の生活を考へ、また此の唐突な事件に悲しむ妻のことを思ひながら、悄然として家に歸つて來た。やつとの思ひで、妻に語つたが、妻は意外にも驚かない、ストーヴを焚きつけて温かい夕食を整へながら、



ホーソーン

『それも結構ぢやありませんか、これからは、お望み通り家にゐて、何かお書きになる事が出來ますよ。』と笑顏を見せて勵ました。

ホーソーンは此の意外な答に驚き且つは力づけられた。そして專心一意、日頃好んでゐた文筆に親んだ、やがて出來上つたのは彼の『緋文字』である。若し此の夫人の笑顏がなかつたならば、恐らくあの大傑作を見ることが出來なかつたことであらう。

或日の孔子

孔子が長年の遊說中の事である。衞の地に在つて、徒然のあまり、磬(樂器)を

つて居られた。すると、偶〻、門前を通る者がある。その者、磬の音を聞き、立ち留つて耳を傾け、思はず、『ああ床しい音色ぢやな。』と感歎の聲を漏した。聖人の心は、常に天下を忘れない。其の心が自然に磬の音に通うたのであらう。して、之を聞き分けた者も亦凡人ではない。其の者暫し聽いて居たがさて言ふには、『あのこつ〳〵した音よ。如何にも心が小さく固まつたものぢや。さう凝りかたまらずとも、世に自分を知る者がないなら、さつぱりと思ひ切つて高踏自適するがよいではないか。』と言ひ終つて、『深ければ則ち厲し、淺ければ則ち掲す。』といふ古詩を吟じつゝ、飄然として立ち去つた。是は詩經の詩中の句で、厲は衣を脱いで手にもつこと、掲は衣をまくりあげることで、深い川を渡るには厲し、淺い川を渡るには掲する。即ち、厲するも、掲するも、川の深淺次第、それと同じく、明君があれば現れ、明君がなければ隱れる。現れるも隱れるも時世次第である。何も我を知らぬか知らぬか



とて氣をもむには及ぶまい、といふ意味である。此の者も凡人ではないが、流石に聖人の大なる志が分りかねたのである。孔子はこの言を聞かれて、『思ひ切りのよい男ぢやな。が、さう思ひ切るのは、何もむづかしい事ではない。』と言はれた。唯、己れを善くしようと思ふのなら、何時でも思ひ切れる。が、天下を濟はうといふのには、さうは思ひ切れぬ。親の病氣が癒る見込がないとても、矢張、醫藥を進めねばならぬ。孔子は天下萬民の病を治さうと思はれたのである。

大膽にして小心

嘗て郵船會社の所有船が、某所に於て沈没したときの事である。船長は其罪の咎められんことを恐れながら、社長岩崎彌太郎邸を訪ひ、涙ながらに失策を謝して、速かに解雇されんことを請うた。と、彌太郎は平氣で盃を啣みながら、これを聞いて微笑した。

『なあに、海運を業とするからには、そんなことはあることだ。謝まることはないよ。』

眉毛一つ動かさないので、船長は彌太郎の言を疑ふもの丶やうに默つてしまつた。と、彌太郎は暫らくして、『だが、平常船員達の使ふ、筆、紙、墨其他の消耗品に注意して、他人の物だと思つてムダ遣ひせぬやうに論して貰ひたい。日常の失費ほど巨額に上



るものだかられ。』言ひ終つて、彼は船長に盃をさした。既に辭表を懐にしてきてゐた船長は、夢かと喜び、彼のためにますく盡さんと心に盟つた。

明るき世界へ

宵闇の田舍路を工場歸りの二人の若い職工が頻りに議論を戰はし乍ら歩いてゐた。一人は酒臭い息を吐いてゐたが、一人は書物入りの鞄を抱へて眞率な貌をしてゐた。



『全く工場長は横暴だ。第一社長が暴慢だ。あれぢやア我々は一生コキ使はれて、明るい自由獨立の生活なんか出來やアしない。』と酒臭い職工が言つた。

『否、出來るよ。』と鞄を抱へた職工は自信深く反駁して、『君は明るい自由獨立の生活が出來るのを自分で出來なくしてゐるんだよ。』

『どうして？』

『君は始終金を浪費してゐるだらう。例へば毎晩酒を飲んだりして。』

『酒でも飲んで樂まずにゐられないぢやないか酒代なんて僅なものだよ。』

『それだ。其僅なものに注意しなけりや駄目だよ。』

『僅な金も積れば莫大になつて、それで自分の店が持てる。自分の支配する店を持てばもう全く明るい自由獨立の生活が出來るんだ。』

『成る程。』

酒臭い職工は醉もさめて感服した。

二人は軈てとある岐れ路で右左に別れた。そしてその鞄を抱へた職工は、ゆく手の丘上の窓に燈火の輝く夜學校へ力强く足を運んだ。其後彼は莫大な貯蓄をして、店を持つ代りにそれを學資として高等教育を受け、そして自由獨立の身となつてアフリカの大探險を企てた。彼とは即ち大偉人リビングストン博士である。

『いろは』を支那へ

朝鮮役のはじめに、何事にも氣の附く石田三成が『殿下、明へ攻め入る時には是非漢文の達者な者を數名召しつれて行かなくてはなりませぬ』と、言つた。すると秀吉カラく と打ち笑つて、『何を馬鹿なこと、「いろは」を明國へ持つて行けばよいではないか』

この意氣があつてこそ、あれだけの大壯擧も敢行出來たのである。



金儲け二筋道

谷孫六
さしゑ　田中比左良

黄金の自由

時節柄『錢の講演會』は滿員であつた。

出演者の毛色が變つて居ると云ふので、聽衆の顏觸れも、商人、會社員、醫者、辯護士、職工、學生、株主、職業婦人、等々、いろ〳〵な階級で一ぱいだつた。

いま演壇には山羊髯を生やした、五十恰好の人が頻りに熱辯を振つて居る。

——自由を求むるは人類の本能であります——

『おや、あいつ社會主義ぢやないか』

と事務服は腰を下ろしながら囁いた。

——自由は與へられて居る、諸君は其自由を尊重しない、感謝しない、勿體ない話であります——

『演題は何なんだい、あいつ牧師かも知れないぞ』

と、赤ネクタイが囁いた。

——試みに考へて下さい、諸君の住む借家は、毎月差配が家賃を取り立てに來る筈であります。家賃は借家の使用に對する利子として徴收されるのであります。家主と云ふ資本に對して、家賃と云ふ利子を取つて生活して居るのです。——

『はゝあ、家賃値下げ問題だな』

と、黑眼鏡は腕を組んで點頭いた。

――諸君は如何に困ればとて、借家を賣り飛ばす譯には行きません。薪が無くなつたからと云つて、其家屋の柱を削つて焚くことは出來ません。もし諸君が前金で借家をして居るとしても、其借家を自分の絕對權利として他人に讓ると云ふやうなことは出來ません、それこそ法律上、直ちに何年かの懲役を覺悟しなければならないのであります。――

『少し變だな』

事務服と赤ネクタイは顏を見合した。

――然るに諸君――

彼は一段と聲を張り上げて反つた。

――金はどうでありませう、借りた金は其まゝ影も形もなく、使つてしまつたところで、刑法上何の拘束もありません。自由であります。借りた家屋でも、借りた金でも、借りるに相違ないのであります。然るに物と金との相違は、自由と不自由との二つに別れます。不思議ではありませんか、この不思議なところに、金儲けの神秘はあるのであります――

『矢張り錢の話だよ、うまいことを云つて居るね』

いままで話の要點を摑めなかつた課長は、綻びさうな微笑をそのまゝに椅子深く腰をかけ直した。



――借りた家屋の影も形も無くしてしまつたら、刑法上免がれぬ罪人とならねばならぬにも拘らず、金は使つてしまつても罪人にはなりませぬ。借りた家屋は不用になれば、原形の儘で返却しなければなりません、金は百圓紙幣で借りて來て、五圓札二十枚にして返しても差支ないのであります。卽ち其百圓を一時に使つてしまつて、二百圓になつたからとて、貸した人へは百圓だけ返せばよろしいのであります。何と云ふ自由でありませう、これこそ吾人に惠まれたる自由に非ずして何ぞやであります――

隅の方で二つ三つの拍手が起つたかと思ふと、氣がついたやうに一齊の拍手が起つた。

――諸君！大いに金を作つて下さい、決して貧乏でなければならない義務はありません。この惠まれたる金の法則がありながら、金持になり得ないのは不幸であります。而も現在金持になり得る神秘力を與へられて居りながら、依然として貧乏なのは二重の不幸であります。然しこの事に就いて、或人は『何

〵でお前達は、金儲け〳〵と多くの人を誘惑するのであるか？ 卑しい素町人根性だ！』と申すでありませう。けれども私は斷然金儲けの爲めに突進せよと絶叫するものであります――

期せずして一齊の拍手が起つた。

偉人の足跡

――世には金よりも更に崇高な、偉大なあるもの丶存在する事を感じます。殊に心に苦難の經驗ある人は、黄金以上の氣高いもの丶ある事を知つて居ます。同時に常識あるものは、總てのものが一つとして金を用ふることに依つて、更に光輝ある偉大を現出することが出來ると云ふことを否定し得ない筈であります。諸君！ 儲けて下さい、儲けると云ふ字は、諸人と書きます。諸人悉く儲くべきであります。――

話は未だ續くこと丶思つて居た聽衆は、彼が急に打切つて降壇してしまつたので、手を打損なつて、どよめいた。

次に登壇したのはポスターの中から脱け出して來たやうな、瀟洒な服裝をした若い男で、胸にさした白薔薇の徽章がクツキリと浮き出して居る。

『あれは株屋さんだぜ』と誰かゞ云つた。

『株屋だけど、調査部か何かの方に勤めて居る男だよ』ともう一人の誰かゞ云つた。辯士は胸かくしから純白のハンケチを引出して輕く口の邊りを拭つた。そして咳一咳して稍、反り身になつたかと思ふと、

――諸君、なんと不景氣な世の中ではありませんか、この不景氣の依つて來るところ、そも何に原因するのでありませう。それは金が遊んで居るからであります。いや、金持ちが遊んで居るからであります。今や金持ちは手を拱いて、時勢の流れを見詰めて居ります。熾んなるべき事業は縮小され、興るべき仕事は壓伏されて居ります。金は金持の金庫の中に大きな欠伸を續けて居ります。其金の働きから生れて來るところの月給や勞銀は孰れも一服の姿で、身體を資本にして食はねばならぬ人間共を振り向きもしません。失職者陸續失業者相次ぎ、實に混沌たる世相であります――

割れるやうな拍手が起つた。

――諸君、富は天然の資源から生ずるものでありますが、總て物は有用でなければ富ではありません。そこで天然の資源を化して有用とするには、大抵勞作が必要である。然るに此勞作には先づ以つて富が要る。斯やうに富の生產の過程は、富を以て初まり、富を以て終る端のない鎖であります。

諸君にせよ、私にせよ、富を欲します。少くとも吾々なり吾々の扶養すべき人々なりが、相當に暮せるだけの富を欲します。然らば諸君なり私なりは、富の生產過程中に、天然の資源か、富か、いづれの環を形づくつて居るでありませうか。若し吾々が富を持つて居るなら、更に多くの富を生產する爲めに、それを働かすことが出來る。それには自身の生產事業を起して、自身で經營してもよいし、或は他人の經營する事業に投資して、出資額に相應する利益の分配に預か

ることも出來るのであります。

もし自分で富を持たないなら、富を持つて居る誰かに使はれて働かねばなりません、しかし何時迄も他人の爲めに働いて居て、富と云ふ程の富を得たものは嘗て一人もありません、何故なれば勞働者の供給は餘りに多く、其社會の團結は餘りに貧弱であつて、彼等が其傭主に與へて居る勞力に對して今日受取つて居る賃銀以上に、ズッと澤山の報酬を受けることは六ケ敷いからであります――

ヒヤ〳〵、と古い讃辭が何處かで起つた。

――然るにも拘らず、巨萬の富を得た人々は、大抵最初は勞働から身を起しました。ロックフエーラーは雜貨商の手代でありました。カーネギーは事務所の給仕でありました。ヴアンダアビルトは甲板船員でありました。マアシヤルフイルドは手代、マッコルミツクは農夫、ハーストは坑夫、大倉喜八郎は鰹節屋の小僧、安田善次郎は玩具屋の小僧、古河市兵衛は豆腐賣りの少年、その他いづれも此類であります。

そこで是等の人々が初めて世の中に飛び出した時には、吾々と同じやうに、ただ其日の勞作をする能力以外に何ものも持つて居りません。彼等は克己節儉に依つて其儲けの幾分を貯へ、此貯へを大膽に事業に投じたのであります。先人の善き實例に從ふことは賢明な途である。之は人間の經驗が均しく教へて居る所であります。



諸君、諸君と私とが今日の眼前に好機會を有つて居ることは、是等の成功した人々と同樣であります。唯、諸君は之等の機會を利用するの勇氣があるか。問題は卽ちこゝにあるのであります――

彼は卓を一つ打つて見得を切つた。拍手が起つた。

資本の作り方

――金儲けの道……私は富の過程を總稱して斯く申します……金儲けの道に入るに際して先づ必要なことは、若干の根本的原則を會得することであります。第一には、金には金を儲ける力と、賃貸價格（卽ち利子）とがあつて、此力と此價格とは同一な物ではないと云ふことを明瞭に記憶して頂きたいのであります。第二には此金が金を儲ける力と賃貸價格とには各〻等級があると云ふことであります。

金を働かすには、之を貸しつけること

も、之を投資することも出來る。金が一定の率の利子を齎らす場合は、即ち貸付けたのであつて、利潤總額の中から、平等の配分を享ける場合は即ち投資されたものであります。

金を借用證書や債券や社債などに代へたり、貯蓄銀行に預入れることは、金に賃貸價格を附與するものであつて、金を資本として企業に投下することは、金に金を儲ける力を附與する所以であります。金の賃貸價格は利子と云ふ名に代表され、金の金を儲ける力は利潤又は配當と云ふ名に代表されて居ります——

『少し難しいぞッ』と誰かゞ叫んだ。

——お待ち下さい……金の利子と云ふものは、金が儲ける利益と云ふものよりは、どんな場合でも少ないものであります。何故なれば、金を借りる人は、其借りた金で儲けたものゝ一部分を利子として支拂ふものであります。故に年四分五厘の利子で銀行へ金を預けたり、五分や六分で債券に代へて置いたりしたのでは、五百圓や千圓位しか持たない人々に取つては、餘りにのろい道行であつて、生涯續けたとて極めて僅です。

例へば今此處にA、B、C、D、Eの人があるとします。各ゝ千圓の金を持つて其金を殖やすことを心掛け、Aは四分八厘の郵便貯金を致しました。Bは六分に廻る信託預金を致しました。Cは八分見當になる株券を買ひました。Dは一割利廻りの株式に投資しました。Eは一割二分になる利殖法を行つたとします。これが五十年後に計算すると、

A　一萬千四百六十七圓四十錢
B　一萬八千四百二十圓廿錢
C　四萬六千九百一圓六十錢
D　十一萬七千三百九十圓九十錢
E　二十八萬九千三十圓

と云ふ結果が現はれます。金持の出來る理由は實に此道行に依るのであつて、人々は金の金を儲ける力に依つて金持となるもので、金の賃貸價格によつて金持になるものではありません。一ケ年百圓の貯金をして、年四分五厘位の利息で銀行に預けたり四分八厘の郵便貯金にして置く人達は、幾代も生きて居なければ金持にはなれないのであります——

『一文無しならどうするッ』と職工らしい男が隅の方から叫んだ。

——ところが少額の金しか持たぬ人、又は一ケ年に僅かの額しか貯蓄できない人々に取つては、其少額の金を投じて、獨立の企業を組織すると云ふやうなことは出來得ません、そこで其少額の金で金を儲けるには、其金を、他人の金に併せて、目論見の事業を運轉するに充分な金額に殖やして行かねばなりません。

それをどうするか。それは矢張り巨萬の富を作られた人達のやうに克己節約して、何年かの間積立てゝ行かねばなりません、安田善次郎翁は毎日四十八文の金を必ず貯蓄して、家を建てたと云はれます。有りやうのことを申上げますと、金儲けをする資本の作り力は、食ふものも食はずに蓄積する位の決心が必要なので

あります。——

彼はフラスコの水をコップに注いで一息入れた。

貯金の訓練

——人間の身體は疲勞を感ずる缺點があります。然るに金は幾ら働かしても疲れないと云ふことを考へて下さい、金は働かせかた一つで夜の目も寢ずに働きます。先程申上げました利子ですら、一寸した機轉で働き方が違つて來ます。資本蓄積時代の參考として、利子の働き方を申上げて置く事も、強ち徒爾ではないと思ひます——

謹聽々々——とまた古臭い聲がした。『待つてました』と下品な聲がした。パラ〱と手を拍つものもあつた。

——諸君、諸君は必ず若干かの貯金がおありの事と思ひます。また貯金をなさらうとする方もおありの事と思ひます。しかし其貯金の利子の働きに無關心ではありませんか、其體的な表や說明は、後に專門的な辯士が控へて居りますから、それはその方へ讓りまして、私は今茲に貯金するもの、金儲けの資本として貯蓄する方々に、一應申上げて置きたい御注意がございます。



一、郵便貯金は金を溜めるには尤も便利な機關であります。郵便局は日本全國に八千からの數がありますから、何處に居ても預けられます、のみならず十錢以上二千圓までなら何程でも預けることが出來る便利なものであります。

郵便貯金の利子は四分八厘である事は何人も御承知の事と思ひますが、これは尤も勘定のしやすい利子で、四分八厘と云へば月四厘と云ふ計算で、百圓に對して一ケ月四十錢、十圓で四錢、一圓で四厘と云ふ誰にも直ぐに割出すことの出來る步合であります。ところが茲に御注意申上ぐるのは、郵便貯金は預けた月の十五日後と、引出した月には利子がつきません。卽ち一月十五日に預けて十二月三十一日に引出すとすれば、百圓に對して四圓の利子となるのですから、年四分八厘としても計算されて渡される利子は四分にしかならないのであります。

ですから郵便貯金をしようとする人は其月の十四日迄に預けて、引出す時は必ず一日に引出すと云ふやうに心懸けねばなりません。一月に預金すれば、その月



の十五日間は無利子で郵便局に遊んで居ます。三十日に引出すと、三十日間働いて來た利子がフイになつてしまひます。

一、貯蓄銀行の貯蓄預金は毎月五日迄に預入れたものへは、其月から利子をつけて呉れることになつて居りますから、六日に預金すると、これまた廿五日間は銀行で遊んで居ることになるのであります。ですから恁麽場合は、特別當座の日歩で計算される預金の方へ卅日間預けて置いて、翌月の五日に貯蓄預金の方へ繰入れますと、三十日間の利息と、其月から利息の計算される寸隙のない預金が出來ると云ふものです。

一、特別當座預金は出し入れが烈しいので、年利計算が出來ませんから、日歩になつて居ります、日歩計算は一ケ年三百六十五日に其步率を掛ければ割合が出て來ることになつて居ます、假りに日歩一錢と云へば百圓に對して日歩一錢ですから、一年には三圓六十五錢、卽ち三分六厘五毛となる譯であります。そこでこれにも御注意申上ぐることは、日歩の計算は百圓が單位でありますから、端數には絕對に利子をつけません、ですから百九十九圓九十九錢の預金に對しても矢張り日歩一錢しかない譯であります。あと一錢足せば、もう一錢の利子が取れると云ふことを考へれば、何でもないことのやうですが、大へんな相違であります。日歩計算の預金には決して端數をつけては不可ません。

一、銀行の定期預金は半年預けても、一年預けても利子は同じです。今假りに年四分五厘で一萬圓の金を預けるとして、一年の利子四百五十圓ですが、半年づつ二度に預けると、半年の分の利子二百二十五圓にも半ケ年分五圓六錢の利子がつきますから、四百五十五圓六錢と云ふ利子になります。——

金儲けの間道

『こまかいツ』と誰か叫んだ、『シイツ』と方々から叱る聲がする。

——大體に於て右樣の次第でありますが、これ等の注意は、大を成す時の訓練でありまして、大金を儲ける人達の頭には、常に斯樣な閃めきが左右して居ります。そこで私の本論でありますところの金儲け、卽ち金が金を儲ける力でありますが、これには先づ確固たる精神の必要を力說せねばなりません。尤も機智の働きに依つて、目の着け所一つで合理的に金を儲けると云ふやうな場合もないではありません。

先達私の友人は斯んなことをして

まい金儲けを致しました。それは斯うであります。ある人が一萬圓ばかりの金が遊んで居るが、銀行の利子より少し良い位で結構だが、確實な擔保で何か無いか、と云ふことでした。其男は即座にあると答へました。しかも有力な株券を擔保にする、金解禁に何等影響の無い電力株でどうだと云ふのです。貸し主は考へて居ましたが、金解禁をしたところで電燈をつけずには居られまいと考へたのです――ドッと笑ひ聲がした。

――交渉は早速纏まりました。日歩一錢六厘と云ふのですから年利にすると五分八厘四毛、貸主は四分五厘の定期預金よりも一分三厘四毛の利益があるのですから、早速其の男に貸す約束を致しました。

其男は直ちに兜町へ參りまして、東京電燈株式會社の株を四十圓（昭和四年十二月）で二百五十株ほど短期で買ひつけました。此代價一萬圓也、株が廻つて來ると貸し主の所へ參りまして其金を仕拂はせました。すると擔保は時價の八掛とか九掛とか云ふのですから、其差金をどうするかと貸し主は其男に談判致しました。

茲で其男は算盤を持ち出してパチパチ彈き初めました。四十四圓の株ですが額面は五十圓です。五十圓に對して東京電燈株式會社は四圓五十錢（九分）の配當をして居ります。さうすると年一割强です。あなたは定期預金より一分三厘四毛の利益を見て私に金を貸す心が動きました。私は五分八厘四毛の利子を拂つても尚且つ四分一厘六毛の利益を見て、此株を買つたのです。あなたは一分三厘四毛と安全を基礎として算盤を彈きました。私は此株の相場が下るかも知れないと云ふ冒險に對して四分一厘六毛と云ふ利益を摑んで居ます。もしあなたが私と同じ考へを持たれるなら四分一厘六毛と一分三厘四毛と合はしたもの、即ち五分五厘の利益を共同で得ようではありませんか、さうすれば等分しても二分七厘五毛づつの利益になります。と云ふのです、貸主は考へました。電燈會社と株式、さ程危險もないやうに感じたので、とう〳〵其男と共同でやることになり、其金をすつかり仕拂つてやつて、利益を二分しました。其男の二分七厘五毛と云ふのは、全く頭が資本なのでした。（終）





の十五日間は無利子で郵便局に遊んで居ます。三十日に引出すと、三十日間働いて來た利子がフイになつてしまひます。

一、貯蓄銀行の貯蓄預金は毎月五日迄に預入れたものへは、其月から利子をつけて與れることになつて居りますから、六日に預金すると、これまた廿五日間は銀行で遊んで居ることになるのであります。ですから恁麼場合は、特別當座の日歩で計算される預金の方へ卅日間預けて置いて、翌月の五日に貯蓄預金の方へ繰入れますと、三十日間の利息と、其月から利息の計算される寸隙のない預金が出來ると云ふものです。

一、特別當座預金は出し入れが烈しいので、年利計算が出來ませんから、日歩になつて居ります、日歩計算は一ケ年三百六十五日に其歩率を掛ければ割合が出て來ることになつて居ます、假りに日歩一錢と云へば百圓に對して日歩一錢ですから、一年には三圓六十五錢、即ち三分六厘五毛となる譯であります。そこでこれにも御注意申上ぐることは、日歩の計算は百圓が單位でありますから、端數には絶對に利子をつけません、ですから百九十九圓九十九錢の預金に對しても矢張り日歩一錢しかない譯であります。あと一錢足せば、もう一錢の利子が取れると云ふことを考へれば、何でもないことのやうですが、大へんな相違であります。日歩計算の預金には決して端數をつけては不可ません。

一、銀行の定期預金は半年預けても、一年預けても利子は同じです。今假りに年四分五厘で一萬圓の金を預けるとして、一年の利子四百五十圓ですが、半年づつ二度に預けると、半年の分の利子二百二十五圓にも半ケ年分五圓六錢の利子がつきますから、四百五十五圓六錢と云ふ利子になります。――

金儲けの間道

『こまかいッ』と誰か叫んだ、『シイッ』と方々から叱る聲がする。

――大體に於て右樣の次第でありますが、これ等の注意は、大を成す時の訓練でありまして、大金を儲ける人達の頭には、常に斯樣な閃めきが左右して居ります。そこで私の本論でありますところの金儲け、即ち金が金を儲ける力でありますが、これには先づ確固たる精神の必要を力説せねばなりません。尤も機智の働きに依つて、目の著け所一つで合理的に金を儲けると云ふやうな場合もないではありません。

先達私の友人は斯んなことをしてう

まい金儲けを致しました。それは斯うであります。ある人が一萬圓ばかりの金が遊んで居るが、銀行の利子より少し良い位で結構だが、確實な擔保で何か無いか、と云ふことでした。其男は即座にあると答へました。しかも有力な株券を擔保にする、金解禁に何等影響の無い電力株でどうだと云ふのです。貸し主は考へて居ましたが、金解禁をしたところで電燈をつけずには居られまいと考へたのです――ドッと笑ひ聲がした。

――交渉は早速纏まりました。日歩一錢六厘と云ふのですから年利にすると五分八厘四毛、貸主は四分五厘の定期預金よりも一分三厘四毛の利益があるのですから、早速其の男に貸す約束を致しました。

其男は直ちに兜町へ參りまして、東京電燈株式會社の株を四十圓（昭和四年十二月）で二百五十株ほど短期で買ひつけました。此代價一萬圓也、株が廻つて來ると貸し主の所へ參りまして其金を仕拂はせました。すると擔保は時價の八掛とか九掛とか云ふのですから、其差金をどうするかと貸し主は其男に談判致しました。

茲で其男は算盤を持ち出してパチパチ彈き初めました。四十四圓の株ですが額面は五十圓です。五十圓に對して東京電燈株式會社は四圓五十錢（九分）の配當をして居ります。さうすると年一割强です。あなたは定期預金より一分三厘四毛の利益を見て私に金を貸す心が動きました。私は五分八厘四毛の利子を拂つても尚且つ四分一厘六毛の利益を見て、此株を買つたのです。あなたは一分三厘四毛と安全を基礎として算盤を彈きました。私は此株の相場が下るかも知れないと云ふ冒險に對して四分一厘六毛と云ふ利益を摑んで居ます。もしあなたが私と同じ考へを持たれるなら四分一厘六毛と一分三厘四毛と合はしたもの、即ち五分五厘の利益を共同で得ようではありませんか、さうすれば等分しても二分七厘五毛づつの利益になります。と云ふのです、貸主は考へました。電燈會社と株式、さ程危險もないやうに感じたので、とう〳〵共男と共同でやることになり、其金をすつかり仕拂つてやつて、利益を二分しました。其男の二分七厘五毛と云ふのは、全く頭が資本なのでした。（終）



【事實の一】偉人英傑の共通點を調べたのによると、誰も彼もがみんな、『貧しい家に生れた』と云ふ事ださうです。



【新らしい事實の一】なる程少年時代の讀み物が大事だとその責任を十分に考へて編輯してゐるのが本社の少年倶樂部です。





【事實の二】偉人英傑の共通點の二は、誰も彼もがみんな、『賢い母を持つてゐた』と云ふ事ださうです。



【事實の三】偉人英傑の共通點の第三番目は、誰も彼もがみんな、『偉人傳を讀んで感激した』と云ふ事ださうです。

【事實の四】そしてその感激は、大抵少年時代に讀んだ時受けたのが一番強かつたと云ふ事です。以上四つがその共通點です。



偉い人になるには、偉い人の傳記を讀むのが第一番です。そこで少年倶樂部では、その二月號を『偉人英雄物語號』と云ふ特別號にしました。いつも、どうしたら少年達の修養を助ける事が出來ようかと、一生懸命な『少年倶樂部』の態度にはいつも敬服されます。この特別號には附錄として『世界英傑肖像畫集』をつけるさうです。世界の英傑四十人を選び精巧な原色版にしたものです。英傑の物語を讀ませ、その肖像畫に日夕親しませようと工夫した同誌の親切をうれしく思ひます。キングと社を同じくしてゐます關係からも、この頼母しい『少年倶樂部』が、どこの御家庭にも歡迎されます樣、切に御願ひ申上げます。

キング編輯局

【新らしい事實の二】この感激で作られる『少年倶樂部』ですから學校の信用が非常に厚く至る所で推奬されてゐます。



【新らしい事實の三】ですから『少年倶樂部』の讀者の殖え方は實に異状です。矢つ張り良い物が選ばれると云ふのが本當です。





途方もない話 珍無類の話

劇的英雄『毛の猛將』

東正雄

モロッコ國フェズ市の一素封家に、エーデルとよぶ美貌の一人娘があつた。日頃この娘を慕つてゐた一人の青年は思ひあまつてか、ある時娘の親を欺いて窃にエーデルを連出し、掠奪結婚の旅にのぼつた。彼等は罪深い身を隱すために、人目を憚つて隊商の群に紛れ込んだ。

茫々と果しのないサハラの大沙漠！駱駝の脊を二人の家と定め、物凄い沙漠風の砂煙をあびつゝ奥地に入つて行つた。ところが不幸にも新郎はフト熱病のために冒されて、空しくテントの中に斃れて了つた。若きエーデルの嘆きは如何ばかりであつたらう。

彼の女は青年のあとを追うて自殺を計つたがそれも果さず、テントの中にジツと寢たまゝ飲まず食はず、たゞ自然に生命の亡びる日を靜に待つて居た。

その時何處から現れたか一疋の猩々は、可憐なこの一女性を見つけて枕邊をはなれず、水を與へ、食物を運んで、いとも親切に介抱した。そして奇蹟のやうにエーデルの健康は次第に回復した。

荒野のテントに寂しく殘された若き美人と一疋の猩々——その間にはいつしか親しみの度を加へて來た。遂には半身毛だらけの男の子が生れた。かうして七年は夢の間にすぎた。この不思議な夫婦は、ふとした病から相次いでこの世を去つて了つた。



哀れにも殘された少年は毎日のやうに石を積み重ねてはその上に立ち、もしや隊商が通りはしないかとそれのみ待つて居た。天も此の少年に同情してか、幸ひにある日隊商に救はれて母の祖國モロッコに歸つた。

×　×　×　×

話變つて十九世紀の始めにモロッコ獨立運動の起きた時、その牛耳を執つて、十數年の間フランスを惱ませたエーデル・パシヤと呼ぶ勇敢な將軍があつた。

不思議な事に此の將軍は、全身非常に毛深く『毛の猛將』として恐れられた。

彼れこそは、アフリカの猩々と、モロッコ美人の間に生れた子供であると聞いたら、誰しも吃驚するであらう。

法師を殺した熟柿の話

甲賀三郎

承久の頃、京のある寺院へ強盗が多勢押し入つた。

寺院の方でも總出になつて、大變の立廻りが始まつた。中にも粗忽な一人の法師があつて、周章狼狽、弓矢を取つて庭に飛び出し、大いに應戰につとめてゐた。

ところがその時どうした機か、偶然法師の頭の上に、傍の柿の木からよく熟れた柿がポツタリ落つこつた。何せ柿は柔く熟れてゐたので、法師の頭に命中し、ぐにやぐにやに潰れて了つた。



法師は根が慌て者丈けに、此の一撃は、テツキリ自分が、敵方に射止められたと早合點した。それで弓矢を投げすて、頭に手をやつて見ると、赤い血の塊のやうなものがヌラ〳〵と手についてくる。何だか急に頭がヅキ〳〵痛むやうな氣持さへして來た。

法師はもうすつかり元氣が挫けて了ひ、ヨロ〳〵となつて背後の朋輩に向つて言つた。

『俺はやられた。いやといふ程頭を射られて、所詮助かりさうにもない。生きて苦しむより早く死んだ方がいゝ。どうか友達甲斐に介錯を頼む』

と首を差出した。朋輩は彼れが如何にも苦しさうな様子に、驚いて傷所と思はれる頭部に手を當てゝ見ると、成程ヌラヌラ氣味惡い感じは夜目にも血としか思はれない。

法師も法師なら朋輩も朋輩だ。何しろ慌てふためいてゐる際なので、朋輩はとんだ義侠心？を起し、双手に劍を揮つたと見る間に、紫電一閃！法師の首はポロリと落ちた。

騒動は鎭まつて夜が明けた。

朋輩達はみんな集つて氣の毒な法師を弔ふべく、その首を清水で洗ひ清めた。ところが不思議な事に、頭部には少しも傷所がない。身體の何處にも矢傷がない。朋輩達はハツとして顔を見合せ、暫し言葉が出なかつた。

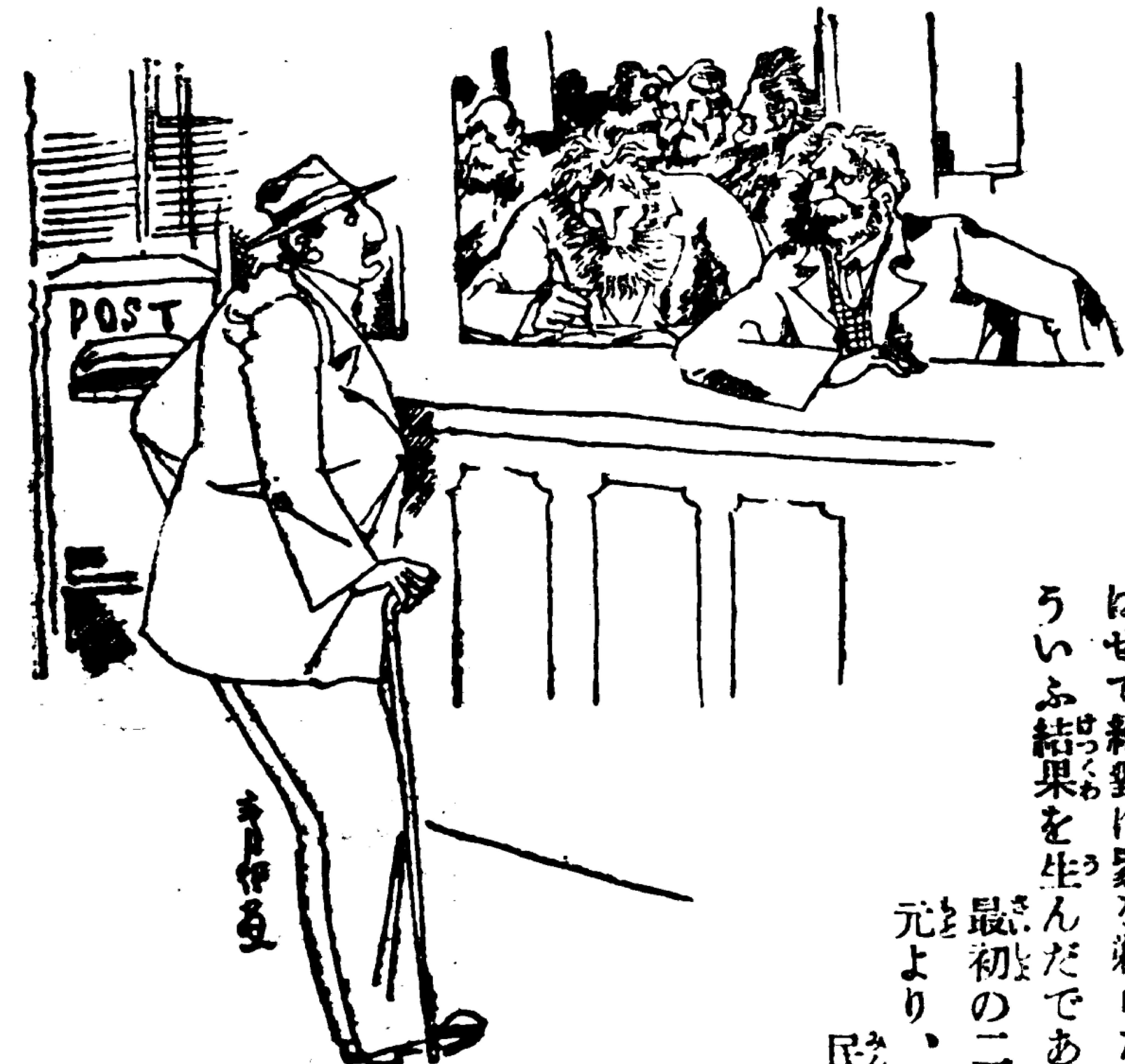
それにしても罪な熟柿である。

珍無類のストライキ

川上三太郎

リスアニアの或る郵便局で局員と局長との間に待遇問題で爭議が起つた。局長は迚も頑強で、局員の要求を片端から刎ねつけてしまつた。そこで當然局員の間に同盟罷業を決行する事になつたのである。

ところがその同盟罷業といふのが實に珍無類なのだ。勿論仕事をしない同盟とか、サボタージユとか、絕食同盟なンていふ有り觸れたのではない。彼等が敢行したのは意外も意外『髭を剃らないといふ同盟』であつた。局員一同が申し合はせて絕對に髭を剃らない——それが何ういふ結果を生んだであらうか。



最初の二三日は、局長は元より、窓口へ集まる市民たちも彼等にそんな計畫がある事は、一向氣がつかなかつた。

ところがその中フと見ると何となく局員が薄汚ない。無性たらしい。兎角するうちに局員といふ局員がみンな蓬々と髭ッ面になつて來た。局長は腹をたてゝ、

『諸君、髭を剃つて仕事をして呉れ給へ。それではお客に對して失禮ぢやないか』

斯う云つた時、彼等は聞いて聞かないふりをしてニヤリと笑つた。

その翌日出勤した局員を見ると、矢張り髭を剃つてゐない。局長が何と云つても彼等はテンデ相手にならず、默つて仕事丈けして行つた。さあかうなると益々髭ッ面はひどくなるばかりおしまひにはみんな山男みたいになつた。人々はたまりかねて局長に談じ込んだ。

『一體どうしたと云ふんだい。君の所の局員はみんな汚いぜ、どうも不愉快だ、何とか出來ないものかね』

局長はそこでやつと氣がついた。

『ハヽアやつたな』

流石の局長も我を折つて、苦笑しながら早速彼等の要求を容れ、この珍爭議の結末がついた。

法師を殺した熟柿の話

甲賀三郎

承久の頃、京のある寺院へ強盗が多勢押し入つた。寺院の方でも總出になつて、大變の立廻りが始まつた。中にも粗忽な一人の法師があつて、周章狼狽、弓矢を取つて庭に飛び出し、大いに應戰につとめてゐた。

ところがその時どうした機か、偶然法師の頭の上に、傍の柿の木からよく熟れた柿がポッタリ落つこつた。何せ柿は柔く熟れてゐたので、法師の頭に命中し、ぐにやぐにやに潰れて了つた。



法師は根が慌て者丈けに、此の一撃は、テッキリ自分が、敵方に射止められたと早合點した。それで弓矢を投げすて、頭に手をやつて見ると、赤い血の塊のやうなものがヌラヌラと手についてくる。何だか急に頭がヅキヅキ痛むやうな氣持さへして來た。法師はもうすつかり元氣が挫けて了ひ、ヨロヨロとなつて背後の朋輩に向つて言つた。

『俺はやられた。いやといふ程頭を射られて、所詮助かりさうにもない。生きて苦しむより早く死んだ方がいゝ。どうか友達甲斐に介錯を頼む』と首を差出した。朋輩は彼れが如何にも苦しさうな樣子に、驚いて傷所と思はれる頭部に手を當てゝ見ると、成程ヌラヌラ氣味惡い感じは夜目にも血としか思はれない。

法師も法師なら朋輩も朋輩だ。何しろ慌てふためいてゐる際なので、朋輩はとんだ義侠心？を起し、双手に劍を握つたと見る間に、紫電一閃！法師の首はポロリと落ちた。

騷動は鎭まつて夜が明けた。朋輩達はみんな集つて氣の毒な法師を弔ふべく、その首を清水で洗ひ清めた。ところが不思議な事に、頭部には少しも傷所がない。身體の何處にも矢傷がない。朋輩達はハッとして顏を見合せ、暫し言葉が出なかつた。

それにしても罪な熟柿である。

七百尺に地底に大都會

佐々木斬風

地底に大都會あり——

と云へばそれは本當か？と誰でも疑ふことであらう。無論それは日本の事ではない。ルーマニアの東ガリシアを旅したものは、その嘘のやうな事實を、眼のあたり見る事が出來る。

ガリシアの連峰が深い緑に包まれて、油繪のやうに美しいある年の初夏であつた。私はウヰリカの山中に赴き、そこの輕便鐵道に乘つて、地底のトンネルへと入つた。

そして七百尺の地底に達したと思ふと、忽然！眼の前には立派な一大都市があるではないか！私はあいた口が塞がらなかつた。

此處は千四五百年前まで、岩鹽の洞窟として蠻民の棲家であつた。その後、ローマでは、岩鹽採掘のため囚人を使つて次第々々に掘り廣げ、今では周圍數哩といふ素敵もない廣場となつた。そこに出來たのが、この地底の大都會である。

立派な街路の兩側には堂々たる商店、銀行、病院、教會、活動寫眞館などが軒を並べ、その上スポーツに血を湧かす廣い運動場迄設備されてゐる。

それればかりでなく、舞踏場と賭博場は實に絢爛眼も眩むやうである。部屋部屋には岩鹽に灯された蠟燭が美しい光を放ち、さながら龍宮を偲ばせてゐる。



この都で一番賑かなのは、何と云つてもお祭である。様々の餘興や催し物のある事は勿論であるが、一種變つた情調がある。美しく晴着を着飾つた女達が、首に花輪をつけ、手に酒瓶を下げて、街頭に行きあふ人毎に誰れ彼れの區別なく、『まあ一ぱい召上れ』とばかり酒を振舞つてゐるのも面白い。

かうして一萬五千の市民は、物語にあるやうな極樂境をつくり、地底に幸福な生活を續けてゐる。

戀から得た大金鑛の秘密

布利秋

若き探險家マルセドは、疲勞と飢餓のために、ドッカとばかり自分の五體を夕闇の大地に投げ出した。彼れの頰を傳ふものは、たゞ悲しみの涙丈けであつた。

その時である。フト前方の森の中に、ちらつく灯を見出した。

『アツ俺は甦つた！』彼れはガバと跳ね起きて、一目散に灯の方へと驅出した。

マルセドは金鑛發見の夢想に燃えながら、幾日も幾日も人跡未踏のシエラ・ネバダ山中の密林に彷つてゐたのであつた。今彼れは灯を見つけ、蘇生の思ひで走り寄つたのである。

だがそこには思はぬ不幸が彼れを待つて居た。その灯こそ狂暴恐るべき蠻族、アメリカ・インデアンの焚いてゐた灯であつた。救けを求めに來た若いマルセドは、却つて捕虜となつて樹の根に縛りつけられた。そして彼れの首には、獰猛なる土人の刃が擬せられたのである。

その一刹那、刃を遮つて現れたのは一人の愛らしき土人の娘であつた。彼の女はマルセドを助けるため、自分の身を犠牲にして哀訴嘆願した。その甲斐あつてか、漸く彼れは危機より脱することが出來た。しかしその日から土人の嚴重なる監視の中に激しい勞働をせねばならなかつた。ところがマルセドに對する娘の同情は忽ち戀と變つて行つた。

彼は詮方なく戀の捕虜となつて空しく滿二ケ年を山中にすごした。いつしか彼れは土人の言葉を覺えるにつけ、土人の護る黄金の秘密を看破する事が出來た。今迄幾十幾百の探險家がいづれも失敗した大金鑛の發見は、土人の戀を得たマルセドによつてなされたのである。

掘れば掘る程出る無盡藏の黄金は、全世界の金相場を狂はせるばかりであつた。彼れは一躍大富豪となつた。



かの世界一の溪谷ヨセミテ・バレーを流るゝ川は、この奇しき探險家マルセドを記念する爲に、マルセド川と呼ばれてゐる。この嘘のやうなロマンチックの物語は今から約七十年前の出來事である。

七百尺に地底に大都會

佐々木斬風

地底に大都會あり――

と云へばそれは本當か？　と誰でも疑ふことであらう。無論それは日本の事ではない。ルーマニアの東ガリシアを旅したものは、その噓のやうな事實を、眼のあたり見る事が出來る。

ガリシアの連峰が深い緑に包まれて、油繪のやうに美しいある年の初夏であつた。私はウヰリカの山中に赴き、そこの輕便鐵道に乘つて、地底のトンネルへと入つた。

そして七百尺の地底に達したと思ふと、忽然！　眼の前には立派な一大都市があるではないか！　私はあいた口が塞がらなかつた。

此處は千四五百年前まで、岩鹽の洞窟として蠻民の棲家であつた。その後、ローマでは、岩鹽採掘のため囚人を使つて次第々々に掘り廣げ、今では周圍數哩といふ素敵もない廣場となつた。そこに出來たのが、この地底の大都會である。

立派な街路の兩側には堂々たる商店、銀行、病院、教會、活動寫眞館などが軒を並べ、その上スポーツに血を湧かす廣い運動場迄設備されてゐる。

そればかりでなく、舞踏場と賭博場は實に絢爛眼も眩むやうである。部屋部屋には岩鹽に灯された蠟燭が美しい光を放ち、さながら龍宮を偲ばせてゐる。



この都で一番賑かなのは、何と云つてもお祭である。様々の餘興や催し物のある事は勿論であるが、一種變つた情調がある。美しく晴着を着飾つた女達が、首に花輪をつけ、手に酒瓶を下げて、街頭に行きあふ人毎に誰れ彼れの區別なく、『まあ一ぱい召上れ』とばかり酒を振舞つてゐるのも面白い。

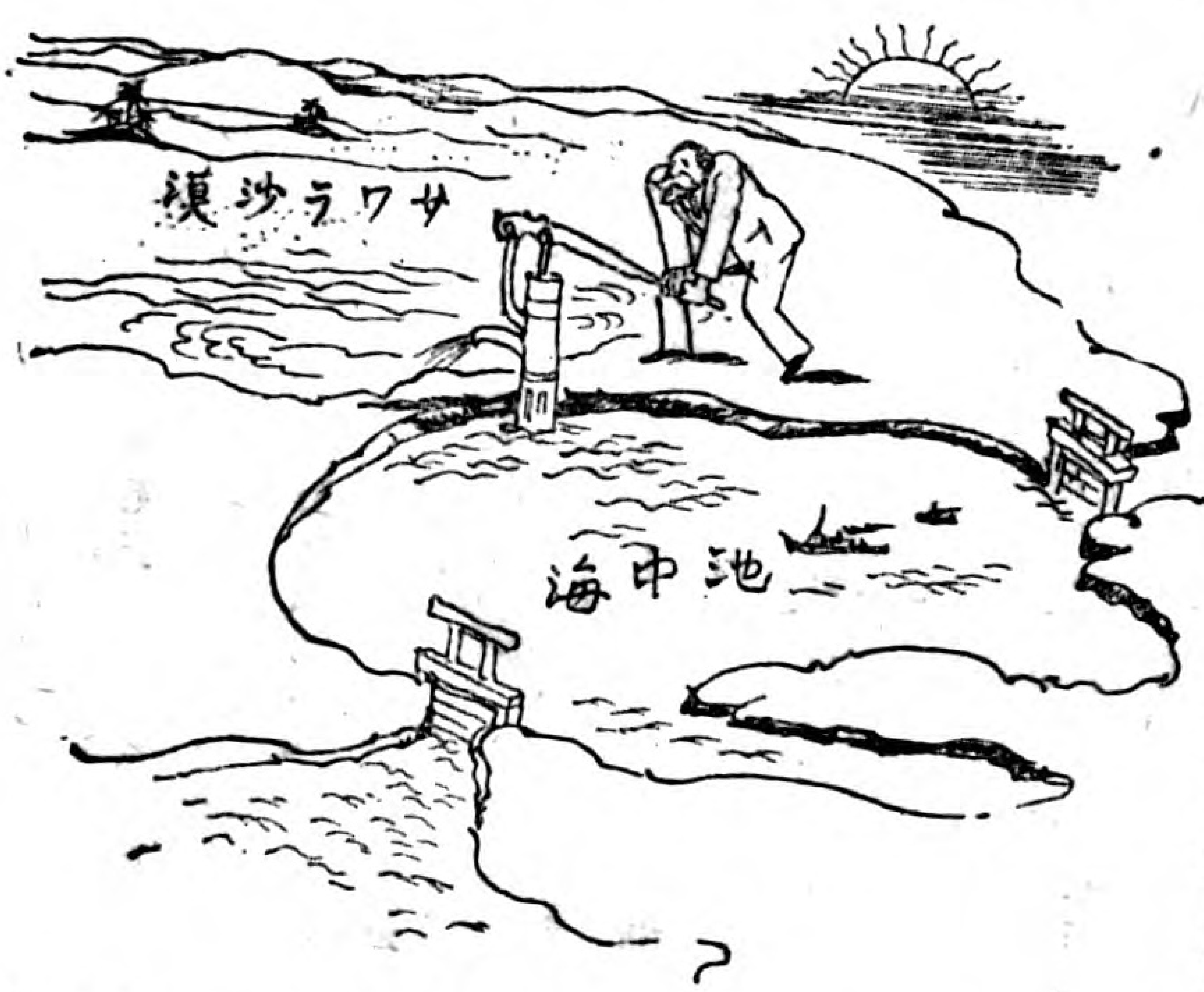
かうして一萬五千の市民は、物語にあるやうな極樂境をつくり、地底に幸福な生活を續けてゐる。

サハラ沙漠を綠の野に

南國太郎

何が途方もないといつて、アフリカの殆んど大部分を占めて居るともいひたいサハラの大沙漠を、花咲き鳥歌ふ綠の野にし、その代りに地中海の鹹水を乾して、河から流れ込む淡水だけの湖にしようといふ計畫ぐらゐ、途方もない、それも事實談はあるまい。

マルセイユに居て、四年越しこの計畫に沒頭し、どうやら青寫眞に出來るまでに進めた佛蘭西技師（前世紀に、初めてスエズ運河開鑿計畫を發表して、世界を驚かしたのも、佛蘭西技師レセップス氏だつた）の、大眞面目に語るところを聞くと斯うだ——



地中海の面積二百五十萬平方キロ、二つの關門ジブラルタルとダーダネルス海峽に防水壁を造り、大西洋と黒海の水が流れ込まなくした上で、アフリカ海岸に途方もないポンプを据ゑつけ、四萬立方キロだけの水をサハラ沙漠へ流し込む。

すると地中海の水は五百乃至六百呎減じ、佛蘭西と伊太利だけでも四十三萬平方哩の地域を増す勘定になる。だからシシリーやコルシカ島などへは自動車で行ける事になる。

一方サハラの方は、これだけの水によつて、二十年以内に沙漠の半分は沃野に變る。何しろ日本の何十倍だか何百倍だか解らぬ廣大な面積が、花咲き鳥歌ふ沃野になつたとすると、ケチな植民問題などは忽ち解決が出來るわけだ。

但し、さうなると困るのは、有名な水の都ヴエニスや南歐一の海港マルセイユなどであらう。陸地の廣くなるのもよいが、水あつてのヴエニスであり、水あつてのマルセイユだ。それが地中湖岸から三十哩も奥の、詰らぬ町になつて了ふといふのである。

面白いのはこの技師連、『計畫は立派に實現性を持つてゐるが、どうも歐洲諸國の政府が、いざとなると反對するだらう、それが心配だテ』と、頭を惱して居るさうだ。

何しても世の中には途方もない計畫があつたものだ。

甦へつた死刑囚

吉川三郎

ヘール大學のジャンカー博士は解剖生理を專門にやつてゐたので、研究用の死體がいつも一つや二つ家のうちに置いてあつた。

或る夜、卓に向つて調べ物をしてゐると、ごそごそ物音がし出した。『はて、何だらう』

ところが、その物音はどうやら足音であるらしい。『誰か』と聲をかける間もなく、すうと扉があいて何だかなまぐさい匂ひと一緒に黒い影がはいつて來た。と、ふつと火が消えた。黒い影は次第に博士に近づき、突然、



『先生！』と呼びかけた。

『お前は……』博士は吃驚してあとがつづかなかつた。

『私は死刑囚です』

『えつ！』

『今日運んで來られた死刑囚です。縊り殺されたのですが、十分締めつけられなかつたと見えて息を吹き返しました。先生、どうぞ私を助けて下さい』

死刑囚は博士の手にすがりついた。その冷たいことと云つたら。博士はぶる／＼つと顫へ上つた。

『どうぞ、お助け下さい』

二度目の聲でどうやら博士は落着を取返した。火を點して見ると、死刑囚といふのはやつと二十歳を越した位の若者であつた。よく事情を聞いて見ると犯した罪もふとした過失らしく十分同情すべきものであつた。だが何しろ相手は死刑囚の事である。

『サテどうしたものだらう』博士は一寸迷つたが、窮鳥懷中に入れば獵師も射ずの譬で、斷然意を決して助けてやらうと考へた。

そこで家族の目を覺さぬやう、死刑囚の白い服を脱がせて自分の物を與へ若干の旅費を惠んだ。そして自分の從者に仕立て難なく街を脱け出させてやつた。

それから十二年はすぎ去つた。

博士は用事があつてアムステルダムに行つた。と一人の立派な紳士によび止められその家に招待された。紳士はアムステルダム切つての實業家であつた。

『私は十二年前』紳士は涙と共に博士の手をしつかりと握つて云つた。

『あなたに救うて頂いたあの死刑囚です』

洒落た椋鳥（スターリング）

本地正輝

獨逸スワビアの田舎の床屋が、ハンゼルと名づけた一羽の椋鳥を飼つてゐた。この椋鳥先生、床屋の仕込みで、鸚鵡のやうに人語をしやべつた。就中、得意なのが次の三つであつた。

『へえ〳〵、手前はセグリンゲンの床屋でございます。』（註、セグリンゲンはその村の名）

『お情をもちまして……』

『何しろ、惡友のせゐでね、へへへへ。』

それでお客樣にも愛され、村中の人氣ものであつた。

この人語をしやべるハンゼル君、ある秋の日、ふと、籠から飛びだして空高く舞ひ上つた。そして、霞網で、それこそ文字通り、椋鳥ごさんなれと、椋鳥を捕へてゐた獵夫の網に首をつつこんだ

そら來た！　とばかり獵夫が網に近よつて、首をつかむと、これがただの椋鳥ではなくて、ハンゼル君だつたから、いきなり、しやべつた。

『へえ〳〵、手前はセグリンゲンの床屋でございます。』

『あつ！』

と驚いた獵夫、うつかり椋鳥の首を手ばなすところだつたが、もともと、ハンゼル君の評判は近郷近在に知れわたつてゐたので、はゝあ、例の床屋の飼鳥だなと氣づいて、

『おい、びつくりさせやがるな、お前ハンゼルぢやないか、どうして飛びだしたのだ？』

『何しろ、惡友のせゐでね、へへへへ。』

『ちよつ、笑はせやがる！　惡友のせゐでねか、フツ――どうだ、床屋へつれてつてやらうか？』

すると、ハンゼル君すましたもので、答へて曰く、『お情をもちまして――』

からなるとまるで落語を地で行つてるやうだが、立派に事實譚として獨逸のヨハン・ピーター・ヘベル氏の著に記載されてある話だ。



村中を埋めた短劍の雨

大泉黒石



太平洋の浪打ちよせる牡鹿半島の靜かな小村では、夜漁に出かける仕度とゝのひ、何處の家も夕餉の膳についてゐた。

『やあ。大變だツ。みんな戸外へ出て見ろ。』

折から、かういつて觸れ歩く者の消魂しい聲。驚破何事かと、漁師たちは箸を投げ出して戸外へ飛び出した。

『何だ？　何だ？』

『あの沖を見ろッ。』

なるほど沖合ひを見れば、怪しい黒雲が湧き起り、次第に空一ぱいに廣がつて行く。

經驗家の漁師たちは、今が今迄こんな暴風雨にならうとは夢にも思はなかつたので、意外のあまりに、たゞ呆氣にとられてゐた。と見る間に黒い雲は猛烈な勢ひで空を蔽ひ、四邊が眞つ暗くなつたと思ふと、頭の上から怖ろしい音を立てゝ降つて來たものがある。

雨か？　雪か？　霙か？　雹か？

否々それは青白く光る短劍のやうなものであつた。それが一頻り降つたと思ふとパッタリ止んで、空は又もとのやうにカラリと晴れた。

夢から醒めたやうな氣持で四邊を見まはした時、漁師たちの眼にうつつたものは意外々々！　屋根と云はず、道路と云はず、足の踏みどころもない程村一ぱい鰯で埋つてゐる。降つたのは短劍でなくて鰯の雨だつた！

『こいつあ不思議だ。』

『一體どうしたといふんだらう？』

嘗て見たことも聞いたこともない此の奇蹟に、漁師たちは大騷ぎを演じた事は無論である。

これは鯨に追はれた鰯の大群が、一所に集まつて、身動きもならぬほど押合ひ犇めいてゐる時、突然暴風が來たと思ふと氣流の加減で旋風に變り、大きな龍卷を起して、鰯の大群を空中に卷き上げたのだ。

その時急に風向が變つて、鰯はそのまま陸へ運ばれたのである。

此の村では陸にゐながらの大漁はこれが始めてとばかり早速大祝をした。

世界一の贅澤な宴會

植原路郎

世界の歴史始まつて以來、思ひ切つた贅澤の宴會を催したのは、何といつても ローマの全盛時代と、それから十六世紀頃のフランスやイタリーなどでありませう。

支那でも酒池肉林などいふ言葉のある通り、殷の紂王などは隨分馬鹿々々しい騷ぎをやつたと傳へられてゐます。しかもかうした豪奢と享樂に耽つた國が、みんな衰へたことは、誰も知つてゐる通りです。

さて、十六世紀當時のイタリーの宴會はどんな風かと申しますと、先づ主客一同が食卓について、文字通り山海の珍味を食べつくし、やがてそれが終つてイザ一服といふ時分に、心も天外に飛ぶやうな妙なる音樂が始まります。

すると大皿の上に、六尺以上もあらうといふ素晴らしい大鮪が乘せられ、それに七八歳の美しい少年が腰をかけ、立琴を奏でながらしづ〳〵と大卓の上に運ばれます。

賓客はたゞもう夢中になつて拍手喝采。

するとその夜の主賓は、前におかれた銀製のナイフを取つて、鮪の腹を裂きます。鮪には豫め一オンス何百圓といふ高價な香水がふりかけられてゐますから、生臭くも何ともありません。

扨て裂かれた鮪の腹から何が出ると御考へになります？　腸でもなければ、胃袋でもありません。



それは可愛い鳩です。澤山の鳩が鮪の腹から一時にパッと飛出します。しかもどの鳩も片方の足には、眼も眩ゆい寶石を結びつけ、他の一方にはその寶石を贈られる人の名札が結びつけてあります。

サアそこで來賓は總立となり、右往左往我を忘れて、飛び立つ鳩の群を部屋中追ひ廻すといふ大變な騷ぎ。

運よく自分の名札のついた鳩を捕へれば幸運の兆として大喜び、他人のを捕へれば、その名札の人に渡すといふ趣向。

この寶石は主人が來賓一同に贈るその夜のお土産で、ルビーとかサファイアとか眞珠とかその値段もどの位になるか一寸見當がつかない程だとは、何とすばらしいではありませんか。



日本學界の誇り

第一線に立つ諸博士の發表

日本人の遺傳

理學博士　駒井卓



近來遺傳學が餘程進歩し、その結果外國では實地に應用されて、惡い素質を持つてゐる人は其結婚を禁じたり、或は去勢を行つたりしてゐる。日本でも早晩こんな事が實行されるに相違ない。その準備としては、外國人と赴きを異にしてゐる日本人は、日本人だけに就て、どう云ふ素質がどれ程擴がつてゐるか、どの病氣なり缺陷なりはどう云ふ風に子孫に傳へられて行くかといふ事を明かにしておかなければならぬ。

私はこの問題に興味を持つて材料を集めつつある。

生きたものを食へ

醫學博士　二木謙三



人體には本來自然の抵抗力がある。之を保全する事を努めたならば人體に病なく天壽は皆百歲であるのだ。抵抗を害する主なる原因として、皮膚を外界に觸れしめずして之を弱め、運動不足で筋骨を弱め、食物の選擇を誤り且つ咀嚼せず美食大食して胃腸を弱める事等を擧げることが出來る。

次に玄米の奬勵であるが、白米その他食物の變質したものは既に死せるもので有害有毒である。唯玄米、玄麥、果物等の如く何時でも發芽し得るもの即ち生きたものを常用すると、人體の活力增進し無病長壽で如何なる願望も正しく遂げらるゝものである。

私は之等に就て常に研究を進めてゐる。

渦の研究

工學博士　伊原貞敏



日常見らるゝ現象の中で、吾々が用ふる洗面所の流しの隅で音を立てゝ水が吸ひ込まれる際の流れには渦卷を伴ふ。水を棒で掻き廻す時の手元の振れや、煙突から立ち昇る煙の搖ぎ等は渦の行列に由るものと説明が出來る。又飛行機の翼、飛行船の氣囊、水力タービンの羽根車などの形態は、如何にして最も工合よく空氣や水を流すかにその苦心がある。

水又は空氣の運動に伴ふ渦が私の研究題目の一つです。

腦黴毒

醫學博士　植松七九郎



腦黴毒性疾患殊に麻痺性癡呆症は不治のみならずこの罹病者は癈人同様となり、遂に死に到る。その適確な療法は永い間發見されなかつたのであるが、一九一七年ウヰンナのワグネル教授が、この患者の多數を治癒せしめる新療法即ちマラリア療法なるものを發見した。我國でもこの療法を用ひて相當好成績を擧げてゐる。

毒素の本體

醫學博士　細谷省吾



各種の病原細菌は、各々特殊の毒素を有し、驚く程の微量に依りても人間又は實驗動物に、特有な疾病を起し死に至らしめるのである。例へばヂフテリア菌はヂフテリア毒素を、破傷風菌は破傷風毒素を、赤痢菌は赤痢毒素を形成して、ヂフテリア、破傷風、赤痢に罹患せしめる。而して細菌の毒素の本體は今の所全く不明である。

吾々は數年來この毒素の本體如何と云ふ難問の研究に沒頭してゐるのである。

ヂフテリアの免疫法

醫學博士　肥田音市



ヂフテリアに關しては、此數年來著しき進歩にて幾多業績頻出の有様であります。その主なるものは、新豫防法としてシックテストにより感染危險ある人と不感性の人とを區別し、感受性の人のみを選び、自働免疫法を行ひその人を免疫とすることが出來ます。

私共はヂフテリア血清製造の傍ら免疫學や血清學の立場から種々なる豫防法を研究もし實地に行ひもして居ります。

トリメの研究

醫學博士　川上理一

トリメは學術上夜盲症と云ひ、夜は大に不自由で暗い道など歩くことが出來ない眼病である。其の一種小口氏病と云ふのがある。これは明治四十年現愛知醫科大學教授小口忠太博士によつて始めて發見せられたものである。高木六郎博士及び私は大正十一年以來、小口氏病の本態に就て研究して居るが、現在の所最も信ずべき學説を提出して居る。本病は日本人に多い許りでなく、視覺生理學に於て甚だ大切なもの故、學界に於ける興味の中心になつてゐる。



癌腫と結核

醫學博士　向井又吉



余の研究題目は、『癌腫と結核の診斷並に治療法』で終始一貫して居る。自己の專門の關係上「レントゲン線」應用の範圍内で研究を續けて居る。例へば、直接に視觸し得ない内臟癌に對し、治療可能の早期に確診を下すやうにし、治療に於ても從來の手術治療より安全で有效な放射治療を研究してゐる。また結核に對し

ては、肺結核の早期診斷や、外科的結核並に肺結核に於ける光線療法の完成に努めてゐる。何れにしてもこれらには今尚多くの「テーマ」が殘されてゐる。

ホルモンの效果

醫學博士 岩田正道



膵臟の刺戟素即ち「インスリン」を抽出し得た事は近來の大業績の一であつて之に依て糖尿病患者の治療上に一大福音を與へたのみならず、近頃は之が產婦人科の治療に用ひらるゝに至り、然も多くは滿足すべき效果を收めてゐる。殊に從來有效な治療法のなかつた重症惡阻に對しては他の療法の及ばぬ著效がある。尚又早產兒の人工榮養上にも應用され相當の好結果を收めてゐるが、私はこれら醫治的效果に注意を拂ひつゝ研究の步を進めてゐる。

泥土で汚れた創傷

醫學博士 秦佐八郎



歐洲大戰時、泥土で汚された創傷の治療には昔の樣な制腐方法も必要な事を教へた。私は化學療法の立場から此種の藥品に興味を感じて、六年前から其研究を始めた。この研究は、今日まで未知の化學品を用ゐ在來品の上に出づべき消毒藥を發見する事を目的とするのである。

生藥の特效

藥學博士 朝比奈泰彥



古來藥と言へば草根木皮から採つたものを用ひたが、それは傳統的、經驗的に使はれるに過ぎず、其の成分の如きは全然明かにし得なかつた。而して維新後の日本では、西洋醫學の輸入から、化學的合成品が藥品の主要なるものとなつて、以前行はれた生藥は全で顧みられなくなつてしまつた。

然るに是等の生藥中には、非常なる有效成分の存することが判かり幾多の研究が發されてゐる。生藥研究の任務は、生藥中有效成分の化學的研究其他をなすことにある。

電氣の研究

工學博士 西健

名士の家庭と愛兒の讀物

名士教育家の家庭に、如何なる讀物が選擇せられてゐるかを、御參考迄に二三御知らせ申します。

東京高等女子師範學校教授 堀七藏先生



子供の讀物として、「幼年倶樂部」は大變面白いのみならず、子供に適した修養方面もあるので、適當なものと思ひ、毎號讀ませてゐます云々

富山師範附屬小學校主事 沖田精一郎先生

兒童の課外讀物として重要なる要素は兒童生活に即して正しい方向に指導すべき多方的陶冶を目標として如何にも明るい、豐な、高潔上品な、深みのある調和的趣きに富んだものでなければならぬと存じます。この點に於て「幼年倶樂部」は一冊の中に種々の尊い榮養を含むものと認めるから推奬したいのであります。

陸軍大將 本鄉房太郎先生



子供の讀物として、「幼年倶樂部は」面白く讀む間に不知不識もろ〳〵の知識を得る最良のものと信じて歡迎してゐます。小兒共も毎月發行の日を待ち兼ねて愛讀してゐます云々。



強電流電氣工學に於ける各種の研究問題の中で今後開拓の餘地が多いのは、蓋し高壓電氣絶縁に關するものであらう。目下吾々の研究中の問題は、空氣中に於ける放電現象、絶縁油の電氣的性質、固體絶縁材料の絶縁耐力並に他の電氣的性質、衝擊電壓に關する諸現象、その他高壓送電に關する事項である。多量の電力を長距離に送る爲には、經濟上電壓の高きを必要とするが故に、その實行の可能性を決定するは、高壓電氣絶縁の完全なりや否やに係る譯で、之が今日、この方面の研究が極めて緊急を要する所以である。

簡易複寫法

理學博士　飯盛里安



乾板の代りに印畫紙を取枠に收めて寫眞のカメラで撮影現像すると、明暗反對となり且左右が逆になつて出る之を種板から燒付けて作る普通の印畫と同じものに仕上げるには第一にレンズの前に反像鏡を取付けて撮影すること、第二に斯く露光した印畫を反轉現像すること、此二つの注意で濟むのである。理研反轉現像藥及反像鏡は此目的に作られたもので、書籍や圖畫等の複寫に之を應用すると乾板が不要であるから頗る經濟であります。

癌は治るか？

醫學博士　山極勝三郎



これ迄癌の發生には二說あつた。一は遺傳素因他は刺戟說であるが、身體の內外にある上皮組織に諸種理化學的刺戟が絶えず與へらるると、其部分の上皮細胞は漸次惡化して、遂に癌が發生すると云ふ刺戟說は今や癌の發生原因として實驗的に私共が證明する事が出來て古來不治の病として怖れられた癌も、傳染性寄生性の病でない事が明となり、漸く治療及豫防の方針も立つたのであるが、治療法としては今尙初期診斷を最も必要とし、外科手術、ラヂイユム、X線照射療法を最も確實有望と見るべきで、諸藥物療法、其他特殊療法（免疫——血淸療法等）等は未だ何れも奏效確實とは言はれず、私等の多年來研究の脾臟エキス注射療法も廿日鼠の乳癌には成功したが未だ人間の癌に應用するの運に至つてゐない。

大日本雄辯會講談社ニュース

感謝！　感激！

九大雜誌新年號の賣行

本社の九大雜誌新年號、お蔭樣で今迄にない偉い〱賣行でした、あの大部數が賣れる賣れる續々と賣れて行く其凄じさ、全國書店から追加又追加注文の電報引きも切らず、社長始め社員一同只ゝ感涙に咽んで居ります。『本當に世の爲め人の爲めを圖るのでなければ大成功はない』と同人一同、いよ〱之を確信、益ゝ努力奮鬪を期して居ります。

若槻全權に同行せる

秋元俊吉先生の特別寄稿

若槻軍縮會議全權附として渡英された、著名の英文學者秋元俊吉先生は、本社の爲め特に、軍縮會議其他の見聞記を始め、彼地名士學者の特別寄稿、出版界の種々の調査等を、續々御通信下さる事になりました。尚此の外、目下本社囑託として海外留學の方々に、後藤國吉、所司爾一氏等の諸先生があり、その熱心な御盡力によつて今後各誌は一段の光彩を放つことになりませう。御期待下さい。

大評判　大騷ぎ

三萬圓大懸賞

本社九大雜誌聯合の三萬圓大懸賞は、到る處の大評判となり、毎日運び込まれる投書の物凄さ、係員一同晝夜兼行で整理中です。あの素晴らしい賞品の數々、幸運は誰方に？　第二回〆切は二月三日です。第一回〆切に出した方も出さなかつた方も、今回はゼヒゼヒ御投書下さい。

朝野の大賛同を得た

『健全なる歌』の大募集

『明るい日本』を目指しての運動の一つとして、先づ流行歌を淨化すべく、小社の九雜誌に於て、尚又各地の新聞に於て、『健全なる歌』の大募集を發表するや、忽ち一世の視聽を集め、各方面より大賛成の聲起り『時節柄誠に結構の企てだ』とか『雜誌報國の名に背かない』とか、朝野の顯官名士を始め全國愛讀者の方々から、稱讚激賞を頂き、社内一同只々感激感謝致して居ります。必ず素晴しい名作が得られる事であります。明るい歌、勇ましい歌、望と力とを與ふる歌、愛と信と美に充ちた歌の流行も遠くはありますまい。〆切は一月二十日限りです。之からでも遲くはありません。御傑作をお待ち致します。

大塚警保局長

本社野間道場を御來訪

本社々長本邸の野間道場は、天下の名劍士、軍人、警察官、各學校教職員、學生等の來訪いよ〱繁くなつて參りました。十一月十二日には、警保局長大塚惟精氏來訪、少年部一同に對して猛烈な稽古をつけられ、なほ『武道修養の大眼目』と題して、武道の德を讃へた感激深いお話がありました。



大塚惟精氏

申込頻々來！『眞劍』宣傳ポスター

國難打開の爲め奮然蹶起して第一運動として天下に發表した本社の『眞劍宣傳』は、滿天下の非常なる共鳴の下に、各地愛讀者の皆樣よりも宣傳ポスターの申込日々殺到の有樣です、全く愉快です、感謝です。どうぞ此上とも親愛なる皆樣の御力に依つて、出來るだけ大勢の目に付く處へ、貼つて戴き、この擧によつて國難の打開と國運の興隆とに御奉公出來ます樣にと熱願して居ります。

一、ポスターは葉書を以て『本社眞劍宣傳係宛』枚數明記お申込を願ひます、お一人に附五十枚までお送り致します。

一、學校、會社、靑年團等の團體は、御希望に依り都合のつく限り可成多くお送り致すことに致します。



寫眞は「眞劍」宣傳ポスター

大日本史完成
―篤志家の爲特に分讓―

日本の爲です。御國の爲です。どうぞ此の事業の爲に特別の御後援を祈ります。

義公生誕三百年記念事業として、一昨年豫約募集を行つた大日本史は、今回全十七卷の刊行愈よ完了致しました。屢よ再募集をと熱望の向も多くなりましたが、此際篤志家に對し特にお分ちする事になりました。部數に限りがありますので、御申込順に依てお分ち致します。定價五拾圓送料（東京市内參拾錢內地二圓滿鮮、臺、樺四圓）御希望の方は一刻も早く御申込下さい。

九大雜誌年極讀者の著しい增加
―文化の爲喜ぶべき傾向―

近來本社九大雜誌の年極讀者が、目覺ましい增加を示して居りましたが、此の新年號に於て斷然大增加を來し、中には二年極、三年極と云ふ樣な、長年月の豫約讀者も現れましたのでその熱心に一同驚いて居ります。

之は世間一般が緊縮節約の美風に目覺めて金の使ひ方が上手になり、慰安と修養を兼ねた雜誌は何をおいてもと考へる樣になつた結果と思ひますが、一面文化の發達を裏書したもので、日本の爲慶ぶべき傾向と思ひます。

名籍快著續々出版
―本社出版部の大活躍―

小說『母』を始め『岡辰押切帳』『右門捕物帖』『エヂソン傳』『最後の舞踏』等々、名著十數種を發行して昭和四年度出版界第一の花々しき實行を示した本社出版部は、更に大飛躍を企て、種々計畫中ですが既に此の新春の讀物として、左の三大名著を提供致しました。

○山中峯太郎著　九條武子夫人　定價貳圓　送料拾貳錢

○下位春吉著　ムツソリニの獅子吼　定價壹圓八十錢　送料拾貳錢

○永井柳太郎氏大演說第二集　定價壹圓五拾錢　送料拾錢

尙引つゞき力作名著を精選出版の豫定です。



風雲天滿双紙

佐々木味津三
小田富彌畫

一 饑饉來

――平八郎が喝破したやうに、同じ山城守でも、前任の高井山城守と、後任の跡部山城守とは、雪と墨の相違があると言つたその二人の山城守の更迭は、汚魁弓削新左衛門が天誅されたその翌々日、豫定のごとくに行はれました。

新山城守の奉行所入りをしたのが朝の四ツ。半日隔たつた同じ日の夕六ツから、大川筋の水にのぞんだ料亭菊園で、去り行く前名奉行高井山城守のために、さゝやかな送別の宴が開かれました。たとへ意に染まぬ奉行であらうと、これから先その下役となつて働かねばならぬ直屬上官が赴任して來たとなつたら、世間普通の例から言つても、先づその方へ挨拶に行くのが事の順序ですが、元より平八郎ばかりは例外です。挨拶どころか、奉行所には顔すらも見せないで、定めのその暮れ六ツから、菊園の小宴に列なりました。――列席した者は大阪城代松平丹波守を筆頭に、中齋門下の逸材にして、且つ東町奉行配下の新進與力たる瀬田濟之助、同じく門人の同心吉見九郎右衛門と、同樣門人にして同心たる河合郷右衛門を加へてのたつた五人。

同氣相求むるその少數で、しんみりと隔てない別宴を張り、終つて平八郎が門人瀬田濟之助只いち人を伴ひ乍ら、お城代達と別れて歸路についたのは、かれこれもう二更に近い刻限でした。

道は、大川沿ひの夜露に濡れた一本道で、秋近い空には星が降るばかり。――それだけに勿論平八郎は、何から何までが只た感慨無量でした。いや、感慨無量と言ふのは當らない。平八郎

の心は、胸は、今、氷のやうに冷たく、そして玻璃鏡のやうに澄んでゐるのでした。肝胆相照らした名奉行高井山城守を失つたことは、己が心の一角を削り取られたも同然だつたからです。しかもその後任として、こののち己れを制御し、支配する奉行職として、新任したのは誰か――誰でもない！ 實に誰でもない！ 汚魁弓削新左衛門と同腹の跡部山城守なのです。やうやくにして弓削新左衛門の首級を舉げ得たと思つたら、その時はすでに同じ悪のつながりの第二の敵が現れてゐたのです。のみならずその敵は許しがたき手裏剣文を以つて挑戦したのでした。

『汝自らの墓穴を掘るやうなものぢや。平八郎とても容赦はせぬぞ！』

さう言つて不埓な挑戦をしたのでした。した以上、新たに現はれた敵が、奉行職の權力を楯にとり乍ら、今後、手を替へ、品を換へて脅迫するのは火を睹るよりも明らかなのです。それもいち人ではない！ 敵はひとりでないのだ！ うしろには、この第二の敵の跡部山城守の背後には、老中と言ふ絶大な權勢を備へた、肉親の水野越前守が、不氣味に黒い影を曳き乍ら控へてゐるのです。

どうして戰つたらいいか？ この容易ならぬ勁敵を對手に、どう言ふ戰法を用ひたらいいか？――

思案に胸を痛めてゐるとき、

『あツ。』

濟之助が突然聲をあげました。

『氣味がわるいではムりませぬか！ ひとりでに腰の物が鞘走りましてムりまするが、何としたものでムりませう！』

『名刀は夜泣きをすると言ふゆゑ、血を吸ひたうなつたやも知れぬぞ。』

囁き乍らさしかゝつたのは、天滿橋名うてのあの不氣味な闇絲柳の手前です。

と――よくぞ言つたり！ 血を求めて自ら鞘走るとは、よくも言つた言ひ傳へでした。さツと前面に、黒い影が動いたかと思ふと、

『平八郎！ 命を貰ふぞ！』

聲と一緒に、ずらずらと行く手を遮切つたは、一本！ 二本！ 三本！ 五本！ 夜目にもそれと知られる槍衾です。二階に抜き身の林がさらに六本！

『馬鹿者ッ。誰奴共ぢやッ。』

ぎよツとなつて、濟之助が身構へたのを、對手はまことに不埓！ 天誅された新左衛門配下の黒光刺客團でした。

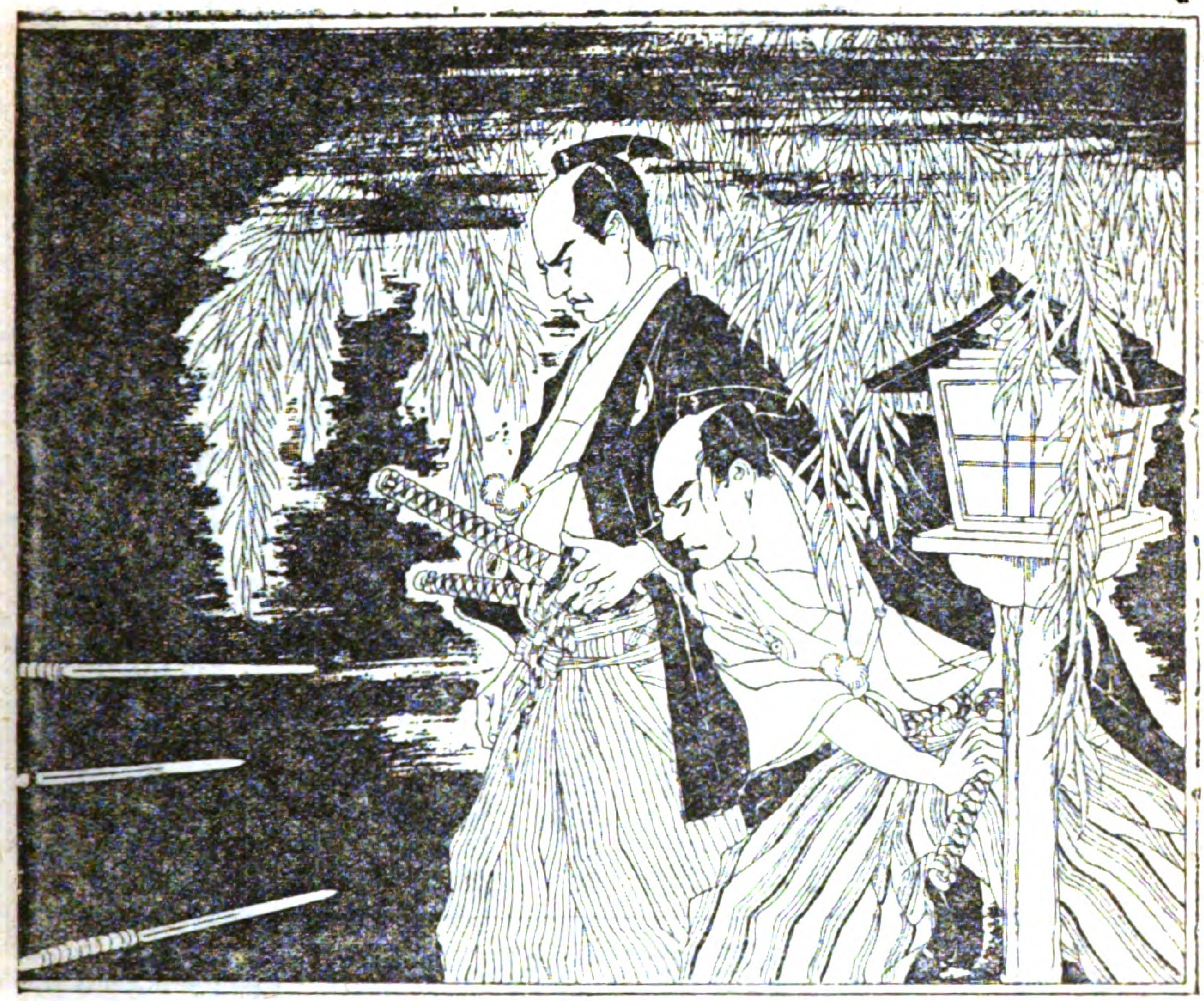
『弓削どのが弔ひ戰ぢや！ 今宵と言ふ今宵は逃がさぬぞ！』

おろかしい口論を弄し乍ら、左右に分れて、ひたひたと迫つて來たので、嚇怒したのは瀬田濟之助です。

『笑止な！ 先生、斬りますぞッ。』

『おう！ 許すッ。存分に血を吸はせろ！』

飛び出したかと思つた刹那！ どたりと闇の向ふで、たしか



にひとり、地にのめつた音がありました。聲もなく、叫びもなく、どちらが仕止められたか、皆目けぢめがつかなかつたので、平八郎は、はッと思ひ乍ら叫びました。

『瀬田！』

『……………』

『やつたか！　やられたか！』

『……………』

『濟之助！　濟之助！』

然るに聲がないのです。ないにも拘はらず、つゞいてまたどたりと、たしかにひとり、斬り棄てられた氣配があつたので、平八郎はさらに呼びつゞけました。

『瀬田はどこぢや！』

『……………』

『瀬田！　瀬田！』

だのに依然として濟之助の聲はない！　にも拘はらず、またいち人、ダッと血煙あげ乍ら、のけぞつた氣配でした。

しかもその劍氣の冴え！

太刀の捌きの鮮やかさ！

――本來濟之助は、劍よりも柔の居捕りが得意です。その濟之助にしては、いかにも鮮かすぎたので、もしや誰か知らぬまに助勢の者でもが馳せつけてくれたのではないかと、いぶかり乍ら平八郎は、ちッと闇を見すかしました。

の心は、胸は、今、氷のやうに冷たく、そして琅玕鏡のやうに澄んでゐるのでした。肝膽相照らした名奉行高井山城守を失つたことは、己が心の一角を削り取られたも同然だつたからです。しかもその後任として、このゝち己れを制御し、支配する奉行職として、新任したのは誰か――誰でもない！　實に誰でもない！　汚魁弓削新左衛門と同腹の跡部山城守なのです。やうやくにして弓削新左衛門の首級を擧げ得たと思つたら、その時はすでに同じ惡のつながりの第二の敵が現れてゐたのです。のみならずその敵は許しがたき手裏劍文を以つて挑戰したのでした。

『汝自らの墓穴を掘るやうなものぢや。平八郎とても容赦はせぬぞ！』

さう言つて不埒な挑戰をしたのでした。した以上、新たに現はれた敵が、奉行職の權力を楯にとり乍ら、今後、手を替へ、品を換へて壓迫するのは火を睹るよりも明らかなのです。それもいち人ではない！　敵はひとりでないのだ！　うしろには、その第二の敵の跡部山城守の背後には、老中と言ふ絶大な權勢に備へた、肉親の水野越前守が、不氣味に黒い影を曳き乍ら控へてゐるのです。

どうして戰つたらいいか？　この容易ならぬ勁敵を對手に、どう言ふ戰法を用ひたらいいか？――

思案に胸を痛めてゐるとき、

『あツ。』

淸之助が突然叫をあげました。

『氣味がわるいではムりませぬか！　ひとりでに腰の物が鞘走りましてムりまするが、何としたものでムりませう！』

『名刀は夜泣きをすると言ふゆゑ、血を吸ひたうなつたやも知れぬぞ。』

囁き乍らさしかゝつたのは、天滿橋名うてのあの不氣味な因縁柳の手前です。

と――よくぞ言つたり！　血を求めて自ら鞘走るとは、よくも言つた言ひ傳へでした。さツと前面に、黒い影が動いたかと思ふと、

『平八郎！　命を貰ふぞ！』

聲と一緒に、ずらずらと行く手を遮切つたは、一本！　二本！　三本！　五本！　夜目にもそれと知られる槍衾です。二陣に抜き身の林がさらに六本！

『馬鹿者ツ。誰奴共おやツ。』

ぎよツとなつて、淸之助が身構へたのを、對手はまことに不埒！

天誅された新左衛門配下の黒光刺客團でした。

『弓削どのが弔ひ戰ぢや！　今宵と言ふ今宵は逃がさぬぞ！』

おろかしい吝鬪を弄し乍ら、左右に分れて、ひたひたと迫つて來たので、嚇怒したのは瀨川淸之助です。

『笑止な！　先生、斬りますぞツ。』

『おう！　許すツ。存分に血を吸はせろ！』

飛び出したかと思つた刹那！　どたりと闇の向ふで、たしか



にひとり、地にのめつた音がありました。聲もなく、叫びもなく、どちらが仕止められたか、皆目けぢめがつかなかつたので、平八郎は、はッと思ひ乍ら叫びました。

『瀬田！』

『…………』

『やつたか！　やられたか！』

『…………』

『濟之助！　濟之助！』

然るに聲がないのです。ないにも拘はらず、つゞいてまたどたりと、たしかにひとり、斬り棄てられた氣配があつたので、平八郎はさらに呼びつゞけました。

『瀬田はどこぢや！』

『…………』

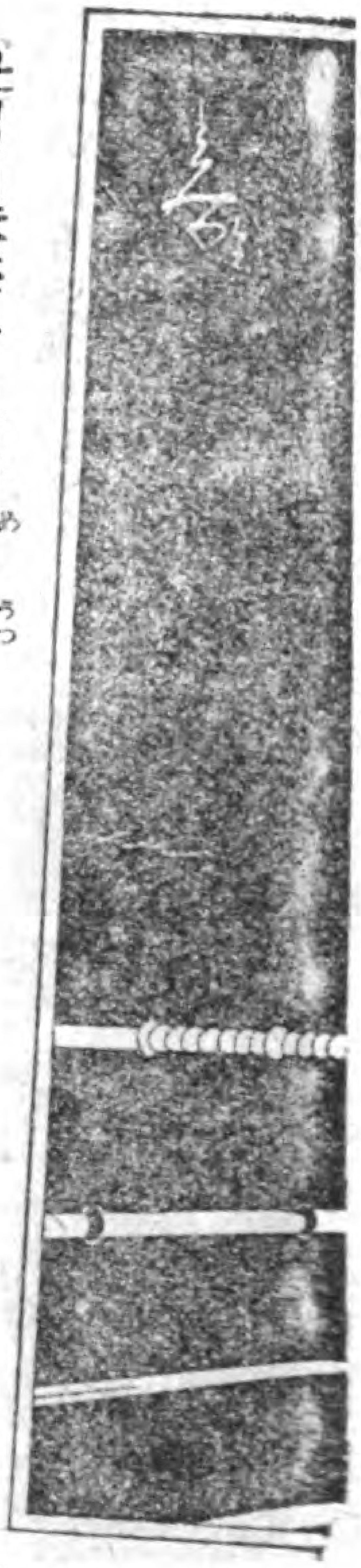
『瀬田！　瀬田！』

だのに依然として濟之助の聲はない！　にも拘はらず、またいち人、ダッと血煙あげ乍ら、のけぞつた氣配でした。

しかもその劍氣の冴え！

太刀の捌きの鮮やかさ！

――本來濟之助は、劍よりも柔の居捕りが得意です。その濟之助にしては、いかにも鮮かすぎたので、もしや誰か知らぬまに助勢の者でもが馳せつけてくれたのではないかと、いぶかり乍ら平八郎は、ちッと闇を見すかしました。



と――まさしくその目に映つたのは、いつのまにどこから降つて湧いたのか、武者姿した旅裝束のいち人です。

『どなたぢや！』

『………』

『お助太刀下さるはいづれの御仁ぢや！』

しかし謎の旅武者は、呼び叫んだ平八郎の方へは答へないで、その時またひとりを、すいと見事に斬つてすてると、餘裕綽々として言ひました。

『これで四人か！』

言ふまにまたいち人をのけぞらすと、カンカラと打笑ひ乍ら言ひました。

『太いぞ！ 太いぞ！ その生くら腕で、大鹽中齋に挑みかゝるとは了見が太いぞ！』

言ひ乍らさらにひとり。そして言ふのでした。

『今宵は曲斬りの月ノ輪斬りと言ふ奴を致して遣はさう！――そら！ どうぢや。見たかッ。』

斬つてすてゝ、返へす刀に次のひとりを右へぱつさり。そしていと綽々と言ひました。

『これで七人か！ 用のある身體ゆゑ、急いだ！ 急いだ！お次はどれぢや！』

しかし、そのお次の者達は、全くもう韋駄天に散つて行くところでした。それを追ひもせずに、シュツ、シュツ、と血しぶきを切り乍ら、悠々とした體の捌き、動ぜず、迫らぬ身のこなし、餘程名うての劍豪と思はれたので、平八郎はいぶかり乍ら近づくと、その姿を見すかしつつ、禮を厚うして呼びかけました。

『御助太刀、重疊に仏る。いづれのお方に仏りまするか。』

と――對手は靜かに强刀を鞘に納め乍ら、事もなげに言つたものです。

『他人行儀はおよし召されよ。手前ぢや。手前ぢや。』

『………？』

『お分りでムらぬか。齋藤ぢや。江戸の齋藤彌九郎ぢや。』

『おう！』

平八郎の聲も冴えました。

『さうでムつたか！ 練兵館の大人でムつたか！ それにしても瀨田のゐぬが不思議。――濟之助！ 濟之助』

『………』

『瀨田はどこぢや！ 息災か！』

『はつ。こゝでムります。』

『何ぢや。柳の影なぞにぼんやり致して、何としたのぢや。』

『あまりお見事でムりましたゆゑ、見惚れてゐたのでムります。』

――當然なことでした。救ひぬしの劍客が齋藤彌九郎ならば、瀬田濟之助が呆然と見惚れたのは實に當然なことでした。お玉ケ池の先生で鳴りひゞいた北辰一刀流の千葉周作、蜊河岸の先生と言ふ異名で通つた鏡心明智流の桃ノ井春三、そしてこの練兵館の齋藤彌九郎こそは、知る人ぞ知る幕末の三劍客として一世に謳はれた大名人だつたからです。

　しかし問題は、救ひ主が齋藤彌九郎だつたことに對する驚きではない。天下に名だたる神道無念流のその達人が、どうしてまたこの夜ふけにここを通りかゝつたかの不審です。意外よりもその奇遇が、平八郎の胸を強く打つたので、いぶかり怪しみ乍らきゝ尋ねました。

『異なところでまたお目にかゝつたものぢやが、こちらへはいつお越しぢや。』

『たつた今ぢや。』

『おひとりか。』

『と申したいが、實は二人ぢや。』

　磊落に言ひすてると、

『おうい。おうい。』

　いかにも彌九郎は劍客らしい豪快さでふり返り乍ら、橋の向ふへ合圖の手をあげました。と一緒のやうに、闇の中から、ぽつかり浮き出て來たのは、同じ旅裝束の由緒ありげないち人です。――旅侍は、親しげに平八郎のところへ近づくと、親しげに呼びかけました。



『中齋どの、一別以來でムる。伊豆の太郎左衛門ぢや。』

『おう！　韮山の先生でムつたか！』いかで驚かずにゐられませう！　現はれた客人は、伊豆韮山の代官江川太郎左衛門だつたのです。――太郎左衛門は號を坦庵、歴代打ちつゞいた權門に生れ乍ら、夙に天下の大勢を察して、辛苦に辛苦を重ねつゝ洋式兵砲學を身に修め、つひに江川流の砲術を創始した一代の風雲兒でした。平八郎とは十年來の舊知。その太郎左衛門と彌九郎とはまた幼時より交誼厚く、さうして一世の砲術家と、一代の劍客と、蓋世の名與力との三人は、坦庵を中心に、左右へ分れた兩の翼のやうな關係を作つて、早くから肝膽相照らし合つた盟友同志なのでした。

　讀者諸氏もまた想ひ見よ！――三巨星が計らずも相會した劇的なその光景を想ひ見よ！　劍聖、砲術家、天滿の棟領と、いづれ劣らぬ一代の風雲兒達が、かく奇遇を遂げた以上、このまゝに何の風雲も起きないで終る筈はないのです。平八郎も

また愈ゝ不審に打たれたのでいつになく色めき立ち乍らきき尋ねました。

『見れば御兩所共にお微び姿のやうぢやが、誰を訪ねての御下阪ぢや。』

『誰でもない御貴殿ぢや。』

『なに！　この平八郎をとな！　ふうむ、左樣か。お歴歴の御兩所がわざわざ御越しとあるからには、定めし容易ならぬ御用ばしあつてのことでムらう。——瀨田！瀨田！』

さすがは平八郎です。いづれは何ぞ密々の用向であらうと察したので、濟之助に命じました。

『早う屋敷に歸つて、門人共に兩先生をお迎へ申上げるやう、準備させい！』

二

瀨田の指圖で、塾生總動員のもとに準備を整へたと見え、ひと足おくれて三人が洗心洞に行きついた時は、式臺際から奥書院までずツと大廊下の左右に、あかあかといく本かの燭臺が點され、勿論、塵一つない程に掃き清められて、その長い廊下の兩壁際に、ぎツしりと積みあげられた書棚の前には、塾頭宇津木矩之允以下の門生達が肅然と膝まづき乍ら、遠來の二名士の來着を靜かに待ち迎へてゐたところでした。



『廊下の外にまでも盛り溢れてゐるとは、實に莫大な書籍でムるな。』

數萬卷と言つても誇大でない驚異的な大量の藏書に今さらのごとく目を丸めた兩人を導きながら、先へ立つて平八郎が案內していつたところは、いつもの大書院と違つた講堂わきの中齋です。——中齋とは讀んで字のごとく講堂と門人部屋との中間に建增しされた書齋で、平八郎の號の中齋もまたこの自慢の書齋がその雅號の源でした。

『坦庵どの、どうぞ御上座へ。』

大鹽中齋としての學識識見から言つたら、遙かに江川坦庵を凌ぐ名聲と大器量があつても、こちらは一介の町方與力であるに引替へ、一方はとにもかくにも韮山代官と言ふ高家のあるじです。太郎左衞門を上座に直して、自らもまた靜かに座へ就くと、待ち切れなかつたもののやうに尋ねました。

『早速ぢやが御用向承はらう。』

と――、答へないで、太郎左衞門がやをら懷中から取り出したのは一通の書面です。

『何でムるか。』

『問ふ前に先づ裏を御覽じろ。』

いぶかつて、見返へすと同時に、平八郎の兩眼は、冴え〴〵と冴え渡りました。見よ、と言つた書面のその裏には、藤田虎之助。――と言ふ文字がはつきりと讀まれたからでした。――藤田虎之助とは言ふまでもなく、水戸烈公御信任の侍臣で、これまた一世の風雲兒たるを失はぬ大儒者藤田東湖の通稱です。もし中齋大鹽平八郎を、西の潜龍に喩ふるならば、東湖藤田虎之助は、實に東の臥龍でした。兩者の交友は元より古く、さればこそその書面の始めにも、次のやうな文言が先づ讀まれました。

『――爾來、俗事にかまけ、筆とる暇も無之、東湖まことに汗顔の至りに候。』

そして、鮮やかな達筆で、なほ次のごとくに書かれてありました。

『さて、突然乍ら、江川、齋藤兩大人に御使者の役目願ひ候は餘の儀に候はず、最早お聞及びの事と存ぜられ候も、目今關東一帶に大饑饉襲來、就中われらが水藩は最もその被害甚しく、すでに三ケ所程にて一揆勃發仕り、主侯は申すに及ばず、われらも殊のほか心痛罷在ることに候。就てはその儀にて東湖折入つての願ひに候が、風の便りに聞けば、老中水野越州殿、先達御上洛の砌り、何やら專斷を以つて大阪表の奉行職制にお自まゝな變替へをお加へ候ため、貴殿殊のほか御憤懣の由、仄聞致し候間、それを幸ひと申しては過言に候も、いつそこの機に御現職をお退き願ひ、貴台をわれらが水藩にお招き申上げて、差し當つての饑饉に對する手當は言ふに及ばず、今後何かと足下の大經綸を、わが藩政の上にお揮ひ願つてはと、それとなう主侯に聞え上げ候ところ、主侯も至つての御滿悦にて、何びとか火急に人を派し、貴殿の內意探らせて見よとの御諚有之候まゝ、足下には御親近の江川、齋藤兩大人を相煩はし、かく密々に御意中伺ふべく御下阪願ひ候次第に御座候。なほこれを申すは甚だ不躾に候も、幸ひにして貴台、われらが水藩に御仕官の意有之候はゞ、主侯も特に五百石進呈の御意中御洩らされ候間、その點も御一考の上、東湖の面目御立て下さらば幸甚このことに御座候。右、取急ぎ匆々不宣。』

讀み了ると同時に、平八郎の双の目は、愈々冴え〴〵と冴えまさり、その蒼白な面には、ほのぼのとして亢奮の血色が上りました。意外も意外なら、不意も不意な水戸侯の招聘状だつたからです。しかも書状には五百石と言ふ大祿を以つて召し抱へようとの内意さへも洩らしてあるのでした。いや、それぱかりではなく、新奉行跡部山城守が赴任のいきさつを早くも知つて、その高祿で水藩に拔擢招致した上に、思ひ存分己が經世の才腕を奮はさうとの意を傳へてあつたので、平八郎の面に、いつにない亢奮の色の上つたのは當然でした。

それを傍から見眺めて、性急に促したのは剱豪齋藤彌九郎です。

『いかゞぢや。五百石とあらば小藩なら家老職の祿高ぢや。よもや御不足あるまいと思ふが、御意には召さぬか。』

引ついで太郎左衛門も、目を輝かし乍ら促しました。

『ほかならぬ御明君の水戸侯がお招きぢや。御貴殿一代の名譽、と心得るが、御意中はいかゞぢや。』

交々言ひ迫つたのを、だが、平八郎は一言も答へないで、默然と打考へたまゝでした。しかも數刻、眞にそれは數刻と言つてもいい長い時間でした。殆んど四半刻近くも、默々として靜かに考へつゞけてゐましたが、やがてきッと居住ひを正し乍ら襟を正すと、千斤の重味を以つて短く言ひました。

『折角ぢやがお斷り仕らう！』

『なに！　お斷り召さるとな！　なぜぢや！　なぜぢや！　なにが御不足ぢや！』

『…………』

『五百石では、御祿高がお氣に召さぬか！』

『…………』

『書面にこそ、その事は書いてムらぬが、水藩へ仕官致さば、御客分として御厚遇下さる筈ぢや。客分と言へば主あつて主なきも同様の氣まゝな身分。憤懣ある上役に仕へて、先に望みのない一與力として朽つるよりも、ずんと仕官榮え致すことと思ふが、なにゆゑ御不足ぢや！』

色めき立つて左右から言ひ迫つた言葉を、平八郎は靜かに抑へると、何たる淸廉潔白、何たる感激すべき一語だつたか！　微笑し乍らずばりと言ひました。

『折角のお言葉ぢやが、この大鹽中齋には與力が天賦の聖職ぢや。いや大阪三郷の民草が何ものにも換へ難い程可愛うてならぬわ！　千石萬石積まれても見棄てられぬ程可愛うてならぬわ！』

いと心地よげに微笑し乍ら、大阪三郷の民草達が何物にも換へられぬ程可愛いと言つたのです。千石萬石積まれても見棄てられぬと斷言したのです。

だが、二人の使者達は、どうあつても選ばれたその責任を完うしないではおかれなかつたと見えて、それを抑へつけ乍ら、手嚴しくさらに左右から言ひ迫りました。

『でも權力ある上役の御奉行が、そなたに敵意を以つて事々に

邪魔立てしたら何と召さるか！』

『………』

『卑職が卑職でムらぬぞ！　上役が上役らしくあつてこそ、下に仕へる與力もその職が完うされると言ふものぢや。それも戰つて勝てる對手なら格別ぢやが、後楯には權勢あるお方がお控へぢや。戰つて損と分つた對手に刄向ひ、萬ケ一大鹽中齋の名に傷がついたら、一期の失策と心得るが、喃！　どうぢや！　それにても尊公は大阪三郷に未練があると申されるか！』

『………』

『水濁らば淸魚棲まずと言ふ位なものぢや。早いところ足を洗つた方が賢うムるぞ！　それとても大阪三郷以外に、そなたのお働き召さる天地がないと言ふなら別でムるが、この通り水戸家では禮を厚うして尊公をお待ち兼ねぢや。憤懣ある土地で憤懣を抱き乍ら悒々として働くよりも、知遇を垂れて下さる天地で、厚遇うけ乍ら存分に腕を揮はる方が働き甲斐もある道理、決してわれら理のない事は申さぬつもりぢやが、これにてもまだ御納得召さらぬか！』

いかさま一理ある言でした。いや、打算に走り、利害をのみ追ひ求める市井の俗吏だつたら、二人の使者の言は、二理も三理もある言葉でした。――けれども天滿の棟領ばかりには無駄だつたのです。莞爾として大きく笑ふと、眞に秋霜烈日！　ずばりと強く二人の肺腑を突き抉ぐるやうに言ひ切りました。

『いか程申されようとお斷りぢや！　大鹽平八郎は俗吏ではムらぬわ！　權力ある者が權門にかゝれて、不浄な所行あればこそ、なほさら職が棄てられぬのぢや！　中齋はおのが身いち人の安全を計つて、可愛い民草達の苦しむ樣を高見の見物する程、まだ耄碌せぬつもりぢやわ！　なればこそ三郷の者共も、不束乍らこの平八郎を力と賴んで慕つてぢや。それと知りつつなにしに可愛い民草が見棄てられよう！　お斷りぢや！　折角乍らお斷り申さうぞよ！』

斷乎として言つたその時――、偶然でした

いや、突然でした。三郷の者共も力と賴んで慕つてぢや、と言つた平八郎のその言葉を、さながら裏書でもするかのやうに、突然、表の方が騒がしくなると、口々にわめき訴へる聲がありました。

『お願ひでムります！』

『お願ひでムります！』

『大鹽先生にお願ひの筋あつて參つた者達でムります！』

『おあけ下さりませ！』

『ここをおあけ下さりませ！』

『お願ひでムります！』

『お願ひでムります！』

そして必死になほわめきつゞけました。

『攝津の百姓共でムります！』

『河內の百姓達も一緒でムります！』

『いいえ和泉の百姓共も一緒でムります！』

大谷紝子夫人序文

山中峯太郎先生著（最新刊）

九條武子夫人

し、九條男爵家に嫁いでの主婦

如き十年の孤獨生活、さては街頭の戰士

有髪の尼としての信仰の苦しみ或は夫人の戀愛觀

かれ、一讀宛然ら生ける夫人に對する如

せん。

と別れて流人の

ちより筆を起

しての奉仕生活

家を捨て吾れをも捨てん御心か

吾のみ捨てん御たくみかや

これはこれ吾か本心か十年の

虐げられし戀のむくいか

○

良い品を

▽を切り取つ

救ひの光、迷へる人

慰めの泉——男子も婦

東京本鄉　大日本雄辯會講

◆電氣アイロン
堅牢、廉價で評判の

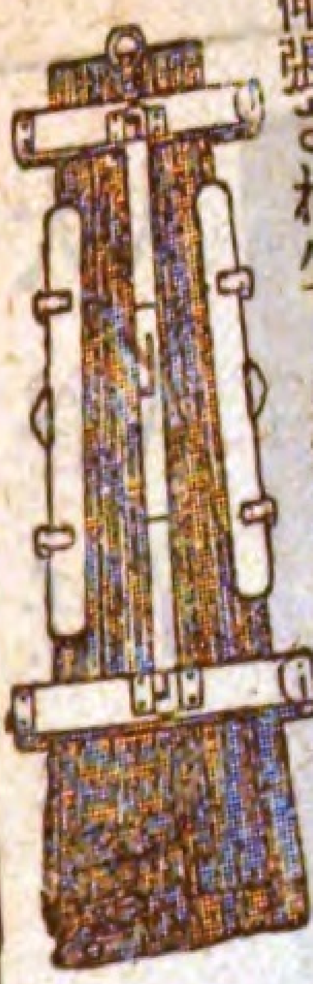
お裁縫に、お召物の手入れにお洗濯に、どちらの家庭でもお備へ遊ばせ。三ポンド特價三圓三十銭、四ポンド特價三圓三十銭、送料内地四十銭、領土七十銭。

◆重寶なおむつ入
旅行に、散歩に



かつて婦人倶樂部誌上に公開され非常な評判を得た最新型のおむつ入で内部は防水ゴム引、乾いたのとぬれたのと二種入れる樣になつてをります。一號表クレトン仕上げ二圓十銭、二號表繻子更紗仕上げ一圓七十銭、送料内地十二銭、領土五十銭。

◆文化的發條式ズボン整調器（一組二圓八十銭、送料内地廿五銭、領土五十銭。）



在來のズボン伸張器と違ひ、新發明の發條式なので極めて自然に伸張され少しの無理がなく、厚地薄地に品質を絕對に損傷せず、冬物も夏物も自由自在に調節が出來、使用法も頗る簡單であります。親切な說明書がついてをりますから、誰方にもスグ呑み込めます。

料内地四十銭、領土六十銭。ビスケット燒三箇二十銭、ケーキ燒七箇三十銭、送料各一組四銭

◆室内自働掃除器
簡便、衞生的、能率增進！

水氣を含ませた僅か三尺の布で、普通の雜巾なら、數十回もすゝぐ程の拭き掃除をタッタ數分で極めて手輕に出來る機械です。從つて嚴寒でも手を濡らすことなく、立つたまゝ使へるのですから、どんなに骨の折れる拭き掃除でも、樂々と運んでゆきます。板の間、リノリウム敷特に、疊の掃除には最も理想的な佐々木醫學博士の新考案です。發賣以來、各家庭は勿論、官廳會社、學校等から大歡迎を受けてをります。特價四圓八十銭、荷造送料内地六十銭領土一圓。



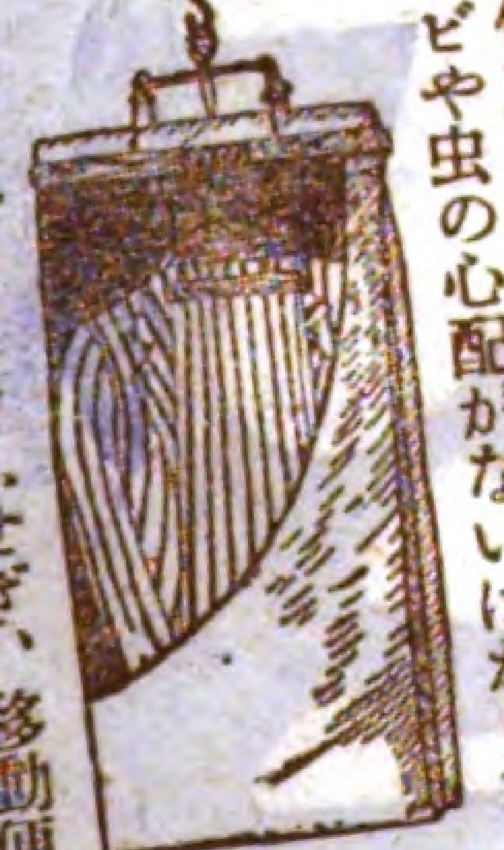
◆電燈自…出來る…二圓、送料内地二十銭領土五十銭。

◆安全鰹節削り器
最後までキレイに削れる



鰹節の大きいのは差込んで、小さいのはホリ込んで只ハンドルを廻しさへすれば樂々と最後の一片まで美しく完全に削れます。在來のカンナの數倍以上の仕事が早く安全に出來る、實に重寶な器械です。皿ネヂ廻し付一組三圓、荷造送料内地五十銭領土九十銭。

◆洋服保存器
カビや虫の心配がない



厚地の紙で作り、肝心な部分は金具を用ひた堅牢な洋服タンス代用品です。これさへあればカビや虫の心配がないばかりでなく、ホコリをふせぎ、移動便利で安く、型を崩さず、安全に保存することが出來ます。背廣用一圓八十銭、オーバ用二圓、同三着入二圓五十銭、送料内地三十銭 領土六十銭。

…餘種競技が卓上で誰にも面白く愉快に出來るカードです。說明書つき一揃ひ一圓十銭送料内地十二銭、海外四十五銭。



…極めて鮮明な描寫が出來る、フキルムパック乾板兼用の最高級品。金屬製取枠三個パックホルダー一つき十五圓、送料内地三十銭、領土六十銭。附屬用品一揃二圓五十銭、カメラ用革鞄二圓五十銭。送料内地四十銭、領土八十銭。

◆純絹糸製カスミ網
面白い程よく捕れる



雀、ノジコ、アオジ、目白、頬白、鶯等の小鳥が面白い程簡單にしかも一擧に澤山捕れる我國特有の捕鳥用具です。用法は頗る簡單、圖の樣に張つて置くのみでよいのです。絹糸製故疊めばポケットにもはいる位小さくなり、その上鐵砲などと異り取扱ひに面倒がないから都市の庭園に於ても自由に用ひられます。六分目二間網 高サ六尺長サ六間八圓八十銭、長さ三間四圓五十銭送料内地十五銭領土五十銭

…も移せますし、鍋はスグ別の煮物にも應用でき、何回蒸し直してもおいしく出來るのが特長です。ニューム製、三人前一圓三十銭、送料内地三十銭領土七十銭。五人前一圓七十銭、送料内地四十五銭、領土八十銭。八人前二圓二十銭、送料内地五十五銭、領土九十銭。

◆洗張用シンシ竹
お家庭の必備品

木綿物にも、絹物にも兼用出來る特製のシンシ竹、丈夫で永持ちのする便利な逸品です。一反分一組二圓、送料内地十二銭 領土五十銭。

御注文は
＝爲替でも結構ですが、振替を御利用なさるのが安全で便利です。ぜひ御注文品とその種類と、お住所お名前はハツキリとお書き下さいませ。

東京市本郷區駒込坂下町
大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）



『百姓共が生き死にの場合に立至りまして、先生のお力にすがりに参りましてムりますゆゑ、おあけ下さりませ！』
『お慈悲を持ちまして、ここをおあけ下さりませ！』
『お願ひでムります！』
『お願ひでムります！』

三

深夜に、それも突然、物々しい強訴の聲が擧つたので、平八郎は言ふまでもないこと、太郎左衛門も彌九郎も、等しくぎよッとなつて目を睜りました。
ところへ、血相替へて姿を見せたのは慓悍兒大井正一郎です。
『大分の大勢にムりまするが、いかゞ取計らひませう?!』
『凡そ何名位ぢや。』
『暗うムりますゆゑ、しかとの事は分りませぬが、七八十名は充分ゐるかと存じます。』
『みな百姓達か。』
『いえ、村名主らしい者が七八名交りまして、指圖してゐる容子でムります。』
『なに！ 名主達が交つてゐるとな！ さうと聞いては捨ておかれまい！ 差支へないゆゑ、重立つた者五六名ばかりここへ通せ！』
『……？』

『何を躊躇致すか！　深夜に拘はらず押しかけ參つたからには、いづれ容易ならぬ願ひの筋であらう。苦しうないゆゑ、早うこの部屋へ通るやうに申傳へい！』
『でもむさくるしい百姓共をお客人と御同席させましてはあんまり——』
『何を申すかッ。控へろッ。百姓をむさくるしいとは何ごとぢや！　客人がゐるは却つて幸ひ。匆々に通せい！』
　正一郎に導かれて、まもなくそこに姿を見せたのは、いづれも村々郷々へ觸らば、それと名を取つた大名主らしいいで立ちの八人でした。身親しく會つてくれたばかりか、滅多に通れぬ書院にまでも上げたので、勿論八人の代表者達は平蜘蛛のやうでした。
　それを殊のほかの上機嫌で見迎へ作ら、平八郎は温容そのもののやうに言ひました。
『苦しうない！　苦しうない！　みな面をあげい！』
『……』
『なに！　いづれも泣いてゐるな。こうして會うて遣はすからには、平八郎、何なりと聞いてとらすぞ。何がそれ程も悲しいか。泣かいではをられぬ程の悲しい訴へか。』
『それもで厶りまするが、あんまりお先生が……』
『わしが何ぢや。』
『容易なことではお會ひ下さるまいと存じましたのに、御親切なお言葉までを賜はりましたゆゑ、うれしうて、うれしうて、みなこの通りで厶ります……』
『うれしい事を申す者共よ喃。平八郎も涙が出さうぢやわ。願ひの筋は何ぢや。』
『……』
『遠慮は要らぬ。早う申してみい！』
『はつ。申し上げまするで厶ります。實は手前、河内平野郷の二百十六ケ村を預りましてをりまする者に厶りまするが、夏程あんまりきびしい旱つゞきで厶りましたゆゑ、秋にならばどうかと危ぶんでをりましたら、案の狀——』
『饑饉が參つたと申すか！』
『はつ。河内の郷一帶は申すに及ばず、和泉、攝津もひどい不作なので厶ります……』
　いかで驚かずにゐられませう！　ほんの今の今、藤田東湖の來書によつて、關東一帶の饑饉を知つたその矢先に、おのが足元の攝、河、泉、大阪三郷が同じ饑饉の徵あると聞いたので、耳にするや同時にその目は烱々と輝き渡り、言葉もまた鋭まりました。
『容易ならぬ事に相成つたな！　凡そ何分作位ぢや！』
『最もよろしいところで、せいぜい五分作、大抵のところが三分作やつとに厶ります。』
『なに！　三分作の個所が多いとな！　和泉はどんな工合ぢや。』
『よろしいところで四分作、いけないところに二分作せいぜい

たムります。』
『摂津はどんな模様ぢや。』
『少しよろしく先づ四分作平均にムります。』
『ほかには聞かぬか。』
『播磨も丹後も似たりよつたりの大不作ぢやさうにムります。』
『愈々容易ならぬ事に相成つたな。では、願ひと言ふもそれに就いての事か。』
『はつ。どこもかしこもかやうな不作では、所詮もう饑饉は免がれませぬことにムりますゆゑ、今年の御貢加米は、御慈悲を持ちまして御宥免下さるやう、お願ひに参らうと、みな様方にもお集りを願ひ、寄り〳〵談合してをりましたところ――』
『奉行所から何ぞ達しでも参つたと申すか!』
『はつ。それ程の不作を御存じではムりませぬのか、それとも御存じではあつても、知らぬお顔をなさつての事にムりますのか、まだそんな時期でもムりませぬのに、朝ほど跡部山城守様のお名を持ちまして、例年通り上納するやう、火急に俵米の要意せい、との達しがムりましたゆゑ、かく打ちうろたへて、お願ひに参つたのでムります。』
『では、御番所に参らず、こちらへ先に来たと申すか。』
『いえ、今の先参りまして、色々と御奉行様にもお願ひしたのでムりまするが、一向おきゝ入れ下さりませずに、身の程知らぬ百姓共が不埒申すなツ、と頭からきついお叱りでムりましたゆゑ、この上はもうお先生のお力におすがり申すよりほかはないと存じまして、かく夜分をも顧みず、お騒がせに参つたのでムります。』まさに容易ならぬ大事出来です。きくや、青ざをと青まさつた面に、きツと大きく唇を結ぶと、何事か決意をとゝのへようとするものゝ如く、やゝ暫し瞑黙してゐましたが、
『よしツ。』敢然として立ち上ると、太郎左衛門、弥九郎の両名に言ひました。
『おきゝの通りぢや! 水戸烈公様には、よしなにお取りなしお願ひ申すぞツ。――知之允! 知之允!』
『はつ。控へましてムります。』
『平八郎起たねばならぬ! そち、御両所のお相手申上げい! 今宵は帰られぬかも知れぬゆゑ、わしに代つて充分御歓待申上げるがよいぞ!』命じておくとさらに呼び招いたは慓悍児。
『正一郎! 馬曳けいツ。』
ひらりと乗つたその姿を知つて、容子やいかにと、門前に蝟集してゐた農民達の口から、感激あまつた歓声が嵐のやうに上りました。
『安心せい! 安心せい! 必ず共に平八郎、その方共の味方になつて遣はすぞツ。』
大きく言ひすてると、大きく一鞭! 夜中も憚らず、そしてまた恐れようともせず、たゞちにトウ〳〵と蹄を鳴らして行き向つたは、言ふまでもなく新奉行跡部山城守のお役宅です。――あとを、師の身辺護らばやと、門人瀬田済之助、慓悍児正一郎の両名が、矢玉のやうに馳せつゞきました。（つゞく）



『最後の舞踏』を讀みて

前ブラジル公使 堀口九萬一

近頃僕が讀んだ日本の小說の中で一番面白かつたのが鶴見祐輔氏のこの近著である。そして讀んで了つた後までも何となく明かるい、快活な空氣が四圍一面にたゞようて居るやうな氣持がする。それほどこの小說は明快な印象を讀者の腦裏に刷り着ける。

この小說は旅行記のやうでもあり、小說のやうでもあつて、これ迄日本にはあまり類のない型で書いてある。だから開卷の初頁から讀者の興趣と好奇心をそそらずには措かない。これが小說であるの、ないのと云ふことなどは問題ではない。

一二章讀んで行くと、サテ段々面白くなつて來てトテモ中途で止めることは出來ない。先きへ先きへと引きずられて行つて知らない内に皆んな讀んで仕舞ふのである。

非常に局面の變化に富んで居るので、讀者は少しも退屈を覺えないのみならず、新局面が次から次へと開展するので、アベコベに讀者の方で應接に遑あらざる多忙を感ぜしめられる位だ。

著者はこの興味津々たる小說中の人物の口を藉りて、我が國民を現世紀の國際生活、社交生活、さては世界の人々から『日本人は人好のする國民だ』と思はしめる位迄に我が文化と教養とを高めしめんとする抱負を處々に散見せしめては居るが、それがいつも理智圓滿な、氣の利いた、巧な輕い會話の受け渡しでなされ

るのであるから、讀者に少しも氣障でない處は實に巧妙なものだ。そしてどの頁にも氣輕さ、快活さ、明るさが恰も春の日の太陽の如くその照らすもの皆んなに生き生きした希望を與へる處がこの小説の特色である。だから教育小説とでもいへばいへるのだ。だから婦人にも男子にも、學生にも、女學生にも、將た教育家にも政治家にもこの小説を一讀しなさいとお勸めしたいのである。

＊　＊　＊

小説『母』によつて滿天下に非常な感激を喚起した鶴見祐輔先生が、再び公にした熱情に滿ちた國際小説「最後の舞踏」は、今や旭日昇天の勢を以て、全國到る處大評判で、最早二十六版を重ねるといふ、素晴しい賣行を示してゐる。

眞に男らしい青年、聰明で、快活で、颯爽たる風姿、理想的の日本青年高山巖を中心に、花の樣な美しいアメリカの富豪令孃――妖艶なパリーの貴族の末亡人――イギリスの女――ロシヤの女――各國の男女をめぐる物語、大西洋上に芽生えた戀は、風薫る熱帶地の椰子の葉陰にいよ〳〵白熱化してゆく……

先生の麗筆は、いよ〳〵冴えて面白いこと天下無比！知らず識らず各國人の交友の有樣や、人情風俗や、上品で輕快な社交の秘訣や、その他色々の知識が得られる。紳士淑女の教科書ともいふべき讀物である。切に御一讀をおすゝめする。



（四六判布裝美本　定價壹圓八拾錢　送料十二錢　本社發行）全國の書店にあります。

評判の名小説

著者	書名	定價送料
中村武羅夫	女人群像	各二、六〇 一四
中村武羅夫	夜の潮	二、七〇 一四
中村武羅夫	女王	各二、五〇 一四
中村武羅夫	處女	二、五〇 一二
小杉天外	眞空鈴	各二、三〇 一二
小杉天外	藤娘	二、三〇 一二
佐藤紅綠	幸福物語	二、五〇 一二
佐藤紅綠	第一歩	二、三〇 一〇
岡田三郎	聖火	二、三〇 一二
菊池幽芳	妖美人物語	二、五〇 一四
長田幹彦	波のうへ	二、五〇 一二
村上浪六	妙法院勘八	二、三〇 一〇

【何れも大日本雄辯會講談社發行】（全國各地の書店にあり、賣切の際は直接本社へ）



家庭小說

燃ゆる花

菊池幽芳
小早川清畫

惠美子の身の上

父に心の折れるらしい樣子の見えない事は、信重には意外だつた。併し始めから父がさう〳〵思ふ壺に入つて吳れようとも豫期して居なかつたので、それだけで信重は失望はしなかつた。殊に父が惠美子に對し、勞はるやうな氣持の動きかけて居ると見えた事は、多少とも彼の意を强くした。

『お父さん、あなたが、私一人を唯一の賴りとして、歐羅巴からあなたに逆ひに來た惠美子を、そんなに無情にお取扱ひ下さらうとは、想像し得ない事でした。』

父は澁面作りながら、

『わしは誰に對しても決して無情な取扱ひはせぬ。併しわが子の行爲に對し、父としては認め得る事と、認め得ない事とがある。話はそれから先へせねばならぬ。わが子の結婚といふ事は、一家の重大事ぢや。お前だけの單獨の事件ではない。當然親が相談の上極めるべき事で、お前一人で極める權利はない。殊に松尾家は出來星の華族どもとは違ふ。由緒のある名門で、祖先以來の家憲と

いふものもある。第一わが子の結婚に對しては勅許も受けなければならぬ。それ等の事はお前も承知の筈ぢや。わし等は結婚に對し、お前に押つけがましい事をする考は、毛頭持つて居らぬから、お前が手續さへ踏んで來れば、十分考慮をするが、親に考慮の時間も與へず、勝手に結婚までして事後承諾を求めるとは、沙汰の限りぢや。その上の親の無情呼はりは筋道が違つて居る。お前の遣方は全然親を無視して居るのぢや。』

『その點は重々お詫をします。内地に居れば無論御相談の上に決する事柄ですが、外國にをつたゝめ、その手續を取る事が出來なかつたのです。手紙の往復では要領を得ませんし、さりとて私一人歸つて來て、御相談を申上げたところで、惠美子を見て頂けないのでは、問題になりませんから、惠美子を同行するため、きつと御承認下さるに相違ないとの確信から、結婚を先にして了つたのです。』

『さうではあるまい。わしの察するところでは、この結婚は内地では、迚もわし等の承認を得られぬ事を承知なので、外國に居つたを幸ひに、逆に境遇を利用したものぢやらう。』

すつかり云當られたので、信重は眼を伏せたが、

『いゝえ、決して……そんな事はありません。そんな事を仰しやるのは、惠美子の人格をお疑ひになるからでせう。私は御兩親の名譽に拘はるやうな女を、決して妻にはいたしません。あなたが暫時でも惠美子を傍にお置になつて御覽になれば、私が惠美子を擇んだ事の間違ひであるかどうかは、すぐお分りになります。』

『多分お前はその婦人の身の上について、またどうして結婚したか、わしに話すつもりで居る事と思ふ。念のためにこれだけは聞いて置く事にしよう。』

『それは勿論申上なければなりません。併し豫じめお願ひして置きたいのは、惠美子の族籍とか、家系とかいふ事に、偏見をお持になつて頂きたくないといふ事です。惠美子は平民の娘です。私は門閥とか、家の系圖とかいふものと結婚する考は少しもありません。本人の人格といふものが、結婚の第一條件でなければならないと思ふのです。』

父の顏はいよ／＼暗くなつたが、默つて續けるやう指圖した。

『惠美子は平民の娘である上に孤兒です。どこにも係累はありません。そして十三の時から二十四の今日まで、伊太利で教育されて來たのです。』

父の暗い顏に好奇心が動いて、

『ほゝう、親達は伊太利にでも居られたといふのか。』

『いゝえ、ある事情で、單獨に伊太利へ連れられて來たのです。』

『あなた、私に申上さして下さいね。』と、恵美子は信重に求めた。

それは伯爵が始めて耳に留めた恵美子の聲だつたが、その聲に何とも云へぬ潤と、銀のやうな美しい響があつたので、彼は一寸魅せられたやうに、恵美子を見た。

『併し……』と、信重はそれを制するやうに云つた。



『いゝえ、私に何もかも申上さして下さい。』と、伯爵に向つて、『私の親達は長崎で小商人をして居ましたその日暮しの貧乏人だつたのでございます。その生活難から私は十歳の時に――』

『恵美さん!』

『いゝえ、お父様にお隠しになる事はいけません。正直に私の身の上を申上ます。私は十歳の時に曲馬團に賣渡されたのでございます。その曲馬團はやがて歐羅巴に巡業いたしましたが、伊太利で失敗しまして、とうとう解散する事になつたのでございます。私は幸ひにその時ミラノで日本の骨董品などを取扱つて居つた義

俠心のあるマルチニといふ男に引取られまして、その娘分になつて教育されて來たのでございます。女學校を出てからは、音樂學校に入つて、昨年聲樂科を出たのでございますが、丁度そのころから養父のマルチニがいろ／＼失敗を重ねました上、不治の病氣にまでなつて、只今では病院生活をいたして居るのでございます。それで私は養父の手許を離れて自活しなければならなくなつたところから、歌劇女優として立つことになりまして、半年ほど伊太利のそこ〻を興行して居ります中、信重さんとお近付になつた結果、こんな事になつて了つたのでございます。』



聲がチャーミングであるばかりでなく、態度も落ついて話がはき／＼して居た。が、信高はそれに魅せられてばかり居る譯に行かなかつた。現實の恐ろしさが彼を戰慄させるのである。

『曲馬團の娘！……歌劇女優！』と、彼は呻くのだつた。

信高の恐怖は、惠美子が曲馬團の娘であり、歌劇女優であつたといふ事實そのものよりも、權式が此上もなく高くて、家柄や門地の誇りが強く、そして自分の上に絶對の權力を持つて居る妻の賴子を思ひ浮べたからであつた。

『併しお父さん、惠美子が曲馬團に居つたにせよ、歌劇女優であつたにせよ、現在とは何の關係もない事です。その上惠美子の過去には何の汚れも持つて居ない、純潔の女だつたのです。どんな誘惑にも打克つて來て居た女です。そこに惠美子の貴さ

があります。私はあなたに皮相の事實を捨てゝ、その奥に包まれて居るものを見て頂きたいのです。家系が何です、門閥が何です。人間としての惠美子が完全な女であるなら、その他の事は問ふ必要がないぢやアありませんか。』

『さうはいかん、お前は母を忘れて居る！』

『お母さんだつて、惠美子を見れば、問題はないと思ひます。』

『お前は母を知らんのぢや！』

『いゝえ、知つて居ます。お母さんは私の一生の願ひを容れて下さらない筈はありません。それはたゞ時日の問題だと思ひます。』

『併し信重、お前はまづお前が自分一人の身體でない事を知らねばならぬ。お前の身體は松尾家に屬して居る。皇室の藩屏である華族の階級に屬して居る。その松尾家は由緒正しい名門で、代々卑しい血は入つて居らぬ。歴史的に一貫して浄い血統が流れて居るのぢや。松尾家の子孫の妻にはそれだけの條件を具へて居るものでなければならぬ。それが先決問題ぢや。……わしには何と云はうともお前の結婚を認める事は出來ん。』



『私はお父さんが、今日の世の中にそんな舊思想に司配されて居らつしやらうとは考へて見る事が出來ません。今日松尾家のためにも、華族社會のためにも、最も必要なのは傳統とか家系とかいふ事ではなく、人格といふ事でなければならないと思ふのです。私は先祖の前に惠美子を誇る事が出來ると考へて居るので、決して祖先を辱かしめる女ではありません。それにお父さん、あなたは伊太利の法律の下に、合法的に結婚して來た惠美子を私に捨てさせ、私を人道上の恐ろしい罪悪者として、それで上流階級の道徳が維持されるとお考へになるのですか。松尾家の子孫にそんな罪悪を犯させて、それが松尾家の名譽のために、必要な手段だとお考へになるのですか。』

『それはすべてお前の責任ぢや。』

『さうです。ですから私は自分の責任を決して回避しません。私は如何なる場合にも、恵美子を捨るやうな事はいたしません。』

一座は暫らく白けて居たが、

『結婚はどちらから求めたのか。』

信高がちらと恵美子を見やつた時子には咎めるやうな色があつた。

『勿論私からです。恵美さんは最初私の信實を疑つて、決して私に許してくれなかつたのです。それで恵美さんに完全の保證を與へるには結婚の外はなかつたのです。その點についてお父さんは決して誤解をなさつてはいけません。恵美さんの方から



は、少しでも誘惑がましい態度に出た事はなかつたのです。却つて私を避けようとするため、あらん限りの手段を盡して居たので、私はやつと最後に恵美さんの心をかち得たのです。此場合若しお咎めになるなら、それは私で、少しでも恵美子をお咎めになつてはいけません。』

恵美子はその後を受けて、

『併し私達はどんなに愛し合つて居りますでせう。私は心の底から良人を愛して居りますから、良人の望むどんな從順な女にもなります。此上妻としての必要などんな修養でもいたす覺悟で居るのでございます。どうか私の幸福でございますけれども、良人の幸福をお取上げにならないやうに、私からもお願ひ申上ます。』と、恵美子は媚を見せて懸命に云つた。

信高は恵美子の顔を見るに堪へないやうに、
『わしはあんたに同情します。決してあんたを悪いやうには取計らはんつもりで……』
『お父さんの御同情といふ事は、私達の結婚を認めて頂く以外には、何ものも有得ない事を御承知願ひます。』
『わしには……併しそれだけは出來さうもない。』
信高は絶望の身振をして呟やいた。

夫人の驚き

當惑と混亂そのもの丶やうな顔をして、麴町一番町の邸に歸つて來た信高は、書齋に入ると、そのまゝ安樂椅子に身を投げかけ、暫らく思案をして居たが、やがて呼鈴を押して女中を呼ぶと、
『至急逢ひたい事件が出來たからと、奥にさう云うて來てくれ。』
女中が出て行つた後、伯爵は焦燥に堪へぬやうに、室の中を右往左往に歩き始めたが、女中が歸つて來て、
『奥樣は今朝、お頭痛がなさいましたので、まだお身仕舞を遊ばしませんが、至急の御用件と



仰しやる事なら、お寢間までお越下さいますやうにとの事でございます。』

女中の復命を聞くと、信高は室を出て、階上の妻の寢室をノックした上入つて行つた。そこは可なり手廣な洋風寢室で、贅澤な寢臺はアルコーブに半ば隱されて居り、白熊の毛皮などが敷かれ、華やかなカーテンがかゝり、柔らかな光線の差込む下に置かれた美々しい化粧卓、華麗な型變りの椅子二三脚、丸卓子、大理石像、すべて巴里好みの裝飾品、掛額など、全體が老婦人の寢室としては媚かしさに過ぎては居るが、惡趣味の點はなく、如何にも垢ぬけがして居り、富豪であり貴族である伯爵夫人の寢室と首肯れるものであつた。

夫人頼子は緩やかな部屋着のまゝ鏡に向つて居たが、ノックの音と共に化粧卓を離れ、良人を迎へた。頼子は外交官夫人としての、二十年の海外生活中、美貌と叡智を以て聞えた女であるけれども、最早五十を四ツ五ツ越して居るので、殆んど寢起そのまゝと云つてもいゝ、素顏のまゝの彼女を見ると素枯れた花の、轉た哀れを留めて居ると云ふに過ぎぬほど、そこに人をチヤームする何ものも殘つて居らず、髮にも白いものが雜り、額には幾筋かの小皺が刻まれ、目は落込んで眼縁が黑ずみ、鼻は瘦せて高く、兩頰には薄い雀斑や汚點が表はれ、全體の氣品はそれでも失はずに居るものゝ、昔の面影は求むべくもないのだ。いつまでも若くて美くしいと今でも云はれて居る頼子ではあるが、素顏のまゝの彼女は、若いどころか、年より三ツ四ツも老けて見え、色も香もない老婦人と云つてよかつた。たゞ今も潤のある眼に若々しさが見えるが、その眼の光はあまりに鋭どく、そして引締つた口元に意志の女である事を示して居て、全體には決して暖たかな感じを與へる女ではなかつた。

彼女はにこりともせず、寧ろ良人を咎めるやうに、

『至急の用件と仰しやつて、何事でございますの。』

『信重が歸つて來たのぢやよ。今朝ほどわしに逢ひたいと云つて、帝國ホテルから電話をかけて來たのぢや。』

待焦れて居るわが子が歸つて來たと聞いて、頼子は驚ろきながらも、自分は何事にも驚ろかないといふ事を示すために、そんな樣子は見せず、取澄したまゝで、

『信重が歸つて來たのなら、どうして邸へ歸らずにホテルなどに居るのです。今朝と仰しやつて何時ごろの事でございます。』

あれほど愛して居るわが子が、何を置いてもまづ自分の懷へ歸つて來ずに、ホテルに歸つて來たといふ事が、夫人に取つてはこの上もない不滿の點であり、同時に怪訝の點であつた

『電話は二時間ほど前にかゝつて來たので、わしは今逢つて歸つて來たところぢや。』

『あなたがお逢ひになつた？ わざ〳〵ホテルまでお出かけに

なつて?』と、蔑むやうに良人を見て、『なぜ信重をお呼よせにならなかつたのです。よつぽどどうかして居らつしやいます。』

『さうぢや。わしも只事ではないと思つたので、わしから出かけて逢つて來たのぢや。』

良人のひどく困惑して居るらしい樣子を見ると、わが子の上に何事かあつたに違ひないと見て、流石に眉を顰めながら、

『私にはさつぱり譯がわかりません。信重がどうしたのですか、早く仰しやつて下さい。信重は一人でホテルに居るのでございませうね。』

『それが一人ではないのぢや。歐羅巴で結婚したといふ妻を連れて來て居るのぢや!』

物に驚ろかぬ筈の賴子夫人もあツと驚ろいて眼を瞠つた。それは信じ得



られない事だつた。暫らく唇を痙攣的に震はして居たが、

『信重に限つてそんな事が……私は信じられません。あの子があなたを僞はつたのです。あなたはその女を御覽になりはしないでせう。』

『いや、二人に逢つて來たのぢや。』

賴子はもう信じない譯にはいかなかつた。目が險しくなり、額に青い筋が走ると、せき込んで、

『歐羅巴のどこで、いつ、何ものと結婚したといふのです。相手は外國人なのでございま

せう。』

外國人では面倒な問題が惹起されると思ふので、かう云ふ中にも彼女の顔は見る〱蒼ざめて了つた。

『いや、日本人ぢや。日本の女なのぢや。』

頼子夫人は始めてほつとして、

『日本の女ですつて？　どうしてまた日本の女とあちらで結婚したのです。早く仰しやつて下さい。』

『伊太利のミランで結婚して來たのぢや。結婚するとリビエラ地方を廻つて、巴里に出た上歸つて來たので、結婚證明書も持つて居る……事實結婚して來たには何の疑もないのぢや！』

『どんな女なのです？』

『身分も何もない女ぢや。曲馬團に居た娘で……伊太利人に拾はれて教育された上、音樂學校を出て、歌劇女優をして居たのぢや！』

夫人は激しい嫌惡の表情と共に、怒に慄へた。

『曲馬團の娘！　歌劇女優！……まア、信重がどうしてそんなものに魅られたのでせう。あなた！　信重を救ふためには、一刻も猶豫しては居られません。』

『さうとも。そんな經歷の女を、松尾家の嫁とする事は出來ん。』

『あたりまへです！　外國人だつたら國際關係で面倒になるかも知れませんけれども、日本人なら何の遠慮もいりません。それであなたは何と云つてお歸りになつたのです。』

『承認する事は出來んと云つて、歸つて來たのぢや。併し信重はわしがきつとお前に取なしてくれるものと信じ切つて歸つて來た樣子で、そのためわしはどんな辛い思ひをして來た事かも知れぬ。殊に信重一人を頼りについて來た娘に對しては、何とも知れぬほど氣の毒ぢやつた。』

頼子夫人は目に角立てゝ、

『あなたは信重を誘惑した、そんなものに迄で同情なさるのですか。』

『信重を誘惑したとわしには思へぬ。美くしい娘ぢや。わしはあんなに美くしい娘を知らぬ。その上氣立もよささうぢやでの。』

『あなたは美くしい女を御覽になると、すぐそれですわ。ちとお嗜み遊ばせ。……いゝえ信重が誘惑されたに極つて居ます。私は死んでも曲馬團の娘や、歌劇女優を松尾家に入れる事は出來ません！』

『その通りぢや。……併し素性さへそんなものでなければ、一通りの教育は受けて居るし、少しも擦れて居る樣子もなく、物腰もしとやかで、應對もはき〱して居るし、目端が利さうで、社交界にでも出せば、すぐ評判になる女らしいのぢや。』

『あなたといふ方は、もうそんな、お考になつて歸つて居らつしつたのですか。飛んでもない事です。怜悧な女なれば、怜悧な女ほど猫を被つて居りませう。私は娘が美しければ美くしいほどその娘を憎みます。どんな手段を取つても、その結婚を無効にして、娘を信重から引離さなければなりません。それには第一あなたがそのつもりになつて下さいませんければ――』

『わしは素よりそのつもりぢや。……が、結婚は正當にして來て居るのぢやから、娘に對しては――』

『娘の事を斟酌する必要は少しもございません。どうせ未來の伯爵夫人を夢みて、信重を誘惑した女です。正當に結婚したと仰しやつても、それは伊太利でございませう。伊太利の臣民であるなればその結婚をどうする事も出來ないかも知れません。日本人として日本に歸つて來た以上、日本の法律に從ふのが當然で、その結婚を無効にする事は大して困難ではないと存じます。併しこの事であなたとお話しても駄目です。板垣を呼んで、その手段を取らせる事にいたしませう。どうぞすぐ板垣に電話をおかけになつて、午後一時に邸に來て貰ふやうにして下さい。ようございますか。』



『板垣に相談するより外に途はあるまい。ではすぐ電話をかける事にする。』と、信高は唯々として答へたが、彼の顏はますます暗くなるばかりだつた。

『私は身仕度をしなければなりません。』

良人を追やつた上、頼子夫人は昂奮した面色で、朝の化粧に取かゝつた。

『これはさう簡單には片

づかんわい。信重にしても子供ぢやアないからな。第一あの娘が可哀相ぢや。』

口の中で呟きながら、妻の寢室を出ると、信高は電話室へ來て、板垣を呼出すのだつた。

お默りなさい！



板垣定行は信高の舊藩臣で、現在松尾家の法律顧問であるが、法學博士として辯護士として、一流の人物であり、六十年輩の頭も髭も半白の、がつしりした老人だつた。

午後一時、彼は信高の書齋に通されると、賴子夫人もそこに彼を待受て居た。今はちやんと身仕舞を濟した夫人は、先刻寢室で見た寢起の夫人とは、殆んど見違へるばかりの女になつて居た。髪も綺麗に束ねられ、額の小皺も薄雀斑も目立たぬまでに隠れて、きちんとした和裝に粧ひを正した彼女は、どこから見ても氣高い伯爵夫人で、年もたしかに今朝よりは五ツ六ツも若く見えるのだつた。

定行は伯爵から、要點を聞取つた上で、

『それでは娘は長崎の生れでございますな。調べはすぐつきませう。いづれ手前もその婦人に逢ひますが、御前はお逢ひになつて居らつしやつたのですな。風采、態度、物の云振と云つたやうなものは、上流婦人と認める價値のない女と、御覽になつたので……？』

『それが充分價値のある女なのぢやよ。』

賴子夫人が鋭く良人を見て、

『そんな事は只今の問題ではございません。板垣さん、さういふ詮議立は全く不必要な事です。卑しい生れで、曲馬團の娘だつたり、歌劇女優だつたりした素性のものを、結婚は代々由緒のある家柄とだけ取組んで來たこの松尾家に入れる事は、絕對に出來ない事なのでございます。それは娘がどんなに教育があつても、どんなに美しくてもでございます。』

賴子夫人の決意が梃でも動かぬ事は、その顏色に表はれて居

た。九州のさる大藩主の家に生れ、良人の伯爵家よりも家柄のいゝといふ事で、良人より一段高く自分を標置して居る彼女が、伯爵家の唯一の相續人である信重に、卑賤な素性の、それも曲藝や舞妓で世を渡つて來た女を娶はせる事は、事實死んでも出來ないと思ふ事だつた。

老辯護士は夫人が一度決意したら、それは理に訴へても、情に訴へても、到底動く事ではないのを、多年の苦い經驗から承知して居た。

『それで板垣さん、わざ〱お呼びしたのは、あなたにこの結婚を無効にする方法を取つて頂きたいためなのでございます。』

と、夫人は命令的に云つた。

『それだけの事なら、奥樣、別段困難の事ではございません。第一日本の法律では或年齢に達するまで、子女の自由結婚を認めて居りません。若樣はお幾歳でございましたな、まだ滿三十歳にはおなりにならん筈で……』

『まだ一年先の事でございます。』

『それならば若樣が勝手に御結婚になつても、日本の法律では無効でございます。』

夫人はほつとして、

『假令外國で結婚してまゐりましても？』

『はい、外國からの屆出と、日本からの屆出と、双方の屆出があつて、始めて合法的に效力を生ずるのでございます。その日本からの屆出には、是非ともあなた方の御承認が必要になつて居ります。』

『それで安心いたしました。結婚が無効といふ事になれば、私には考がございます。』

『併し奥樣、一ヶ年後には若樣はその婦人と自由に御結婚になる事が出來ます。日本の婚姻法は無論御存知で居らつしやるでせうから、若樣は今日あなた方の御承認のないのを、格別苦になさらないかも知れません。』

『さうぢや、一年後には信重の自由ぢや。』

『いゝえ、構ひません。』と、頼子は何か自信があるやうに、『今から一年間の中に必要な處置を取る事が出來ます。私はきつとその女を信重から引離して御覧に入れます。』

定行も信高も頼子夫人にどういふ成算があるのか知らなかつたが、夫人の意圖の確固不拔のものである事だけは、見ぬく事が出來た。

定行は信高に向つて、

『お話の樣子では若樣はよほどその婦人に打込んでおいでのやうですから、あなた方が御承認なさらぬといふ事は、差當り非常な打撃だと存じます。全く可哀相でーーー』

『わしは其が氣の毒ぢや。』

頼子は二人を睨めるやうにして叫んだ。

『私は信重を憐れみますけれども、娘には何の憐れみも持ちません！』

『併し奥様、歐羅巴では正當に結婚をしておいでになつた若様を、その婦人からお引離しになるといふ事は如何なものでございませうか。お引離しになるにしましても、一應娘を御覧になりました上の事に――』

『お黙りなさい、板垣さん！』と、夫人は辛抱し切れぬやうに甲高い聲を立てゝ、『私はあなたからそんな御勸告を受けたいためにお呼したのではございません。祖先のため、私共の階級のため、松尾家のため、自分の正しいと信ずる事を行ふのに、なぜ躊躇しなければならないのでございます。あなた。』と、良人を呼かけて、『あなたは此場合意志を強くお持にならなければいけません。意志の弱いといふ事は、一ツの罪悪です。私は何よりも意志の弱い男を輕蔑します。』

『わしは何も意志を弱くしては居らん。この結婚の承認されん事は、お前の考への通りぢや。』

『それなら何もかも私にお任せになればよろしいのです。私は一年の中にきつと信重を救ふ事にいたします。』

『それにしましたところで、この事は飽くまで愼重を要する事だと考へます。若様の伊太利での結婚といふものが、どういふ手續の下に行はれたか、果して合法的であつたか、それ等の點についても、充分取調べて置く必要があるかと存じますが……』

『それもあるの……。わしから伊太利の大使に調べて貰ふ事にしてもよい。』

『はい。それも結構でございますが、幸ひ參事官の山川は私の同窓でございますから、早速私から頼んで見る事にいたしませう。ひよつとするとその結婚も不完全なものであるかも知れないと思ふのでございます。』

『そんな事はどうぞあなた方の方でよろしきやうに。』と、夫人は云つた。（つゞく）

見るべきは次號！御期待を乞ふ！

汲めども盡きぬ興趣は讀む者の心を強く捉へて呼吸も吐かせない。流石は文壇の巨匠がものせる大傑作！

頼子夫人の峻烈なる反對は無慘にも二人の希望と幸福を奪はんとして、はしなくも事件は一展開を將來せんとす。

信道は純愛と正義に生きる新しき人生の騎士、配するところの美子は美しく而も氣性烈しき近代女性！　彼等は正に來らんとする壓迫の前にあつて如何に處せんとするか？　彼等の生くべき道は何處か？

作者は如何なる人生と教訓を、然して如何なる解決を我等に示さんとするか？

キングポスト

□御挨拶

新年號はお蔭樣で大變な好評を受けまして、骨折り甲斐があつたと一同勇み立ち喜び合つたことです。そして私共は新年號で受けた此の大評判を、少しでも墜してなるものかと元氣一杯に頑張つて本號を作り上げました。隅から隅まで熱と努力の結晶、屹度皆さんに御滿足願へると自惚れて居ります。と共に、三月號は愈々益々油をかけて、素晴しいものを作らんと、一同意氣軒昂、東奔西走の眞最中であります。ぜひ御期待を希ひます。



□文壇畫壇

歐米の漫遊から歸つた久米正雄氏の元氣は實に大したものだつた。船が埠頭に着くや待ち切れなかつたやう眞先に、帽子を鷲掴みにした手をさし上げ、愛嬌を振り撒き乍ら降りてくると、早速出迎への誰彼に取り卷かれて快談縱横氣焔當るべからずだつた。

『えらい元氣ですな』

『そりや君、一ケ年間原稿を稼がずに遊んで來たんぢやないか』

『みつちり材料の仕入れが出來ましたらう』

『いや、僕は他人のやうに材料の仕入れに行つたんぢやないよ。芝居とカフエー許り漁り歩いてゐたんだ。つまり、夫婦でつい浮かれ過ぎて巴里や紐育まで銀ブラの延長をやつて來たといふまでさ』

——と云つた具合。

——讀者諸君、この文壇随一の人氣作家久米氏は、久しい[illegible]ら恢復したハチ切れるやうな元氣と、新しい豐富な見聞を以て、歸朝第一回の大作を近く本誌上に發表することを約されました。お歡び下さい。



○丸山晩霞畫伯は曲つたこと〻云へば曲り尺でも嫌ひといふ人。藝術的天才があらうと學問識見が如何に勝れてゐようと、品性に少しでも缺點があるとなれば、全的にその人を認めぬといつた人格論者である。

或る日令息令孃達が樂く集つて蓄音器を鳴らしてゐた。レコードは有名なさる音樂家の名曲だつた。と、突然、記者と對談中だつた畫伯が、血相かへて座を立つて行かれたと思ふと、向ふの部屋でガチヤンと物の壞はれる音がして畫伯の鋭い叱聲が聞えた。

——間も無く戻つて來られた先生。君、あゝいふ音樂家の音樂を[illegible]たらうが、併し彼の人格に世間の非難が高い。そんな品性下等な音樂家のレコードは子供に聞かせたくないから破つてやつたんだ。子供達は無暗と誰彼のものを買ひ込んで來るので困るよ』



○今一つ畫伯の噂さ——。

佛蘭西に愛妻と愛兒を殘して來た蕗谷虹兒氏、勿論妻子の安否を一日だつて忘れたわけではないが、忙がしい仕事にかまけて、樂しい便りを怠りがちだつた。

二本三本……と愛妻への返事の借りが溜つた或る日、いつもより重い大きい封書が屆いた。不思議に思つて開けて見ると中から愛兒の寫眞が出て、そして手紙には、

『あなたは、子供を忘れましたの……』

蕗谷氏寫眞を凝視めて今更のやら妻子戀しの涙に……[illegible]たい、氏自身の告白。

□編輯局内噂話

F主任の前の住居は本郷吉祥寺町であつたが、そこへ移り住んだ年、庭の垣根に柿の種を蒔いた。それがだん〳〵成長して九年目には美味しさうな柿が五ツ六ツ生る様になつた。ところで又都合上引越すことになつたが、さて諦められないのはその柿である。さりとて折角こゝまで大きくなつたのを引き抜いて持つて行くのも可哀相だと思案投首の折柄、通りかゝつたのが大家さんである。そこで二人の間に妙な約束が結ばれた。「柿が生つたら毎年その初物を家主から届ける」といふのである。然るにその後數年、此の妙契約も不履行のまゝになつてゐたが、昨年秋にひよつこり家主が柿を持つて尋ねて來た。――『お約束を果したいと毎年心掛けてゐたのでしたが、青い中から近所の惡太郎共に叩き落されて一つも實らず、約束を無にして居りますのをいつも氣に病んでゐました。今年も亦惡太郎共に盗まれてしまひましたが、約束は忘れて居らぬといふ心持ちだけでも表したく、八百屋から買つた此の柿を持つてお詫びに伺ひました』と、いふのであつた。F主任スッカリ感激して『諸君！これを美談と云はずして世間に美談があらうか…』



編輯室の春

世間様は冬の眞最中でも編輯室には一足お先に春が來てもう四月號だどうも氣分が出ないと造花の櫻を眺め乍ら『花散るや……ハクショイ』

○人もあらうに編輯局内一の君子人T君にだけ再三祟るといふのだから、ちら公も悪戯者だ。或る朝、T君出勤して机を開けると、どこから運び込んで來たか柿のヘタやら栗の皮やら散々喰ひ荒し糟を抽出しの中に散らかしてゐる。氣が永い。『こゝまで食物を運び上げるのは容易でなからうになア』と、感心してゐたものだ。この言葉をちら公天井裏ででもニヤリ聞いてゐたものか、翌朝來て見ると又も……而も今度は叮嚀に鼠色の糞までしてあつた。『僕はどうも鼠にまで馬鹿にされるよ』――で、その日は苦笑で過ぎたが、第三日目も續いて更に獰猛にやられたので流石のT君も怒つた怒つた、『何んちうひどい奴だ。給仕、猫入らずを買つて來いッ。』

□新年號の評判

キング新年號面白く拝見仕り候小生の姪が附錄『運命判斷』に讀み耽り居り飯を眞黒にして知らずに過ぎたるがこんなことを全國に起らせては一大事と思はれ申候（鹽田力藏）

○大阪へ旅行して來た。道頓堀へた。さうするとそこに玉枝といふ利口らしい美しい女給がゐた。彼女は小冊子を手にして頻りに僕に質問する。問はるゝまゝに答へて見た。すると僕の運命を判斷した。驚いた。眞箇によく當つた。彼女は斯くて次々と客の運命を判斷してヤンヤと人氣を買つてゐた。僕はその小冊子の種明しを迫つた。見れば「キング」の附錄である。喫茶店を出た僕は早速本屋を見付けて「キング」を買つたことは申すまでもない。（大阪にて、ABC）

正誤

前號六七頁の太田氏作歌は荒海を四方にめぐらし神日本磐余の彦のきづきたる國
十二月號三〇三頁詰碁解答中、ろの四黒七は、ろの六黒七、ろの四白八となり黒劫活。
右、茲に訂正致します。



怪盗夜叉王

前田曙山
山川秀峰畫

姫の紛失

皎々たる月下の奮戰、さしも兇猛と聞えたる怪盗夜叉王は、烈女秦姫の手練の狙撃に殪れたので有る。前方多くの被害を受けたる人々も、火附盗賊改ための役人も、誰一人其面體を知る事なき怪盗の正體を、今こそ明らかに認め得られるでは無いか。

波多野右近が泉水を回つて、驀地に駈け附けた時、彼は大きな獲物を押へる代りに、踏躙られたる枯芝の狼藉を見たばかりで有る。確かに大地に殪れた兇賊は、天に翔つたか地を潜つたか、拭つて消えたやうに影も形も無く、剰さへ手下と覺しき者さへ、悉く消えて失なつたので有る。奇怪とも不思議とも譬ふるに物が無い。

館は廣し、外構へは嚴重で有るし、今の間に盗賊が人知れず構外まで引上げ得られる道理は無い。

『一同早く出會ひ召され。波多野右近是に居りまするぞ。』

聲を聞き附けて馳せ集まる小姓や若黨仲間の面々、右近の指揮で提灯振り照し、四方へ手分けして搜し廻つたが、賊の來た處も、出て行つた痕跡もなく、全く夢路を辿る思ひ、宛ら暖簾

に腕押の空虛を覺えるばかりだつた。夫でも念には念を入れて、屋敷中隈無く搜し求めたが、彼等一黨が去來した證據といふものは塵毛羽程も殘されない。

右近は張り詰めた氣も撓むばかり、クタ〳〵になつて館へ引上げて來ると、何事ぞ明放された長廊下を、雪洞片手に忙がはしき人の往き通ひ、何樣只事ならず見えた。業に怪賊の襲來に怯やかされ、神出鬼沒の引上げに驚かされ、不安に不安を襲ねて居るから、右近は忽ち胸騷ぎを覺えて、心も心ならず馳け附けると、出會頭に馳けて來た一人の小姓。

『オウ波多野樣、御上は何れにおいで遊ばしまする。』と、左も〳〵右近が心得拔いて居ると信じ切るやうだつた。

『御上……姫君が何と遊ばした。』

大鐵椎を以て不意に腦天を喰はされたやうに、右近はグワンとして、目が眩み身體中を生温い血が逆流するやうに感じた。

『何處にもお見え遊ばしませぬ、若しや波多野樣御供なされてでは無いかと存じました。』

右近が姫を伴なはぬを、寧ろ不思議のやうに思ふらしい。

『いや、拙者は今迄賊の行方を尋ね居つた處ぢや。……望月氏は何と致された。』

『玄番樣は貴下樣が御上の御供をして居られる筈とお言ひ置で、外庭の木立の方へ搜しにおいでなさいました。』

大いなる不吉を豫期するやうな小姓の不安顏は、目のみ圓くして、顏は土氣色になつて居る。

『以ての外の事、拙者は姫君が御手づから曲者を御討取遊ばしたと見て、曲者の仆れた芝生へと馳け附けた處、いつの間にか曲者の影が御座らぬに因つて、御構へ內殘る隈無く尋ね廻つたが、到頭影法師さへ見出さぬにより、是非無く之へ引上げ參つた處で御座るぞ。』

右近の辯明を聞いて、小姓が案外な顏をすると共に、一縷の賴みの綱は切れたのである。

絶好の教科書だ

江見水蔭



前田曙山氏の江戸を背景とした幕末小說は天下一品です。その文章は老熟の域に達して而も華麗妍艷を失はず。その構想は怪奇を極めながら、それでも自然に少しも逆らはぬ。此手腕は到底若い作家には及びません。第一に時代錯誤の拋腹絶倒が見當りません。その時の風俗、人情、地理、歷史、悉く能く調べてありますやうで。これが我等老人には一番嬉しく拜讀の出來る點だと思ひます。イヤ若い讀者達には、その時代を知る爲の絶好なる教科書ではないかと思ひます。（寫眞は江見水蔭氏）

『姫君は彼なる高樓より賊をお射ち遊ばしたのだが、夫から何となされたのぢや。』

『サア夫が皆目。』

『何にせよ一大事だ。拙者御館の中へ入つて、共々お尋ね申さう。』

右近は燎原の火に迫はれるやうな忙だしさ、前後の思慮もなく鞘と取逆せ、狂氣の如く迫きに迫いて、廊下の縁へ飛上らんとする後から大喝一聲。

『待たつしやい。』と呼止めたのは望月玄蕃で有る。亂鬢逆まに立ちて、厚い唇からは火を噴くばかり、豹の如き眼は爛々として、人をも鬼をも睨み殺さんばかりに光り輝やく。

『波多野氏、姫君は何れに御在すのぢや。』



迫き込む聲は針の如くに尖つて居る。迂濶に觸れたが最後、完膚無き迄に突き刺されるは必定で有る。

『いや拙者更に存ぜぬ。』

『知らぬと。』と、玄蕃は一足退つて、太い息を吐きかけた。

『只今之にて姫君御在さぬ旨を承知致し、驚き入つた處で御座る。……御寢所にも御在さぬので御座るか。』

存外燈臺下暗しで、翠帳紅閨の奥深く、垂籠めて御在さうも知れぬのだと、右近は自ら考へて、自ら氣休めに思つて見た。

『勿論御寢所は最前に御伺ひ申したが居させられぬ、其外御住居中の間毎にお檢め申したが御在さぬのぢや。』

鬼玄蕃の鋭い眼の光は、右近に對する十分の疑惑と忿怒とを以て、ジリ〳〵と燃え盛つた。

『怪しからぬ御事ぢや。』

右近は三斛の冷水を浴びせられたやうに眞蒼になつた。彼の熱も血も、餘りの驚きに死滅し盡したりと思はれる。

『此上は御庭へ御出遊ばしたものと存ずる外は無い。』

『如何樣。』と、右近は力無い返事を以て迎へた。

『尊公御供申上げたでは無いか。』

『八幡、存じ申さぬ。』

『然し姫君が曲者を御打遊ばした節尊公御側に居られたで御座らう。』

玄蕃は飽までも右近を疑つて居る。色の生白いお平の長顏が、姫君に平張附いて、あはよくば格別の御懇にも入らんと、大反れた謀叛を描いて居るかも知れぬから、際どい隙に誑のかし參らせて、曲者の見屆けに自分一人御供申上ぬ限りも無いのだ。

『其節は居合せたが、曲者が殪れたと見て、拙者一散に見屆けに參つた故、其後の事は存じ申さぬ。』

『然し姫君の御姿が、今の間に見えなくなるといふ道理は無い。』

『萬に一つ、夜叉王奴が姫君を誘拐し參らせたでは御座るまいか。』

右近の憂ふる處は、玄蕃の氣遣ふ處で有る。

『其夜叉は姫君御討取遊ばしたと申すでは無いか。』

然し其討取つたのが首領で無ければ、右近や玄蕃が庭へ飛出した留守に、如何なる手段を以て、姫君を掠め去らうも知れぬのだ。大膽不敵の夜叉王は、姫に天裁を加へるといふ落し文を殘して行つたので有る。

『何れにしても、恁樣な折柄尊公姫君の御側を離れたといふのは手落では御座らぬか。』

遺恨骨に徹して取返しならぬ玄蕃は、鬱憤の氣を逆まに右近に八ツ當りした。

『これは近頃迷惑な。』

『尊公は姫君を西園中納言樣御許婚で、溫恭院御臺の御緣邊とは御承知御座らう。』

『如何にも夫は承はり居る。溫恭院樣御臺所、卽ち今の天璋院樣御緣續きで御在せばこそ、公儀に於ても、一方ならず思召されるので御座る。』

『其麼事はどうでも宜しい。』と、玄蕃は蚰蜒眉を顰めて吸鳴り付けた。

『天璋院樣御緣よりも、一層大切なは、畏れながら已む事無き竹の園生に、近しき御續合に亙らせられる、然る時は當江戸に於て、萬一の事ども御在さうなら、閣老始め關東重職の手落ち、京表へ何と申譯致すと思はつしやる。關東の御緣合などは末の末ぢや。』

鬼玄蕃は肩を怒らし、眼を尖らして躍起となつた。宛ら右近の責任で有るかのやうに肉薄する。怒り猪其儘の意氣は、殆んど當る可らざる勢ひになつた。



『貴殿のやうに言はれても、拙者皆目存ぜぬ事で御座る。』

右近は殆んど當惑した。只一瞬間に姫の紛失、宛ら指から洩れた丸薬を、疊の上に見失なつたも同じで、其行衞を知らう道理はない。

『尊公姫君に何か要らざる入智慧を致されたではないか。何處へ隠れられたか、尊公存じ居らば申されい。』

『これは迷惑千萬、全く存ぜぬ。』

『知らぬというても、尊公其場に居合せたのぢや。』

『いや拙者が御庭へ出た際に、御見えにならなくなつたのぢや。』

『夫だによつて、尊公承知せぬ筈はない。』

いきり立つ水掛論、まかり間違へば、刀にかけて邪正を別たん權幕で有る。若い右近も苛立たしく忿激したが、自分が此の椿事を掃部頭に報告せねばならぬ役目を思うて、僅かに片唾を吞むで息を殺した。

『望月氏、恁樣の事を言ひ合つても詮は無い。一刻の猶豫は千里の相違ともなる、手分をしてお搜し申上げた上、改めて兎も角も御談示申さうでは御座らぬか。』

『フム、然らば全く覺えの無い事で御座るな。』

右近に覺えが無ければ、事態は益ゝ怪奇の上に、深刻化して行くばかりでは無いか。

『申す迄もない事。若し怪賊が誘拐し參らせたとすれば、實以て何とも申さう樣なき御大事で御座るぞ。』



花より麗はしく、玉より艶やかなる上臈が、いぶせき兇賊に掠め取られたならば、其花の如く玉の如き御身は、今夜の中にも何となるであらうか、夫を思ふと右近の胸は鐵の爪で引掻き破られるばかり、苛立たしい苦悶で有る。

『然しながら姫君程の御心得が御在す上に、飛道具はお持ち遊ばされる、賊の二人三人を御制敗遊ばすは容易い事、さらでも

人をお呼びなさらうものを、何の音沙汰も無く御行衛を失ふといふは、殆と〳〵合點の行かぬ事ぢや。』

玄蕃はまだ幾分かの疑ひを、右近から拭ひ去る事は出來なかつた。恐らくは右近奴が姫と木立の中へでも紛れ入つて、少時話しを交した後、別れ〳〵に御住居へ戻つて來たのでは無いかといふ一縷の希望と疑念とが有つた。

『波多野氏一緒に越せられ、今一度御座敷をお尋ね申さう。』

言ふにや及ぶと、右近も直に後に續いた。凡そ疑がはしいと思ふ隈々を尋ね回つて、最後に御寢所へ伺候すると、先刻必死の精根を罩めて、右近が忍び寄つた花神の祠、薫暖緩く伸びんとする紅閨は、倘媚めきの名殘を止めながら、黄鳥の夢は敢なく驚破されて、芳氣空しく殘るばかり、右近が茫然として金屛に凭つて立てば、玄蕃は御枕邊に蹲まつて、無念の筋骨を張りはだけた。

『オウ望月氏、夫は。』

右近が氣附いたのは、蒔繪の懷紙臺に載せたる一封の書附、玄蕃も殆んど同時に夫を手に執つた。

『何か認ためて御座るが。』

閃めく絹燈の光を受けて、物をも言はず玄蕃は夫を披いた。

『飛道具を以て我等の首領を射ち候、秦姫に

治し、誓つて復讐を致すべく、只今姫の一身を申受たる事に候、萬々一首領夜叉王殿手傷重くして落命に及べば、姫の一命を以て償ひとなすべく、幸ひに首領無事に候得者、姫の命だけは別狀なかるべきに候。因つて首領療治中は、姫に介抱致させ候ものなり。』

二人は呀と苦しい唸りを丹田の底から洩した儘、身體中が此時に爆裂したかと思つた。高貴の上﨟を誘拐し行くさへ有るに、奴婢の如く怪我人の賊の介抱を勸めさせるとは、天をも人をも恐れざる言語道斷の申し條、此分ならば姫の尊く淸き身體は、無慚の兇賊の爲に、落花狼藉の憂目を見せられるは必定だと、二人は虛空を摑むで喘ぎ悶ゆるばかりだつた。

首無き死骸

小梅の御住居は忙だしき暗雲に包まれ、不安と恐怖とが、小姓や侍女の胸に食ひ入つて、何れも生きた空はなかつた。今にも又誰かゞ神隱しに遭ひはしないかと、大きな聲も立て得ず、荒い息も吐かれないのだ。

不思議とも奇怪とも、譬ふるに物無き姫の失踪、全く妖魔邪神の荒ぶる仕業としか思はれぬ。人間業なれば、如何に巧妙に立廻るとも、何等かの手懸りを殘さねばならぬので有る。

　極内に水戸館の重役にも相談して、姫の行衞は八方に搜索され、夜叉王の隱れ家と覺しき邊は、草を分け瓦を起して詮議したが、杳として何の獲る所も無く、二日經ち三日過ぎても、そよとの音信も無い。萩の門泰姫といふ高貴の上﨟一人、天下の膝下の江戸の眞中から消えて了つたので有る。剩さへ姫の許婚なる西園前中納言雅信卿まで怪賊の爲に奪ひ去られて、影も形も見えなくなつたでは無いか。窃かに吉原の里へ探りを入れて見ても、先の夜きり姫と共に引上げてから、梨の礫の音信が無いので、御寵愛の音羽太夫は、本木に優る末木無しと見捨てられ、再び御運びは有るまいと、神に祈り佛に念じて、今一度の御見を願つて居るといふ事が知れて見ると、中納言まで今以て兇賊の生擒となつて憂目を



見て居られるのである。

右近は姫の捜索を、公儀へ申出ようと主張したが、夫は鬼玄蕃が堅く執つて聞入なかつた。のみならず水戸重役も、深く同意しない。姫の失踪が幕府に取つては少なからぬ有利であるから、手を拍つて喜ばれるのが忌々しいので有る。從つて力を入れて、御行衛を捜し求め呉ようとは信じられぬのだ。

只不思議な事には、怪盗夜叉王なるものが、今迄は幕府の役人、乃至は御用達の大町人、或ひは譜代の小大名など、凡て關東方の屋敷を荒すのみで、勤王の匂ひの有る處へは、頼むでも押入るやうな事がなかつたから、世間では的確勤王方浪士の仕業のやうに考へられて居たので有る。夫が俄かに飜へつて、西國黄門や姫君に仇をするやうになつたのだから、夜叉王必らずしも勤王贔屓では無く、只寶を奪ふのを主眼とする兇賊に過ぎない事になり、益々出處進退が不明になつて、朧の見當さへ附かなくなつた。

右近は今更鳶に油揚を浚はれた形になつた。自ら手を下して、姫を弑虐せねばならぬ地獄の苦艱は、偶然にも免かれ得たが、魂も摺り減る迄に思ひ詰めた姫の身體を、不敵の兇賊に奪ひ去られ、生かすも殺すも、彼の思ふ儘に弄そばれるのだと思ふと、躍り上り飛び立ち、地轄踏むでも癒やし難き千載の怨み、夜光の名珠を溝泥に埋めたよりも勿體なく、齒軋り嚙むで夜も眠られぬ迄に思ひ惱むだ。

どの方面へ出た捜索の者も、盡く手を空しうして歸つて來る五日目の午刻過ぎ、右近は彦根殿の屋敷へ出て、此程の經緯を告げ、後の指揮をも受けべく、夫となく小梅の御住居を立出で、大川端を首尾の松の渡船を渡つた時に、淺草側の淺洲の葦の中に打上げられた溺死體が有つて、五六人の物見高い人々が、河岸から氣味惡さうに覗き込み、不吉な鴉が低く鳴いては飛び交して居た。

右近は何心なく、船頭の指さす死骸の方を見たが、溺死體は正しく女で、白の着物に總縫の袿衣が、紅葉の錦の散り受くやうに、底清く澄み渡つた水に流れて居る。

『どうも之は、只の土左衛門ぢやねえ、此着物で見りや、御殿勤めの女中に違ひねえよ。』と、船頭はしたり顏に言つて、ズシリと棹を突いた。

『ぢや船頭さん、奥女中か何かゞ惡さして、男の胤を宿したで、思ひ詰めて身を投げたぢや無いかね。』

乘合の客が當推量を星を指すやうな事を言つた。

『ぢや素破らしい別嬪だらう。椎茸髱ぢや惜しいもんだ。』と又一人が口を出す。

『左様さのう。土左衛門になると、色が紅白になるから解らねえが、どうも別嬪に違えねえ。惜しい事をしたもんだ。穩て返

む時知つてりや、抱き止めて俺の家へ連れ込んだんだがなあ。』

年中身投を見馴れて、殆んど麻痺して居る船頭は、一旦突いた棹を上げて、河岸の揚場へ船を寄せようとした。

『下らねえ事を言ひなさんな。……顔は見えねえのか。……女の土左と言ふ者は、仰向いて流れて來ると言ふが。』

『左樣よなア。』と、物好の船頭は、行きがけの駄賃の棹先で、グイと死骸を突くと、靜かな水が一搖して、浮いた死骸がグルリと横向になつた。途段に船頭は頭の腦天から吹切るやうな叫びを擧げた。

『ワア大變だ、此土左衛門には首がねえ。』

船頭は眞蒼になつて、忙てゝ船を揚場へ着けたなり、氣味惡さうに陸へ飛上つて了ふ。乘合ひは我遲れじと、ドヤ〳〵上つて了つた。

手足は白く尋常で、首の無い女の死骸、身には白綸子の召物に總縫の袿衣、之が尋常一樣の女であらう道理は無い。右近の身體には火の流れのやうな血が熱沸して、四肢はブル〳〵と痲痺した。

『姫君では御在すまいか。』

蟲が知らすやうな怯えに胸を轟ろかせながら、仔細に不思議な死骸を見極めようとした。ダラリ水の中深く垂れた手、淺ま

しく股まで現はして、小さな魚のせゝるに任した足、何れも尋常に、蠟より白いので有る。只怪しむべきは、弗つり搔き切られた首の痕は、底に赤味を滲ませながら、白く不規則に爛れて居た。白綸子に袿衣の紅絹裏、見覺えが有るやうでも、明瞭した事は言はれぬが、若しか之が姫君の御亡骸では無いかといふ恐怖が、昂奮した手足を益々ワナ〳〵と顫はせた。

『船頭、少々公乃は此死骸に不審を存ずるにより、當地町役人を呼んで貰ひたい、乃公は御本丸大番組頭の波多野右近と申す者ぢやから、左樣に申してくれい。』

大御番組頭ならば容易ならぬ大身、其武家の吩咐で有るから、船頭は橫飛びに驅け出し、直に町役人を連れて來た。右近は死骸に心當り有る旨を告げ、直に使を小梅御住居へ走らせ、玄蕃を呼び迎へて、首なき骸を見せた。

『恁樣な死骸と相成つては、拙者目印といふものが御座らぬ、左の御耳の下に、大きな黑子がお有り遊ばしたが、夫も首がなくては、何とも見極めが附き申さぬ。』

右近と同じやうに、玄蕃も半信半疑で有る。只首領夜叉王の命に及ぶ時、姫の一命は無いものと思へと有つた落し文の文言による時は、夜叉が落命に及んだので、怨みを姫君の上に移し、恐れ多くも殺害に及んだかと疑はれるが、何の爲に首を馘し去つたか、全く了解に苦しむので有る。

『然し此着衣に見覺えは如何。』

『されば拙者は、御寢所入りの後の召物は承知致さぬ。』

二人が眉を寄せて當惑して居る處へ、遲れて驅け附けた若衆小姓は袿衣を見ると忽ちワッと泣き出した。

『之は御上のに相違御座いませぬ。私は能く存じて居ります。御肩から御襟には藤の花、御裾には染分の紅葉、四季の花模樣で、御上殊の外お好みの召物で御座います。』

と淚ながらに證言した。

首は無くとも此着物を召すからはと、死骸は內々で小梅へ引取る事になつた。白綸子も姫の御寢召、扱帶の水色縮緬も紛れなき御料で有る。

館の中は俄かに騷がしく然も急に寂しくなつて、上を下へと騷動した。玄蕃は目眥盡く裂け、怒髮冠を衝かんばかり、必ず夜叉王一味の兇賊を捉へて、其肉を啖はねば饜らぬと罵しり、右近は悲痛の淚を嚥むで、碎くるばかりに拳を握つた。

『然し此御死骸は、まだ姫君御尊體と極つた次第では御座らぬ、若しも後になつて、姫君外に御在したといふ事にもなれば、姫君として御葬禮を致すは早計につき、此死骸は鄭重にして、極內密に一應假に埋葬致し置く事に致したが宜しからうかと、手前方重役一同の評議で御座るが、如何なるもので御座らう。』と云つたのは、水戸館の家老格で有つた。玄蕃も此首無き

死骸を姫と思ひながらも、姫で無い事を希がふのだから、穩便な館重役の說に從つて、程近き寺院へ葬むり、內々で供養をした。

『拙者は飽く迄夜叉一類の根據を搜し、必ず復讐致さねばならぬ。成程姫君は彼樣な事にお成り遊ばしたとしても、まだ中納言樣落附きが知れ申さぬ。』と、玄蕃は苛々と狂犬のやうになつて居る。

『拙者とても同樣、江戸には制統といふものが無いも同然、町奉行手附の役人は何を致し居るか、誠に以て祿盜人も同樣の沙汰、拙者も義として見過す事は相成らぬ、御同然夜叉王一味を搜し出し、罪を數へて首を刎ね申さずば承知ならぬ。』

吳越は終に同舟となつた。同じ目的に向つては、利害は一つで有る、何處までも助け合つて、夜叉退治に盡さうと誓言した。

夜叉との對戰

『望月氏、愈よ時節到來、御同樣の念願の屆く時が參つたぞ。』



美男の顔に一入の英氣を郁やかした右近が、滋々小梅の寂しい御住居へ尋ねて來た。

『ヤア何と御座る、夜叉の隱れ家が知れ申したか。』

『玄蕃直にも蹶起せん意氣組で有る。怪盜夜叉王の所在さへ知れれば、假令烈火の中を潜つても、驀地に飛び蒐らねば已まない。

『いや知れたとは御座らぬが、彼節夜叉が姫君の簡先に懸つて、落命致したとは信ぜられぬ事が出來申した。』

『然らば首尾の松の姫君御尊骸は何と御座るか。夜叉が落命致したにより、姫君御命を縮め參らせたでは無かつたか。』

夜叉の一命が直ちに姫の一命に懸はるといふ落し文で有つたから、果して兇賊の命助かつたものとすれば、姫の御命だけには恙なかる可き筈で有る。

『其邊碓とは申されぬが、夜叉王丸と申す名前にて、彦根殿へ大膽不敵の申入れを致した由、然らば夜叉王といふ賊の首領は、未だに存命と思はねば相成らぬ。』

『如何樣。……して如何なる事を申入れて御座るか。』

『之は極めて御内分に致される事、從つて町奉行其外の役人にも極秘の由で御座るが、夜叉が明二十五日の夜に、御大老御屋敷へ推參致すといふ前觸を致して參つた。』

『實以て不敵な痴者。……例に由つて書狀でも遣はして御座るか。』

『書狀では御座るが、夫が不思議にも、殿御居間の文机の上に置かれて有つたといふ事、彼用心嚴しき御上屋敷の奧、何として入り込むだ事か、畢竟切支丹の魔法を使ふとより考へられ申さぬ。』

飛道具と切支丹とは、如何なる勇士も手抗はれぬ脅威として、其頃の人々から怖氣を慄はれてゐた。

『魔法であれ、妖術であれ、夜叉王參るとあれば、拙者引捉へて、屹度叩き潰さねば腹が癒え申さぬ。』

忿激窮まつた玄蕃は、荒浪のやうな息づかひを、隆々たる双肩に込み上げた。

『されば夜叉を召捕る好機會到來と存ずるにより、貴殿を御屋敷へ御案内致すやう、業に殿へ申上げおいて御座る。』

『辱じけない。然し彦根殿屋敷へ罷らねば相成るまいか。』

右近が功を獨に收めようとせずに、玄蕃を誘つて吳たのは感謝するが、元々勤王の巣に生ひ立つた彼は、日頃氣嫌ひする彦根殿の爲に、兇賊を召捕るといふのは、敵の爲に犬馬の勞を盡すに當つて、聊さか逡巡かずには居られなかつた。

『神出鬼沒の夜叉といふ曲者、如何なる手段にて入り込むか知れぬにより、到底御屋敷に參つて宿直致さぬに於いては、姿を認める事すら相成るまい。……貴殿の望みは只夜叉を召捕り、

姫君の仇討をするに有る、拙者とても其通り、然らば何處に
あれ、夜叉の參る處に張込まねば相成るまいと存ずる。』
右近の言葉は理の當然で有る。彦根殿の爲に夜叉を退治る
では無く、姫君の爲に報復するので有る。
『可し、然らば直に參らう。』と、玄蕃吸鳴つた。意氣昂然と
て、天馬風に嘶なくの概が有る。二人は打揃つて霞ケ關へ向
した。殿は御休息の奥深く、内々二人を引見された。表立ては
家臣の目につき、事が重大になるからで有る。
『オウ其方は望月玄蕃と申すか、よう參つて呉た。其方の事は
之なる波多野より聞いて承知致し居るぞ。……二人なれば憚か
らず近う寄るがよい。内談ぢや。』
飛鳥落す天下の一﨟職も、奥殿深く寛ろいでは、[illegible]々たる温
容が人を惹き附けるばかり軟らかい。



夜叉の謂ひには、內實心を傷めて居られるらしい。
『玄番、其方の申すは一理有る、然し上役人の勤めとしては、夜叉の事にのみ懸り切つては居られぬにより、多少目まだるい節もあらうぞ。』
其外の事といふのは、尊王浪士の征伐が重だらうと、玄番は便々たる腹の底で嘯ぶいた。
『夜叉の事は其方達に任すに因つて、委しく話を致すが、予の机の上に置いて有つた書狀によると、予に大老職を御辭退申上げいと有るのぢや。』
右近はゾツとする程魘えた。天下の政道を掌に握る一の人に向つて、斯まで大膽不敵の指圖をしようとは、思つても見ぬ不敵さで有る。
『のみならず、今日の儀予が便々と職に居る時には、必ず天誅其身に下ると認ためて有つたのぢや。』
殿は興有るもののやうに、呵々と笑はれたが、其聲の底に力が無いと、玄番は笑止に思つた。右近は只恐入つて、青疊へ兩手を支くばかりで有る。
『左樣な事を申し參るからは、必定尊王かぶれの者と存ずる。只一場の脅に過ぎぬのぢや。斷才にかけるには足るまい。』
『御意に御座りまする。浪人共に天を翔り地を潜る術が有りませうとも、蟷螂の斧、及びも附かぬ事に御座りまする。』
『然し夜叉は猶左樣な事を申し居る。予の首を挙げる力の有無を示す爲、本月二十五日、卽ち明日ぢや、當奥向へ押入り、予の面前に於いて、所藏の太刀並びに床に据ゑたる古高麗の青磁の香爐、上より拜領の龍王の置物を奪うて、如何なる業をも成し得る事を示すと申すのぢや。』
忍びの術といふ事が、直に右近の心中に泛むだ。
『曲者は些細の忍術でも心得居るので御座りませうか。然しながら邪は正に克たず……。』
『忍術も魔法も御座らぬ。玄番此度こそは必らず摑み挫いで吳れまする。彼奴ばかりが世の中に強い者と御座らうか。凡そ眼に觸れる者なれば、揃つて怯れを取り申さぬ。』
殿は二人の意氣込に全然安心された。之が表の方に絡まる事なら、右近を招くには及ばぬのだが、奥向限りの內事で有るから、殿自身の威信の上にも成るたけ家來達には知らせ度なかつた、慾して曲者の闖入を防ぎさへすれば、事故無く濟むで、何等の忌はしい沙汰も、下々へは傳はるまいと思つたのだ。
『就きましては右御刀、並びに御香爐、御置物等は、矢張御床へ御飾置きに相成りまするか。』
『いや明日の事で有るによつて、最早飾り附致したであらう、之は局の者前々より頼み居るでなつ』
殿は胡散な苦笑を泛べられた。局の者といふ二十二三[illegible]姿の[illegible]



の方、其愛妾の誕生日が奥向に於て賑々しく催ほされる事を、右近は目の方り思ひ出したので有る。然らば床へ飾るのは只それだけの品では無く、數々の尊い寶物を擴げられるは必定、然も豫じめ其日を知つて居て、夜叉が前觸を寄越したのであるから、天眼通とも神業とも驚き呆れる外は無い。右近は益々敵の容易ならぬのを思つたが、玄蕃は殿の前をも憚からず、拳を固めて執圉いた。

『恐れながら、其お飾り附を遊ばす御座敷拜見願はれませうなら、難有き仕合せに御座ります。』と、右近は面を上げる。

『オウいと易き事で有る。……これ浪を之へと申せ。』

遥か退つて控へた侍女に命じると、御寵愛の御部屋阿浪の方は、しとやかに入つて來て、次の間に手を支いた。流石に聞ゆる美人の譽れ、細額の瓜實顏に黒目勝の涼しい目元、撫肩の優しさ、スンナリした婀娜たる姿、之に一層の氣品を持たせたなら、秦姫君其の儘であらう、他人の空似とは言ひなが

ら、よくも姫君に似参らせた姿だと、玄蕃は徐ろに姫君の不運を思つて、鬼の眼に涙を泛べた。

『然らば浪ともよう談合致しくれい。又奥向役人の者も一兩名遣はすに由つて、手落無きやう致したがよい。』

殿は阿浪の方を二人に紹介せた後、其席を立たれた。入違ひに奥家老澁川長兵衞、用人の枝田主馬が加はつて、明日の對策を講じたが、奥山の花守同然の老いさらぼひたる家中者に、元より鮮かな工夫などの有りようはなかつた。

座敷の床の間には、果して殿が言はれた三種の外に、金銀珊瑚瑠璃瑪瑙七珍萬寳、目も眩ゆきばかりに、飾り立てられて有る、どうでも夜叉王が見逃し難き寳物で、側へ寄るさへも遅れが出る位で有る。

『此種々の御重寳は、何時までお飾り置きになりますか。』

『左様で御座りまする。大抵明後二十六日迄此儘に仕つりまするが。』と、澁川奥役人は畏る〳〵答へた。座敷の隅に煙の如く夜叉王が佇ずんで居はしまいかと、内心戰のき慄へるらしい。

『波多野様、此儘に致して置きまする事が、若しお悪いやうで御座いましたなら、明日御用濟次第、急いで取片附け、御土藏へ仕舞ふやうに致したら如何で御座いませう。』

阿浪の方も心配さうで有つた。恁いふ綺羅びやかに燦けき寳物を飾る事は、怪盜の慾心を挑發するやうなものである。

『いやお部屋、之は此の儘明夜も飾つて置かれたが宜しう御座る。』と、今迄默つて居た玄蕃が、突如として口を出した。ジャラジャラと媚めかしい愛妾などに口を利くのは無調法ながら、之を仕舞はれては、夜叉を誘き寄せる事が出來なくなる。

『では御座りまするが、夜叉とやらは屹度御寳物を目蒐けて参らうと存じますが。』

阿浪の方の心配さうな顔を、鬼玄蕃は冷然と下目に見た。

『夫が此方の覘目で御座る。此數々の寳物に因つて、夜叉奴を引寄せ、取つて押へるのが上策で御座らう。』

『如何にも、夫が宜しう御座らう。』と、右近も同じた。

『我々共宿直申上げるにより、此御飾り物は、矢張此儘になされたが宜しいかと存じまする。』

『夫では貴下様が御宿直下されまするか。』と、阿浪の方は吻と安心した。後に跟いて居る侍女達は、右近のやうな美男を奥向の一つ家の棟の下に見る嬉しさに、毎晩夜叉が來て吳ればよいと、互ひに顔見合せて莞爾とした。物言はぬ死んだ寳を山程積まれるよりも、物言ふ寳が男旱魃の目の保養なので有る。

『拙者と望月氏と兩人して、此御座敷と、御緣側の方と、別れて宿直致す事に仕つる。曲者の入り來るは御緣側、若し他所より忍び入るに致しても、幾何かの物音が致さぬ事は御座らぬから、左すれば直に其物音の方へ馳せ附けるで御座らう。』

『然らば外廻りは、奥向役人に於いて、嚴重に固めを附けまするで御座る。』

用人の枝田も始めて元氣附いて來た。夜叉王來の前觸に脅えて居る人々は、戰々兢々として、無け無しの膽が刻々瘦せを覺えるのだ。

『其御固めは御無用になされい。只今も申す如く、賊を之へ誑き入れて召捕るのが、此方の計略で御座る、然らば外廻りへ固めを附ける節は、賊が覺つて引返さうも知れ申さず、第一には御同然限り餘人には知らさぬ密事を、御家中方一般に知らせる事に相成るによつて、旁御固めには及び申すまいと存ずる。』

右近は全く、決死の上にも決死の覺悟で有る。夜叉王殪れるか、我殪されるか、二人に一人は必ず兩立する能はさるものと、最期の臍を極めた。

『望月氏、明夜こそ、拙者は死を以て御當所に詰め申す覺悟で御座る。』

『波多野氏は死を覺悟致されたか、夫は健氣な潔よい事で御座るが拙者は左樣には存ぜぬのぢや。』

呉越同舟の親しみも、時折は小さい憎しみが閃めくので有る。

『然らば何と致される。』

『拙者も夜叉奴と眞面に行逢ひさへすれば宜しい。卑怯にも正體を隱して惡事を致す曲者、一挫ぎにひつ捉へて、微塵に叩き

潰して呉まするぢや。夜叉に向ひさへすれば、なんでも無い事ながら、何分にも姿を見せぬのが殘念でなり申さぬ。』

玄蕃は度々夜叉に飜弄されつゝ、摑むで見れば影法師ばかりなのが、總身を焼かれる程無念でならぬのだ。

『明夜こそは、必ず姿を見せるに相違御座らぬ、假令役の行者でも、形を顯はさずに、恁程の寶物を運び去る事はなり申さぬ。』

『拙者は神佛に念じて、夜叉の出現を祈り申すのぢや。』

苦しい時の神頼みにしても、其苦しさは尋常一樣の苦しみとは變つて、神佛が何と納受するかと、右近は意氣込む中にも可笑しく思つた。

『貴下樣方が御宿直下さるので、妾はどのやうに安心で御座いませう、厚く御禮を申上げます。』と、阿浪の方は涙の出る程嬉しいので有る。まかり間違へば、傳來の珍寶のみで無く、自分の生身さへも、此奥殿から運び去られぬとも限らぬのだ。秦姫君が行方不明になつたとか、殺されたとか言ふ噂が、繆織自慢の鼻の先を無慚に擦過する程、美人の誇りに只ならぬ脅威を與へる。（つゞく）

キング三月號はステキに面白い雜誌が出來ます。ゼヒ御期待下さい。尚四二六頁の『三萬圓大懸賞』と四四〇頁の『キングを讀んで得た利益』には奮つて應募して下さい。

大英雄の面目躍如！

愛國の熱誠溢れ、意氣天を衝く！

本書は現代世界の巨人ムッソリニの演說集である。世界大戰後、イタリヤが過激危險なる共產主義に禍ひせられて、將に亡びんとする累卵の危機に在った時、決然として起ち、憂國慨世の黑シャツ青年――學生、在鄕軍人を率ゐて、國本主義を高唱しつゝ擡頭した時代の所謂彼の『回天革命演說』と、更に彼が少壯三十九歲の身を以て政權を掌握してから後の演說を集めたものである。

その肺腑より迸り出づる噴火山的大熱辯！滾々として湧く建國至誠の一大抱負！

譯者下位春吉先生は……



イタリヤを理解せる點に於て我國の第一人者。多年ムッソリニと親交あり、歐洲大戰中、伊國決死隊に投じて活躍、文筆の人としても既に定評あり。本書、譯文も亦流暢簡明、鐵腕宰相の眞骨頂躍如たり。

意氣雄略四海を呑み、民衆の胸奥にひしひしと喰ひ入る革命演說。光榮あるローマ進軍を遂げ首相就任後、悠々數百の議員と反對黨を睥睨して、傍若無人の大壯語。或は、祖國の爲に死せる戰友を弔うて綿々悲壯を極むる追懷の辭。或は勞働者に、或は義兵に、或は學生に諄々と偉大なる新國復興の理想を說き、大伊太利の精神復古とを說く。眞に、天空を劈き、地軸を搖かし、鬼神をも畏服せしむる大壯語！

今や我國は、思想に經濟に外交に教育に產業に勞働に、諸般の問題に國を擧げて焦慮するの秋、この書は心ある士にとりて頂門の一針！我が帝國の將來を憂ふる者の再讀三讀、猛省すべき絕好の資料であり、現世への青天の霹靂である。

青年も、學生も、軍人も見よ！政治家も、實業家も、教育家も讀め！

烈々魂を搖かす此內容！

⊙革命演說

- ▲ウヂネ市の演說
- ▲クレモーナ市の演說
- ▲ミラノ市の演說
- ▲ナポリ市の演說

⊙首相となりて後の演說

- ▲登閣直後の臨時議會に於ける第一獅子吼
- ▲下院議員の論難に答ふ
- ▲上院議員の論難に答ふ
- ▲ソンニーノ男爵を弔ふ
- ▲ロンバルヂーヤ製鐵所の職工に
- ▲ヂェノバ港內勞働者に
- ▲軍功勳章黃金章の勇者に
- ▲ワシントン條約の愚を笑ふ
- ▲ルール問題について
- ▲イタリヤの外交問題
- ▲フアッショ勞働團體に
- ▲國民財政の恢復のために
- ▲世界に於けるイタリヤの發展
- ▲獨逸外相ストレーゼマンに答ふ
- ▲堂々五時間に亙る『昇天の演說』

發行所 東京本鄕 大日本雄辯會講談社 振替東京三九三〇 ｜ 全國書店にあり 品切の時は直接本社へ

誰方もお出し下さい！『大評判の三萬圓大懸賞』

幸運は果して誰方の手に!!

新年號で發表しました本社九大雜誌聯合の三萬圓大懸賞は、今日本中の大評判です。それもその筈、ズラリと並んだ此の賞品の素晴らしさ、**全く雜誌界未曾有の奮發振り**です。

一體貴方には、此の中の何が當るでせう。折角惠まれた**此の福運を逃しては殘念です**。どうぞ問題を良く讀んで、誰方も一人殘らず御投書下さい!!

問題の解き方、投書の仕方は新年號を御覽になつた方には、よくお解りの事と存じますが、もう一度念の爲繰り返して申上げます。

○新年號だけて、本社の子供雜誌と組合せて、すでに一回投書された方に申上げます。

(一)新年號の本誌には第二號の欄を出し、本社の子供雜誌には第一號の欄を出して一組×

×になるやうにしましたが、この二月號は反對に本誌には第一號の欄を出し、子供雜誌には第二號の欄を出しました。

(二)ですから、新年號と同じ樣に、本誌のと、*

*子供雜誌の二月號のと組み合せますと、やはり二匹の動物があらはれます。

(三)それを一匹宛、夫々の投書用紙に貼新年號の時と同じ方法で投書して下さい。

◎賞品と投書の仕方は次頁にあります

(四)投書の仕方が少しでも規定に違ひますと、無効になりますから之は呉々も御注意下さい

◎本誌の新年號の檻と、この二月號の檻とを組み合はして、はじめて投書なさらうとする方に申上げます。

(一)新年號の本誌には第二號の檻を出しておいたでせう。そしてあなたは第一號の檻がこの二月號に出るのをお待ちになられた筈です。

(二)その第一號の檻がいよ〳〵こゝに出ました早速組み合せて二匹の動物を拵へて下さい。

(三)投書用紙は、新年號にもあり、この二月號にもありますから、動物を一匹づつ兩方に貼つて、一度に二枚投書して下さい。

(四)投書の仕方は次に詳しくありますから、よく讀んで間違ひの無い樣に願ひます。少しでも違ひますと、無効になりますから。

(五)投書〆切は二月三日、發表は本誌五月號、(四月號にも發表がありますが、それは新年號だけで投書した方の發表ですから念の爲め申上げておきます。)

第一號檻



第二號の檻は本誌の新年號又は子供雜誌の二月號にあります。

(切リ取ル)

投書用紙

キング愛讀者

住所

氏名

(切リ取ル)

注意

投書はこの用紙を用ひなければ無効に致します。投書の仕方は次の頁にあります。

スバラシイ賞品

特等賞品 八十名に進呈（一品二十八圓以上の品です）

△西川の夜具蒲團（新銘仙三枚組）（西川商店特製）二十組
△ナポレオン蓄音器（大衆號）（大峯商店發賣）二十台
△富士自轉車（子供用）（大日本自轉車株式會社特製）二十台
△天賞堂の十八金側腕時計（天賞堂特製）二十個

一等賞品 百九十名に進呈（一品十圓以上二十圓迄の品です）

△プドウセル地（市田商店特製）五十反
△電氣應用模型電車（朝日科學玩具製作所特製）四十台
△クローム側腕時計（天賞堂特製）六十個
△三菱電氣アイロン（三菱電機株式會社特製）四十個

二等賞品 八百五十名に進呈（一品五圓以上七圓までの品です）

△ノーブル美顏器（東京美容館特製）二百個
△マスタール組合（五百番粉白粉外）（尚美堂特製）二百組
△スワン萬年筆（1號）（スワン萬年筆製作所特製）二百五十本
△昭和漆器ペン皿（榮光社特製）二百個

三等賞品 壹千百名に進呈（一品二圓以上三圓までの品です）

△マスクー組合（百番水白粉外）（尚美堂特製）三百組
△凸形フエバー體溫計（三田村商店發賣）三百本
△スワン萬年筆（2號）（スワン萬年筆製作所特製）三百本
△歌麿染裏地（谷島商店發賣）二百反

四等賞品 四千二百名に進呈

投書の仕方

間違ひない樣によく讀んで下さい

(一) 第一號の檻と第二號の檻を七つづつバラバラに切りはなします。（黑い太いタテの棒の通りに）

(二) 切つた十四の切れはしを、別々に二匹の動物が出來上る樣に考へながら七枚一組に並べて下さい

(三) かうして出來た二匹の動物の中、どちらか一匹（どちらでも結構です）この二月號の投書用紙の點線の中にはめこんで貼つて下さい。

(四) もう一匹の動物は子供雜誌の二月號の投書用紙に（之は子供の雜誌と組み合はせる人）貼つて下さい。

(五) 本誌の新年號と組合はせる人は、そのもう一匹の動物は、新年號の投書用紙に貼つて下さい。

(六) 投書用紙は外がはの點線（キリ取ルとある所）から切りはなして縱五寸橫三寸（葉書大）の厚紙（ボール紙、その

どれが當るでせう

四等賞品 四千二百名に進呈（一品一圓七十錢以上二圓二十錢までの品です）

△キング川口ハーモニカ（増宗樂器部特製）六百個
△キング川口ハーモニカ（吉田樂器店特製）六百個
△蝶印ハーモニカ（日本樂器株式會社特製）六百個
△サンキューハーモニカ（西村商店特製）六百個
△メタリコンハーモニカ（須賀商店特製）六百個
△スターハーモニカ（新見商店特製）六百個
△ミヤタバンドハーモニカ（宇野商店特製）六百個

五等賞品 壹萬九千人に進呈（一品四十五錢以上六十錢までの品です）

△美眼液パミール（本社代理部特製）三千個
△美眼藥スマイル（玉屋合名會社發賣）三千個
△スワンシャープペンシル（スワン萬年筆製作所特製）四千本
△オリヂナル香水（安藤井筒堂發賣）二千本
△家庭常備藥オゾ（都南莊發賣）三千個
△リソウバン（特許紙製絆創膏）（日進工業合資會社特製）四千個

六等賞品 二萬五千名に進呈

△美麗繪ハガキ十枚組＝本社特製＝二萬五千組

當選者總數五萬四百廿人

＝正解者多數の時は、くじびきで當選者を決め、更にくじびきで等級を決めます＝

他ハガキより厚い紙なら何でも結構）に貼つて住所氏名をはつきり書いて下さい
官製ハガキに貼つてはいけません。

一 宛名の書き方

二錢切手　東京市本郷區　大日本雄辯會講談社　懸賞部

（七）二錢切手を貼つて下さい。一錢五厘ではいけません。（投書用紙一枚づつに二錢切手を貼らなければいけません）
（八）〆切……二月三日
（九）發表……本誌五月號

注意

（一）二枚同時に投書する人は、一枚づつ別別に投書して下さい。萬一、袋に入れたりなどすると無効になります。
（二）上の賞品は、各等とも二つに分け、一月三日〆切の分に半分進呈します。
（三）正解者多數の際はくぢびきに致します

◇愛讀者の皆様がお買物は代理部に限ると申されます◇



視力増進藥

エモヂン

◇老眼が若返り近眼恢復
◇視力が驚く程强くなる
◇眼性がよく丈夫になる
◇頭腦の明晰となる事妙

奇藥エモヂンは支那奥地から産出する或る植物の種子で老眼を若返らせ近眼を恢復し視力を増進させて眼を丈夫にし又頭腦を明晰にして不眠症、神經衰弱等にも著しい效を奏します細かい粉末で一寸コーヒーに似て風味もよく、保健飲料として最近一般家庭にも實用され客の接待にまで使用される樣になりました。

價は十七日分壹圓五拾錢五十五日分四圓送料内地十五錢領土五十錢

動脈硬化 狹心症に

評判の

プロモール

醫學博士 百瀬五郎先生
ドクトル 村山富治先生
醫學博士 田所良吉先生
實驗推奬



血壓を低下させ、動脈硬化を防ぎ恐るべき中風や腦溢血を豫防する最新良劑として、多數の專門家も賞用され亦同病者から非常な評判を頂いて居るプロモールは此處でも聲を大にして御推奬申上げる事が出來ます。

十日分貳圓一ケ月分五圓送料内地十五錢領土五十錢であります

慢性 胃腸病の秘藥

ニグリン

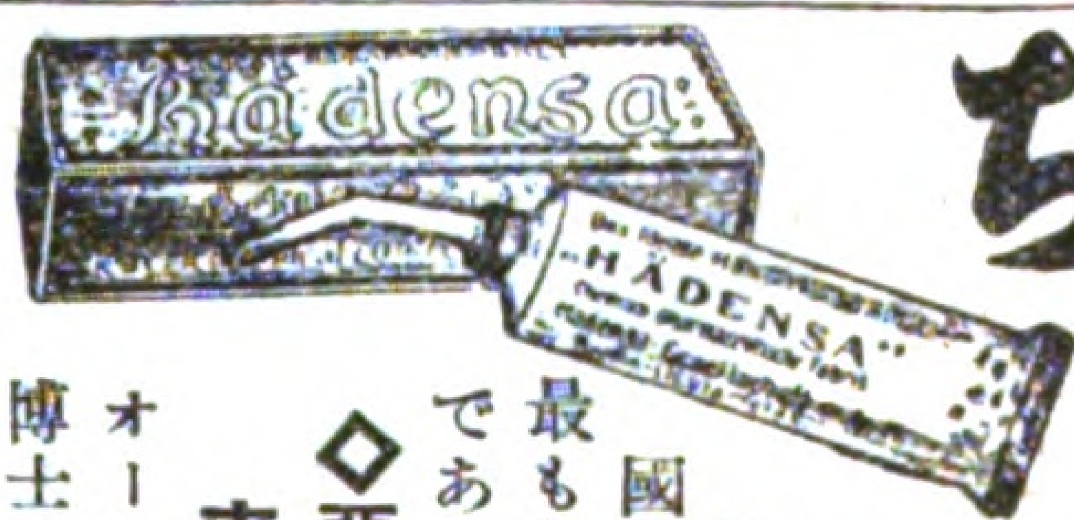
一時抑への胃腸藥は數多くありますが慢性痼疾に是非御奬めしたいそれほど信用出來るものは御座いませんでした幸にこのニグリン丈は五年十年の慢性に用ひて之はと驚くほどの效果がありますす然も南支一帶で賞用されてゐる秘藥ブルヘルニグリンを主劑とした眞に珍しい胃腸藥であります。



多年お苦しみの方は早速お試し下さい。

一週間分壹圓貳拾錢 二週間分貳圓 五週間分四圓五拾錢 送料内地十五錢領土五十錢であります

ぢ ヘデンザ



ヘデンザは伯林大學臨床科を始め歐米各國の醫界に賞用された最も合理的優秀な痔疾藥であります。

◇惡性痼疾に素晴しい著效◇

オーストリアのブロクス博士は百藥效なき自身の惡性痔疾がこのヘデンザで始めて快癒したとて激賞せられ又獨逸のコ博士ス博士ゲ博士を始め多數大醫學者がその著效を立證して居ります。

注入に便なる樣チューブ入りですから少しの刺戟もなくあらゆる痔疾を易く治療する事が出來ます。

十回分チューブ入價一圓五十錢送料内地十五錢領土五十錢です

淋疾最新治療

アルホビン

獨逸ゲーデック會社鑑製

アルホビンは尿に絶大なる殺菌力を與へ服用後僅か二三日にて、混濁した尿を淸澄にし、排膿不快な疼痛は數日にして輕減永年の慢性淋疾にも驚嘆すべき卓效を奏します故治療は必然です。

五十球入（約十日分）三圓五十錢
送料内地十五錢領土五十錢です



本當によく效くと評判の

わきが藥「ゼット」

この藥を塗布しますと腋下腺に浸入して皮膚穴を塞いで發行分泌を止めますから自然惡臭も出なくなるワキガの最も進歩した藥であります。

一函入二圓五十錢送料内地十五錢領土五十錢





いぼ黒子タコ 安全除去藥

ヒドロアミーン

イボ、魚の目、黒子、タコ等の小さなものは一回大きなものでも數回の塗布で綺麗にとれます。劇藥類は一切使用してありません故、絶對に皮膚をいためず、而も用法が極めて手輕です。他の方法で效なき人は一度試み下さい。

一瓶一圓（送料内外共四錢）

◇病は生命を奪ひ！良藥は病を撃退す◇



人生に最も必要なる

精力と根氣を補ふ

支那最古の高貴藥

壽仙

效驗頗る妙なのは神經衰弱と兩性の不全—不眠症—健忘、勞衰る煩悶する、躁狂り易い、或は陰萎早漏、少精、腎虚せぬ、或は全く不能ヒステリー、とか言ふ人が用ひられたら必ず驚嘆する偉大な効力があります。

六回分參圓十二日分五圓五十錢　送料内地十五錢領土五十錢

肉蓯蓉

一名子寶妙藥



「肉蓯蓉」は支那泗川省産のもの之は身體を溫める作用があり、精力を增し根氣を整へ神經衰弱にも奏効し、特に不姙症の婦人が之を用ひて子寶を得た報告も來て居ります。

兎に角之は普通の藥などと異り不思議な効果の表はれる事は實驗した多數の方々が皆一應に感謝されて居る處であります。

約十五日分貳圓約卅日分參圓八十錢　送料内地十八錢領土五十錢

今日の女性

御婦人は健康と元氣を養ふ爲お藥や衞生用品お求めになるのにおづおづなさいます。しかし、御自分の輝く元氣さは家族全體を明るくする大問題で、文明人ほど女性としての健康美を養ふ事に最も勇敢です。

慢性胃腸病婦人病に折紙付

二貫や三貫はらくらく肥る

ラヂウム溫灸器

どんな慢性でも藥の效かぬ痼疾でもこのラヂウム溫灸器の敵ではありません。本器は使用一回目から如何なる病弱者も、健康者同樣の食事を攝りつゝメキメキ恢復し二貫や三貫は忽ち肥つて全快するのが通例。胃腸病婦人病には折紙付と定評を得、藤卷、西田の兩博士を始め專門大家二十有餘名も實驗推奬されて居ります。

◇この溫灸器は舊來の灸術とは全然別種な療法で、『熱くなく痕の殘る心配もなく』時に懷爐代用ともなり、その效力の實に顯著なる所から最近愈々益々素晴しい評判になりました。尚實驗報告は別册になつて居りますから御希望の方は御申込下さい。

御申込次第　美本百頁の　**說明實驗錄を進呈**

藥及特效艾五週分付　上等桐箱入特製一揃　**拾參圓**

送料（書留荷造費）内地八十錢　領土壹圓也



一名（寢室用安全スプレー）

最も完全で輕便な子宮洗滌器で歐米各國の醫學界始め一般の婦人の間にも愛用されて居ります。之は從來のものと異り獨特な裝置がしてありますから何處でも至極簡單に僅か一二分間で充分洗滌が出來ますから便利です。新時代に覺め常に家庭の平和を願ふものはお早く一具御備へ下さいませ。

一組四圓五十錢洗滌劑百回分金壹圓送料内地三十錢領土六十錢



吾妻溫浴素

諸博士推奬　效果日本一

乳白無臭の粉末で之を每日御風呂に入れ混浴しますと、自然の溫泉に這入るのと少しの變りなく婦人病は元より神經痛リユウマチス腰痛肩のこり子宮病等に實によく效きます。どなたも御試し下さい。十回料一圓五十錢廿回料二圓八十錢送料内地十八錢領土六十錢



◇人はとかく死を忘れるが死は決して人を忘れぬ◇

デルモペルス

色白くなる「内服白粉」實驗者が一應に驚嘆

色を白くするには色々な方法や雜多な藥や化粧品がありますが、それ等が果してどれ丈の作用があるかは皆様もよく御承知の事と存じます。

このデルモペルスは他の何れよりも勝れた効果がある許りでなく、身體には少しの害もなく安心して用ひられる最新藥で、目下歐米では「内服白粉」と言はれて大評判されて居るものであります。色黒ソバカス其他、顔を白くされたい方は一度御試し下さい。一回毎にほれぼれする樣な美しさになります。

一週間分一圓八十錢　二週間分三圓四十錢五週間分八圓送料内地十五錢領土五十錢



百日咳の專門最良藥 フステン

軍醫梅村祐松氏が發見創製され今日迄幾百千の幼き患者を救つた評判の專門藥であります。治療困難とされて居る百日咳に斯樣な心強い藥の出來た事は病む子供にも世話する親達にとつても誠に嬉しい事であります。どうぞ御安心を！



一週間分參圓送料内地十五錢領土五十錢

ハレル

どんな頭痛も——五分間

ヒドイ頭痛も只の一服か二服で忘れた樣に退散し頭は輕く晴々してきます。

その效力は實に百發百中常に頭痛に惱む方、平素腦を勞する方は勿論、勉強や事務で疲れて頭がボンヤリした時、ハレル一服で即座に恢復數倍の氣力と、元氣が湧いて來ます。家庭には勿論汽車汽船の御旅行には必ず御用意下さい。

價は小五十錢　中壹圓　大二圓　送料内地十五錢　領土五十錢



イースクルスに絡る奇しくも優しい傳說

此處は蝦夷が島根をつくる大山脈、千軒嶽の神秘境に起つたあはれにも優しい戀のローマンスから、後幾百年山野を驅け廻つて傷した時、或は身體が冷え血行が鈍り衰弱を來した時、服用し塗布して凡ゆる病氣を平癒する神秘藥と珍重されて居る、イースクルスと言ふ木の實は現在内地から移住の村人までが日常滋養強壯劑としてその粉末を服用し又淬水を塗布して打傷や眼病洗滌したりなどして居ります。

イースクリンは

實にこの木の實の秘成分を抽出し更に數種の高貴藥と人參エキスの純良なものを配劑して一層その效力を強くしたものであります。

即ち内服して精力活力を增進し同時に胃腸病一般衰弱婦人病腎臟病神經痛にも偉效し外用として切傷火傷痔打傷にも不思議な效力が認められました。

十五日分瓶入貳圓三十五日分四圓送料内地十五錢領土五十錢です。



アイマー

肥り過ぎが程よくやせる二十貫もあつた脂肪肥滿の男子がアイマーの服用で十七貫ほどに減じ適當の體格となりました又全身肥大を嘆いてゐた婦人はアイマー一ケ月餘の服用で見違へる程美しい中肉の容姿となりました。

アイマーは在來のやせる藥の如き胃腸機能を衰弱させたり副作用を伴ふ物とは全く異り體には何等の害なく苦痛もなく極めて自然に合理的に其目的を達する事が出來ます。七日量參圓十五日量五圓五十錢一ケ月量十圓送料内地十五錢領土五十錢



◇新發明品の利用は最少の勞力から最大の收獲を得る所以◇

パイン ミシン

現代家庭用

低廉の上品は高級



小型ですが大型に劣らぬ能力があり 使用法が頗る簡單ですからどんな素人にも婦人や子供にも容易に使用出來ます。本縫式で上絲下絲自由殊に調子のよいのもこのミシンの特長です。

特價總體貳拾四圓木製蓋付參拾圓荷造費五十錢送料當分本社負擔別にカタログは御請求者に限り進呈致します。

折疊自在 小兒車



僅か一二分間で折疊組立が出來ますから乳母車の樣に置場所に困る樣な事もなく、電車内にも持ち込みが出來るから至極重寶二輪車でもスタンド付ですから四輪車同樣腰掛車にもなり郊外の散歩など可愛い坊ちやん嬢ちやんへの爲めにキツト一台御用意下さい。

一臺御用意を 特價九圓荷造費五十錢

運賃先拂 說明書差上げます。

室內自動掃除器

水氣を含ませた僅か三尺位の布で普通の雑巾がけなら數十回も濯ぐ程の拭き掃除をタツタ數分間で極めて手輕に然も途中で濯ぐ手數が省けますから從つて嚴寒でも手をぬらす必要なく立つたまゝで綺麗に御掃除が出來ます。

特價四圓八十錢

送料 內地六十錢 領土一圓



洋服保存器



厚地の紙で作り 肝心な部分は金具を用ひた堅牢な洋服タンスの代用品で、洋服を内部へ吊り下げ密閉して置けば 蟲やカビ濕氣を防ぐのみならずホコリを防ぎ洋服を何時までも安全に型をそのまゝ保存する事が出來ます。

背廣用 一圓八十錢

オーバ用 二圓

送料 內地卅錢 領土六十錢

安全 鰹節(かつを)削(けづ)り器(き)

お料理には



鰹節を差込んで 只ハンドルを廻しさへすれば少しの骨も折れないで 最後迄美く削れます 内部で三枚の刄が廻りますから 在來のキカイの數倍の能力があり而も危險がなく無駄がないから御家庭には勿論、御料理店等には是非共お備へ下さい。

鍍製ニツケル鍍金三圓五十錢

送料內地四拾錢、領土八拾錢

◇美しい型錄進呈◇

はがきで本社代理部宛に御申込みになればどなた樣にも美しい商品型錄を無代進呈します。



家庭クリーニング液

決して生地を損めずお子樣方の洋服でも絹物でも帽子でもマントでもその外何んでも手輕にクリーニング出來ます やり方は簡單誰にも出來ます。

洋服十着分 一瓶壹圓 送料三十錢

萬能糊セルタス

木、竹、金屬硝子その他どんなものでも接着出來る、その接着力は實にニカワ以上水にも熱にも絶對はなれぬ重寶糊です。

一罐五十錢 送料四錢

專賣特許 光澤の素

塗物、樂器、指物皮類金具硝子類その他あらゆるものに用ひて底光りある光澤を出す事が出來るので評判です。

チユーブ入 一箇五拾錢 送料四錢

新洗濯劑 レツクス

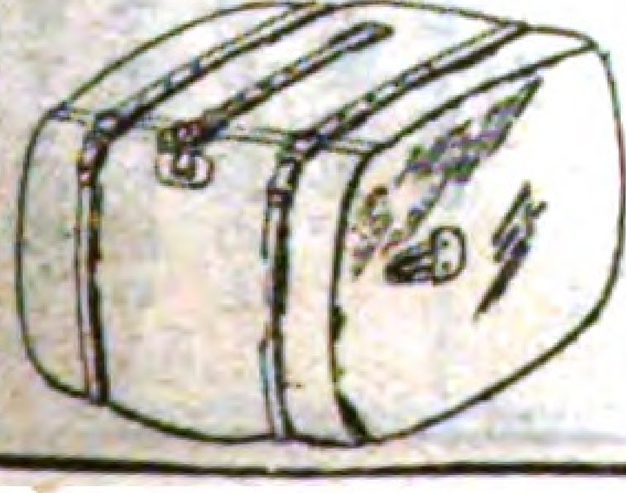
一寸角つて石鹼と一緒に溶解し それに洗濯ものを漬けて二時間も經つとゴシゴシ手でもまなくともスツカリ綺麗にして異れる重寶品です。特に冬季は便利です。

二個一組 十回分七十錢 送料四錢

蒲團袋

旅行や移轉、保存に最も重寶です。

恰もふろしきに似た包み方により包裝する獨特のものですから一枚以上五六枚まで一人で自由に手輕に取扱ふ事が出來ます。厚地上等のズツク製で丈夫な事請合然も防水裝置がありますから運輸に置いても安全です。



上製 金九圓五十錢

特製 金十一圓

送料內地四十錢 領土七十錢

『キング』を讀んで得た利益……募集

諸君が日常『キング』を愛讀せられて、處世上修養上、得られた利益は尠くないと信じます。その實例をおきかせ下さい。例へば、

一、修養上こんな利益があつた
一、他人との交際に就て役に立つた實例
一、家庭生活の上にこんな利益があつた
一、主人や上役や先生にほめられた實例
一、教師又は目上の者として『キング』に感謝してゐる事
一、發奮興起した實例

等々、いろいろ澤山あらうと存じます。それを、左の規定御覽の上、どなたも奮つて應募して下さい。

募集規定

長さ……二十字詰四十行以內　用紙……原稿用紙又は半紙

賞金……入選のものには貳拾圓より參圓まで進呈（選外優秀者若干名には薄謝を進呈）

宛名……東京本鄉『キング』懸賞部

〆切……二月二十日　發表……受賞者の發表は五月號誌上

定價表

冊數	國內及滿洲支那（送料共）	諸外國（送料共）
一冊	金五拾參錢五厘	金六拾八錢
三冊	金壹圓五拾錢	金壹圓九拾五錢
六冊	金貳圓九拾四錢	金參圓八拾四錢
十二冊	金五圓六拾四錢	金七圓四拾四錢

◎特大號で定價を上げた場合は、その增した分だけ右表の外に頂くことになります。但し前金にて數ケ月分お拂込の方は、そのお預り金の中より差引計算致しますから、其の都度御送金には及びません。

昭和五年一月三日印刷納本
昭和五年二月一日發行　第六卷第二號

毎月一回
一日發行

編輯兼發行人　淵田忠良
印刷人　高木鳥三
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍

東京市本鄉區駒込坂下町四十八番地
發行所　大日本雄辯會講談社
振替口座東京三九三〇
電話小石川 [illegible]

元取次店　東京堂・東海堂・北隆館・大東館

キング愛讀者諸氏は頭腦の人より須らく腹の人となり病氣境遇に支配せられる事なく不安を一掃せられ心膽を錬り剛健なる氣力を養成せられん事を乞ふ

肉體の強健、精神の剛健、膽力の養成は腹部の鍛錬にあり。剛健の氣を養ふは腹の修養にあり。腹は實に心身剛健の源泉なり。

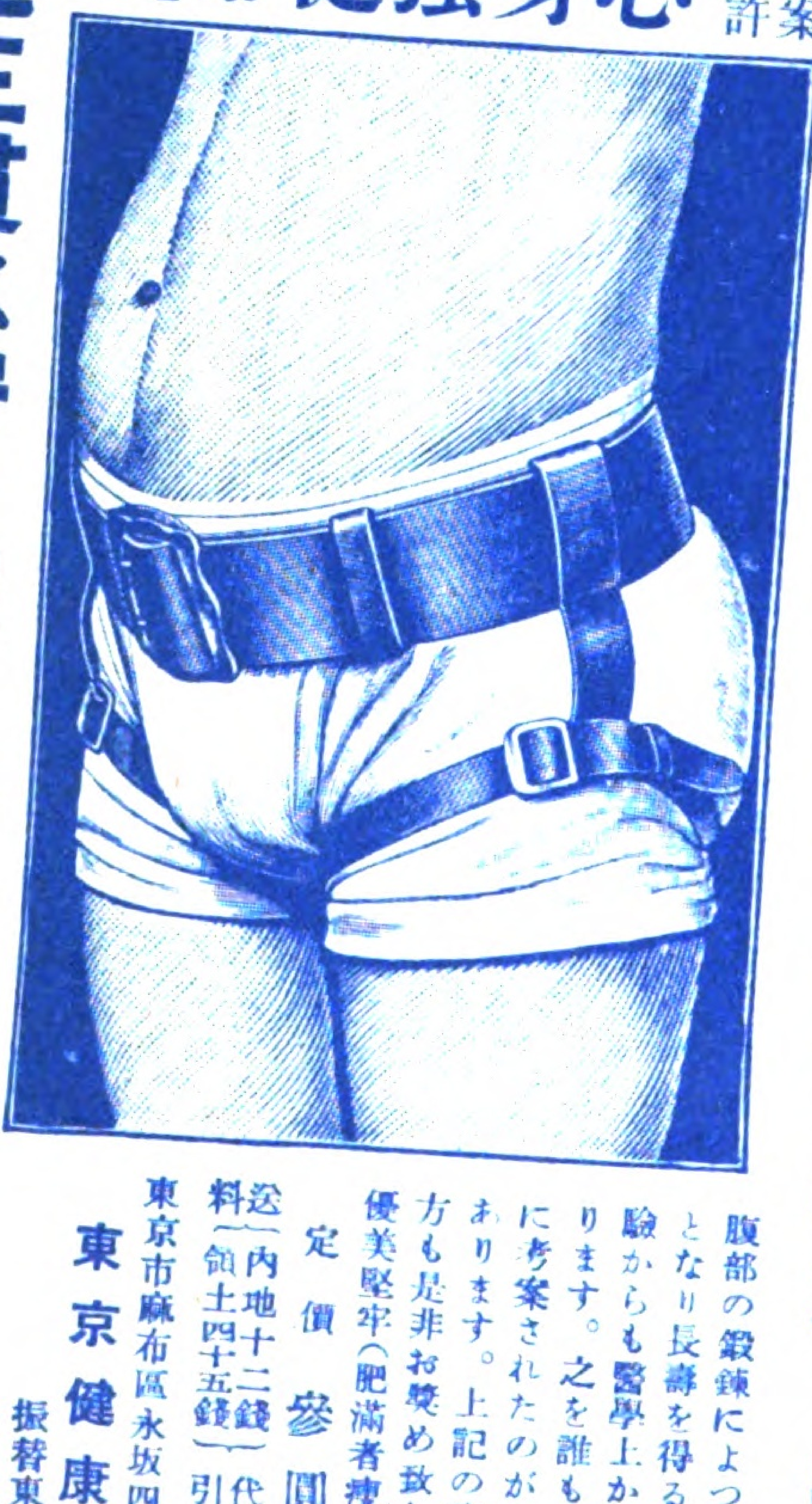
一度「心身強健帶」を使用せば偉大なる精神と絶大なる氣力は臍下丹田に充實し鬱血した腹部の血液は其の壓力により間斷なく心臟に返り全身の血液循環は良好となり內臟は强健に上記の病症は一掃され心身日に增し剛健心膽は錬られ膽力は養成せらる。倦まざれば心量次第に寛大となり氣力常に勇壯、百歳に至ると雖も齒牙堅剛、怠らざれば長壽を得

東京帝國大學教授醫學博士二木式呼吸法發案者二木謙三先生の實驗激賞されたものにして病弱者は勿論、健康者にも推奬せらる

病弱者
胃腸病
神經衰弱
憂鬱病
倦怠
無氣力
便秘
瘦體
長壽

―には―

新案特許「心身強健帶」



腹部の鍛錬によつて健康となり肥滿となり長壽を得る事は古來よりも實驗からも醫學上からも證明されて居ります。之を誰もが容易に出來る樣に考案されたのが「心身強健帶」であります。上記の病症は勿論健康な方も是非お奬め致します。

優美堅牢(肥滿者瘦體にも調節自在)

定價 參圓五十錢

送料(內地十二錢 領土四十五錢) 代金引替(內地廿八錢 領土五十錢)

東京市麻布區永坂四四

東京健康法奬勵會

振替東京七三〇一五番

病弱者虛弱者は必ず試みられよ

胃腸を强健にし二三貫は安々肥る新案特許「心身强健帶」

KING. Published monthly by the Dai Nippon Yubenkai Kodansha, Tokio, Japan. Entered as second class mail matter at the P. O. at Los Angeles, Cal., U. S. A.
大正十三年十一月二十日第三種郵便物認可　昭和五年一月三日印刷納本　昭和五年二月一日發行（毎月一回一日發行）

純無鉛

美顔白粉



生れつき色が白いやうな白さに附く最も進歩した白粉

氣品高き白さ、シンから輝き出る様な美しさは最も進歩した科學的白粉、美顔のみが現す美しさです。



煉白粉　固煉白粉　粉白粉

ニキビ吹出物に　にきびとり美顔水

ニキビや吹出物でお困りの方に……

頑固なニキビでお困りの方は是非にきびとり美顔水をお用ひ下さい。ニキビや吹出物にこれ程よく効く藥はなく、三四度もお付けになれば目に見えて効能が現はれます。若し此の藥で治らないやうなニキビでしたら斷然醫師に御相談なさる事をお勧めします。この藥はまた美容藥としても比類なき効果があり、少し續けてお用ひになればキメの細かな艶々とした美しいく お顔になりますので男子方にも婦人方にも